

上越新幹線關係
埋藏文化財発掘調査報告

第 1 集

十二原遺跡
大原遺跡
前中原遺跡

1982

群馬県教育委員会
（助）群馬県埋藏文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第 1 集

十二原遺跡 大原遺跡 前中原遺跡

1982

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

序

群馬県は、恵まれた自然環境のもとに、数万年以前から人々が住みつき、それぞれの時代に、多くの人々が力強い生活を営んでまいりました。これらの人々の生活の跡の多くは、地中に埋もれ、今日にまで残されております。そして、現代にあっても、よりよい生活をめざす人々の努力は、様々な形で続けられています。上越新幹線の建設もその一つと言えましょう。

一方、新たな開発によって、古い時代の人々の生活の跡は姿を消そうとしています。開発に先立って、これらの人々の生活の跡を調査し、その保存をはかり、今日の生活に役立てることも、現代に生きる私たちの大切な役割の一つでありましょう。

本冊子は、上越新幹線建設工事に先立ち、利根郡月夜野町地内で調査を重ね、記録をしてまいりました人々の生活の跡を整理し、調査報告書としてまとめたものです。

本冊子の刊行は、発掘調査から整理に至るまでの間、様々な形でご指導とご協力をいただいた関係各位の総力が結集された結果であります。ここに厚くお礼申し上げます。

この調査報告書が多くの人々に広く利用され、私たちの祖先の歴史を解明する手がかりとして、有効に活用されることを念じ序といたします。

昭和57年 3月25日

群馬県教育委員会

教育長 横 山 巖

例 言

- 1 本書は上越新幹線建設工事に伴う事前調査として、昭和48年度から51年度にかけて実施した、群馬県利根郡月夜野町所在の十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 十二原・大原・前中原遺跡は事前の分布調査で、各々、69地区・70地区・80地区と称した地点であり、所在地は次のとおりである。

じゅうに はら
十二原遺跡（69地区） 利根郡月夜野町大字上津字十二原2255—1他

おお はら
大原遺跡（70地区） 利根郡月夜野町大字上津字大原929他

まえなかはら
前中原遺跡（80地区） 利根郡月夜野町大字小川字前中原18他

- 3 調査の実施は日本鉄道建設公団の委託を受けて群馬県教育委員会文化財保護課が行なった。
- 4 調査にあたっては下記の職員が関係した。各遺跡の調査担当者は次のとおりである。

文化財保護課長 近藤義雄

主査 磯貝福七

第3係長 森田秀策

文化財保護主事 神保侑史

十二原遺跡調査担当職員

文化財保護主事 石川正之助・松本浩一・長谷部達雄・清水和夫・柿沼恵介・前
沢和之・飯塚卓二・能登 健・巾 隆之・下城 正

調査員 神戸聖語・桑野 格

大原遺跡調査担当職員

文化財保護主事 石川正之助・長谷部達雄・平野進一・清水和夫・前沢和之・飯
塚卓二・能登 健・下城 正

調査員 神戸聖語・中里吉伸

前中原遺跡調査担当職員 能登 健・大江正行・石塚久則・下城 正

- 5 遺物および資料整理は長谷部達雄・前沢和之・飯塚卓二・能登 健・下城 正が行なった。
- 6 本書の作成・編集は下城 正が担当した。
- 7 本書の執筆は調査担当者・調査員が分担し、文責を文末に記した。
- 8 本書を作成するにあたり、遺物・図面整理・図版作製等に関して、下記の方々に御協力を得た。記して感謝の意を表わすものである。

新井悦子・青木静江・浅井良子・井野富代・生方妙子・女屋清子・北堀妙子・酒井田津子・
坂庭常磐・佐鳥米子・島村美代子・関 いよの・関 邦一・高橋信子・塚田順子・辻口敏
子・堤 秋子・中束彰子・中村美知代・橋田シゲ・浜野和宗作・蛭川寿美江・福田恭子・福
島恵理子・藤沢桑子・古松澄枝・亦野久子・三浦しず枝・渡辺登喜代

- 9 遺物の写真撮影は、前橋市たつみ写真スタジオの宇貫達男氏の協力を得た。
- 10 本書の出土石器の石質鑑定については田中宏之（群馬県立歴史博物館）・飯島静男（群馬県地質学協会）両氏の御教示を賜わり、遺物整理に関して石坂 茂・原 雅信・藤巻幸男氏の協力を得た。
- 11 発掘調査にあたっては地元関係者ならびに大勢の発掘作業員の御協力があり、特に月夜野町教育委員会には多大な協力をいただいた。ここに記して厚く感謝の意を表す次第である。
- 12 本書の作成にあたっては編集者の不手際により、調査・執筆担当者ならび関係者に多大な御迷惑をかけたことをここに記して深謝したい。なお、本書の文章ならびに用語等に編集者が加筆・修正を加えており、各記述の最終責任は下城にある。

凡 例

- 1 本書は十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡の3遺跡の報告であるが、各遺跡の調査にいたる経過、調査の方法と経過、遺跡の立地と歴史的環境、基本土層については第I章～第IV章のなかで統一して記述した。第V章～第VII章については調査順序に従い、第V章を十二原遺跡、第VI章を大原遺跡、第VII章を前中原遺跡の遺構と遺物について記し、第VIII章において3遺跡の各遺構と遺物のまとめを記述した。
- 2 本書の作成にあたっては、遺構・遺物を時代別に組み変えて編集したが、遺構番号は調査時のままを使用しており、番号が前後している場合がある。
- 3 本書の各遺跡の周辺地形およびグリッド設定図は1/1,000に、遺構全体図は1/400に、各遺構は1/60に統一した。
- 4 本書の遺物実測図および拓本図は縄文早期～前期の土器は $\frac{1}{2}$ を、縄文中期～後期の土器は $\frac{1}{3}$ を、弥生～中・近世の土器は $\frac{1}{3}$ を原則として統一した。また、各時代の石器は打製・磨製石斧・剥片石器・剥片・石核・凹石は $\frac{1}{3}$ を、石匙・ドリルは $\frac{1}{2}$ 、石鏃は $\frac{1}{3}$ を原則として統一した。また、遺物の図版は挿図の縮少率と同一を原則とした。
- 5 弥生土器のなかで赤色塗彩のあるものは薄赤色で範囲を示した。また、打製石斧のなかで摩耗痕のあるものは薄茶色で範囲を示した。
- 6 各遺跡の石器については章末に形態・石質・法量等を一覧表としてのせた。
- 7 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図（四万・追貝・中之条・沼田）と2万5千分の1地形図（猿ヶ京・後閑・上野中山・沼田）を使用した。
- 8 3遺跡の出土遺物については現在、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

目 次

序

例 言

凡 例

第I章 調査にいたる経過	1
1 調査にいたるまでの経過	1
2 十二原・大原・前中原遺跡の調査にいたる経過	8
第II章 調査の方法と経過	10
第III章 遺跡の立地と歴史的環境	14
第IV章 基本土層	22
第V章 十二原遺跡	29
1 遺跡の概要	29
2 縄文時代の遺構と遺物	31
3 弥生時代の遺構と遺物	61
4 古墳時代の遺構と遺物	68
5 平安時代の遺構と遺物	72
6 グリッド出土の近世遺物	75
第VI章 大原遺跡	85
1 遺跡の概要	85
2 縄文時代の遺構と遺物	85
3 弥生時代の遺構と遺物	93
4 平安時代の遺構と遺物	103

5	時期不明の遺構	105
第VII章 前中原遺跡		111
1	遺跡の概要	111
2	縄文時代の遺構と遺物	113
	(1) 住居址	113
	(2) 炉穴	129
	(3) 土壇	131
	(4) グリッド出土の土器	138
	(5) グリッド出土の石器	148
3	平安時代の遺構と遺物	166
4	中・近世の遺構と遺物	170
5	時期不明の遺構と遺物	172
第VIII章 十二原・大原・前中原遺跡の遺構・遺物に関するまとめ		191
1	十二原・大原遺跡の遺構について	191
2	十二原遺跡の縄文遺物散布地について	192
3	十二原遺跡縄文遺物散布地出土の土器について	193
4	十二原遺跡縄文遺物散布地出土の石器について	194
5	十二原遺跡出土の線刻石板について	195
6	十二原・大原遺跡の弥生時代以降の遺物について	195
7	前中原遺跡の縄文時代の遺構について	196
8	前中原遺跡グリッド出土の縄文土器について	197
9	前中原遺跡の石器について	198
10	前中原遺跡の平安時代の遺物について	200

挿 図 目 次

付 図 1	上越新幹線群馬県内通過路線および関係遺跡位置図 (1:200,000)	
第 1 図	十二原・大原・前中原遺跡位置図 (1:25,000)	12
第 2 図	前中原遺跡周辺地形およびグリッド設定図 (1:1,000)	13
第 3 図	月夜野地区遺跡位置図 (1:50,000)	17
第 4 図	十二原遺跡土層模式図	24
第 5 図	十二原遺跡0地点Dライングリッド土層図	24
第 6 図	大原遺跡土層模式図	25
第 7 図	前中原遺跡土層模式図	25

十二原遺跡

付 図 2	十二原遺跡周辺地形およびグリッド設定図 (1:1,000)	
付 図 3	十二原遺跡縄文遺物散布地点土器出土分布図 (1:80)	
付 図 4	十二原遺跡縄文遺物散布地点石器出土分布図 (1:80)	
付 図 5	十二原遺跡縄文遺物散布地点線刻石板出土分布図 (1:80)	
第 8 図	十二原遺跡遺構全体図 (1:400)	30
第 9 図	縄文遺物散布地点遺物出土数量図 (1:200)	32
第 10 図	土器 1 (1:3)	34
第 11 図	土器 2 (1:3)	35
第 12 図	土器 3 (1:3)	36
第 13 図	土器 4 (1:3)	37
第 14 図	土器 5 (1:3)	38
第 15 図	土器 6 (1:3)	39
第 16 図	土器 7 (1:3)	40
第 17 図	土器 8 (1:3)	41
第 18 図	土器 9 (1:3)	42
第 19 図	石器 1 (1:3)	44
第 20 図	石器 2 (1:3)	45
第 21 図	石器 3 (1:3)	46
第 22 図	石器 4 [1・2・4~7]、石器 5 [3・8~10] (1:3)	47
第 23 図	石器 6 (1:3)	48
第 24 図	石器 7 (1:3)	49

第 25 図	石器 8 [1~3]、石器 9 [4・5]、石器10 [6・7]	(1:3)	50
第 26 図	石器11	(1:3)	51
第 27 図	石器12	(1:3)	52
第 28 図	石器13	(1:3)	53
第 29 図	石器14	(1:3)	54
第 30 図	石器15	(1:2)	55
第 31 図	石器16	(1:1)	55
第 32 図	石器17	(1:3)	56
第 33 図	石器18	(1・2 = 1:6、3 = 1:3)	56
第 34 図	線刻石板 1	(1:2)	58
第 35 図	線刻石板 2	(1:2)	59
第 36 図	線刻石板 3	(1:2)	60
第 37 図	4号住居址	(1:60)	62
第 38 図	4号住居址出土土器	(1 = 1:4、2~4 = 1:3)	63
第 39 図	4号住居址出土石器 1	(1 = 1:8、2 = 1:3)	64
第 40 図	4号住居址出土石器 2	(1:4)	65
第 41 図	4号住居址出土石器 3	(1:4)	66
第 42 図	グリッド出土の弥生土器	(1:4)	67
第 43 図	1号住居址	(1:60)	69
第 44 図	1号住居址出土土器	(1 = 1:4、2~4 = 1:3)	70
第 45 図	グリッド出土の古墳時代の遺物	(1:3)	71
第 46 図	2・3号住居址	(1:60)	73
第 47 図	2号住居址出土遺物	(1:3)	74
第 48 図	グリッド出土の近世遺物	(1・2 = 1:4、3~6 = 1:3、7・8 = 1:2)	75

大原遺跡

付 図 6	大原遺跡周辺地形およびグリッド設定図	(1:1,000)	
第 49 図	大原遺跡遺構全体図	(1:400)	折り込み
第 50 図	1・2・3号土坑	(1:60)	87
第 51 図	4・5・6号土坑	(1:40)	88
第 52 図	グリッド出土の縄文土器	(1:2)	89
第 53 図	グリッド出土の石器 1 [2 = 2号土坑、8 = 4号土坑]	(1:3)	90
第 54 図	グリッド出土の石器 2	(1~3 = 1:3、4 = 1:1)	91
第 55 図	グリッド出土の石器 3	(1:3)	91

第 56 図	グリッド出土の石器 4	(1 : 3)	92
第 57 図	1号住居址炭化材出土状態	(1 : 60)	93
第 58 図	1号住居址	(1 : 60)	94
第 59 図	1号住居址出土土器	(1 : 3)	95
第 60 図	1号住居址出土石器	(1 : 3)	96
第 61 図	3号住居址	(1 : 60)	98
第 62 図	3号住居址出土土器	(1 : 3)	99
第 63 図	3号住居址出土石器	(1 : 3)	99
第 64 図	グリッド出土の弥生土器 1	(1 : 3)	101
第 65 図	グリッド出土の弥生土器 2	(1 : 2)	102
第 66 図	2号住居址	(1 : 60)	103
第 67 図	2号住居址出土土器	(1 : 3)	104
第 68 図	1号溝	(1 : 60)	105

前中原遺跡

第 69 図	前中原遺跡遺構全体図	(1 : 400)	112
第 70 図	1号住居址と 2・3・4号土壇	(1 : 60)	114
第 71 図	1号住居址出土土器 1	(1 : 2)	115
第 72 図	1号住居址出土土器 2	(1 : 2)	116
第 73 図	1号住居址出土石器 (1~9・13・14=1 : 3、10=1 : 2、11・12=1 : 1)		117
第 74 図	2号住居址	(1 : 60)	119
第 75 図	2号住居址出土土器 (1=1 : 3、2~13=1 : 2)		120
第 76 図	2号住居址出土石器 (1~10=1 : 3、11=1 : 2、12・13=1 : 1)		121
第 77 図	3号住居址	(1 : 60)	123
第 78 図	3号住居址出土土器 (1 : 2)		124
第 79 図	3号住居址出土石器 (1~3=1 : 3、4=1 : 2)		124
第 80 図	4号住居址と17号土壇	(1 : 60)	126
第 81 図	4号住居址出土土器 (1 : 2)		126
第 82 図	4号住居址出土石器 1 (1 : 3)		127
第 83 図	4号住居址出土石器 2 (1~5=1 : 1、6=1 : 2)		128
第 84 図	4号住居址出土石器 3 (1 : 3)		128
第 85 図	1~4号炉穴 (1 : 60)		129
第 86 図	1 [1]・4 [2・3]号炉穴出土石器 (1=1 : 1、2=1 : 2、3=1 : 3)		130
第 87 図	1・5・6・7号土壇 (1 : 60)		132

第 88 图	1 [1~5]·6 [6] 号土坛出土土器	(1:2)	132
第 89 图	7号土坛出土石器	(1=1:3、2=1:1)	132
第 90 图	8·10·11·12号土坛	(1:60)	133
第 91 图	10 [1~4]·12 [5] 号土坛出土土器	(1:2)	133
第 92 图	13~16号土坛	(1:60)	134
第 93 图	16 [1~4]·17 [5~7] 号土坛出土土器	(1:2)	134
第 94 图	18~23号土坛	(1:60)	136
第 95 图	18 [1~6]·21 [7~11]·23 [12] 号土坛出土土器	(1:2)	136
第 96 图	18 [1]·19 [2·3]·22 [4·5] 号土坛出土石器	(1=1:1、2~5=1:3)	137
第 97 图	第1 [1~3]·2 [4~10]·3 [11~16] 類土器	(1:2)	138
第 98 图	第4類土器	(1:2)	139
第 99 图	第5類土器	(1~10=1:2、11=1:3)	140
第 100 图	第6類土器	(1:2)	141
第 101 图	第7類土器1	(1:4)	142
第 102 图	第7類土器2	(1:2)	143
第 103 图	第8類土器	(1:2)	144
第 104 图	第9類土器1	(1:3)	145
第 105 图	第9類土器2	(1:2)	146
第 106 图	第10類土器	(1:2)	147
第 107 图	石器1	(1:3)	149
第 108 图	石器2	(1:3)	150
第 109 图	石器3	(1:3)	151
第 110 图	石器4	(1:3)	152
第 111 图	石器5	(1:1)	153
第 112 图	石器6	(1:2)	154
第 113 图	石器7	(1~8=1:2、9·10=1:1)	155
第 114 图	石器8	(1:3)	156
第 115 图	石器9	(1:3)	157
第 116 图	石器10	(1:3)	158
第 117 图	石器11	(1:3)	159
第 118 图	石器12	(1:3)	160
第 119 图	石器13	(1:3)	161
第 120 图	石器14	(1:3)	162

第 121 図	石器15	(1 : 3)	163
第 122 図	石器16	(1 : 3)	164
第 123 図	石器17	(1 : 2)	164
第 124 図	石器18	(1 : 3)	165
第 125 図	5号住居址と1号土塚	(1 : 60)	166
第 126 図	5号住居址出土土器	(1 : 3)	167
第 127 図	1号土塚出土土器	(1 : 3)	167
第 128 図	グリッド出土の平安時代の遺物			
		(1 ~ 5 = 1 : 4、6 ~ 8 = 1 : 3、9・10 = 1 : 6)	169
第 129 図	1 ~ 4号墓塚	(1 : 60)	170
第 130 図	3号墓塚出土の遺物	(1 : 2)	171
第 131 図	グリッド出土の古銭	(1 : 2)	171
第 132 図	1 ~ 8号土塚	(1 : 60)	173
第 133 図	9 ~ 12号土塚	(1 : 60)	174
第 134 図	1 [1 ~ 4]・4 [5・6]・5 [7・8]			
	6 [9]・12 [10]号土塚出土土器	(1 : 2)	175
第 135 図	4 [1・2]・10 [3 ~ 5]号土塚出土石器	(1 : 3)	175
第 136 図	グリッド出土の砥石	(1 : 3)	176

図 版 目 次

十二原遺跡

- 図版 1-1 遺跡遠景〔洞山より名胡桃平を見る〕（北より）
2 調査開始時の状況（北より）
- 図版 2-1 5区、グリッド調査風景（北西より）
2 4区、グリッド調査風景（南東より）
3 5区、縄文遺物散布地点調査風景（北より）
- 図版 3-1 4区～5区、調査区全景（南より）
2 4区住居址群全景（北西より）
- 図版 4-1 縄文遺物散布地点全景（北より）
2 同上、遺物出土状態（北より）
- 図版 5-1 縄文遺物散布地点遺物出土状態（北より）
2 同上（南より）
3 同上（南より）
- 図版 6-1 1号住居址遺物出土状態（南東より）
2 1号住居址（南東より）
- 図版 7-1 1号住居址、炉（東より）
2 同上、貯蔵穴（北より）
3 同上、遺物出土状態（北西より）
- 図版 8-1 2・3号住居址（南西より）
2 2号住居址、カマド（南西より）
3 2号住居址、貯蔵穴（南東より）
- 図版 9-1 4号住居址（南西より）
2 同上、南半遺物出土状態（北より）
- 図版 10-1 4号住居址 土器2・4出土状態（東より）
2 同上、土器2出土状態（南より）
- 図版 11-1 4号住居址 土器1出土状態（東より）
2 同上、土器3（東より）
3 同上、石器出土状態（東より）
- 図版 12-1 縄文時代 土器1（約 $\frac{1}{3}$ ）
- 図版 13-1 縄文時代 土器2（約 $\frac{1}{3}$ ）

- 図版 14—1 縄文時代 土器 3 [表] (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 15—1 縄文時代 土器 3 [裏] (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 16—1 縄文時代 土器 4 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 17—1 縄文時代 土器 5 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 18—1 縄文時代 土器 6 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 19—1 縄文時代 土器 7 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 20—1 縄文時代 土器 8 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 21—1 縄文時代 土器 9 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 22—1 縄文時代 石器 1 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 縄文時代 石器 2 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 23—1 縄文時代 石器 3 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 縄文時代 石器 4 [1・2・4~7]、石器 5 [3・8~10]
- 図版 24—1 縄文時代 石器 6 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 縄文時代 石器 7 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 25—1 縄文時代 石器 8 [1~3]、石器 9 [4・5]、石器10 [6・7] (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 縄文時代 石器11 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 26—1 縄文時代 石器12 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 27—1 縄文時代 石器13 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 28—1 縄文時代 石器14 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 縄文時代 石器15 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 29—1 縄文時代 石器16 (約 $\frac{1}{4}$)
- 2 縄文時代 石器17 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 30—1 線刻石板 1 [表] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 31—1 線刻石板 1 [裏] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 32—1 線刻石板 2 [表] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 33—1 線刻石板 2 [裏] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 34—1 線刻石板 3 [表] (約 $\frac{1}{2}$)
- 2 線刻石板 3 [裏] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 35—1 4号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{4}$)
- 図版 36—1 4号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 37—1 4号住居址出土石器 1 (1 = 約 $\frac{1}{8}$ 、2 = 約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 38—1 4号住居址出土石器 2 (約 $\frac{1}{4}$)
- 図版 39—1 4号住居址出土石器 3 (約 $\frac{1}{4}$)
- 2 4号住居址出土石器 3 (約 $\frac{1}{3}$)

- 図版 40-1 グリッド出土の弥生土器 (約 $\frac{1}{4}$)
 図版 41-1 1号住居址出土土器 (1=約 $\frac{1}{4}$ 、2~4=約 $\frac{1}{3}$)
 図版 42-1 グリッド出土の古墳時代の遺物 (1=約 $\frac{1}{4}$ 、2~5=約 $\frac{1}{3}$)
 図版 43-1 2号住居址出土遺物 (約 $\frac{1}{3}$)
 図版 44-1 グリッド出土の近世遺物 (1=約 $\frac{1}{4}$ 、3~6=約 $\frac{1}{3}$ 、7・8=約 $\frac{1}{2}$)

大原遺跡

- 図版 45-1 十二原遺跡より大原遺跡を見る (南より)
 2 調査グリッド設定状態 (南より)
 図版 46-1 0区~1区調査状況 (北より)
 2 4区調査状況 (北より)
 図版 47-1 0区~1区西側道調査状況 (南より)
 2 西側道調査風景 (南東より)
 図版 48-1 1号住居址炭化材出土状態 (南東より)
 2 1号住居址 (南東より)
 図版 49-1 1号住居址北隅遺物出土状態 (南より)
 2 同上、炭化材出土状態 [中央東壁寄り] (南より)
 3 同上、炭化材出土状態 [中央西寄り] (南西より)
 図版 50-1 2号住居址 (南西より)
 2 同上、カマド (西より)
 3 同上、貯蔵穴 (北より)
 図版 51-1 3号住居址 (南より)
 2 同上、土層断面 (東より)
 図版 52-1 3号住居址、炉 (北より)
 2 同上、貯蔵穴 (東より)
 3 同上、片口土器出土状態 (北東より)
 図版 53-1 縄文時代 1号土壇 (南より)
 2 同上、4・5・6号土壇 (南東より)
 3 1号溝 (西より)
 図版 54-1 グリッド出土の縄文土器 (約 $\frac{1}{3}$)
 2 グリッド出土の縄文時代石器1 (約 $\frac{1}{3}$)
 図版 55-1 グリッド出土の縄文時代石器2 (1~3=約 $\frac{1}{3}$ 、4=約 $\frac{1}{4}$)
 2 グリッド出土の縄文時代石器3 (約 $\frac{1}{3}$)
 図版 56-1 グリッド出土の縄文時代石器4 (約 $\frac{1}{3}$)

- 2 グリッド出土の縄文時代石器 4 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 57-1 1号住居址出土土器 1 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 58-1 1号住居址出土土器 2 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 1号住居址出土石器 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 59-1 3号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 60-1 3号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 3号住居址出土石器 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 61-1 グリッド出土の弥生土器 2 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 62-1 グリッド出土の弥生土器 1 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 2号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{3}$)

前中原遺跡

- 図版 63-1 遺跡遠景 [中央、利根川東岸より] (東より)
- 2 遺跡全景 (西より)
- 図版 64-1 1区トレンチ設定状況 (南東より)
- 2 2区トレンチ設定状況 (北西より)
- 図版 65-1 縄文土器出土状態 (東より)
- 2 2区C-03グリッド、平安時代遺物出土状態 (南東より)
- 図版 66-1 第1次調査風景 (北西より)
- 2 1号住居址調査風景 (南東より)
- 図版 67-1 土壇調査風景 (東より)
- 2 土壇調査風景 (南西より)
- 図版 68-1 1号住居址 (南東より)
- 2 1号住居址遺物出土状態 (南東より)
- 図版 69-1 1号住居址遺物出土状態 [中央付近] (南より)
- 2 1号住居址遺物出土状態 [炉周辺] (東より)
- 図版 70-1 2号住居址 (西より)
- 2 2号住居址遺物出土状態 (南より)
- 図版 71-1 2号住居址遺物出土状態 (北西より)
- 2 2号住居址遺物出土状態 [北西隅寄り] (東より)
- 図版 72-1 3号住居址 (南東より)
- 2 3号住居址遺物出土状態 (南東より)
- 図版 73-1 3号住居址遺物出土状態および埋没状況 (南より)
- 2 3号住居址、炉 (東より)

- 図版 74—1 4号住居址 (南より)
2 4号住居址遺物出土状態 (南より)
- 図版 75—1 4号住居址遺物出土状態と16・17号土壇 (西より)
2 5号住居址 [平安時代] (北西より)
- 図版 76—1 1号炉穴と1・2号墓壇 (南より)
2 1号炉穴 (南西より)
- 図版 77—1 2号炉穴 (南東より)
2 3号炉穴 (南より)
3 4号炉穴 (南より)
- 図版 78—1 縄文時代1・3・4号土壇と時期不明の1～4号土壇 (南東より)
2 同上、6号土壇 (東より)
3 同上、7号土壇 (東より)
- 図版 79—1 縄文時代14号土壇 (南西より)
2 同上、15号土壇 (東より)
3 同上、16号土壇 (東より)
- 図版 80—1 縄文時代8号土壇 (北より)
2 同上、10～12号土壇 (東より)
3 同上、13号土壇 (東より)
- 図版 81—1 縄文時代18号土壇 (東より)
2 同上、19号土壇 (西より)
3 同上、20号土壇 (北より)
- 図版 82—1 縄文時代21号土壇 (東より)
2 同上、22号土壇 (西より)
3 同上、23号土壇 (東より)
- 図版 83—1 近世1・2号墓壇 (北より)
2 同上、3号墓壇 [下部] (北より)
3 同上、4号墓壇 [下部] (北より)
- 図版 84—1 時期不明5号土壇 (南より)
2 同上、6・7号土壇 (南より)
3 同上、8・12号土壇 (西より)
- 図版 85—1 時期不明9・10号土壇 (南より)
2 同上、11号土壇 (東より)
3 平安時代1号土壇 (北より)
- 図版 86—1 1号住居址出土土器1 (約1/2)

- 図版 87—1 1号住居址出土土器 2 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 88—1 1号住居址出土石器 (1~9・13・14=約 $\frac{1}{3}$ 、10=約 $\frac{1}{2}$ 、11・12=約 $\frac{1}{4}$)
- 図版 89—1 2号住居址出土土器 1 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 90—1 2号住居址出土土器 2 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 91—1 2号住居址出土石器 (1~10=約 $\frac{1}{3}$ 、11=約 $\frac{1}{2}$ 、12・13=約 $\frac{1}{4}$)
- 図版 92—1 3号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{2}$)
- 2 3号住居址出土石器 (1~3=約 $\frac{1}{3}$ 、4=約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 93—1 4号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{2}$)
- 2 4号住居址出土石器 1 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 94—1 4号住居址出土石器 2 (約 $\frac{1}{4}$)
- 2 4号住居址出土石器 3 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 95—1 縄文時代の土坑出土土器 [1~5=1号、6=6号] (約 $\frac{1}{2}$)
- 2 縄文時代の土坑出土土器 [1~4=10号、5=12号、6~9=16号、10~12=17号] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 96—1 縄文時代の土坑出土土器 [1~6=18号、7~11=21号、12=23号] (約 $\frac{1}{2}$)
- 2 縄文時代の炉穴と土坑の出土石器 [1=1炉、2・3=4炉、4・5=7号、6=18号、7・8=19号、9・10=22号]
- 図版 97—1 第1・2・3類土器 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 98—1 第4類土器 [表] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 99—1 第4類土器 [裏] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 100—1 第5類土器 [表] (約 $\frac{1}{2}$ 、11=約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 101—1 第5類土器 [裏] (約 $\frac{1}{2}$ 、11=約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 102—1 第7類土器 1 [表] (約 $\frac{1}{2}$)
- 2 第6類土器 [表] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 103—1 第7類土器 1 [裏] (約 $\frac{1}{2}$)
- 2 第6類土器 [裏] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 104—1 第7類土器 2 [表] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 105—1 第7類土器 2 [裏] (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 106—1 第8類土器 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 107—1 第9類土器 1 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 108—1 第9類土器 2 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 109—1 第10類土器 (約 $\frac{1}{2}$)
- 図版 110—1 石器 1 (約 $\frac{1}{3}$)
- 2 石器 2 (約 $\frac{1}{3}$)

- 図版 111—1 石器3 (約 $\frac{1}{3}$)
2 石器4 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 112—1 石器5 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 113—1 石器6 (約 $\frac{1}{3}$)
2 石器7 (1～8=約 $\frac{1}{2}$ 、9・10=約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 114—1 石器8 (約 $\frac{1}{3}$)
2 石器9 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 115—1 石器10 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 116—1 石器11 (約 $\frac{1}{3}$)
2 石器12 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 117—1 石器13 (約 $\frac{1}{3}$)
2 石器14 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 118—1 石器15 (約 $\frac{1}{3}$)
2 石器17 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 119—1 石器16 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 120—1 石器18 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 121—1 5号住居址出土土器 (約 $\frac{1}{3}$)
2 平安時代1号土壇出土土器 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 122—1 グリッド出土の平安時代の遺物 (1～8=約 $\frac{1}{3}$ 、9・10=約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 123—1 3号墓壇出土の古銭 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 124—1 グリッド出土の古銭 (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 125—1 時期不明土壇出土土器 [1～4=1号、5・6=4号、7・8=5号、9=6号、10=12号] (約 $\frac{1}{2}$)
2 時期不明土壇出土石器 [1・2=4号、3～5=10号] (約 $\frac{1}{3}$)
- 図版 126—1 グリッド出土の砥石 (約 $\frac{1}{3}$)
2 第1次調査スタッフ一同

表 目 次

第1表	上越新幹線地域内埋蔵文化財発掘調査細目調書	6 ~ 7
第2表	月夜野地区遺跡一覧表	18 ~ 21
第3表	十二原遺跡石器一覧表	76 ~ 81
第4表	大原遺跡石器一覧表	106 ~ 107
第5表	前中原遺跡石器一覧表	177 ~ 190

第 I 章 調査にいたる経過

1 調査にいたるまでの経過

昭和46年1月に基本計画、同年4月に整備計画が発表された上越新幹線建設については、昭和45年、46年とその動きがマスコミ等でさかんに取りあげられ、建設促進運動や停車駅の誘致運動、またそれに対する反対運動等いろいろと動きがあった。そうした動きの中で昭和46年10月14日に日本鉄道建設公団（以下、「鉄建公団」と称す。）は、20万分の1の地図をもって路線発表を行った。これによれば、上越新幹線（以下「新幹線」と称す。）は太平洋沿岸を縦貫する東海道、山陽両新幹線の太平洋縦貫高速鉄道と日本海沿岸とを結ぶものであり、これが完成のあかつきには、太平洋岸の東京と日本海岸の新潟間300kmは約1時間30分で直結され、都市間の交通の飛躍的拡大、沿線の観光開発、地域の産業経済等の発展に、はかり知れない利益がもたらされるということである。また、工事内容については起点は当初、東京都の新宿駅であったが、その後計画変更があり、上野駅に変更された。そして、当面の工事は上野駅が完成するまでの間は埼玉県の大宮駅を起点として工事が施行された。本県における新幹線の通過市町村は藤岡市、高崎市、群馬郡群馬町、北群馬郡榛東村、同吉岡村、同小野上村、渋川市、吾妻郡高山村、利根郡月夜野町、同水上町の3市3町4村である。藤岡市の埼玉県境から水上町の新潟県境までは延長71kmであり、そのうち45.7%はトンネルである。本県の停車駅は高崎市と月夜野町に決定し、前者は高崎駅、後者は上毛高原駅となった。

かかる新幹線建設に際して路線発表後、群馬県教育委員会は路線内の文化財保護の対策を講ずべく、発表された路線図をもとに文化財有無の調査を実施した。その結果、路線付近には国指定史跡「浅間山古墳」、同「大鶴巻古墳」（いずれも高崎市倉賀野町所在）、県指定天然記念物「金島の浅間石」（渋川市川島所在）等の存在が判明した。特に「金島の浅間石」は、路線にかかるか否かは発表された路線図では不明であり、関係者を切歯扼腕の思いに懸けさせた。そこで、この「金島の浅間石」については、具体的な路線線引の際に路線外とするよう鉄建公団に申し入れた。

路線発表後半年を経過した昭和47年5月に、鉄建公団東京新幹線建設局は2,500分1の地形図をもって調査の範囲を示した新幹線に関する関連公共事業調査を、群馬県に依頼してきた。この調査には文化財調査も含まれており、群馬県企画部幹線交通課より文化財に関する調査依頼が群馬県教育委員会文化財保護室にあった。この依頼に基づき文化財保護室の埋蔵文化財担当の職員が、2,500分の1地形図をもとに文化財の分布調査を実施したところ、トンネルとなる予定地を含めて93箇所の文化財の所在を明らかにした。この中には前述の「浅間山古墳」、「大鶴巻古墳」、「金島の浅間石」も含まれており、更には「小鶴巻古墳」、「大山古墳」、「放光寺跡」（以上高崎市）、「オハルナ古墳」（群馬町）、県指定天然記念物の「上津の姥桜」、同「村主の大櫓」、町指定

第I章 調査にいたる経過

史跡「小川城跡」(以上月夜野町)、県指定天然記念物の「モリアオガエル繁殖地」(水上町)等の指定文化財、著名遺跡等が含まれた。その他は縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の埋蔵文化財包蔵地が大部分であった。この文化財に関する分布調査の結果は、昭和47年7月に幹線交通課を経由して、鉄建公団東京新幹線建設局へ提出した。

この文化財に関する調査結果に基づき鉄建公団東京新幹線建設局は、93箇所文化財の取り扱いについて、昭和47年9月以後協議を求めてきた。群馬県教育委員会は幹線交通課新幹線対策係を窓口として、これに応じた。協議は特に鉄建公団東京新幹線建設局の用地第一課、同第二課と進められた。まずは、93箇所文化財のうち路線内にかかる文化財の抽出から始まり、鉄建公団の示す2,500分の1地形図の新幹線通過予定路線上に、トンネルとなる部分を除いて文化財の位置をおとした結果、22箇所文化財が路線内にかかることになった。前述の指定文化財、著名遺跡等は、すべて路線外となった。22箇所文化財の種別は第1表に掲げた如く、すべて縄文時代から平安時代にかけての埋蔵文化財包蔵地であり、参考地1箇所をも含んだ。そこで次の段階では、これら22箇所埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについての協議が重ねられた。種々検討協議した結果、22箇所文化財については新幹線建設の性格からして路線変更は極めて難しいので、これらについては工事着工前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとし、その方策を求めて更に協議を重ねた。協議が重ねられる中、昭和47年12月に利根郡月夜野町上津において、俄に新幹線のトンネルの建設工事が着工されることになり、同トンネル付近に所在するNo.69遺跡について、早急に発掘調査を実施してもらいたい旨、再三再四依頼されたが、気候条件、埋蔵文化財担当職員の不足等により昭和48年度以後でなければ、発掘調査に応じられないとして、この依頼を断った。

回を重ねての協議は昭和48年1月から3月にかけては専ら調査計画、調査費等に関する綿密な検討が加えられた。そして、これら協議が煮つまった3月に協議事項の大綱と契約内容についてまとめた。更に、年度が改まった昭和48年4月1日には群馬県教育委員会教育長と日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長は「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結し、この協定書に基づいて、同4月1日付けをもって昭和48年度の「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結した。

かくて、昭和48年度をもって上越新幹線の発掘調査が開始されたのであるが、昭和48年度は昭和47年度以来懸案となっていた利根郡月夜野町上津所在の「No.69遺跡」の発掘調査が着手された。また、発掘調査に従事する職員は、昭和48年4月1日に群馬県教育委員会内に文化財保護課が発足した際、関係方面の努力で確保した6人の文化財保護主事が主に携った。

(神保侑史)

上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書

日本鉄道建設公団上越新幹線建設事業地域における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査(以下「発掘調査」という。)の実施について、日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長原島龍一(以下「甲」という。)と群馬県教育委員会教育長山川武正(以下「乙」という。)は、昭和41年4月文化財保護委員会事務局長と日本鉄道建設公団副総裁との間で調印した「日本鉄道建設公団の事業施行に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する覚書」に基づいて、次のとおり協定を締結する。

(適用区域)

第1条 この協定を適用する区域は、藤岡市から利根郡月夜野町までとし、別図のとおりとする。

(調査の期間)

第2条 乙は、発掘調査を昭和48年4月1日から実施し、昭和51年3月31日までに業務を完了するものとする。

2 前項の発掘調査の着手順序は、甲、乙協議して決定するものとする。

(発掘調査の実施場所及び面積)

第3条 発掘調査の実施場所及び対象面積は、別添(1)のとおりとする。

(費用)

第4条 乙の業務のため必要とする費用は、別添(1)のとおり総額概算456,800,000円とし、甲が負担するものとする。

2 前項の費用は、工事区域内であらたに埋蔵文化財を発見した場合の取扱い等及び物価、人件費等の変動により増減ある場合は、別途甲、乙協議するものとする。

(発掘調査委託契約及び委託金の支払方法)

第5条 発掘調査は、甲と乙とが年度区分ごとに発掘調査委託契約を締結のうえ、実施するものとする。

2 前条の委託金は、前項の契約に基づく年度区分に従い支払うものとする。

(地権者関係)

第6条 甲は、乙が計画的に発掘調査できるよう努めるとともに、発掘調査場所に係る土地所有者等の承諾を発掘調査着手以前に取りまとめておくものとする。

(請負業者等の指導監督)

第7条 上越新幹線建設工事(関係工事を含む。)中の請負業者等に係る埋蔵文化財の取扱いについては、甲が責任をもつて指導監督にあたるものとする。

(機械、備品等の処置)

第8条 乙が発掘調査のため購入した発掘用機材及び備品等は、第1条の適用区域内のすべ

第1章 調査にいたる経過

ての発掘調査が完了した場合において、別途協議して処理するものとする。

(発掘調査報告書)

第9条 乙は、業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて、発掘調査完了報告書を甲に提出するものとする。

2 乙は、業務が完了したときは、甲の名において発掘調査報告書を群馬県教育委員会を経由して文化庁長官に提出するものとする。

(協定の変更)

第10条 この協定を変更する必要があるときは、甲、乙協議して行なうものとする。

(協定の有効期間)

第11条 この協定の有効期間は、協定締結の日から第2条の調査が完了し、委託金の精算行為が完了した日までとする。

第12条 この協定に定めのない事項または疑義が生じた事項については、その都度甲、乙協議して処理するものとする。

以上協定の証として本書2通を作製し、甲、乙おのおの記名なつ印のうえ、各自その1通を保有する。

昭和48年4月1日

甲(委託者) 日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長 原島龍一

乙(受託者) 群馬県教育委員会教育長 山川武正

上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

日本鉄道建設公団上越新幹線建設事業地域における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査(以下「発掘調査」という。)の実施に関する業務(以下「業務」という。)について、「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定」に基づき、委託者日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長原島龍一(以下「甲」という。)と受託者群馬県教育委員会教育長山川武正(以下「乙」という。)との間に次のとおり委託契約を締結する。

(総則)

第1条 乙は、発掘調査実施計画書に従って、業務を実施するものとする。

2 甲は、乙の実施する業務によって土地所有者等に被害を及ぼした場合は、乙の責に帰する場合を除き、その損害に対する補償を負担するものとする。

(期間)

第2条 乙は、昭和49年3月31日までに第1年度の現場における発掘作業を終了するものとする。

(費用)

第3条 甲が業務に関する費用として乙に支払う金額は、60,809,000円以内とする。

2 前項の費用の支払方法については、乙の業務に支障のないよう甲、乙協議して定める。

3 甲は、乙からの費用の請求に対し、すみやかにこれを乙に支払うものとする。

(作業の実施)

第4条 甲は、乙の示す発掘調査計画工程に支障のないよう努力し、乙は、業務の実施にあたって甲の施行する上越新幹線建設事業の工事工程に支障のないよう努めるものとする。

2 乙は、業務の実施にあたっては、作業箇所作業表示旗を掲げ、関係者に腕章を着用させるものとする。

(作業の日誌)

第5条 乙は、発掘の実施中において作業日誌を作製し、甲は、その提示を求めることができるものとする。

(出土品の取扱い)

第6条 発掘された出土品の処置については、甲、乙協議のうえ、乙が甲の名において法令の定めるところにより処置するものとする。

(中間報告)

第7条 甲は、必要と認められる場合は、乙に対し業務の進行状況について報告を求めることができるものとする。

(決算及び精算)

第8条 乙は、業務が終了したときは、業務に要した費用について決算を行ない、決算書を甲に提出するものとする。

2 甲が前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき、甲、乙協議して精算を行なうものとする。

(発掘調査概況報告書)

第9条 乙は、それぞれの包蔵地の業務が完了したときは、発掘調査概況報告書を甲に提出するものとする。

(協議)

第10条 この契約に定めない事項及び契約の条項について、変更または疑義を生じた場合は、甲、乙協議して定めるものとする。

この契約締結の証として、本書2通を作製し、甲、乙なつ印のうえ、各自その1通を保有

第 I 章 調査にいたる経過

する。

昭和48年 4 月 1 日

甲（委託者） 日本鉄道建設公団東京新幹線建設局長 原島龍一

乙（受託者） 群馬県教育委員会教育長 山川武正

第 1 表

上越新幹線地域内埋蔵文化財発掘調査細目調書（参照付図 1）

包蔵地 番 号	所 在 地	料程(大宮起点)	種 別	時 代	調査対象面積
7	高崎市木部町	70km500m～ 71km050m	包蔵地	古 墳	11,000m ²
8	同 上	71km150m～ 71km525m	包蔵地	古 墳	7,500m ²
13	高崎市下佐野町	72km400m～ 72km875m	包蔵地	縄 文	9,500m ²
14	同 上	72km900m～ 73km425m	包蔵地	古 墳	10,500m ²
15	同 上	73km600m～ 74km600m	包蔵地	古 墳	24,000m ²
21	高崎市上佐野町	74km700m～ 75km275m	包蔵地	古 墳	11,500m ²
22	高崎市小鳥町・ 飯塚町	79km970m～ 80km645m	包蔵地	古 墳	13,500m ²
24	高崎市大八木町	81km170m～ 81km370m	包蔵地	古 墳	4,000m ²
25	同 上	81km370m～ 81km570m	包蔵地	弥生・古 墳・奈良	4,000m ²
26	同 上	81km640m～ 81km990m	包蔵地	古 墳	7,000m ²

1 調査にいたるまでの経過

27	群馬町井出	82km000m～ 82km350m	包蔵地	古墳	7,000m ²
30	同上	82km360m～ 82km685m	包蔵地	古墳	6,500m ²
32	同上	82km700m～ 83km100m	包蔵地	縄文	8,000m ²
33	同上	83km230m～ 83km555m	包蔵地	縄文 古墳	6,500m ²
34	同上	83km600m～ 83km800m	包蔵地	古墳	4,000m ²
35	同上	84km160m～ 84km385m	包蔵地	古墳	4,500m ²
36	群馬町三ツ寺	84km440m～ 84km590m	包蔵地	古墳	3,000m ²
69	月夜野町上津	116km430m～ 116km780m	包蔵地	古墳	11,812m ²
70	同上	117km020m～ 117km470m	包蔵地	縄文 古墳	9,000m ²
74	月夜野町橋下	117km880m～ 118km005m	包蔵地	古奈 墳良	2,500m ²
76	同上	118km380m～ 118km855m	包蔵地	縄文 古墳	23,750m ²
78	月夜野町橋上	118km900m～ 119km175m	包蔵地	古墳	13,750m ²
		計			202,812m ²

2 十二原・大原・前中原遺跡の調査にいたる経過

東京新幹線建設局管内における上越新幹線の最初の工事は昭和47年2月8日着工の中山トンネル(14,860m)四方木工区であり、さらに同年6月1日には同トンネルの高山・中山工区で相次いで着工、7月1日には渋川・月夜野鉄道建設所が設置された。翌48年1月10日には中山トンネルの北入口部分の名胡桃工区が着工されるなど、中山トンネル周辺の工事が先行していたことから埋蔵文化財調査は用地事情の最も進んでいるとみられる利根郡月夜野町の名胡桃地区にある十二原遺跡(当初は遺跡番号から69地区と呼称)から着手していくことになった。

昭和48年4月1日に発足した群馬県教育委員会文化財保護課(定員30名)で、上越新幹線地域の埋蔵文化財にかかわる事務や直接発掘調査に従事したのは主として文化財第3係であった。4月5日、課内協議を行い、大規模な発掘調査に臨む基本的な事項について打合わせた。翌6日、係担当者4名が月夜野町へ赴き、町教委をはじめ鉄建公団月夜野鉄道建設所等へ挨拶のほか、名胡桃工事区の工事事務所や発掘調査現場も視察した。7日には再び課内協議が続行されたが、発掘調査器材の調達、調査方針の調整などになお日時を要することから、当初予定していた4月10日頃からの現地入りは困難な情勢であった。加えて4月9日になり、用地の補償問題で未解決のため16日頃まで延期をして欲しい旨の連絡が鉄建公団側から入った。県教委としても器材の調達等諸準備に時間を要したこともあり、情勢待ちの形となった。ところが、4月16日になっても土地問題は依然未解決であり、再延期して欲しいとの連絡があった。こうした局面の打開をはかるため、鉄建公団側は4月21日に至り、月夜野町長と同町議会特別委員会に対して調整を依頼した。その結果、5月に入っての調査着手は確実となったため4月23日には、調査に使用する一輪車等一部の器材を現地へ輸送した。4月25日には、群馬県企画部幹線交通課と県教委の共催で、道路公団、鉄建公団、市町村関係者も出席して、「関越自動車道ならびに上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査打合せ」を開き、両公団側からの経過報告のあと、県教委から発掘の基本方針の説明を行なった。また翌26日には、教育事務所の社教主事(文化財行政担当者)を召集し、一般文化財行政方針の中で、特に三幹線の埋蔵文化財調査にふれると共に協力方の要請をした。こうして5月7日には調査担当者が現地での設営のため現地入りすると共に、月夜野町教委との間で、①発掘調査の手順、②調査担当者の宿泊について、③作業員の雇用に関する手配、④工事業者との関係、⑤工事事務所に隣接して設ける現地調査事務所について等を協議した。9日には、ようやくプレハブ調査事務所、発掘器材等を現地へ送る手順を整えることができた。

こうして一応の準備も整ったことから、5月11日、近藤義雄県教委文化財保護課長等も現地入りして関係者に挨拶を行うと共に、この日から上越新幹線地域での県内最初の発掘調査が中山トンネル北側入口の十二原遺跡において開始されたのである。なおこの日初めて地元名胡桃地区の地権者会長に面会したが、①文化財調査については認識不足であったが、県からの文化財包蔵地の指定は一方的で、地元民は事前に関知していなかったのは遺憾であった。②土地の上物補償

に関し不満の声があり起工承諾が遅延したこと等が明らかになった。こうした地元関係者との折衝の経験は、これ以後における県内各地での調査に際して、地元の協力と理解が必要であり、且つ前提要件であることを示唆しており大きな教訓となった。何れにしても、十二原遺跡の調査は大形プロジェクト調査の嚆矢となったものであり、試行錯誤的な要素の多い対応の連続であった。その後、すぐ近くの残土処理場に計画された場所について緊急に対処するために69地区—0地点の調査をせざるを得なくなるなど流動的な情勢もとび込んできたが、発見された遺構も比較的少なかったこともあって何れも順調に進行し、7月14日には十二原地区全体の調査が終了した。

月夜野町内における第2番目の調査地点は十二原遺跡の北方、原沢を隔てた畑地で、小字名をとって大原遺跡（遺跡番号は70地区）と称した。南の十二原遺跡の終了を待って直ちに次の準備にかかり、上物を作っていた畑地の確保をする交渉に当たった。また現地調査事務所については真夏という気象条件も考慮して、境内に県指定天然記念物の大げやきが繁る村主八幡神社前を借りることとし、神社の林宮司をはじめ地元関係者の了解を得ることができた。この地区の第1次調査は昭和48年8月6日から10月6日まで実施され、更に2次が11月2日から12月24日まで続行された。12月に入ると数日おきに寒波が襲い、上越国境から舞ってくる雪に難渋した調査となった。その後、この地区は西側に側道が付けられることになり、前年度の調査で弥生時代の住居址等が検出されたことから必然的に調査を要することとなり、49年9月10日から10月16日までの20日間にわたって第3次調査が実施され、赤谷川以南についてはすべて終了をみたのである。

月夜野町内には上組（橋上）地区に本県内では高崎駅に次ぐ二番目の上毛高原駅の建設が予定されていて敷地面積は広大にわたること、加えて都市計画事業による駅前広場や接続道路、さらに月夜野バイパスと結ぶ県道小日向・上津沼田線の付替え等があるため用地事業は複雑化しており、鉄建公団による地権者交渉は難行し、昭和49年度に入っても用地買収はもちろん測量も不可能の状態が続いていた。鉄建公団側の度重なる要請により、県教委では月夜野町教委へも協力方を依頼して、文化財調査の先行着手について了解を得るための地元折衝をはかることになった。上組地区上越新幹線対策協議会と地権者会と県教委との間で、昭和50年7月14日以降9月7日まで5次に及ぶ交渉がもたれて、文化財調査の終了まで借地方式により行うことで了解に達し、9月29日にくい打ち、10月1日から上組の洞地区の試掘が始まった。

この上組の交渉と平行して北方の水沼地区でも案件があった。水沼では既に月夜野トンネルの開きく工事が進んでいたが、オープンカットされる個所に包蔵地があり、前中原遺跡（当初の細目調査にはなかったので公団との協議でNo80として追加）の取扱いは、上組と連動して解決の見通しとなった。ここでも50年7月29日に地権者会が開かれて上組と同じ扱いで了解に達し、9月30日にくい打ち、10月1日から予備調査が始められた。県北地域は冬の到来が早いので11月29日には試掘を打ち切り、残務整理して12月3日引揚げた。縄文時代の遺構が確認されたため、この地区の調査は翌51年の春に再開され、4月12日から5月31日まで延5,100㎡に及ぶ発掘作業が継続され、幾多の成果をあげることができたのである。

（森田秀策）

第II章 調査の方法と経過

十二原遺跡（69地区）の調査区域（付図2）は、全長約550m・幅12～20mで上越新幹線大宮起点116km430m～980mの間で、続く大原遺跡（70地区）の調査区域（付図3）は、全長約500m・幅12mで同じく大宮起点117km000m～500mの間で、第3次調査では側道部分の全長120m・幅6mの範囲の調査を実施した。両遺跡の調査区域はいずれも北上するに従い西へ緩くカーブしている。

十二原・大原遺跡は調査区域全体を2m×2mのグリッドを基本として区切り、十二原遺跡では上越新幹線中心杭の116km500mから600mを視準した線を基準線とし、大原遺跡の0区から3区までは117km000mから100mを視準した線を基準線とし、4区は117km400mから500mを視準した線を基準線とした。この基準線に平行するラインをアルファベットで示し、直行するラインを01～50の数字で示し、南東隅をグリッド表示の基準とした。また、中心杭間100mを1調査区とし、十二原遺跡では4区～8区を設定し、大原遺跡では0区～4区を設定した。

両遺跡は調査に先だち、数箇所土層確認のために試掘を行ない、そこでの知見に基づきグリッド単位での発掘を基本として調査を進めた。

十二原遺跡の4区・5区では、南北に縦断する連続グリッドと東西に横断する連続グリッドを発掘の基本とし、6区では南北に縦貫するトレンチと直交する東西のトレンチ発掘を基本とし、7区・8区では市松模様状にグリッド単位の発掘を行なった。

大原遺跡では調査区域を南北に縦断する連続したグリッドと、これに直交する20m単位の東西に連続したグリッドの発掘を基本として、その隙間では市松模様状にグリッドの発掘を行なった。

以上による調査の結果、遺構の検出および遺物の集中出土をみた個所では、順次グリッドの拡張をして調査を進める方法を取った。なお、住居址の実測は遺方で行なった。

前中原遺跡（80地区）の調査範囲（第2図）は、距離約80m・幅約40mの範囲で3m×3mグリッドを基準とし、30mを1調査区として1区～3区を設定した。

基準線の設定は地形上の制約により、中心杭120km160mから140mを視準し反転して決定し、これより西方向へ2m移動して基準線とした。この基準線に平行する線を西よりアルファベットで表示し、直交する線を01～10の数字で表示し南西隅をグリッド表示の基準とした。

調査は基本グリッドを3連続させて2m×9mのトレンチとして発掘し、基準線と平行に3グリッドを1単位として南北方向と東西方向のトレンチを相互に連続させ、調査範囲全域に設定して発掘を行ない、遺構を検出したトレンチは拡張して調査を実施した。

十二原遺跡の発掘調査は昭和48年5月11日より開始し7月14日まで実施した。まず、5区の低平地部分より着手した。ここでは桑植えによる攪乱がローム層まで達しており、湧水も多く遺構の検出は見られなかった。次に4区の微高地部分および5区の傾斜地に調査を進め、4区において4軒の住居址を確認し、グリッドの拡張を行ない精査を進め、同時に周辺の発掘を順次進めて

いった。また、微高地東縁部北面傾斜地部分から裾部にかけて、多量の縄文土器・石器が散布していることを確認し、散布範囲確認のため順次調査範囲を拡張し、ドットマップによる遺物取り上げを実施していった。続いて6・7・8区の発掘を実施したが、6・7区は低湿地状で湧水が多く、また、8区では耕作による攪乱が激しく、いずれの調査区においても遺構は検出されず、遺物の散布も極めて稀薄であった。

大原遺跡の発掘調査は3次にわたり実施した。第1次は昭和48年8月1日から10月6日までで第2次は同年12月2日から12月24日まで、第3次は側道部分の調査で、翌年の49年9月10日から10月16日まで実施した。

第1次調査は0区から1区南半までと4区の発掘を行ない、0区において住居址1軒を検出した。この1号住居址からは多量の炭化材が出土し、慎重に調査を行ない時間を労した。この間、4区の発掘を行なったが、風倒木痕を検出しただけで、遺物の散布も見られなかった。

第2次調査は残りの1区北半から3区までの発掘を行なったが、1区において土壇と溝を検出しただけで2区から4区にかけても遺物の散布はあまり見られなかった。

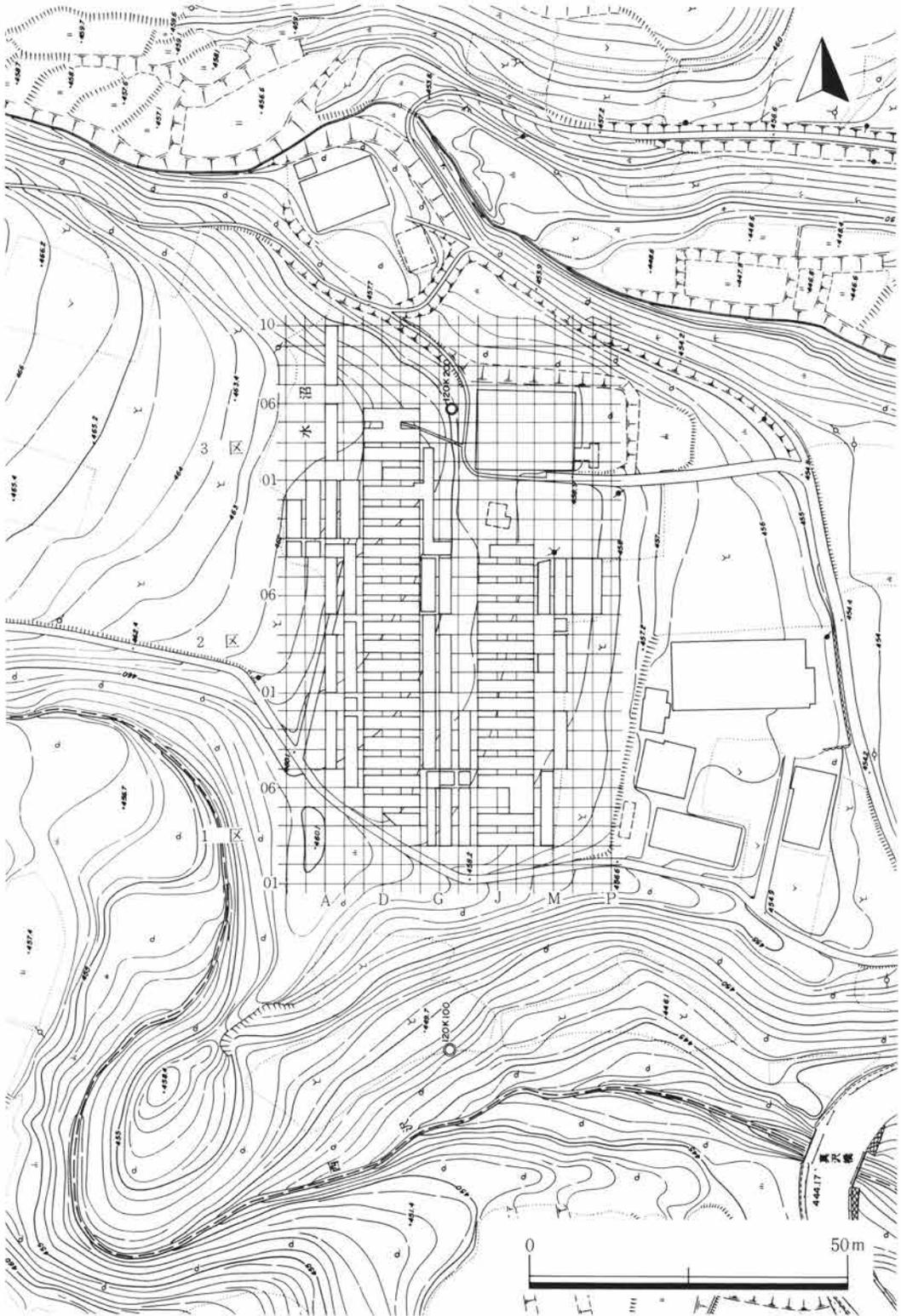
前中原遺跡の発掘調査は第1次を昭和50年10月1日から11月29日まで実施し、予備調査として約3分の1の面積に相当するトレンチを発掘した。この調査で遺物の散布状況や遺構の分布状況を調べ、一部の住居址と土壇を拡張して調査した。

第2次は翌年の51年4月12日から5月18日まで実施し、確認されている住居址や土壇等の本格的な調査を実施し、縄文早期から前期にかけての住居址・炉穴・土壇を検出し、平安時代の住居址等も検出した。

(清水和夫・前沢和之・下城 正)



大原遺跡での調査スタッフ



第2図 前中原遺跡周辺地形およびグリッド設定図 (1:1,000)

第三章 遺跡の立地と歴史的環境

十二原・大原・前中原遺跡は県北山間部のほぼ中央に位置しており、南流する利根川と東流する赤谷川の合流点付近にあって、いわば利根川源流地域の入口にあたっている。

遺跡はいずれも利根川右岸にあるが、赤谷川を挟んで右岸南から十二原・大原遺跡が並んで位置しており、前中原遺跡は左岸北へ4kmの位置にありやや離れている。十二原・大原遺跡は利根郡月夜野町大字上津に、前中原遺跡は同町大字水沼に所在している。

十二原・大原遺跡は合流点より西へ約1.5kmの通称「名胡桃平」と呼ばれている高燥かつ平坦な河岸段丘上に立地している。この名胡桃平は利根川に面する東面と赤谷川に面する北面とではやや様相を異にしている。東面は西方の前山裾部から末端の比高差約35mで利根川へ落ち込む段丘崖まで距離約1.2kmにわたり、緩やかな傾斜をなす段丘面が広がっている。この平坦な段丘面はさらに、南より湯舟沢・諏訪沢・後沢・中後沢・原沢の東流する小開析谷によって分割されている。北面は幅約1.5kmの段丘面をさらに小段丘崖が赤谷川と平行に東西に2本走っており、3面の平坦面が構成され赤谷川へ約30mの比高差で落ち込んでいる。

十二原・大原遺跡は東面と北面の境を流れる原沢の南と北に位置しており、十二原遺跡は東面北端に立地し、大原遺跡は北面の中位の平坦面に立地している。

また、十二原遺跡の遺構は南端の中後沢寄りの微高地状の高台に立地しており、標高は437m～442mである。大原遺跡は全面がほぼ平坦で標高は430mである。

前中原遺跡は十二原・大原遺跡とは位置が離れているため、立地条件が全く異なっている。遺跡は西方にある大峰山から馬の背状の尾根が樹枝状に延びる丘陵地帯の谷間の台地上に立地し、標高は459m～462mである。

遺跡の立地する台地は規模の大きい開析谷が土石流によって埋没し、その後、南北両端が新たな開析の進行によって削られた、東西に細長い台地で、東端を利根川によって切られている。台地の幅は約80mで東方へ緩やかに傾斜している。この台地上には大峰山系から流出した通称「みそ石」と呼ばれる溶結凝灰岩の大塊が随所に露出しており、台地の成因を物語っている。

次に月夜野地内における考古学上の調査・研究は、戦前において昭和5年に刊行された「利根郡誌」があるが、この背景には以前からの地域の集収家達の活動があったものと推定される。昭和10年には県下一斉の古墳調査の一貫として当地域の分布調査が行なわれ、旧古馬牧地区の師・後閑を中心に97基の古墳が確認され、旧桃野地区の塚原を中心に61基が確認されている。この成果は昭和13年に「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 上毛古墳綜覧」として刊行され、その後の群馬県における古墳研究の基礎資料となった。また、昭和16年には山崎義男氏により水沼・真沢の窯址が紹介され、古窯址の所在地としても知られるようになった。

戦後における調査は、昭和28年に尾崎喜左雄氏を中心に行なわれた塚原古墳群の実測調査であ

ろう。この調査結果は、昭和30年に刊行された「日本考古学講座5 古墳文化^{註4}」の中で後期古墳群の事例として沼田市奈良古墳群や高崎市御部入古墳群とともに紹介され、その構築者・被葬者が郷土主層、さらにはその家族におよぶであろうとしてその歴史的な性格が論じられた。なお、同時に上津にある天神遺跡^{註5}の調査も行なわれ、和泉期に相当する住居址2軒を確認している。

昭和30年には山崎義男氏により後閑にある縄文晩期から弥生中期にかけての八束脛洞窟遺跡^{註6}が紹介された。また、36年には「桃野村誌^{註7}」が刊行され、塚原古墳群や名胡桃城址・小川城址等が紹介された。

昭和45年から46年にかけて古窯址群の一隅にあたる橋下の洞窯址^{註8}の調査が井上唯雄氏によって行なわれた。この調査で須恵器・瓦併用の窰窯3基が確認され、県北での奈良時代末から平安時代にかけての窯業生産の実態が初めて明らかとなった。また、47年には「古馬牧村誌^{註9}」が刊行され同地区の古墳の現状が紹介された。

昭和48年以降は、上越新幹線や関越自動車道の建設により大規模な発掘調査が次々に行なわれ、当地域における原始・古代の様相がしだいに明らかになりつつある。

従来この地域における旧石器時代の遺跡はあまり知られていなかったが、利根川左岸の師A(仮称)遺跡^{註10}で尖頭器や石刃・搔器が数10点検出され、その存在が明らかとなった。

縄文時代の遺跡については、利根川右岸では調査例があるが、左岸でも確認されつつあり今後、左岸での調査が進行すれば実態はかなり変わるものと思われる。

都遺跡^{註11}からは時期は明確ではないが有舌尖頭器2点が出土しており、当地域では局部磨製石斧も出土している。梨の木平遺跡^{註12}では前期から後期の遺物が出土し、中期末の敷石住居址1軒が確認された。この敷石住居址は隅丸方形の掘形があり、南に張出部を持ち、主体部はやや六角形を呈し、左右対象となるように板石が敷き詰められていた。深沢遺跡^{註13}は中期から晩期にかけての遺跡で、中期の住居址1軒と土壇群があり、後期中葉の楕円形をなす径約20mの配石遺構が確認された。この配石遺構は石棺状の配石を主体とし50基近くの配石が確認された。また、配石遺構の北には同時期の土壇群が広がり、1基からは注口の付いた双口土器が出土した。

弥生時代の遺跡としては、晩期からの遺跡ではあるが前述の八束脛洞窟遺跡がある。中期の遺物として条痕文系や変形工字文系の土器が出土している。また、人骨や装飾品等も出土している。同じく前述の梨の木平遺跡でも少量の遺物が出土し、岩櫃山系の土器や女方系の土器が出土している。藪田遺跡^{註14}では後期樽式期の住居址1軒が確認され、台付甕・甕・鉢・コシキ等7個体がセットで出土した。

古墳時代の遺跡としては前述の天神遺跡があるが、集落址の調査は今までほとんどなく、近年の調査によってしだいに資料が増加しつつある。また、当地域の古墳は古い時期のものではなく後期古墳に属するもので、6世紀後半から7世紀代を主体としている。

奈良時代から平安時代になると、利根川右岸で名胡桃平より赤谷川を挟んで北の大峰山東麓裾部一帯は窯業生産地帯となり、南から洞・沢入^{註15}・深沢・水沼・真沢等の8世紀後半から11世紀に

第三章 遺跡の立地と歴史的環境

かけての窯址が次々確認されている。これらの窯址群は県北山間部一帯へ須恵器を供給していたものと考えられる。

なお、十二原・大原遺跡の西400mには、朝鮮系渡来人に関連すると言われている「^{すぐる}村主神社」が名胡桃平のほぼ中心に鎮座している。たとえ赤谷川を隔てているとしても、既述の窯業生産地と隣接している点、興味ある問題を提起している。また、この鎮座地をめぐる一帯は広く「名胡桃」と呼称されているが、倭名類聚鈔巻第六上野國第九十二利根郡の郷名に「吳桃^{奈久留美}」が見られ、ただちに結び付けるわけには行かないが音が類似しており、この地名が大字・小字等の行政区画とは関連なく汎称として通用している点が、その古さを暗示しているかのようである。今後、大規模な発掘調査が進行する中で、調査資料と合せて検討する課題であろう。

また、窯址群の対岸にあたる利根川左岸の上牧・下牧地区は、延喜式に見られる久野牧の地と推定されているが、^{註16}そうであるならば、利根川を挟んで左右両岸に相異なる生産の基盤と歴史性も窺えよう。

中世末から近世にかけては、利根川を望む段丘崖上の左岸に明徳寺城、右岸には南から名胡桃城・小川城・石倉^{註17}城が構築され、洞^{註18}Ⅲ・藪田遺跡では掘立柱建物が120軒近く確認されている。なお、洞Ⅲ遺跡ではこれらの城址より古い館跡も確認されている。

また、当地域は関東と越後を結ぶ交通の要衝でもあり、谷川越えの旧清水街道が利根川に沿って北上しており、三国街道が赤谷川に沿って西北に走っている。（石川正之助・下城 正）

注1 「利根郡誌」 群馬県利根教育会 1930

2 「群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第五輯 上毛古墳綜覧」 群馬県 1938

3 山崎義男 「上野国利根郡月夜野二窯址について」 古代文化第12巻第4号 日本古代学会 1941

4 後藤守一編・尾崎喜左雄 「古墳文化に現われた地域社会 毛野」 日本考古学講座5 古墳文化 河出書房 1955

5 尾崎喜左雄 「月夜野町上津遺跡調査報告」 1954（謄写）

6 山崎義男 「群馬県利根郡八束原遺跡」 日本考古学年報8 昭和30年度 日本考古学協会編 1955

7 「桃野村誌」 月夜野町誌編纂委員会 1961

8 井上唯雄 「群馬県利根郡月夜野町洞窯跡発掘調査報告」 月夜野町教育委員会 1973

9 「古馬牧村誌」 月夜野町誌編纂委員会 1972

10 山口逸弘等 「師A（仮称）遺跡より出土の旧石器について」 埋文月報8月号 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981

11 昭和50年月夜野町教育委員会調査

12 能登健・下城正 「梨の木平遺跡」 群馬県教育委員会 1977

13 下城正・西田健彦 「群馬県深沢配石遺構」 日本考古学年報32 1979年度版 日本考古学協会 1982

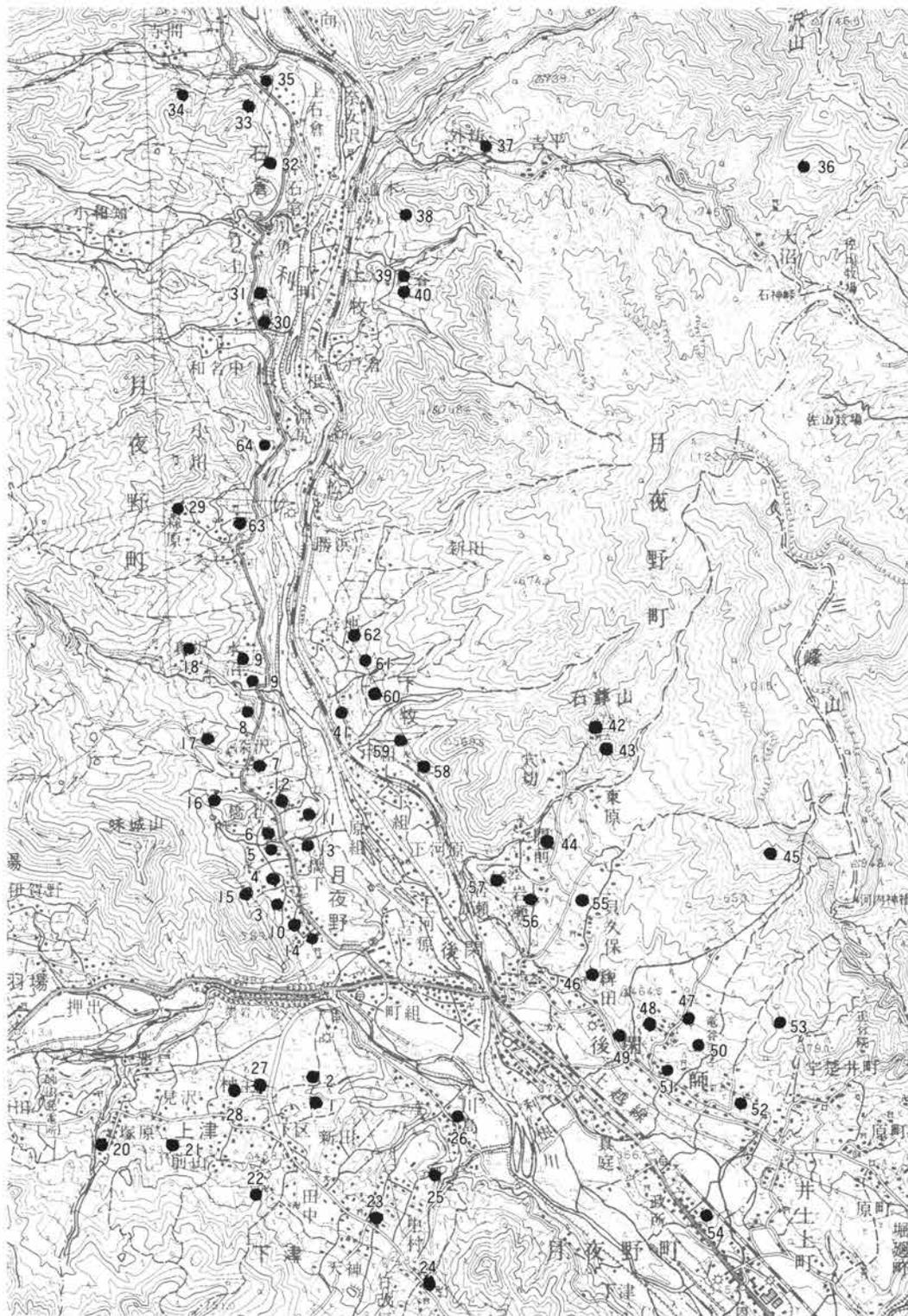
14 中束耕志・下城正 「上越新幹線地域埋蔵文化財調査概報V・VI 藪田遺跡（78地区）」群馬県教育委員会 1979・1980

15 1980年確認

16 「古馬牧村誌」 第四章1項参照

17 山崎 一 「群馬県古城墓址の研究 上・下巻」 群馬県文化事業振興会 1972

18 長谷部達雄・中束耕志等 「上越新幹線地域埋蔵文化財調査概報IV・V・VI 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（76地区）」群馬県教育委員会 1978・79・80



第3図 月夜野地区遺跡位置図

1:50,000

第Ⅲ章 遺跡の立地と歴史的環境

第2表 月夜野地区遺跡一覧表

No	遺跡名	時代	種別	所在地	群馬県遺跡地図番号	備考
1	十二原遺跡	縄文～平安	集落	大字上津十二原2224他		S48 県教委調査
2	大原遺跡	縄文～弥生	集落	大字上津大原930他		S48-49 県教委調査
3	洞Ⅰ遺跡	平安～近世	集落	大字月夜野洞1506他		S51～53 県教委調査
4	洞Ⅱ遺跡	平安～近世	集落	大字月夜野洞1442他		S51～53 県教委調査
5	洞Ⅲ遺跡	平安～近世	集落	大字月夜野洞1514他		S52～53 県教委調査
6	藪田遺跡	平安～近世	集落	大字月夜野藪田1757他		S52～53 県教委調査 S54 事業団調査
7	深沢遺跡	縄文	集落	大字月夜野深沢2185		S51・54 県教委調査
8	前田原遺跡	平安～近世	集落	大字月夜野前田2397他		S53 県教委調査
9	前中原遺跡	縄文～近世	集落	大字小川前中原18他		S50～51 県教委調査
10	都遺跡	縄文	集落	大字月夜野都		S50 町教委調査
11	梨の木平遺跡	縄文～平安	集落	大字月夜野藪田1808他		S51 県教委調査
12		近世	集落	大字月夜野藪田		S54 町教委調査
13	小川城跡	室町	城館跡	大字月夜野古城1129他	No.3259	S55 事業団調査
14	洞古墳	古墳	墳墓	大字月野野洞	No.3274	
15	洞窯址	奈良～平安	窯址	大字月夜野洞	No.3292	S45～46 町教委調査
16	沢入窯址	奈良～平安	窯址	大字月夜野藪田		
17	深沢窯址	平安	窯址	大字月夜野深沢		S16 山崎
18	真沢窯址	平安	窯址	大字月夜野真沢		S16 山崎

第三章 遺跡の立地と歴史的環境

No	遺跡名	時代	種別	所在地	群馬県遺跡地図番号	備考
19	水沼窯址	平安	窯址	大字月夜野水沼		
20	塚原古墳群	古墳	墳墓	大字上津塚原335他	No3267	S28 群大調査
21	鐘后改戸遺跡	縄文	包蔵地	大字上津貝沢1556他	No3282	
22	天神遺跡	古墳	集落	大字上津不動天神2609他	No3254	S28 群大調査
23		弥生	包蔵地	大字下津中村天神2333他	No3284	
24	宮の森遺跡	縄文	包蔵地	大字下津岳改戸4344他	No3278	
25	名胡桃城跡	室町	城館跡	大字下津中村城平3475他	No3262	
26	小川島八幡	古墳	墳墓	大字小川島八幡塚	No3266	
27		縄文	包蔵地	大字村主神社東西一帯	No3273	
28	村主下遺跡	縄文	包蔵地	大字上津村主	No3294	
29	森原遺跡	縄文	包蔵地	大字小川1080他	No3255	
30	和名中遺跡	縄文	包蔵地	大字小川向原1516他	No3277	
31	今泉遺跡	縄文	包蔵地	大字石倉628他	No3287	
32		縄文	集落	大字石原高荻916他	No3291	
33	石倉	縄文	集落	大字上石倉洞1313他	No3276	
34		縄文	集落	大字石倉小膳74他	No3279	
35	石倉城跡	室町	城館跡	大字石倉笠原1786他	No3258	
36		縄文	包蔵地	大字大沼234他	No3285	
37		縄文	集落	大字上牧写坊2472他	No3281	
38		縄文	包蔵地	大字上牧吉平外坊日影2676	No3280	
39		縄文	包蔵地	大字上牧大沼		

第III章 遺跡の立地と歴史的環境

No	遺跡名	時代	種別	所在地	群馬県遺跡地図番号	備考
40		縄文	集落	大字上牧戸谷1610他	No3288	
41		縄文・弥生	集落	大字下牧東鳥井157他	No3261	
42	八束脛洞窟	縄文～奈良	包蔵地	大字後閑穴切	No3275	
43	豆窪遺跡	弥生	包蔵地	大字後閑豆窪2396他	No3268	
44		縄文	集落	大字後閑小原1032他	No3289	
45	トリクソ古墳	古墳	墳墓	大字師梨木沢1832他	No3263	
46	明德寺城跡	室町	城館跡	大字後閑城山1717他	No3260	
47	善上遺跡	縄文	包蔵地	大字師善上	No3256	
48	善上寺館跡	室町	城館跡	大字師善上	No3257	
49	大沢田古墳	古墳	墳墓	大字後閑下稗田1605他	No3270	
50	狐塚古墳	古墳	墳墓	大字師青岳1605他	No3265	
51	丸山古墳	古墳	墳墓	大字師中堀	No3271	
52	後田集落跡	弥生	集落	大字師後田1886他	No3293	
53	金山古墳	古墳	墳墓	大字師金山1923他	No3264	
54		弥生	包蔵地	大字真庭川花914他	No3269	
55	門前A	縄文～古墳	包蔵地	大字後閑門前		
56	門前B	縄文～古墳	包蔵地	大字後閑門前		
57	前原	縄文	包蔵地	大字後閑門前		
58	高平	縄文～古墳	包蔵地	大字下牧高平		
59	大竹	縄文～古墳	包蔵地	大字下牧大竹		
60	小竹A	縄文	包蔵地	大字下牧小竹		

第Ⅲ章 遺跡の立地と歴史的環境

No.	遺跡名	時代	種別	所在地	群馬県遺跡地図番号	備考
61	小竹 B	縄文	包蔵地	大字下牧小竹		
62	宮地	縄文～古墳	包蔵地	大字下牧宮地		
63	小川	縄文	包蔵地	大字小川		
64	淵尻	縄文	包蔵地	大字小川淵尻		

第IV章 基本土層

十二原遺跡基本土層 (第4図)

本遺跡の地形は南端4区が一段高く5区南半まで北向する緩傾斜面で、5区北半から7区までは平坦面が続くが6区北半は水田化され削平を受けている。8区は遺跡北端を流れる原沢に向って傾斜を始める。基本土層にあまり変化はないが、5区の傾斜変換点を境に南半と北半では第IV層に変化が見られる。また、5区傾斜地と6区においては第I層と第II層下部に鉄分沈澱層がある。

- | | | |
|----------------|---|---|
| 第 I 層 表 | 土 | 暗褐色を呈する現耕作土。厚さ25cm～65cmで小石や軽石を含む。 |
| 第 II 層 黒褐色土層 | | 厚さ約25cmで上部より漸移的に黒色が強くなる。北行するに従い粘性が強くなる。榛名山二ツ岳のFP(6世紀後半)を含む。 |
| 第 III 層 黒色土層 | | 厚さ約20cmで4区だけに堆積している。弥生時代の包含層と考えられる。 |
| 第IV-a層 暗褐色土層 | | 厚さ15cm～30cmで粒子が細かく北行するに従い、粘性が強くなり灰色を帯びてくる。この土層より多量の縄文時代の土器や石器が出土した。 |
| 第IV-b層 黒褐色土層 | | 厚さ約20cmで粒子が細かく粘性はやや強い。ロームの混入が見られる。 |
| 第IV-c層 黒褐色土層 | | 厚さ15cm～25cmで粒子が密で粘性が強い。 |
| 第 V 層 暗黄褐色漸移層 | | 厚さ約15cmで黒褐色土とロームが混入し、やや荒い土質をしている。 |
| 第 VI 層 黄褐色ローム層 | | 粒子はやや荒いが粘性を帯び、北行するに従い粘性が強くなり粒子も細くなる。 |
| 第 VII 層 黄褐色粘土層 | | 第VI層よりやや灰色を帯びる。ローム層が粘土化したものと考えられる。 |

十二原遺跡0地点基本土層 (第5図)

中後沢へ落ち込む傾斜地で、この地域の一般的な土層堆積をしている。

- | | | |
|-------------|---|--------------------------------------|
| 第 I 層 表 | 土 | 十二原遺跡第I層と同様で厚さ20cm～45cm。 |
| 第 II 層 黒色土層 | | 桑により攪乱を多く受けている。粘性弱くフカフカした土層でFPを少量含む。 |

- 第 III 層 黒 色 土 層 桑により攪乱を所々受けている。厚さ約35cmで粒子細かく粘性やや強い。縄文時代の遺物包含層である。
- 第 IV 層 暗黄褐色漸移層 ロームブロックが多く混入している。
- 第 V 層 黄褐色ローム層 やや粒子が荒く、下部に行くに従い粘土化する。

大原遺跡基本土層 (第6図)

本遺跡はほぼ平坦であるが北に向ってやや高くなっており、土層が単純化して行く。

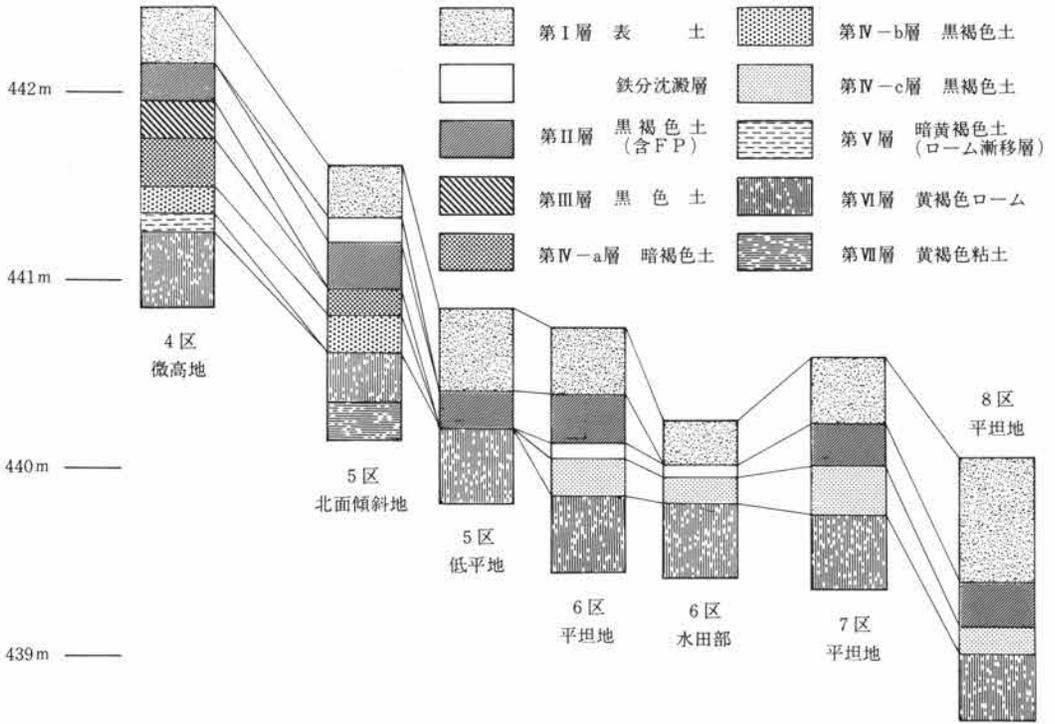
- 第 I 層 表 土 暗褐色をした現耕作土で、小石や軽石を多く含む。
- 第 II 層 黒 褐 色 土 層 厚さ15cm~35cmで、軽石を多く含みザラザラしている。
- 第III-a層 黒 色 土 層 厚さ10cm~20cmで、粒子細かく粘性がやや強い。FPを含む。
- 第III-b層 黒 色 土 層 厚さ15cm~30cmで、粒子細かく粘性弱い。縄文・弥生の遺物を包含し、1号住居址はこの土層上部より切り込んでいる。
- 第 IV 層 暗黄褐色漸移層 厚さ10cm~30cmで、粒子細かくフカフカしている。
- 第 V 層 黄褐色ローム層 固く締っている。南行するに従い薄くなってくる。
- 第 VI 層 淡黄褐色砂質ローム層 南行するに従い第VIII層に変化する。
- 第 VII 層 礫 層 上半部は腐食の進んだコブシ大の石が多いが、下半部になると人頭大のものも多い。
- 第 VIII 層 黄褐色中砂層
- 第 IX 層 淡黄褐色ローム層 上半部は砂質に富むが下半部は粘性が強い。部分的に分層が可能で水成堆積の可能性もある。
- 第 X 層 礫 層 第VI層に比べて腐食も少なく、人頭大の石を多く含む。

前中原遺跡基本土層 (第7図)

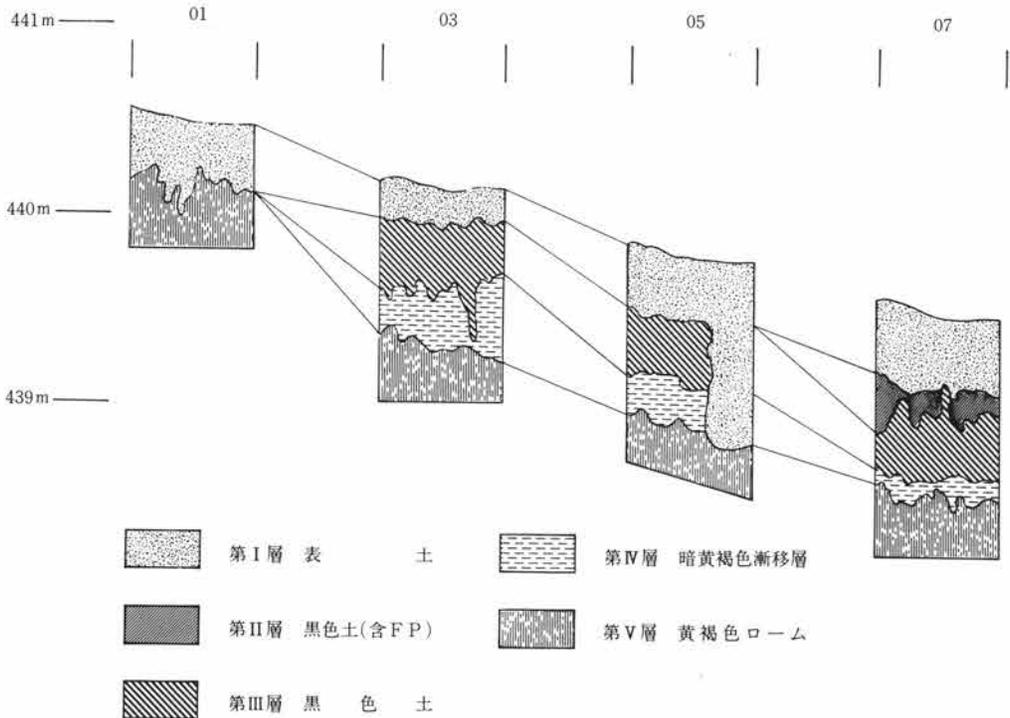
遺跡は北端が尾根状に高く、南半は東方へ緩やかに傾斜する。調査区全域は桑畑で、かつては人家もあつたらしく攪乱が著しい。

- 第 I 層 表 土 厚さ25cm~50cmで暗褐色を呈し小石を含む。多くの部分で第V層まで直接達している。
- 第 II 層 黒 褐 色 土 層 厚さ約15cmで粒子やや荒くFPを含む。
- 第 III 層 黒 色 土 層 厚さ約40cmで粒子細かく、繊維土器を中心に遺物を包含している。
- 第 IV 層 暗黄褐色漸移層 厚さ15cm~30cmで非常に柔らかく、日射や降霜等の風化作用により形成されたものとみられ、繊維土器や条痕文系土器が沈下している。
- 第 V 層 黄褐色ローム層 下部に行くに従い粘土化する。 (下城 正)

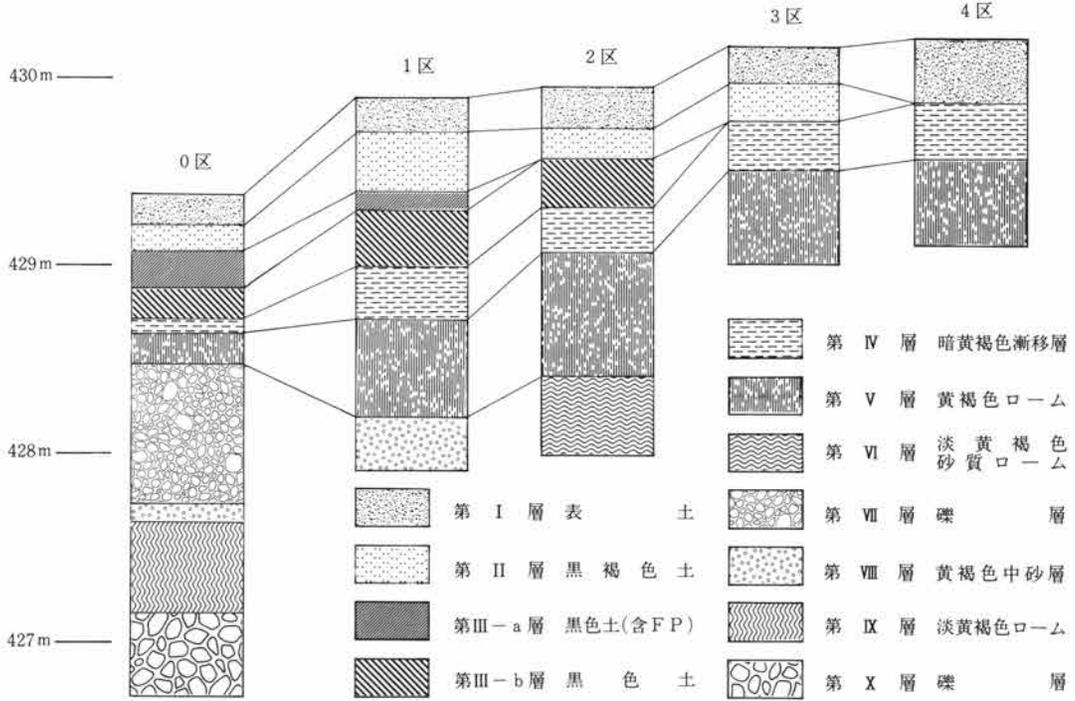
第IV章 基本土層



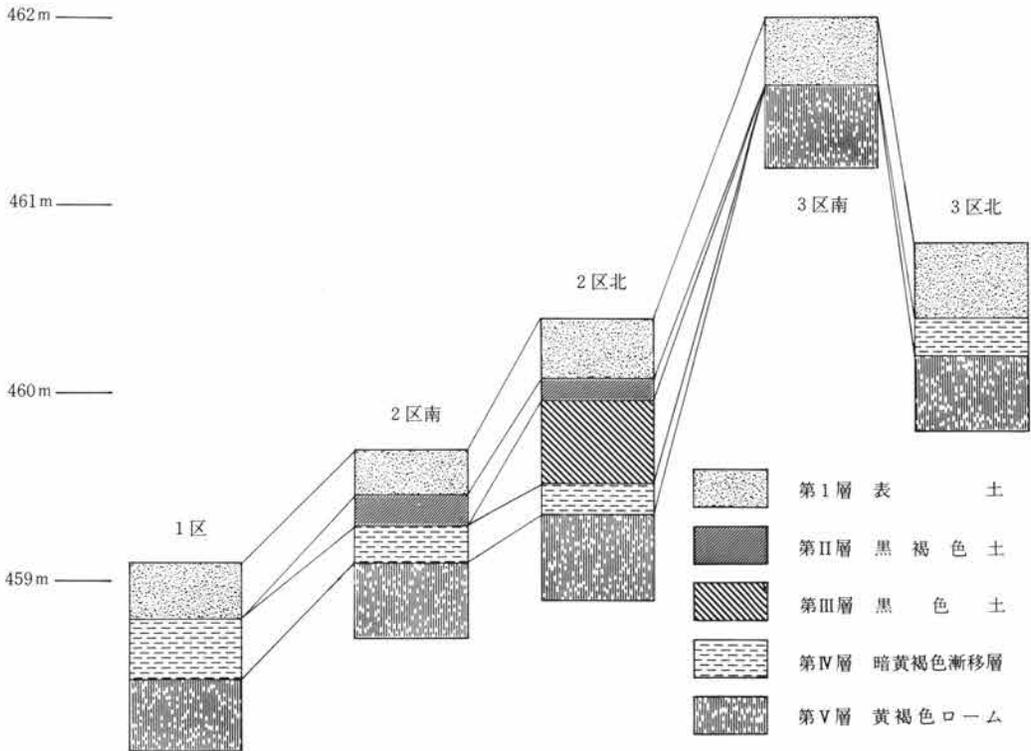
第4図 十二原遺跡土層模式図



第5図 十二原遺跡0地点Dライングリッド土層図



第 6 圖 大原遺跡土層模式圖



第 7 圖 前中原遺跡土層模式圖

十二原遺跡

第V章 十二原遺跡

1 遺跡の概要 (付図2、第8図、図版1～3)

遺跡は名胡桃平東面北端のほぼ中位にあり、南を中後沢に北を原沢によって切られている。調査区の微地形は、南端の4区は中後沢に沿って東西に延びる微高地状の高台の東縁部にあたりやや高くなっている。5区は微高地の東縁部北面傾斜地から裾部にあたる。6区は中後沢の枝沢の最奥部にあたりやや低くなり、7区は平坦な状態で、8区は原沢に向かって緩く傾斜を始める。また、0地点は中後沢に沿った微高地の東縁部南東傾斜地に位置し、本線調査区より南東へ約70m離れている。

遺構・遺物は4区と5区に集中し、5区北半以北は遺物もほとんど出土せず、遺構は検出されなかった。また、湧水も非常に多かった。

調査では、縄文中期を主体とした遺物散布地の一部を2地点で確認し、弥生後期の住居址1軒と古墳時代前半の住居址1軒、平安時代初頭の住居址1軒と時期不明の住居址1軒の計4軒の住居址を確認した。また、4区微高地には柱穴が散在していた。

縄文時代の遺物散布地は、5区の微高地北面傾斜地から裾部にかけてと0地点の2ヶ所で確認した。両地点は微高地縁辺部に広がりを持つと思われる一連の遺物散布地と考えられ、報告では同一の遺跡として扱っている。出土した土器は時期的に限定しており、石器も多量に伴出した。また、直線や曲線を組み合わせ幾条も細く刻んだ小形の板石も同時に出土した。

確認した4軒の住居址は、微高地東縁部の頂部平坦面である4区に位置している。弥生時代の4号住居址は黒色土中に構築されていたため不明な点が多いが、一部で壁の立ち上がりを確認し、遺物の出土状態や焼土の散布状態から住居址と考えた。4個体の土器が出土し、各種の石器を伴っている。また、後期樽式期の土器片が4区を中心に少量出土している。

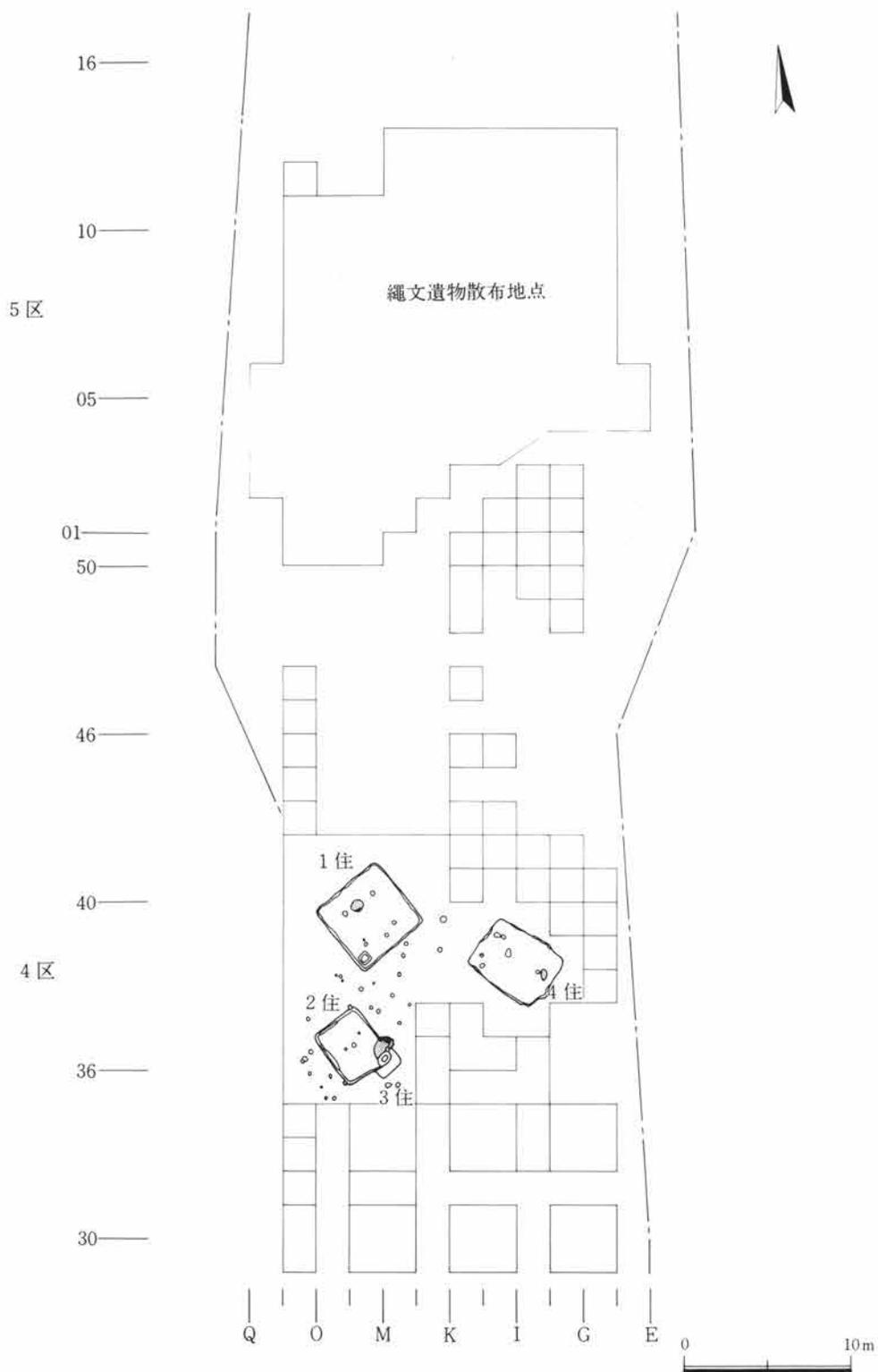
古墳時代の1号住居址は、一部で攪乱を受けているがしっかりとしたプランをしており、壁構造を考える上で注目される手法が確認された。また、本住居址周辺からは同時期と考えられる完形土器も出土している。

平安時代に比定される2号住居址は明確にプランを確認できたが、3号住居址は2号住居址上の黒色土中に構築されており、規模や時期は確認できなかった。

4区微高地には円形の掘形を持つ柱穴を数多く確認したが、まとまりを持つものはなく時期も確定できなかった。また、中世～近世の遺物や古銭も少量出土している。

なお、調査区の始まりが4区となっているが、これは調査範囲を広くカバーするため、調査区の起点を上越新幹線大宮起点116km00に据えた理由による。(清水和夫)

第V章 十二原遺跡



第8図 十二原遺跡遺構全体図 (1:400)

2 縄文時代の遺構と遺物

縄文遺物散布地点（付図3～5、第9図、図版4・5）

縄文時代の遺物が集中して散布する地点を2ヶ所で確認した。1ヶ所は新幹線本線の5区南端で、中後沢に沿って東西に走る微高地の東縁部北面傾斜地から裾部にかけて散布していた。もう1ヶ所は0地点で、同じ微高地の東縁部南東傾斜地に散布しており、中後沢北岸の崖上に位置している。

新幹線本線5区南端では、調査区を斜めに横切る状態で等高線に平行して、東西約25m、南北約20mの範囲に散布していた。この散布地からは土器の小片が多量に出土し、大形の剝片も目立ち、小形の剝片や打製石斧・石鏃・線刻石板等も出土した。

これらの遺物は、微高地の北面傾斜面においては第IV-a層暗褐色土中に含まれているが、この暗褐色土層は裾部に近づくに従がいしだいに粘性を帯び、裾部においては灰褐色粘質土層となっている。

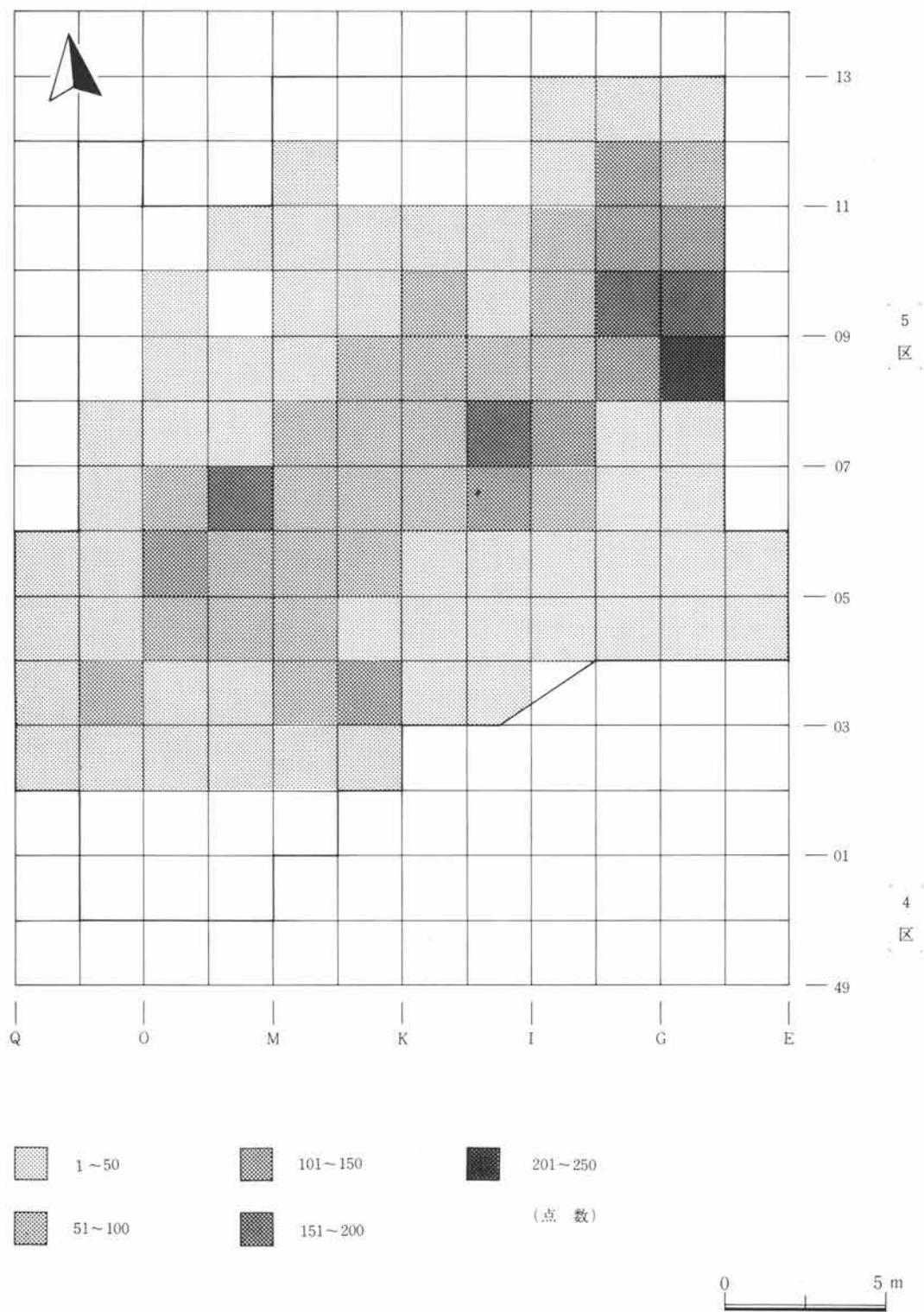
この第IV-a層中に含まれる土器片は、傾斜地の破片が比較的大きく、また、ほとんど磨滅していないのに対して、裾部の灰褐色粘質土層中出土のものは、破片が比較的小さいものが大部分で、やや磨滅しているものが多い。

遺物の出土量は、傾斜地と裾部の接点である傾斜変換点付近に密度が高く、傾斜地の上端および裾部の末端は疎らとなっている。また、石器や石片は大量の土器片の中に混在しており、場所による片寄りほとんど見られなかった。なお、調査区域内において、西側へ行くに従がい遺物の散布はしだいに疎らとなる傾向を示しているが、これは遺物散布地の西側の限界を示している可能性が考えられよう。

0地点の現状は桑園であるが、表土から約50cm下方まではほとんど攪乱されており、この攪乱層の中から弥生土器・土師器・須恵器の破片と混じり合って縄文土器片・石片が少量発見された。また攪乱層の下からは、新幹線本線5区最南端の暗褐色土に対応する包含層が一部で確認され、この包含層から約100点近い土器片と大形剝片が検出された。その出土状態は新幹線本線5区最南端部に近似している。

新幹線本線部分の斜面および裾部と、中後沢北岸に位置する0地点とは、遺物出土状態および遺物の種類・時期が近似しており、ともに同一微高地の北側と南側斜面であることから、連続す同一遺跡として捉えることが出来よう。

（飯塚卓二）



第9図 縄文遺物散布地点遺物出土数量図(1:200)

縄文遺物散布地点出土土器

十二原遺跡における縄文土器の出土は、新幹線本線敷地内4・5区に集中している。ここは、微高地状の台地の東縁部北面傾斜地にあたり、阿玉台式土器を中心にした土器・石片が広範囲にわたって平面的な出土状態を示していた。また、関連工事に伴って本線敷の東側に位置する0地点でも阿玉台式土器の出土をみている。ここは、中後沢左岸崖上末端部にあたり、4・5区の出土地点の一部とも考えられる。土器図版1～8が前者、9が後者からの出土土器である。

土 器 1 (第10図、図版12)

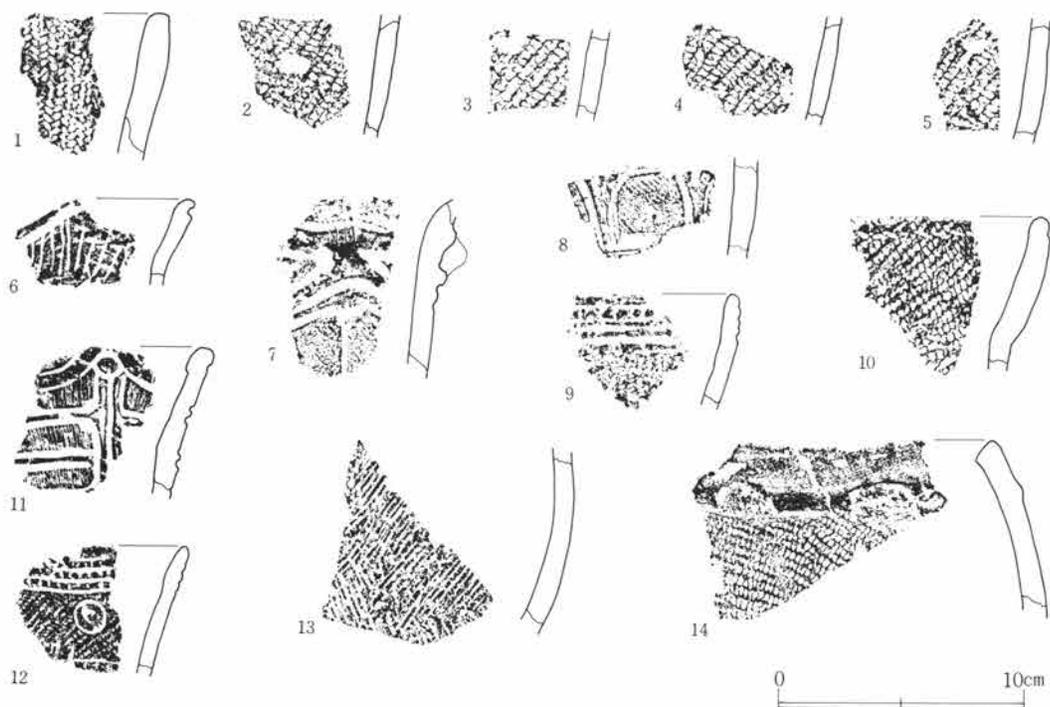
本地区における出土土器のうち、主体となる阿玉台式土器を除いたものを一括した。1は組紐の回転文で、関山式土器である。2～5は胎土に繊維を含んでおり、すべてRLの縄文原体が施文されている。この原体は0段多条の可能性もある。黒浜式土器であろう。6～11は時期不明であるが、おそらく中期前半に位置付けられるものであろう。6は棒状工具による沈線で口縁上部を区画しており、それ以下はヘラによる沈線を配している。細かい均質化した胎土を使用している。7は棒状工具による沈線や橋状把手の配置などから五領ヶ台式土器とも思われる。縄文はLRで胎土中には大粒の石粒が混っている。10は全面LR縄文の施文があり口縁上端に縄の押圧が一条めぐっている。12～14は加曽利E式で、13・14は4式であろう。12・14はともにLR縄文で、13は条線文が施されている。

土 器 2・3 (第11・12図、図版13～15)

阿玉台式土器の把手と口縁部の集成である。第11図1・2はペン先状の結節沈線を一本で文様構成をしており、6はこれが2本になっている。4は沈線のみである。1・4の扇状把手は上向きになり、いずれも縁部に小ヒダが付されている。第12図2は第11図7～9(0地点出土)と同様に丁寧な器面調整のされた把手である。円筒形を呈し、下部で屈曲している。屈曲方向の上面に剝離痕があり、本体に2ヶ所の接点で結合された把手であろう。全面には精緻な角押文が配されている。1・2～12は把手、口縁部突帯の集成で、文様構成は判然としない。1・5・10・12は口縁部から上方へ向いた把手で、その縁部は竹管の交互刺突でヒダを付けている。

土 器 4 (第13図、図版16)

1～16は、ペン先状の結節沈線2本を主文様とする一群である。ペン先文の表出は竹管の先端を尖らせたもので、やや細長い削り方をしているため不規則な形になっている。器形はすべて深鉢形であるが、口縁部の形態は不明なものが多い。1・2・4・6～10は口縁部に楕円枠の区画内にペン先状文が2本施されており、区画間の一部に3個あるいは単独の突起が付けられている。3・5は扇状の口縁をもっている。胎土は混在物が少ないが、4・8には若干の小石粒や金雲母が含まれる。11～15は胴部の小破片であり、ペン先状の結節沈線が付けられる。16は胴部に幅の狭い枠状区画文がみられ、これに規制された無文帯や粘土ヒダの連続施文が多様化されている。ペン先状文は横位の文様構成に促されて付けられ、一部で無文部にアーチ状のモチーフがみられる。17～19は半截竹管による沈線を基調にしている。17は口縁部にヘラによる刻み目があり、18



第10図 土 器 1 (1 : 3)

は半截竹管による連続爪形文が施されている。いずれも胎土には混在物が少ない。

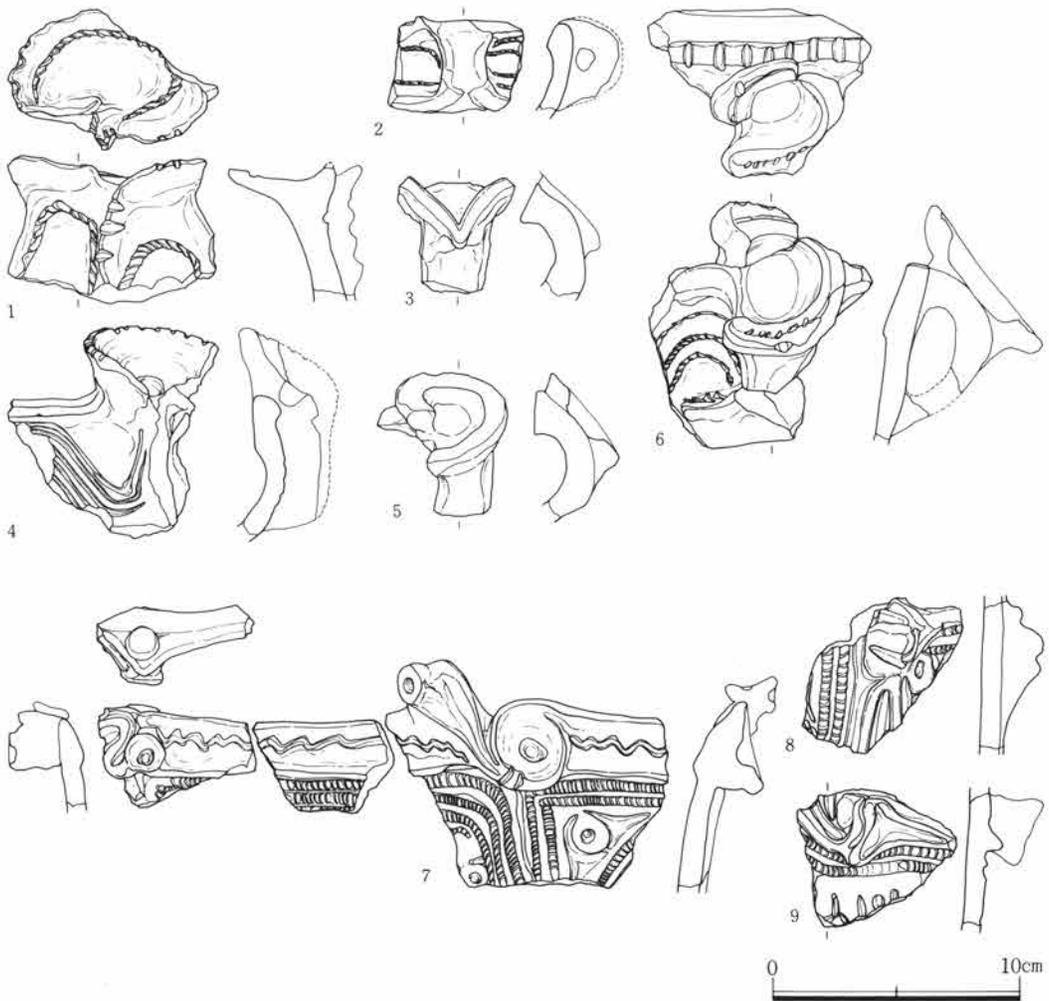
土 器 5 (第14図、図版17)

1~12は角押文を表出させる結節沈線1本を基調としたものである。1・3は浅鉢形土器で、ともに隆帯による枠状区画部に1本の角押文がみられる。枠内は1が波状で、3が斜行する角押文が充填されている。楕円の枠状区画は、接している場合は隆帯が肥大し(1)、離れているものにはボタン状の粘土の貼付や(7)、小さな区画を加えているもの(10)もある。また、6・9・11のようなアーチ状の角押沈線も目立っている。5は裏面に2本の角押沈線がめぐっている。胎土の混在物はあまり目立たないが、5・7・8・12は白色の小石粒が若干みられ、5・12は雲母の混入も見られる。

13~20は2本の角押沈線を基調としたものであり、13・14は大型の扇状把手につながる器形である。15・16は枠状区画内に2本の角押文が付され、20は上半部に一周するものである。いずれも、ペン先状の結節や1本角押文などとそのモチーフは同様のものである。

土 器 6 (第15図、図版18)

1~11は、角押状の結節沈線を基調としたものである。1は、枠状区画内をめぐる1本の角押沈線と横位の鋸歯状角押文を配したもので、枠状区画間に上方に突出したアーチ状の隆帯が配されている。隆帯上には竹管による交互刺突が加えられている。口縁部の文様帯以下は押圧による粘土ヒダが連続して付けられる。2は扇状の口縁をもち、枠状区画内は竹管による角押文が充填

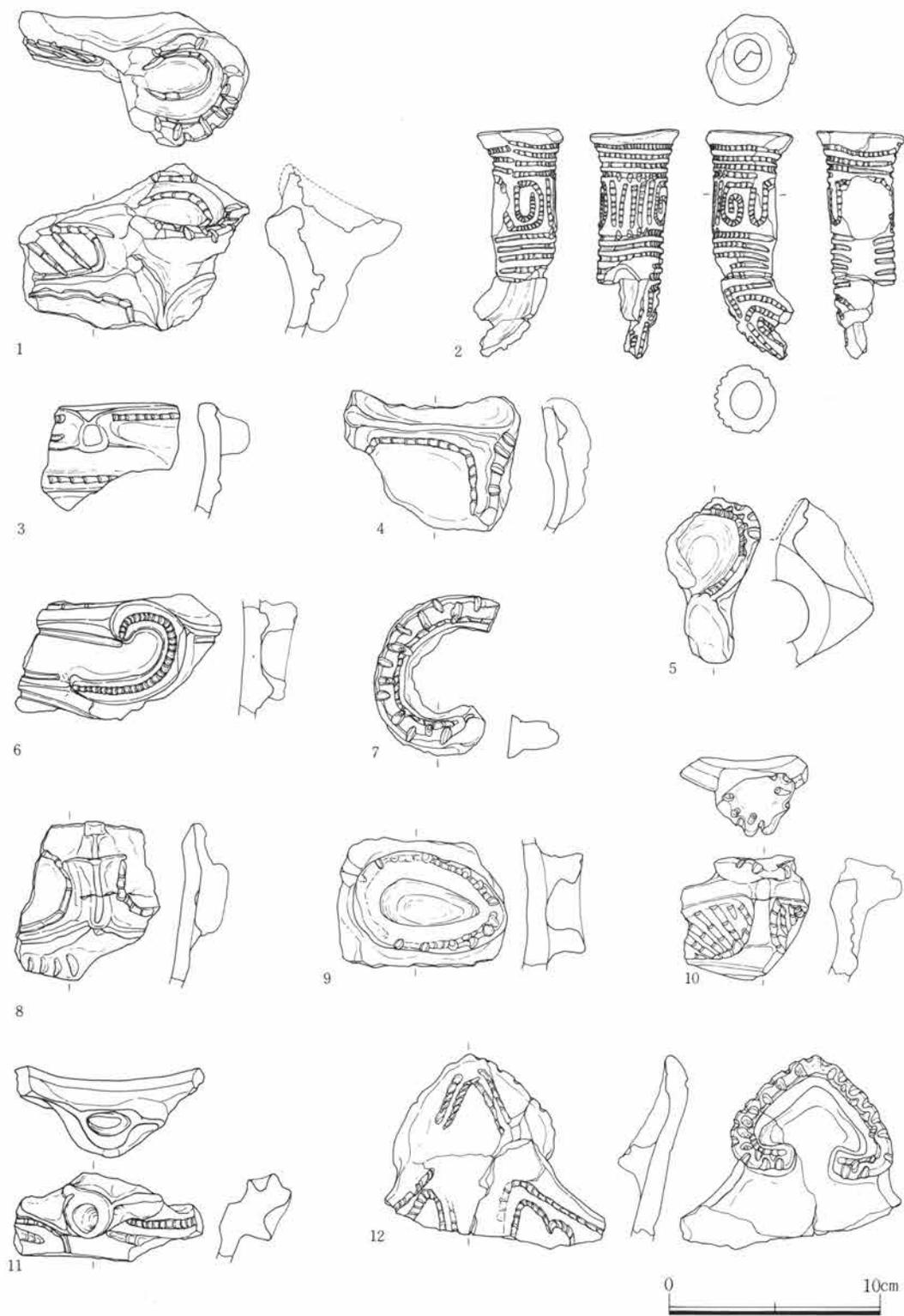


第11図 土器 2 (1:3)

されている。3は角押沈線と押圧の加わる隆帯が重層的にモチーフされており、最下段の角押沈線は一部にアーチ状のモチーフもみられる。4～11は横位の角押1本による区画内を2本の鋸歯状角押文を配するもので、枠状区画もこの角押文でモチーフされたものもある(4)。7を除いて他はすべて平縁であろう。12・13は口縁部文様が綾杉や斜行の沈線で施されるものである。14～19は胴部破片であり、17は胴部が張る器形を呈するものであろう。18・19は同一個体である。

土器 7 (第16図、図版19)

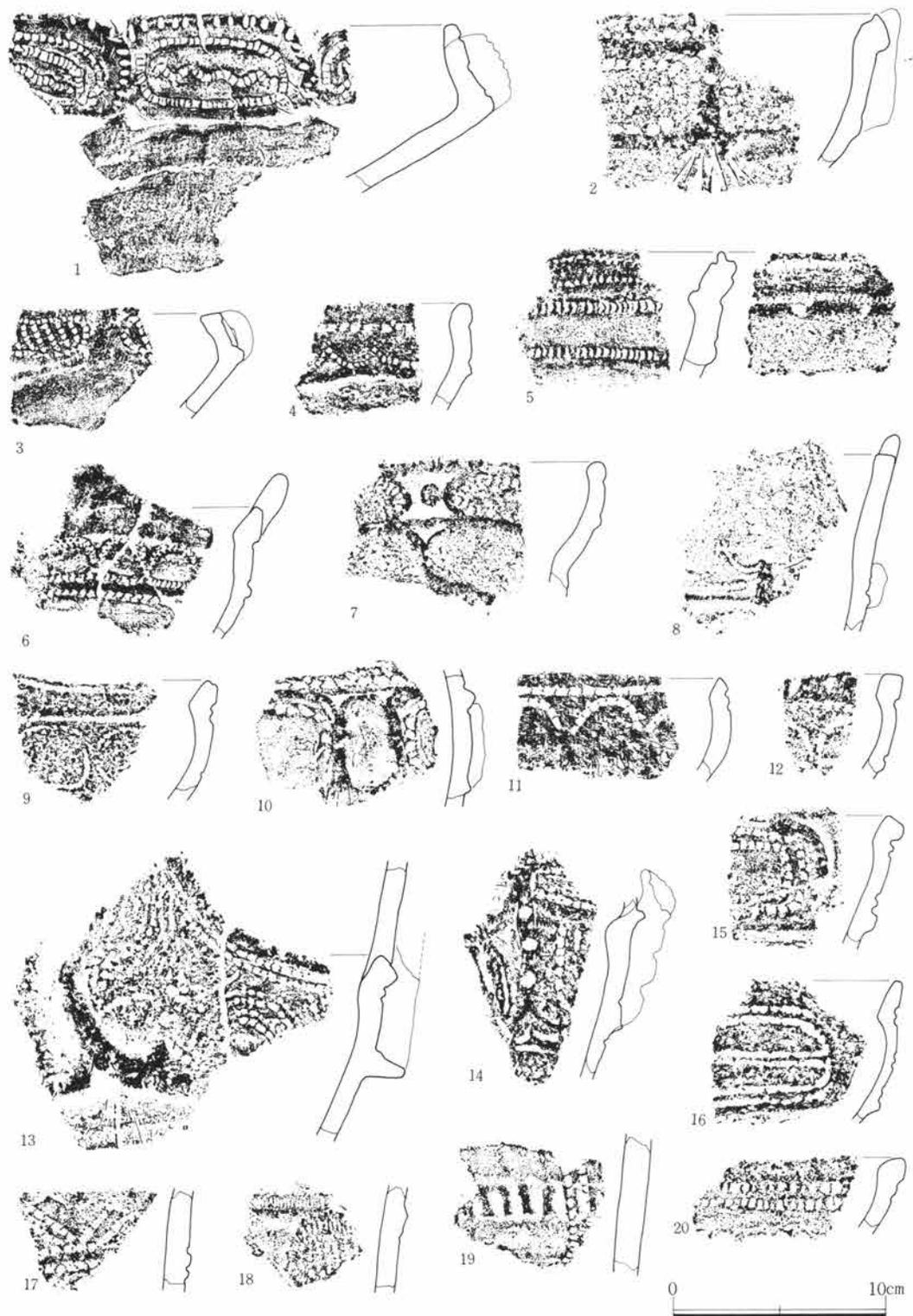
1～8・11・14・15は、鋭いペン先文の結節沈線を基調にしたものの一群である。文様構成にはバラエティーがある。9は口縁を「く」の字に外反させ、胴部が丸味を帯びる器形を呈する。口唇部内側には交互刺突による鋸歯状文が付いている。胴部文様の構成は不明であるが、ペン先状の結節沈線でモチーフを構成している。10～13はペン先状の結節沈線のアーチがある。13はその一部が渦巻状になる。



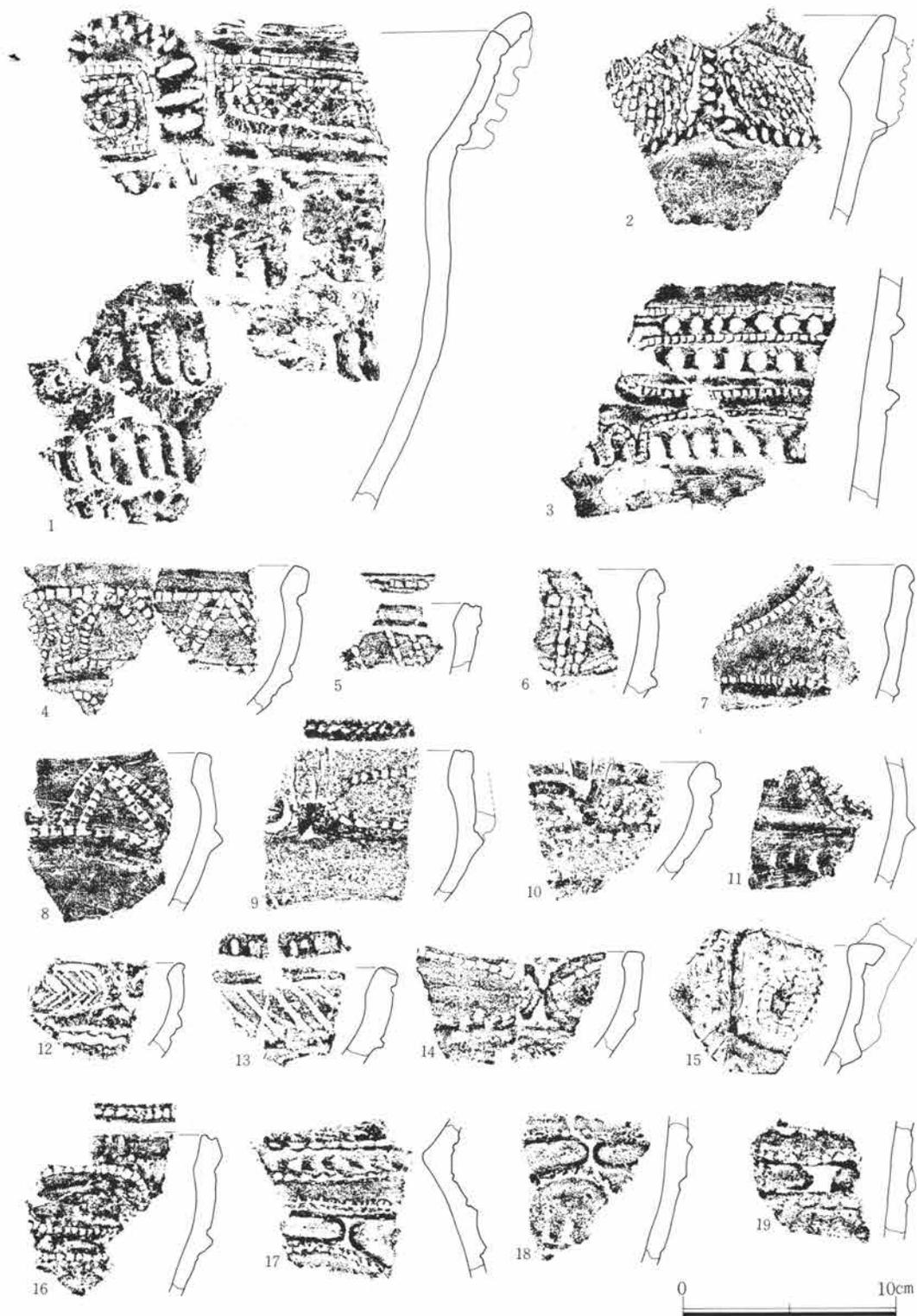
第12図 土器3 (1:3)



第13図 土 器 4 (1 : 3)



第14図 土 器 5 (1 : 3)



第15図 土 器 6 (1 : 3)



第16図 土 器 7 (1 : 3)

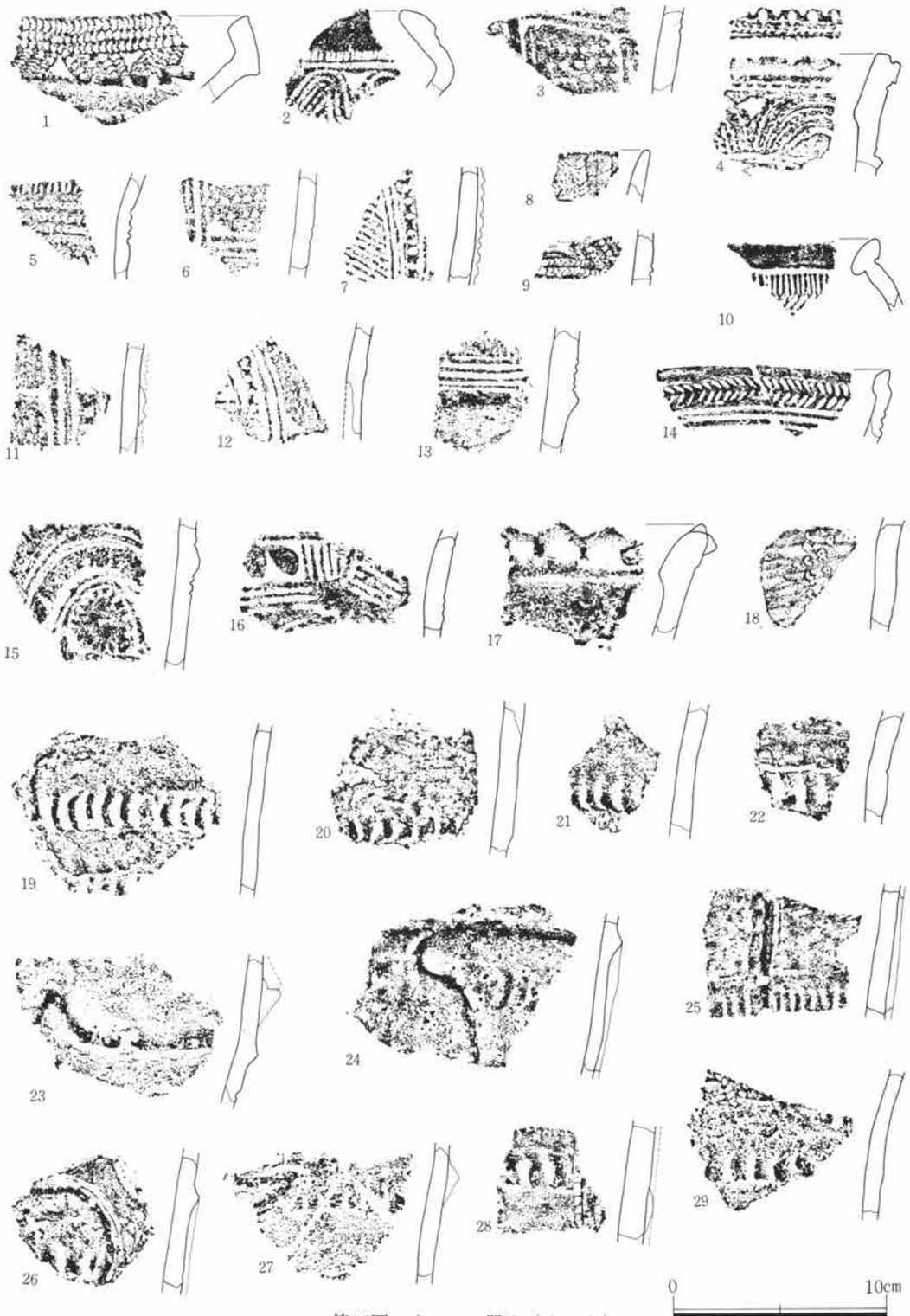
土 器 8 (第17図、図版20)

1～6・11・12は、4を除いて角押的な結節沈線や竹管の刺突を多用した文様構成をとっている。また、三角印刻をもつものに、1・2・4・6がある。4は阿玉台式的な文様構成をもつが、ほかのものは勝坂の第1段階（猪沢・新道式）的な様相を呈している。10はヘラによる刻み、11はヘラと竹管による文様構成をとる。どちらも型式は不明。15・16は半截竹管による文様で、16には三角の印刻がある。19～29は阿玉台式土器深鉢の胴部である。

土 器 9 (第18図、図版21)

0地点出土の土器である。第11図7～9は無文の口縁部に波状沈線がまわり、胴部には二本か二本以上の角押沈線が配され、玉だき三叉文もみられる。第18図の阿玉台式土器のうち、10は角押結節沈線を円形にモチーフしており、14は浅い沈線で縦割りの文様構成をとる点で注目される。また、15～17は竹管の斜め押し文様と三角印刻や玉だき三叉文などのみられるもので第17図6・11・12などと共通の文様構成をみることができる。なお、胴部にみられるヒダ状文は20・21・23ではヘラによる刻みで表現されている。

(能登 健)



第17図 土 器 8 (1 : 3)



第18図 土 器 9 (1 : 3)

縄文遺物散布地点出土石器

石器1～11は打製石斧で、剥離については共通性があり、表裏面は横方向からやや荒い剥離が加えられ、刃部は縦方向から剥離され基部とともに細かい調整が加えられている。側面は基部から刃部まで細かく潰されている。石器12は剥片石器、石器13は石核石器と剥片、石器14は礫器、石器15は石匙、石器16は石鏃、石器17は磨製石器、石器18は石皿と凹石である。

石器 1 (第19図、図版22-1)

長方形を呈し典型的な短冊形をした打製石斧である。基部・刃部ともに定角的に直線的で、厚みもなく平坦で反りはない。刃部には使用によったと思われる細かい割れが見られる。4は基部に近い部分で折れ、6は刃部が折れている。7は2ヶ所に折れが入り、8・9は中間部近くで折れている。なお、3の折れは新しいものである。

石器 2 (第20図、図版22-2)

石器1と同様の形態で刃部にやや丸みがあり、刃部両面に著しい摩耗痕がある。摩耗痕は表面よりも裏面に広がりを持ち、斜め方向の擦痕が見られる。1は刃部がやや開いており、2・3は表面に自然面を残し中間部で折れている。4・5は刃部のみの破片である。

石器 3 (第21図、図版23-1)

石器1と同様の形態であるが(10は撥形を呈しており、やや反っている)、基部と刃部に丸みを持っている。刃部には石器1と同様に摩耗痕は見られず、使用痕と思われる細かい割れが見られる。1・2・4・7は表面に自然面を残している。6～8・10は基部に近い部分で折れており、9は2ヶ所で折れている。

石器 4 (第22図1・2・4～7、図版23-2)

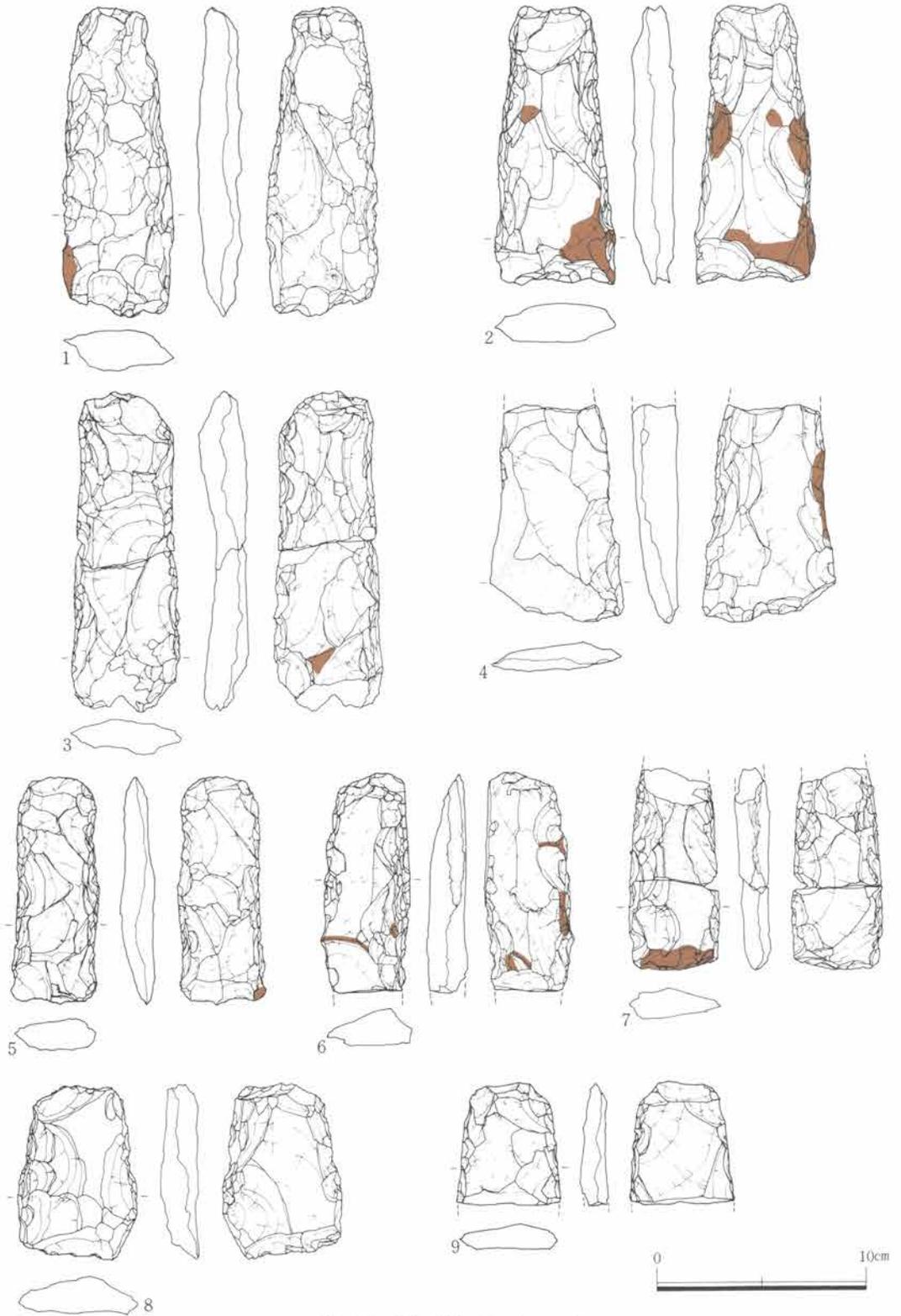
基部に丸みがあり、側面がやや膨らんでおり、刃部が斜めに付いている。1・4は表面に自然面を残し、特に1の表面はほとんど自然面からなり、丸棒状を呈し厚みがある。5の刃部には摩耗痕があり、表面よりも裏面に広がりを持ち、縦方向の擦痕が見られる。他の石器の刃部は使用による細かい割れが見られるだけである。4・5は基部近くで折れており、6・7は中間部で折れている。

石器 5 (第22図3・8～10、図版23-2)

基部・刃部に丸みを持ち表面に自然面を残した小形の打製石斧である。8・9の刃部には使用による細かい割れが入っており、10の刃部にはやや斜めの擦痕のある摩耗痕があり、裏面の方が広く擦れている。

石器 6 (第23図、図版24-1)

刃部は丸みを持ち、基部が尖がっているやや撥形をした打製石斧である。1は上半部がやや抉れており、刃部表面に自然面を残している。2・5は薄くやや柳葉形を呈している。3の表面は稜線が膨らみを持っている。4の片側面は荒い剥離が残り厚みがあり、潰しが丹念に行なわれていない。刃部には若干使用痕が見られる。



第19図 石器 1 (1:3)

石器 7 (第24図、図版24-2)

短冊形をした打製石斧の刃部が折れたもので、基部に丸みを持っている。折れの断面は2は外部へ膨らんでいるが、他は内部へ折り込んだような状態で内湾している。1・2は折れが2段になっており、3～9は1面だけである。

石器 8 (第25図1～3、図版25-1)

形状が三角形に近い状態で基部が極端に尖っており、表面の稜線が「く」の字状を呈し、刃部の角度が浅くなっている。2の刃部は使用痕の割れにより、やや鋸歯状を呈している。3の刃部も使用による割れが著しい。

石器 9 (第25図4・5、図版25-1)

刃部が大きく広く撥形をした打製石斧である。4は表裏面に横方向からの大きな剝離面があり刃部に自然面を残している。5は基部を若干欠損している。4・5ともに刃部に使用による細かい割れがある。

石器 10 (第25図6・7、図版25-1)

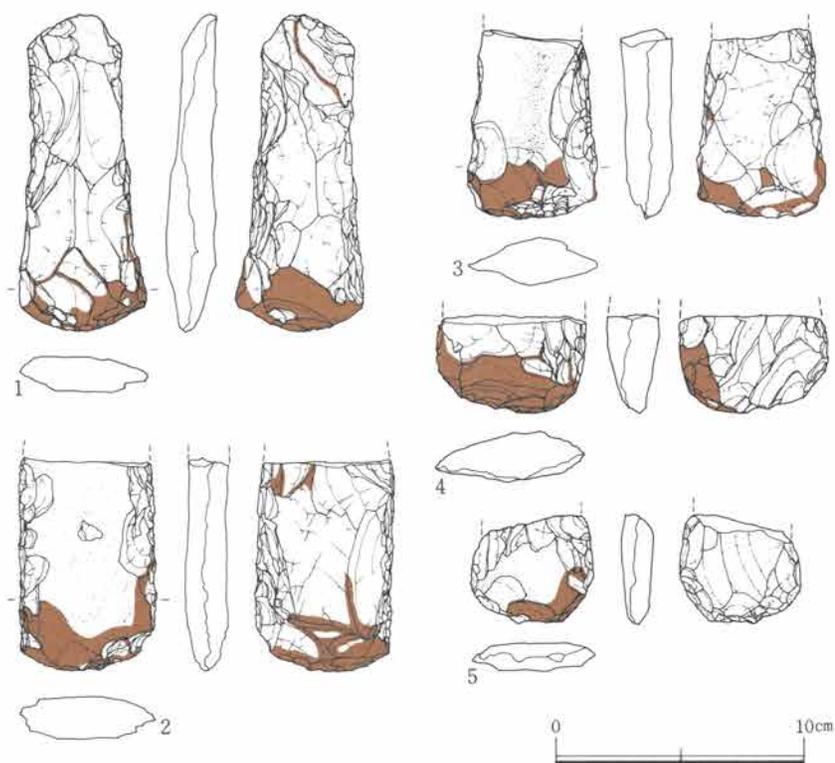
石器9と同様に基部から刃部に向かって開きがあり、石器9よりも細身である。6は刃部が斜めに付いている。7は表面に大きく自然面を残し、外面へ大きく膨らんでいる。6・7とも刃部に

使用による細かい割れが入っている。

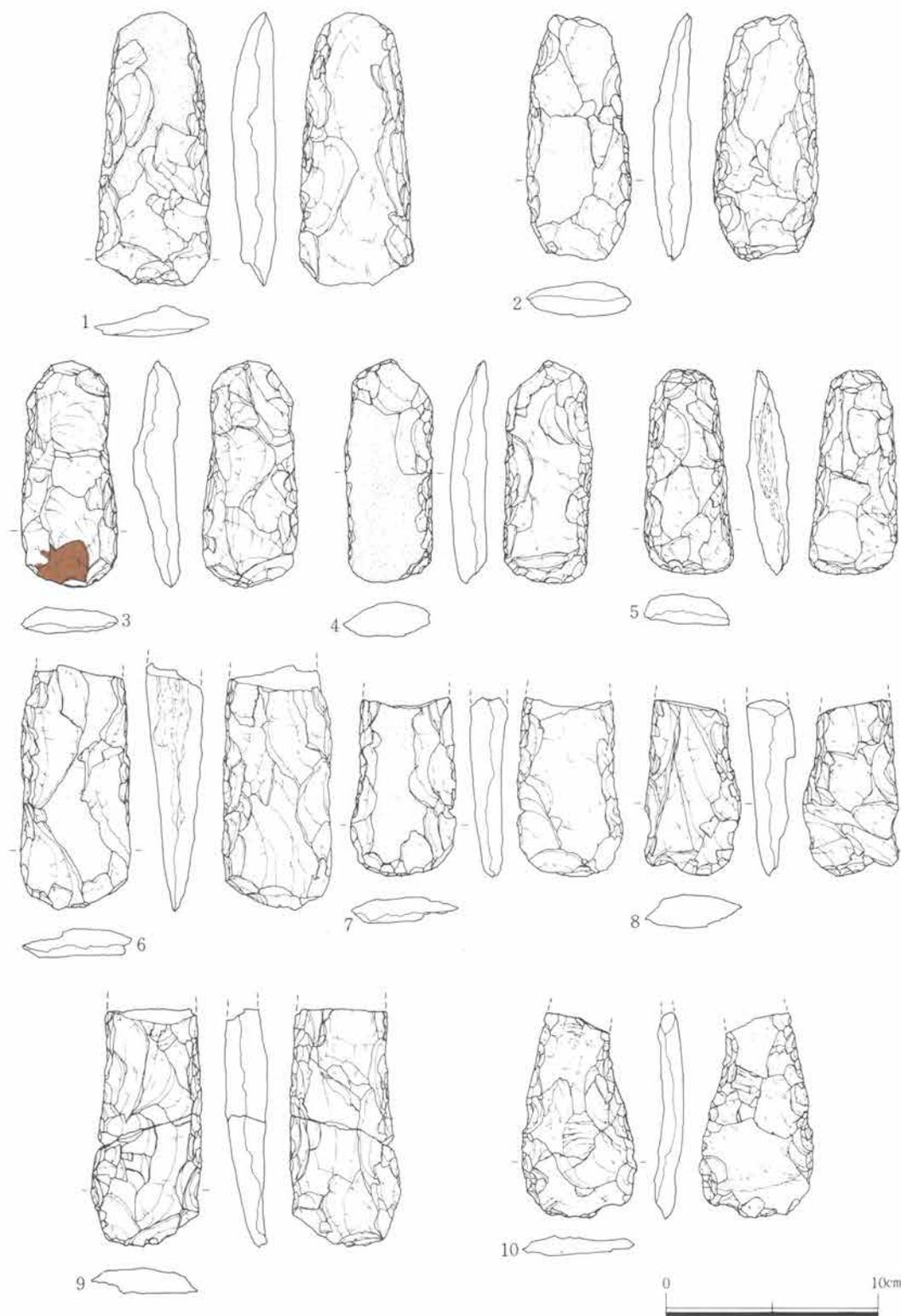
石器 11

(第26図、図版25-2)

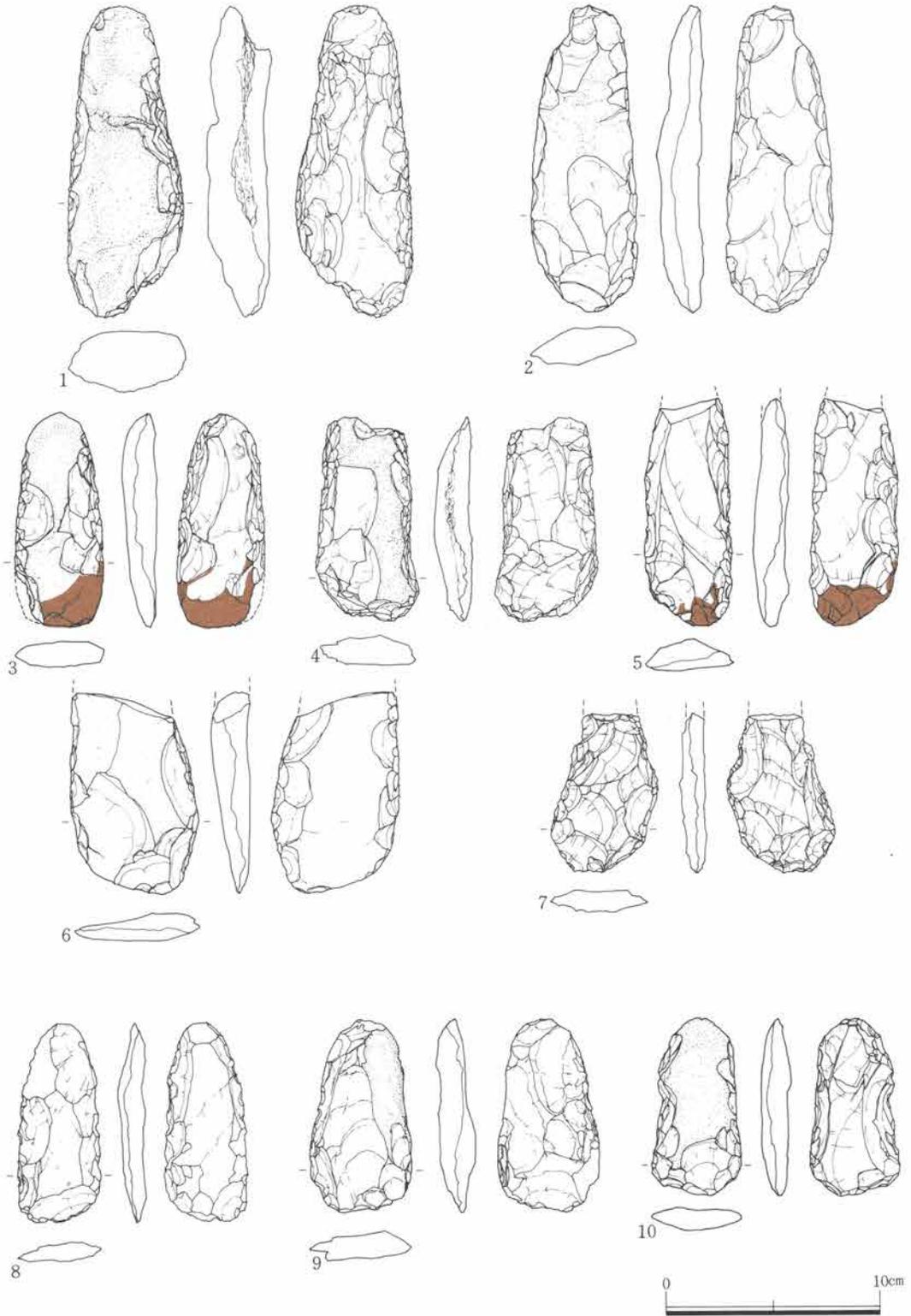
短冊形打製石斧の断片と思われるものであり基部・刃部ともに欠損しておりその割れ方は一様でなく複雑なものが多い。



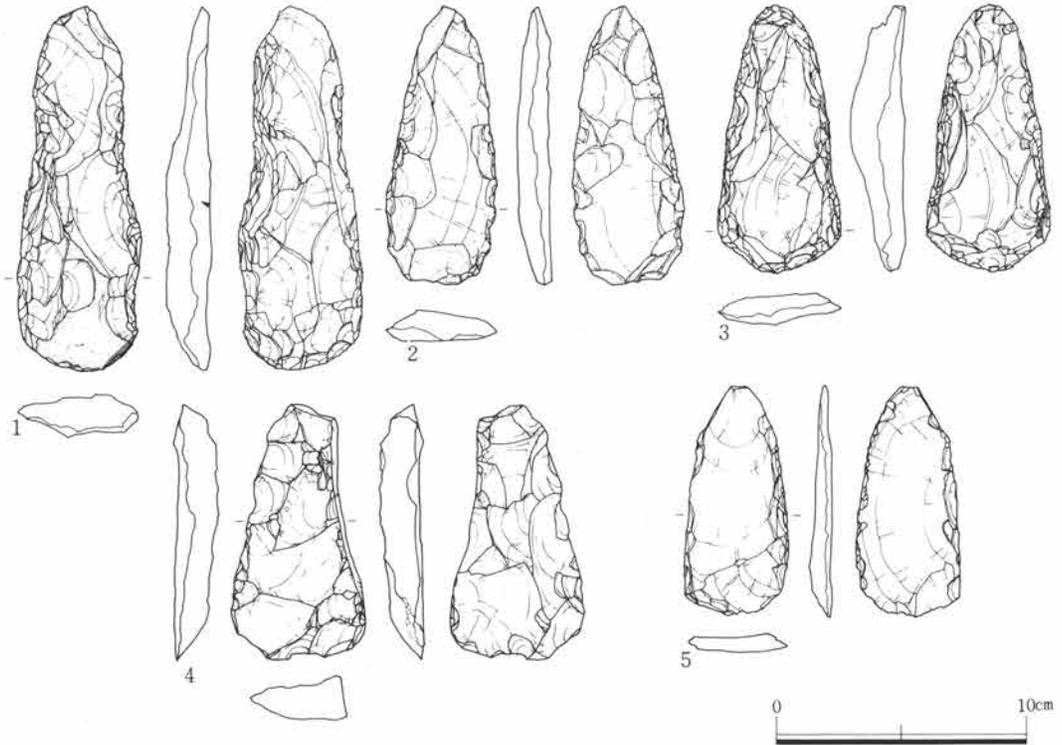
第20図 石器 2 (1:3)



第21図 石器 3 (1:3)



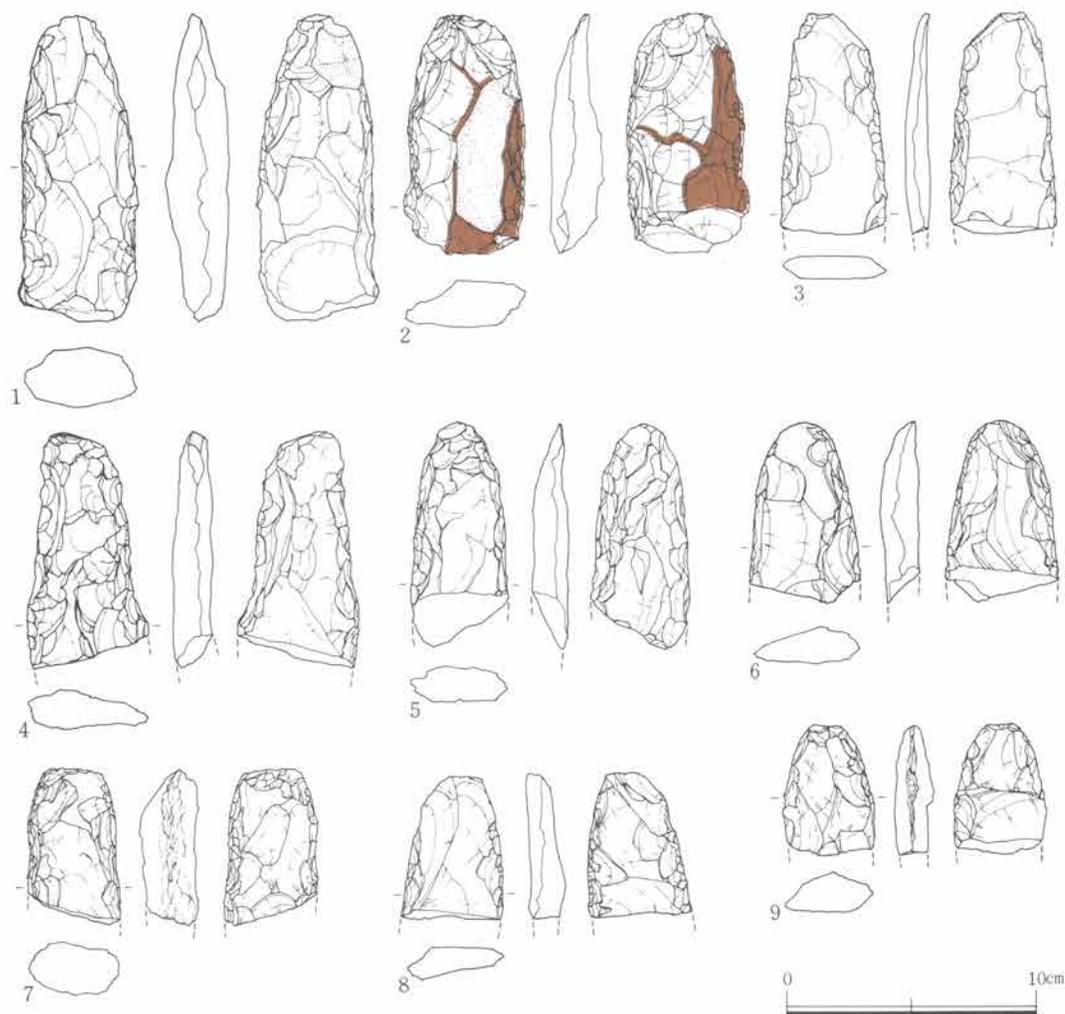
第22図 石器4〔1・2・4～7〕、石器5〔3・8～10〕（1：3）



第23器 石器 6 (1:3)

石器 12 (第27図、図版26)

1～3は定形化した剥片石器で4～8は不定形の剥片石器である。1はやや楕円形を呈し、基部は側面を潰すことによって意図的に造り出している大形の石器である。表面は横方向からの剥離により、基部をやや厚く刃部を薄く調整している。裏面は横方向からの一回の剥離面だけである。刃部は両側面から先端部にいたるまで、表裏面両方向からの細かい剥離が加えられている。2はやや円形に近く、表面には大きく自然面を残し、裏面も横方向からの大きな剥離面があり、側面全体を表裏両方向からのやや荒い剥離が加えられている。ラウンドスクレイパー状の石器である。3～5はエンドスクレイパー状の石器で、3は基部が三角形を呈し、刃部は半円形をなしており、内側へやや反っている。表裏面は横方向からの大きな剥離が数回加えられているだけで基部もあまり細かい調整は行っていない。刃部は裏面方向だけから細かい剥離が繰り返し加えられ丹念な作りをしている。刃部の角度はやや鈍角である。4・5は基部に厚みがあり、刃部に向かって薄くなっており、表裏面はやや荒い剥離を残している。4は両側面の中位から先端部にかけて細かい剥離が加えられており、先端部がやや尖がっている。5は片側面だけが裏面方向からの細かい剥離が加えられており、一方の側面は調整されていない。先端部は表面方向からのやや荒い剥離が加えられている。6の表面は不規則なやや荒い剥離面があり、裏面は縦方向の大きな剥離面が残っている。先端部は表裏両方向からのやや荒い剥離が加えられ、刃部としている。

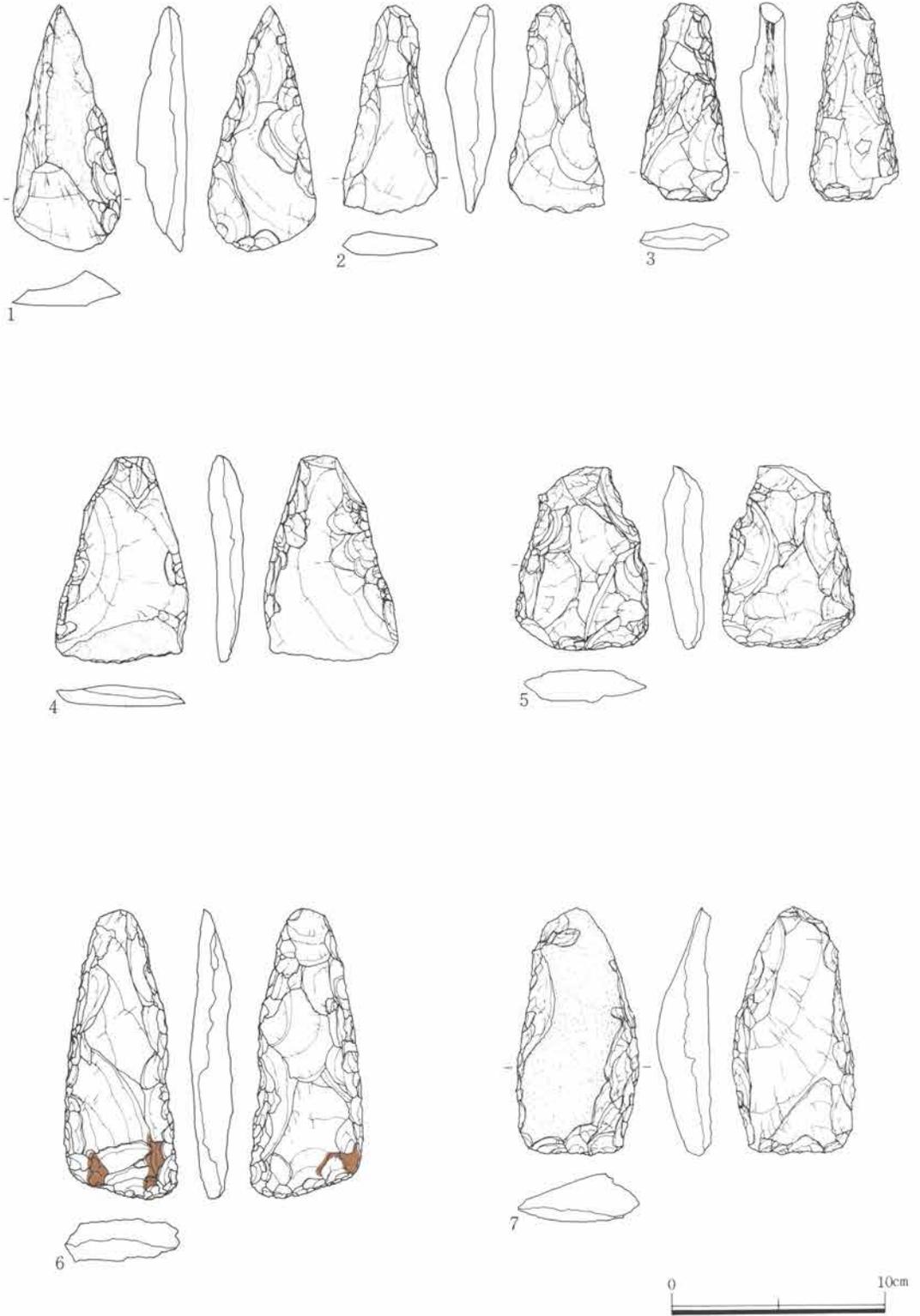


第24図 石器 7 (1:3)

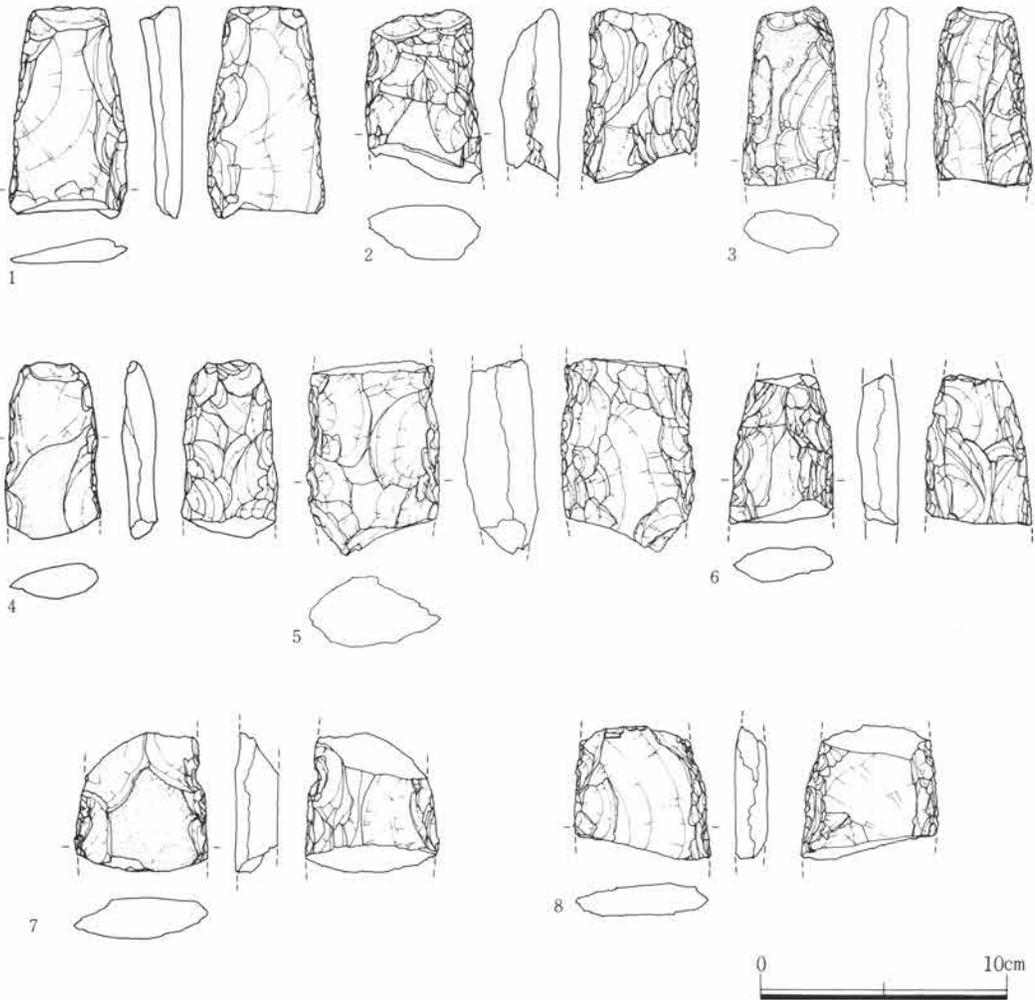
7の表面には横方向からの大きな剝離面があり、裏面は縦方向の大きな剝離面がある。片側面は厚みがあり調整されていない。刃はもう一方の側面から先端部にかけて付けられており、側面の刃部は表面方向だけからやや荒い剝離が加えられ、先端部は裏面方向だけからやや細かい剝離が加えられている。8の表面には横方向からの剝離面があり、裏面には縦方向の剝離面がある。基部には縦方向のやや荒い剝離が加えられており調整されている。先端部全面には裏面方向からのやや細かい剝離が加えられており、刃部としている。

石器 13 (第28図、図版27)

1はやや楕円形をした石核石器で、表裏面には規則性のない荒い剝離面がある。側面全体には調整は加えられていない。2は大形の縦長剝片で、表裏面には縦方向の大きな剝離面がある。3も縦長剝片で、表面には横方向の剝離面もあるが、裏面は縦方向の大きな剝離面だけである。両側面には極めて細かい剝離があり、使用された可能性もある。



第25図 石器 8 [1~3]、石器 9 [4・5]、石器10 [6・7] (1:3)



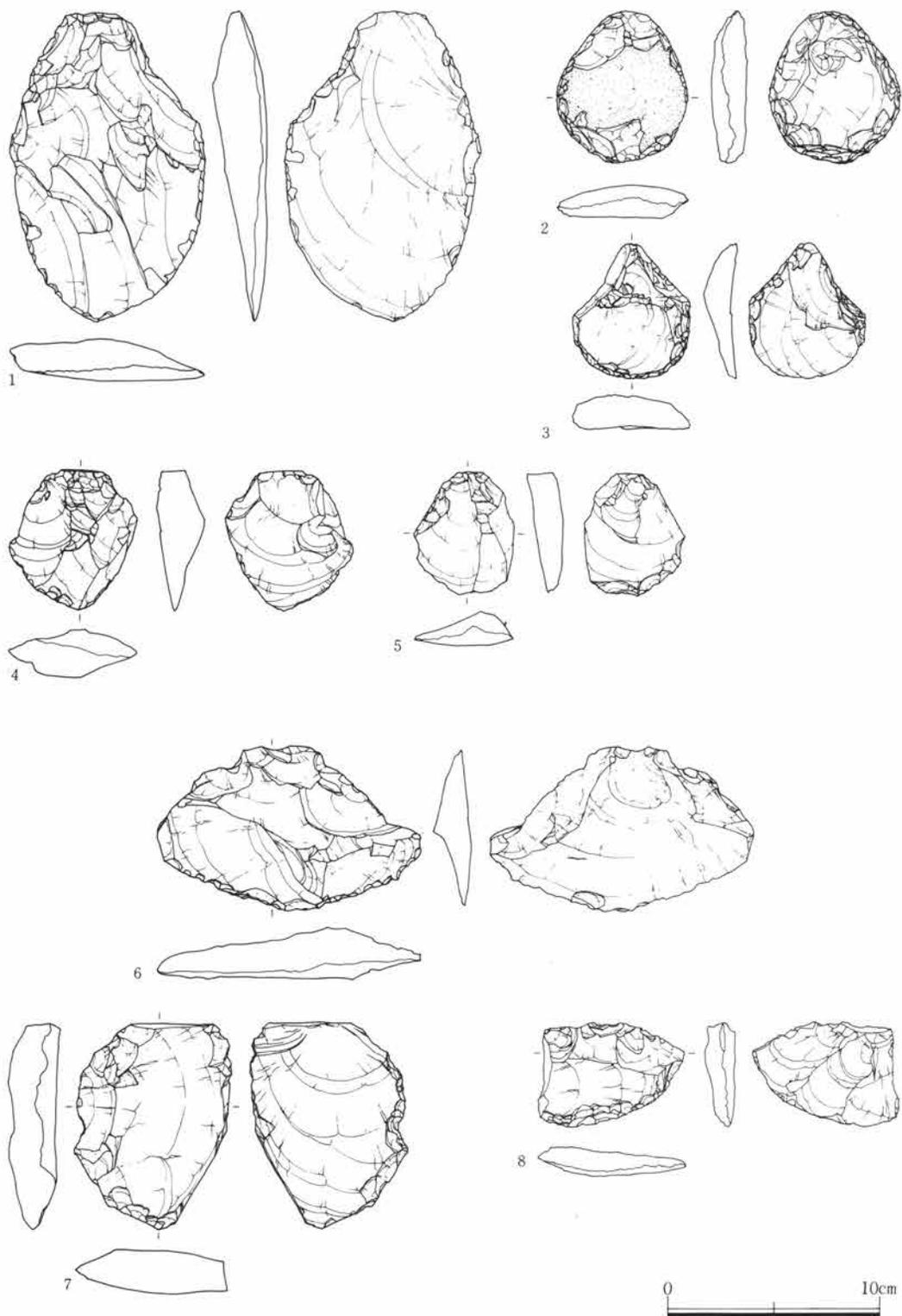
第26図 石 器11 (1:3)

石 器 14 (第29図、図版28-1)

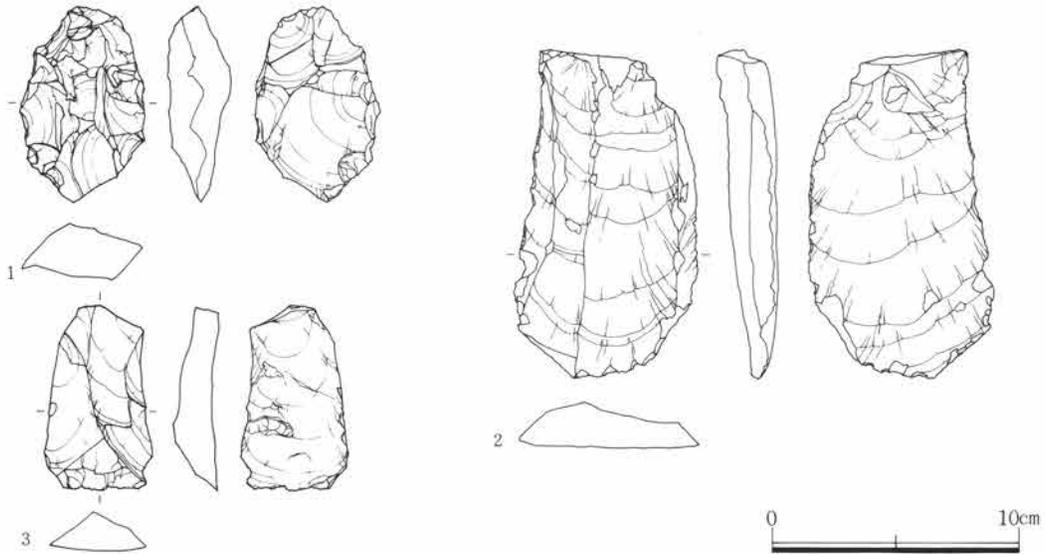
1・2はやや三角形を呈した礫器で、3～5は半円形をした石器である。1は表面と基部に大きく自然面を残し、裏面は横方向からの大きな剝離がある。基部には厚みがあり平坦で、側面は横方向からの荒い剝離が加えられ、細かく調整されていない。刃部は斜めに付いており、表裏両方向から荒い剝離が加えられ、刃部の稜線は連続した山形をなしている。2は基部と裏面に大きく自然面を残し、1と同様に平坦な基部を呈している。側面から先端部にかけて表裏両方向から荒い剝離が加えられ、やや細かい剝離を加えて刃部とし、先端部がやや尖っている。3～5は平坦な基部を持ち、表裏両面にやや荒い剝離面があり（3は表面に自然面を残す）、側面から先端部にかけて、表裏両方向よりやや細かい剝離を加えている。刃部の角度はやや鈍角である。

石 器 15 (第30図、図版28-2)

1・2は縦形の石匙で、2は先端部を欠損している。1の表面には自然面が残っており、裏面



第27図 石 器12 (1 : 3)



第28図 石 器13 (1 : 3)

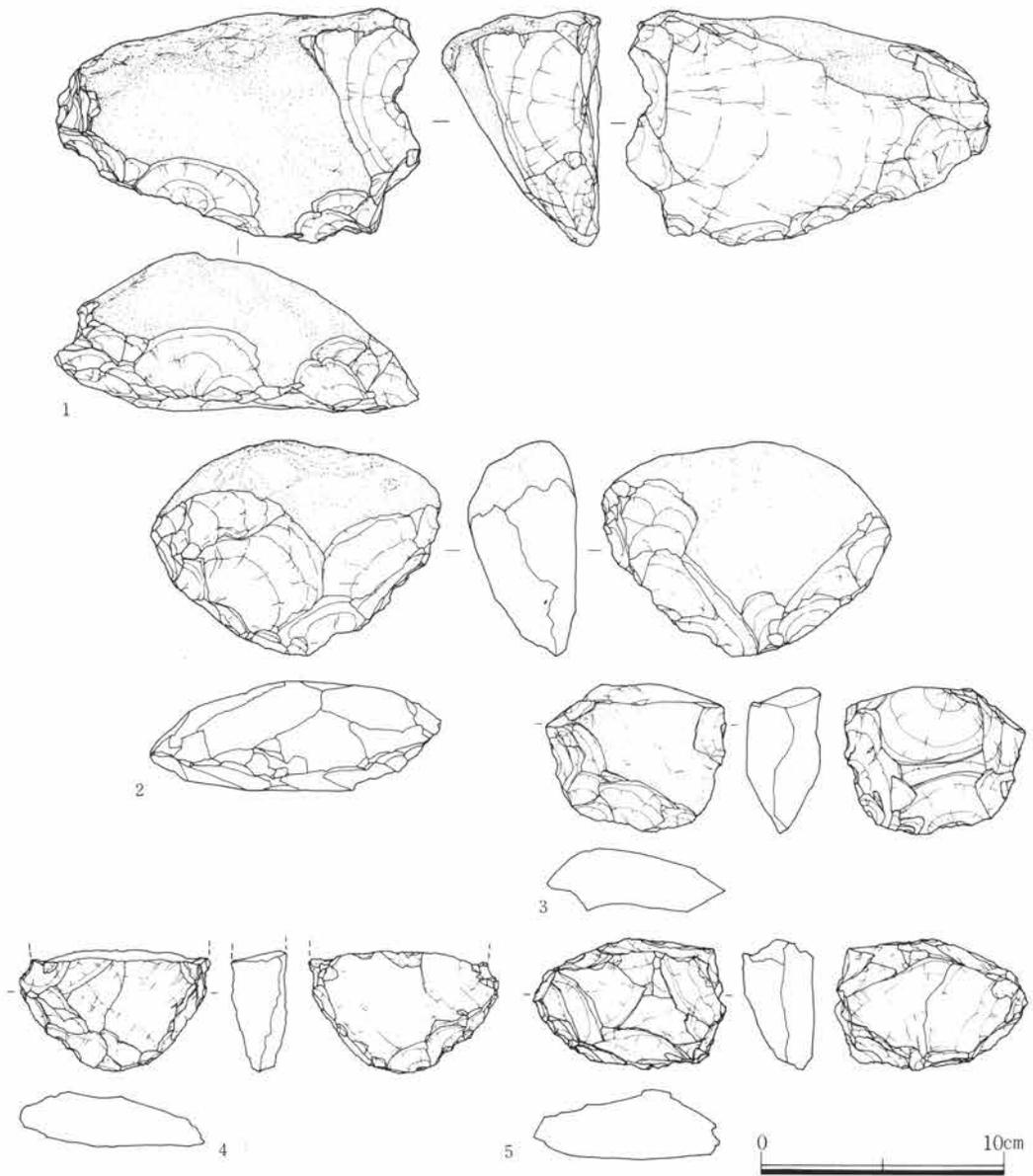
には縦方向の大きな剝離面がある。摘み部は裏面方向からの剝離で作りに出している。片側面と先端部は横方向の剝離が加えられているが、細かい調整が加えられておらず未製品の可能性がある。2は小形の石匙で、表面には縦横両方向の剝離面があるが、裏面には縦方向の剝離面だけである。摘みの部分は細かく調整され、やや斜めに付いている。片側面は表裏両方向から細かい剝離が加えられているが、もう一方の側面は裏面方向だけからの細かい剝離が加えられている。

石 器 16 (第31図、図版29-1)

1は三角鏃で、他は無茎の石鏃である。石鏃は細かく調整され、丁寧な作りをしている。1は二等辺三角形を呈し、基部がやや丸みを帯びている。2は長い二等辺三角形を呈し、基部がやや深く湾入する。片方の脚部を欠損している。3~7はハート形を呈し、3・4は側面がやや鋸歯状をしており、4は先端部を欠損している。5と6は先端部と脚部を欠損し、6は他の無茎石鏃の内湾ぎみに湾入する基部と異なり、膨みをもって湾入する基部を持っている。7はやや丸みを帯びたハート形を呈し、先端部を欠損している。

石 器 17 (第32図、図版29-2)

1は石棒と思われる破片で、断面はやや楕円形を呈しており、全面が縦方向に良く磨かれている。両端は打ち欠かれたような状態で複雑な折れ方をしており、2は定角の磨製石斧である。基部から刃部に向かってしだいに開きを持ち、断面形も基部寄りに最大の厚みがあり、刃部に向かって滑らかなカーブを描いて薄くなっていく。表裏面、側面、基部ともに縦方向に非常に良く磨かれている。刃部寄りの部分で折れており、使用による折れと思われる。石材はやや軟質のものを使用している。



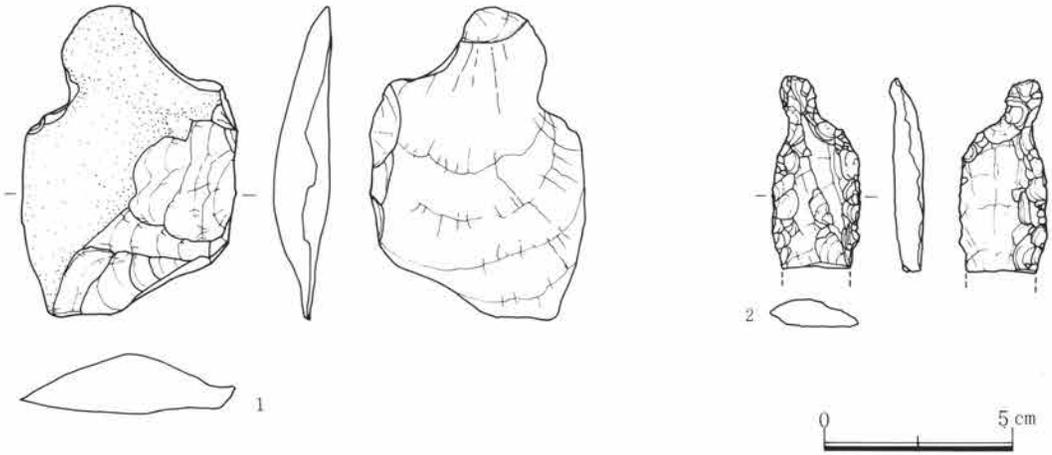
第29図 石 器14 (1 : 3)

石 器 18 (第33図)

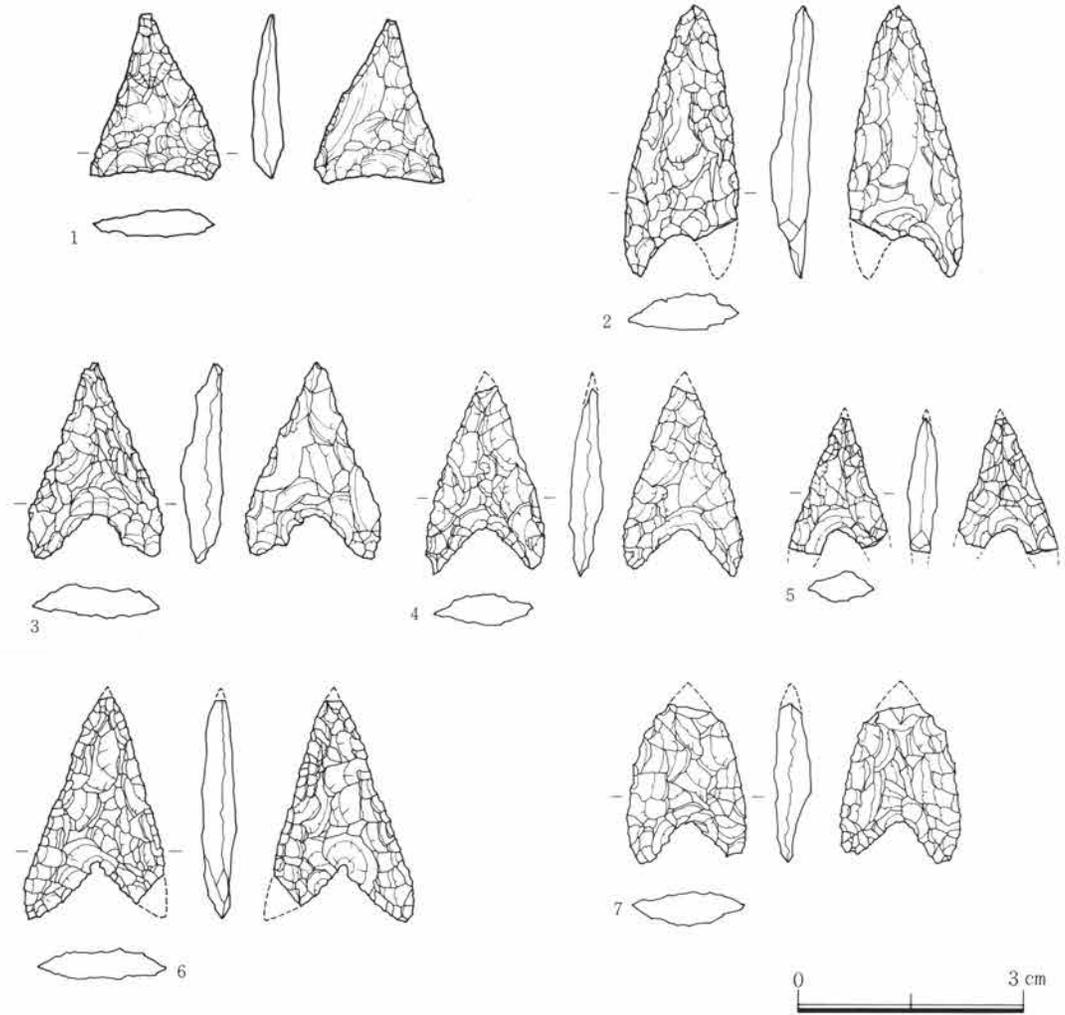
1は石皿の破片と思われるものである。表裏面とも緩やかに内湾しており、非常に良く磨れている。2は扁平な石器で形態は不明である。表裏面がやや良く磨れている。3は凹石の破片でやや扁平な楕円形をしているものと思われる。表裏面は若干磨れており、側面は自然面のままである。

遺物散布地からは他に少量の石皿・凹石が出土しているが、いずれも小破片である。

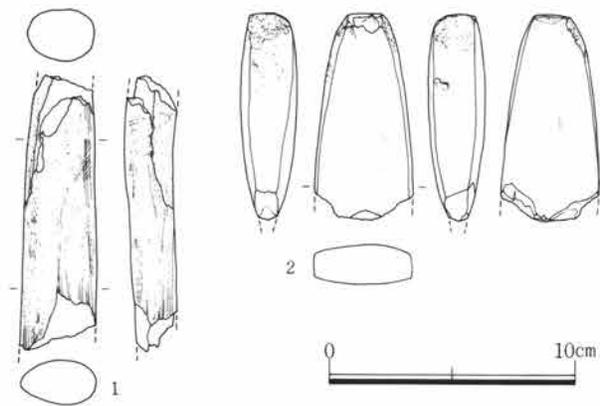
(下城 正)



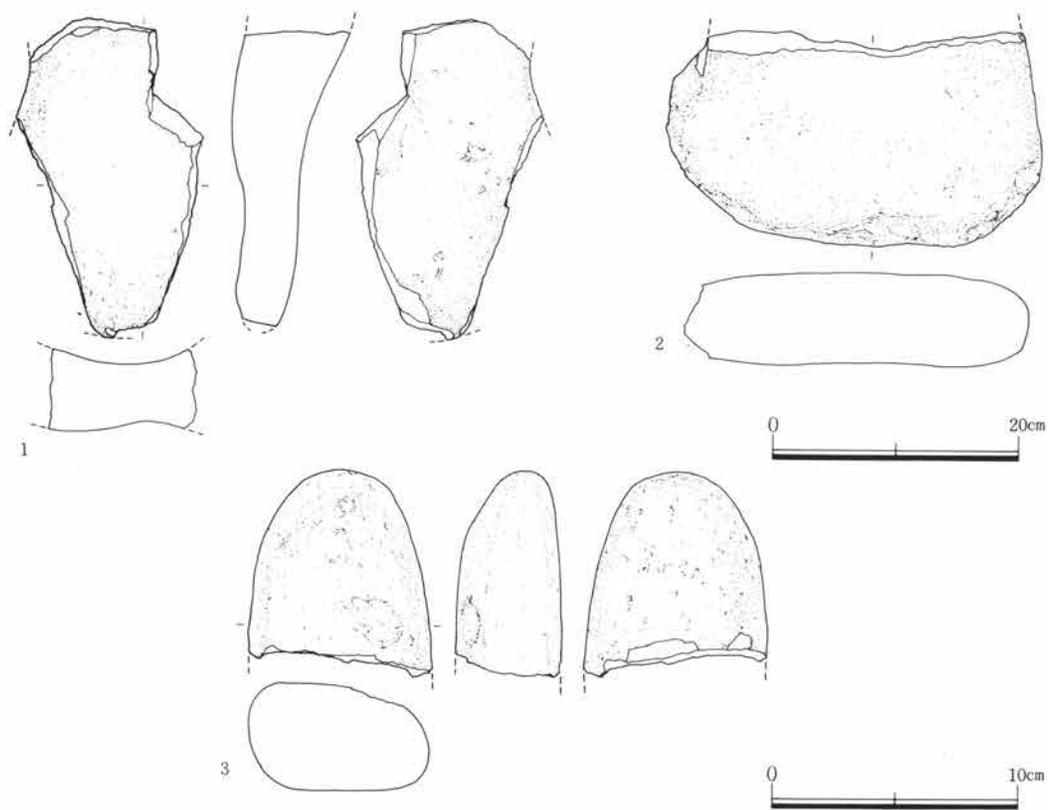
第30図 石 器15 (1 : 2)



第31図 石 器16 (1 : 1)



第32図 石 器17 (1 : 3)



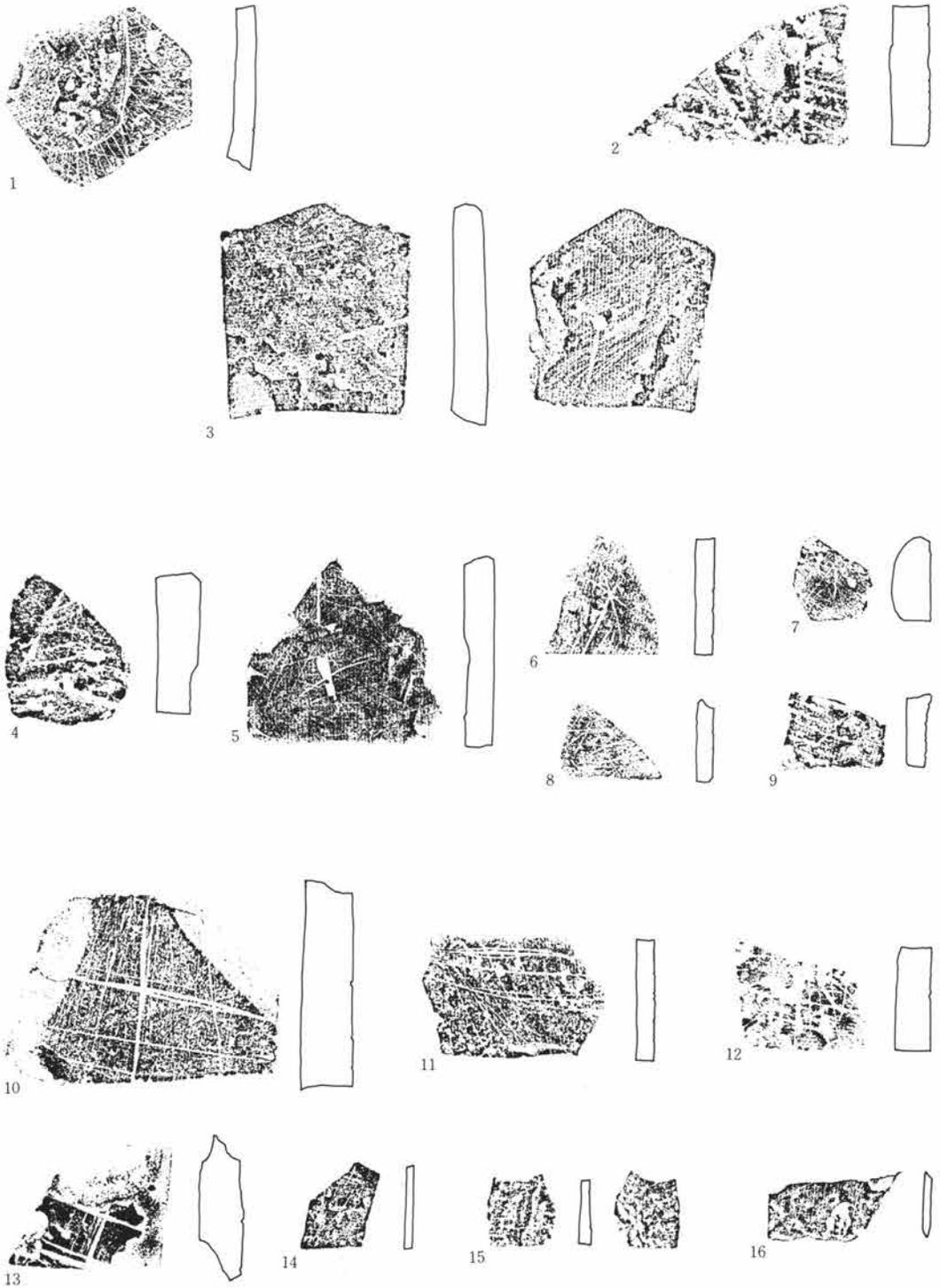
第33図 石 器18 (1・2 = 1 : 6、3 = 1 : 3)

縄文遺物散布地点出土線刻石板（第34～36図、図版30～34）

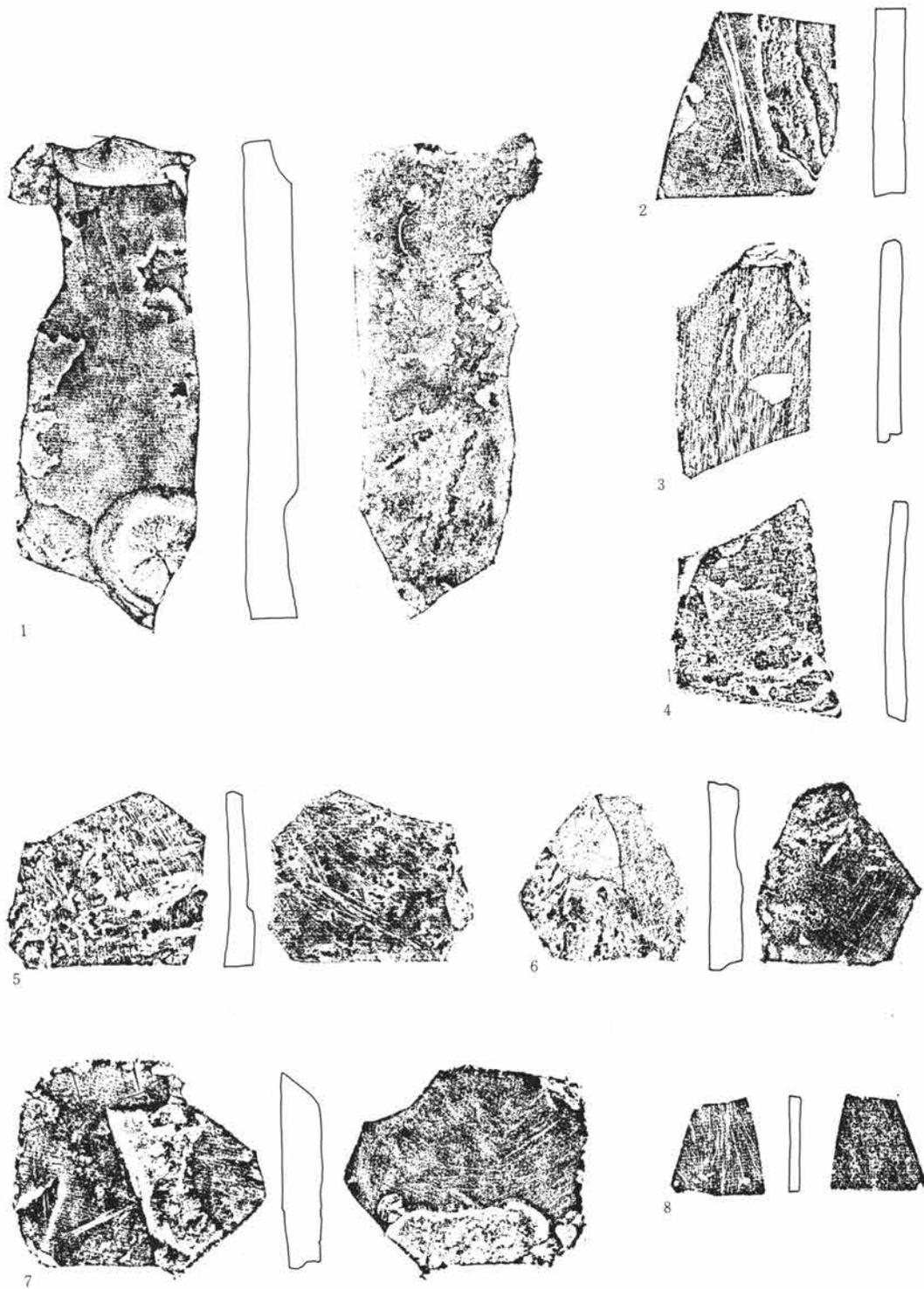
線刻石板は他の土器・石器とともに5区南半の散布地から出土し、遺物整理段階で確認したもので遺漏したものが多くあるものと思われる。線刻はほとんどが泥岩で板状に節理した小形の不定形の板石を中心に刻まれており、同様の石質で線刻のない板石も数多くある。

第34図1は中心部に「U」字状にやや太めの線刻があり、この線より外側は格子状の細い線刻が充填されている。U字状の内部は不規則な細い線刻が数条あるだけで空白となっている。2は中央部に平行に垂直方向のやや太めの線刻があり、内部は空白となっている。垂直の線刻の外側はやや斜め方向に3～7条の平行の線が刻まれている。3の表面は剝落が著しく不明な点が多いが、表面全面に碁盤目状の線刻があり、さらに縦方向と斜め方向から密に全面に線刻されている。裏面にも線刻があり、中心部に2群に分かれて多数の線刻が斜めに走っている。表裏面の線刻は極めて細い線である。4は中央を垂直方向に1条の線刻が走り、この線より右半分は格子目状の線刻が充填されている。左半分は数条の線刻が入るだけでほとんど空白となっている。5は多方向からの不規則な線刻が多数入っているが、線の組み合わせによっては三角形をなす線刻もある。6は中央部上方で3条のやや太めの線が交差し、下端部に5条の斜行する細い線刻がある。7は各辺に平行するように2～3条の線刻が周囲にあり、中央部を3条の線刻が交差する状態で垂直方向に走っている。8は多方向からのやや太めの線刻が不規則に走っている。9の左半分には5条の平行するやや太めの線刻が斜めに走り、右半分は横方向を主体とした細い線刻が多数刻まれている。10は中心部に太い線刻が十字に入り、下端部寄りにやや太めの2本の平行する線刻が走っており、全面は縦方向の細い線刻で充填されている。11は上半に乱れた3条の平行するやや太めの線刻が走り、中央部寄りに7条の斜行する細い線刻がある。12は左端部寄りの部分は斜行する細い線刻が不規則に多数あり、他の部分は碁盤目状にやや太い線刻がある。13は上半部は剝落して不明であるが、下半には直交する太めの線刻が走り、内部を縦方向の細い線刻で充填している。14は上半分に帯状に細い線刻が走り、直交する状態で左半分に乱れた細い線刻が縦方向に走っている。15の表面には中央部を垂直に1条の細い線刻が走り、右半分に5条の平行する細い線刻が斜めに走っており、左半分は空白となる。裏面は左右の関係が逆となり、左半分に3条の同様の線刻があり、右半分が空白となる。16は縦方向に平行する7条の線刻が一定間隔で走り、横方向や斜行する線刻が混じっている。

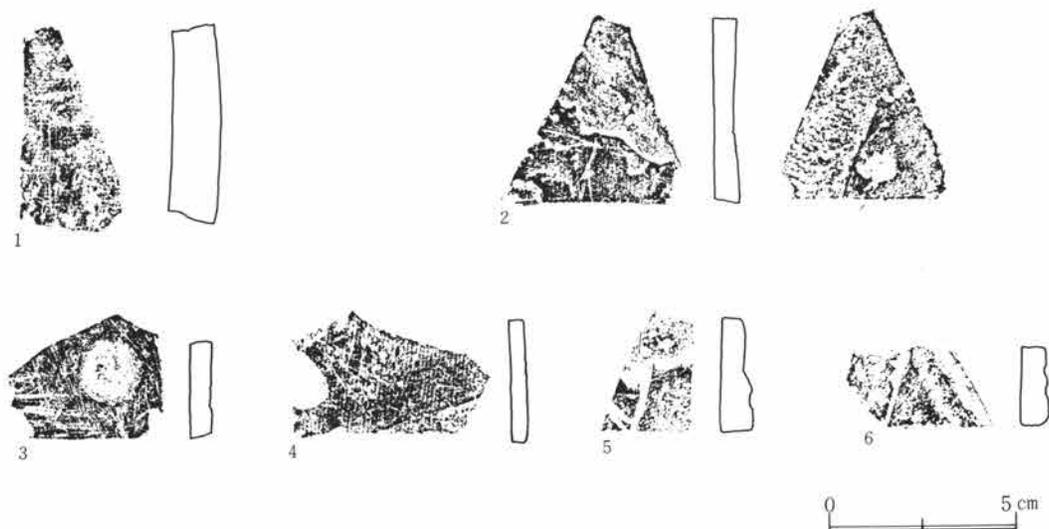
第35図1の表面には多方向からのやや乱れた線刻が多数見られる。裏面にも斜行し、平行する2条の線刻が走っており、いずれも極めて細い線である。2は中央部を細い線刻が幾条も集まり、やや溝状をなして斜めに走り、左右は乱れた細い線刻が不規則に走っている。3は上端中央部より極めて細い線刻が放射状に幾条も延びている。4は表面の剝落が激しく線刻が消えた部分が多



第34圖 線刻石板1 (1:2)



第35図 線刻石板2 (1 : 2)



第36図 石刻石板3 (1:2)

いが、縦方向の細い線刻が約4条見える。5の表面には右上方の窪んだ部分を中心に斜行する細い線刻が全面に充填され、異方向の線刻も数条入っている。裏面も全面に斜行する細い線刻が走り、左上方に数条異方向の線刻が入っている。6は表面の右端寄りに縦方向の細い線刻が1群あり、中央部にはなく左端寄りにやや太めの線刻が数条斜めに走っている。裏面には右端寄りに細い線刻が縦方向に走り、左半分にはない。7の表面には左端寄りに細い線刻が数条縦方向に走り、左半の下端寄りには斜め方向にやや太い線刻が数条ある。右半分には線刻はない。裏面の右半分は右上方から、左半分は左上方から斜行する線刻があり、下端寄りには横方向の線刻があり、これらの細い線刻で全面を充填している。8の表裏面には縦走する細い線刻とやや斜行する細い線刻で全面が充填されており、左右両側面にも細い線刻が充填されている。

第36図1は下半部にやや太い線刻と細い線刻が縦方向に走っている。2の表面は上半が剥落して不明であるが、下半部には縦方向と横方向のやや乱れた線刻があり、中央部寄りで直交している。裏面は上端部寄りに極めて細く短い線刻が数条見られる。3の表面には右上方寄りに円形の自然の窪みがあるが、この部分には線刻はなく、右上端には斜行する線刻があり、下端右隅には縦方向の線刻がある。また、下端左半分は横方向の線刻で充填され、左端中央はやや斜行する線刻がある。これらの線刻はいずれも細い線である。4は中央部寄りにやや斜めに縦走する2条の線刻が間隔をおいて平行して走り、左上方より斜行する細い線刻が数条中央部を横切っている。5の上半は表面が剥落して不明であるが、左下端よりに1条の太い線刻がやや斜めに走っており、下端部で斜行する2条の太い線刻と交差している。6は中央部を太い線刻が斜めに走り、数条の極めて細い線刻が交差している。

(長谷部達雄)

3 弥生時代の遺構と遺物

4号住居址（第37図、図版9～11）

本住居址は微高地東縁部の傾斜の始まる厚い黒色土中に構築されていたため、プラン等不明な点が多いが長軸約4.80m、短軸約3.80mの長方形をなしているものと考えられ、長軸方向はN-46°-Wを示している。

覆土は第Ⅲ層とあまり変化がなく若干黒色が強く、焼土・炭化物も極少量含まれる程度であり、攪乱も激しく、壁や床面等検出は困難が伴った。

壁は各辺で部分的に立ち上がりを確認し、明瞭な部分では高さ約20cmを計る。床面は明確には確認できなかったが、遺物がほぼ同一レベルより出土しており、焼土の散布面等から床面を推定した。固く締った面がなく、軟弱な床面であったと思われる。

周溝・柱穴は確認できなかったが、北壁寄りに5ヶ所と南壁寄りの焼土散布の北に1ヶ所、浅いピットを確認した。

なお、焼土の散布は南壁寄り中央に位置し、厚さ3cmで70cm×30cmの範囲で確認し、不整の長楕円形状に散布していた。下部には掘り込み等は確認できなかった。

住居址からは後期初頭に位置付けられる壺と甕4個体と、大型の石皿と球形をした磨石や不定形をした磨石・石核・剝片等が出土した。

出土した土器の1は中央北壁寄りの位置で横に倒れた状態で出土した。土器2と4は西壁寄り中央の位置で、2は口縁部を下に逆位で出土し、4は横に倒れた状態で出土した。土器3は南壁寄り中央の位置で土器2と同様に逆位で出土した。

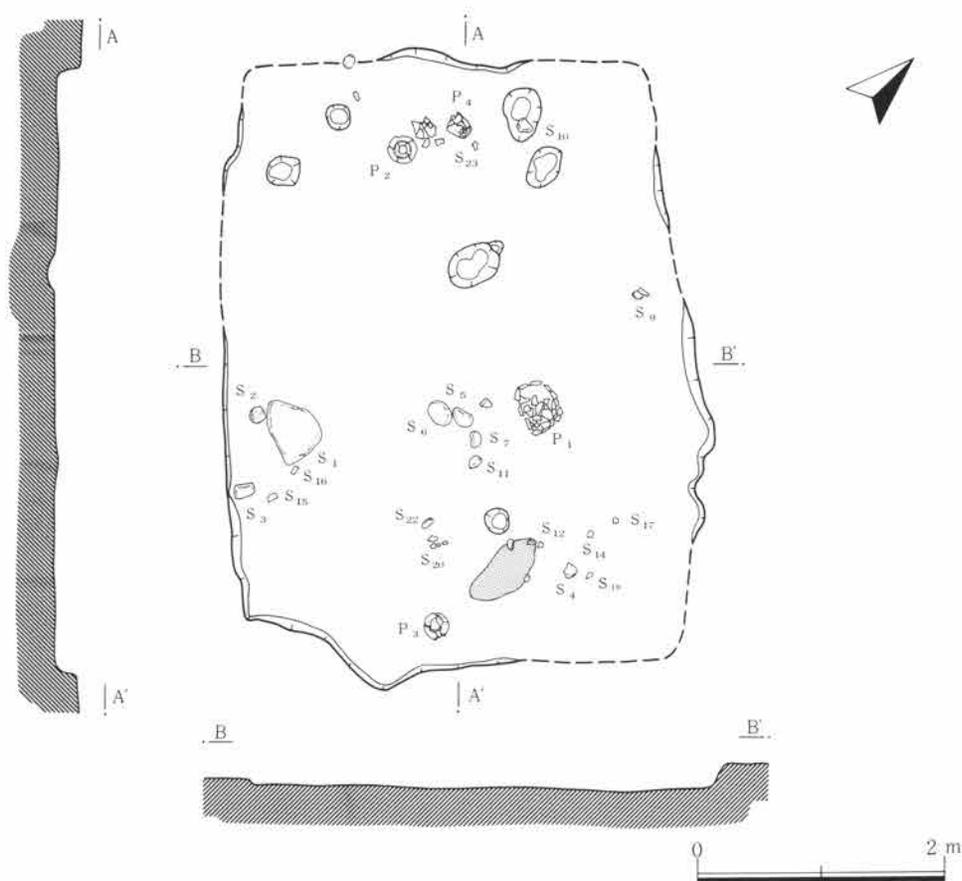
これらの土器はそれぞれ住居廃絶時には土器1と4は正位で、土器2と3は逆位の状態で床面上にあったと推定される。また、4個体の土器はすべて上位の位置にあった部分は新しい攪乱により破壊されている。

大形で偏平な石皿は南壁中央寄りの位置で床面に接し、据えられたような状態で出土した。また、その傍より球形をした磨石が出土しており、両者はセットをなしていたと考えられる。

不整の台形や楕円形をした不定形の磨石や凹石が7点出土しているが、石器3は石皿の近くより出土し、石器4は焼土の近くより、石器9は北壁中央寄りの位置で他は土器1近くの中央付近に集中して出土した。

また、石核2点と剝片10点が出土しているが、石核は北壁中央寄りのピットと不定形の磨石の集中する中央付近から出土しており、剝片は焼土の周辺と石皿の周辺に集中し、他は北壁中央寄りの土器周辺に散布していた。

これらの石器は住居址南半を中心に散布しており、土器と同様に床面に接するか、近くより出土している。また、石核と剝片は同質の石材で接合するものもある。（松本浩一）



第37図 4号住居址 (1:60)

4号住居址出土土器 (第38図、図版35・36)

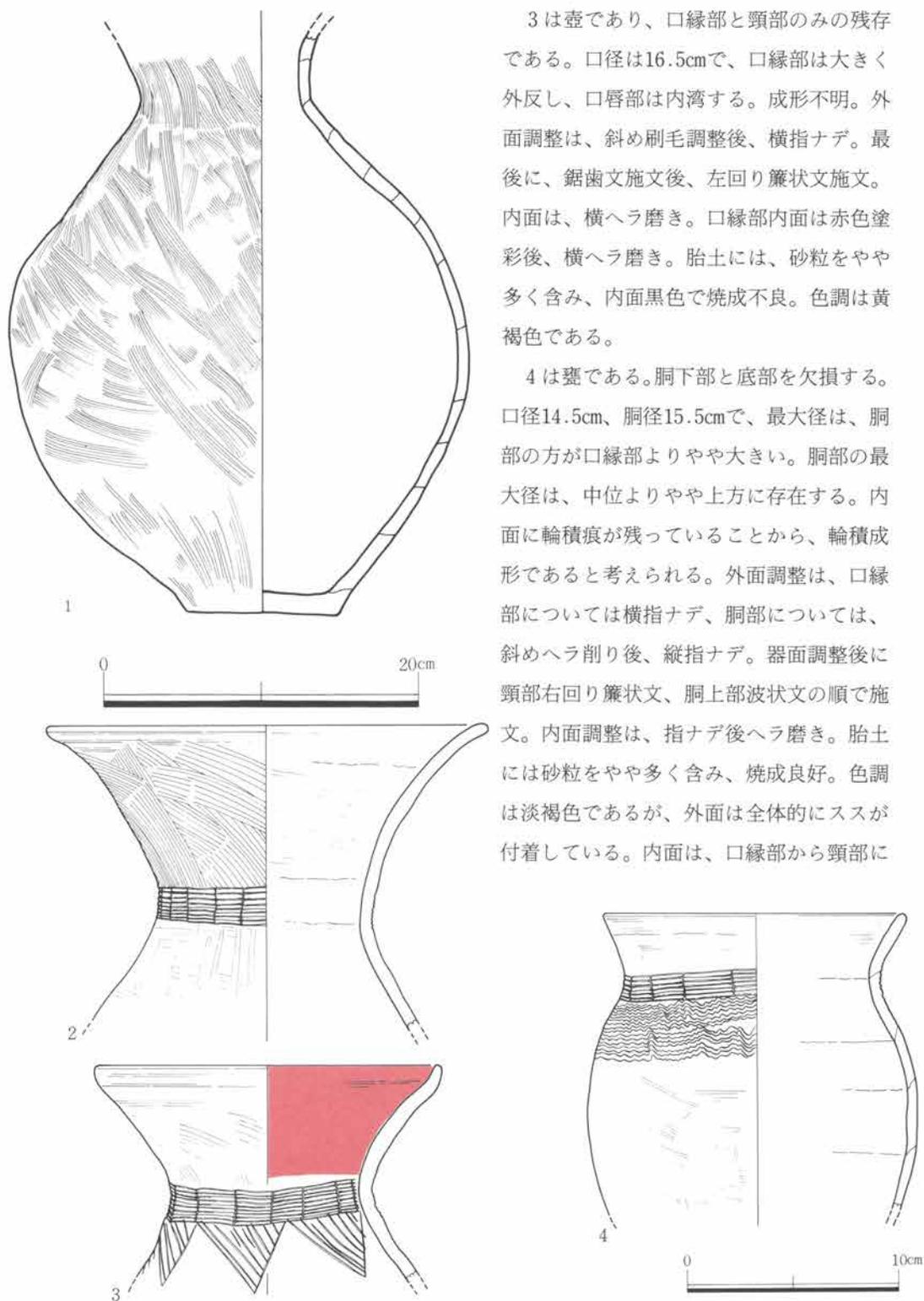
1は壺である。口縁部は欠損しているが、頸部以下はほぼ完存する。法量は、胴径29.0cm、底径9.6cmで、胴部の最大径は中位にある。内面に輪積痕がみられることから、輪積成形とみられる。外面調整は指ナデ後、一部斜め刷毛により凹凸をなくしている。内面胴部は斜め刷毛調整、口縁部は横指ナデである。砂粒をやや多く含み、焼成は普通である。色調は淡褐色。小黑斑が6ヶ所存在する。

2は壺であり、口縁部と頸部のみの残存である。口径は、21cmで、口縁部は大きく外反する。内面に輪積痕がみられることから、輪積成形と考えられる。外面調整は、斜め刷毛調整後、口縁部は横指ナデ、頸部から胴上部にかけては、横指ナデ後縦ヘラ磨きである。最後に右回り簾状文が施文されている。内面は、横刷毛調整後胴部については横指ナデ、口縁部については、横指ナデ後さらに横ヘラ磨きがなされている。胎土には砂粒・小石をやや多く含む。内面は黒色で、焼成不良。色調は淡黄灰色である。外面頸部にやや大きな黒斑が存在する。

3 弥生時代の遺構と遺物

3は壺であり、口縁部と頸部のみの残存である。口径は16.5cmで、口縁部は大きく外反し、口唇部は内湾する。成形不明。外面調整は、斜め刷毛調整後、横指ナデ。最後に、鋸歯文施文後、左回り簾状文施文。内面は、横へら磨き。口縁部内面は赤色塗彩後、横へら磨き。胎土には、砂粒をやや多く含み、内面黒色で焼成不良。色調は黄褐色である。

4は甕である。胴下部と底部を欠損する。口径14.5cm、胴径15.5cmで、最大径は、胴部の方が口縁部よりやや大きい。胴部の最大径は、中位よりやや上方に存在する。内面に輪積痕が残っていることから、輪積成形であると考えられる。外面調整は、口縁部については横指ナデ、胴部については、斜めへら削り後、縦指ナデ。器面調整後に頸部右回り簾状文、胴上部波状文の順で施文。内面調整は、指ナデ後へら磨き。胎土には砂粒をやや多く含み、焼成良好。色調は淡褐色であるが、外面は全体的にスガが付着している。内面は、口縁部から頸部に



第38図 4号住居址出土土器（1=1：4、2～4=1：3）

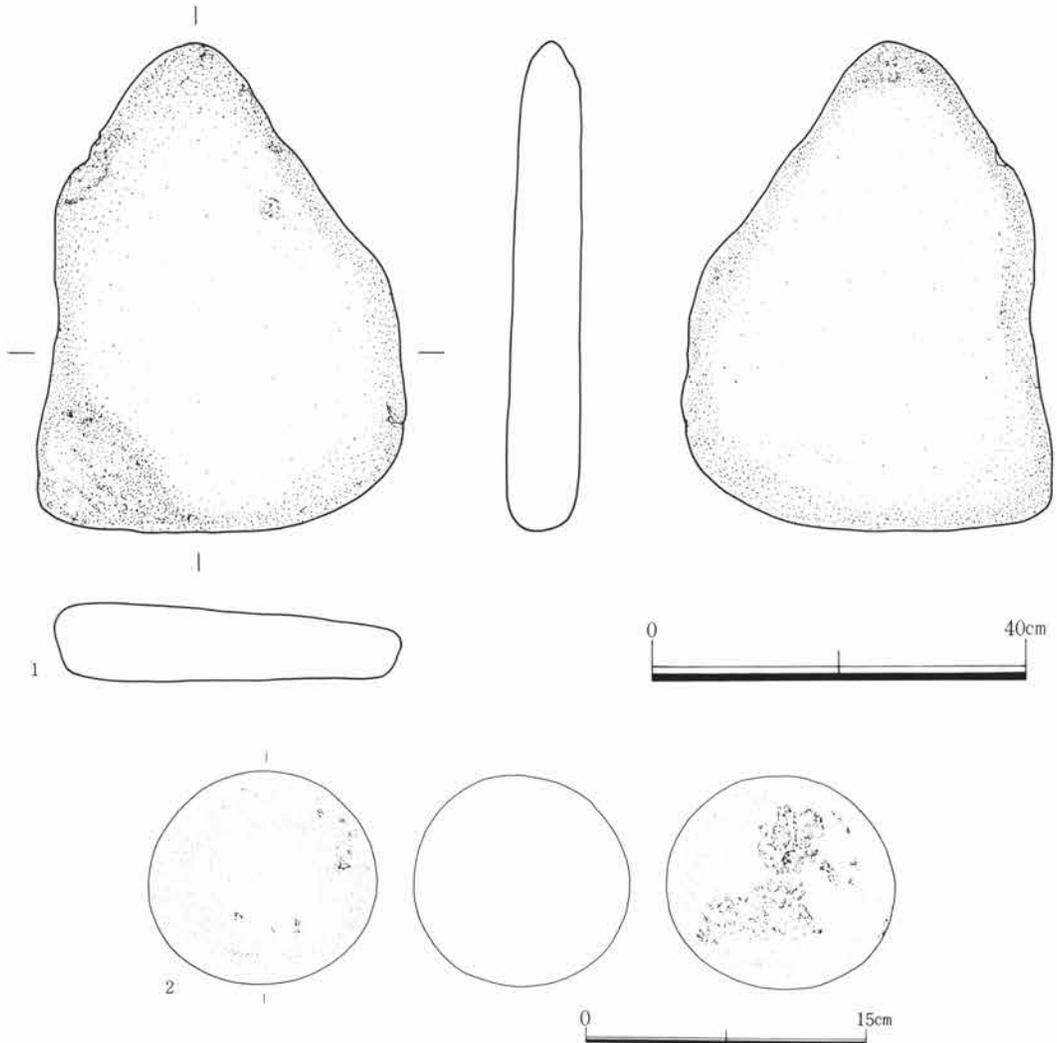
かけてススが付着している。

(飯塚卓二)

4号住居址出土石器 (第39～41図、図版37～39)

第39図1はやや五角形をした偏平で非常に重い大形の石皿である。表裏面はほぼ平らで両面ともに非常に良く磨れている。側面全面は自然面のままである。2は球形をしたやや重い磨石で全面が非常に良く磨れている。数ヶ所に打撃痕と思われる面の乱れや窪みが見られる。

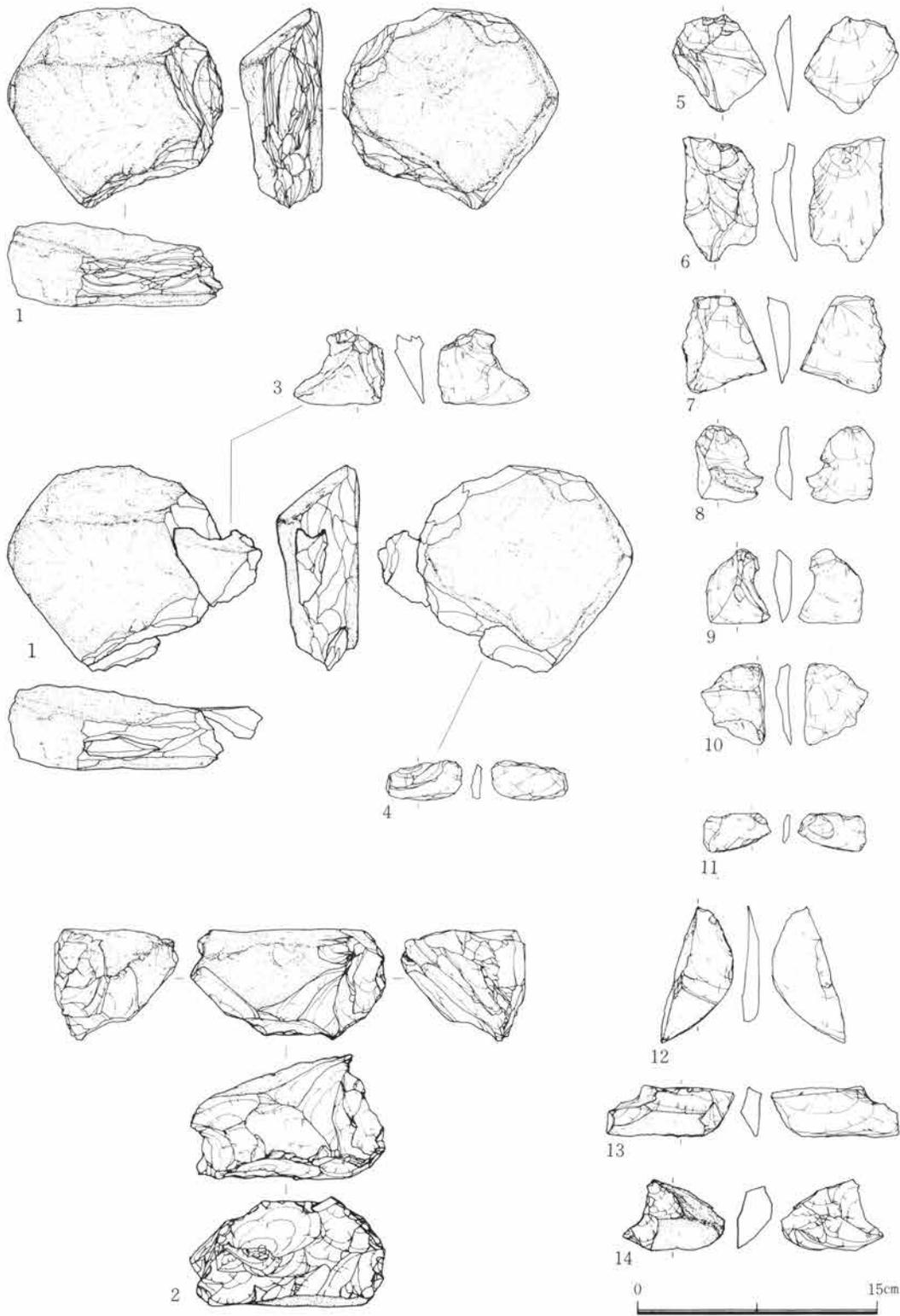
第40図1は長台形をした磨石で表裏面とも良く磨れており、側面は自然面のままである。2は磨石の破片で形状は不明である。表裏両面は中央部に向って内湾し、非常に良く磨れている。片側面には打撃によると思われる剝離が見られ、もう一方の側面も使用され磨れている。3は歪んだ楕円形を呈し、厚みのある磨石である。表面よりも裏面の方が良く磨れており、表面や側面に窪みや面の乱れがある。また、表面には縦方向に数条の細い溝状の擦痕が見られる。4は楕円形を



第39図 4号住居址出土石器1 (1=1:8、2=1:3)



第40図 4号住居址出土石器2 (1:4)



第41图 4号住居址出土石器3 (1:4)

した扁平な磨石で3と同様の磨れ方で、表面と側面に打撃による窪みや剥離が見られる。5は歪んだ長方形を呈した小形の磨石で、表裏面側面ともに良く磨れている。6・7はややタマゴ形をした小形の磨石で表裏面は磨れているが、側面には使用痕は見られない。

第41図1・2は石核で他は剥片である。1はやや扁平な石核で、自然面を多く残し一側面のみ剥離を加えている。剥離の角度は浅く、一定の方向と幅で打撃を繰り返し、表面方向からの打撃と裏面方向からの打撃を交互に繰り返し行っている。1は3・4の不定形の剥片と接合する。2はやや山形を呈し断面は三角形をなしている。ほぼ一面だけに自然面を残し、他の面は方向に規則性のない荒い剥離が加えられている。3～14は不定形の小形の剥片で加工痕や使用痕は見られないが、側面はともに薄く鋭利である。 (下城 正)

グリッド出土の遺物

第42図(図版40)の土器は4号住居址の南約6mのI-35グリッドから出土したもので、径約70cmほどの落ち込みからまとまって出土したが遺構は明確ではなかった。

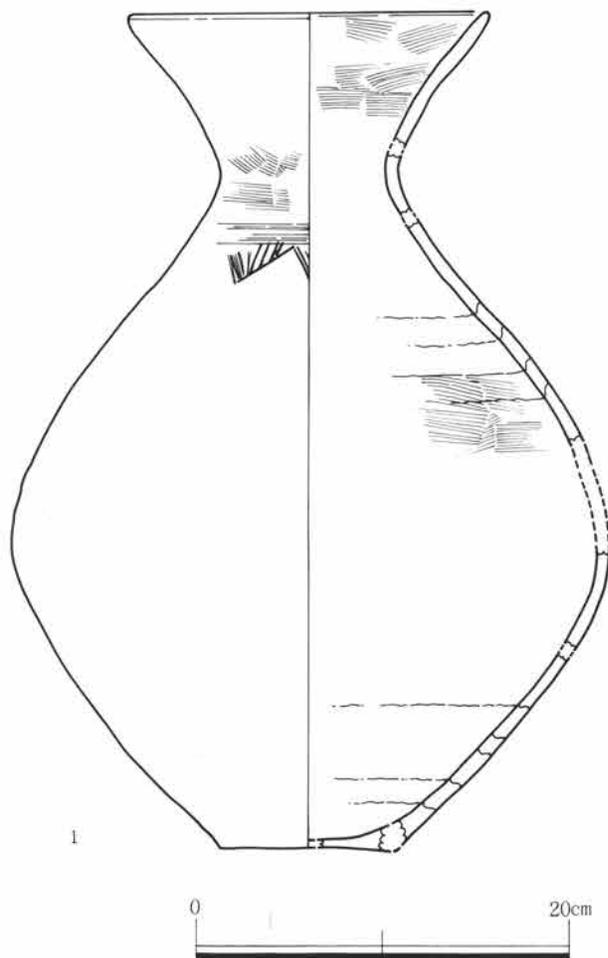
この土器は壺形土器であるが全体の1/4程度の残存であり、破片から推定復元した。

推定の法量は口径19.6cm、胴部最大径32cm、底径9.5cm、器高44cmである。

内面には輪積痕が見られ、調整は内面刷毛目・指ナデ。外面はヘラ磨き後、鋸歯文が頸部下半に施されている。

胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は淡褐色を呈しているが、黒斑やススの付着が各所に見られる。

(飯塚卓二)



第42図 グリッド出土の弥生土器(1:4)

4 古墳時代の遺構と遺物

1号住居址（第43図、図版6・7）

本住居址は微高地東縁部の北寄りに位置し、西壁に沿った部分と北壁の一部が攪乱されているが、比較的良好な状態で確認された。

規模は長軸4.95m、短軸4.58mでほぼ正方形に近いプランをしており、長軸方向はN-20°-Wを示す。

覆土①は黒色土でFPや小石が混入している。②は黒褐色土でFPとローム小ブロックが極少量混入している。③は暗褐色土で焼土・灰白色粘土・ローム等の小ブロックを少量含む。④は暗黒色土でローム小ブロックをやや多く含む。⑤は暗黄褐色土で黒色土とロームのブロックが混じり合っている。覆土全般は特に変わった所は見られず自然に埋没したものと観察された。

壁は高さ約35cmでほぼ垂直に掘り込まれていた。壁体は円弧を連続させた浅い起伏を持つ部分が見られ、直下の周溝も壁体の起伏に合致した状態で13cm~18cmの長さで底面の深さや幅に一定の単位が部分的に確認された。

床面は黄褐色ローム層中に構築され、全面が非常に固く踏み固められており、検出の際は覆土が剥れる状態であった。

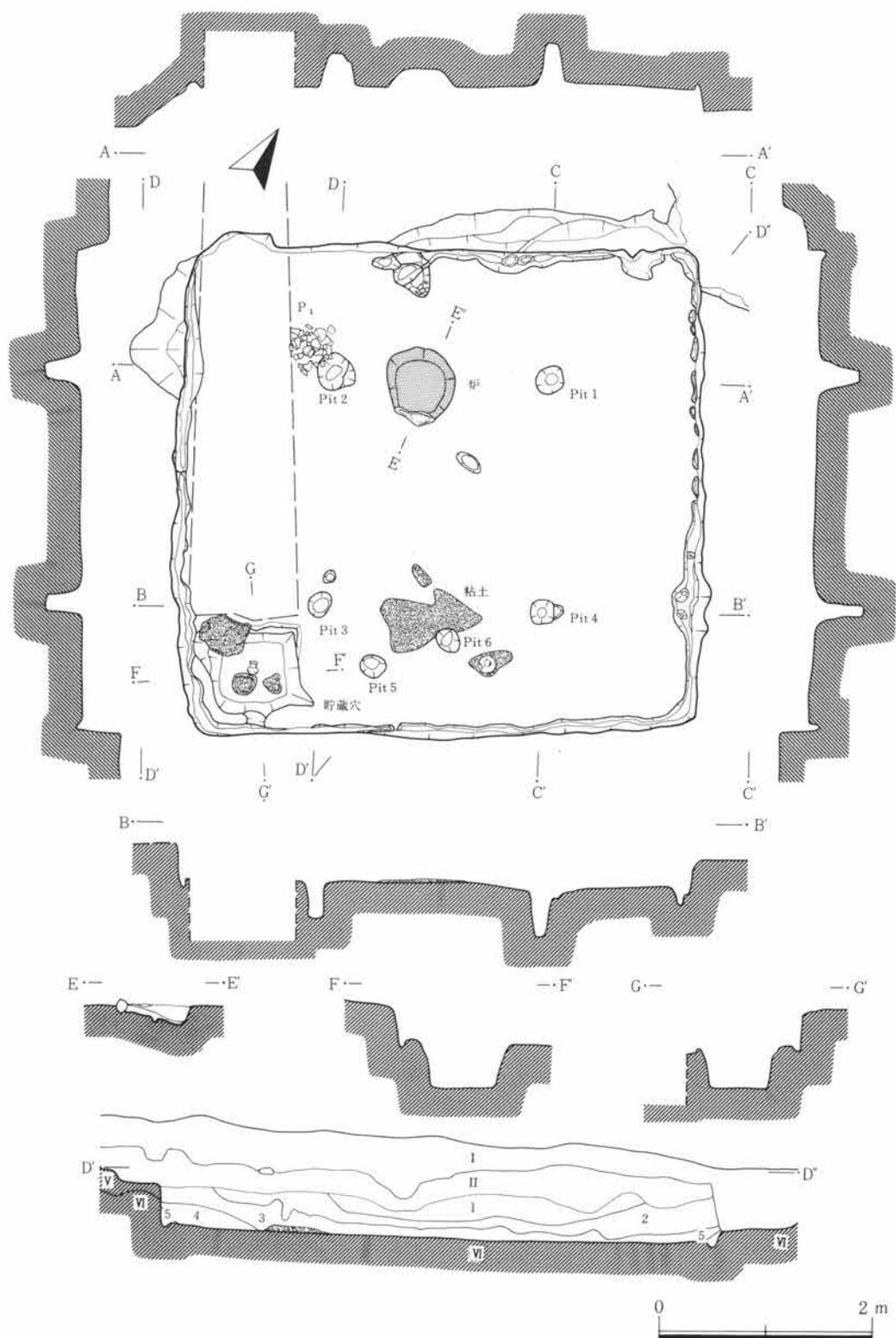
柱穴はほぼ対角線上に4本が確認された。柱穴は径20cm~25cmの円形の掘形を基調とし、深さは33cm~50cmでほぼ直に掘り込まれている。各柱穴の壁からの間隔は南壁からは1.13m~1.20mで、北壁からは1.20m、東壁からは1.40m~1.50m、西壁からは1.35m~1.40mであり、南壁と北壁からの間隔がほぼ等距離で、東壁と西壁からの間隔がほぼ等距離の関係にあり、南・北より東・西の壁からの間隔がやや長い。また、4本の各柱穴間の間隔は2.05m~2.18mでほぼ等距離に近い。また、南壁寄り中央には深さが20cmと34cmの支柱穴が2本ある。

炉は北壁寄りの柱穴間に位置し、64cm×72cmの不整の円形を呈し、南端に長さ40cmの長楕円形の河原石が据えられている。床面から約17cm掘り込んでおり、掘形は北へ傾斜している。炉上面には焼土が堆積し、中位には焼土とロームの混入した黒色土があり、底面にはロームと黒色土のブロックが混じり合っていた。

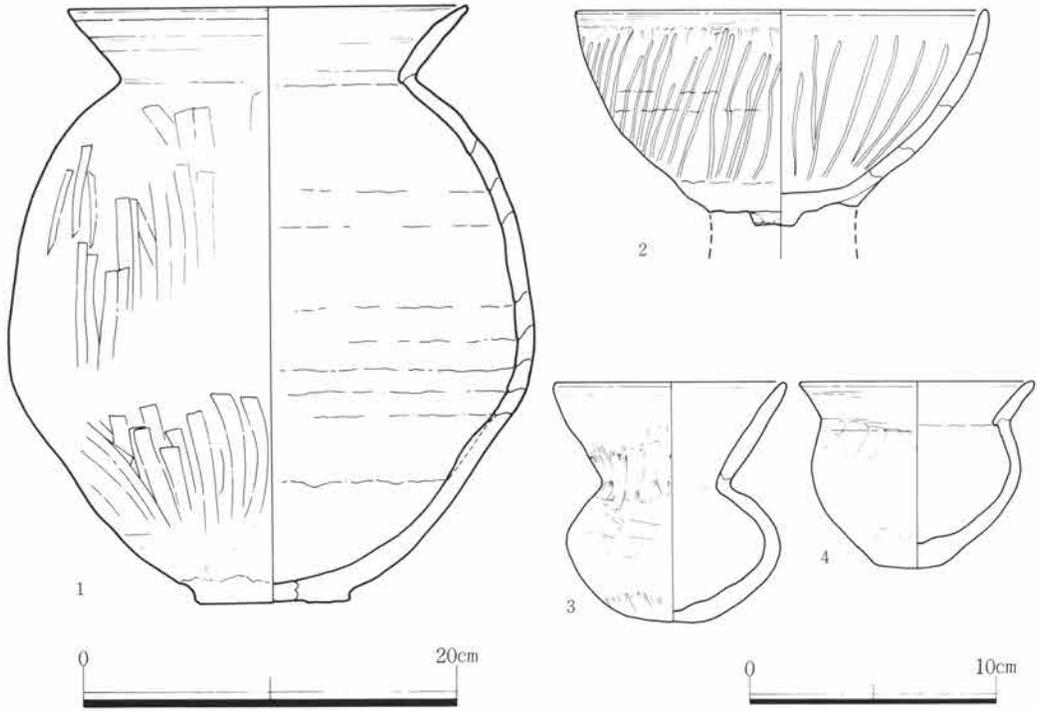
また、南西隅には深さ44cmで83cm×75cmの規模の方形を呈した貯蔵穴があり、上端を囲むように帯状に高さ5cmほど高く地山を掘り残していた。内部には乳灰色粘土が詰まっており小形埴（土器3）が出土した。

出土遺物としては他に甕（土器1）が北西隅の柱穴の傍で潰れた状態で出土し、小形甕（土器4）が上についていた。また、高坏（土器2）が南壁寄り中央の粘土の上で、口縁部を上にして出土した。また、グリッド出土の土器は本住居址の上部あるいは近辺より出土しており、住居址内のものが攪乱され散乱した可能性もある。

なお、南壁寄りの柱穴間の床面には乳白色を呈した粘土が貼り付いていた。（前沢和之）



第43図 1号住居址 (1:60)



第44図 1号住居址出土土器（1 = 1 : 4、2 ~ 4 = 1 : 3）

1号住居址出土土器（第44図、図版41）

1の甕形土器は、口径21.1cm、器高31.9cmで約 $\frac{1}{2}$ 残存する。最大径は胴中位やや下方で、口縁部は「く」の字状に外反する。内外面に輪積痕がみられる。調整は内外面とも指ナデであるが、外面の一部に縦ヘラナデ痕がみられる。胎土は粒子粗く、砂粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈するが、胴上半部および口縁部内外面にススが附着する。

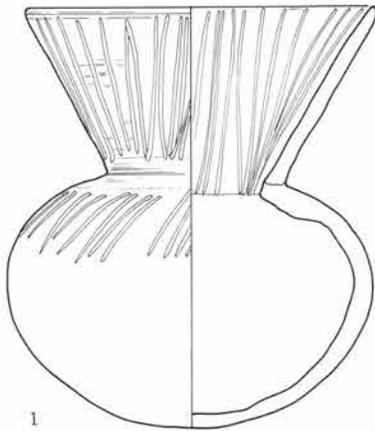
2の高坏形土器は、坏部のみが残存である。口径は15.9cmで、坏部は深い。外面に輪積痕が明瞭に残り、ややいびつである。外面は口唇部横指ナデ、他は縦指ナデの後、縦ヘラナデ。内面は横指ナデ後、縦ヘラナデ。内面底部磨滅。胎土に砂粒を含み、焼成良好。坏部上半部に黒斑が2ヶ所あり対置関係にある。色調は赤褐色。

3の埴形土器は完形である。口径9.5cm、胴最大径8.7cm、底径3.4cm、器高9.7cmで、最大径は口縁部にあり、胴部の最大径はほぼ中位である。底部には、後から粘土を詰め込んだ痕跡が認められる。口縁部縦指ナデ後、口唇部横指ナデ。胴部横指ナデ。内面横指ナデ。胎土には、砂粒および小石を含む。焼成良好明褐色。

4の小形甕は、口縁部の $\frac{1}{4}$ が欠ける。口径9.7cm、胴径8.7cm、底径2.9cm、器高7.6cmである。最大径は口縁部にあり、「く」の字状に外反する。胴部の最大径は、中位やや上方にある。内面に輪積痕あり。内外面とも指ナデ調整で、器面には凹凸がある。器肉やや厚め。胴部に黒斑。赤褐色。

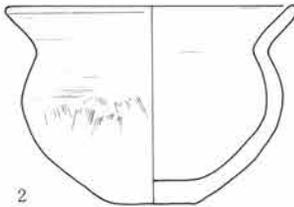
（飯塚卓二）

グリッド出土の遺物 (第45図、図版42)



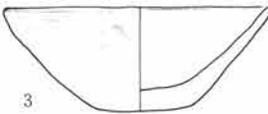
1

1は罎であり、完形である。口径14.2cm、胴径14.8cm、器高16.9cmである。頸部には接合痕がみられ、内外面とも刷毛調整後、ヘラ磨きしている。口縁部外面には横指ナデ、頸部には刷毛目痕がみられる。なお、口縁と胴上部に暗文状のヘラ磨きが施されている。胎土には砂粒・石粒を含み、焼成良好。赤褐色。胴部に9.0×5.0cmと2.3×4.2cmの黒斑が存在する。



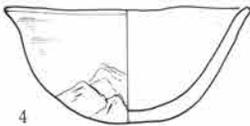
2

2は小形罎であり、約1/4残存。口径11.8cm、胴径10.0cm、底径3.4cm、器高8.0cmであり、最大径は口縁部にある。胴部の最大径は、中位よりやや上方にある。内面に輪積痕がみられる。内外面とも指ナデ調整。砂粒を含み、焼成良好。色調は明赤褐色。外面にスス付着。



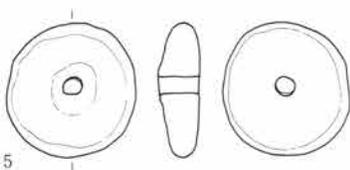
3

3の坏は完形。口径11.2cm、底径4.0cm、器高4.2cmである。体部は直線的に開くが、いびつである。内面は横指ナデで、指ナデ痕は明瞭に残る。外面は縦指ナデ後に、口唇部横指ナデ。底部はヘラ切り。砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。全体的に灰褐色を呈するが、内外面に1/4程度の黒斑がある。



4

4は碗で完形である。口径10.0cm、器高4.7cmの規模をもつ。内面に輪積痕が残り、十分な調整がおこなわれず、各所に凹凸がある。内外面とも指ナデによる調整である。砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。内面は大部分黒色、外面は3/4が黒色、他は淡褐色。



5

5は土製紡錘車である。直径は約5.2cmで、ややいびつである。厚さは中央部で1.8cm、周縁部で1～1.2cmである。中央に直径7mmの円孔がある。手づくね成形であるが、一部に刷毛整形の痕跡がみられる。また表面の1/2程度が剝離している。胎土には砂粒・石英粒を含み、焼成は良好。色調は明褐色を呈する。

(飯塚卓二)



第45図 グリッド出土の古墳時代の遺物 (1 : 3)

5 平安時代の遺構と遺物

2号住居址（第46図、図版8）

住居址は微高地東縁部中央寄りに位置し、南西隅で3号住居址と重複しており2号住居址の方が古い。

規模は長軸3.82m、短軸3.34mで、各隅が丸く方形に近いプランを呈しており、南東隅の貯蔵穴部がやや張り出している。長軸方向はN-30°-Wを示す。

覆土は暗黒色土でやや粒子が荒く、②は暗褐色土でロームブロックが少量混入し、③はローム粒子が混入した黒色土で、④は暗黒色土でロームブロックが極少量混入し、⑤は黒褐色土でローム小ブロックがやや多く混入し、⑥は暗黄褐色土でロームブロックを多く含み、⑦はロームが少量混入した黒色土で、⑧はロームの大ブロックが混入した黒色土で、⑨は暗黄褐色土でロームが多く混入している。覆土は全体的に乱れた状態である。

壁は高さ約35cmで緩い傾斜を持って掘り込まれており、壁体は1号住居址に類似したような不規則な起伏がある。

周溝と見られる幅15cm～22cmで深さ5cm程の浅く乱れた溝が、北壁と西壁の一部で確認されたが他の部分では不明確であった。

床面はローム面に構築されており中央付近は特に固く締っていたが、周壁に沿った部分はやや軟弱であった。柱穴は不明で中央付近にある柱穴は後世のものと考えられる。

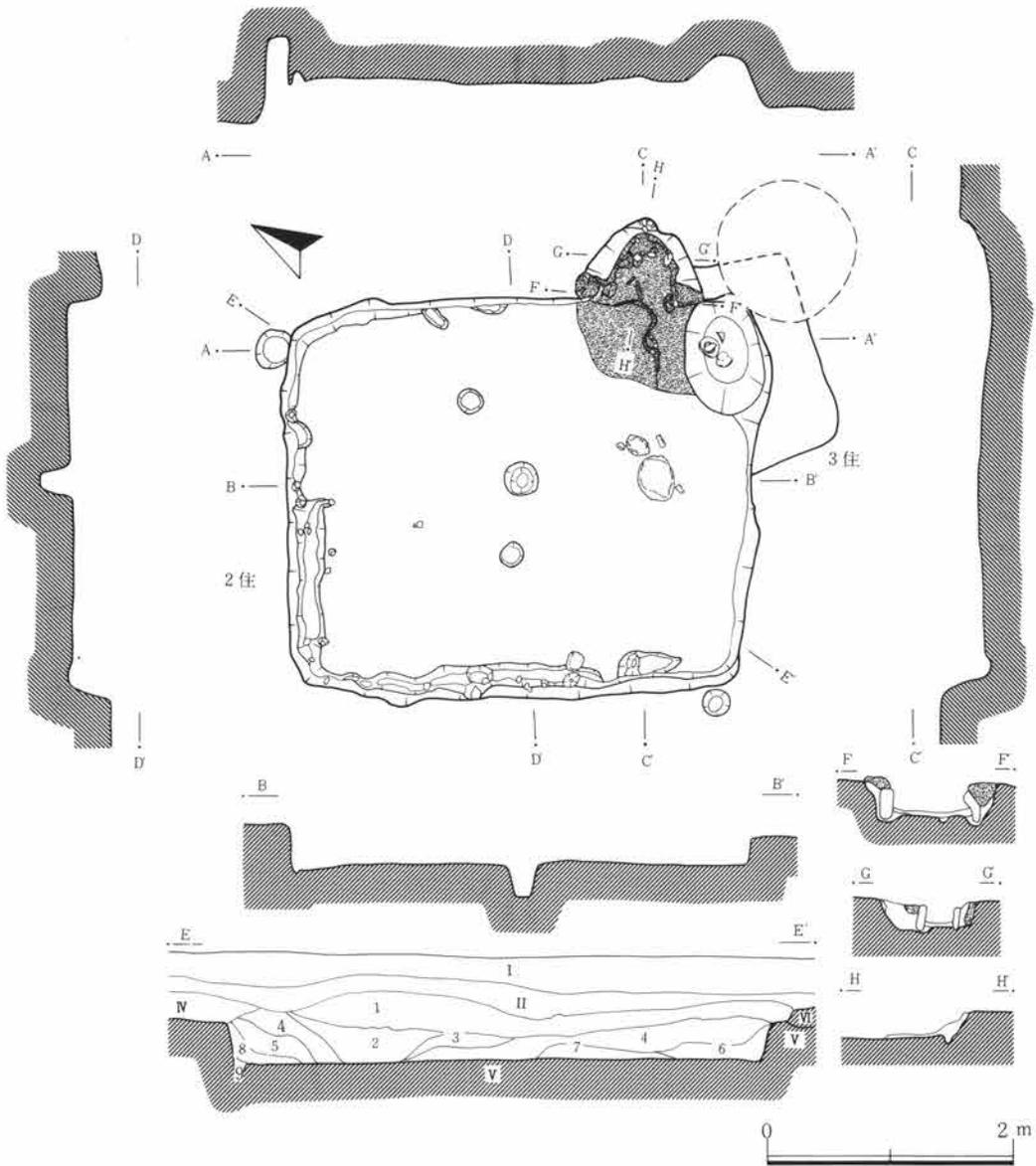
カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、約65cm壁外へ張り出しており、煙道は確認できなかった。焚き口の両袖には60cmの間隔で河原石を立て、裏込めや上部には粘土を詰めている。また、燃焼部にも30cmの間隔で河原石が立てられており、周壁や上部を粘土で固めていた。カマド内には焼土と炭化物が薄く堆積し、カマド前面の床面上には粘土が薄く貼り付けられていた。

貯蔵穴はカマドに接して南東隅にあり、規模は85cm×65cmで楕円形を呈しており、深さは24cmで塀底状をしている。

出土遺物としては甕類がカマド内に散乱して出土し、塀類は貯蔵穴内より出土した。また、カマド前面には偏平な河原石が2つ床面に接しており、砥石がそばから出土した。（前沢和之）

3号住居址（第46図、図版8）

本遺構は一部が2号住居址の上に構築されており、カマド上部を削平し、貯蔵穴を埋めたような状態で、黒色土中に長方形をなすと推定される固い面が確認された。周辺は後世の攪乱が激しく残存部分もわずかであり、伴出する遺物もなく住居址としての積極的な証拠は得られなかったが、2号住居址の埋没過程で構築されており、床面状の固い面があることから住居址として扱った。（前沢和之）

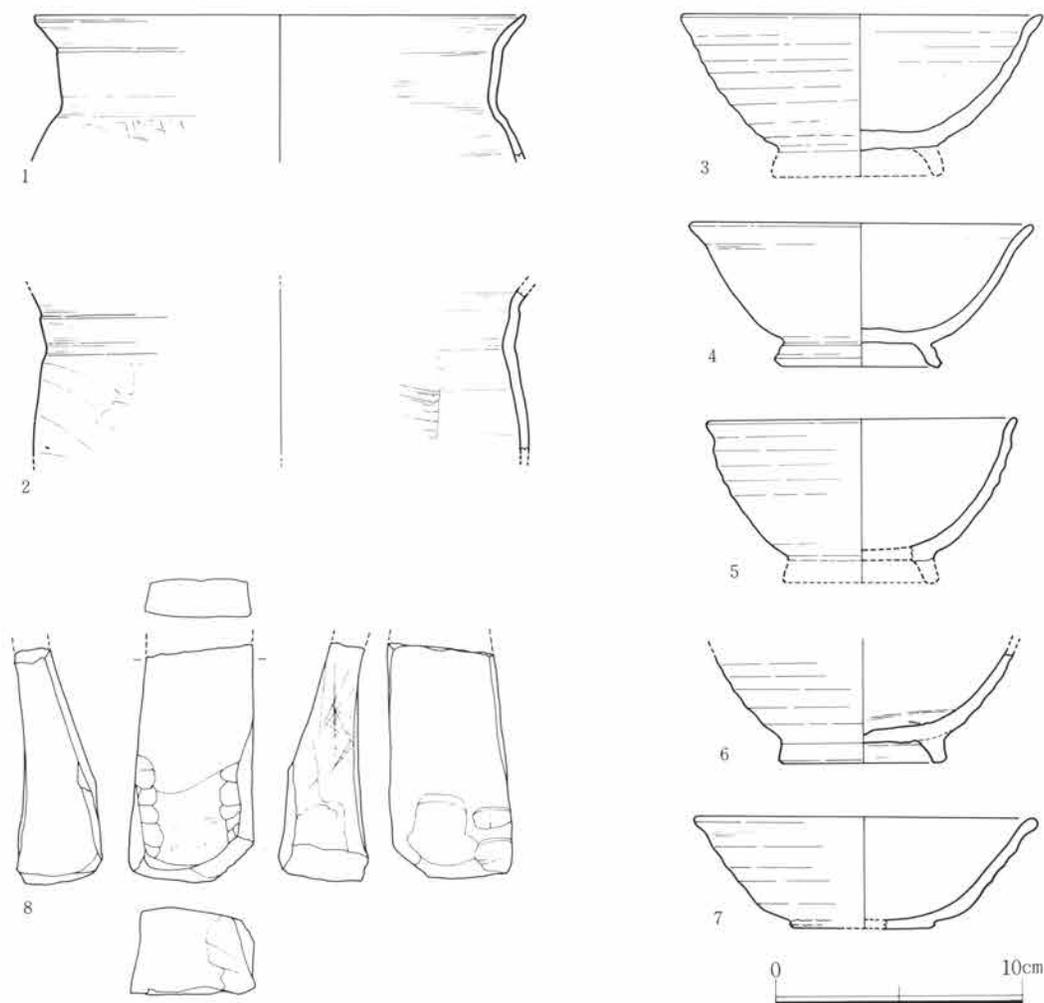


第46図 2・3号住居址 (1:60)

2号住居址出土遺物 (第47図、図版43)

1および2は甕形土器である。1は口縁部から頸部、2は頸部から胴上部で、ともにそれぞれ1/2程度の残存である。ともに頸部はコの字状を呈する。1は推定口縁部径は19.8cm、2の推定胴径は19.8cmである。1の調整はヘラ削り後、口縁部、頸部下半横指ナデ。2は指ナデ後、胴部ヘラ削り。ともに胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成良好で硬質。色調は1・2ともに褐色。2には黒斑があり、ススが一部付着している。

3～7は埴である。7を除いて高台が存在するか、かつて存在した痕跡が認められる。3は口



第47図 2号住居址出土遺物（1：3）

縁部の一部と高台部、4は口縁部の一部を欠失している。5～7は $\frac{1}{2}$ 以下の残存である。いずれも底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。3・4・7については、底面に回転糸切り痕が認められる。いずれも小砂粒を含み、4以外は灰白色。4は底部は淡褐色、外面は黒色、内面は黒色～灰色。外面にススが付着している。3は口縁付近の一部に黒斑がある。焼成はいずれも良好で、還元焰焼成。

8は砥石である。全体の $\frac{1}{2}$ 程度欠失している。残存部分の長さ9cm、幅4～5cm、厚さ3.3～1.4cmである。石材は流紋岩。4面とも使用されており、中央部は使用のためにかなり薄くなっている。なお、一側面に金属器によると思われる不規則な線刻がある。また、一面には砥石製作時の削り痕が見られる。

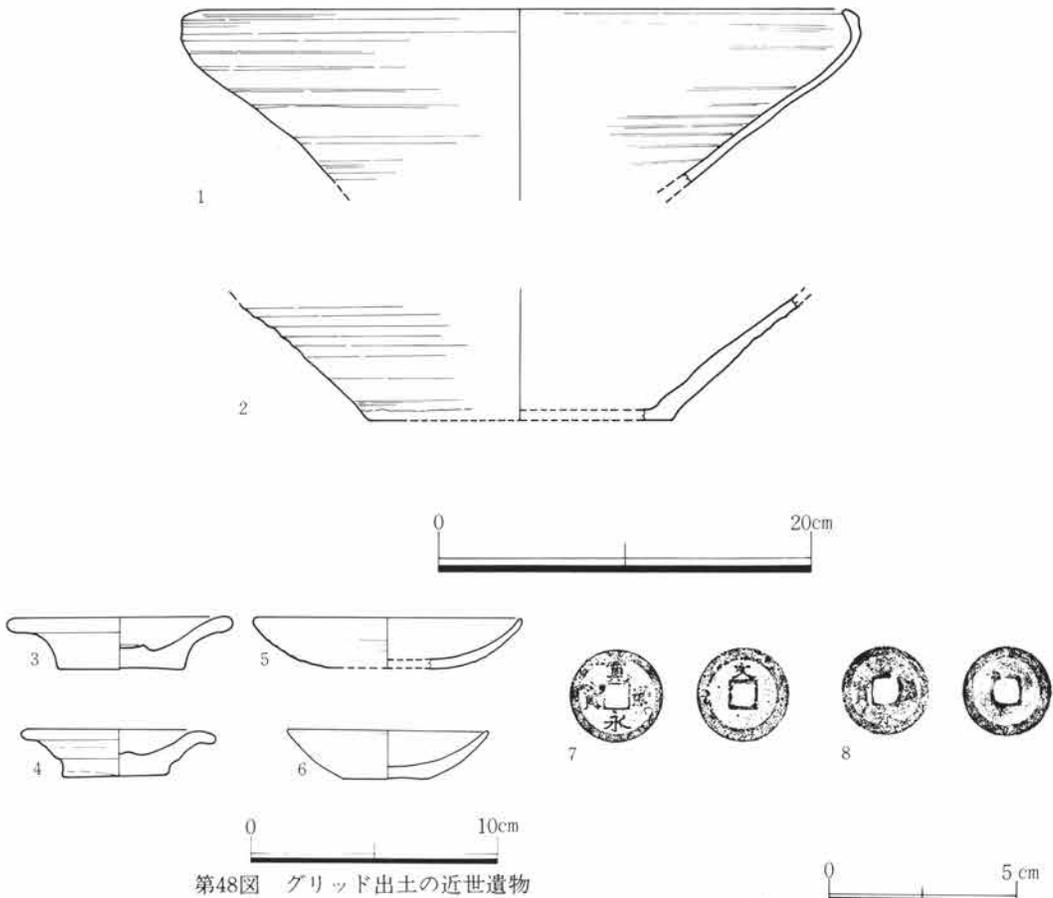
(飯塚卓二)

6 グリッド出土の近世遺物 (第48図、図版44)

1 および 2 は鉢形土器である。1 は全体の $\frac{1}{2}$ 程度の残存、2 は 9×10 cm程度の破片である。1 は推定口径35cm、2 は推定底径15.7cmである。ともに大きく開き、1 は口縁部が内湾している。またロクロ痕が明瞭に残り、砂粒を含むが少なく、胎土粒子は細かい。内外面とも黒色。

3・4 は灯明皿、5・6 は皿形の灯明皿である。3 は美濃系で完形、薄い釉がかかっている口径9cm、底径5cm、器高2cmで底部は回転糸切りである。4 は瀬戸系で $\frac{3}{4}$ 程度の残存、口径8cm、底径4.2cm、器高2cmで、底部は回転糸切りである。自然釉が一部にみられる。5 は瀬戸系で鉄釉がかかり、茶色を呈している。約 $\frac{1}{4}$ の残存で、推定口径10.8cm、底径5cm、器高2cmである。6 は美濃系で約 $\frac{1}{2}$ の残存、推定口径は8cm、底径3.5cm、器高2cmで、底部は回転糸切りである。内面から外面口縁部にかけて透明な釉がかけられている。

7 と 8 は寛永通寶である。7 は直径2.5cm、厚さ1mmで、裏面には「文」の字がみられる。全体的にさびており青色を呈している。8 は直径2.4cm、厚さ0.7mmでやや曲がっている。全体的に磨滅しており、青さびも一部みられる。(飯塚卓二)



第48図 グリッド出土の近世遺物
(1・2 = 1 : 4、3 ~ 6 = 1 : 3、7・8 = 1 : 2)

第3表 十二原遺跡石器一覧表

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
19	1	打製石斧	頁岩	14.7	5.3	191	5区E-04グリッド 以下5E04のように表わす。	
	2	打製石斧	頁岩	13.2	5.8	190	4 F32	
	3	打製石斧	頁岩	15.2	5.1	189	5 H09	
	4	打製石斧	頁岩	—	6.2	168	5 P04	基部欠損
	5	打製石斧	頁岩	10.8	4.1	85	5 L02	
	6	打製石斧	頁岩	—	3.3	100	4 F32	刃部欠損
	7	打製石斧	頁岩	—	4.1	85	5 H06 5 J09	基部欠損
	8	打製石斧	頁岩	8.1	5.6	111	5 H08	
	9	打製石斧	頁岩	—	5	48	5 O03	刃部欠損
20	1	打製石斧	頁岩	12.7	5.1	119	5 L03	
	2	打製石斧	頁岩	—	5.4	126	5 N05	基部欠損
	3	打製石斧	頁岩	—	5.2	95	5区表採	基部欠損
	4	打製石斧	頁岩	—	5.9	56	5 L03	基部欠損
	5	打製石斧	頁岩	—	4.9	35	5 G06	基部欠損
21	1	打製石斧	頁岩	12.8	5.3	171	5 F09	
	2	打製石斧	頁岩	11.5	5	121	5 M01	
	3	打製石斧	頁岩	10.6	4.5	101	5 J06	
	4	打製石斧	頁岩	10.4	3.9	96	5 I07	
	5	打製石斧	頁岩	9.6	4	90	5 G10	
	6	打製石斧	頁岩	—	5.1	175	5 O03	基部欠損

6 グリッド出土の近世遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
21	7	打製石斧	頁岩	—	5	90	5 H05	基部欠損
	8	打製石斧	頁岩	—	4.1	81	5 L06	基部欠損
	9	打製石斧	頁岩	—	5	138	5 K04 5 L05	基部欠損
	10	打製石斧	頁岩	—	5.4	60	5 区表採	基部欠損
22	1	打製石斧	頁岩	14.5	5.3	270	5 L05	
	2	打製石斧	頁岩	14.3	4.9	169	5 K06	
	3	打製石斧	頁岩	10	4.6	84	5 L04	
	4	打製石斧	頁岩	9	4.7	90	5 J09	
	5	打製石斧	頁岩	—	4.6	82	5 I09	基部欠損
	6	打製石斧	頁岩	—	5.8	116	5 I07	基部欠損
	7	打製石斧	頁岩	—	4.5	48	5 F08	基部欠損
	8	打製石斧	頁岩	9.3	3.9	46	5 H12	
	9	打製石斧	頁岩	9	4.8	80	5 F04	
	10	打製石斧	頁岩	8.3	4.2	55	5 区表採	
23	1	打製石斧	頁岩	14.5	4.8	129	5 K06	
	2	打製石斧	頁岩	11	4.3	75	5 H07	
	3	打製石斧	頁岩	10.7	4.9	106	5 I06	
	4	打製石斧	頁岩	10	5.3	89	5 H06	
	5	打製石斧	頁岩	9.1	4.1	40	5 L08	
24	1	打製石斧	頁岩	12.2	4.5	160	5 F04	
	2	打製石斧	頁岩	9.5	4.9	105	5 N04	

第V章 十二原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
24	3	打製石斧	頁岩	—	4.2	50	5 K06	刃部欠損
	4	打製石斧	頁岩	—	4.8	80	5 H07	刃部欠損
	5	打製石斧	頁岩	—	4	59	5 N06	刃部欠損
	6	打製石斧	頁岩	—	4.5	53	5 F08	刃部欠損
	7	打製石斧	頁岩	—	3.7	74	5 F11	刃部欠損
	8	打製石斧	頁岩	—	4.2	36	5 L10	刃部欠損
	9	打製石斧	頁岩	—	3.7	32	5 L07	刃部欠損
25	1	打製石斧	頁岩	11.4	5	100	5区表採	
	2	打製石斧	珪質頁岩	9.6	4.4	79	5 G07	
	3	打製石斧	頁岩	9.2	4.1	75	5 M08	
	4	打製石斧	頁岩	9.5	6	93	5 K06	
	5	打製石斧	頁岩	—	6.2	100	5区表採	基部欠損
	6	打製石斧	頁岩	13.3	5.1	143	4 F35	
	7	打製石斧	砂岩	11.4	5.5	165	5 F09	
26	1	打製石斧	頁岩	8.1	4.7	65	5 M01	
	2	打製石斧	頁岩	—	4.6	92	4 L29	刃部欠損
	3	打製石斧	頁岩	—	3.9	65	5 N03	刃部欠損
	4	打製石斧	頁岩	—	3.8	45	5 N06	刃部欠損
	5	打製石斧	頁岩	—	5.2	149	5 L03	刃部基部欠損
	6	打製石斧	頁岩	—	4.2	55	5 I07	刃部基部欠損
	7	打製石斧	頁岩	—	5.4	64	5 J07	刃部基部欠損

6 グリッド出土の近世遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
	8	打製石斧	頁岩	—	5.3	60	5 H11	刃部基部欠損
29	1	礫 器	頁岩	9	14.7	860	4 区表採	
	2	礫 器	頁岩	8.5	11.5	470	5 J 05	
	3	礫 器	頁岩	6	7.4	140	5 M04	
	4	礫 器	頁岩	—	7.5	100	5 G07	基部欠損
	5	礫 器	頁岩	5.2	7.3	140	4 I 32	
27	1	剥片石器	頁岩	14.4	9.1	265	5 M10	
	2	剥片石器	頁岩	7	6.1	90	5 H05	
	3	剥片石器	頁岩	6.2	5.5	46	5 FG31	
	4	剥片石器	頁岩	6.5	5.7	70	5 P03	
	5	剥片石器	頁岩	5.5	4.6	41	5 F09	
	6	剥片石器	頁岩	7.3	12.3	160	表採	
	7	剥片石器	頁岩	9.6	7	205	表採	
	8	剥片石器	安山岩	4.6	6.6	45	5 H09	
31	1	石 鏃	黒曜石	4.2	3.4	0.96	4 FG32	
	2	石 鏃	安山岩	7.3	—	1.92	5 G09	脚部欠損
	3	石 鏃	安山岩	5.3	3.5	1.52	5 I 06	
	4	石 鏃	チャート	—	3.1	1.2	5 G07	先端部欠損
	5	石 鏃	チャート	—	—	6.6	5 H05	先端脚部欠損
	6	石 鏃	珉質頁岩	—	—	1.32	5 K02	先端脚部欠損
	7	石 鏃	チャート	—	3.1	1.48	5 KL06	先端部欠損

第V章 十二原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
30	1	石 匙	頁岩	8.2	5.6	65	4 M32	
	2	石 匙	安山岩	—	2.3	10	4 F32	刃部欠損
28	1	剥 片	玉髓石英	7.9	5	86	4 I 35	
	2	剥 片	頁岩	13	7.1	217	5 I 09	
	3	剥 片	玉髓石英	7.4	8.9	49	表採	
32	1	石 棒	安山岩	—	2.7	120	5 H06	基部刃部欠損
	2	磨 製 石 斧	凝灰質砂岩	—	3.8	135	5 K10	刃部欠損
39	1	石 皿	石英閃緑岩	51.7	39	26.6 kg	4 住	
	2	磨 石	石英閃緑岩	径 12		2,240	4 住	球形
40	1	磨 石	砂岩	16	11	960	4 住	
	2	磨 石	砂岩	—	9	400	4 住	
	3	磨 石	砂岩	18	12	1,920	4 住	
	4	磨 石	砂岩	23	14	1,450	4 住	
	5	磨 石	石英閃緑岩	12	7.7	960	4 住	
	6	磨 石	珪岩	9.4	5.7	260	4 住	
	7	磨 石	砂岩	7.2	5.4	168	4 住	
41	1	石 核	頁岩	12.5	13.5	1,000	4 住	
	2	石 核	頁岩	6.6	12	700	4 住	
	3	剥 片	頁岩	4.7	5.3	26	4 住	1 と接合
	4	剥 片	頁岩	2.2	4.6	9	4 住	1 と接合
	5	剥 片	頁岩	6	5.3	26.4	4 住	

6 グリッド出土の近世遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
41	6	剥 片	頁岩	7.5	4.5	45	4住	
	7	剥 片	頁岩	6	5	44	4住	有孔虫の化石有り。
	8	剥 片	頁岩	4.6	3.5	16	4住	
	9	剥 片	頁岩	4.6	3.5	16	4住	
	10	剥 片	頁岩	5	3.8	14	4住	
	11	剥 片	頁岩	2.2	4.2	5	4住	
	12	剥 片	頁岩	8	3.6	26.6	4住	
	13	剥 片	頁岩	3	7.5	26	4住	
	14	剥 片	頁岩	4	6	45	4住	

大 原 遺 跡

第Ⅵ章 大原遺跡

1 遺跡の概要 (付図6、第49図、図版45～47)

遺跡は、名胡桃平北面の2本の小段丘崖が東西に走る、赤谷川の中位段丘平坦面に立地している。南を上位の小段丘崖に平行して流れる原沢によって切られ、沢を挟んで南に十二原遺跡があり、本遺跡の方が約10m低い。遺跡地はほぼ平坦で、北端は中位の段丘崖が横切り、下位の狭い平坦面へやや急角度に落ち込む。名胡桃平北面の北端は、通称「黒岩八景」と呼ばれる高さが30m近い凝灰岩の、垂直の崖が両岸にせまる峡谷となる。

確認された遺構は住居址3軒、土壇6基、溝1条で、遺物散布状態も同様に原沢寄り南端の0区と1区に集中していた。2区～4区にかけては3ヶ所で風倒木痕を確認しただけで、遺物の散布も見られなかった。

縄文時代に比定した遺構は土壇の6基で、前期から後期にかけての土器や石器が少量、グリッドより出土した。

弥生時代の遺構としては、後期に属するプランの異なる住居址が2軒あり、1軒からは多量の炭化材が出土した。

古墳時代から奈良時代にかけての遺構は確認されなかったが、平安時代に属する住居址が1軒確認された。また、時期は断定できなかったが、葉研堀状の溝が1区南半で調査区を横切るような状態で確認された。(清水和夫)

2 縄文時代の遺構と遺物

6基の土壇のうち、長楕円形を呈する1号～3号は0区～1区南端に分布し、円形を呈する4号～6号は1区中央付近に集中して分布していた。

1号土壇 (第50図、図版53-1)

長軸2.37m、短軸1.37m、深さ61cmの規模で長楕円形を呈し、断面は舟底状で、長軸方向はN-30°-Eを示す。覆土①は黒色土でローム小ブロックを少量含み、②は黒褐色土でローム小ブロックを多く含み、③は暗黄褐色土でロームの大小のブロックと黒色土が混じり合っている。覆土全体は一挙に埋没した状態で、中央覆土上面に焼土が薄くのっていた。出土遺物はない。

2号土壇 (第50図)

1号住居址によって南端を切られている。長軸約1.80m、短軸0.96m、深さ31cmの規模で長楕円形を呈し、断面は舟底状をしており、長軸方向N-14°-Eを示す。覆土は黒色土でローム小ブロックが混入し、一挙に埋没した状態である。出土遺物としては覆土上部より打製石斧1本(第53図2)が出土した。

第VI章 大原遺跡

3号土壇 (第50図)

長軸2.74m、短軸1.32m、深さ55cmで不整の長楕円形を呈している。本遺構の北東部分はローム層がやや高くなっており、南西方向へ倒れた風倒木痕に黒色土が流入したものと推定される。

4号土壇 (第51図、図版53-2)

5号土壇によって切られている。長径2.14m、短径2.02m、深さ108cmの規模で、不整の円形を呈し、断面はフラスコ状をなしている。覆土①～③は黒褐色土中にローム小ブロックが混入し、④と⑤は暗黄褐色土で上半のローム層の壁が崩落して混入し、⑥は暗黄褐色土でローム小ブロックが混入し、⑦と⑧は下半のローム層の壁が崩落した状態である。覆土全体は自然埋没の状態を示し、埋没過程で順次壁が崩落しており、北方向からの流れ込みが目立つ。覆土上部からは基部が欠損した打製石斧 (第53図8) 1本が小礫とともに出土した。

5号土壇 (第51図、図版53-2)

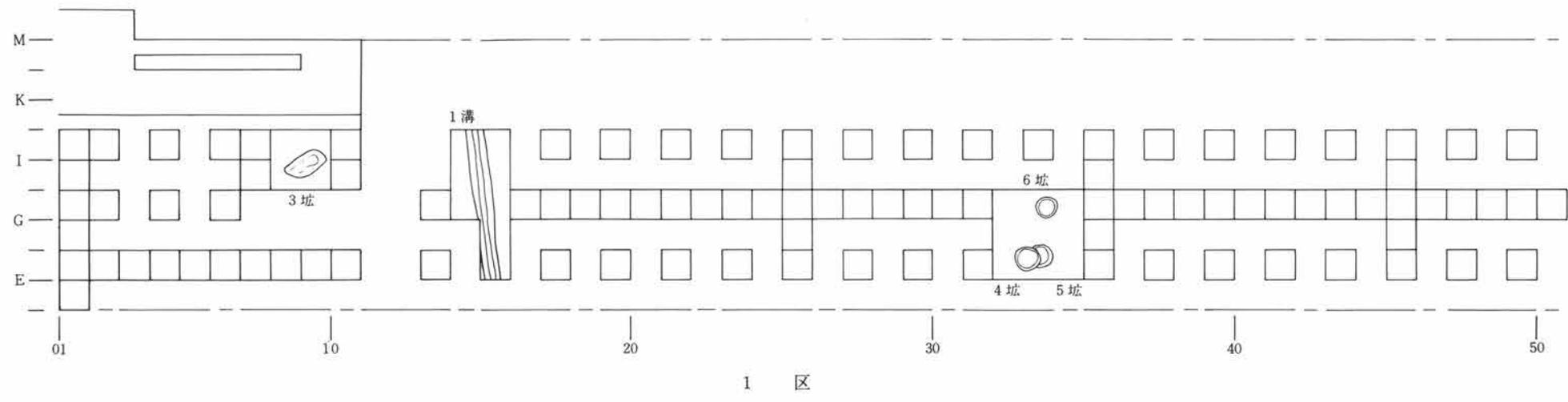
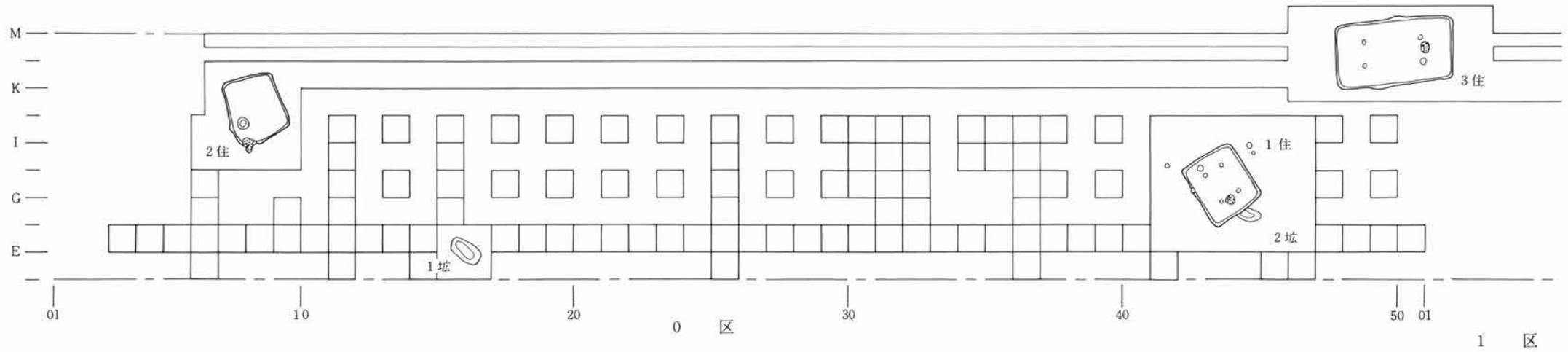
4号土壇を切っている。長径1.69m、短径1.63m、深さ85cmの規模で、不整円形を呈し、断面はフラスコ状をなしている。覆土⑨～⑪は黒色土中にローム小ブロックが混入し、⑫は暗黄褐色土で上半のローム層の壁が崩落し混入しており、⑬と⑭は黄褐色土で下半のローム層の壁が崩落し混入している。覆土下半は壁の崩落により埋没し、上半は黒色土が流入し、自然に埋没している。出土遺物はなかった。

6号土壇 (第51図、図版53-2)

4・5号土壇から約3m西に位置している。長径1.67m、短径1.57m、深さ82cmの規模で、ほぼ円形を呈しており、断面はフラスコ状をなしている。覆土①～③は黒褐色土でローム小ブロックを極少量含み、④～⑦は暗黄褐色土で上半のローム層の壁が崩落し、黒褐色土と混じり合っており、⑧～⑬は黄褐色土で下半の壁が崩落し混入している。覆土全体は4・5号土壇と同様に自然埋没の状態を示し、北からの流入が目立つ。出土遺物はない。 (下城 正)

グリッド出土の土器と石器

グリッド出土の土器 (第52図、図版54-1) 1と2は胴部片で同一個体と考えられる。胎土に繊維を含み、絡条体の可能性がある無節Ⅱが施されている。花積下層式に比定される。3はキャリパー形をなす深鉢の口縁部片で、楕円形に隆帯をめぐらした中に単節RLの縄文を施し、隆帯に沿って幅の広い沈線で磨り消している。加曽利E3式に比定される。4と5は同一個体と考えられ、口縁部から胴部にかけての破片で、キャリパーの退化した深鉢である。無文の口縁部に平行に断面三角形の隆帯を1条めぐらし、胴部にも同様の隆帯が直線的に貼り付けられている。この直線的な懸垂文には無文帯と単節LRの縄文を施した部分が交互に配されている。加曽利E4式に比定される。6は4・5と同様の器形・文様と考えられ、摩耗が激しいが単節LRの縄文が施されている可能性がある。7～10は同一個体と考えられ、7は口縁部で他は胴部片で、深鉢と考えられる。胎土には砂粒を多く含み、平行沈線を施した後、無文帯と交互に単節RLの縄文を



第49図 大原遺跡遺構全体図 (1:400)

施している。加曽利B II式に比定される。

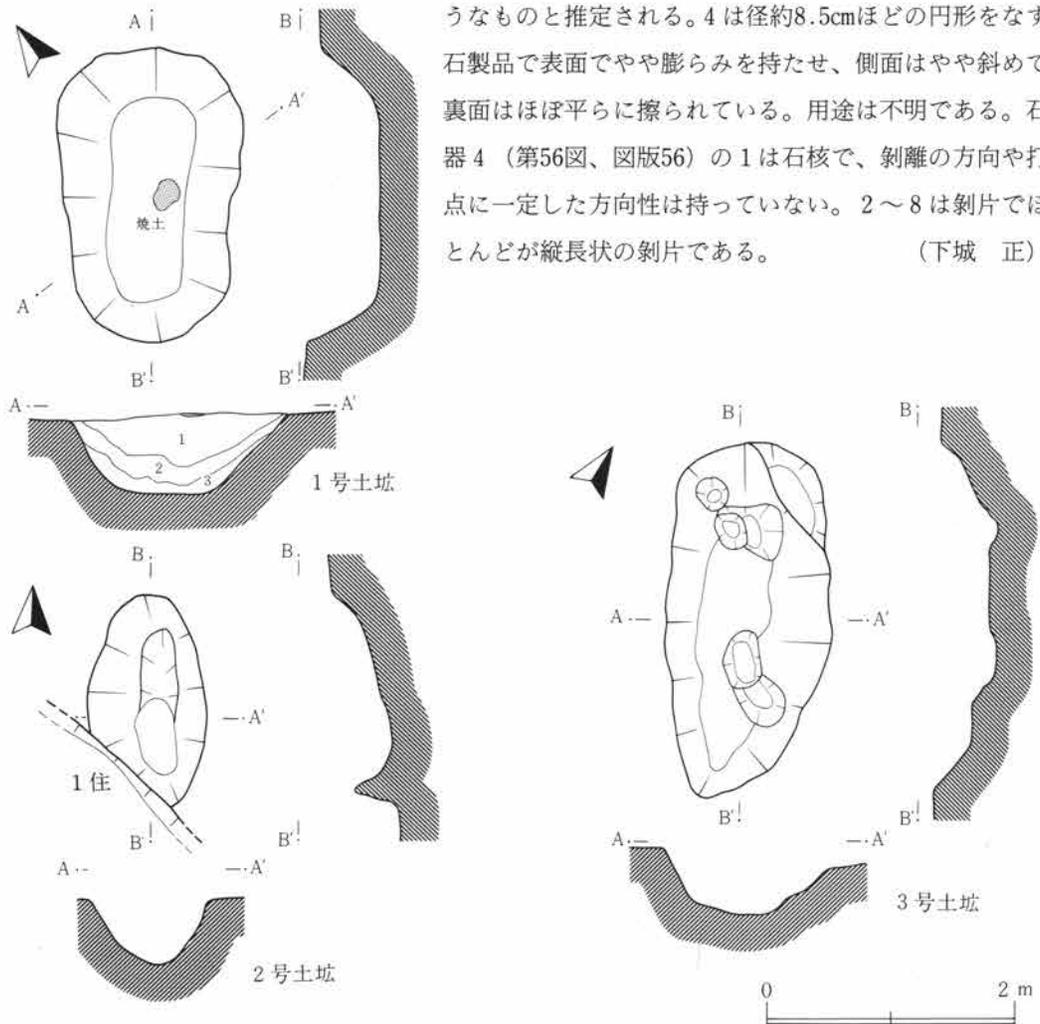
グリッド出土の石器1（第53図、図版54-2）は打製石斧で、2と8は土坑より出土しているが分類上この項で扱った。石斧は短冊形と撥形だけで、ほとんどの石斧が側面を横方向からの剥離を行なった後、刃部を縦方向に剥離している。1・2・4・8は自然面を残し、4～8は基部を欠損している。

石器2（第54図、図版55-1）の1～3は剥片石器で1と3は横長剥片を使用し、刃部の片面を細かく剥離している。2は縦長剥片を使用し、刃部の片面にやや大きい剥離を入れている。4は無茎の石鏃でやや長い二等辺三角形を呈し、基部はやや浅く湾入している。

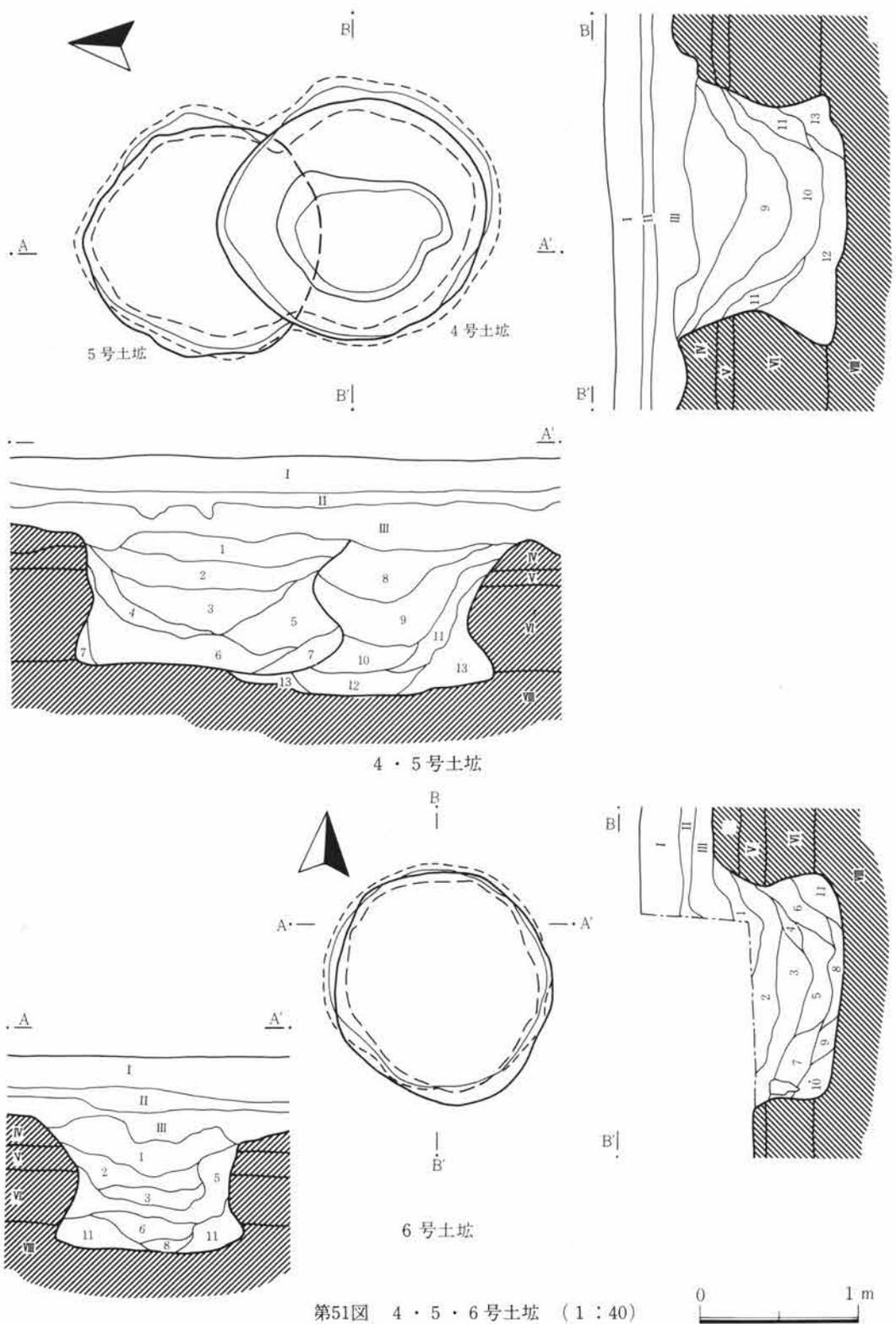
石器3（第55図、図版55-2）の1と2は凹石で、1は円形に近く表裏ともに中央付近に浅い窪みがあり、両面とも良く磨れている。2は長楕円形を呈し表裏に2個ずつの浅い窪みがある。

3は長い四角柱状の自然石で1面だけが非常に良く磨られており、用途は不明であるが砥石のようなものと推定される。4は径約8.5cmほどの円形をなす石製品で表面でやや膨らみを持たせ、側面はやや斜めで裏面はほぼ平らに擦られている。用途は不明である。石器4（第56図、図版56）の1は石核で、剥離の方向や打点に一定した方向性は持っていない。2～8は剥片でほとんどが縦長状の剥片である。

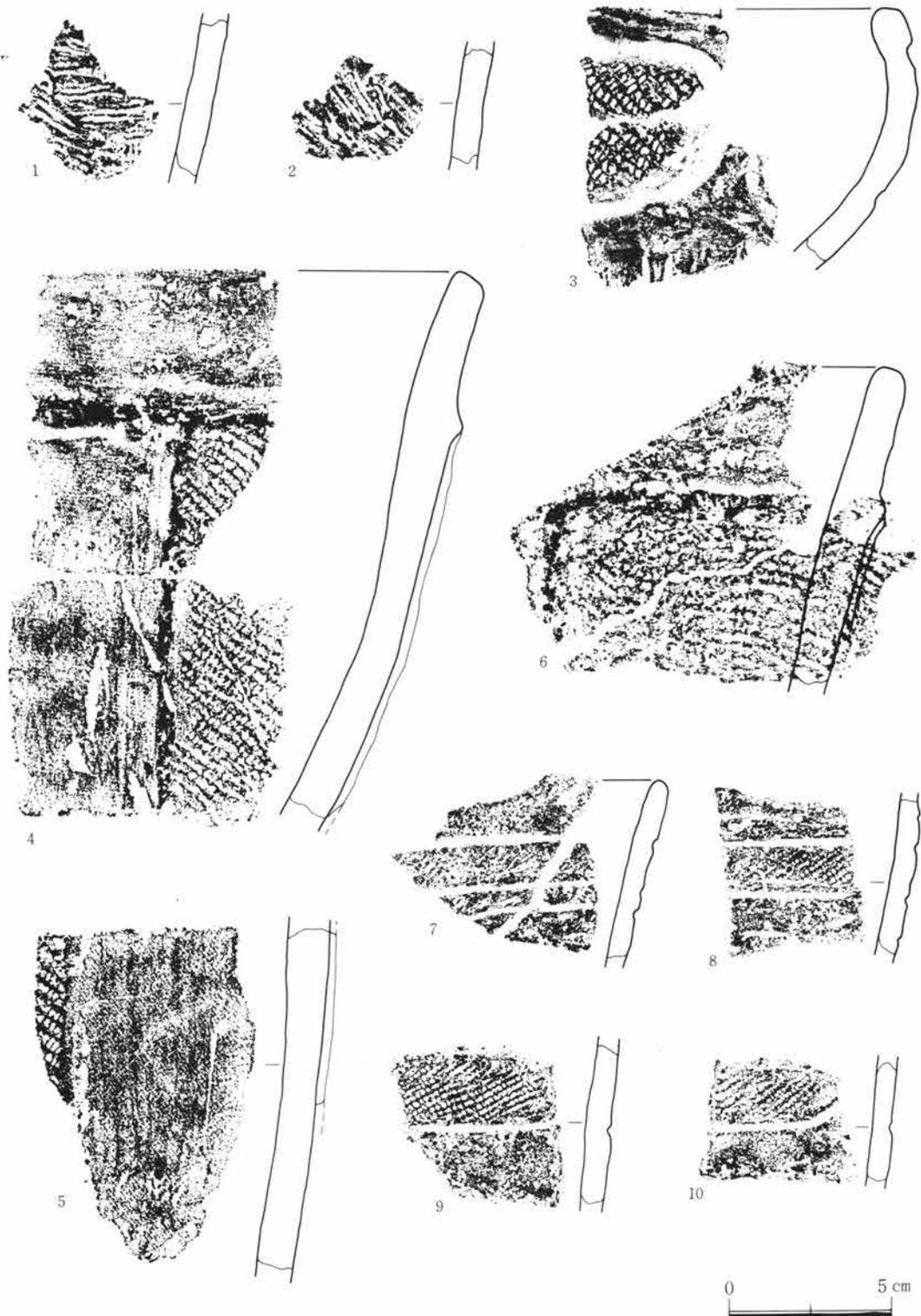
（下城 正）



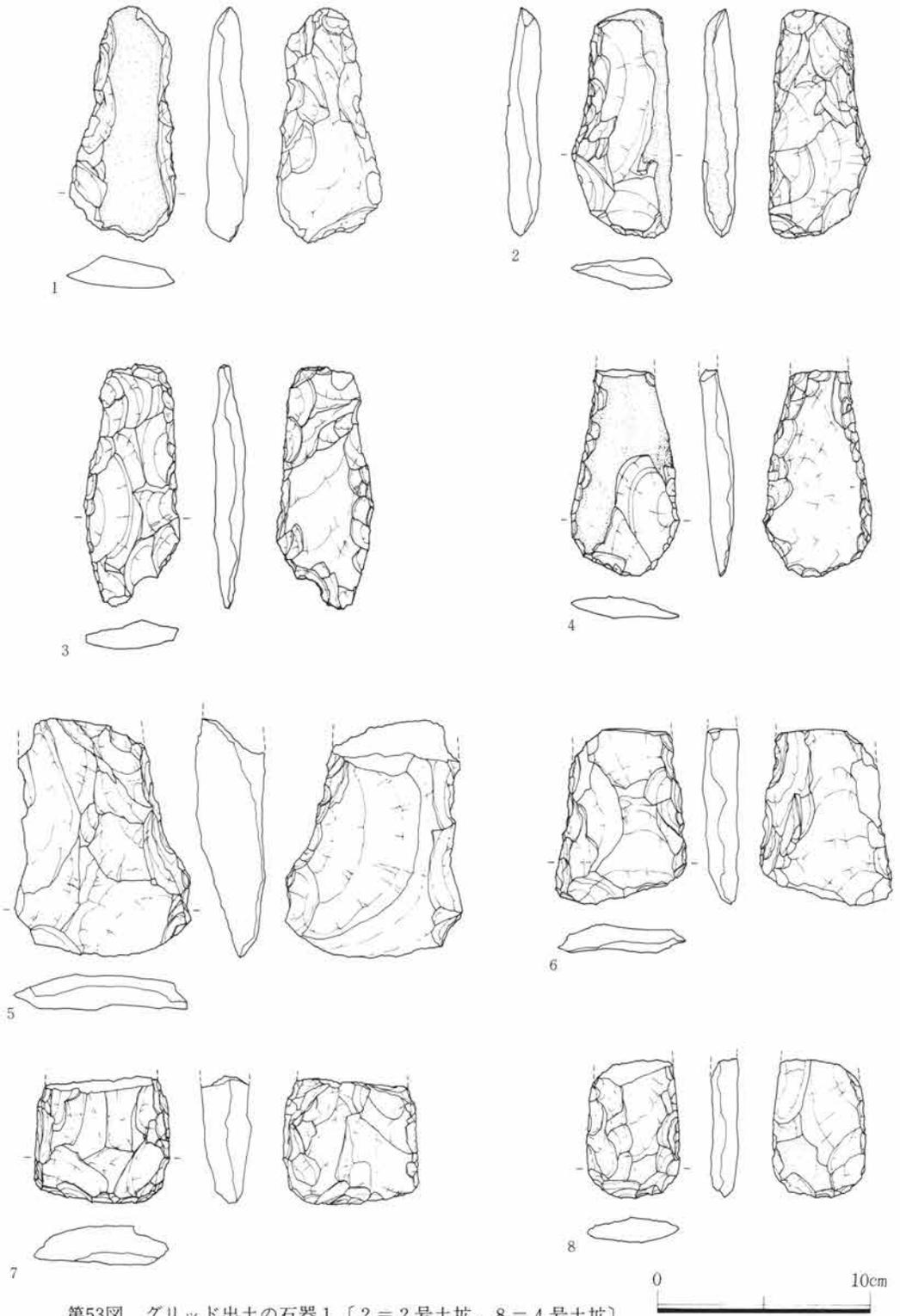
第50図 1・2・3号土坑 (1:60)



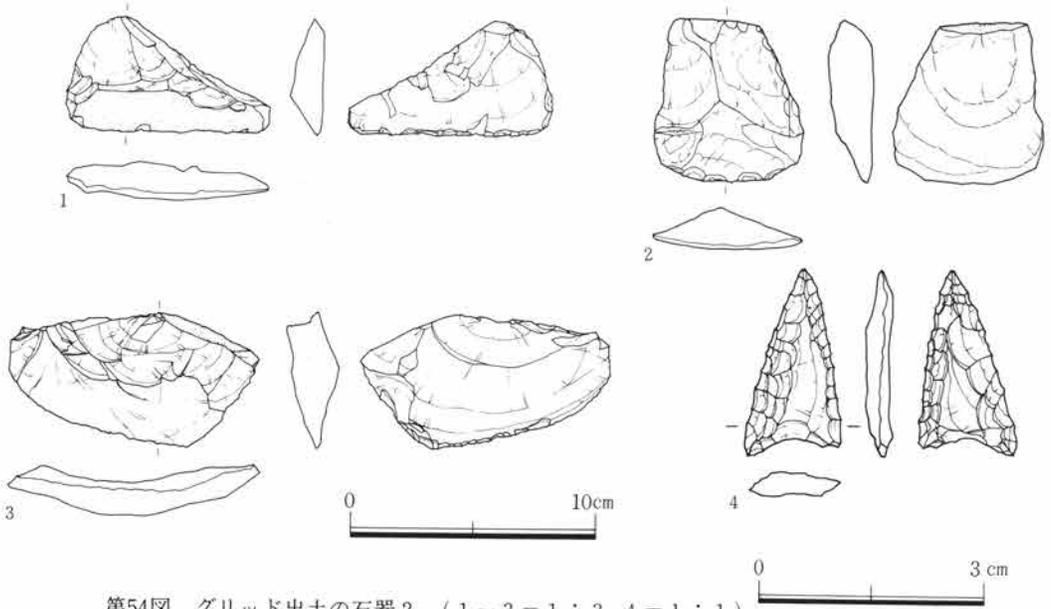
第51图 4・5・6号土坛 (1:40)



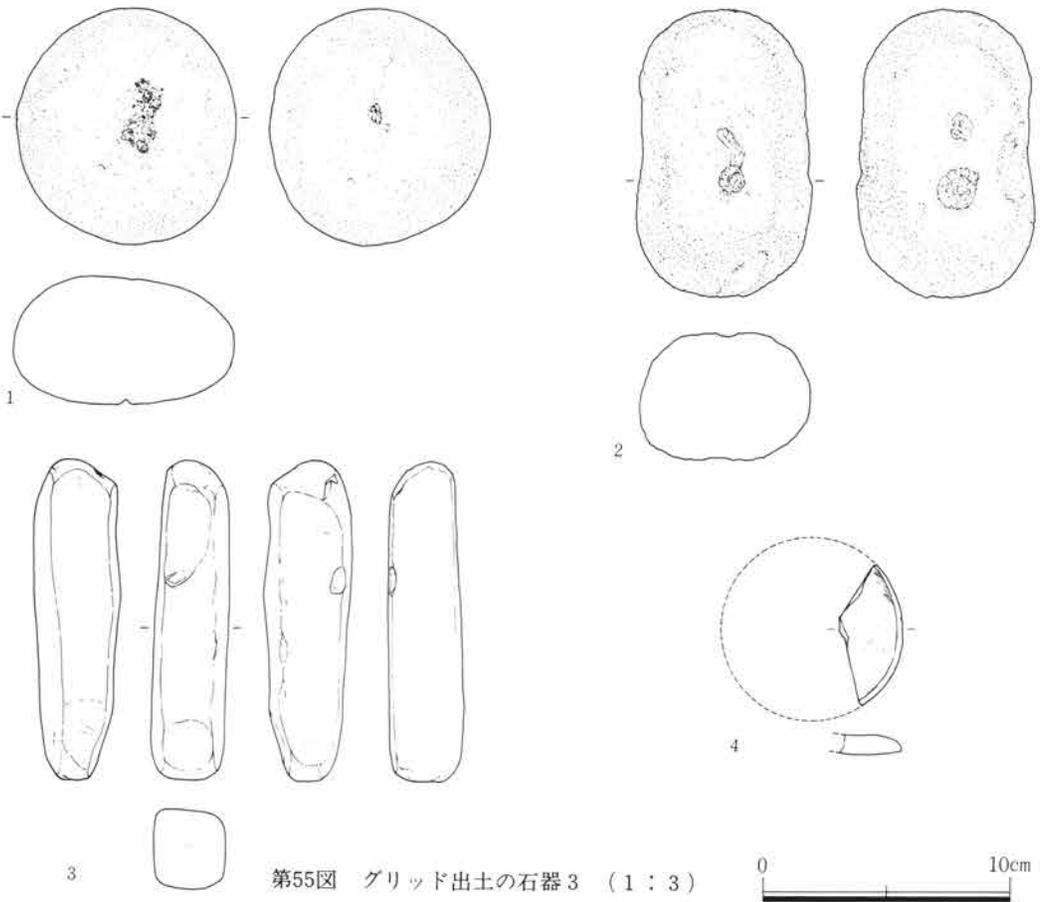
第52図 グリッド出土の縄文土器 (1:2)



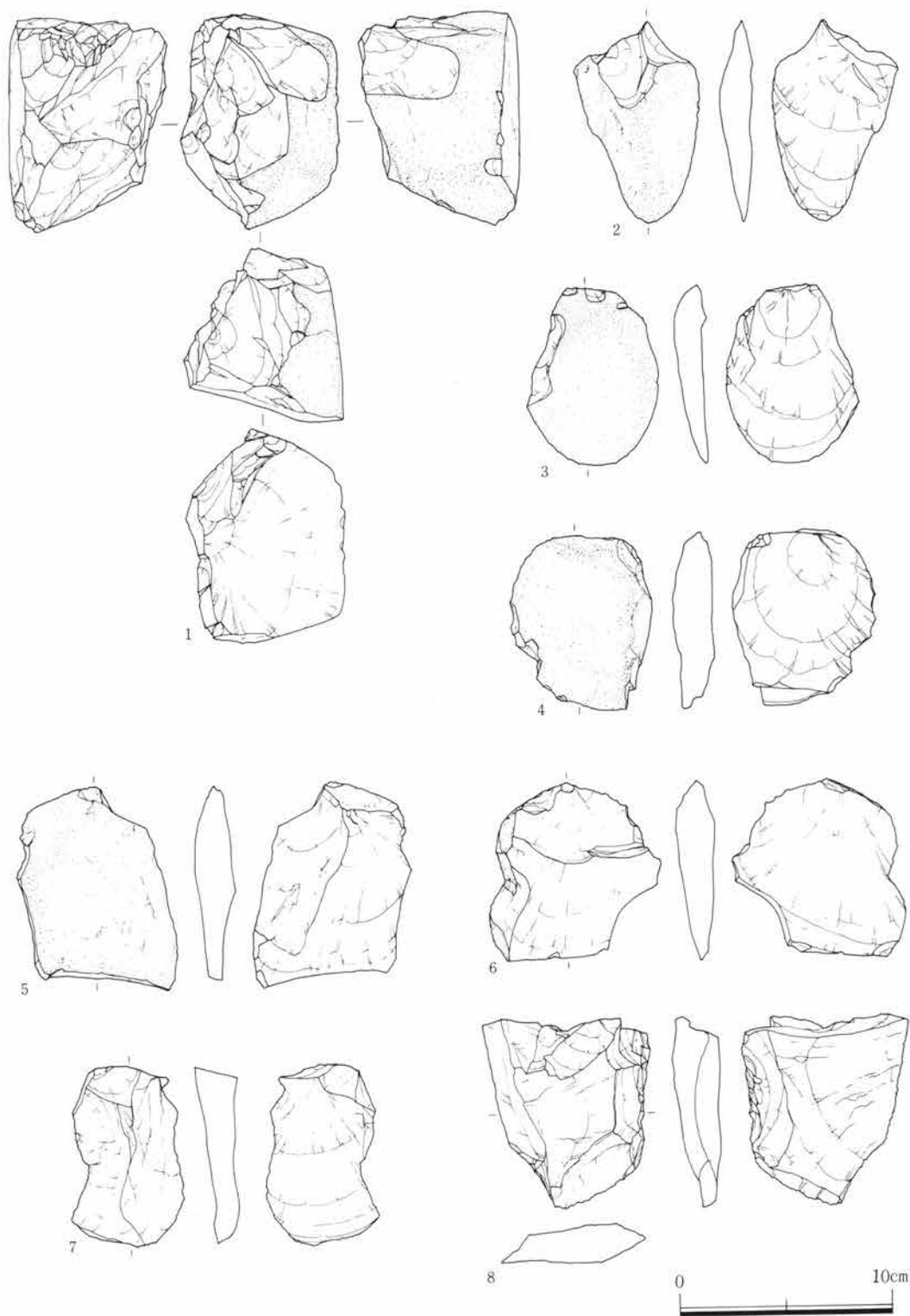
第53図 グリッド出土の石器1〔2=2号土坑、8=4号土坑〕
(1:3)



第54図 グリッド出土の石器2 (1~3=1:3、4=1:1)



第55図 グリッド出土の石器3 (1:3)



第56図 グリッド出土の石器4 (1:3)

3 弥生時代の遺構と遺物

1号住居址 (第57・58図、図版48・49)

原沢寄りの遺跡南端に近く0区北端に位置し、2号土壇を切り、北西約10mに3号住居址がある。長軸4.77m、短軸4.07mの規模で、やや台形状に歪んだ長方形を呈し、長軸方向はN-55°-Eを示している。

覆土①と②は黒褐色土でF Pを含み、③と④は暗褐色土で、④は特にローム小ブロックが多く流れ込んでいる。⑤と⑥は暗褐色土でローム小ブロックを少量含み、⑦層は黒色土である。③～⑦にかけては多量の炭化物が含まれていた。

壁はほぼ直に掘り込まれ、遺存状態の良好な部分では高さが約90cmある。床面は支柱穴間の中央部分が特に固く締っている。周溝はない。

柱穴は径約25cmの不整形円形をした支柱穴4本が確認された。柱穴は南壁寄りの2本が深さ39cmと46cmで、北壁寄りの2本は51cmと53cmで、北壁寄りの2本がやや深くなっている。各柱穴の東・西壁からの距離は1.32m～1.39mとほぼ等距離にあるが、北壁からの距離は1.38m～1.44mで南壁からは1.30mでやや南に寄っている。

炉は北壁寄り支柱穴間の中央に位置し、65cm×62cmの不整形円形を呈しており、深さは18cmで坑底状をなし焼土が詰まっていた。また、炉の南壁には河原石と甕の大片が据えられていた。

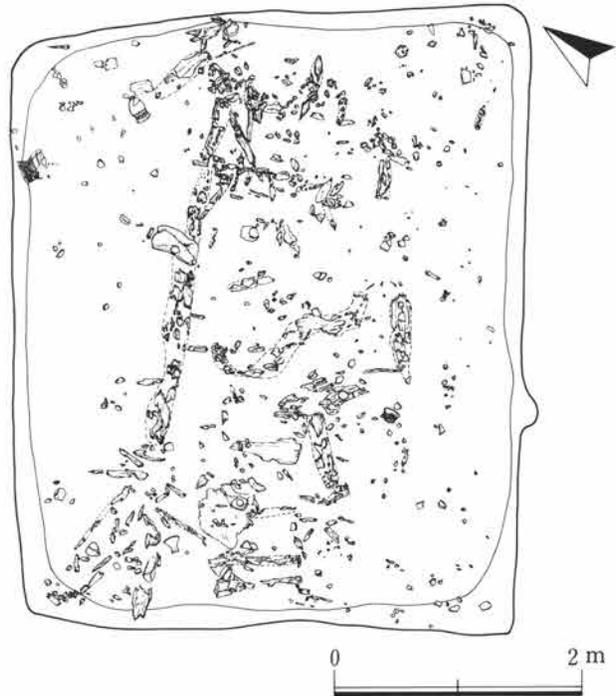
貯蔵穴は南東隅の柱穴と南壁の間に位置し、径37cmの円形を呈し深さ40cmである。

出土遺物としては壺・甕・高坏・鉢等多くの器種があるが、ほとんどが周壁に沿った覆土中や炭化材上部から出土している。

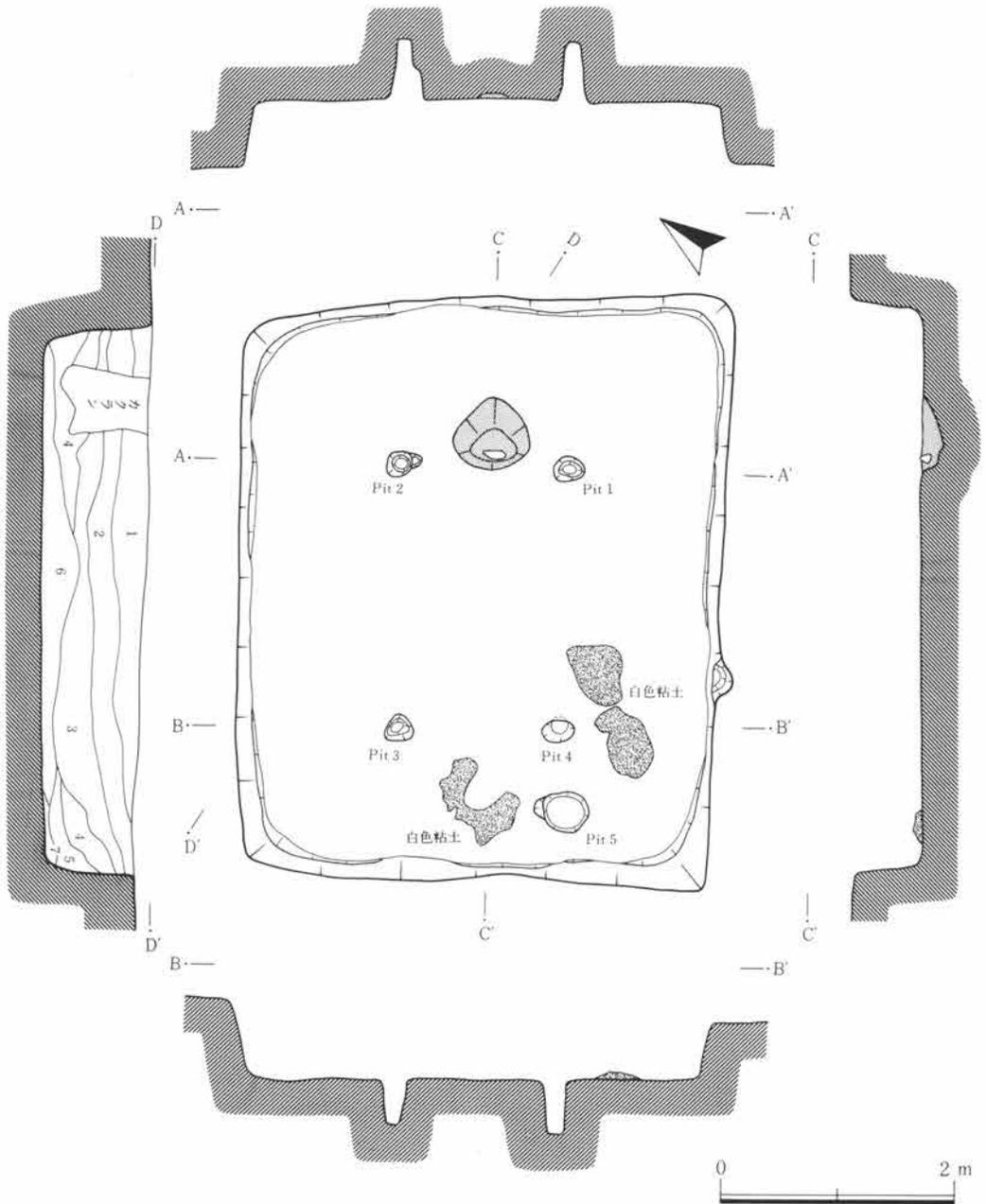
本住居址の床面および覆土下部からは多量の炭化材が出土している。

棟材あるいは梁材と思われる丸木材が西壁寄りの柱穴間にあり、榿木材あるいは母屋材と思われる細い材が、南西隅と北壁寄りに折り重なるように出土し、板材と思われる平板な材が南壁寄り中央から出土した。

また、灰白色粘土が南東隅寄りの床面に堆積していた。(神戸聖語)



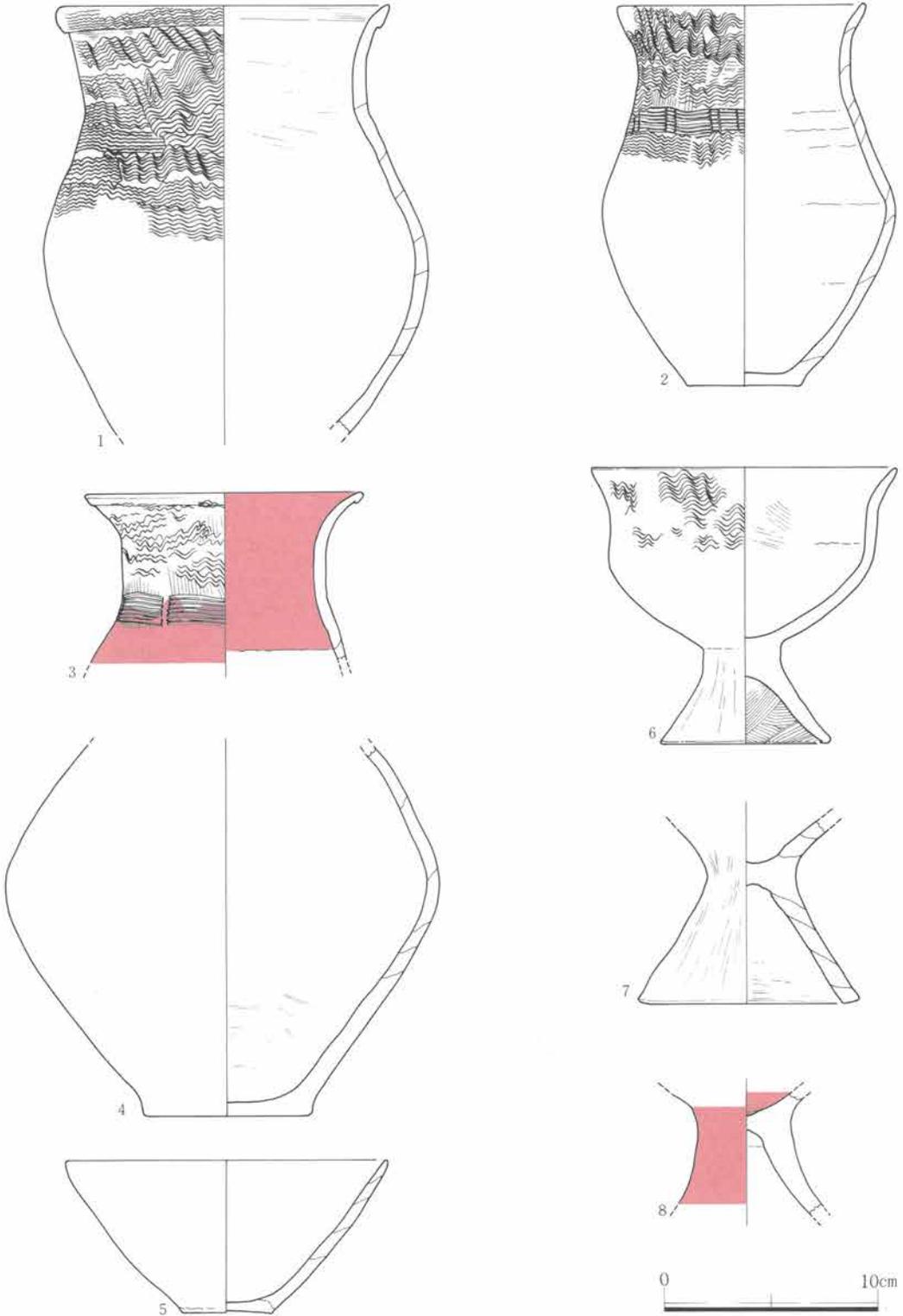
第57図 1号住居址炭化材出土状態 (1:60)



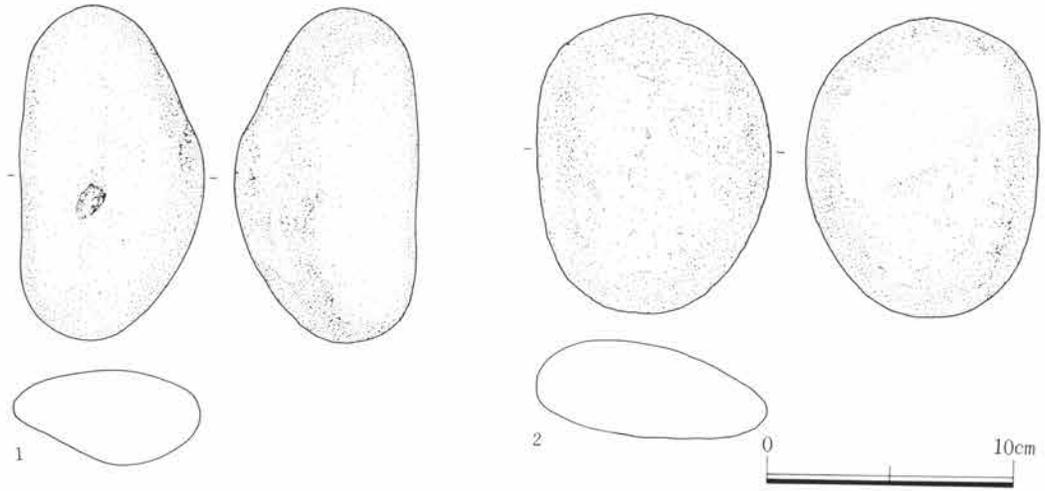
第58図 1号住居址 (1:60)

1号住居址出土土器 (第59図、図版57・58-1)

1は甕である。底部および胴下半部が約 $\frac{2}{3}$ ほど欠損している。法量は口径15.5cm、胴径18.0cmで最大径は胴中位にある。内面に輪積痕が見られる。頸部は緩やかに括れ、口縁部は外反し端部は折り返しとなっている。調整は内外面へラ磨き後、口唇部から胴上半部まで8本単位の波状文が施されている。胎土には砂粒をやや多く含み、焼成は良好。外面の約 $\frac{1}{2}$ は磨滅している。色調



第59図 1号住居址出土土器 (1:3)



第60図 1号住居址出土石器 (1:3)

は赤褐色。外面にススが付着している。2は甕である。口縁部を一部欠損する。法量は口径11.5cm、胴径13.8cm、底径5.2cm、器高17.8cmで最大径は胴中位。成形は内面に僅かに輪積痕が認められる。内外面とも丁寧なヘラ磨きが施され、その後外面頸部から口縁部にかけて波状文、最後に頸部に右回り簾状文が施文されている。胎土には、砂粒・小石を含み、色調は赤褐色または淡褐色。焼成良好。外面には黒斑が4ヶ所存在し、内外面ともスス付着。3は甕であるが、口縁部、頸部のみの残存である。口径13cmで輪積成形である。外面口縁部は波状文施文後、右回り簾状文、最後に胴上部赤色塗彩、ヘラ磨き。内面は口縁部赤色塗彩後ヘラ磨き。砂粒少量含み、焼成良好。色調は淡黄褐色。4は壺で胴部以下 $\frac{2}{3}$ の残存である。最大径は胴中位で21.3cm、底径8.0cmである。内外面ヘラ磨き。内面には刷毛目痕が残る。砂粒を含み焼成良好。色調は淡褐色。外面に黒斑あり。5は浅鉢である。口径15cm、底径4.2cm、器高7.1cmの法量をもつが、 $\frac{1}{4}$ 程度の残存である。内外面ヘラ磨きで小砂粒を含み、焼成は良好である。色調は淡褐色。内面に黒斑がある。6は小形台付甕である。口径14.5cm、胴径12.5cm、底径8.0cm、器高13.0cmである。最大径は口縁部にあり、口縁～頸部には波状文が施されている。内外面ヘラ磨き、脚部内面は刷毛目調整。全体的に小砂粒を含み、焼成は普通。色調は暗褐色～赤褐色。外面にはススが付着している。7は台付甕の台部である。底径10.5cm、輪積成形。外面縦ヘラ磨き、内面横指ナデ。外面には黒斑が存在する。砂粒含み硬質。色調は淡褐色。8は高坏脚部の一部である。坏部内面と脚部は赤彩後ヘラ磨き。砂粒を少量含み、硬質である。(飯塚卓二)

1号住居址出土石器 (第60図、図版58-2)

1・2ともに磨石状の石器で、1はやや歪んだ長楕円形を呈し、2はやや扁平で楕円形を呈している。両者とも表裏面は良く磨れているが側面は自然面のままである。(下城 正)

3号住居址（第61図、図版51・52）

側道調査の際確認され、調査区に平行して東半分がかかり、西半は拡張して調査を行なった。長軸8.54m、短軸4.83mの規模で長方形を呈し、長軸方向はN-7°-Wを示す。

覆土①は黒色土で②は黒褐色を呈し、ともにFPを含む。③は褐色土でローム大ブロックやFPを多く含み、④～⑥は黒褐色土で黒色土とロームのブロックが混入している。⑦は炉の上部で焼土を多く含んでいた。覆土下部は周壁等の流れ込みの状態を示しているが、③は細片の土器も多く出土しており、急激に埋没した状態を示している。覆土上部は黒色土の自然堆積の状態である。

壁はほぼ直で良好な部分では70cmの高さがあるが、平均55cmの高さである。床面は非常に固く叩かれた良好な状態である。周溝はない。

柱穴は中央寄りに4本の支柱穴があり、南壁寄りに一对の支柱穴と周壁に沿って8本の支柱穴がある。支柱穴は円形を基調とし、深さは35cm～42cmであり差はないが、南壁寄りの柱穴は径約23cmで、北壁寄りの柱穴は径が43cm～58cmでひとまわり大きい。各支柱穴の東・西壁からの距離は1.55m～1.65mとほぼ等距離にあるが、北壁からは2.31mで南壁からは1.95m～2.05mと、距離が短くなっている。南壁寄りの対となる支柱穴（ピット6・7）は支柱穴と南壁との間でやや内側に寄っており、両者の間隔は1.25mである。長径40cm～44cmの楕円形を基調とし、深さは12cmと24cmで支柱穴より浅くなっている。また、東壁に沿って3本、西壁に沿って4本、北壁に沿って中央に1本の支柱穴があり、径10cm～18cmの円形を基調としているが、深さは12cm～66cmと大きな差がある。この他に東壁南東隅寄りに浅い掘り込み（ピット10）があった。

炉は北壁寄り支柱穴の中間に位置しており、76cm×66cmの不整形円形を呈していた。深さは10cmと浅いが良く焼けていた。炉の南壁立ち上がり部分には、細長い河原石が短軸方向と平行に据えられていた。

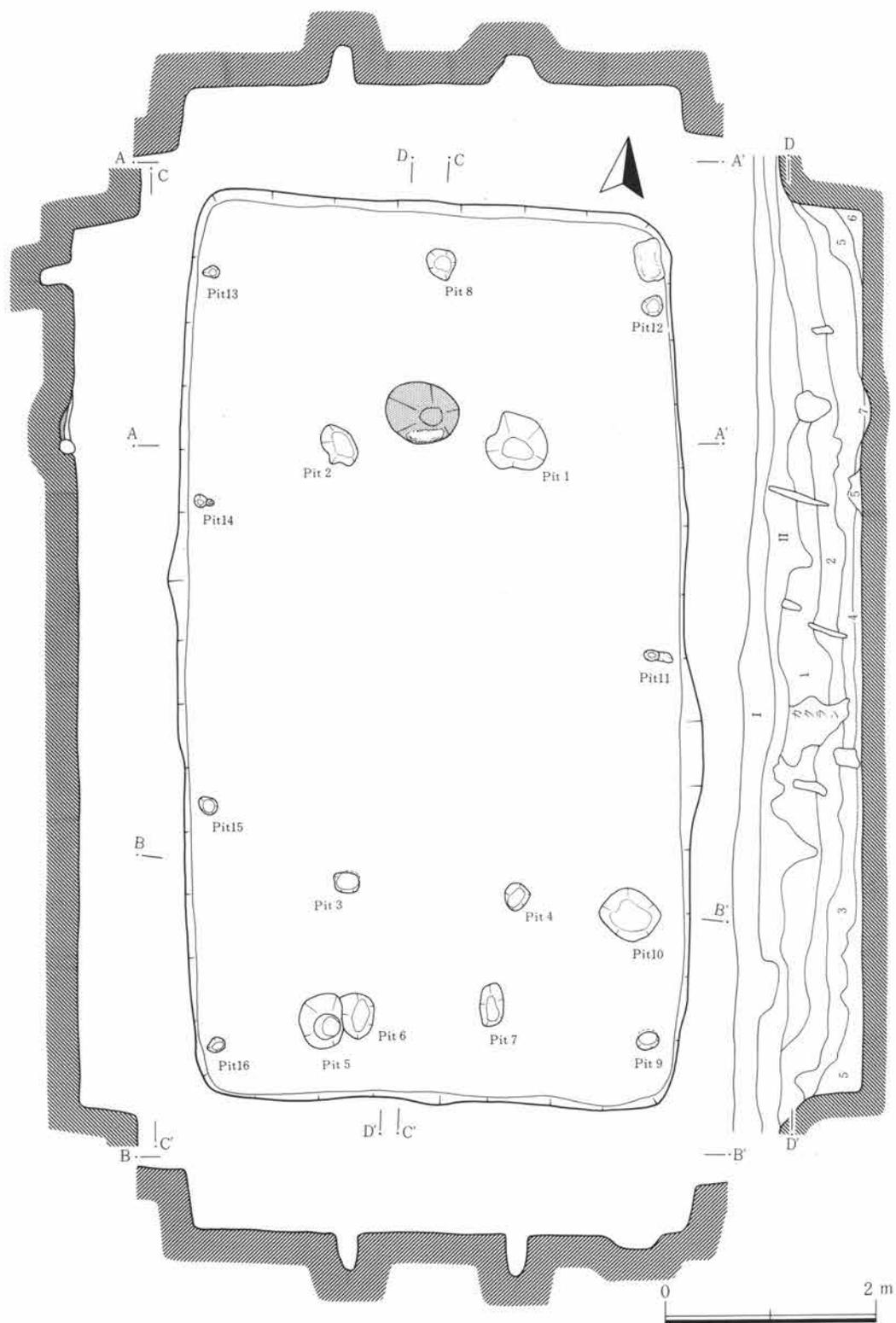
また、貯蔵穴と考えられるピット（ピット5）が南西隅寄りの支柱穴（ピット6）に西接しており、50cm×40cmの不整形円形を呈し、深さは77cmと非常に深い。このピット内には胴部下半以下を欠いた甕（土器2）が据えられていた。

遺物の出土状態としては、土器1の壺が南壁中央付近に集中して出土し、細片が住居址南半に散布していた。土器3の小形甕は南東隅寄りの位置だけに散布し、土器4の鉢は南壁寄りの支柱穴と支柱穴の間に散布しており、土器5の片口土器は南西隅寄り床面上に潰れた状態で出土した。これらの土器は床面直上および床面近くから出土しており、出土位置も南壁寄り支柱穴より南に主な破片は散布していた。

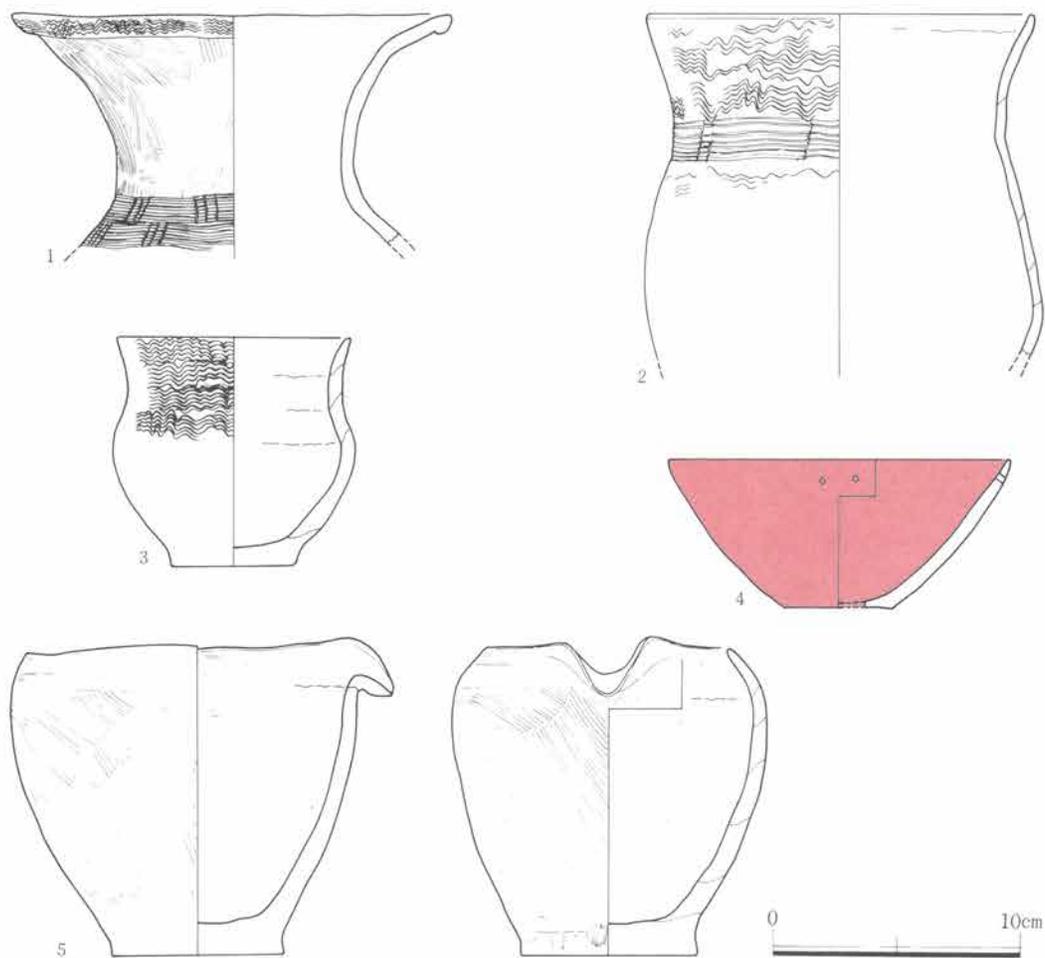
（中里吉伸）

3号住居址出土土器（第62図、図版59・60—1）

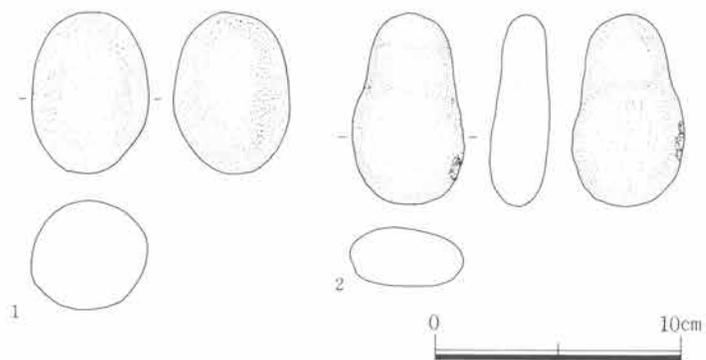
1は壺である。口縁部および頸部のみの残存である。口縁部の直径は18.0cmである。口縁部は大きく外反し、端部は折り返しとなる。調整は縦刷毛目整形後、折り返し口縁部に波状文、頸部



第61図 3号住居址 (1 : 60)



第62図 3号住居址出土土器 (1:3)



第63図 3号住居址出土石器 (1:3)

第VI章 大原遺跡

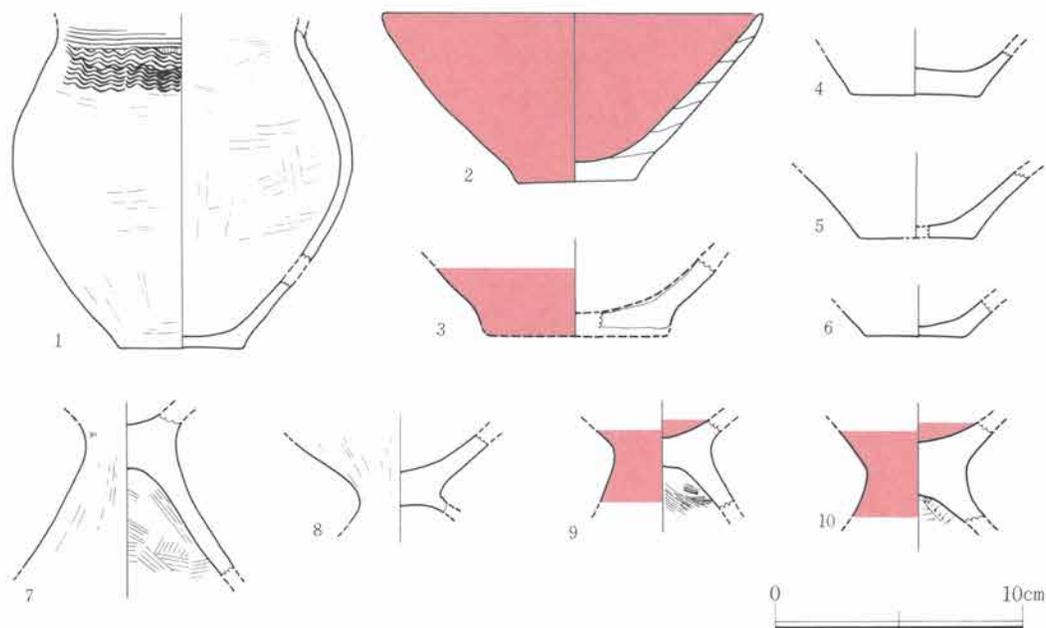
に右回り簾状文を2段施文している。内面は丁寧な横へら磨き。胎土には微砂粒を含み、焼成は不良。色調は淡黄褐色。2は甕で、胴下半から底部が欠けている。法量は口径15.8cmで、頸部は緩やかに括れる。内面には輪積痕がみられる。内外面とも丁寧なへら磨きが施され、外面には波状文・右回り簾状文の順で施文されている。胎土には小砂粒を含み、焼成は普通。色調は淡褐色で、外面には全体的にススが付着している。3は小形甕である。全体の約 $\frac{1}{2}$ 程度残存している。法量は、口径9.5cm、胴径10.0cm、底径5.0cm、器高9.2cmで最大径は胴上位に存在する。内外面とも横へら磨きで、外面口縁部から胴最上部にかけて波状文が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成普通。色調は暗褐色。外面にはススが付着している。4は浅鉢である。全体の $\frac{1}{3}$ 程度残存している。法量は口径14.0cm、底径4.5cm、器高6.0cmである。全面に赤色塗彩後、へら磨きされている。口縁部付近に直径2mmの円孔が2個存在する。全体に砂粒を含み、焼成良好。5は片口で完形である。口縁は10.2cm×13.0cmの楕円形を呈する。底径は直径7cmの正円形で、器高は12.5cmである。内外面とも刷毛整形の後、へら磨きがなされている。胎土は、砂粒を含むが少量である。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。外面は全体的にススが付着している。(飯塚卓二)

3号住居址出土石器(第63図、図版60-2)

1はタマゴ形をした磨石状の小形の石器で、両端部には使用痕が見られないが他の面は全面が非常に良く磨れている。2は偏平なダルマの様な形状をしており、下半はやや大きく丸みを持っており、上半はやや小さい。上半と下半の接点の部分は摩耗痕が約1cmの幅で全周している。用途は不明である。(下城 正)

グリッド出土の弥生土器

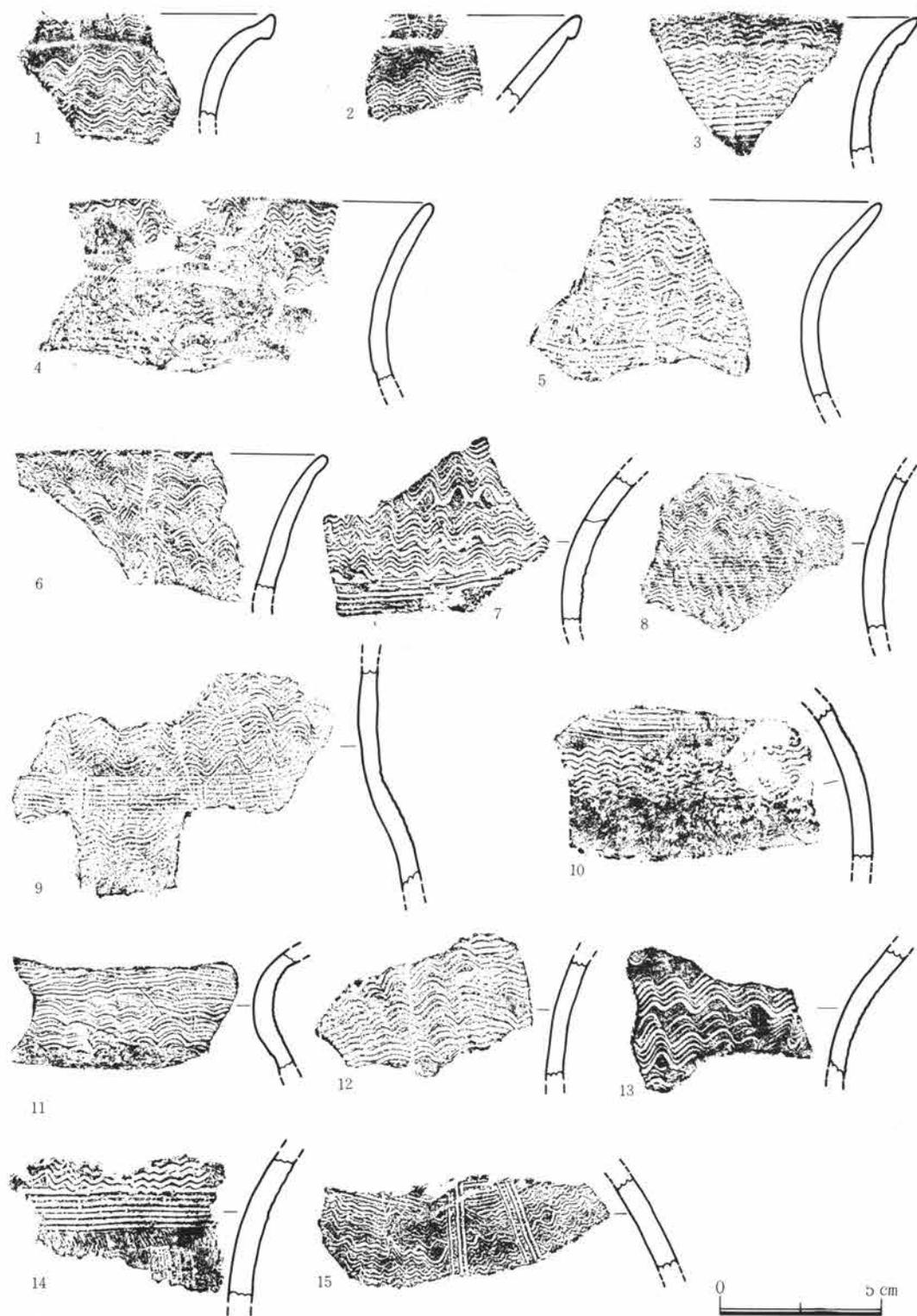
土器1(第64図、図版62-1)、1は甕である。口縁部および胴部の $\frac{2}{3}$ が欠損している。胴径の推定は13.7cm、底径は5.0cmで、最大径は胴中位にあると推定される。外面は、底部を含めて丁寧なへら磨きがおこなわれ、胴最上部に波状文、頸部に簾状文が施されている。内面はへら削りの後、へら磨きがおこなわれている。砂粒を含み、焼成は良好で硬質。色調は淡褐色と赤褐色で、胴部に黒斑がみられる。2は浅鉢である。全体の $\frac{1}{3}$ 程度欠損している。法量は口径15.6cm、底径4.5cm、器高6.5cmである。底部を除く内外面に赤色塗彩され、丁寧にへら磨きされている。砂粒を多く含み、焼成良好で硬質。3は壺形土器の底部である。底面および内面は剝離している。推定底径6.0cm、外面に赤色塗彩されている。砂粒を含み硬質。4は甕形土器の底部で $\frac{1}{4}$ の残存。底面および内面はへら磨きされている。底径5.5cm、砂粒をやや多く含み、焼成良好。硬質。色調は褐色。外面にススの付着がみられる。5は甕形土器の底部で $\frac{1}{2}$ の残存。内外面ともへら磨きされている。砂粒を含み硬質。焼成良好。色調は淡褐色を呈する。6は甕形土器の底部で、径は4.2cmである。内外面とも丁寧なへら磨きで、底面はへら削りである。砂粒をやや多く含み硬質。内外面とも赤褐色を呈する。7は台付甕の台部であるが、裾部が欠落している。外面は縦刷毛調整後縦へら磨



第64図 グリッド出土の弥生土器1 (1:3)

きであり、内面は刷毛調整がおこなわれている。色調は赤褐色および淡褐色。内外面に黒斑がある。8は台付甕の底部であり、台部は欠落している。外面は指ナデ後、縦刷毛調整。最後にヘラ磨きがおこなわれている。内面はヘラ磨き。砂粒を多く含み、焼成は普通であるが硬質。色調は淡褐色。外面には黒斑がある。9は高坏の坏部と脚部の接合部である。外面と坏部内面は赤彩後ヘラ磨き、脚部内面は刷毛調整がおこなわれている。砂粒を少量含み、土の粒子は粗い。焼成は良好。10は高坏の坏部と脚部の接合部である。外面および内面は赤色塗彩後、ヘラ磨き。胎土には小砂粒を含み、内面黒色で焼成不良。外面は黒ずんだ赤色で、ススが一部に付着している。

土器2 (第65図、図版61)、1～14は甕、15は壺と考えられ、すべて口縁部から胴上部にかけてのものである。1～6は口縁端部が残存するが、このうち、1は端部が肥厚し、2・3は口唇外面に凸帯をもっている。7～15は頸部から胴上部にかけてのもので、口縁端部を欠いている。文様は、口縁端部から胴上部にかけて波状文が施文されているが、9・10は胴最上部止まり、14は頸部以下が縦刷毛目、15は頸部から3本を1単位とする櫛状工具による櫛目文が縦方向に2条施されている。頸部には籐状文が施されているものと無いものがある。3と9は等間隔で右回り、7・8・10・14・15は櫛描横線文となっている。土器内面は15を除いてすべて横ヘラ磨きである。15は横指ナデである。土器の胎土には、すべて砂粒が含まれており、6と9は胎土粒子が細かく硬質である。焼成は4・10・13が良好であるが、他は普通である。色調は1・4・10・13が赤褐色、6・9が黒褐色、他は褐色～淡褐色である。3と12には黒斑がみられ、15を除いて表面が風化しているもの以外はすべてススの付着がみられる。(飯塚卓二)



第65図 グリッド出土の弥生土器2 (1:2)

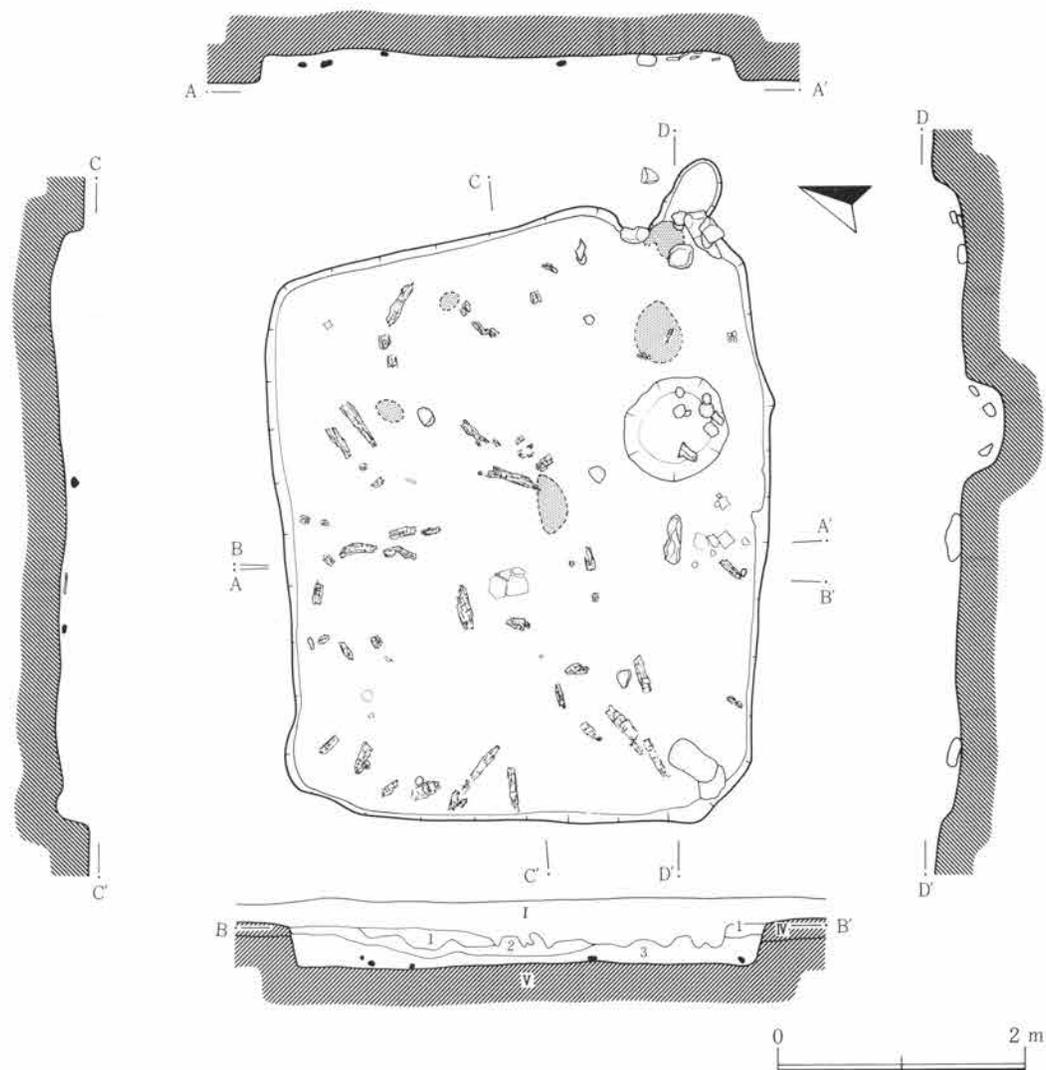
4 平安時代の遺構と遺物

2号住居址 (第66図、図版50)

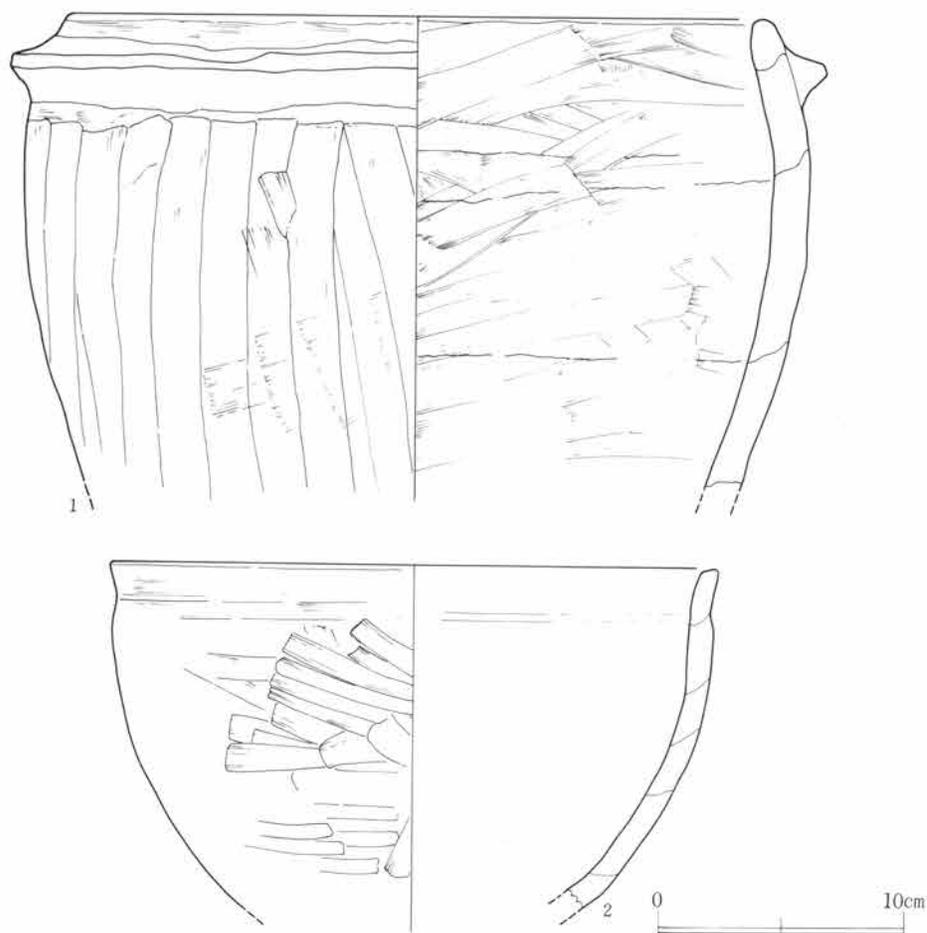
遺跡南端の原沢寄りに位置し、表土下約15cmで確認され、耕作等による攪乱で遺存状態は至って不良である。長軸4.82m、短軸4.03mの規模で歪みのある長方形を呈し、長軸方向はN-72°-Eを示している。

覆土①は黒色土で軽石を多量に含みザラザラしている。②は黒褐色土で極少量のローム小ブロックと炭化物を含む。③は黒色土でロームブロックと炭化物を多量に含む。覆土全体は攪乱が激しいが自然に埋没した状態を示していた。

床面は凹凸が激しく良好な状態ではない。また、周溝・柱穴は確認できなかった。



第66図 2号住居址 (1:60)



第67図 2号住居址出土土器 (1:3)

カマドは南東隅に位置しており、やや歪みを持った長楕円形で約70cm斜めに張り出していた。煙道は確認できなかった。焚き口の両袖には自然石が据えられていた。北側の袖には、やや斜めに自然石を1石据え粘質土で固めていた。南側の裾には同じく自然石を一石斜めに据え、裏込めや上部も自然石と粘質土で固めていた。カマド内は焚き口部分が非常に良く焼けていた。

貯蔵穴は南壁寄りやや東に位置し、径約85cmの不整円形を呈し、深さ35cmで碗底状をなしている。貯蔵穴内からは自然石が数個出土しただけで、カマドとともに遺物は出土していない。

出土遺物としては羽釜(第67図1)と土釜(第67図2)の2個体だけで、羽釜は住居址中央の床面上に潰れた状態で出土し、土釜は南壁寄り中央に集中して散乱していた。また、長楕円形をした河原石が南壁中央寄りに1石、南西隅に2石床面上より出土した。

なお、住居址内全体には細かい炭化材が床面上や覆土下部に多量に散布しており、床面も部分的に焼けており火災を受けた可能性が強い。(中里吉伸)

2号住居址出土土器 (第67図、図版62-2)

、1は羽釜である。上半部 $\frac{1}{3}$ の残存である。推定口径28.5cm、胴最大径32.0cmである。内面および断面には輪積痕が見られる。羽部の凸帯はかなり上位に付されている。この凸帯を付けた後、外面は縦ヘラ削りがおこなわれている。なお、器肉が1.3cm~1.5cmと厚く、凸帯も十分な調整がおこなわれておらず、凹凸が多い。内面は指ナデ。砂粒を含み、焼成普通。色調は淡褐色。外面にはススが付着している。2は土釜である。全体の約 $\frac{1}{3}$ 程度の残存で、底部を全く欠いている。口径推定24.7cmで、最大径は口縁部にある。断面には輪積痕が見られることから、輪積成形であることがわかる。内外面とも指ナデによる調整であるが、外面胴部にはナデ痕が明瞭に残り、口縁部は最後に強く横ナデしている。砂粒を含み、焼成良好。赤褐色を呈し、ススが少量付着する。

(飯塚卓二)

5 時期不明の遺構

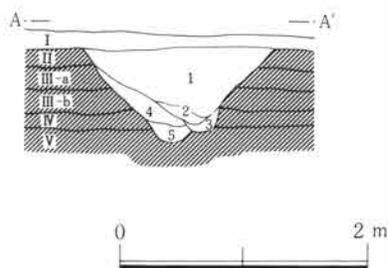
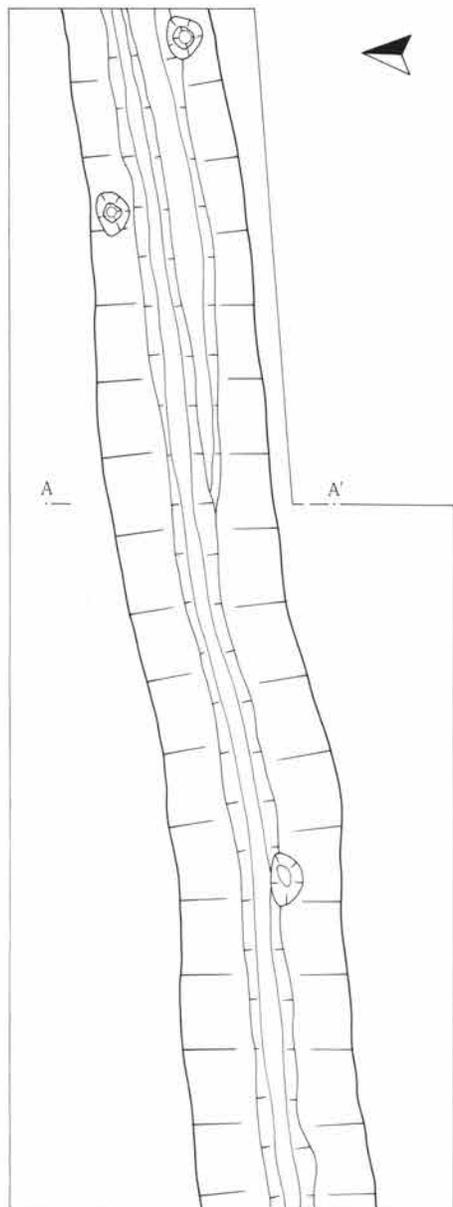
1号溝 (第68図、図版53-3)

遺跡をのせる平坦な段丘面の南半中央に位置し、調査区を横切るように東西に走向している。

規模は幅1.42m~1.56m、深さ0.63m~0.85mで薬研堀り状を呈し、東行するに従いやや深くなり、若干蛇行している。走向はN-80°-Eである。

一度掘り直されており、改修後は南へ約25mほど位置が移動している。また、側壁に3本の柱穴が確認されたが溝との関係は不明であった。

覆土①は暗褐色土で軽石を多く含み、②~④は褐色土を基調とし、ロームブロックの混入量に差がある。④は①と同様でローム小ブロックを含み、⑤は③とほぼ同様の土層である。覆土は北側からの流れ込みが目立ち、水の流れた痕跡は見られなかった。比較的短期間で埋没した可能性が強い。(平野進一)



第68図 1号溝 (1:60)

第4表 大原遺跡石器一覧表

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
53	1	打製石斧	頁岩	11	5	103	1区G-06グリッド以下 1G06のように表わす。	
	2	打製石斧	頁岩	10.7	4.7	96	2号土坑	
	3	打製石斧	頁岩	11.2	4.4	83	T24	
	4	打製石斧	頁岩	—	5.1	72	T12	基部欠損
	5	打製石斧	頁岩	—	8	276	0E39	基部欠損。サガリテスの化石有り。
	6	打製石斧	頁岩	—	6	95	0区表採	基部欠損
	7	打製石斧	頁岩	—	6.4	110	0G44	基部欠損
	8	打製石斧	頁岩	—	4.3	56	4号土坑	基部欠損
54	1	剥片石器	頁岩	4.6	8.3	45	T4	
	2	剥片石器	頁岩	6.5	6	66	0F31	
	3	剥片石器	頁岩	5.3	10.2	86	0I29	
	4	石 鏃	流紋岩	2.4	1.3	0.6	0E30	
55	1	凹 石	砂岩	9.5	9	660	1G23	
	2	凹 石	石英閃緑岩	11.5	7	716	0E38	
	3	砥 石 ?	頁岩	13	3	253	0E39	
	4	不 明	泥岩	径 7.4		13	T9	欠損
56	1	石 核	頁岩	10	7.5	655	2G18	サガリテス・有孔虫の化石有り。
	2	剥 片	頁岩	9.4	5.5	64	0区表採	
	3	剥 片	頁岩	8.2	6	64	3I12	
	4	剥 片	頁岩	8	6.5	121	1G34	

5 時期不明の遺構

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
56	5	剥 片	頁岩	9	6.7	136	0 G21	
	6	剥 片	頁岩	8.2	7.3	101	0 F36	
	7	剥 片	頁岩	8.4	5	70	0 区表採	
	8	剥 片	頁岩	8.5	7.5	152	0 区表採	
60	1	磨 石	緑色変質岩	13.5	7.4	550	1 住	
	2	磨 石	砂岩	12	9.4	608	//	
63	1	磨 石	凝灰岩	6.5	4.7	215	3 住	
	2	磨 石	緑色変質岩	7.7	4.5	110	//	

前 中 原 遺 跡

第七章 前中原遺跡

1 遺跡の概要 (第69図、図版63～67)

遺跡は大峰山系の東南麓末端に位置し、東方へ緩く傾斜する幅約80mの台地上に立地している。この台地上には大峰山麓独特の景観をなす、溶結凝灰岩の大きな転石が数多く露頭し、台地の成因を物語っている。

調査区は、台地を南北に横断する状態で北西部が一段高く、調査区西端と東端では約5mの比高差がある。また、調査区の南北は新期の開析の進行により急激に落ち込む。

調査で確認された遺構は、住居址5軒(縄文時代4軒、平安時代1軒)と炉穴4基(縄文時代)土坑35基(縄文時代22基、平安時代1基、時期不明12基)、墓坑4基(近世)である。各時代の遺構は台地中央部にほとんどが集中し、一部南縁辺部に位置している。台地の北西部や中央部南縁辺寄りには遺構はなかった。

縄文時代の遺構と遺物は本遺跡の主体をなすもので、早期中葉から前期後半までの各時期の土器が出土し、石器も多量に出土し器種も多様である。4軒の住居址は前期前半に比定され方形プランを基調とし、台地の中央部に立地し、2～4号住居址は調査区東半中央に近接して位置し、1号住居址だけが調査区西端に位置している。炉穴4基は早期後半に比定され、楕円形を基調とし、3基は台地南縁部で溶結凝灰岩がローム層中より数多く露出している地点に位置し、1基だけが台地中央付近に位置している。22基の土坑は円形を基調とし、上部や上縁部に偏平な河原石が据えられている例が多くある。また、覆土も他の時期の土坑と明確な差があり、第Ⅲ層が混入したほぼ同質の土層ですべてが埋没していた。土坑は住居址と重複する例もあり、台地の中央部周辺に分布していた。

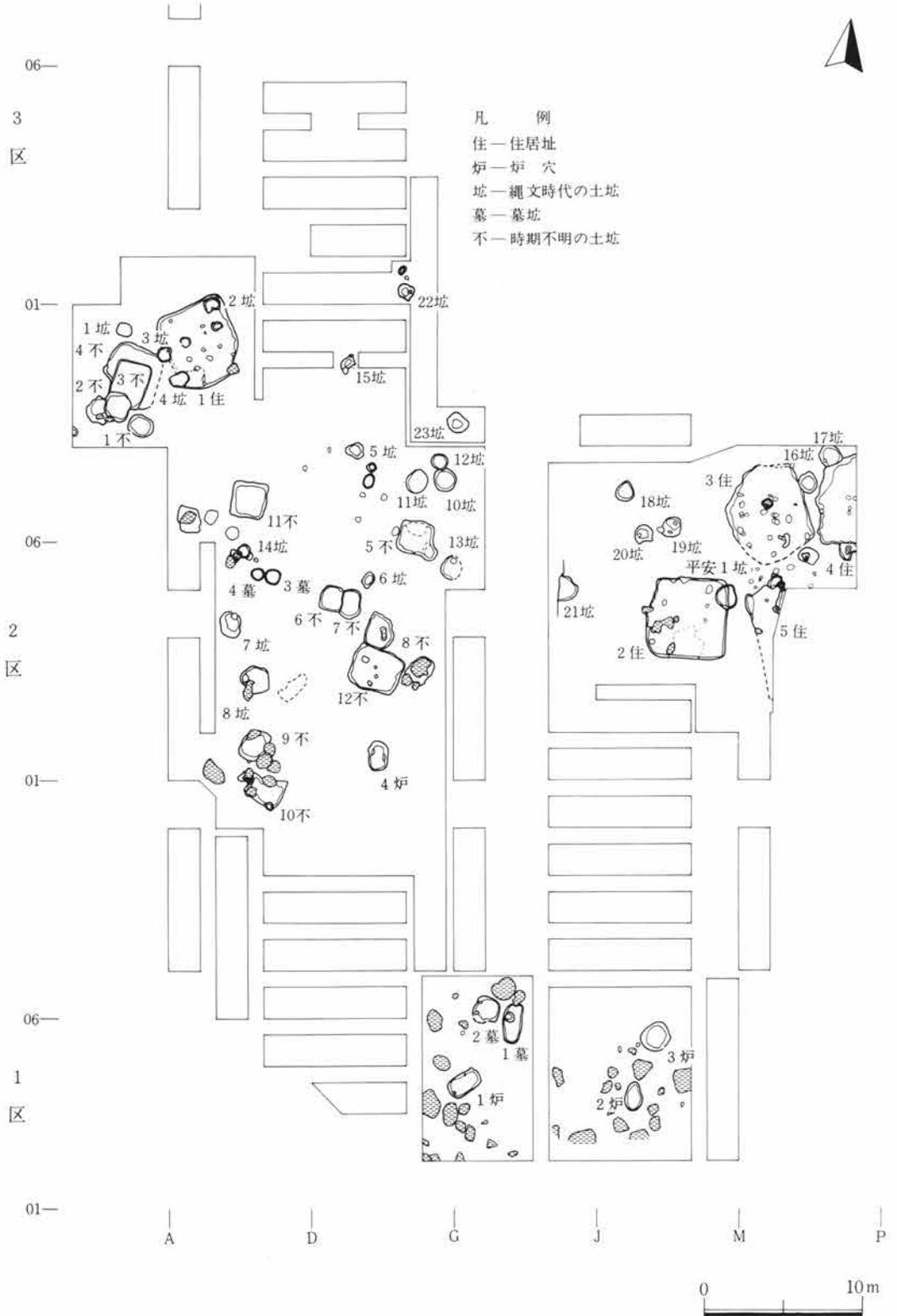
平安時代の住居址(5号住居址)は台地の中央部に立地し、調査区東端に位置している。住居址西半の壁と床面の一部を確認しただけで、東半は調査区外であった。土坑は住居址の西に近接し、壙が折り重なるように出土した。また、2区C-03グリッドからは壺・羽釜・耳皿・瓦等各種の大形の破片や完形品が集中して出土したが、遺構は確認できなかった。

近世に属する墓坑は形態を異にするものがそれぞれ2基ずつあり、長楕円形を呈するものと円形を呈するものがある。長楕円形を呈する墓坑は炉穴の近くの台地南縁辺部に位置し、円形を呈する墓坑は台地中央で、時期不明の土坑が群在する調査区西半に位置している。円形の墓坑からは寛永通寶16枚がまとめて出土した。

時期不明の土坑12基は調査区西半の台地中央周辺に分布し、プランは方形を呈するものと楕円形を呈するものがある。また、調査区の各グリッドからは砥石が10点出土しているが遺構に伴うものがなく時期は判断できなかった。

(石塚久則)

第VII章 前中原遺跡



第69図 前中原遺跡遺構全体図 (1:400)

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住 居 址

1号住居址 (第70図、図版68・69)

台地の中央部で調査区の西端に位置している。2・3・4号土壇に切られており、西壁の一部が攪乱を受けている。

規模は長軸5.25m、短軸4.53mで、長軸方向はN-31°-Wを示す。住居址の各辺は直線的であるが各隅は丸みが強く、南東隅は溶結凝灰岩が露出し、歪んでおり不整隅丸方形を呈している。

覆土はほぼ単一の黒色土でローム粒子が少量混入しており、周壁に沿った部分は褐色土とロームの小ブロックが混入している。炉の周辺は焼土と炭化物が少量混入しており、自然に埋没した状態である。

住居址の断面形は中央部が平坦でやや低く、周辺にいくに従い、緩やかに立ち上がる皿状をなしており、壁は斜めに立ち上がり高さは良好な部分で約25cmある。周溝はなく、床面は中央部周辺が固く締っており、周壁部はあまり締っていない。

柱穴は円形を基調とし、中央部周辺に深さ10cm～34cmの柱穴が8本あるが規則性はない。また、周壁に沿って深さ22cm～58cmの柱穴が南壁に3本、西壁に1本(3号土壇内)、北壁に3本ある。

炉は中央部やや北西寄りに位置し、66cm×60cmのほぼ円形を呈しており、深さは約14cmある。底面はほぼ平坦で、炉の焼けは弱く、焼土と炭化物が堆積していた。炉は石を1石据えた地床炉と推定され、不定形の自然石が倒れ込んでいた。

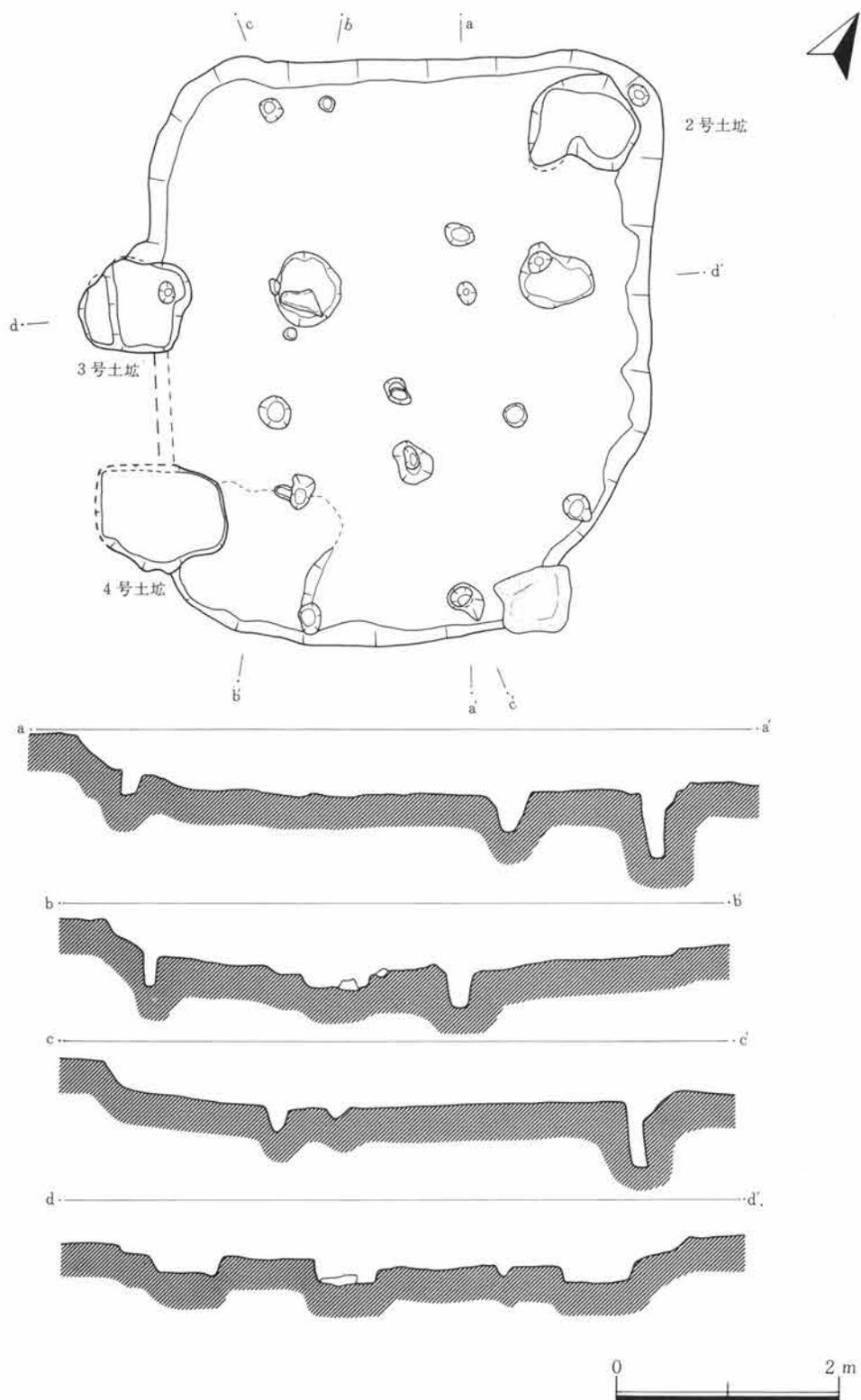
遺物の出土状態は覆土中からの出土が多く、床面に付くものは少ない。また、住居址東半部からの出土が目立ち小片が多い。 (下城 正)

1号住居址出土土器 (第71・72図、図版86・87)

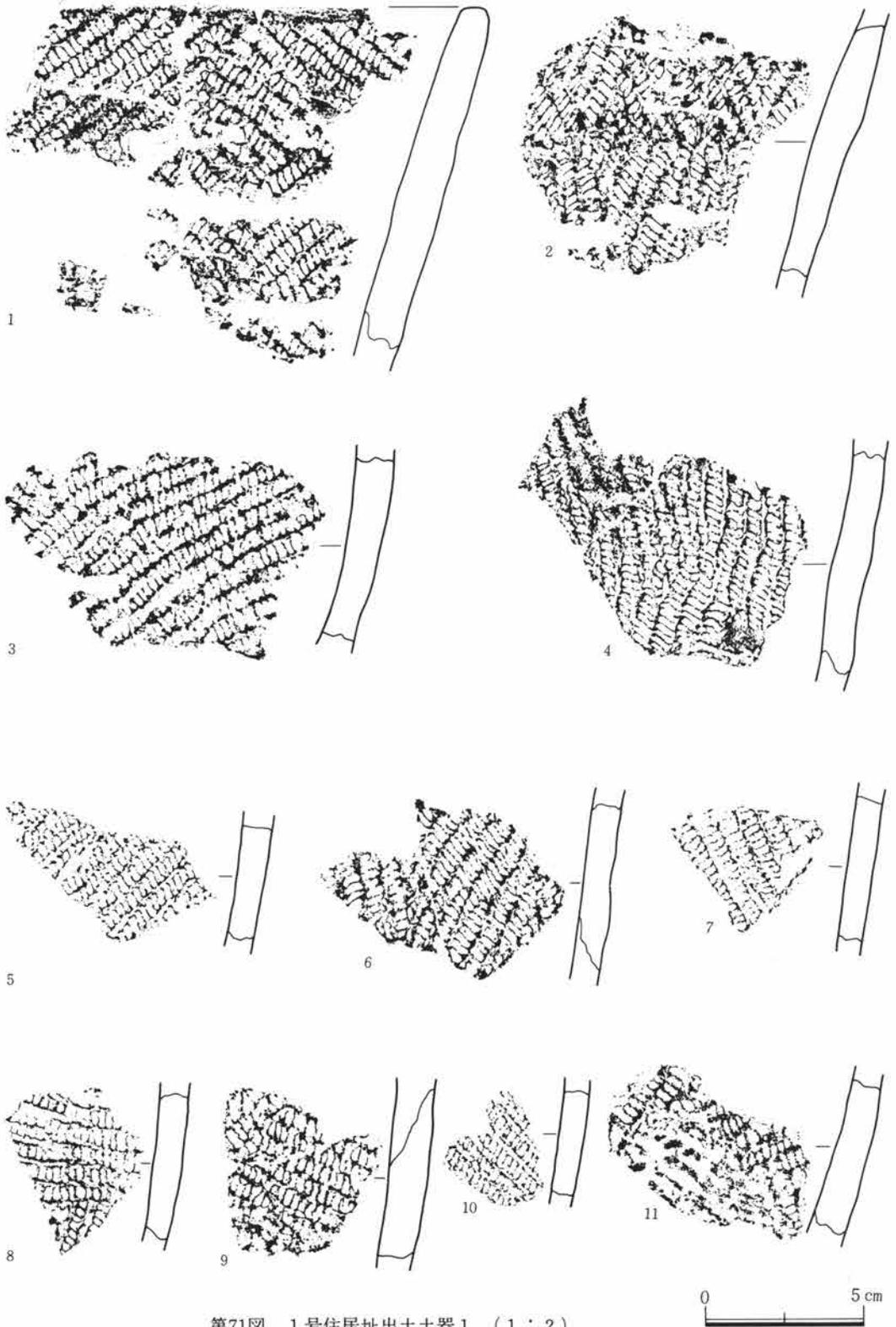
第71図の1～11は縄文を全面に施したと思われる一群である。いずれも多量の繊維を含んでおり、断面に大きなスサが入っている。胎土には白色粒子が混入しているが、大きな石粒はほとんどない。器厚は1～4・9が1cm強で、他は8～9mm程度である。2は口縁部近くの破片で、幅の広い段が付いている。色調は黒色と褐色とに分れるが、まだらな焼成になっている。

縄文原体は0段3条の単節が多い。1・2はRL・LRが羽状に見られる。いずれも節は大きく、条の幅は5mm程度である。なお、10はRL原体に細いRL2本を付加している。1の口唇は丸みを帯びた稜をもち、平坦をなしている。また、11は底部近くの破片であるが内面にススの付着が多い。多くは黒浜式土器と思われる。

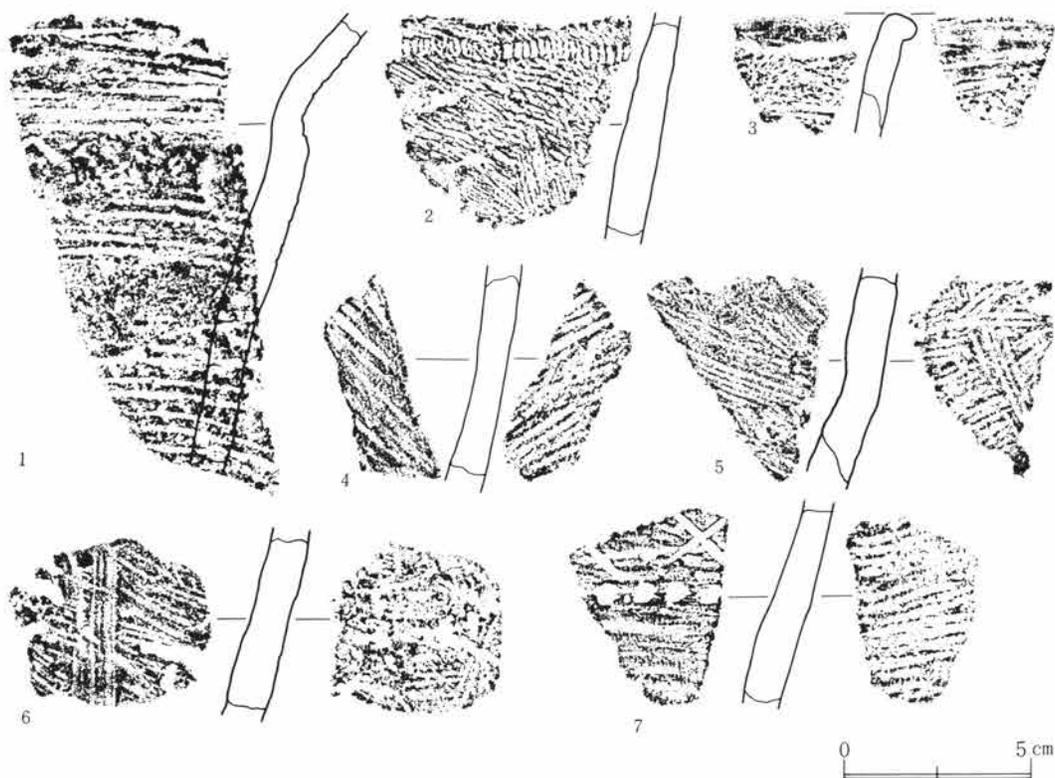
第72図1は半截竹管文を横位の带状に施文する土器である。胴部上半で外側に屈曲する器形を呈しており、带状の竹管施文の間には縄文が横位に施されている。両者の施文の前後関係は不明である。器厚は1cmで内面が黒褐色、外面が黄褐色を呈し、胎土には細砂粒を含む。諸磯b式土器であろう。2～7は条痕文を有する一群である。2は胎土に多くの繊維を含み、石粒の混入は



第70図 1号住居址と2・3・4号土坑 (1:60)



第71図 1号住居址出土土器1 (1:2)

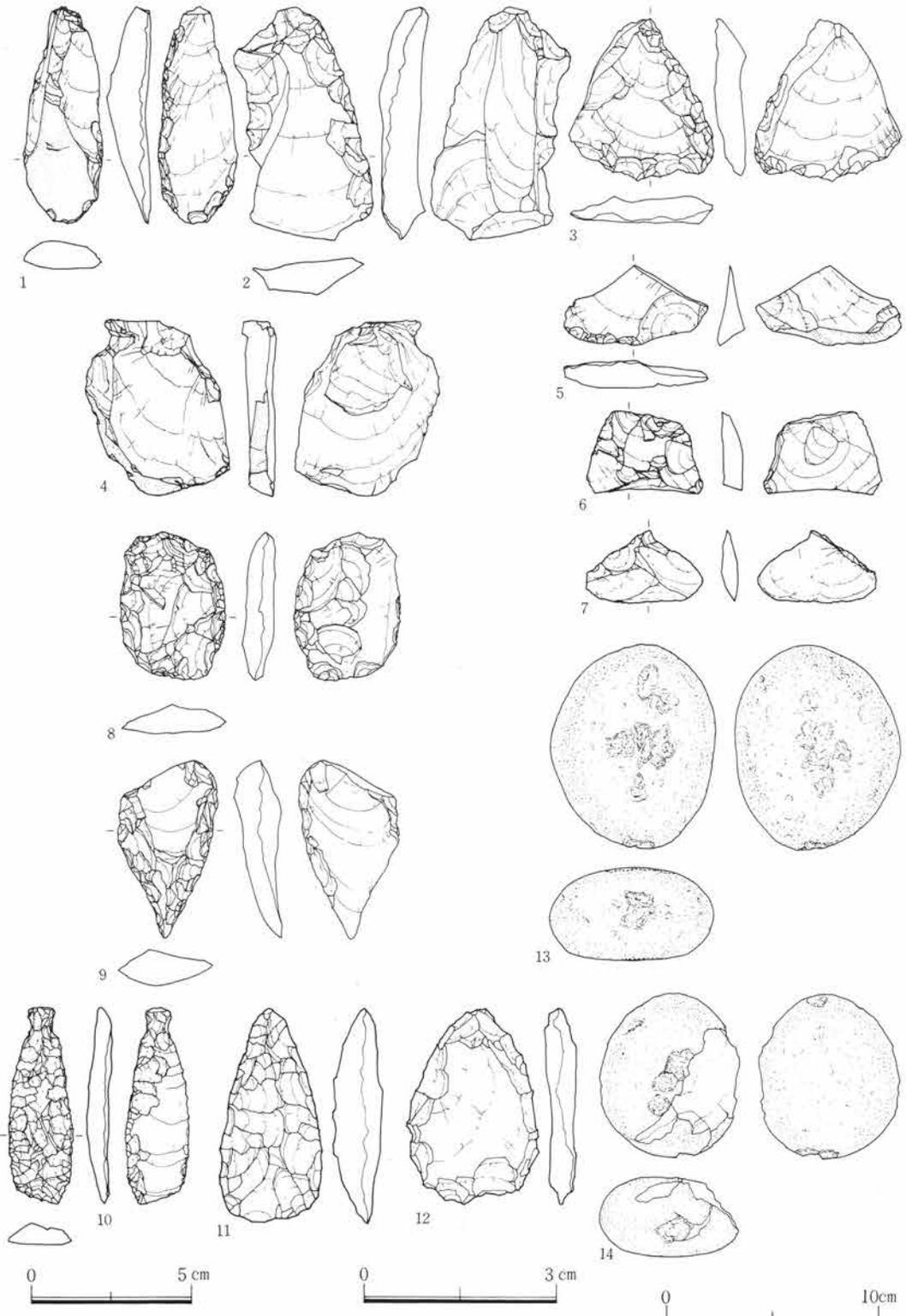


第72図 1号住居址出土土器2 (1:2)

少ない。厚さは1cm弱である。部位は不明であるが上方に一条の絡条体圧痕文を配している。一面に条痕が見られるが施文具は不明である。圧痕文施文と同一の絡条体によるものかも知れない。3～7は貝殻状の工具を使用した条痕文で、7は裏面のみで他は両面に施文があり、いずれも繊維を含んでいる。7は棒状工具による格子状の沈線と、竹管状の工具による刺突文が配されている。
(能登 健)

1号住居址出土石器 (第73図、図版88)

1～4は縦剥ぎの剥片石器で1・2・4は側面に刃部があり、3は先端部に荒い刃部がある。5～7は小形の剥片石器で細かい剥離による刃部が付いている。8はラウンド・スクレイパー状の石器で、側面よりやや荒い剥離を数多く入れている。9はドリルと思われる。裏面は縦方向に大きな剥離があり、表面は側面よりやや細かい剥離を入れ、先端部を意識し断面は三角形をしている。10は縦形のの小形石匙である。上端部に摘みを設け、裏面は縦方向に大きな剥離を残し、表面は側端部より細かい剥離を数多く入れている。11・12は石鎌でやや丸みを帯びた三角形を呈している。11は細かい剥離を側端部から入れているが、12は横方向の大きな剥離面を残し、側面だけを荒く剥離している。13・14は凹石でやや楕円形を呈している。側面を除き、表・裏面ともにやや磨滅しており、両面に3個～6個の浅い凹みがある。
(下城 正)



第73図 1号住居址出土石器 (1~9・13・14=1:3、10=1:2、11・12=1:1)

第七章 前中原遺跡

2号住居址（第74図、図版70・71）

本住居址は台地中央部で調査区東半に位置し、東壁に平安時代の1号土壇がのっている。南壁中央は風倒木痕で攪乱されており、東壁は一部を確認しただけである。南西隅には3ヶ所に溶結凝灰岩がローム層中より露出している。

規模は長軸約5.20m、短軸5.02mで、長軸方向はN-95°-Wを示す。各辺はやや乱れており各隅は丸みが強く、不整隅丸方形を呈している。

覆土①は平安時代の1号土壇で、②は黒褐色土でローム小ブロックを極少量含み、③は暗褐色土でローム小ブロックをやや多く含み締っている。④は柱穴の覆土で明褐色を呈しローム小ブロックをやや多く含む。埋没の状態は西方からの流れ込みを強く示している。

壁はやや乱れており斜めに立ち上がり、周溝はない。床面は東方へ緩やかな傾きがあり、やや凸凹している。炉周辺の中央部は固く締っているが、周壁に沿った部分はあまり締っていない。

柱穴は円形を基調とし、東半に3本西半に2本が確認されたが、深さは15cm～55cmと差があり、位置とともに規則性はない。

炉は中央部やや西寄りに位置し、径35cmの規模で、床面を5cmほど浅く掘り込んでおり焼けは弱く、焼土が堆積していた。側石と思われる石が炉より東へ50cmほど離れた中央部寄りにあり、長さ22cmの長楕円形をした河原石が床面に直立して据えられていた。

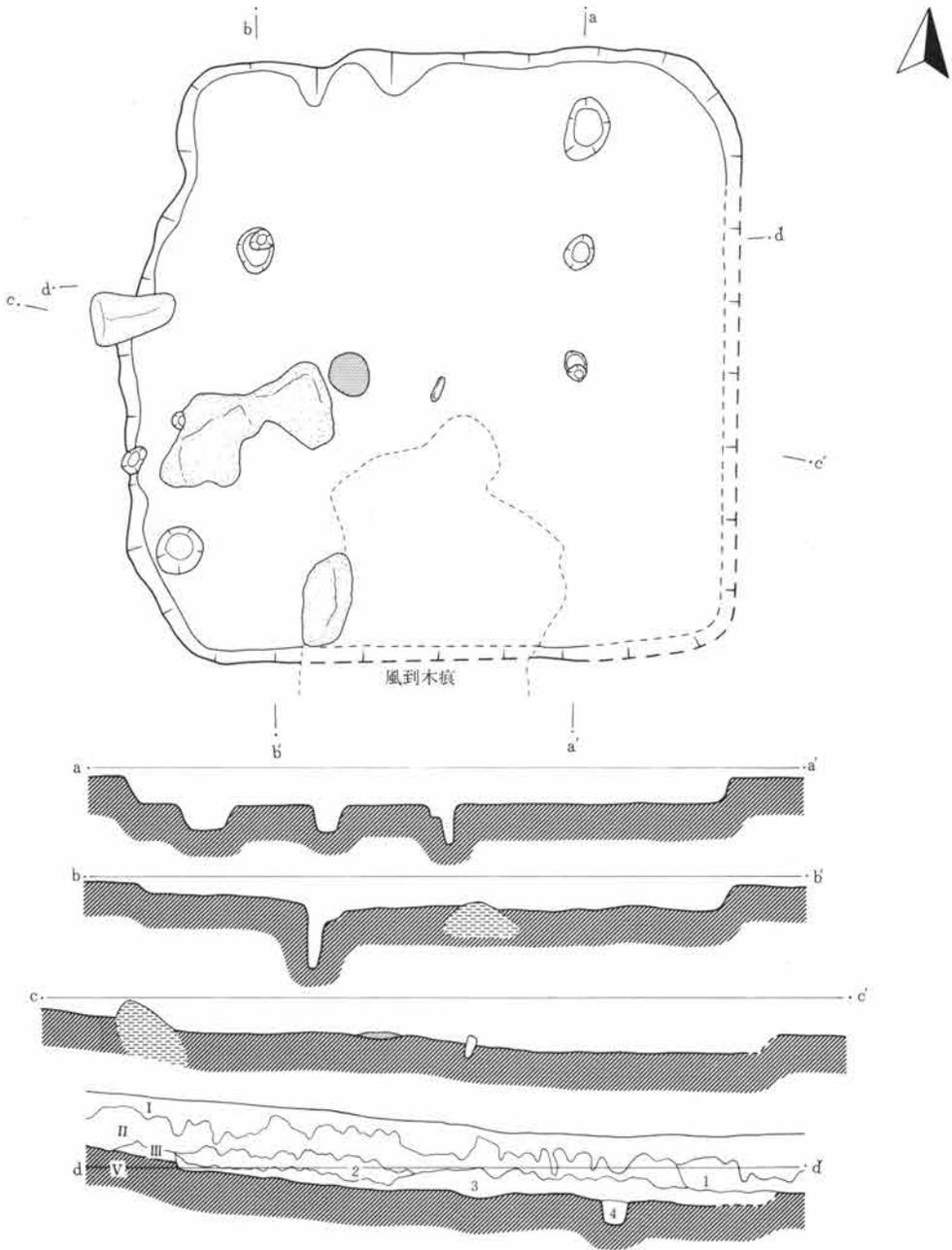
遺物の出土状態の特徴としては、土器1（第75図1）が北東隅寄りの床面直上に集中して出土し、多くの遺物は西半の覆土中より出土した。（下城 正）

2号住居址出土土器（第75図、図版89・90）

1～6は縄文を全面に施した土器群である。1は厚さ7～8mmで、胎土には白色小石粒をまばらに含み繊維も若干含んでいる。表面は黄褐色で裏面は黒灰色を呈している。小破片から器形を復元すると丸底に近い尖底で、砲弾形に伸び上がる形をしていることが判る。一面に縄文が施されており、条は縦に走る傾向にある。RL原体であるが浅い施文であるため、0段の条数まで読み取ることができない。多条の可能性が高い。縄文施文後は軽く指頭でナデが加えられており、表面は平滑になっている。2は厚さ1cmで繊維を若干含み、黒灰色を呈する。縄文は細かく、RL原体であるが0段条数は不明。5・6は器厚7mmで、繊維を多く含んだ胎土である。4・5はRL・LRの2種類の原体を使用しているが、5は同方向の条行を呈している。施文は浅く、条間に空間が残っている。6も同様の原体使用であるが、反撚りの多条の可能性が高い。花積下層式に併行するものである。7・8は器厚7mmで、繊維の混入はない。口唇および口縁直下に貝殻圧痕が見られる。田戸式併行の土器である。9～13は条痕文系土器群である。9は口唇部に沈線の刻みがあり、12は微隆起線による文様構成が見られる。10・12・13は椀ノ木下層式土器であろう。（能登 健）

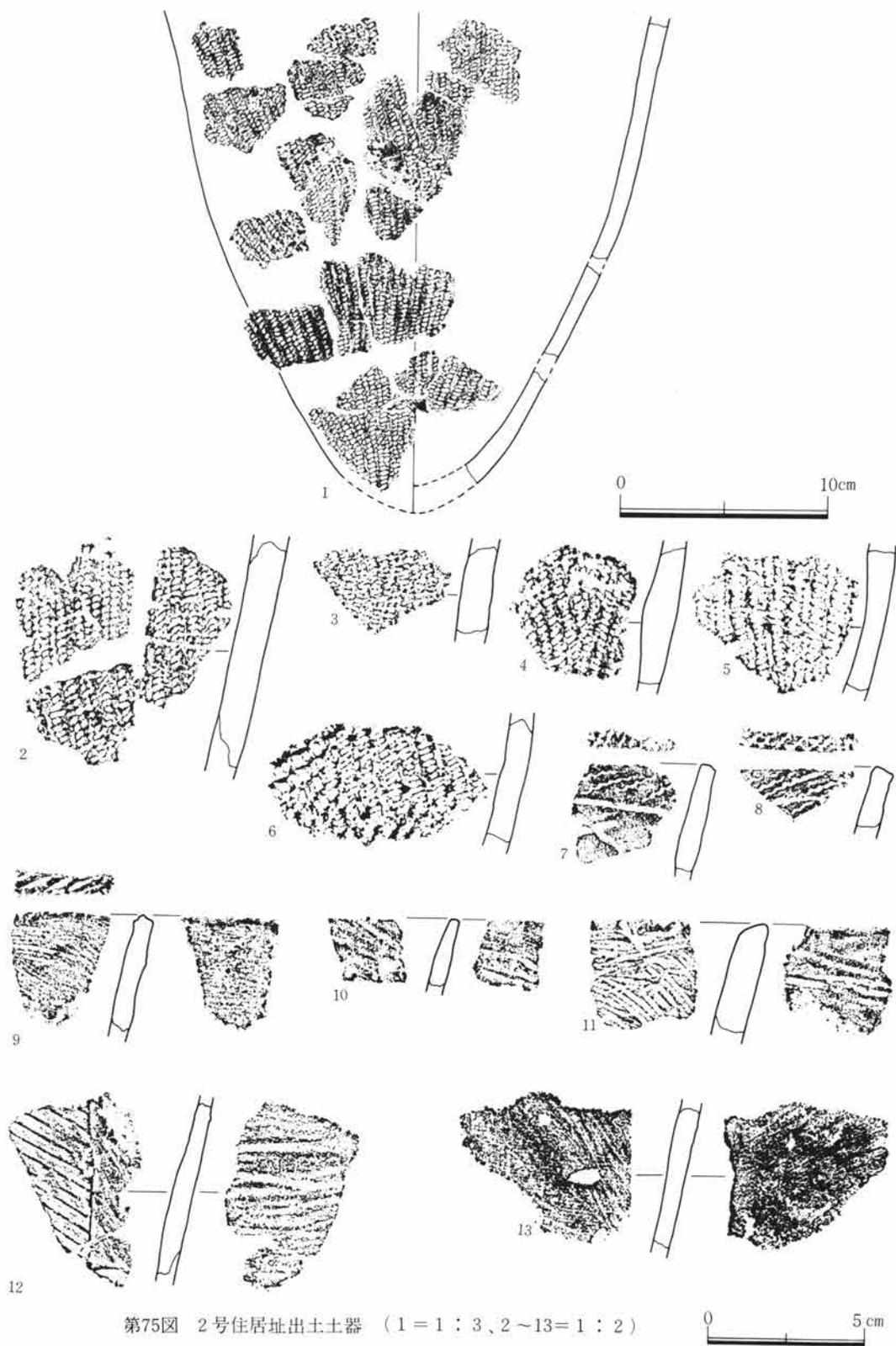
2号住居址出土石器（第76図、図版91）

1・2は表面に自然面を残し、側面がやや括れた打製石斧である。3～6は横剥ぎの剥片石器

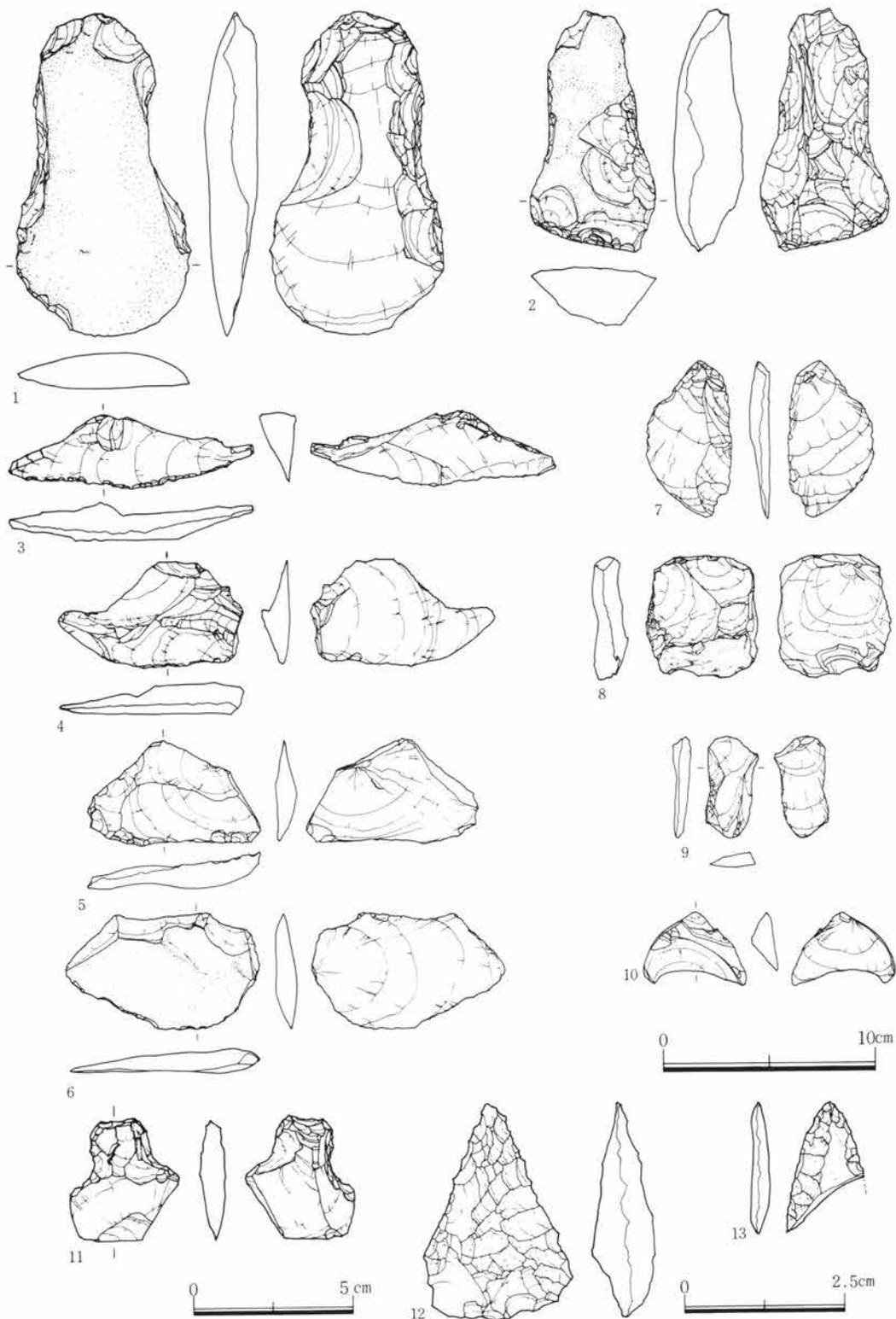


第74図 2号住居址 (1:60)

で刃部を下に細かく剥離している。7～10も小形の剝片石器で7～9は刃部を側面に持っている。11は石匙で摘みの部分のみで下半を欠損している。12・13は石鏃で12はやや乱れた三角形を呈し、剥離も荒い。13は基部を欠損している。(下城 正)



第75図 2号住居址出土土器 (1 = 1 : 3、2 ~ 13 = 1 : 2)



第76図 2号住居址出土石器 (1~10=1:3, 11=1:2, 12・13=1:1)

第七章 前中原遺跡

3号住居址（第77図、図版72・73）

台地中央部で調査区東半に位置し、4号住居址と近接している。南壁から西壁にかけてと北壁の一部は確認できなかった。

規模は長軸約5.60m、短軸4.90mで、長軸方向はN-30°-Wを示している。各辺や隅は乱れが激しく、特に北壁は大きく歪んでいる。隅丸でやや長方形ぎみを呈したプランと推定される。

覆土は攪乱が深くまで及び、厚さは10cm程度である。黒褐色土でローム小ブロックをやや多く含み柔らかい土層である。

住居址の断面形は中央部がやや低く、周壁部へしだいに立ち上がっていく皿状を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。良好な部分では高さが約25cmある。周溝はない。床面は中央部のやや低い部分は特に固く締まっているが、周壁部はあまり締っていない。全体的に凹凸が激しい。

柱穴は円形を基調とし、中央部にある5本の柱穴は深さが31cm～54cmと非常にしっかりしている。周壁に沿って深さ8cm～52cmと差のある18本の柱穴があるが、一部に木の根による攪乱と見られるものがあり、すべてが本住居址に付くものとは考えられない。

炉は中央部やや北寄りに位置し、床面を5cmほど掘り込み、径約58cmのやや乱れた円形を呈している。炉底面はやや凸凹しており、底面や周壁は良く焼けており、覆土には焼土が詰まっていた。側石と思われる長さ21cmの長楕円形を呈した河原石が、北東方向へ12cm離れて床面に直立していた。

遺物は覆土が浅い関係で床面か床面近くより出土し、散布状態に片寄りは見られなかった。

（下城 正）

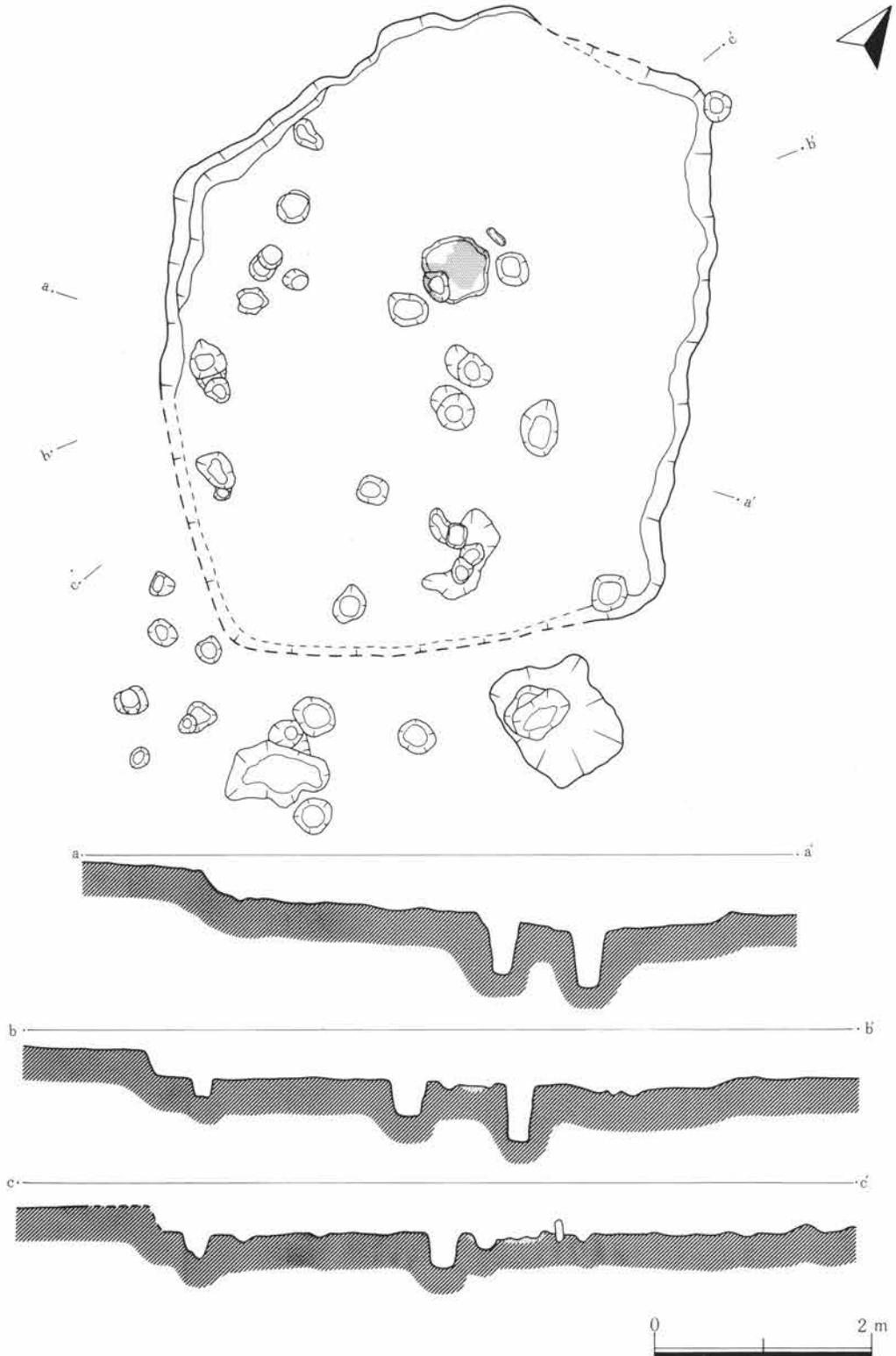
3号住居址出土土器（第78図、図版92-1）

1は縄の側面圧痕が施されている。胎土には繊維を含み、白色小粒が目立つ。口縁部を3cm幅で第1文様帯を区分して、その中に縄の側面圧痕で充めている。縄はLR・RL2本を1対にして上下を横位に区画し、内部を斜状に施文する。この第1文様帯以下は縄文が施される。RL多条で条行は縦方向になる。口縁部の形態はやや直立ぎみになる。2～4は縄文のみの胴部片で、2はLR・RLの2本、3・5はRLのみの原体が観察される。本遺跡では、2・5のように縦方向の条行を示す土器片の中に、同一条行で右左両方の2本の原体が使用されているものが多い。このような縄文のある土器群は一樣に器厚が薄く、1cm未満のものが多い。おそらく、1の口縁を有する土器の胴部と考えられる。6・7は表裏ともに条痕の施された薄手の土器で、椀ノ木下層式土器であろう。8は斜行した半截竹管が見られ、胎土に繊維の混和もなく、諸磯b式であろう。

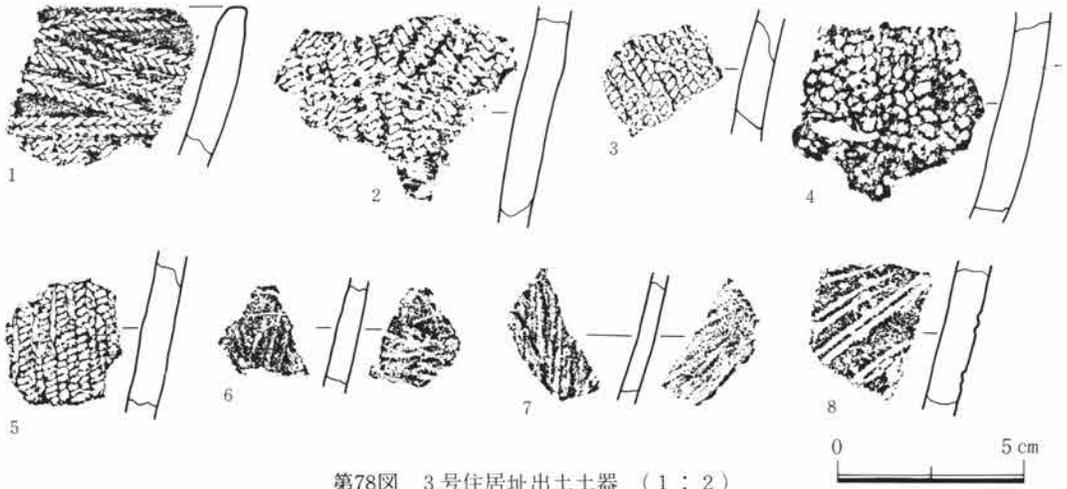
（能登 健）

3号住居址出土石器（第79図、図版92-2）

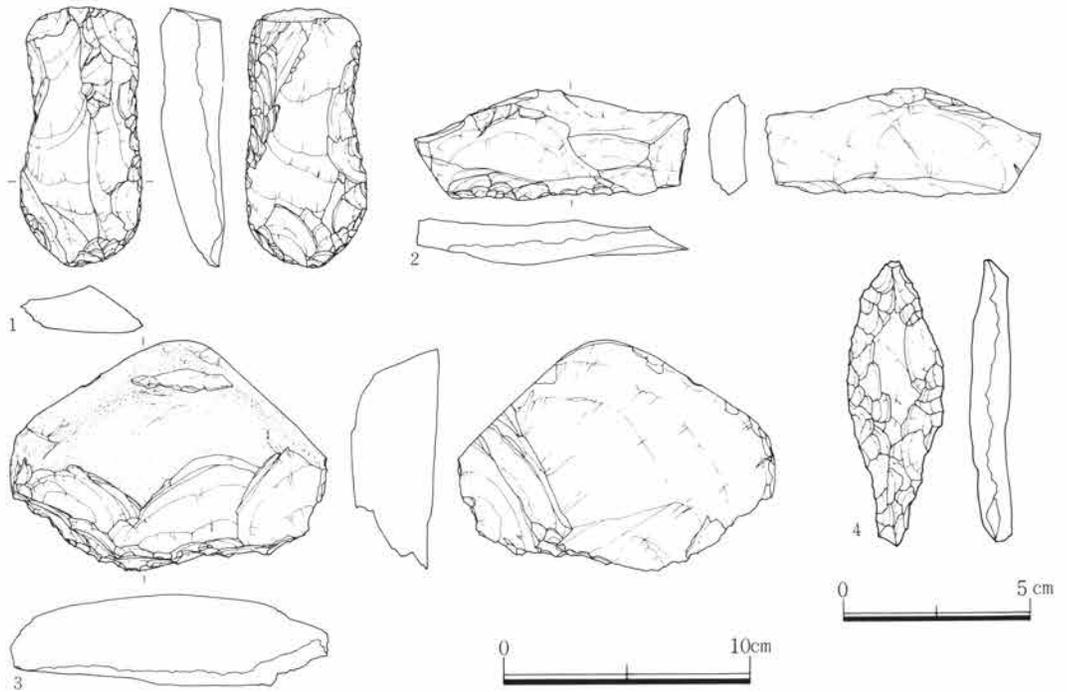
1は打製石斧で基部に自然面を残し、表面に2面、裏面に1面の大きな剥離面があり、断面はやや三角形をしている。側面はやや抉れ、刃部は丸みを持っている。2は横剥ぎの剥片石器で、表面は方向が一定していない荒い剥離があり、裏面は大きな剥離が1面ある。刃部の剥離はやや



第77図 3号住居址 (1:60)



第78図 3号住居址出土土器 (1:2)



第79図 3号住居址出土石器 (1~3=1:3、4=1:2)

荒く、裏面の方向だけから剥離している。3は礫器で、表面は自然面を残し、3回の大きな剥離を行ない、刃部は裏面の方向だけからやや荒く剥離し、先端部は同じ方向から再び細かく剥離している。4はドリルで、先端部を欠損している。
(下城 正)

4号住居址 (第80図、図版74・75-1)

台地の中央部で調査区東端に位置している。住居址の西半の部分を確認しただけで、大半の部分は調査区外となる。17号土壇を切り、南壁の一部が木の根により攪乱されている。

規模は現状で長軸約5.65m、短軸2.20m+ α で方向は不明である。各辺は乱れがあり隅の丸みも差があり、北壁に歪みが見られ、3号住居址と同様のプランを呈している可能性がある。

覆土①は住居址を切る柱穴で、②は黒褐色土で攪乱を受けたような土層である。③は暗褐色土でローム小ブロックをやや多く含み、やや固く締っている。④は褐色土でローム粒子を少量含む。⑤は17号土壇の覆土である。

住居址の断面形は中央部がやや低く、周壁部にいくに従い緩やかに立ち上がる皿状をなし、壁は斜めに立ち上がる。壁高は良好な部分で約35cmある。周溝はない。床面も他の住居址と同様に中央部が固く、周壁部はあまり締っていない。

柱穴は中央部寄りに4本確認され、円形を基調とし、深さは36cm～51cmである。炉は確認できなかった。

遺物の出土状態は石器や剥片は南半に多く、石核1は南壁寄りの位置で、周辺に剥片が散布していた。土器はほとんど小片で北壁寄りから多く出土した。(下城 正)

4号住居址出土土器(第81図、図版93-1)

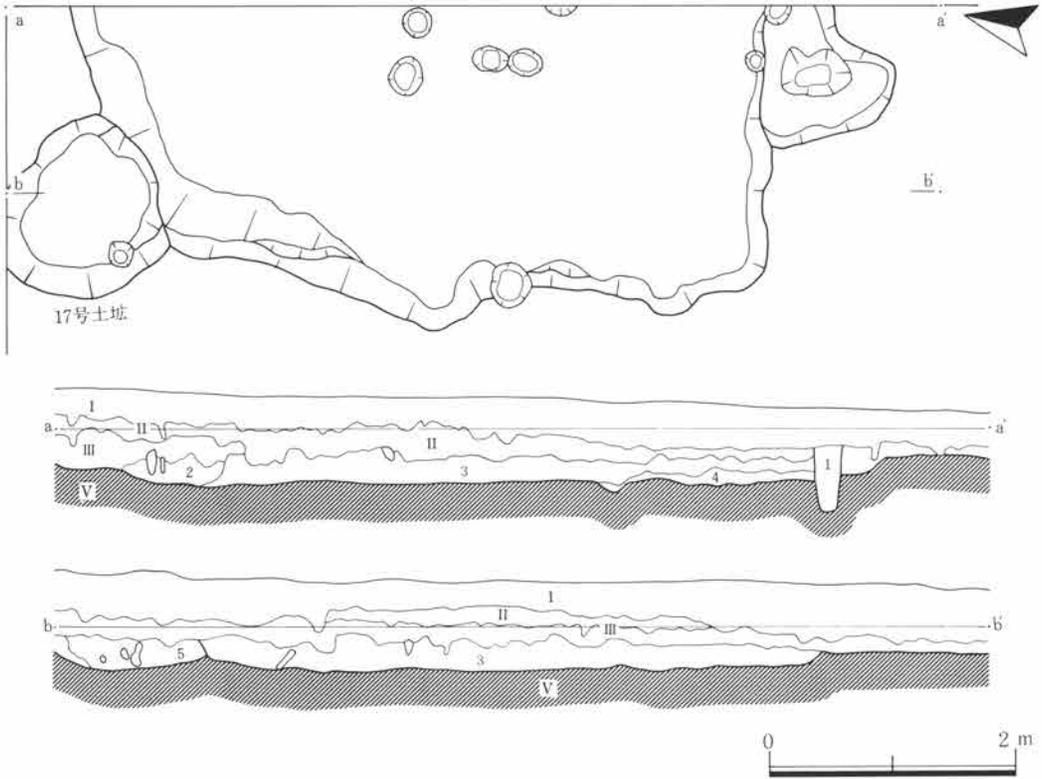
1～8は縄文を主とした土器群である。器厚は8mm～1cmである。2・7は黒灰色、3・4・6・8は褐色を帯びた色調であり、1は両面がまだらになっている。ともに繊維を含んでいる。1は3.5cm幅の第1文様帯をLR・RL2本1対の縄の側面圧痕で充している。上下は横位の圧痕で区画しており、内側の圧痕は縦位の羽状を呈している。2～8はともにLR・RLの多条原体の縄文が施されている。2本の原体は施文単位によってやや走向が異なるが、羽状を意識したものではない。縄文のみ見られる土器片では、型式細別を決定するのに難かしい点もあるが、これらの土器片については、1の花積下層式土器に伴うものと考えたい。

9～11は表裏に条痕文を有する薄手の土器である。器厚はともに6mmである。条痕の施文具は貝殻腹縁かそれに類似したものであろう。(能登 健)

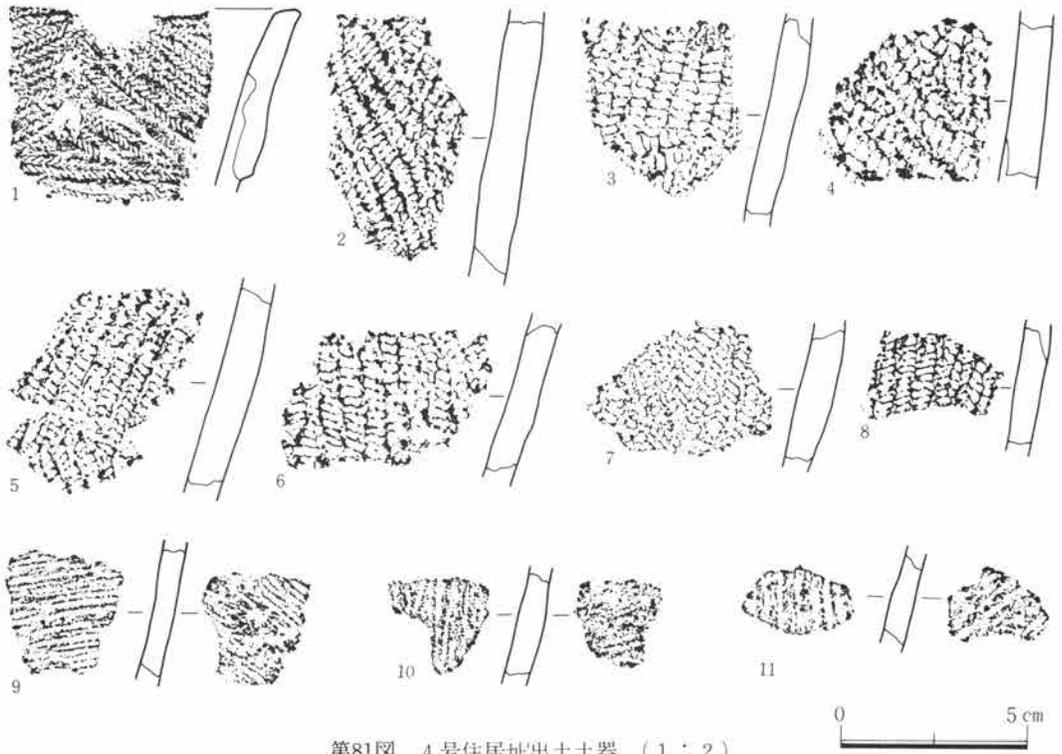
4号住居址出土石器(第82・83・84図、図版93-2・94)

第82図1は基部の尖がった小形の打製石斧で、内側にやや反っている。2～4は縦剥ぎの剥片石器で側面にやや荒い刃部がある。5～9は小形の剥片石器で5・8・9は側面に非常に細かい剥離があり、6は両側面に表裏両方向から細かい剥離を行っており、7は両側面と先端部を裏面方向だけから細かい剥離を加えている。10・11は表面に自然面を残す横剥ぎの剥片石器である。12・13は凹石で12は表裏面とも非常に良く磨滅しているが、側面には多くの打撃痕があり、 $\frac{1}{3}$ を欠損している。13は特に裏面が磨滅し、平坦化している。表裏ともに1穴ずつの浅い凹みがあり、側面の一部に打撃痕がある。第83図の1～5は石鏃で1は未製品と思われる。2は茎部に丸みを持った三角形をしており、3は茎部が浅く湾入する。4・5は表裏面に大きな剥離面を残している。6は基部に2つの摘みがある石匙で、裏面に細かい剥離を加えている。第84図の1・2は石核とともに自然面を残し、剥離に規則性はない。1とa～fは同じ石質で4点が接合する。

(下城 正)



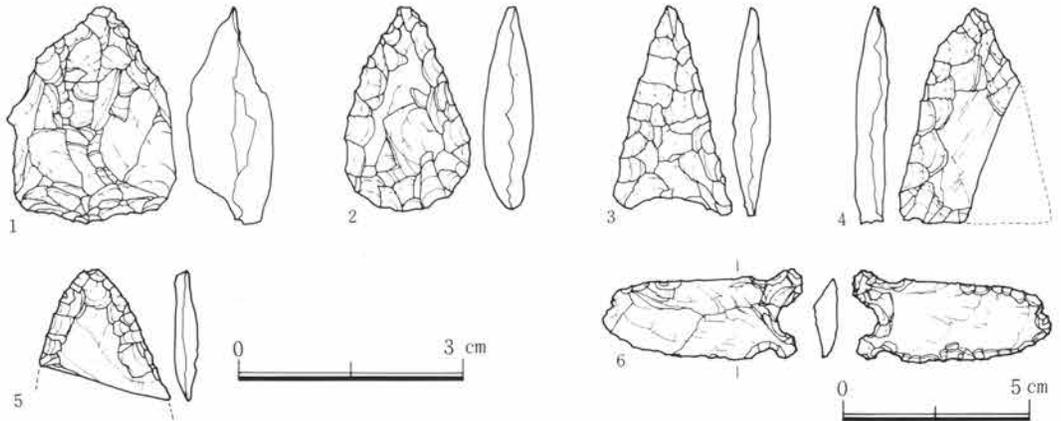
第80图 4号住居址と17号土址 (1:60)



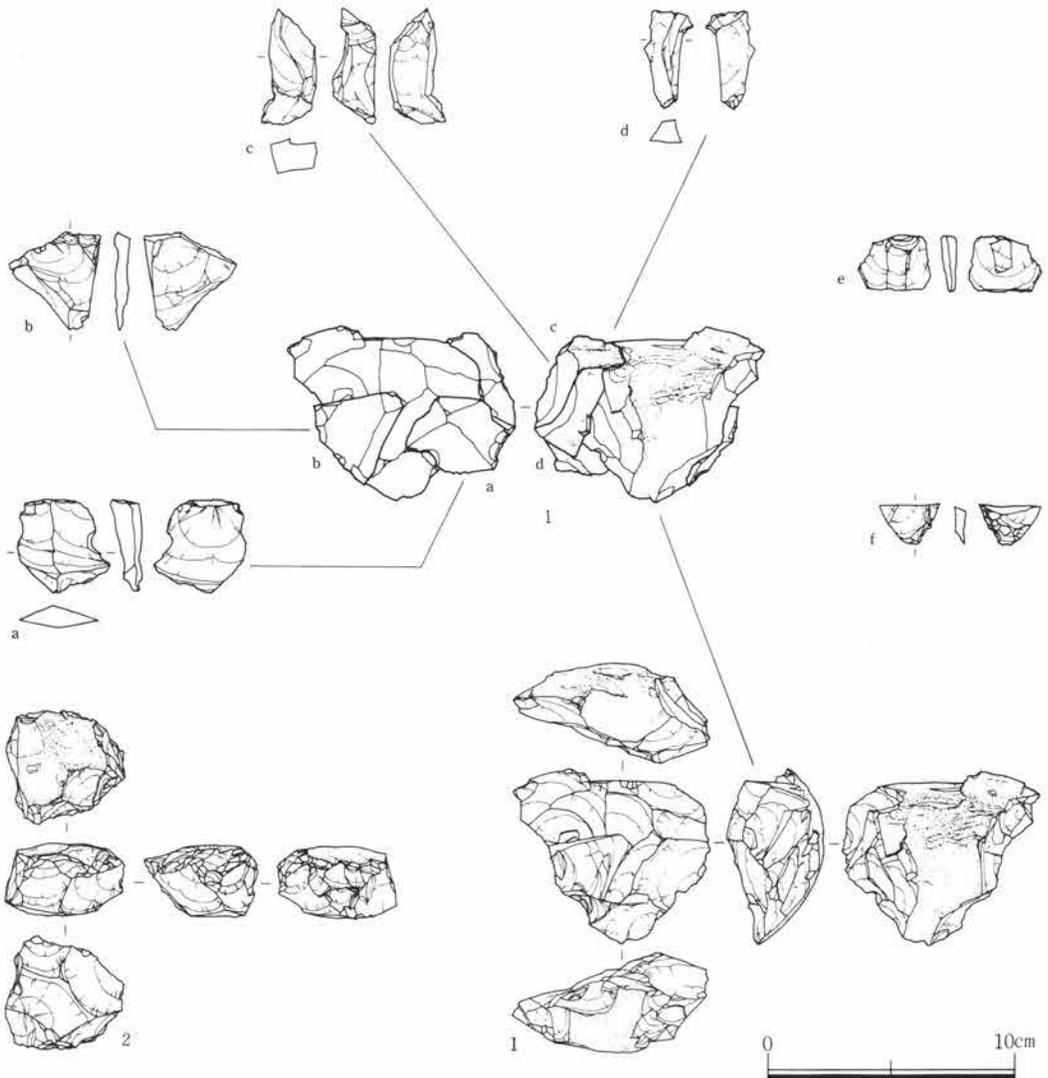
第81图 4号住居址出土土器 (1:2)



第82図 4号住居址出土石器1 (1:3)



第83图 4号住居址出土石器2 (1~5=1:1, 6=1:2)



第84图 4号住居址出土石器3 (1:3)

(2) 炉 穴

1号炉穴 (第85図、図版76)

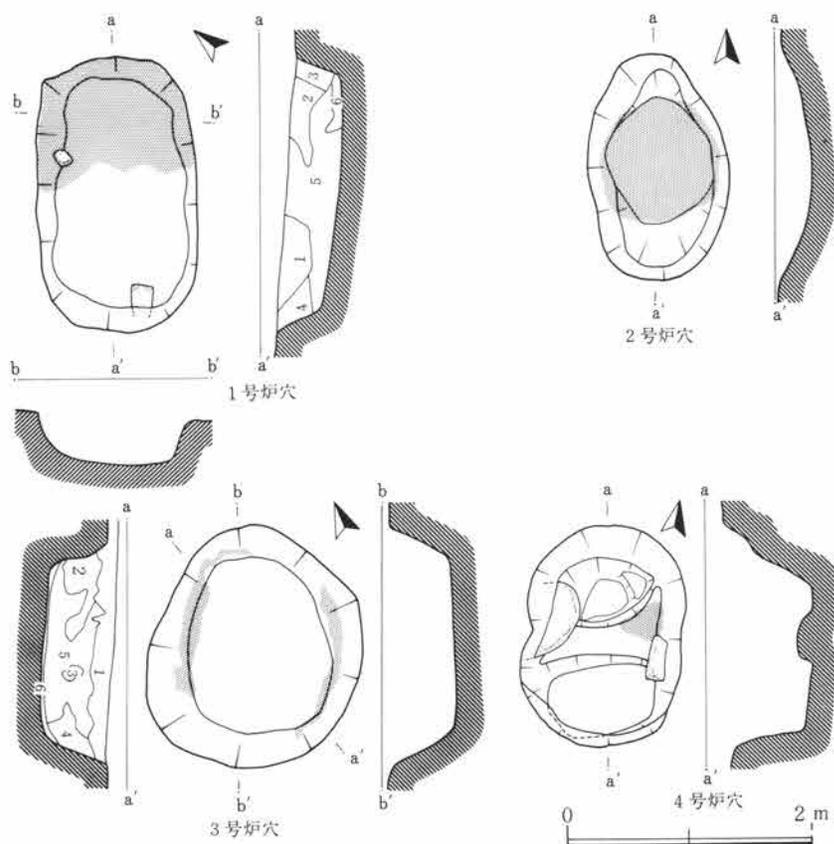
2・3号炉穴とともに台地の南縁辺部に位置している。周囲にはローム層中より溶結凝灰岩が露出し、他の2基とともに岩の間に構築されている。

規模は長軸2.20m、短軸1.28mで深さは43cmである。長軸方向はN-50°-Eを示す。長楕円形のプランを呈し、底面は南半の焼き口部がやや高く、北半の炉部はやや低く傾斜を持っている。

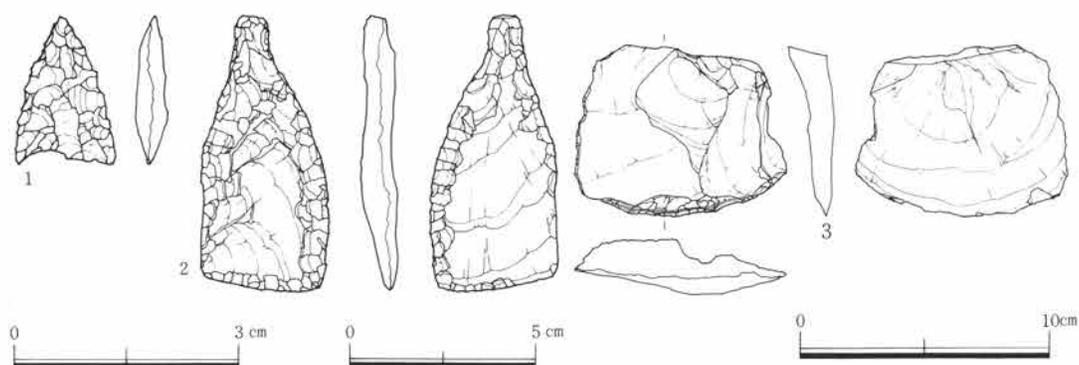
焼き口部はほとんど焼けておらず焼土もなく、底面は住居の床面のように非常に固くなっている。炉部の底面は固く締っているだけで焼土が散乱する程度であるが、周壁は非常に良く焼けており、平均2cmほど赤化している。

覆土①・②は黒褐色土で炭化物を少量含み、③・④も黒褐色土で焼土・炭化物・ローム粒子をやや多く含む。⑤は黒色土で炭化物を多く含み、焼土を少量含む。⑥は炭化物の層で焼土が混入しており、特に炉部に堆積している。

出土遺物としては石鏃(第86図1)と剥片9点が出土した。



第85図 1～4号炉穴 (1:60)



第86図 1〔1〕・4〔2・3〕号炉穴出土石器（1=1:1、2=1:2、3=1:3）

2号炉穴（第85図、図版77-1）

3号炉穴に近接し、溶結凝灰岩が周囲を取り囲むように点在している。規模は長軸1.82m、短軸1.17mで深さは28cmである。長軸方向はN-1°-Wを示す。

プランはやや乱れた長楕円形を呈し、断面は底部中央がやや深く、南北両端が浅く立ち上がる。底面中央部が全体的に弱く焼けており、焼土を混入した炭化物が薄く堆積していた。

出土遺物なし。

3号炉穴（第85図、図版77-2）

規模は長軸1.87m、短軸1.68mで深さは56cmである。長軸方向はN-22°-Eを示す。プランはやや膨らみを持った楕円形を呈しており、底面は平坦で固く締っており、長軸方向に平行した底面の立ち上がり部分が非常に強く焼けていた。また、底面直上には炭化物が薄く堆積していた。

覆土①は黒色土で他の縄文時代の遺構と共通して、ソフトな土質で粒子が細かい。②は黒褐色土でローム粒子をやや多く含む。③は黒褐色を呈し、ローム粒子を含む。下方へ行くに従い炭化物を多く含むようになる。④は炭化物の層で、炉底面から立ち上がり部分まで薄く堆積していた。

出土遺物としては条痕文系の土器の細片1点と剝片1点が出土した。

4号炉穴（第85図、図版77-3）

他の3基と異なり、台地中央部縁辺に位置している。規模は長軸1.76m、短軸1.30mで深さは72cmである。長軸方向はN-7°-Wを示す。

プランは中央部がやや歪んだ楕円形を呈し、底面は中央部が一段高く、溶結凝灰岩が両壁から露出しており、南北両端が一段低くなっている。底面の中央部の一部が良く焼けていた。

覆土は上半が黒褐色を呈し、下半が暗褐色を呈しており、ローム小ブロックを少量含み、下方へ行くに従い炭化物が多くなる。

出土遺物としては縦形の石匙と剝片石器各1点（第86図-2・3）が出土した。（下城 正）

(3) 土 壇

1号土壇 (第87図、図版78-1)

台地中央部北西寄りに位置する。径0.96m、深さ48cmで、不整円形を呈している。断面形は袋状を呈し、覆土はソフトな黒色土である。出土遺物(第88図1~5)としては胎土に繊維を含み、表裏に条痕を施した土器片や、同じく繊維を含みLR原体で0段多条の縄文を施した土器片が出土した。

2号土壇 (第70図、図版68-1)

台地中央部北西寄りで1号住居址を切っている。規模は1m×0.83mで深さは約55cmで、不整形を呈している。断面形は丸みを帯び底面に段差がある。覆土は黒色土である。

3号土壇 (第70図、図版78-1)

2号土壇と同様の位置で、規模は0.81m×0.75mで深さは36cmあり、乱れた楕円形を呈している。断面形は丸底状で、覆土は黒色土である。

4号土壇 (第70図、図版78-1)

2・3号土壇と同様の位置で、規模は1.17m×0.95mで、深さは44cmある。不整楕円形を呈し、断面形は丸底状をなす。覆土は黒色土である。

5号土壇 (第87図)

台地の中央部で調査区西半に位置している。規模は1.20m×0.98mで深さは48cmである。乱れた楕円形を呈し、底面は平坦で壁はやや斜めに立ち上がる。覆土はローム小ブロックが少量混入したソフトな黒褐色土である。土壇中央の覆土上部に、径約35cmの扁平な河原石が水平の状態出土した。出土遺物なし。

6号土壇 (第87図、図版78-2)

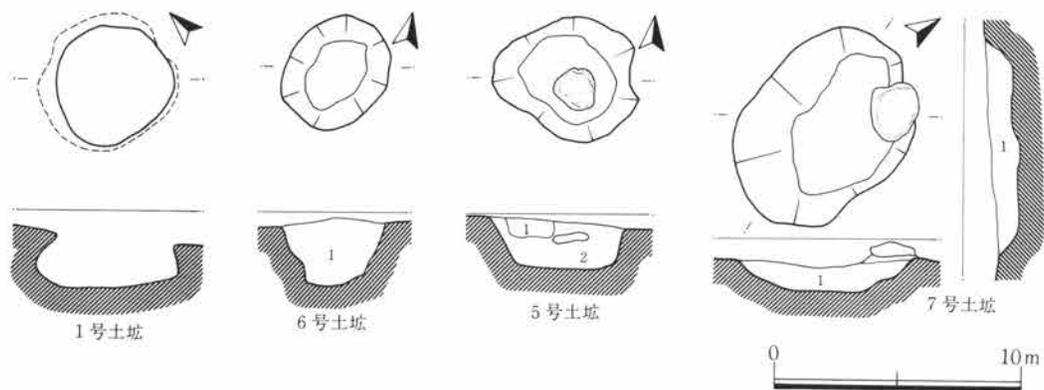
台地の中央部で調査区西半に位置している。規模は0.94m×0.79mで、深さは52cmである。平面形は楕円形を呈し、断面形は丸底状をなしている。覆土はソフトな黒色土の単一層である。出土遺物(第88図6)としては、胎土に多量の繊維を含む口縁部片があり、口唇直下に横方向に刺突が1列走り、そこから斜め方向へ3列を単位とした刺突文が走っている。同様の刺突は口唇部にも加えられている。

7号土壇 (第87図、図版78-3)

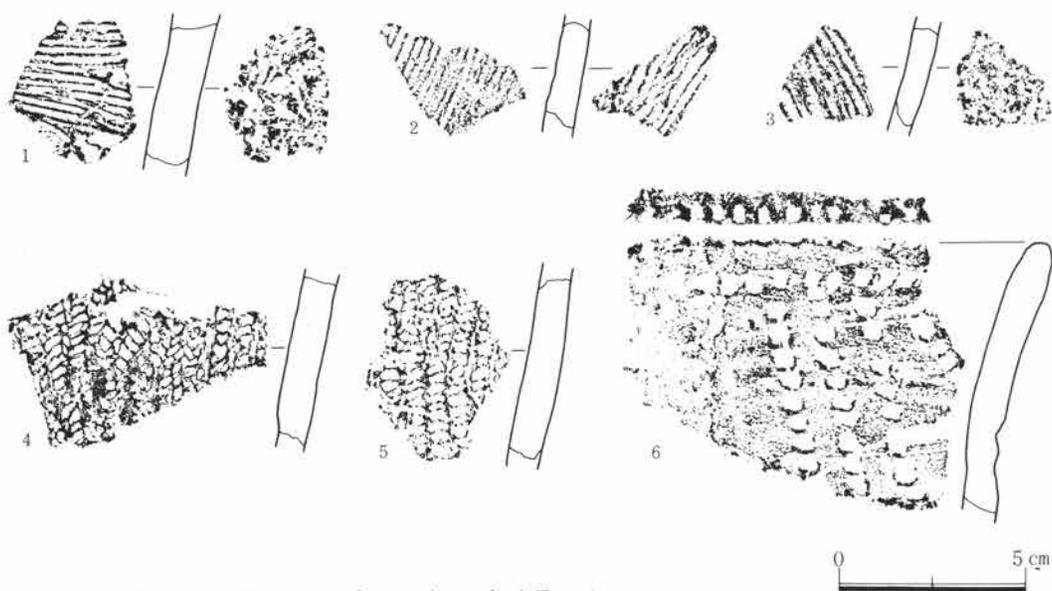
台地の中央部で調査区の西端にある。規模は1.72m×1.25mで、深さは24cmである。平面形は不整楕円形を呈し、底面がやや凸凹した皿状をなしている。覆土はローム小ブロックを多量に含む暗褐色土である。土壇の北東上縁部には径約45cmの扁平な河原石がのっている。出土遺物(第89図)としては、1の撥形をした小形打製石斧と2の茎部が浅く湾入した二等辺三角形を呈する石鏃とがあり、他に剥片2点出土した。

8号土壇 (第90図、図版80-1)

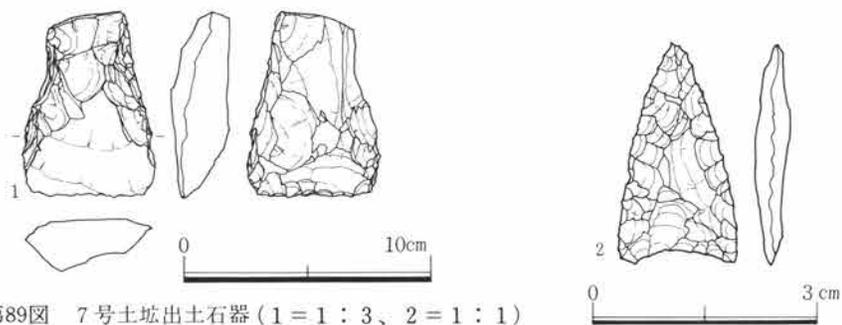
第七章 前中原遺跡



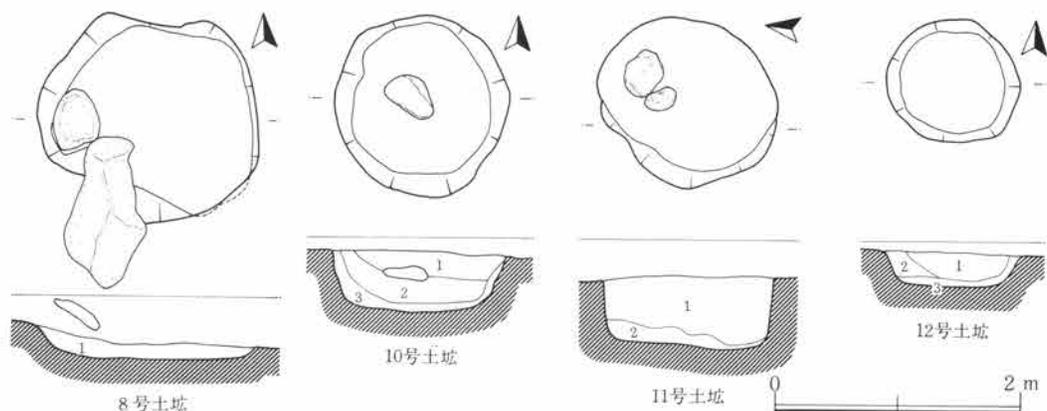
第87图 1·5·6·7号土坑 (1:60)



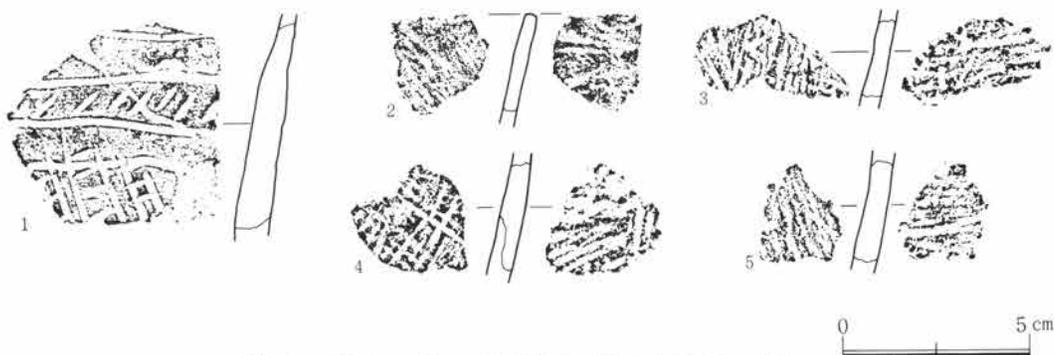
第88图 1〔1~5〕·6〔6〕号土坑出土土器 (1:2)



第89图 7号土坑出土石器 (1=1:3、2=1:1)



第90図 8・10・11・12号土壇 (1:60)



第91図 10〔1～4〕・12〔5〕号土壇出土土器 (1:2)

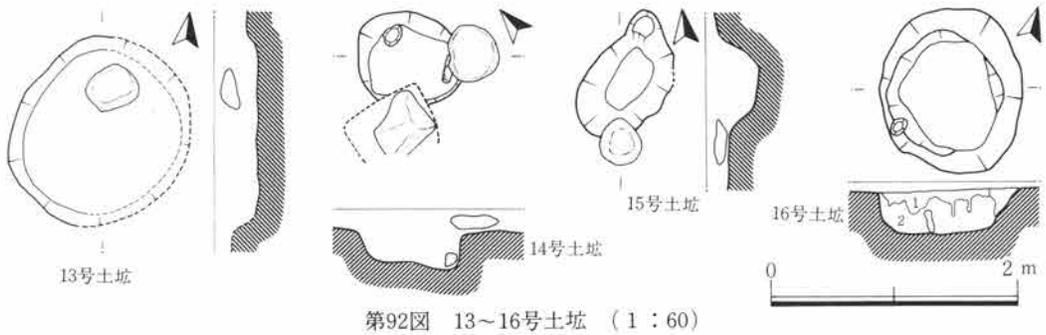
台地の中央部で調査区の西端に位置している。規模は1.85m×1.60mで、深さは26cmである。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は皿状をなしている。覆土は暗褐色土でローム粒子を少量含む。土壇の南壁には溶結凝灰岩が露出し、西に接して西壁立ち上がり上部に、径約45cmの扁平な河原石がある。出土遺物はない。

10号土壇 (第90図、図版80-2)

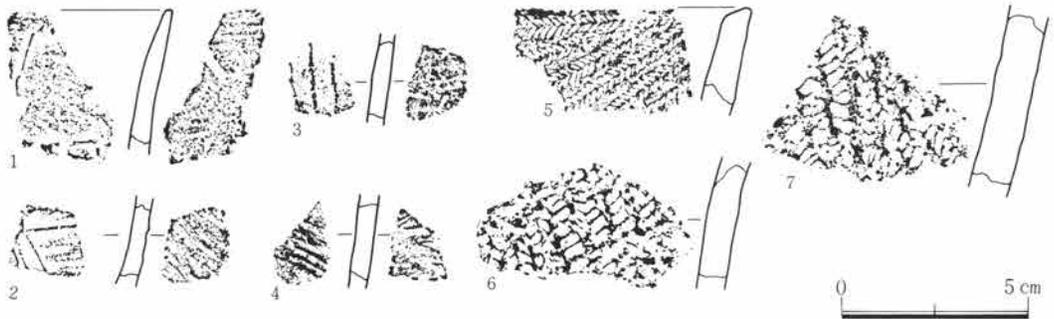
台地の中央部に位置し、12号土壇と接している。径1.45mで深さは60cmである。ほぼ円形を呈し、断面形はやや丸底状をなす。覆土は黒褐色土で上層には炭化物が少量混入し、下層にはローム小ブロックが混入している。土壇中央で覆土上部に、径約45cmの扁平な河原石が水平に横たわっていた。出土遺物(第91図1～4)としては、1の沈線を横方向や斜め方向に施した後、刺突文を加えた土器片や、胎土に繊維を含み表裏に条痕文のある薄手の土器片(2～4)がある。

11号土壇 (第90図、図版80-2)

台地の中央部で10号土壇の西に近接している。規模は1.50m×1.27mで、深さは52cmである。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦でほぼ直に立ち上がる。覆土は暗褐色土で下方へいくに従いローム小ブロックを多く含むようになる。土壇北寄りの覆土上部より、大小の礫が出土した。遺物は出土しなかった。



第92図 13～16号土坑 (1 : 60)



第93図 16〔1～4〕・17〔5～7〕号土坑出土土器 (1 : 2)

12号土坑 (第90図、図版80-2)

台地の中央部に位置している。規模は径1.04mで、深さは26cmである。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はやや丸底状をなす。覆土①は黒褐色土で、②は黒色を呈し、炭化物が多く混入している。③は淡褐色土でローム粒子を多量に含む。出土遺物 (第91図5) は胎土に繊維を含み、表裏に条痕文を施した小片だけである。

13号土坑 (第92図、図版80-3)

台地の中央部に位置する。東半は不明である。径約1.50mほどで、深さは22cmある。平面形は円形を呈するものと推定され、底面はやや凸凹しており、皿状を呈している。覆土は黒色土で、土坑の北壁寄り上部に、径約40cmの河原石がある。出土遺物はない。

14号土坑 (第92図、図版79-1)

台地の中央部で調査区西端に位置し、西壁の一部を攪乱されている。規模は0.88m×0.70mで、深さ32cmである。平面形はやや楕円形を呈し、底面は起伏があり丸底状をしている。覆土はローム粒子が混入したソフトな黒色土である。土坑南壁上部に径約45cmの偏平な河原石がのっている。出土遺物はない。

15号土坑 (第92図、図版79-2)

台地中央部の北寄りに位置している。規模は0.95m×0.65mで、深さは43cmである。平面形は不整形楕円形を呈し、断面形は丸底状をなす。覆土は黒色土の単一層で、南壁上部に径約37cmの偏平な河原石がのっている。遺物は出土しなかった。

16号土壇（第92図、図版79-3）

台地中央部で調査区の東端に位置し、3号住居址と接している。規模は1.33m×1.15mで、深さは35cmである。平面形は不整円形を呈し、断面形は丸底状をなしている。覆土①は黒褐色土でローム小ブロックを極少量含み、②は暗褐色土でローム小ブロックを多く含み、固く締っている。出土遺物（第93図1～4）としては胎土に繊維を含み、表裏に条痕文が施され、口縁部に微隆起線を貼り付けた文様構成を持つ小片が出土した。他に剝片2点が出土している。

17号土壇（第80図、図版75-1）

台地中央部で調査区東端に位置し、4号住居址に切られている。規模は1.44m×1.40mで、深さは16cmである。平面形は不整楕円形を呈し、断面形はやや丸底状をなしている。覆土は褐色土でローム小ブロックをやや多く含む。出土遺物としては、第93図5の胎土に繊維を含み、縄文の側面圧痕で文様構成をなす口縁部片や、6・7の同じく繊維を含み、LR原体で0段多条の胴部片があり、他に胎土に若干繊維を含み、表裏に条痕文を施した薄手の土器片2点があり、剝片7点も出土した。

18号土壇（第94図、図版81-1）

台地中央部で調査区東半に位置している。規模は1.28m×1.20mで、深さは37cmである。平面形はやや歪んだ円形を呈し、底面は平坦で壁は斜めに立ち上がる。覆土①は暗褐色土でローム小ブロックを少量含み、②は黒褐色土でローム小ブロックを極少量含む。③は暗黄褐色土でローム小ブロックを多く含み、下方へいくほど固く締っている。出土遺物としては第95図1～6の胎土に若干繊維を含み、表裏に条痕文を施した薄手の土器片があり、1・2は平坦な口唇部を持つ口縁部片である。また、無茎の石鏃（第96図1）1点が出土している。

19号土壇（第94図、図版81-2）

台地中央部で調査区東半に位置している。規模は1.25m×1.20mで、深さは78cmである。平面形はやや乱れた円形を呈し、北寄りの底面には溶結凝灰岩があり、底面は南へ傾斜を持ち、南壁下へやや入り込んでいる。壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は明褐色でロームブロックを多く含む。北壁寄り土壇上部には、径約28cmの河原石が斜めに傾いた状態でのっており、西壁上縁部には2石の河原石が斜めに立っており、傍から打製石斧1点が出土し、覆土中からも1点出土した。この2点の打製石斧（第96図2・3）には使用痕が見られなかった。他に剝片3点が出土した。

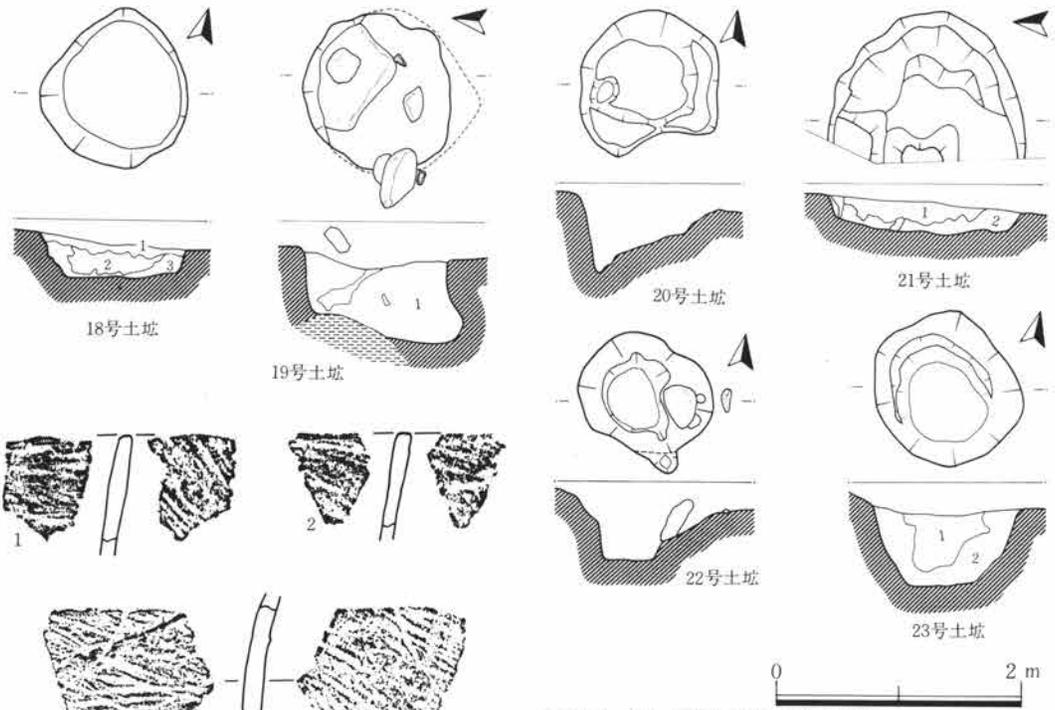
20号土壇（第94図、図版81-3）

19号土壇と近接している。規模は1.13m×0.98mで、深さは40cmである。平面形は歪みを持った円形を呈し、2段に落ち込み底面は傾斜を持ち、西端に径25cm、深さ64cmのピットがある。覆土は黒褐色土でローム小ブロックをやや多く含む。出土遺物はない。

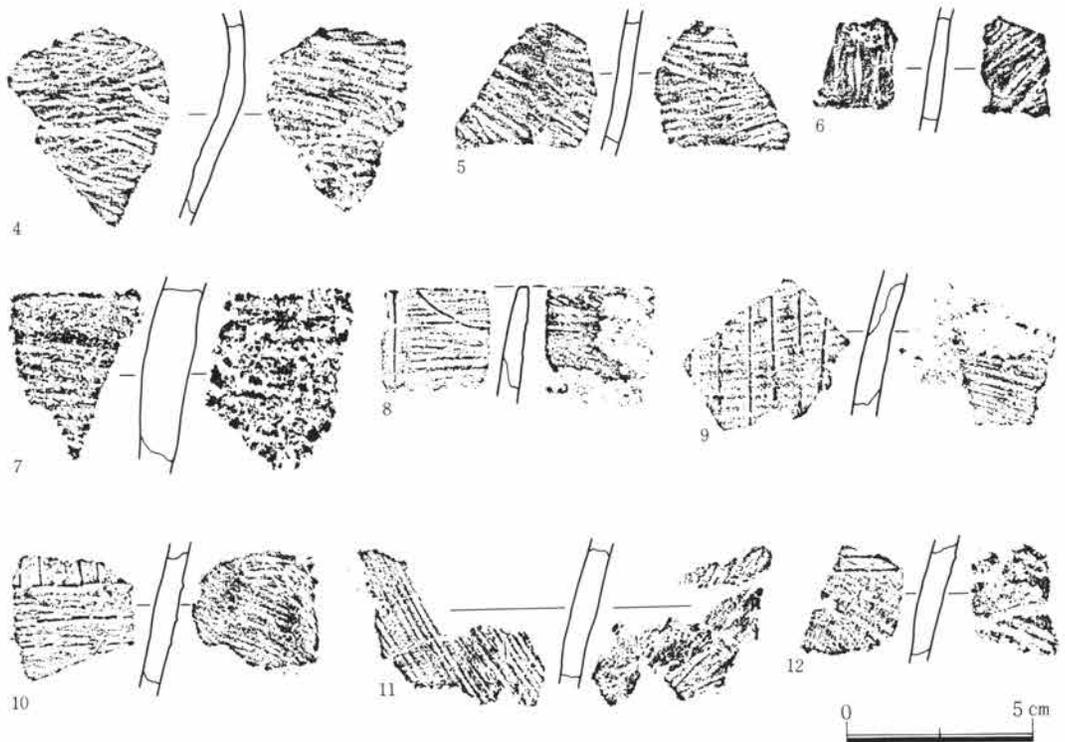
21号土壇（第94図、図版82-1）

台地の中央部で調査区東半に位置する。西半は確認できなかった。規模は径約1.60mで、深さは25cmである。平面形はやや乱れた円形を呈するものと推定され、断面形は底面がやや凸凹した皿

第七章 前中原遺跡



第94图 18~23号土坑 (1:60)



第95图 18(1~6)·21(7~11)·23(12)号土坑出土土器 (1:2)

状をなす。出土遺物としては、第95図7は胎土に繊維と鉱物粒を多量に含み、表裏に条痕文を施した厚手の土器片で、8～10は胎土に若干繊維を含み、表裏に条痕文を施し、微隆起線を貼り付けて口縁部の文様構成となす土器片で、11は同じく胴部片である。

22号土坑（第94図、図版82-2）

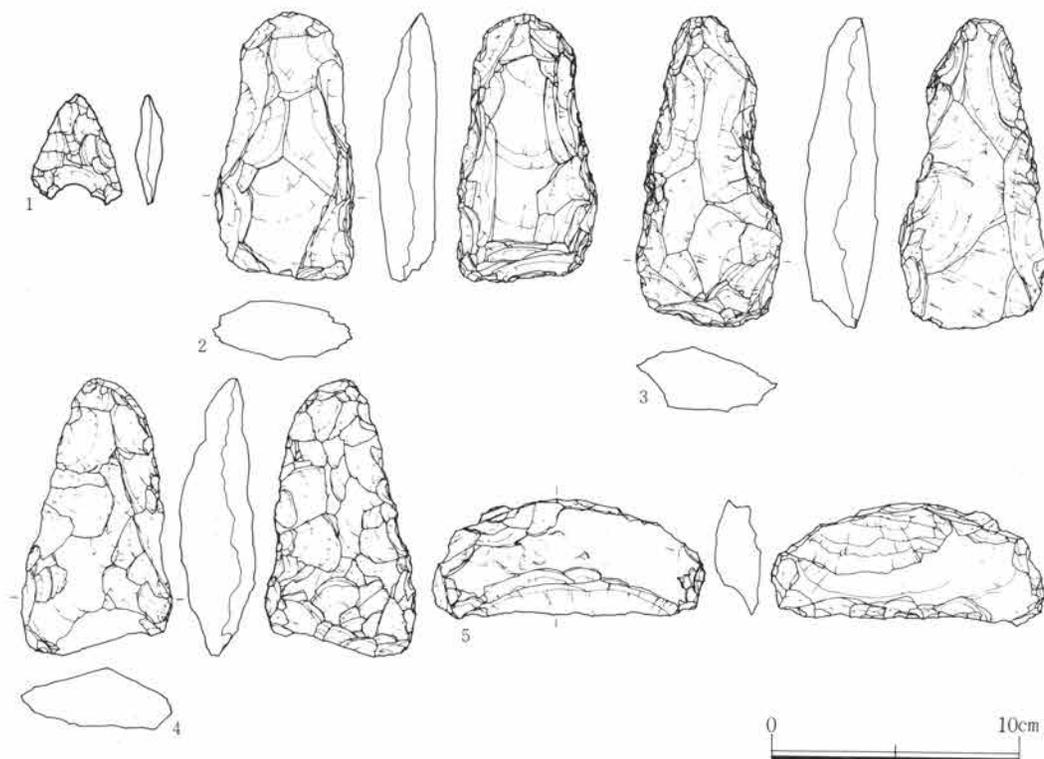
台地中央部やや北寄りに位置している。規模は1.10m×0.83mで、深さは57cmである。平面形はやや歪んだ楕円形を呈しており、底面は平坦で下半の立ち上がりはほぼ直に近く、上半は斜めに立ち上がる。覆土は黒褐色土でローム小ブロックを少量含み、固く締っていた。東壁中段には径約35cmの偏平な河原石が斜めの状態で壁に接していた。出土遺物としては、第96図4の撥形の打製石斧が東縁部より出土し、5の横剥ぎの剥片石器が覆土中より出土した。打製石斧は刃部を欠損し、剥片石器の表面は自然面を残す。

23号土坑（第94図、図版82-3）

台地の中央部で調査区西半に位置している。規模は1.22m×1.09mで、深さ66cmである。平面形はやや歪んだ楕円形を呈しており、断面形はやや丸底状をなしており、一部2段に立ち上がる。覆土①は黒褐色土でローム小ブロックを少量含み、②は暗黄褐色土でロームの大小のブロックを多く含む。出土遺物としては第95図12があり、胎土に極少量繊維を含み、表裏に条痕文を施しており、上方に2本の平行した微隆起線を貼り付けている薄手の土器片で口縁部に近い。

※ 9号土坑は欠番である。

(下城 正)



第96図 18〔1〕・19〔2・3〕・22〔4・5〕号土坑出土石器（1＝1：1、2～5＝1：3）

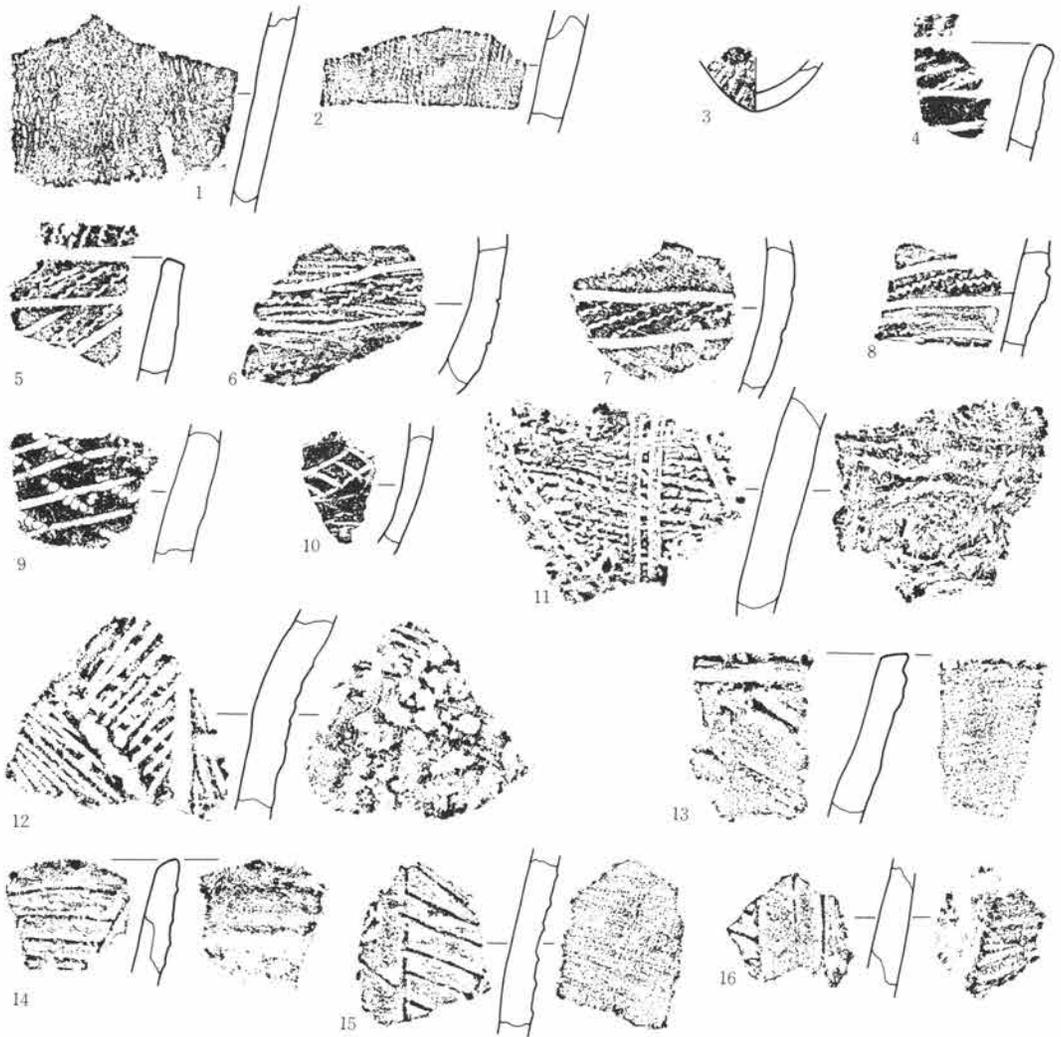
(4) グリッド出土の土器

第1類土器 (第97図、図版97)

1～3は燃糸文土器である。1は縦長の粗大な燃糸文で、浅い節がみえる。2は細かい原体を使用している。3は、同じく細い原体を施文した尖底部分である。絡条体はRである。

第2類土器 (第97図、図版97)

貝殻文を特徴とする土器群である。平均して薄いつくりで、6が8mmであるほかは5～6mmの器厚である。胎土は稀に繊維を含むが、概して小砂粒を含んだ緻密な粘土を使用している。8は赤褐色を呈するが、他はやや黒ずんだ褐色である。4・5は口縁部で、切りはなした角度のある



第97図 1〔1～3〕・2〔4～10〕・3〔11～16〕類土器 (1:2)

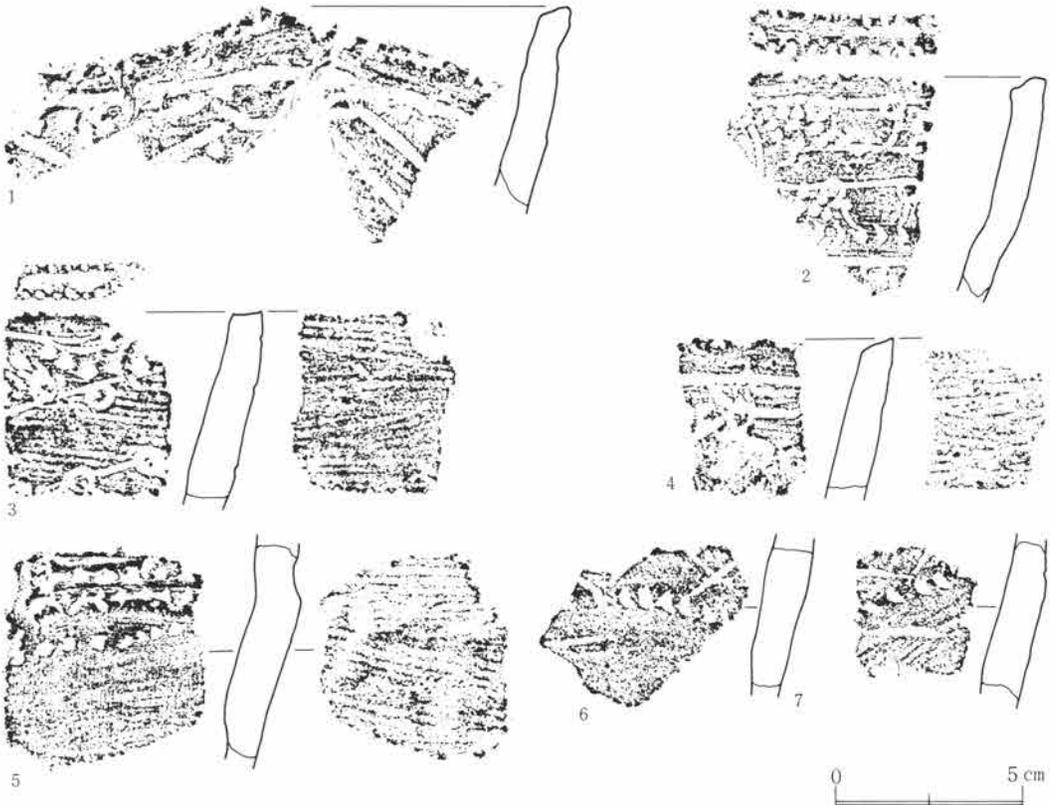
稜をもっている。上面は平らで、貝殻腹縁を斜めに連続して施してある。口縁直下には約1cmの幅で横位に文様帯が付けられており、これが多段化する。区画はヘラまたは棒状工具で引かれている。区画内は左上がりの斜行で貝殻腹縁文が充填されるが、5はヘラ状沈線と交互に施文されている。8は画線内が隆帯化しており、ここには斜めの貝殻腹縁文が付けられている。6は胴部近くの破片で、横位の画線がややくずれている。10は小破片であるが、横位の画線と内部の斜行沈線ともにヘラによっている。9は棒状工具による左下りの沈線に対して、格子状に貝殻腹縁を背位から押しつけている。

第3類土器 (第97図、図版97)

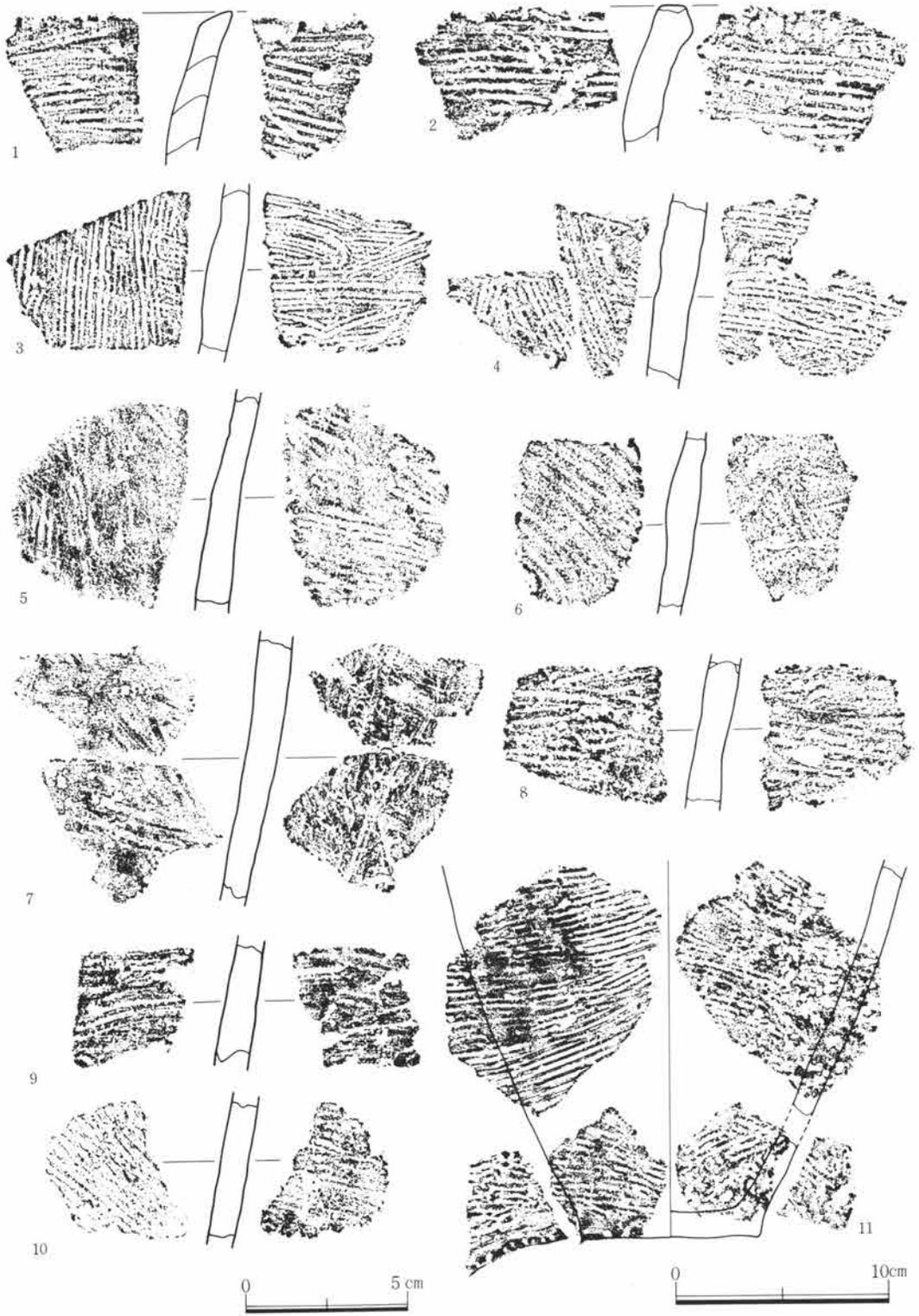
条痕文系の土器群である。11は多量の繊維を含み、1cm近い器厚をもつ。Rの捺糸文を地文にもち、その上を幅広の条痕状の沈線が数本走る。文様構成は不明。12は棒状工具による太い沈線で、13~16は微隆起線による文様構成をとる。いずれも1~0.8cmの器厚で、若干繊維を含む。14は波状口縁である。いずれも、野島式土器であろう。

第4類土器 (第98図、図版98・99)

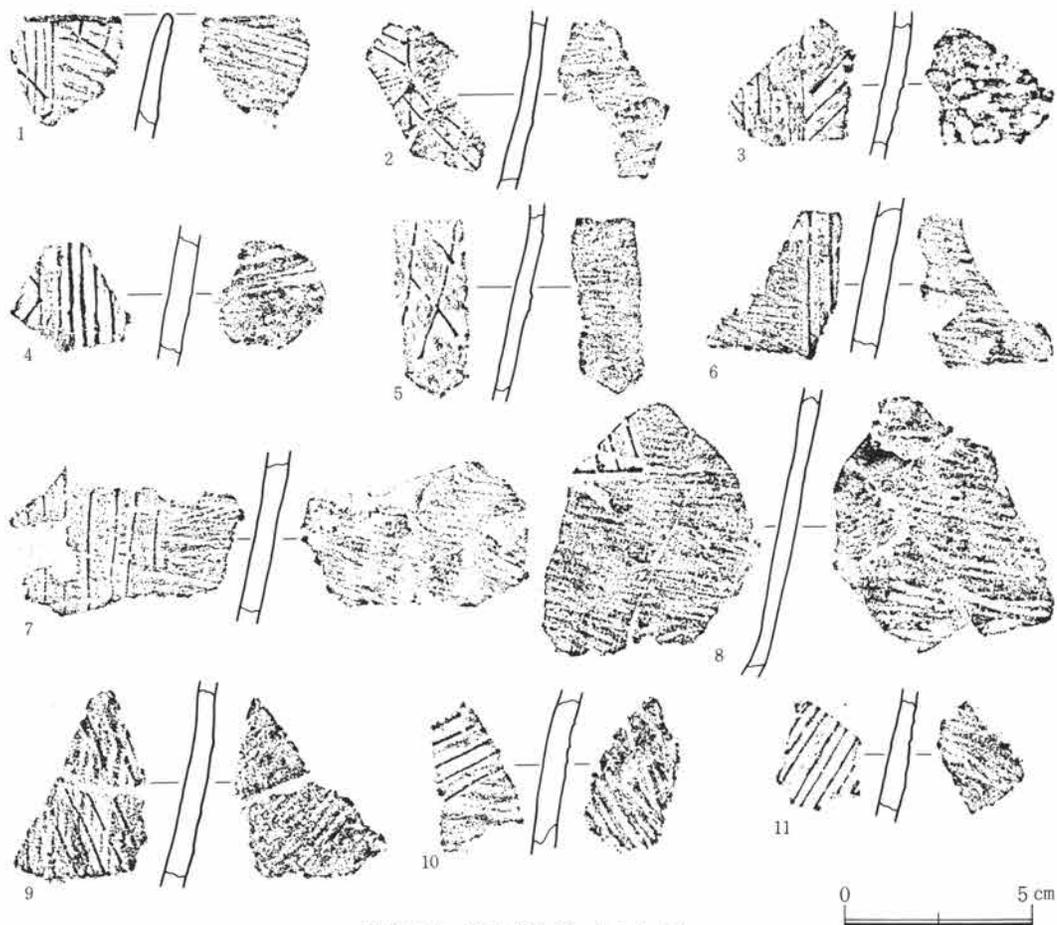
条痕文系土器群のうち、鵜ヶ島台式土器を一括した。いずれも、若干の繊維を含み、小石粒が目立つ胎土である。0.9~1.2cmの器厚で、赤褐色を呈するものが多い。1は小形の波状縁で、2・



第98図 第4類土器 (1:2)



第99図 第5類土器 (1~10=1:2、11=1:3)



第100図 第6類土器 (1:2)

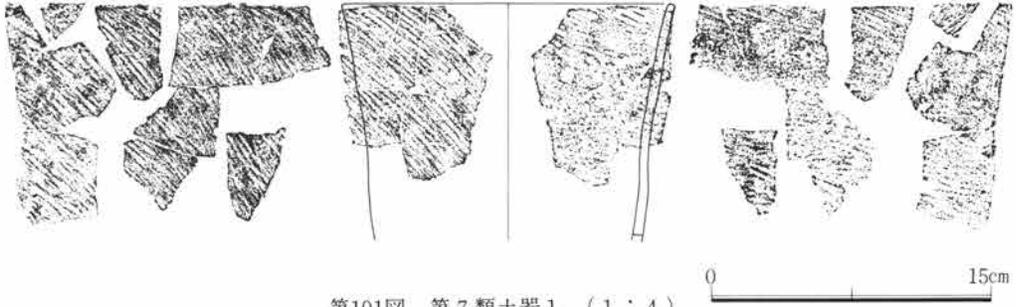
3は外に向って切りはなす口唇をしている。文様は竹管による沈線で斜行・平行・格子状に区画し、円形または舟形状の竹管文を付加している。3は表裏とも、5は表面のみ横位の条痕がみられる。

第5類土器 (第99図、図版100・101)

表裏ともに条痕のみられる土器である。器厚は1~1.2cmと厚く、胎土には繊維が混入されている。石粒は少ない。ほとんどが表裏ともに黄褐色を呈するが、2~5は黒褐色をしている。条痕は5を除いて横位施文が多く、11では1単位が1.5cm幅である。施文工具は貝殻にも思えるが、断定できない。1は口縁部で、4類と同じく外に向って切りはなした口唇を有している。11は底部で、稜線の明確な平底である。

第6類土器 (第100図、図版102-2・103-2)

器厚6mm前後の薄手の土器で、若干繊維を含むが、石粒はほとんど混っていない。すべて赤褐色気味の色調を呈している。表裏に横位の条痕が付くが浅いものが多い。微隆起状の粘土紐で文



第101図 第7類土器1 (1:4)

様が構成されているが、その構成はほとんど野島式土器と同様のモチーフを有している。椶ノ木下層式に対比されよう。

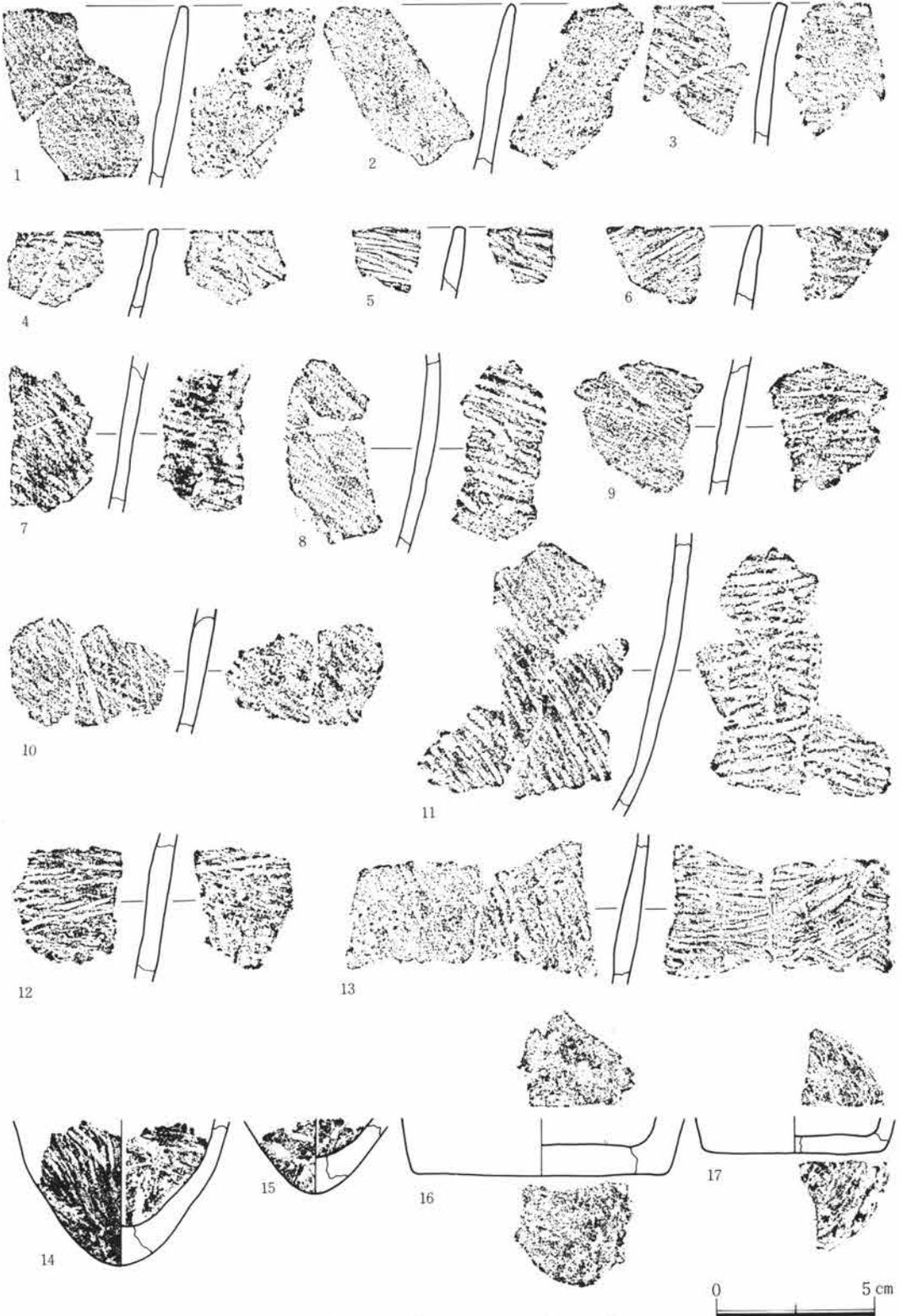
第7類土器 (第101・102図、図版102-1・103-1・104・105)

第6類土器と同様の胎土・色調をもち、器厚も同様に薄い。微隆起の文様構成のないものを一括して分類した。ともに表裏に条痕文が施文されるが、表面は斜位が多く、裏面は横位の施文が多い。第102図1～6は口縁部で、口唇部は丸みを帯びるのを特徴とするが、なかには平坦面として調整されているものもある(4～6)。とくに、第101図はそれが顕著で、内外面を調整したものと同種の工具で平坦な口唇部をつくり出している。なお、この器体は同一個体の土器片により器形を復元したものであるが、口縁部の径に対してやや縦長の器形を呈していることが判る。なお、第102図14～17は本類土器の底部であり、平底と尖底が2個ずつある。尖底は急なカーブをもっているが、やや丸味を帯びたものとなっている。16の平底は厚さ9mm、17は5mmで、ともに厚さに比較して直径の大きいものと考えられる。第101図の一括土器には、補修孔と思われる穿孔が1ヶ所みられる。椶ノ木下層式土器に比定されよう。

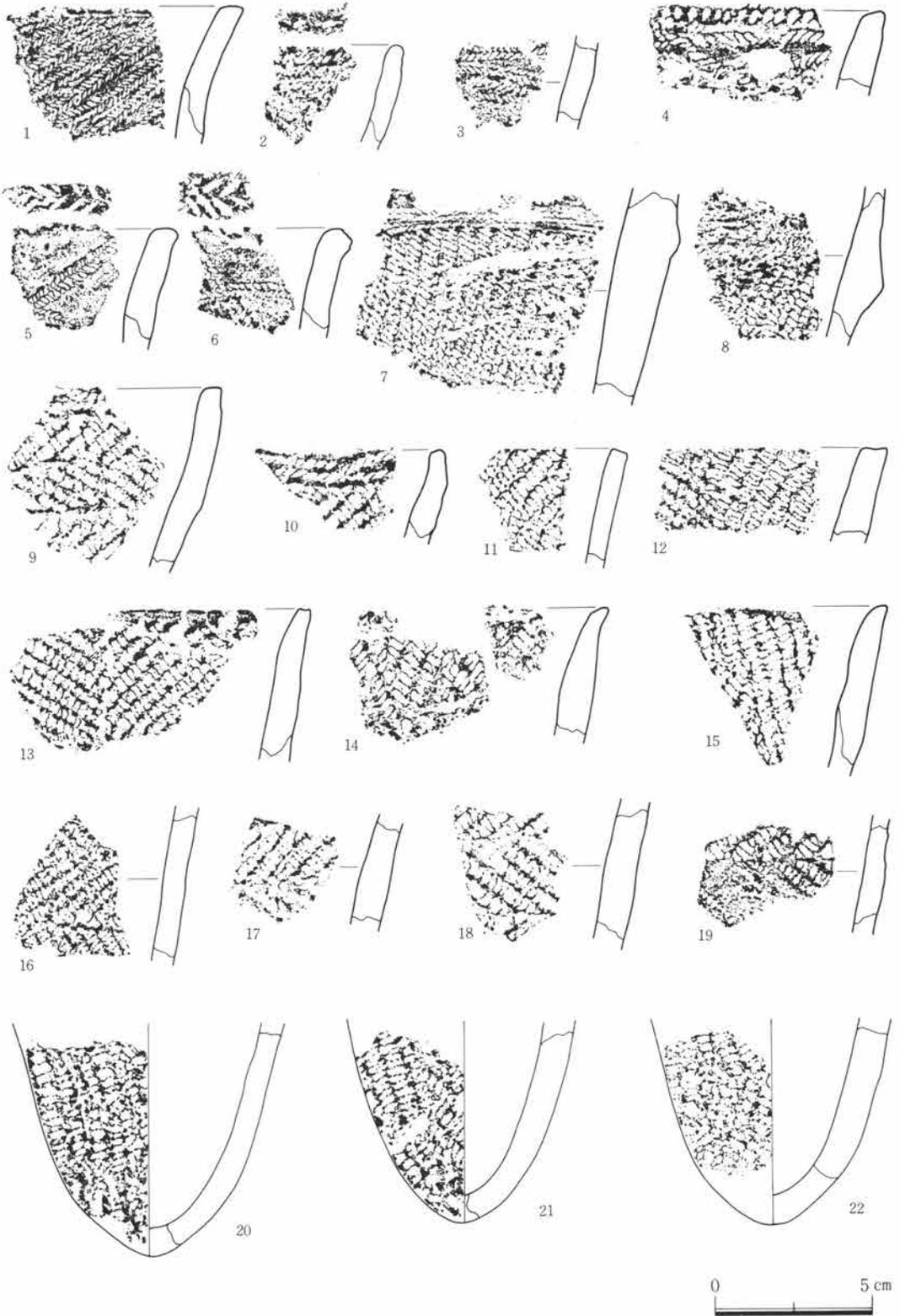
第8類土器 (第103、図版106)

花積下層式土器および同時期併行期と思われる土器を一括した。いずれも多くの繊維を含み、それが器の内外面で観察できる。1～3・12～14は黒味を帯び、4・7・8・15・16・20～22は赤味を帯び、5・6・9・10・17～19は灰色の色調を呈している。1は口唇が外に向ってななめに切りおとしてある。1・3はRL2本一束の撚糸圧痕が全面に施文されているが、2はRのみの原体である。2の口唇は撚糸原体を圧痕した刻目が付く。4も同様に口唇外縁部に撚糸圧痕が付く。5・6は同一個体で、口唇には綾杉状の刻みが付く。口縁部にはRL2本一束の撚糸圧痕が格子状に施文されている。この口縁部文様は7・8にも付いている。また、9・10は口唇直下に2本の撚糸を圧痕し、それ以下はRLとLRで1.5cm幅の横位羽状をつくり出している。なお、12～15は厚さ1cmで、口唇直下からRL・LRの0段3条多条縄文が羽状に施されている。口唇のつくり方は、平坦な調整が加えられている点で1と共通しているが、黒浜式土器の様相も呈している。

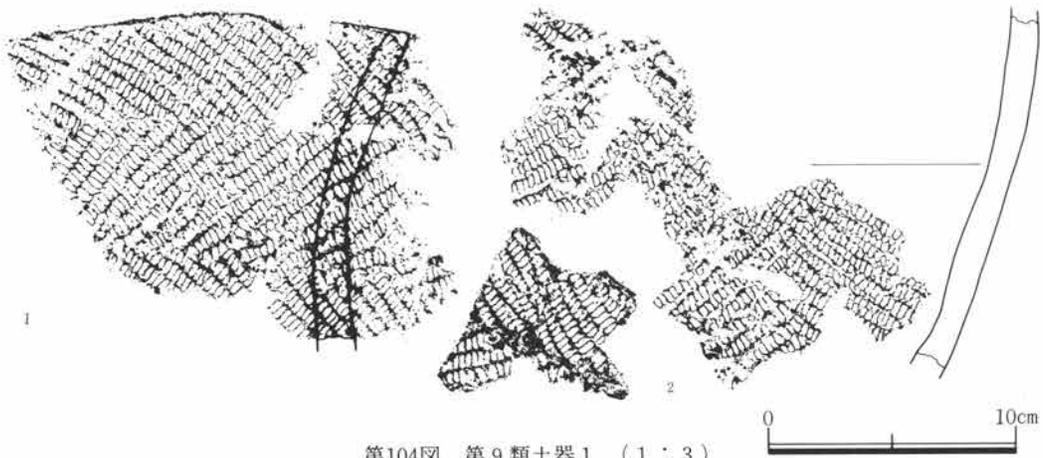
20～22の3個の底部は、いずれも丸味を帯びた尖底を呈している。関東地方の花積下層式土器



第102図 第7類土器2 (1:2)



第103図 第8類土器 (1:2)



第104図 第9類土器1 (1:3)

にはあまり見かけられない器形であるが、東北地方の状況からみて花積下層式土器に併行するか、若干先行するものと考えられる。縄文原体は、20・22がLR、21がLRの0段3条である。器厚は体部から連続した厚さで、底部にいたって厚さを増してはいない。花積下層式土器の平底面にみられる縄文施文は、同時期の丸底土器やこのような尖底（丸底）土器を前身にもっているであろう。

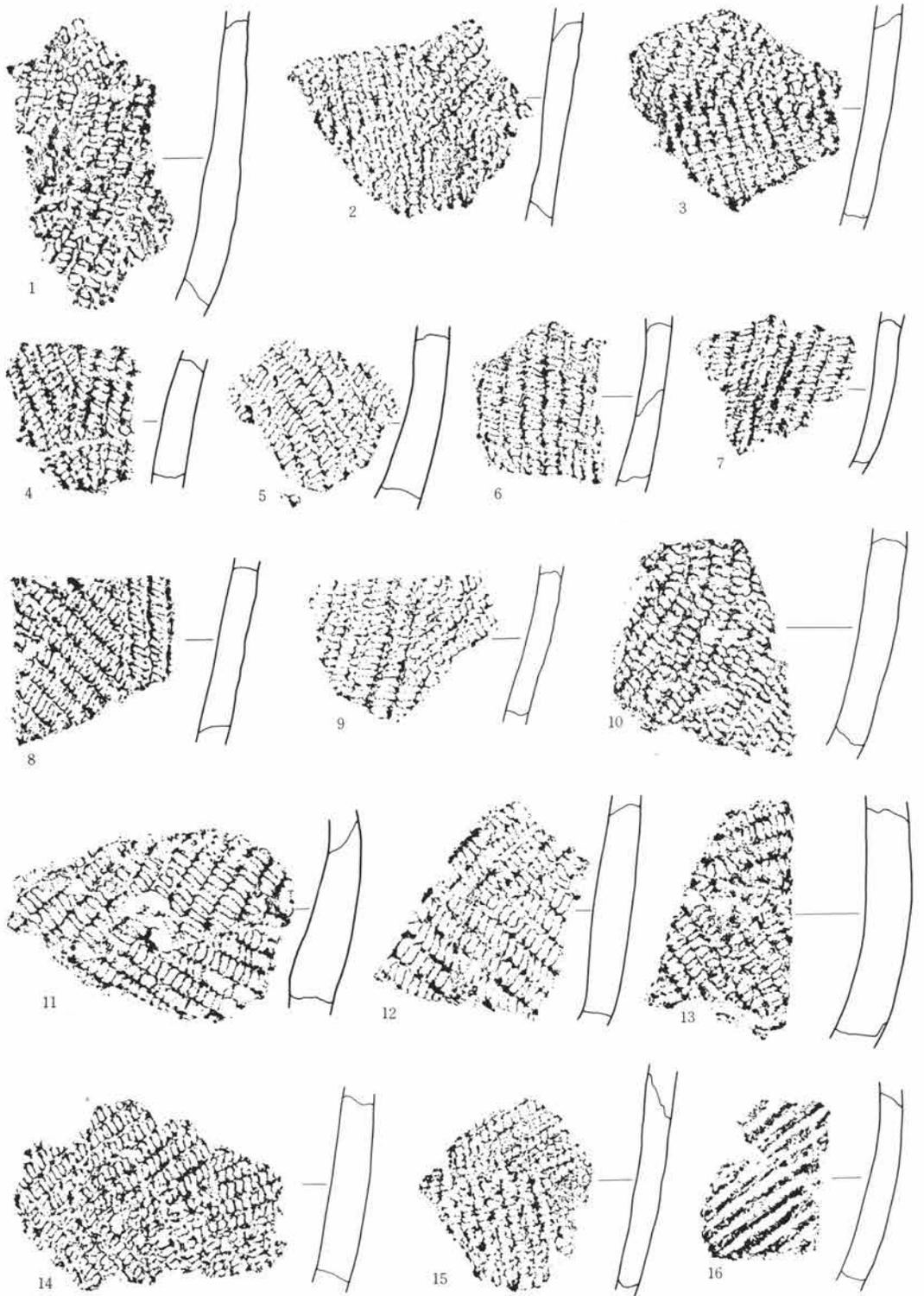
第9類土器（第104・105図、図版107・108）

縄文のある土器片を一括した。第105図1～10の上方から下方に向かって原体を転回しているものである。原体はRL・LRの0段多条であるが反の撚りをかけているものが多い。総じて黒灰色を呈しており、器厚も薄い。胎土には繊維が混入しているが、あまり多くはなかくたい焼成をしている。第8類の尖底（第103図20～22）と同一の器種と考えられる。また、11～16は縄文施文が菱形を構成しており、器厚もある。第104図1・2とともに黒浜式土器に比定されるものであろう。

前者と後者の区別は峻別しにくく、図版作成時に若干の混乱を招いた。しかし、前者は花積下層式か、もしくは若干先行する時期と考えられ、東北地方にみられる尖底あるいは丸底を呈する土器群の影響下のものと考えられる。

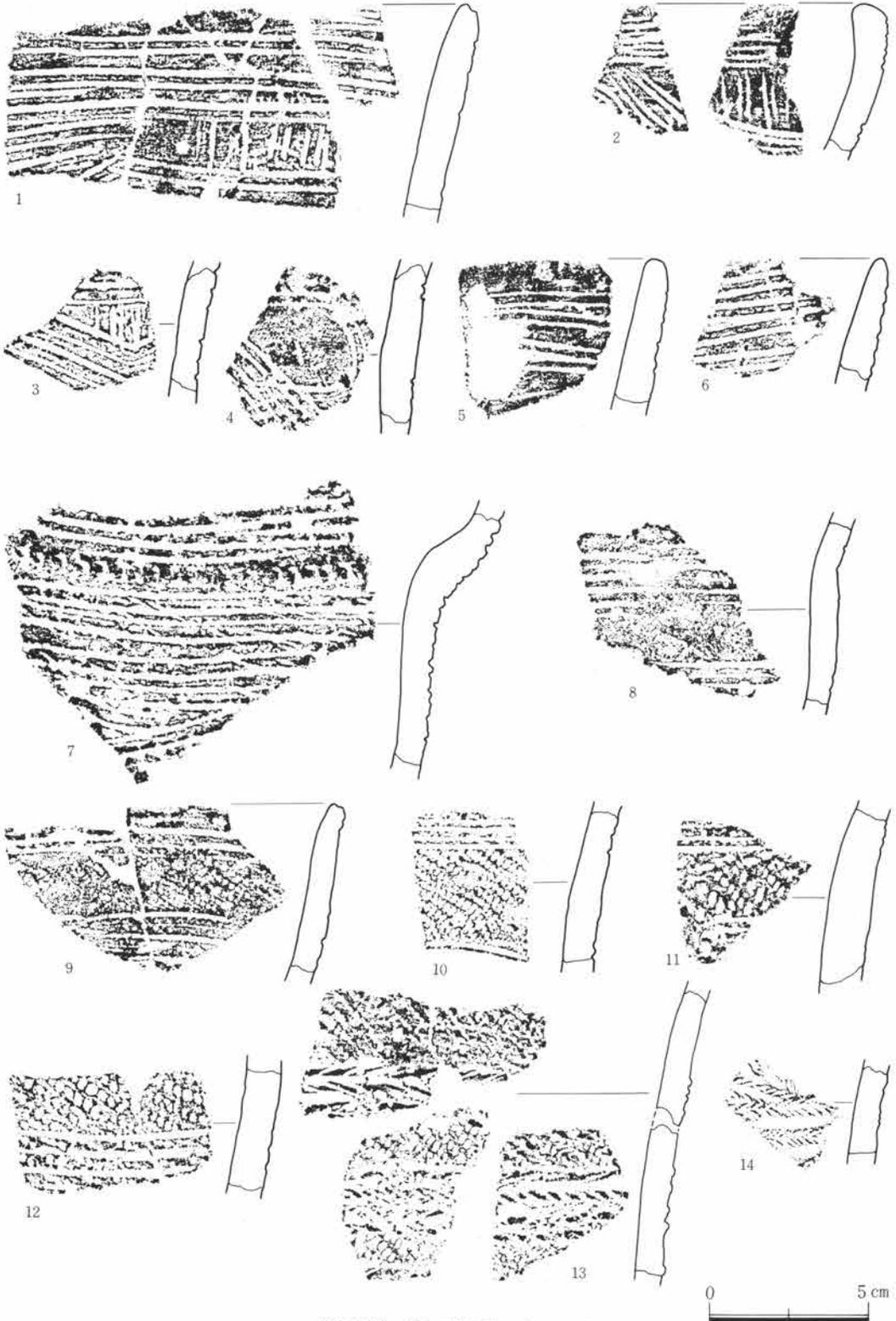
第10類土器（第106図、図版109）

諸磯b式土器を一括した。1～6の横位の平行沈線の集合による文様構成を基調にしている。平行沈線は半截竹管によって施文され、部分的に三角形・弧状・ループ状の変化をもたせ、その空間を縦位の沈線で埋める手法をとっている。胎土は砂状の混和材が使われ、ザラついている。赤褐色の色調をしている。8は1～7と同様の施文具とモチーフであるが、地文に縄文が施されている。9～12は縄文地に横位の平行沈線が带状に施されるものである。13・14は縄文地に細い粘土紐を横位に貼付し、斜位のキザミを加えるものである。 (能登 健)



第105図 第9類土器2 (1:2)





第106図 第10類土器 (1 : 2)

(5) グリッド出土の石器

石器 1 (第107図、図版110-1)

短冊形を呈した打製石斧で刃部は丸みを持ち、基部は丸みを持つものと平坦なものがある。表裏面は横方向から剥離が加えられ、側面全体は細かく潰ぶされ調整している。基部と刃部は縦方向の剥離が加えられている。1は表裏面および片側面に大きく自然面を残し厚みもあり、剥離も一方の側面方向に限られており未製品の可能性がある。5の裏面と側面の刃部には摩耗痕があり、縦方向の擦痕が見られる。表面の刃部は使用により大きく割れている。他の石器の刃部には細かい割れが認められる。3・5・10には自然面が残り、4は基部近くで折れ、6～10は中間部で折れている。

石器 2 (第108図、図版110-2)

剥離は石器1とほぼ同様であるが、1は刃部が丸く基部に向かって鋭どく尖っている。刃部は表面方向だけから剥離が加えられ、やや鈍角である。2は1と同様に刃部が丸く、稜線が膨らみ両端に向かって急角度で薄くなっている。1・2ともに表面に自然面を残している。

3は両端が尖り明確な稜線があり、断面がほぼ三角形を呈した石槍状の石器である。刃部には裏面方向から細かい剥離が加えられている。

4はやや分銅形を呈し、中間部が細かく潰され抉れている。5・6は撥形をなし、上半部に抉り込みがある。6は自然面を残し、中間部で折れている。

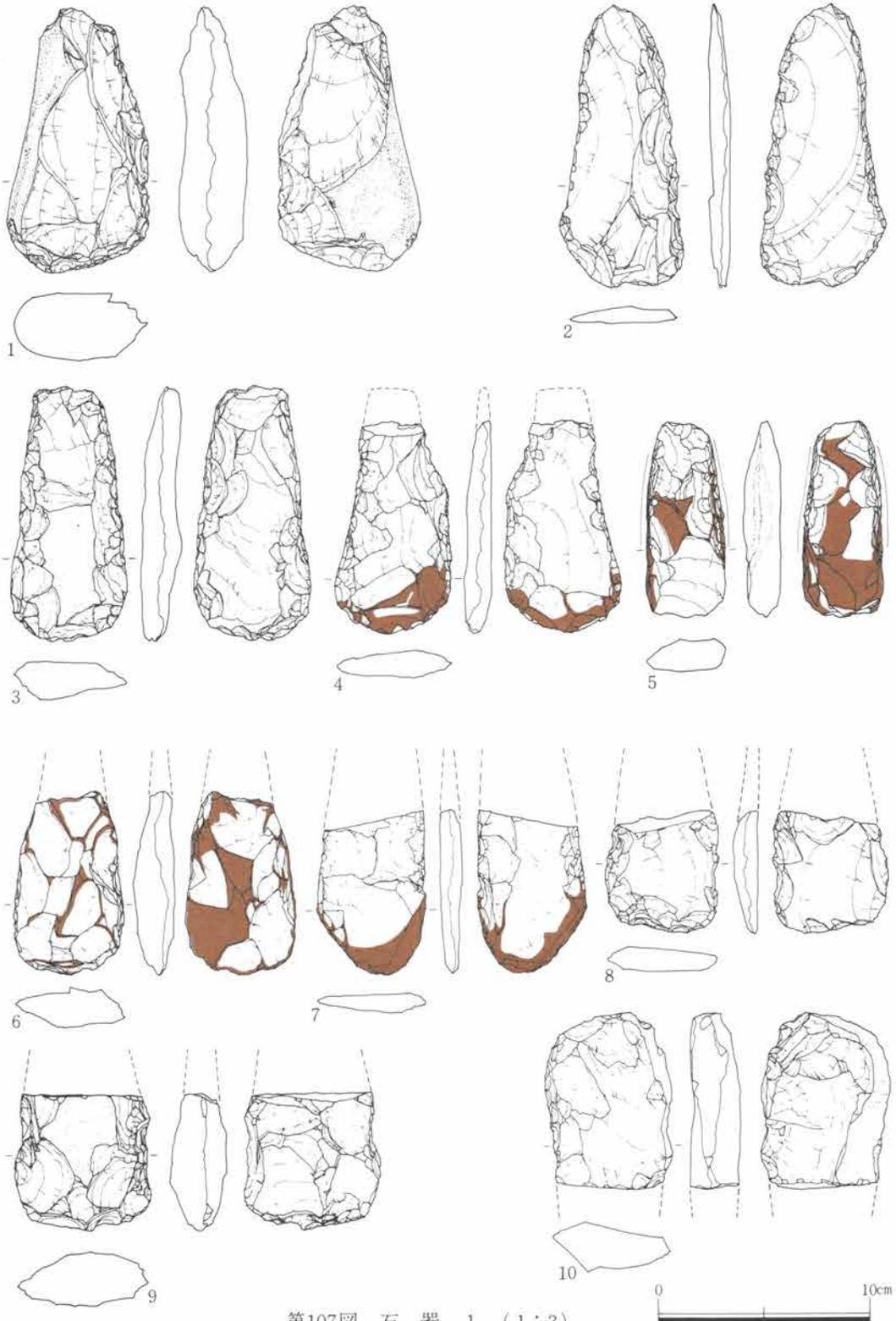
石器 3 (第109図、図版111-1)

1～11はやや撥形をした小形の打製石斧で、12・13は半円形をした礫器である。1～11の剥離は石器1と同様であるが、刃部は平坦なものが多く基部が尖るものがある。ほとんどの石器の刃部には細かい割れが見られる。

12は側面から基部にかけて丸みを持ち、刃部は平坦である。側面と裏面は自然面だけで、表面と基部・刃部に縦方向の剥離が加えられている。13は基部が平坦で側面から刃部にかけて丸みを持っている。基部は自然面だけからなり、表裏面および刃部は多方向からのやや荒い剥離が加えられている。

石器 4 (第110図、図版111-2)

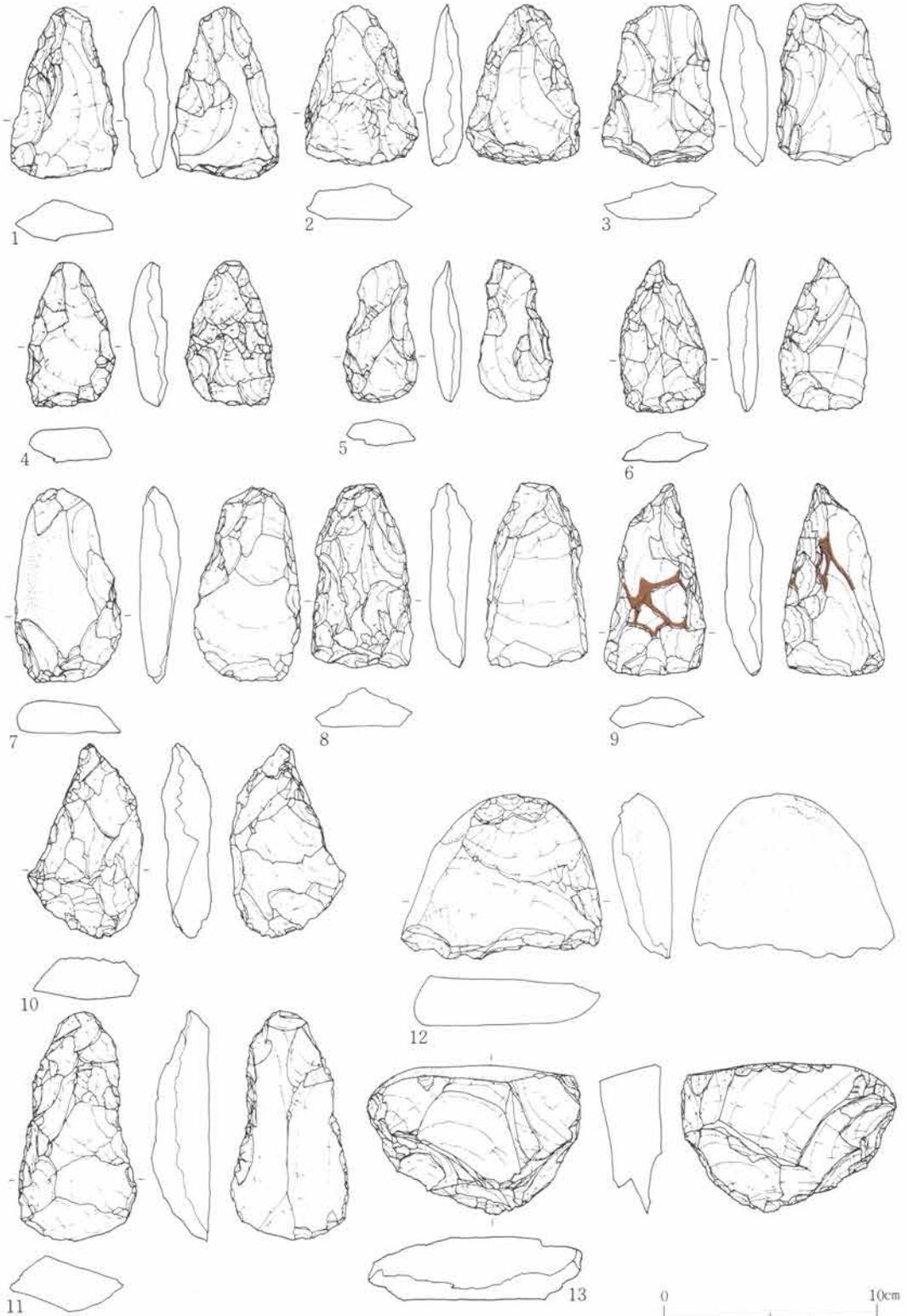
1は乳棒状の磨製石斧で、刃部には使用によると思われる大きな割れが表裏面に入っている。2も乳棒状の磨製石斧で中間部で折れ基部を欠いている。刃部には使用によると思われる細かい割れが見られる。3・4はいままでの打製石斧と異なる特異な形態をしており、弥生時代の所産であるが、本項で図示し扱うこととした。3・4は形状が長楕円形を呈し偏平で両端に刃部を持ち、中間部両側面に円弧をなす小さい抉り込みがある。3の両端の刃部は表裏面に若干摩耗痕があり、縦方向の擦痕がある。また、側面にある抉り込みも摩れた痕がある。4は片方の刃部を欠損しているが、3と同様に刃部や抉り込みに極わずかの摩耗痕が見られる。



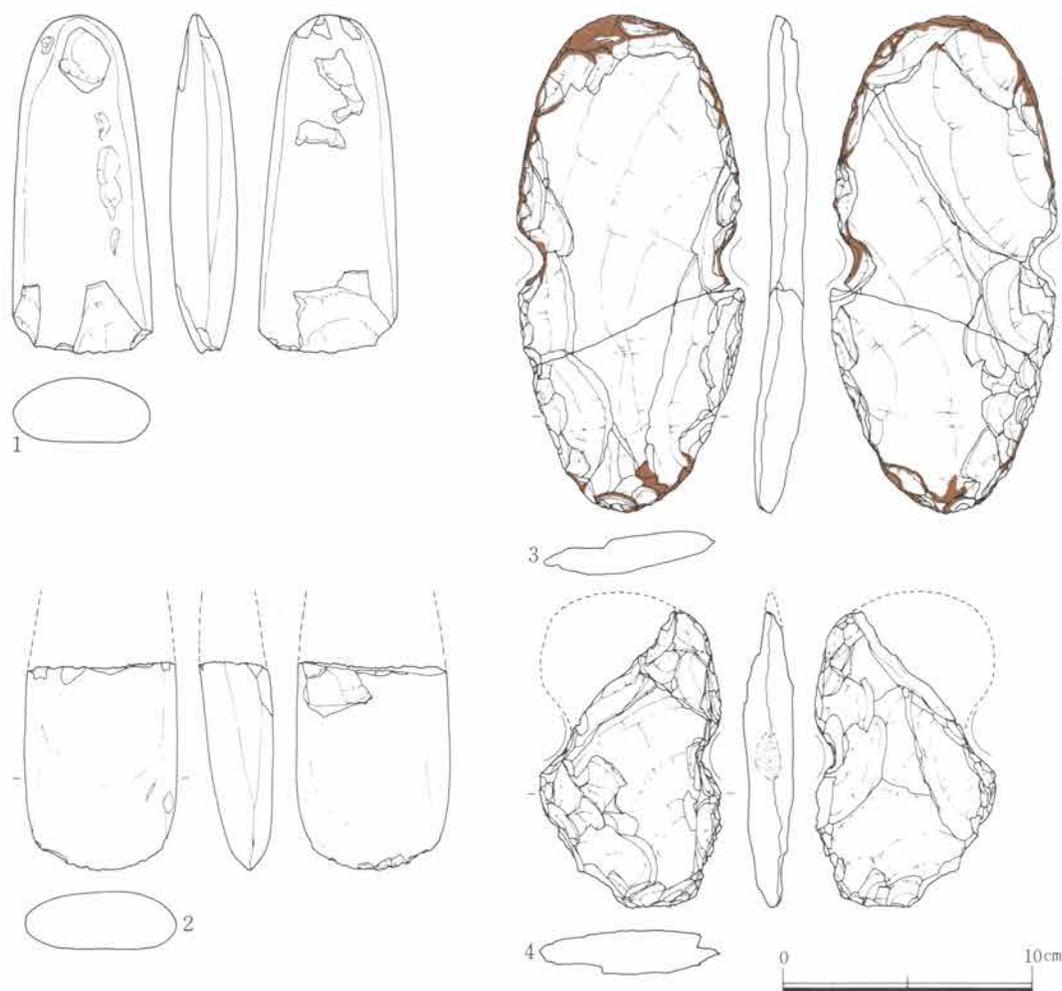
第107図 石器 1 (1:3)



第108図 石器 2 (1:3)



第109図 石器 3 (1:3)



第110図 石器 4 (1:3)

石器 5 (第111図、図版112)

1～14は三角鏃で基部がやや外側へ膨みを持つものや、やや内湾するもの、直線的なもの等がある。15～29は無茎石鏃で茎部の湾入が比較的浅いものが多い。

石器 6 (第112図、図版113-1)

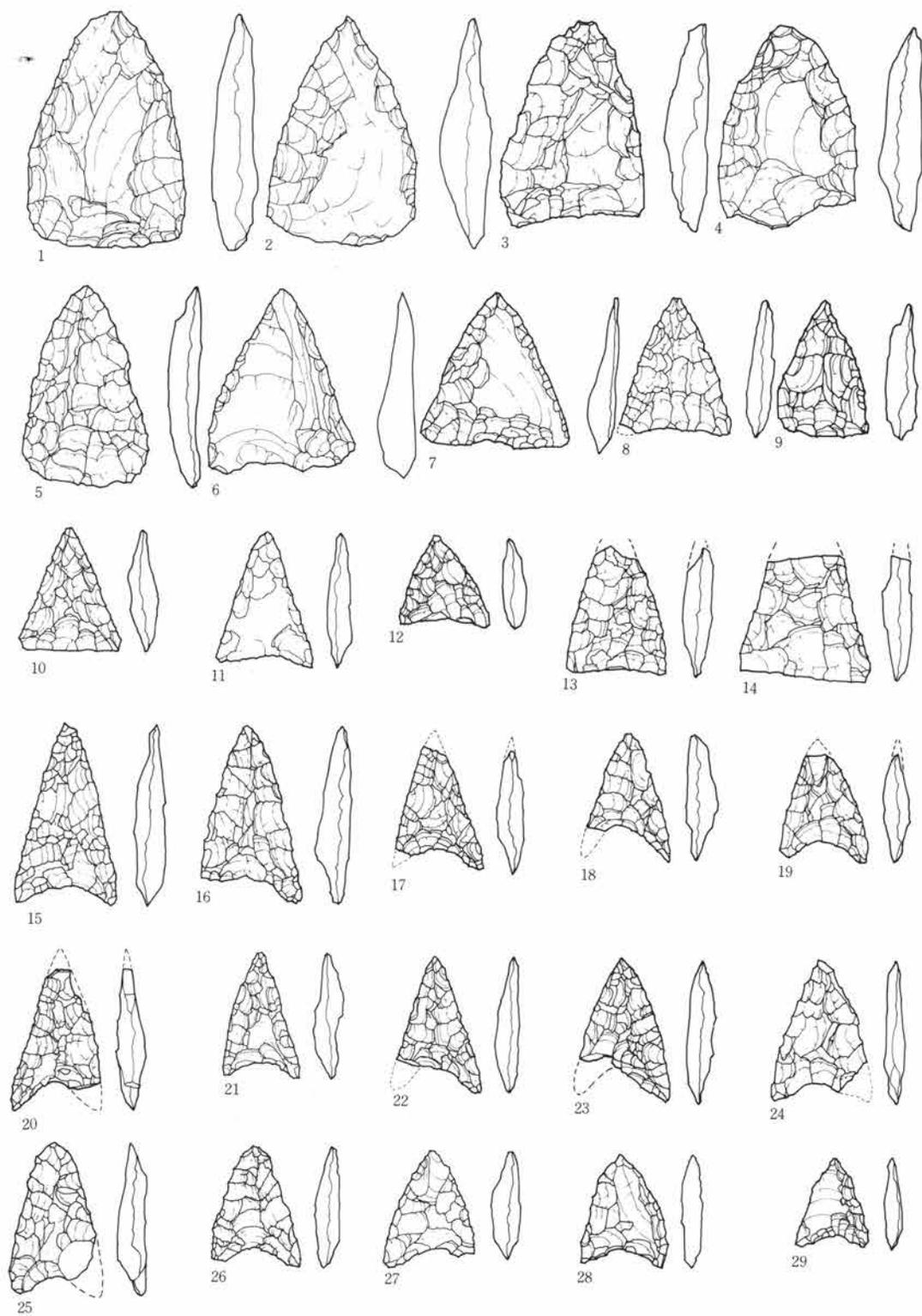
横形の石匙で摘みの部分の角度は一定していないが、刃部を先端部の平坦な部分に付けている。4は基部を欠損している。

石器 7 (第113図、図版113-2)

1～6は縦形の石匙で、両側面から先端部にいたるまですべてを刃部としている。6は摘みの部分を特別作り出しておらず、縦長剥片をそのまま利用している。

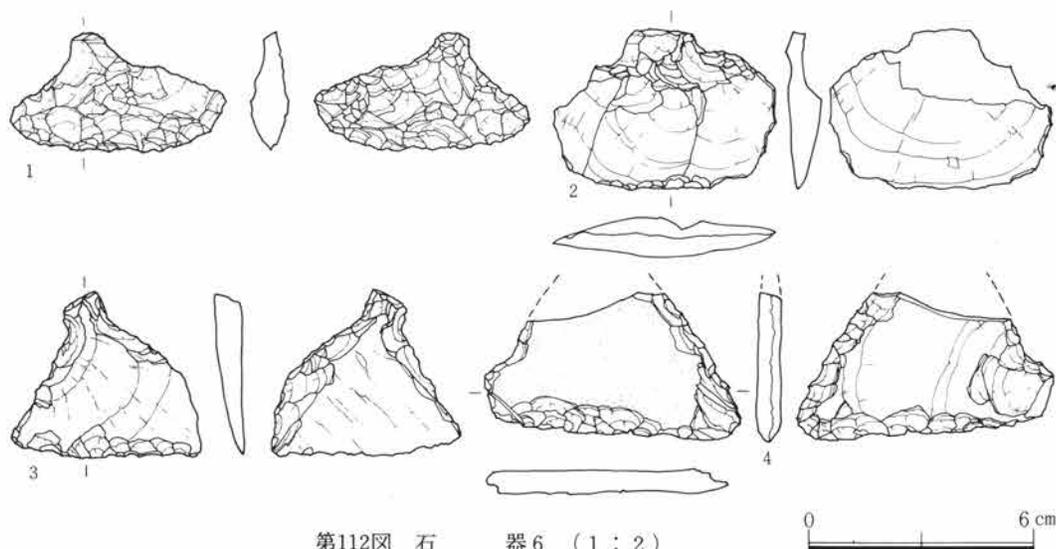
7・8は不定形であるが、片側面が張り出し「コ」の字状の先端部があり、この部分を刃部としている。エンドスクレイパー状の石器である。

9・10はドリルで、先端部の断面は菱形をなし、ともに先端部を欠損している。



第111図 石 器 5 (1 : 1)





第112図 石 器 6 (1 : 2)

石 器 8 (第114図、図版114-1)

大形の横割ぎの剥片石器で、表面に大きく自然面を残している。基部は丸みを持った山形を呈し、若干剥離を加え調整している。先端部に平坦な刃部があり、一方向だけから剥離を加えている。

石 器 9 (第115図、図版114-2)

横長の剥片を使用し、基部がやや山形を呈し、刃部は丸みを持っており、横長の直角三角形のような形状を呈している。

1～8は基部・刃部ともに細かい剥離が加えられ、整った形状をしている。刃部の剥離は表裏両方向のもの、片面の方向のもの(4・5)とがある。

9・10は刃部が側面まで付いており、11～14はやや形状が乱れ、13・14は先端部の一部に刃部が付けられている。

石 器 10 (第116図、図版115)

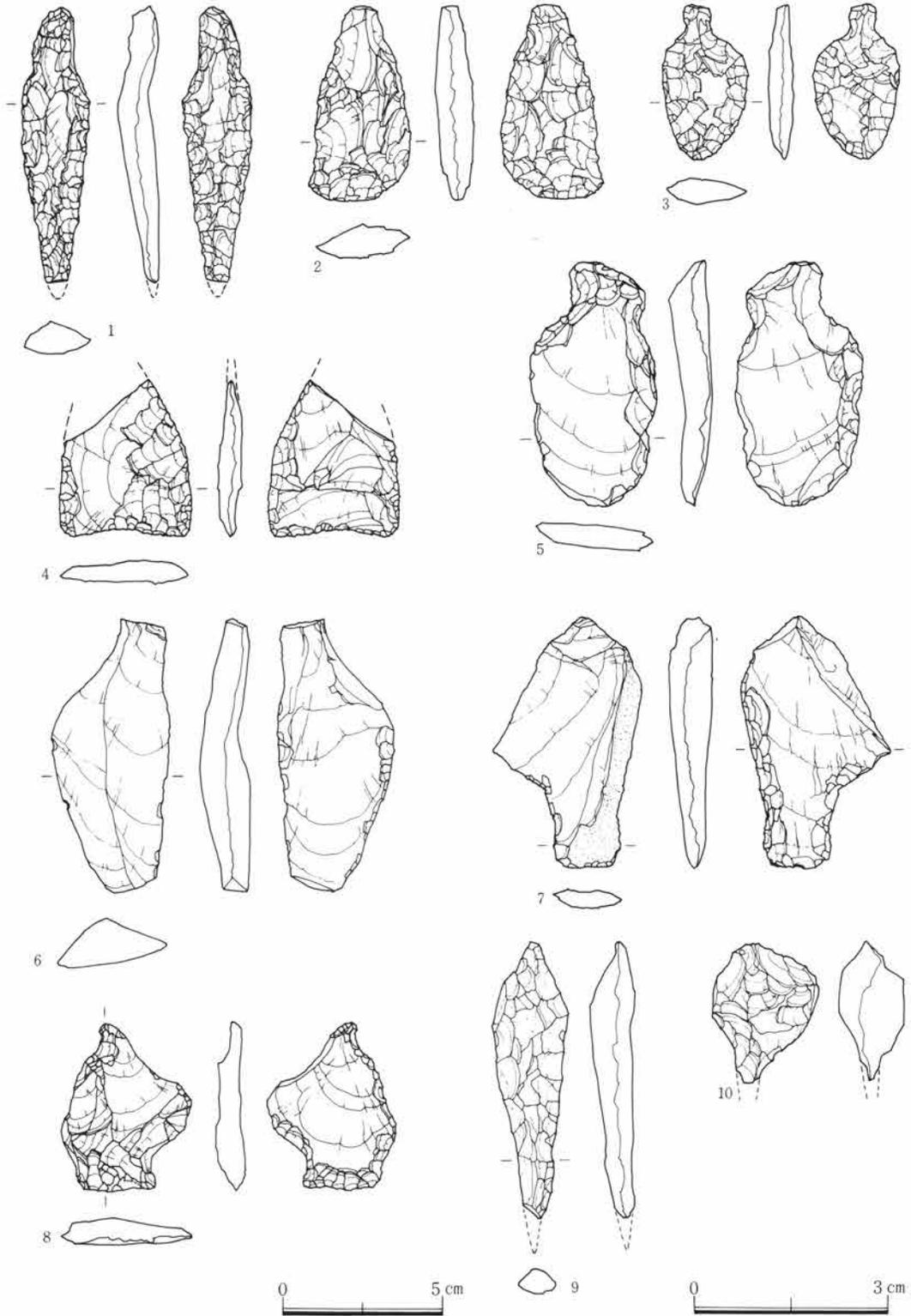
1～8は横長の剥片を使用したやや小形の剥片石器で、形状は一定せず、基部や側面にはほとんど剥離を加えておらず、先端部のみ細かい剥離を加え刃部としている。

9は石器9のタイプの破片と思われるが、10・11は三角形を呈し、横長剥片を切断したものと思われ、先端部に表裏両方向から剥離を加え刃部としている。

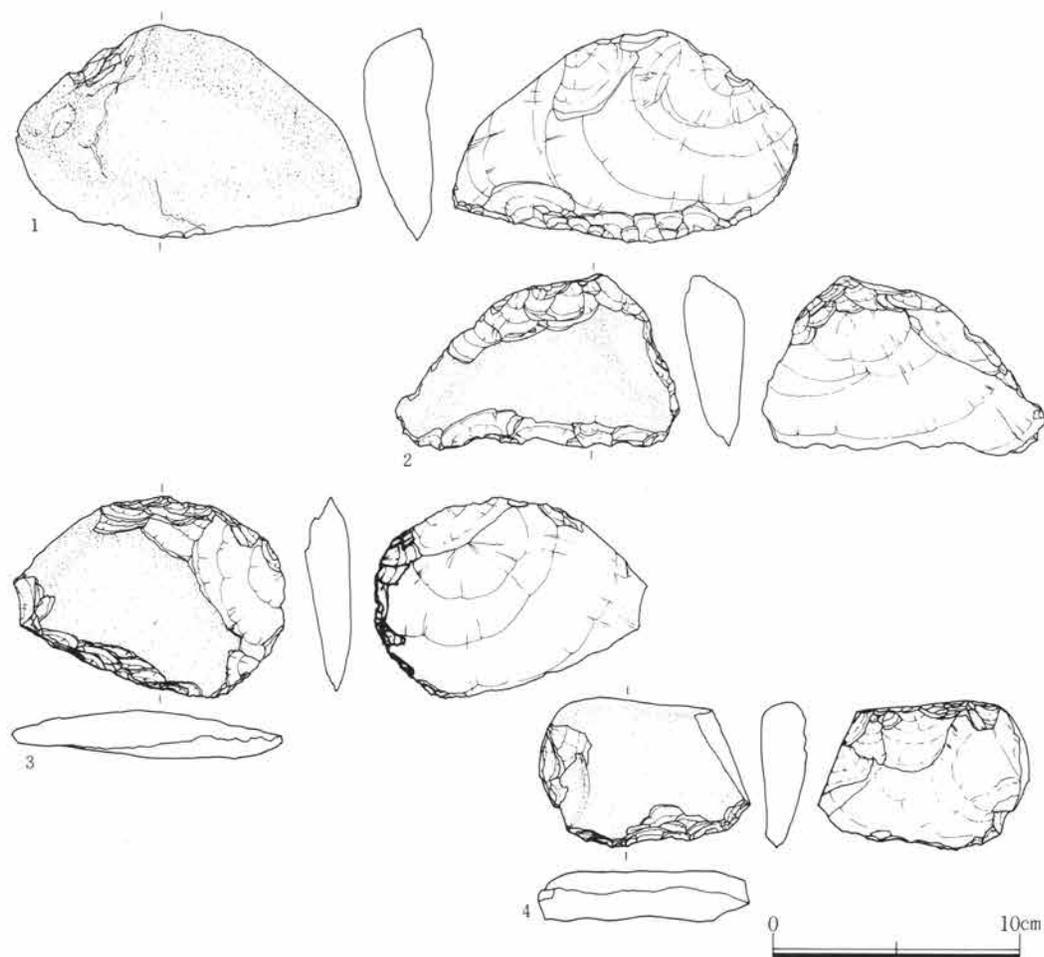
12～17は横長の剥片で、このような剥片から石器9・10を作ったものと思われる。

石 器 11 (第117図、図版116-1)

大形で粗雑な縦長剥片を使用した剥片石器である。6を除き他の石器は自然面を残している。1・2は片側面のみ細かい剥離を加えた刃部がある。3・4は両側面に刃部があるが、3は剥離が荒く、4は表面の方向から細かい剥離が加えられている。5・6は両側面と先端部にもやや荒い剥離が加えられている。



第113図 石 器 7 (1~8=1:2、9・10=1:1)



第114図 石 器 8 (1:3)

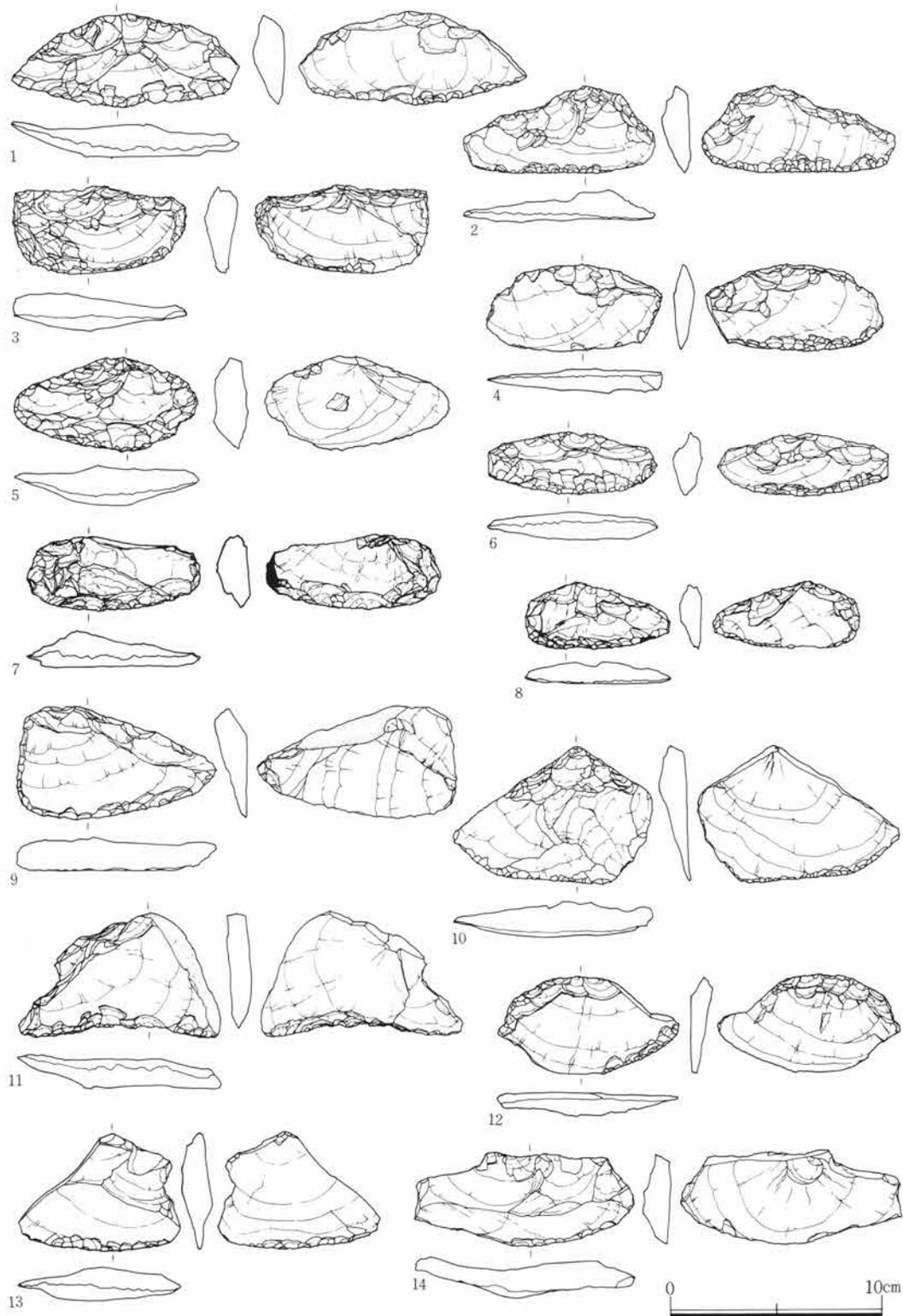
石 器 12 (第118図、図版116-2)

1～3は形状がやや長方形を呈している。基部に平坦な面を持ち厚みがあり、刃部に向かって薄くなって行き、刃部はやや丸みがあり鋭角である。側面は表裏両方向から剥離が加えられているが、刃部は裏面の方向だけから剥離されている。

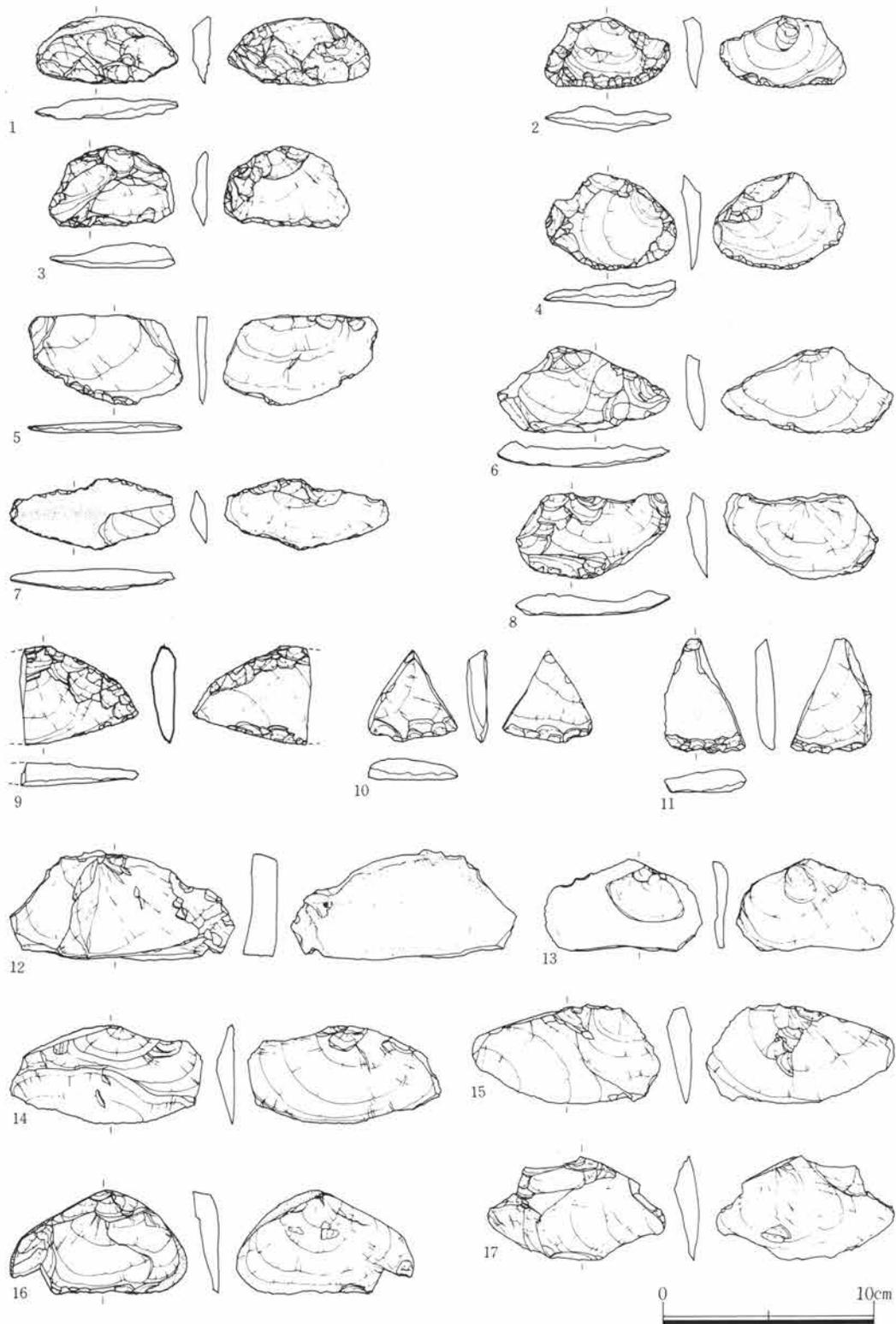
4～13は縦長剥片を使用した、やや大形の不定形の石器である。4・9は両側面と先端部に表裏両方向から剥離を加えた刃部がある。5～8・10～13は片面の方向だけから剥離を加え刃部としているが、5・6は両側面に、8・10・11・13は片側面に、7・12は側面から先端部にかけて刃を付けている。

石 器 13 (第119図、図版117-1)

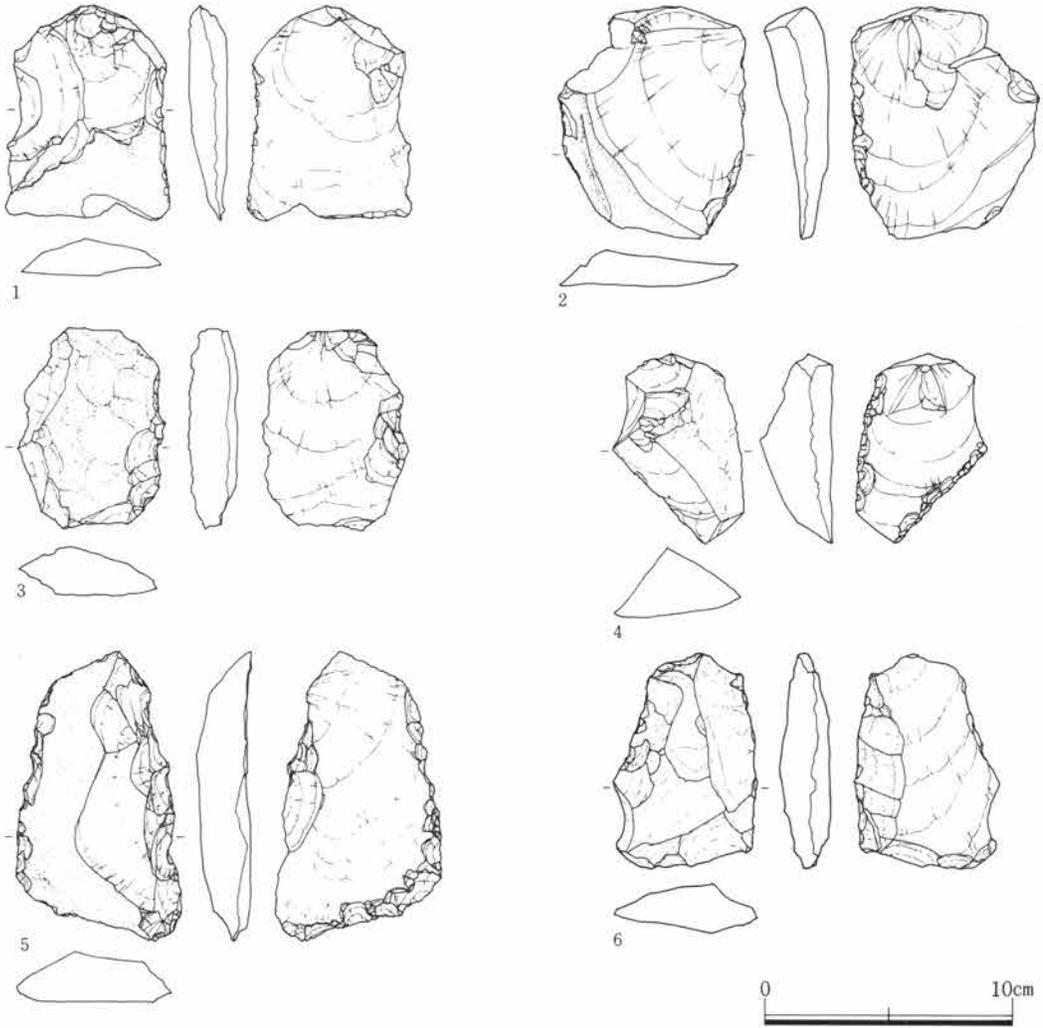
1～12は不定形をしたやや小形の縦長剥片石器で、1・2・8は先端部が尖っている。1・2・8・9・11・12は両側面に刃部があり、他は片側面に刃部がある。これらの刃部は片面の方向だけから剥離が加えられている。



第115図 石 器 9 (1 : 3)



第116圖 石 器10 (1 : 3)



第117図 石 器11 (1:3)

13~15は小形の剥片で、片側面から先端部にかけて非常に細かい剥離が加えられている。16~19は縦長の剥片である。

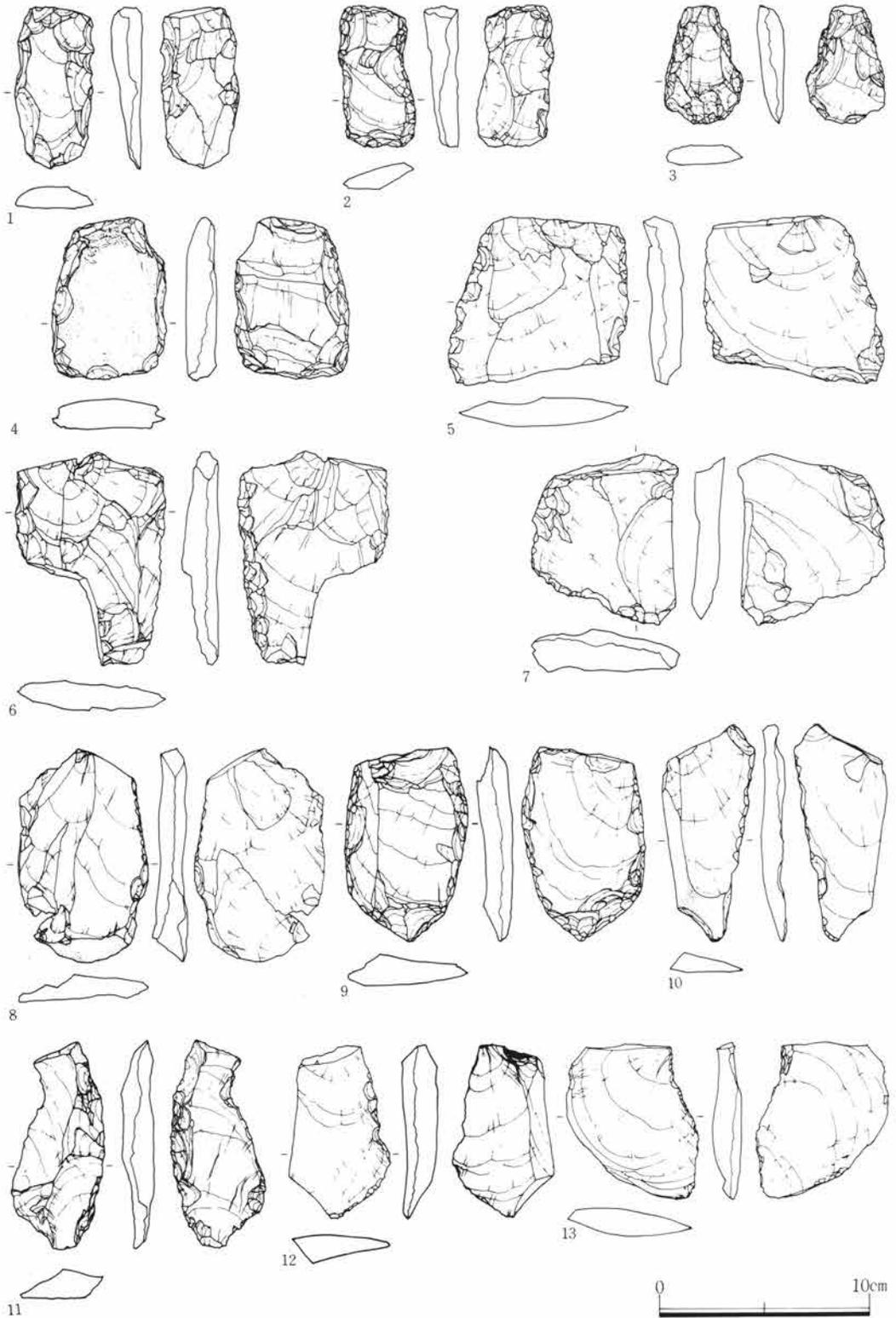
石 器 14 (第120図、図版117-2)

1~3はやや台形状をした石器で、両側面や先端部にやや荒い剥離が加えられている。4~15は不定形をした剥片石器で、側面や先端部にやや荒い剥離を加えただけである。

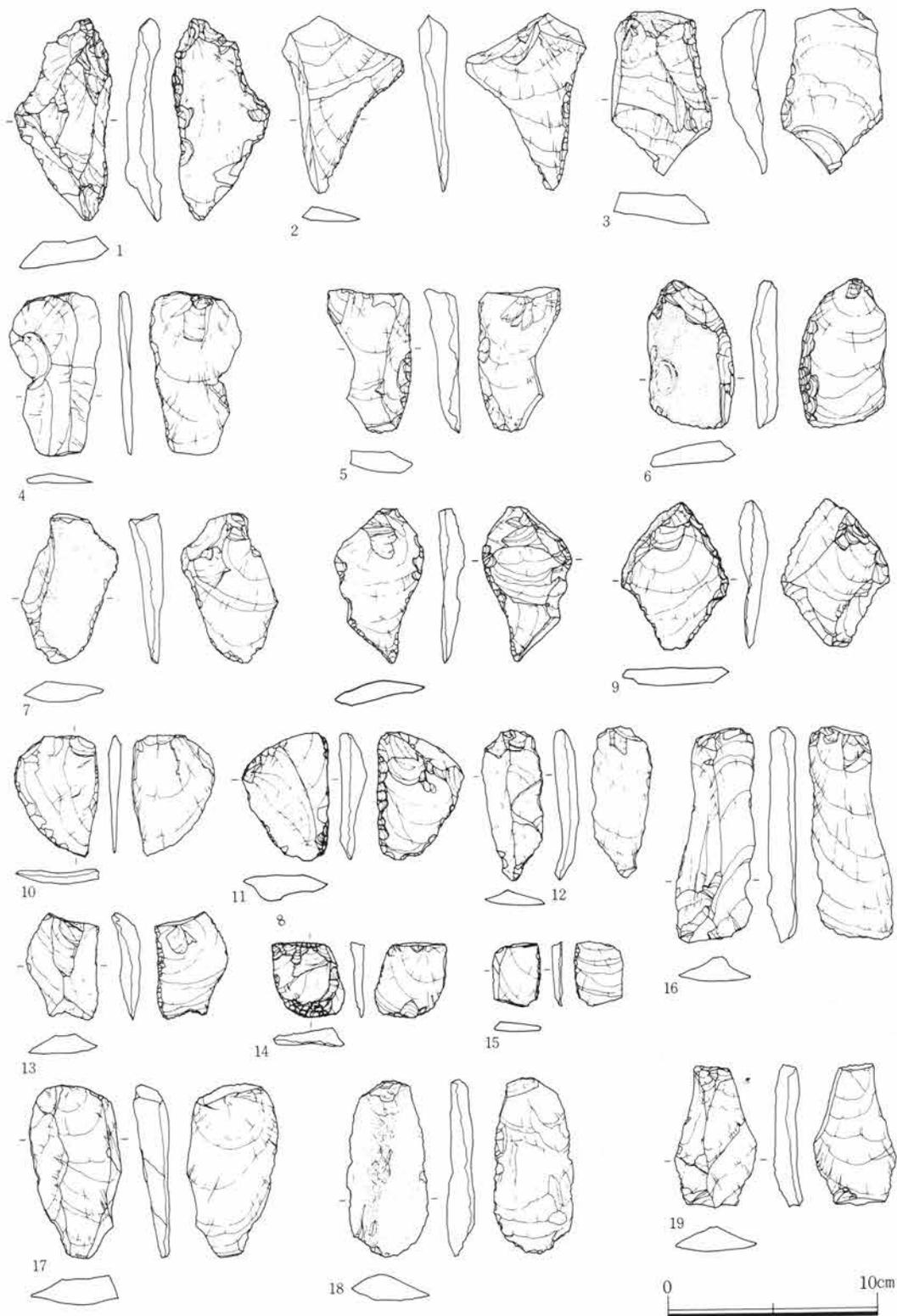
石 器 15 (第121図、図版118-1)

1~5は細長い小形の剥片石器で、側面にだけ細かい剥離が加えられている。6・7はやや菱形を呈しており、基部が作り出され側面から先端部にかけてを刃部としており、6は表裏両方向から、7は裏面方向だけから剥離が加えられている。8は両側面に剥離が加えられ、9は片側面だけに剥離が加えられているが、平坦な基部を持ち先端部が尖っている。10~13は非常に小形の石器で、側面から先端部にかけて極めて細かい剥離が加えられている。

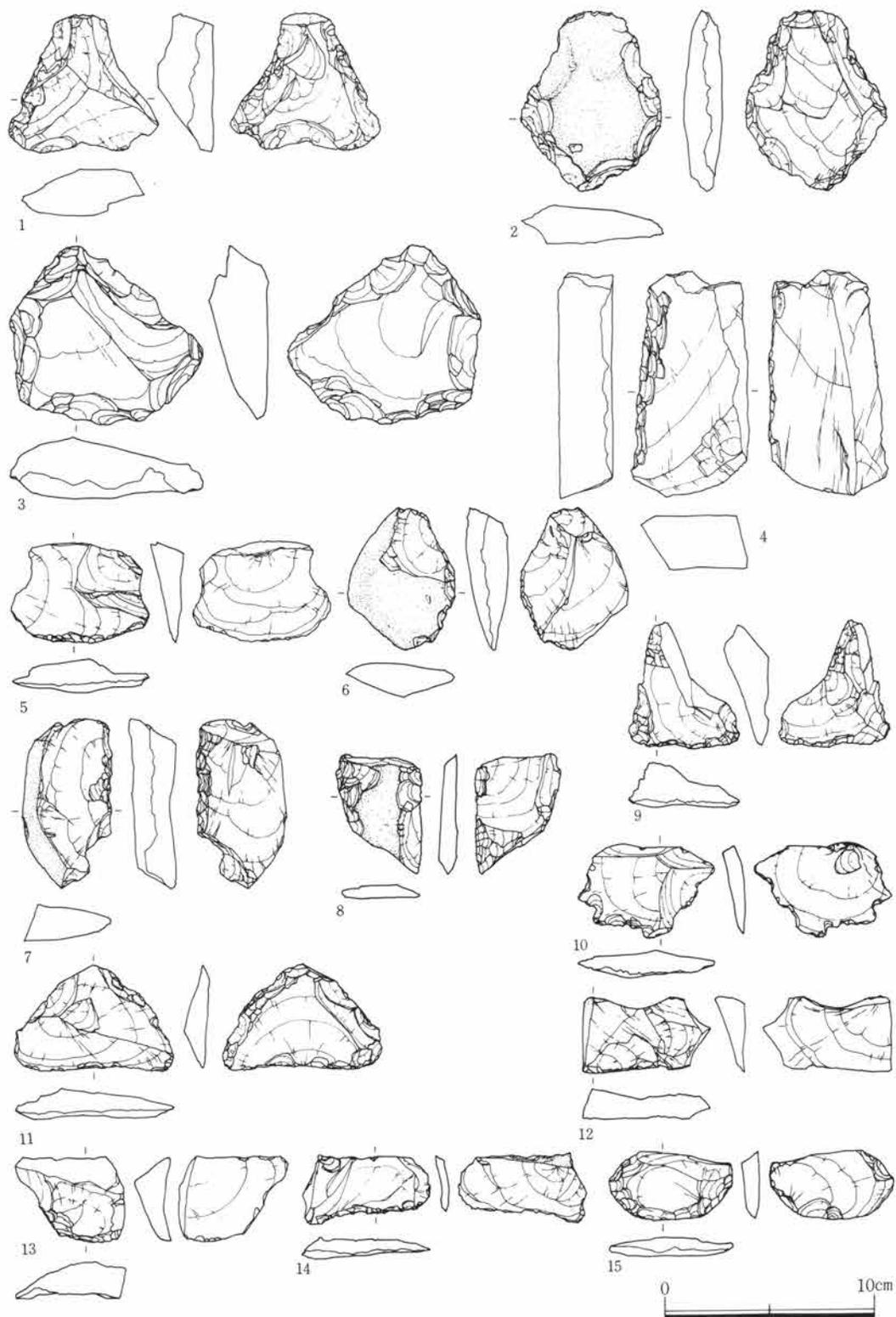
第七章 前中原遺跡



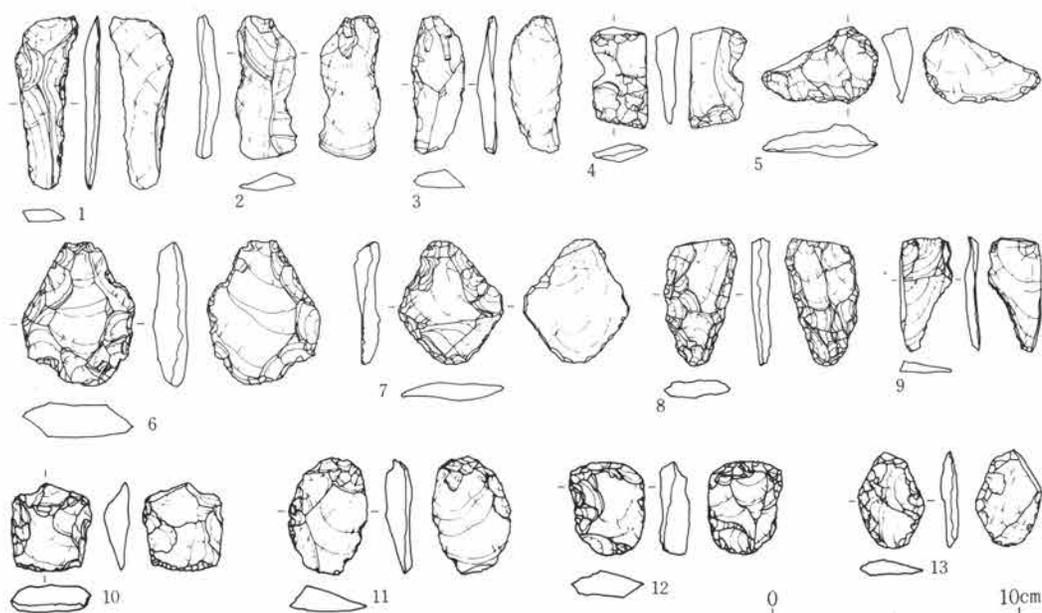
第118図 石器12 (1:3)



第119図 石器13 (1:3)



第120图 石器14 (1:3)



第121図 石器15 (1:3)

石器 16 (第122図、図版119)

1は上面に平坦な打撃面を持っているが、2と同様に剝離の方向には規則性はなく、多方向から打撃を加えた石核である。3は断面形が台形状を呈しており、上面に大きな剝離面があり平坦な打撃面を作っている。正面には縦長剝片を作り出したと思われる剝離面が見られ、1・2と異なり打撃の方向に規則性がある。

石器 17 (第123図、図版118-2)

1は小形の石棒で、断面形は角の丸い四角形を呈し両端は丸みを帯び、全面が良く磨られている。上端部寄りには多くの擦痕が寄り集まり、溝状を呈して全周している。下端部には打ち欠かれたような痕がある。

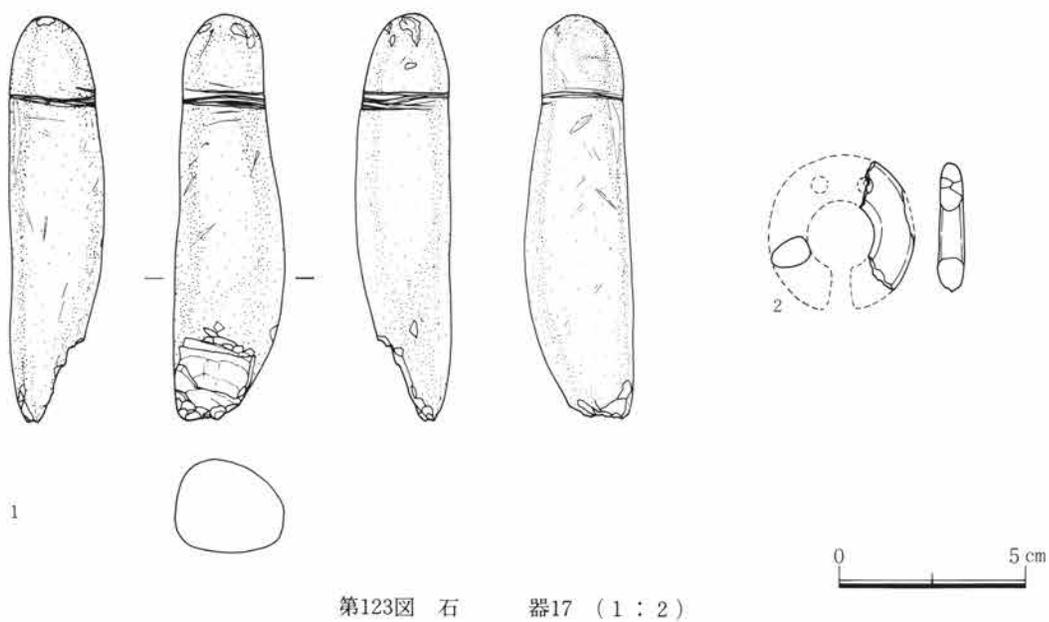
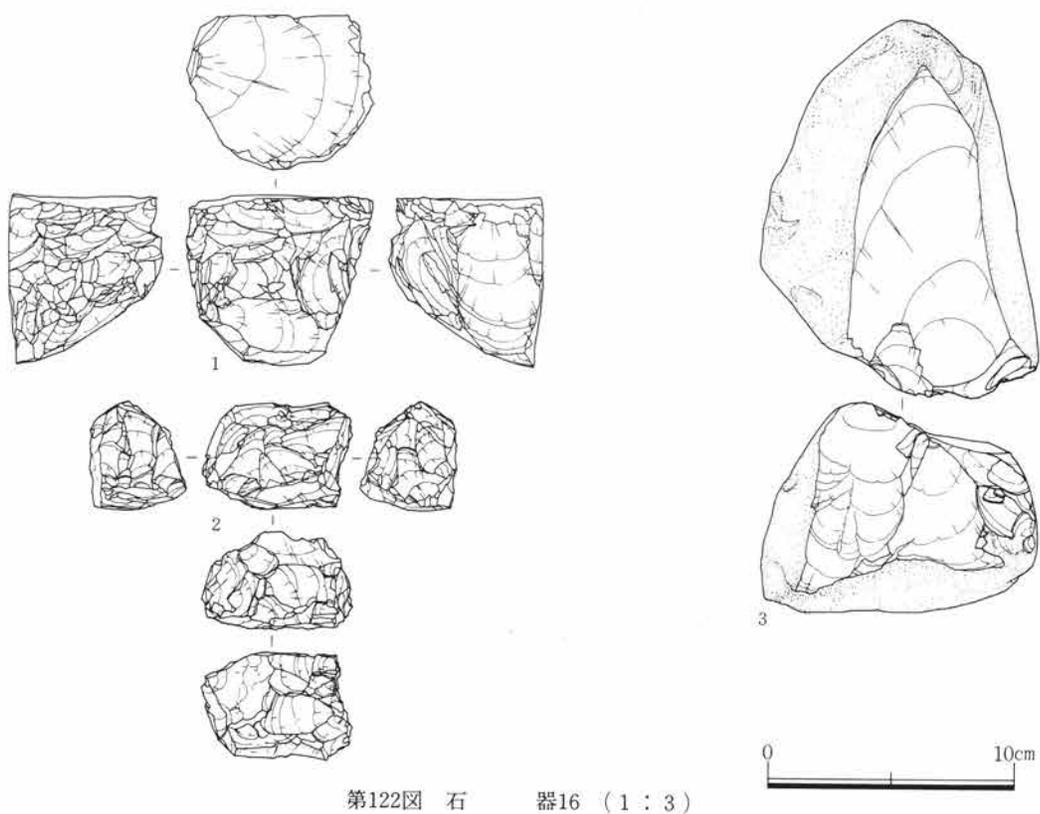
2は塊状耳飾の破片で、弧状をなし断面形は楕円形を呈している。上端部の割れには両面から穿孔された小孔の断面が見られる。

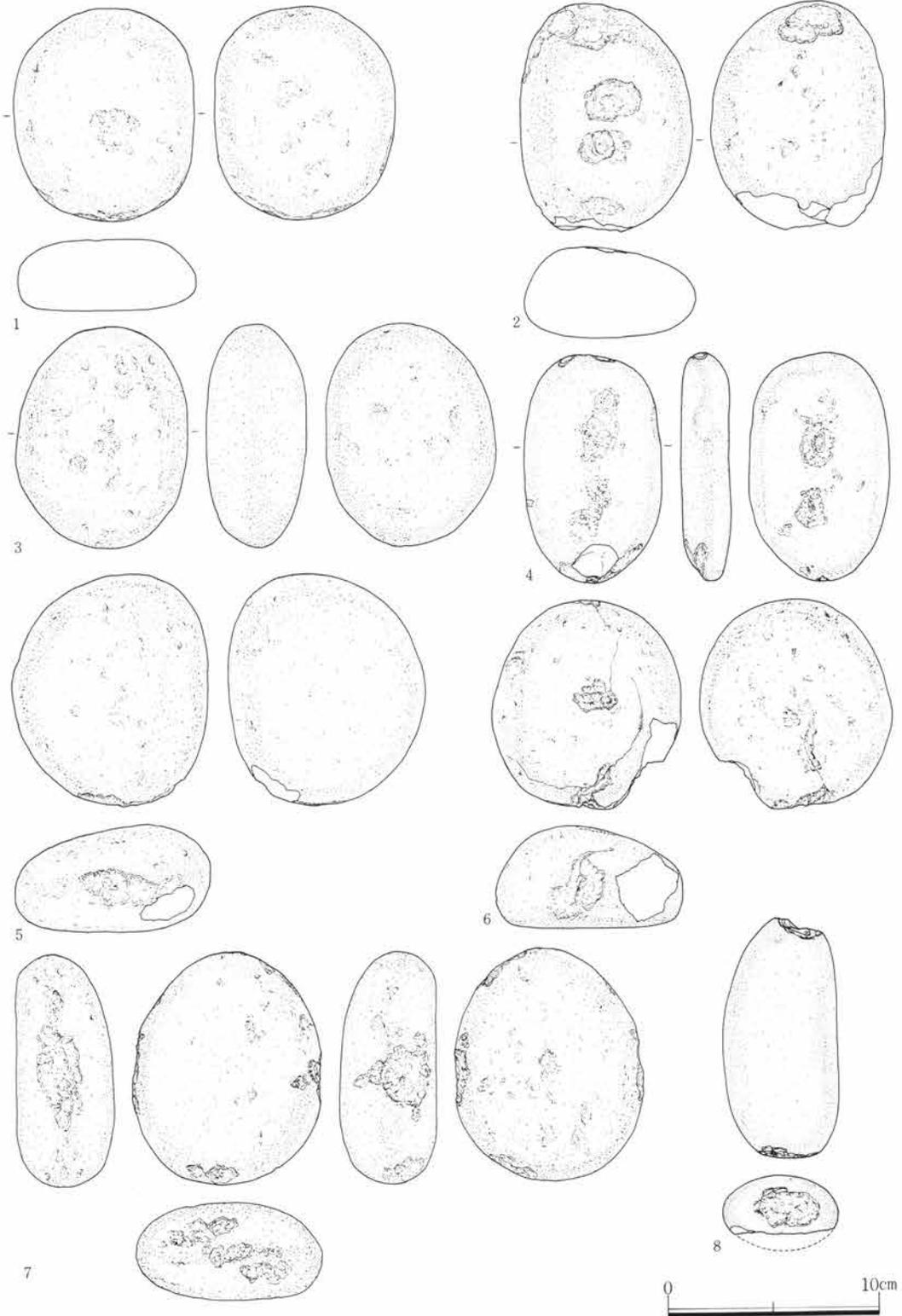
石器 18 (第124図、図版120)

1～7はやや楕円形をした凹石である。表裏ともに良く磨れており、特に6の裏面は平坦な面をなしている。1・3・5～7の表裏面の中央部には小さな打撃痕が数ヶ所見られ、2・4は打撃痕が2ヶ所づつの小孔に集中している。また、これらの凹石の側面には多くの打撃痕が見られる。

8は長楕円形を呈し、全面が磨れている。上下両端には打撃痕があり、裏面は上端の打撃により大きく剝がれている。

(下城 正)





第124図 石 器18 (1:3)

3 平安時代の遺構と遺物

5号住居址 (第125図、図版75-2)

台地中央部の調査区東端に位置し、住居址西半の一部と考えられる部分を確認した。住居址のほとんどの部分が調査区外に延びるため、規模・形状等は不明である。

覆土①は黒褐色土で、②は褐色土でほぼ単一の土層でやや締っている。③・④は褐色土や黒色土・ロームがブロックで混じり合っている。⑤は黒褐色土でローム小ブロックを少量含む。③～⑤は住居址の掘形と考えられ上面は固く締っていた。⑥は住居址下の落ち込みの覆土である。

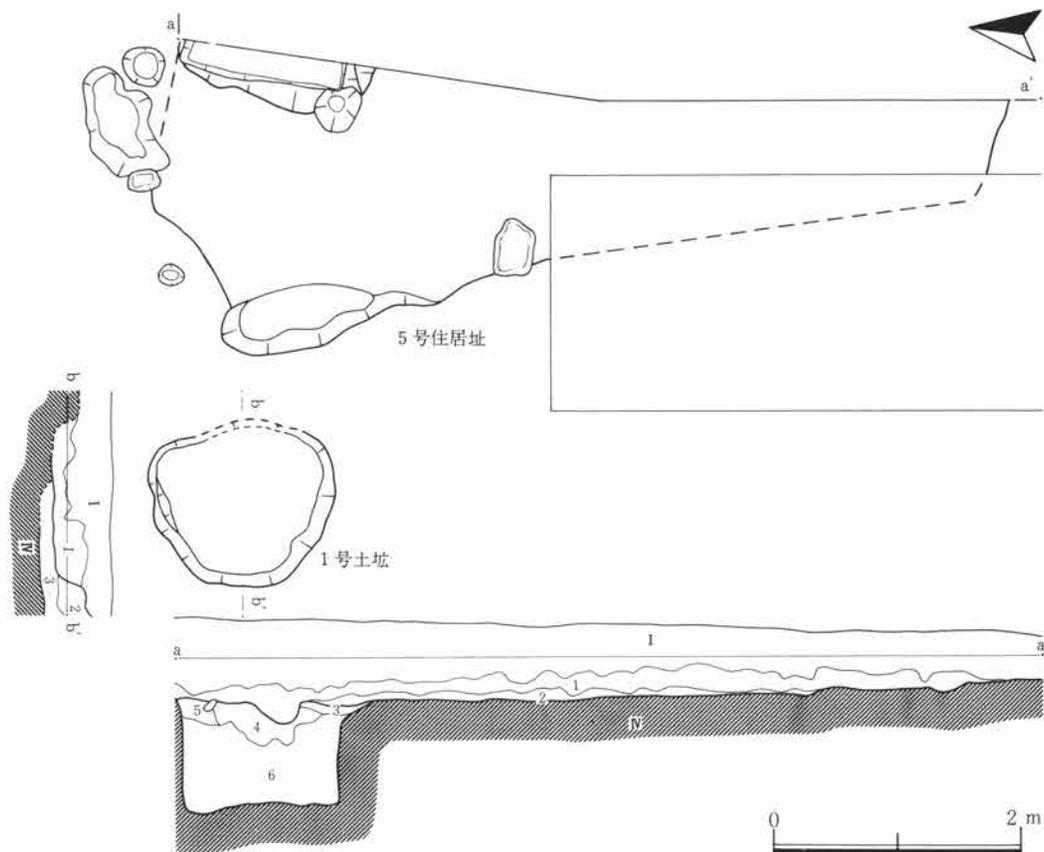
本住居址は黒色土中に構築されており、確認面も浅いため壁は部分的に確認できただけで、良好な部分で高さ10cm程度でありやや乱れている。

床面はほとんどの面が非常に固く締っており、約6.60m×2.00mの範囲が確認された。また、西壁寄り中央の床面に接して偏平な河原石が据えられていた。

遺物は須恵器坏の小片が数点床面上より出土しただけである。

1号土壇 (第125図)

5号住居址の西1.5mに位置し、2号住居址の上に一部がのっている。黒色土中に構築されてお



第125図 5号住居址と1号土壇 (1:60)

り、長径1.53m、短径1.35mの規模で乱れた円形を呈し、断面形は皿状をなしている。

覆土は黒褐色土の単一層で、中より須恵器碗の完形や大片が9個体分が出土した。

(下城 正)

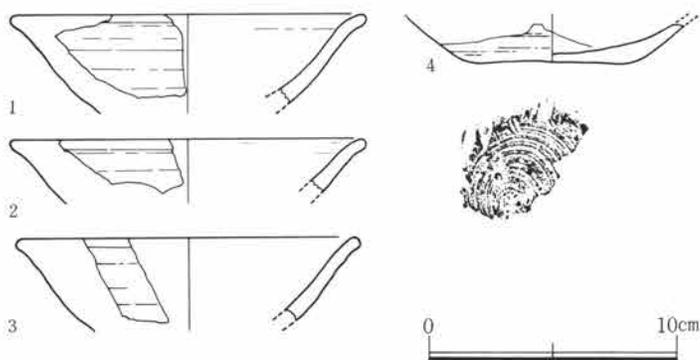
5号住居址出土土器 (第126図、図版121-1)

1～3は須恵器の坏か碗で

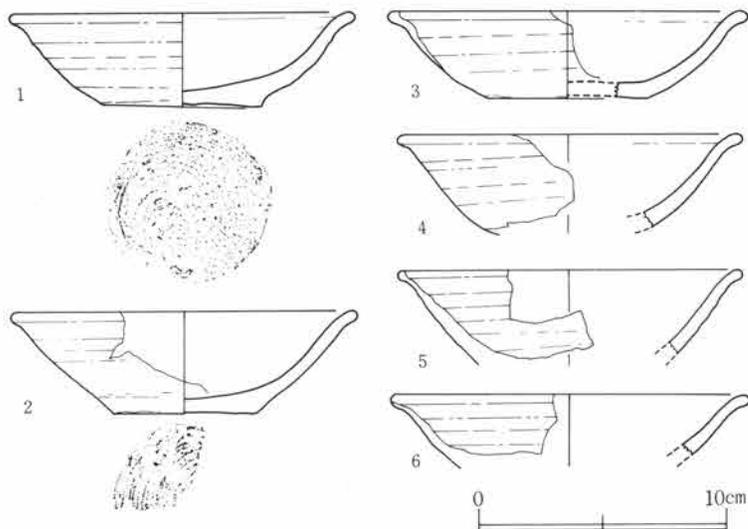
体部から口縁部にかけての小片である。色調は橙色を帯び、焼成はやや軟質で酸化ぎみである。胎土は石英や長石等の白色鉱物粒を多く夾雑し、やや粗な素地である。体部外面には2～4条の浅いロクロ痕が認められ、内面には横ナデ痕が残る。口縁部は外反し、端部は肥厚する。4は須恵器碗の底部である。色調は淡灰色を帯び、部分的に黒色の斑紋が認められる。焼成・胎土は1～3と同様である。底面の切り離しはロクロ右回転の糸切りによる。底部内面や体部外面にロクロ目がある。

1号土壇出土土器 (第127図、図版121-2)

1は須恵器碗で法量は器高3.8cm、口径14cm、底径6.4cmである。色調はくすんだ橙色でやや燻しがかかる。焼成は普通で、胎土は石英や長石等の白色鉱物を特徴的に夾雑する。底面の切り離しはロクロ右回転の糸切りによる。体部外面には浅いロクロ目が5条入る。口縁部は外反し、肥厚する。2は須恵器碗で法量は器高4.1cm、口径約14cm、底径約5.8cmである。色調は黒灰色を帯び、焼成は普通であるが、器面に燻しによる吸炭が顕著である。胎土・底部の切り離し、器形は1と同様で、体部外面のロクロ目は不明瞭である。3は須恵器碗で法量は器高3.5cm、口径約14.6cm、底径約6.3cmである。色調は黒灰色で、焼成は普通で器面に顕著な燻しが及ぶ。胎土は1と同様で粗な素地である。底部の切り離し



第126図 5号住居址出土土器 (1:3)



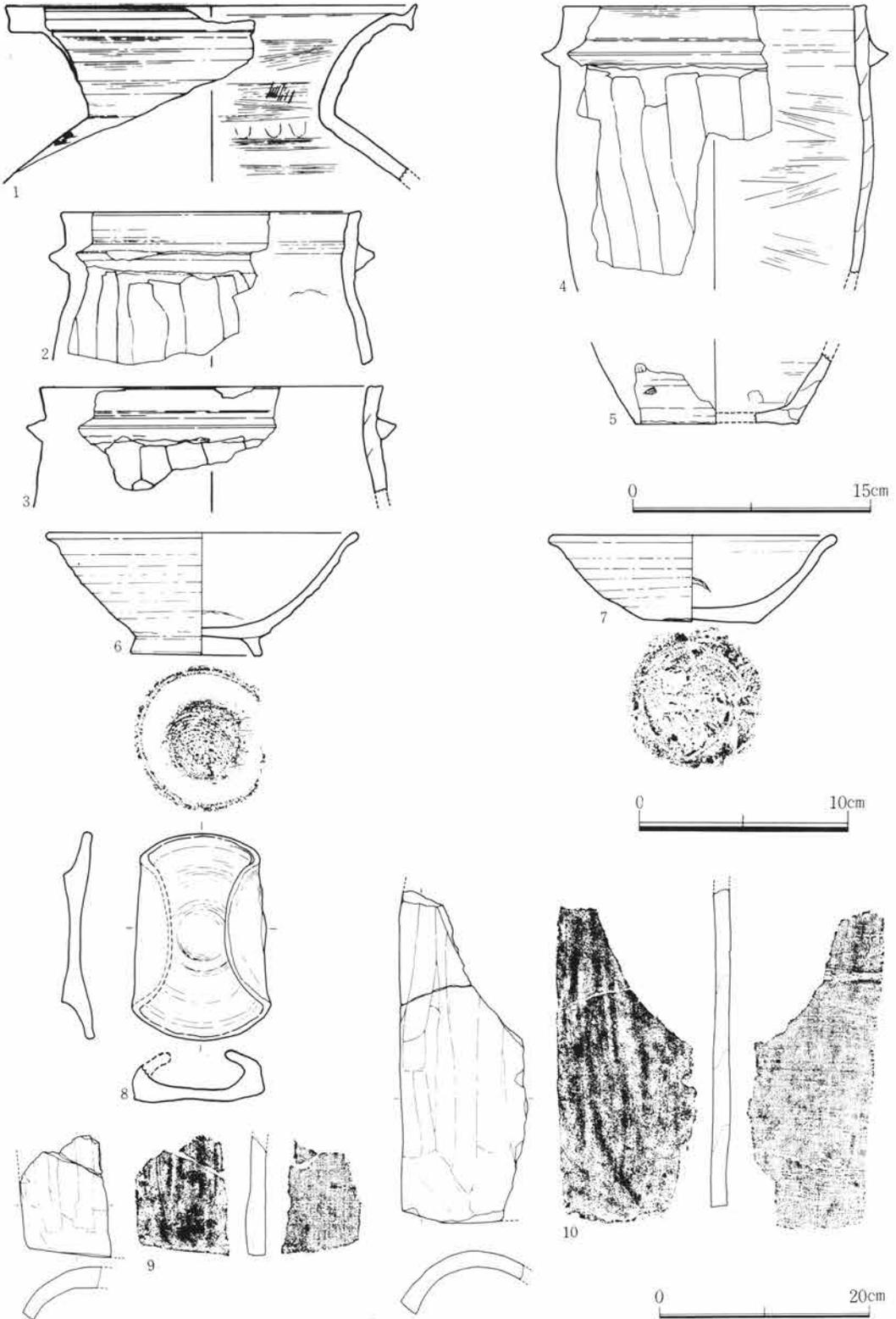
第127図 1号土壇出土土器 (1:3)

し、器形は1と同様で、体部外面に3条のロクロ目が入る。4～6は須恵器坏の体部から口縁部にかけての小片である。焼成・胎土・器形は1と同様で、色調は4が橙色を帯び、部分的に黒色の斑紋が入り、5は淡灰色で部分的に黒色の斑紋が生じ、6は黒褐色を帯び外面に燻しが及んでいる。

グリッド出土の遺物（第128図、図版122）

グリッド出土の遺物は台地中央で、調査西半の2区C-03グリッドよりまとまって出土したもので、何らかの遺構が想定されたが遺構の存在は確認できなかった。

1は須恵器瓶の上半部片である。色調は淡橙色を帯び、焼成は普通であるが酸化済みである。胎土は白色鉱物を多く夾雑し、色調の異なる粘土が縞状に入る。器形は体部から頸部上方にかけての括れは明瞭で、体部上に頸部をのせて接合している。頸部は大きく外反し口縁部にいたり、口縁端部は尖り、その内面に浅い凹みを廻らせている。体部内外面のタキは明瞭でなく、指と掌などの擦痕が残る。頸部から上方の内外面には横ナデが顕著である。2・3は須恵器羽釜の上半部片である。色調は黒褐色を帯び、焼成は普通で、2・4は燻しが内外面に及び、3は酸化済みである。器形は口縁端部では羽釜特有の平坦部を設け、羽釜の凸帯はやや低い。凸帯以下体部にかけて縦方向のヘラケズリが施されている。体部内面には紐作りの再調整で生じた指・掌等の圧痕や擦痕が残る。口縁部およびその周辺の内外面には横ナデによる整形が施されている。5は須恵器羽釜の底部である。6は須恵器碗で法量は器高5.7cm、口径14.5cm、底径6cmである。色調は淡灰色土で、焼成は普通である。胎土は白色鉱物を多く夾雑している。底部の切り離しはロクロ右回転による糸切り後、高台を付けている。体部外面には7条以上のロクロ目が入る。口縁部は外反し端部は肥厚する。7は須恵器碗で法量は器高3.8cm、口径13cm、底径5.7cmである。色調や底部の切り離し、器形は6と同様で、焼成は硬質で、胎土は白色鉱物とともに特に多孔質安山岩を夾雑する。内面底部に重ね焼き痕がある。8は須恵器耳皿で、法量は器高2.7cm、長軸9.8cm、短軸6.2cm、底径6cmである。色調は淡灰色で、焼成は普通で部分的に燻しがかかる。胎土・底部の切り離し・口縁部は6・7と同様である。体部外面にはロクロ目が1条入り、底部の長軸に合わせて耳部を内側に折り曲げている。内面はロクロ目が顕著ではなく、滑らかな横ナデが入る。9・10は丸瓦で9の法量は側端部 $6.3\text{cm} + \alpha$ 、小口部 $8.3\text{cm} + \alpha$ で、10の法量は側端部 $30.3\text{cm} + \alpha$ 、小口部 $12\text{cm} + \alpha$ である。9・10の色調は淡灰色で、焼成は普通である。胎土は白色鉱物と多孔質安山岩を夾雑し、素地は他の須恵器よりもさらに荒い。丸瓦外面には縦方向のヘラケズリ後、掌によるナデの調整が施されている。内面には布目痕があり、10の上位には布の合わせ目痕が残り、さらに下位と部分的に紐作り痕が見られる。側部は1回のヘラ調整を主に部分的に再度ヘラケズリを施している。小口面は1回のヘラ調整が施される。側部と小口部とのなす角度は9が105度で10が101度で著しく鈍角であり、単なる丸瓦でなく両者とも道具瓦の可能性がある。（下城 正）



第128図 グリッド出土の平安時代の遺物 (1~5=1:4、6~8=1:3、9・10=1:6)

4 中・近世の遺構と遺物

1号墓壇 (第129図、図版83-1)

2号墓壇とともに台地の南縁辺部で、溶結凝灰岩が集中して露頭している部分に立地している。規模は2.57m×1.25mで深さは36cmであり、長軸方向をほぼ南北にとっている。平面形は隅丸長方形を呈し、底面は平らで周壁は急角度で立ち上がる。覆土は2号墓壇と同様に黒褐色を呈し、ややザラザラしておりローム小ブロックを含み、一挙に埋没したような状態である。出土遺物はなく、底面近くに大小の自然石が多数出土した。

2号墓壇 (第129図、図版83-1)

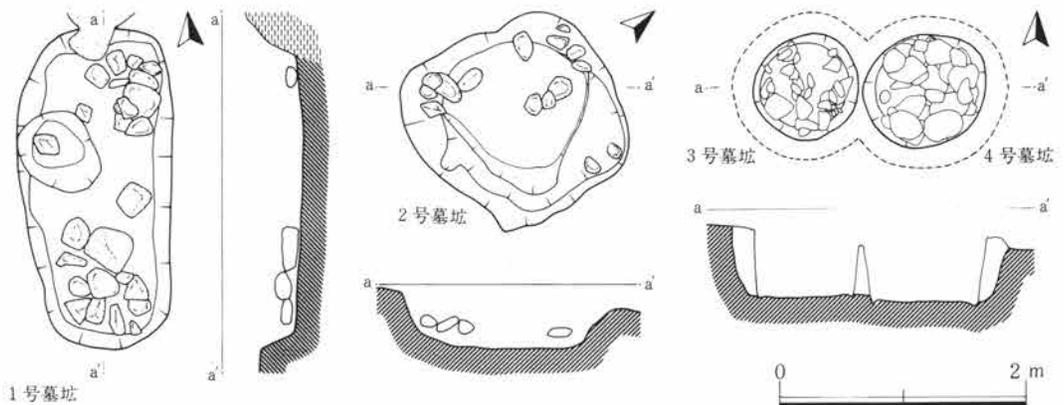
1号墓壇に近接し、規模は1.60m×1.56mで深さは41cmであり、1号墓壇と同様に長軸方向がほぼ南北となる。平面形は乱れた隅丸方形で、断面形はやや碗底状を呈している。覆土や自然石の出土状態は1号墓壇と同様である。

3・4号墓壇 (第129図、図版83-2・3)

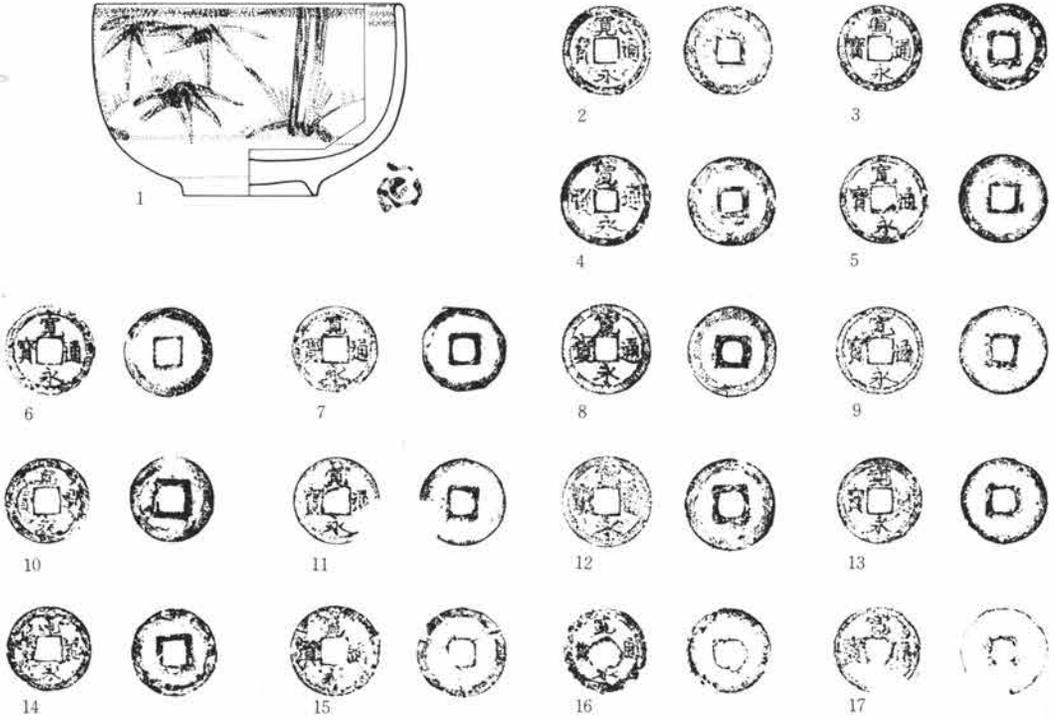
台地の中央部で調査区西端寄りに位置している。本墓壇は同時に設置されたものと思われ、3号は径が0.84mで深さは60cmであり、4号は径が1.00mで深さ63cmと一回り大きい。2基とも円形のプランをなし、底面は平坦である。周壁は15~20cmの厚さで灰白色の粘質土が貼られており、底面は固いローム面となっている。4号の壁には板材が残っており、双円形の掘形を掘った後、大小の桶を設置し、周壁に粘質土を詰めたものと思われる。2基には多数の自然石が投げ込まれており、3号からは19枚の寛永通寶 (第130図2~17、図版123) が出土し、4号からは第130図1の染付茶碗が出土した。

また、調査区西半のグリッドからは第131図 (図版124) のような、皇宋通寶 (2)、政和通寶 (1)、洪武通寶 (3) などの渡来銭や永楽通寶 (4) が出土し、寛永通寶 (5~14) 10枚が出土している。これらの寛永通寶は3号墓壇出土のものと同様に新寛永銭と思われ、すべて銅製である。

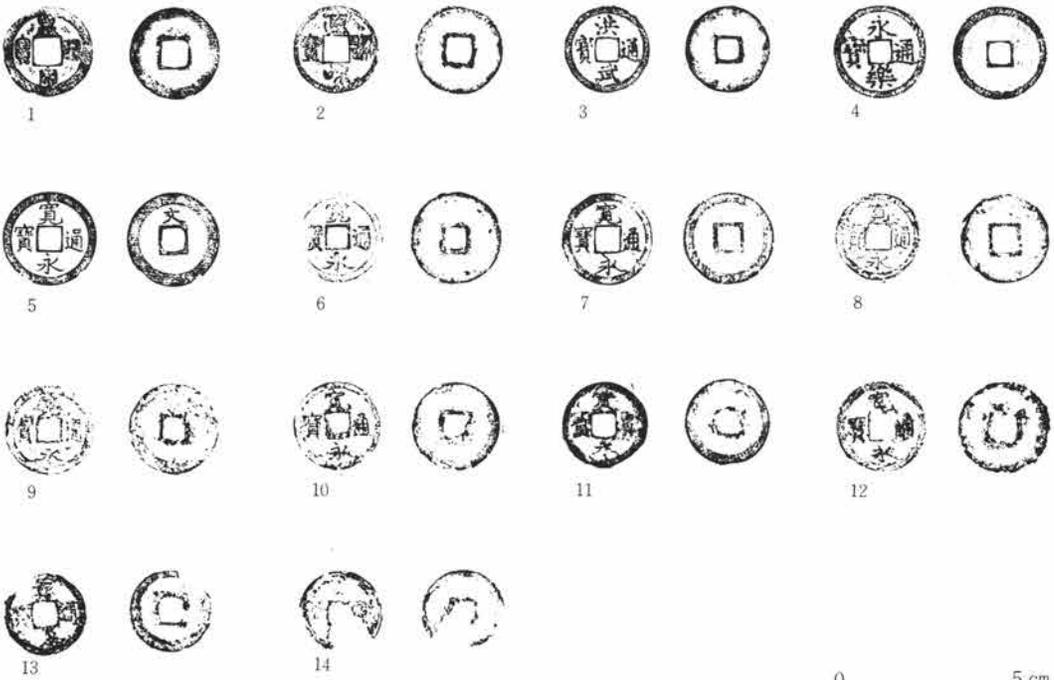
(下城 正)



第129図 1~4号墓壇 (1:60)



第130図 3号墓坑出土の遺物 (1:2)



第131図 グリッド出土の古銭 (1:2)

5 時期不明の遺構と遺物

時期を確定できなかった遺構として、縄文時代の土壇と平面形や覆土が異なり、表土を混入したイモ穴状の落ち込みとも異なる、隅丸の方形や長方形を基調とした、プランのしっかりした土壇が12基ある。調査区西半の台地中央部に集中し、縄文時代の遺物が混入していた。また、調査区全体からは砥石が10点出土した。

1号土壇（第132図、図版78-1）

長軸1.98m、短軸1.70mで深さは70cmである。丸みのある隅丸方形を呈し、円筒状の断面形をなす。覆土全体はローム小ブロックの混入した暗褐色土で、②層は黒褐色土が流入している。胎土に繊維を含み、表裏に条痕文を施した茅山式の土器片が出土した（第134図1～4）。2・3号土壇を切っている。

2号土壇（第132図、図版78-1）

長軸約1.80m、短軸1.78mで深さは47cmである。不整形を呈し、断面形は丸底状をなしている。覆土はほぼ1号土壇と同様で、出土遺物はない。1号土壇に切られる。

3号土壇（第132図、図版78-1）

規模は不明な点が多いが、長軸約2.85m、短軸約2.25mで深さは66cmである。隅丸長方形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は暗褐色土でローム小ブロックを多量に含む。出土遺物はなく、1号土壇に切られ、4号土壇を切っている。

4号土壇（第132図、図版78-1）

長軸3.75m、短軸約3.20mで深さは68cmである。隅丸の台形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ直である。覆土は暗褐色土で上部の方がローム小ブロックが多く、下部にいくに従い黒色を帯びてくる。剥片石器2点（第135図1・2）と表面は微隆起線で区画し、刺突と平行条線が施された裏面に条痕のある野島式と、表裏に条痕文を施した茅山式の土器片が出土した（第134図5・6）。

5号土壇（第132図、図版84-1）

長軸2.15m、短軸2.11mで深さは75cmである。隅丸方形で丸底状を呈している。覆土は荒い暗褐色土でロームの大小のブロックを含む。胎土に繊維を含み、薄手で、微隆起線を施した槻ノ木下層式の土器片が出土した（第134図7・8）。

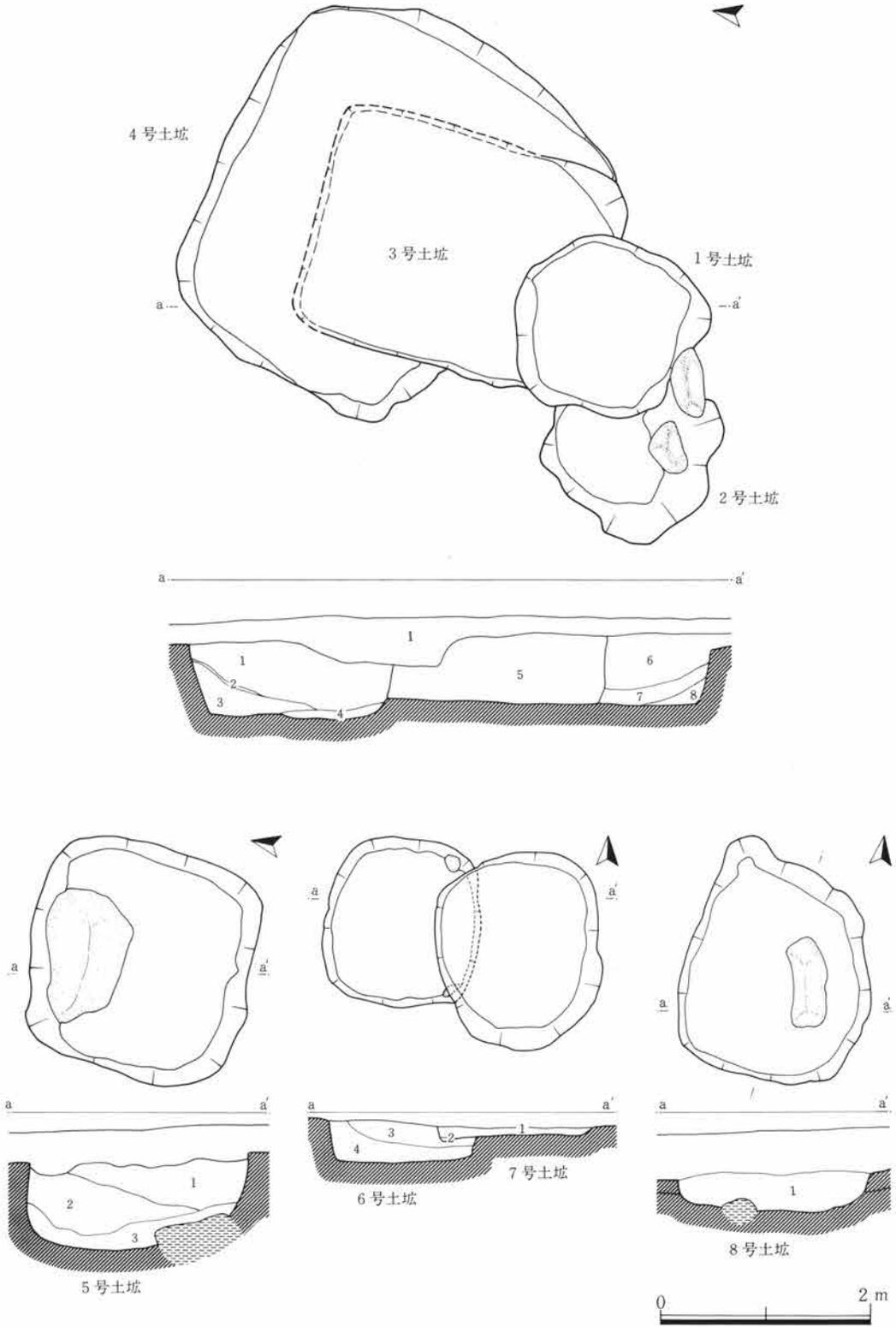
6号土壇（第132図、図版84-2）

長軸1.58m、短軸1.47mで深さは40cmである。隅丸方形を呈し、底面は平坦で壁はほぼ直である。覆土は黒褐色土でローム小ブロックを多く含み、上部の方が多い。胎土に繊維を含み、原体R Lの縄文を施した土器片が出土した（第134図9）。7号土壇に切られる。

7号土壇（第132図、図版84-2）

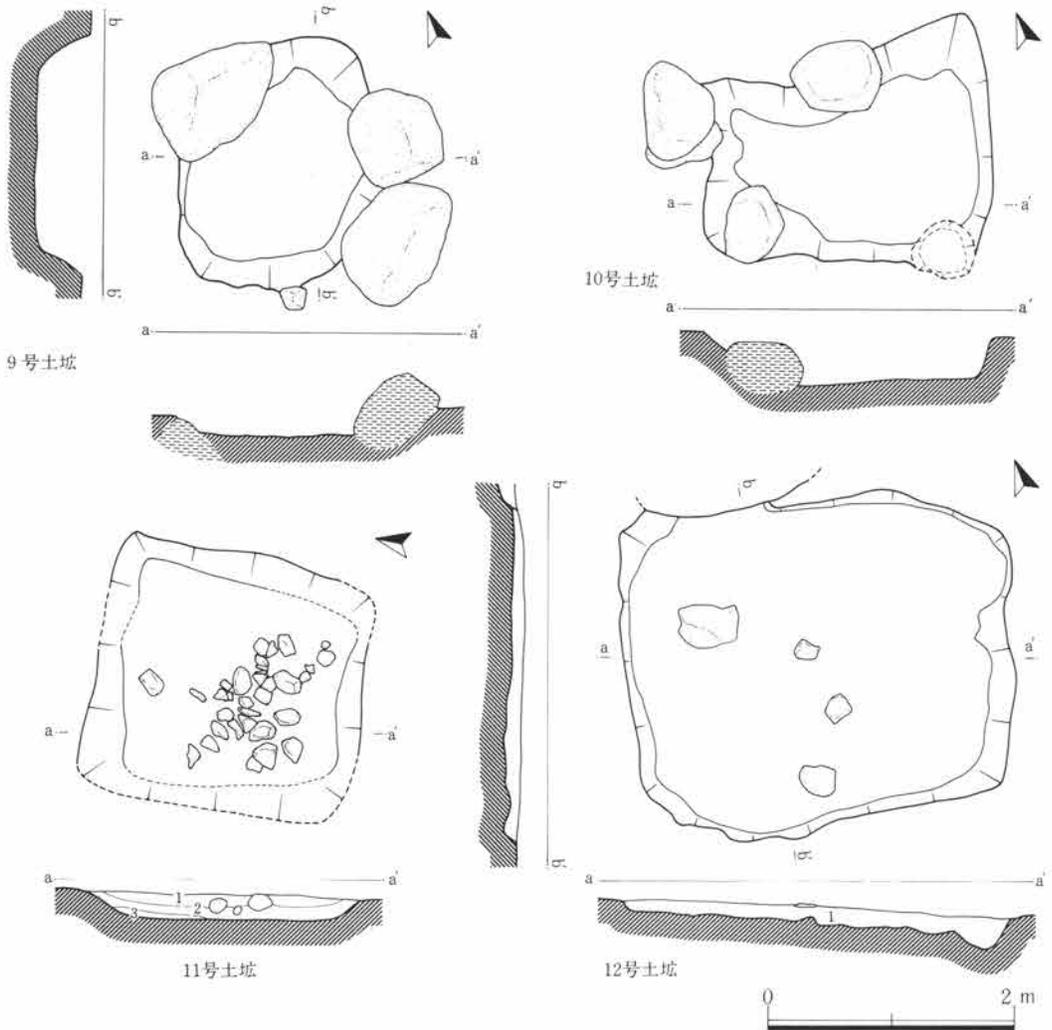
長軸1.84m、短軸1.53mで深さは11cmである。不整の隅丸方形を呈し、平坦な底面である。覆土は黒褐色土でローム小ブロックを少量含む。6号土壇を切り、出土遺物はない。

5 時期不明の遺構と遺物



第132図 1～8号土壇 (1:60)

第七章 前中原遺跡



第133図 9～12号土坑 (1:60)

8号土坑 (第132図、図版84-3)

長軸2.05m、短軸1.81mで深さは36cmである。不整の隅丸長方形を呈し、底面は丸みを帯びる。覆土は黒褐色土でローム小ブロックを多く含み、ザラザラしている。出土遺物はない。

9号土坑 (第133図、図版85-1)

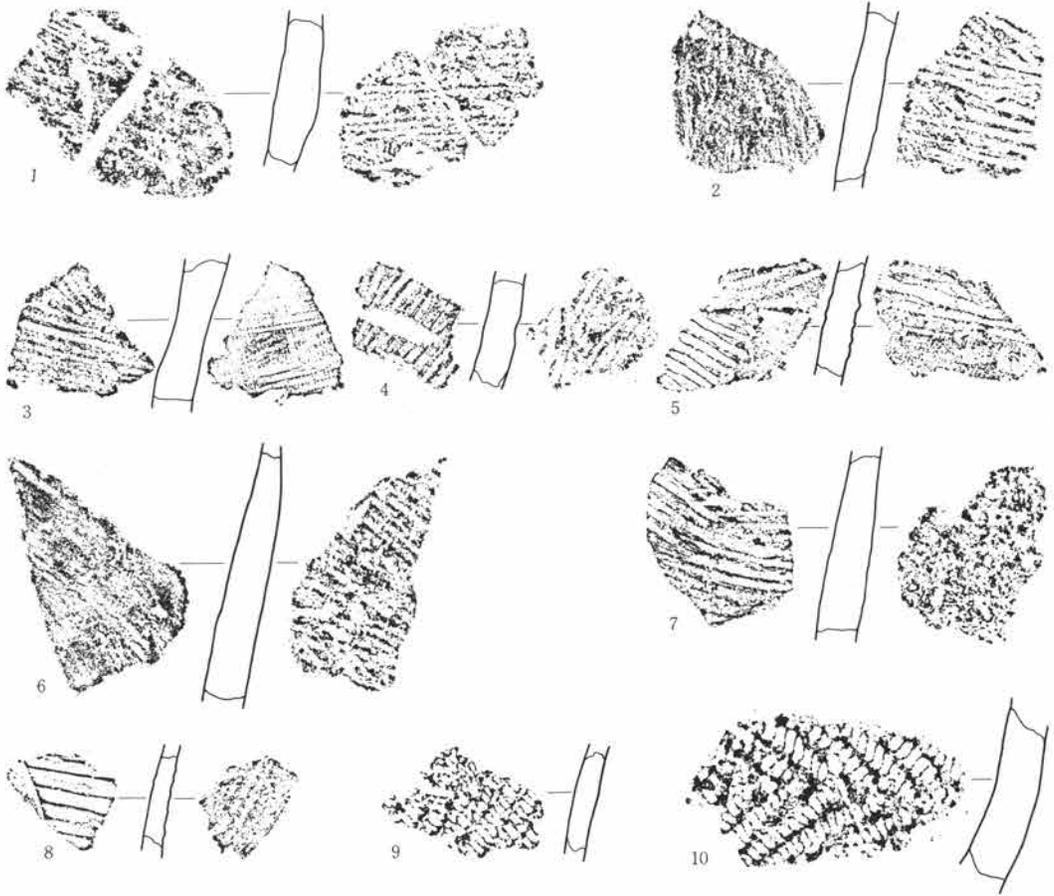
長軸2.03m、短軸約1.67mで深さは35cmである。不整楕円形を呈し、断面形は皿状をなす。覆土はローム小ブロックを多く含む暗褐色土で、周壁に溶結凝灰岩が露頭している。遺物はない。

10号土坑 (第133図、図版85-1)

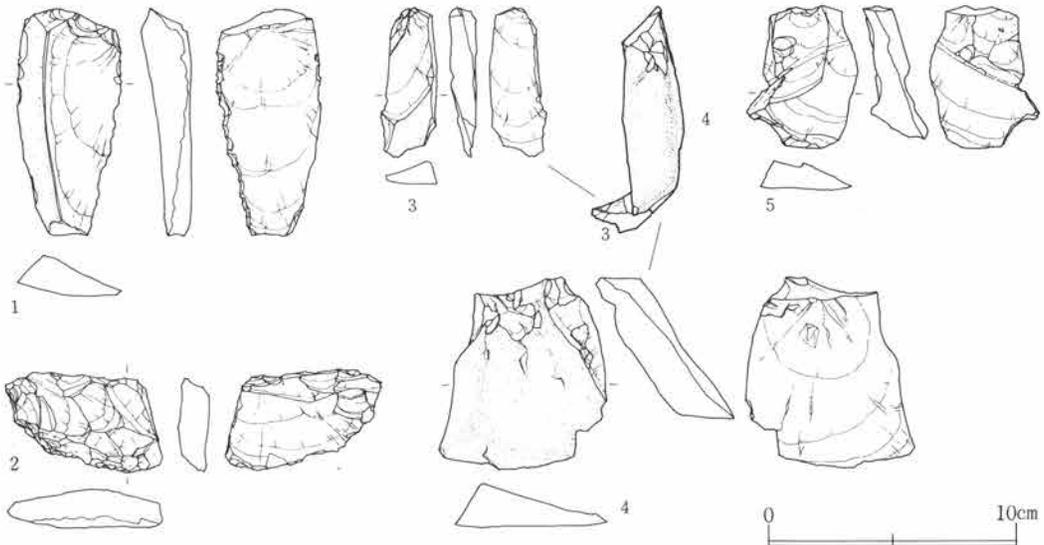
長軸2.30m、短軸1.72mで深さは42cmである。不整長方形を呈し、底面は平坦でやや斜めに立ち上がる。覆土は9号とほぼ同様で、接合する剝片3点 (第135図3～5) が出土した。

11号土坑 (第133図、図版85-2)

長軸2.17m、短軸約2.10mで深さは22cmである。やや台形を呈し、断面形は皿状をなす。覆土は



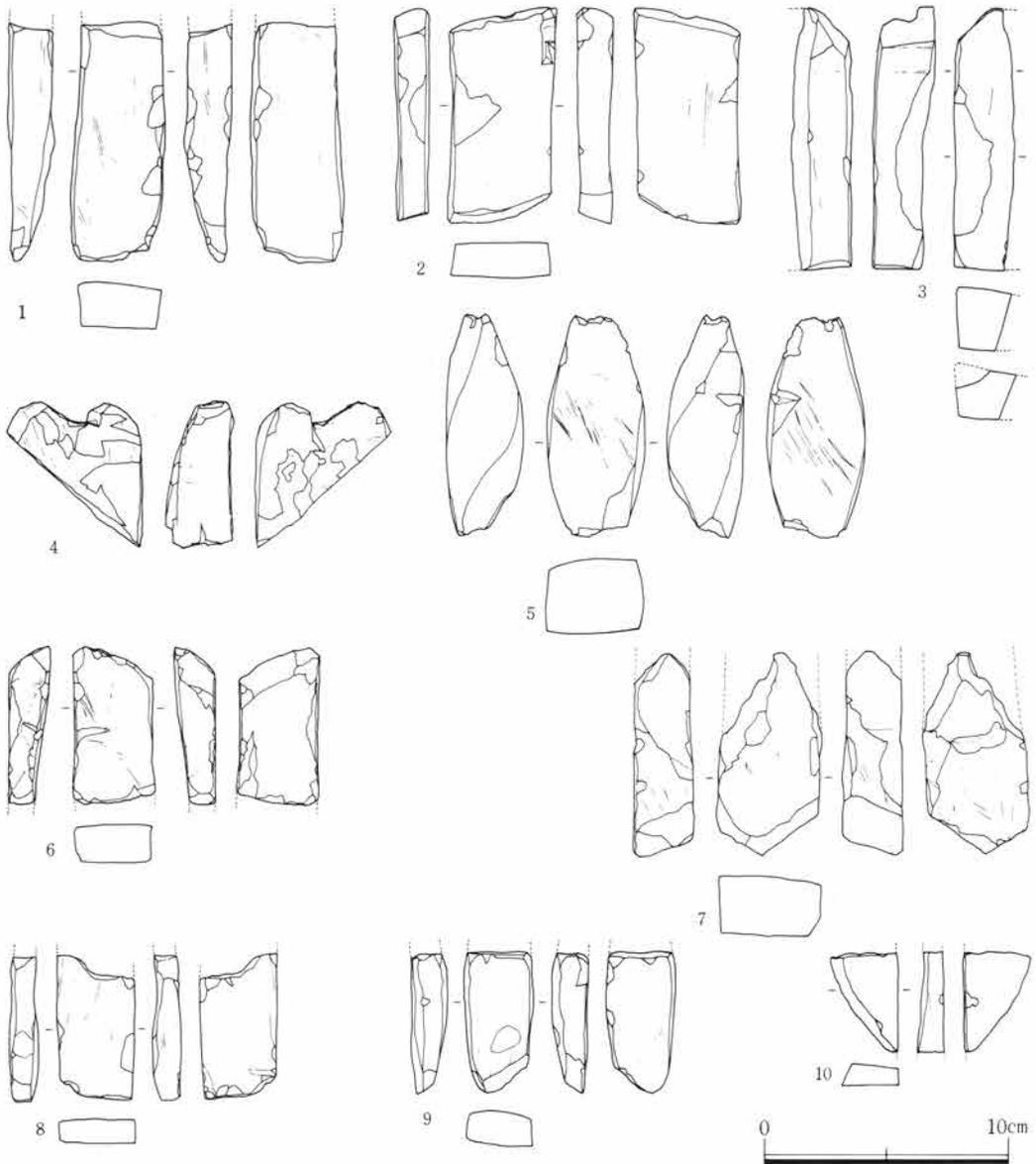
第134図 1〔1~4〕・4〔5・6〕・5〔7・8〕
6〔9〕・12〔10〕号土壇出土土器（1：2）



第135図 4〔1・2〕・10〔3~5〕号土壇出土石器（1：3）



第七章 前中原遺跡



第136図 グリッド出土の砥石 (1:3)

粘質土が混入する灰褐色土とロームブロックが混入する黒褐色土が互層をなし、固く締っていた。底面からは大小の礫が集中して多量に出土した。

12号土坑 (第133図、図版84-3)

長軸3.20m、短軸2.55mで深さは14cmである。不整隅丸長方形を呈し、底面は凸凹している。覆土はローム小ブロックを少量含む黒褐色土である。胎土に繊維を含み、原体LRとRLの多条と思われる縄文を羽状に施した黒浜式の土器片が出土した (第134図10)。

グリッドから出土した砥石 (第136図、図版126-1) は長方形を呈し、4面とも良く磨かれており、割れたものが多い。5だけは面が湾曲している。 (下城 正)

第5表 前中原遺跡石器一覧表

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
73	1	剥片石器	頁岩	10	3.5	61	1住	
	2	剥片石器	頁岩	11	5.5	130	1住	
	3	剥片石器	頁岩	7.5	6.5	79	1住	
	4	剥片石器	黒色ガラス質安山岩	8.2	6	83	1住	
	5	剥片石器	頁岩	3.7	6.8	21	1住	
	6	剥片石器	頁岩	—	5.3	24	1住	一部欠損
	7	剥片石器	頁岩	3.4	5.5	11	1住	
	8	剥片石器	黒色ガラス質安山岩	6.8	5	53	1住	
	9	ドリル	頁岩	8	4.5	60	1住	
	10	石 匙	流紋岩	6.1	2	9	1住	
	11	石 鏃	頁岩	3.3	1.6	4	1住	
	12	石 鏃	黒色ガラス質安山岩	2.9	2	2.7	1住	
	13	凹 石	花崗閃緑岩	9.5	7.7	451	1住	
	14	凹 石	花崗岩	7.7	6.5	240	1住	一部欠損
76	1	打製石斧	頁岩	15.3	8	307	2住	
	2	打製石斧	頁岩	11	6	195	2住	
	3	剥片石器	頁岩	3.2	11.7	45	2住	
	4	剥片石器	頁岩	5	8.7	49	2住	
	5	剥片石器	頁岩	5	8	41	2住	
	6	剥片石器	頁岩	5.5	9.2	52	2住	

第VII章 前中原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
76	7	剥片石器	頁岩	7.4	4	20	2住	
	8	剥片石器	頁岩	5.6	5.4	51	2住	
	9	剥片石器	頁岩	4.8	2.1	9	2住	
	10	剥片石器	頁岩	2.9	5	15	2住	
	11	石 匙	頁岩	3.7	3.3	10	2住	刃部欠損
	12	石 鏃	凝灰岩	3.4	2.3	6	2住	
	13	石 鏃	頁岩	—	2.2	0.5	2住	基部欠損
79	1	打製石斧	頁岩	10.4	4.9	155	3住	
	2	剥片石器	頁岩	4.2	11.2	96	3住	
	3	礫 器	頁岩	9	13	500	3住	
	4	ドリル	頁岩	3.8	1.2	2.7	3住	
82	1	打製石斧	黒色ガラス質安山岩	7.3	4.2	205	4住	
	2	剥片石器	細粒砂岩	8	7.3	49	4住	
	3	剥片石器	頁岩	7.6	4	49	4住	
	4	剥片石器	頁岩	9.7	7	100	4住	
	5	剥片石器	黒色ガラス質安山岩	4.6	4.5	25	4住	
	6	剥片石器	頁岩	—	3.7	22	4住	一部欠損
	7	剥片石器	黒色ガラス質安山岩	—	4	15	4住	一部欠損
	8	剥片石器	頁岩	4	3.3	9	4住	
	9	剥片石器	頁岩	3.7	2.5	5	4住	
	10	剥片石器	頁岩	4	9.6	44	4住	

5 時期不明の遺構と遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
82	11	剥片石器	頁岩	3.4	6	22	4住	
	12	凹 石	花崗閃緑岩	7.3	5.4	271	4住	一部欠損
	13	凹 石	砂岩	11	9.2	780	4住	
83	1	石 鏃	溶結凝灰岩	2.8	2.1	7	4住	
	2	石 鏃	流紋岩	2.7	1.6	4	4住	
	3	石 鏃	頁岩	2.7	1.5	1.6	4住	
	4	石 鏃	頁岩	2.8	—	1.4	4住	一部欠損
	5	石 鏃	頁岩	—	—	0.7	4住	一部欠損
	6	石 匙	安山岩	2.1	4.2	9	4住	
84	1	石 核	頁岩	6.5	6.5	175	4住	
	a	剥 片	頁岩	3.7	3.3	12	4住	1 aに接合
	b	剥 片	頁岩	4	3.5	10	4住	1 aに接合
	c	剥 片	頁岩	4.5	1.8	19	4住	1 aに接合
	d	剥 片	頁岩	3.9	1.3	8	4住	1 aに接合
	e	剥 片	頁岩	2.2	2.9	4	4住	
	f	剥 片	頁岩	1.6	2.4	2.5	4住	
	2	石 核	安山岩	4.3	4.8	82	4住	
86	1	石 鏃	黒色頁岩	1.8	1.3	1.8	1号炉穴	
	2	石 匙	黒色頁岩	7.3	3.3	24	4号炉穴	
	3	剥片石器	頁岩	6.7	8.5	79	4号炉穴	
89	1	打製石斧	頁岩	7.3	5.2	92	7号土壇	

第七章 前中原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
	2	石 鏃	頁岩	2.8	1.5	1	7号土坑	
96	1	石 鏃	溶結凝灰岩	1.6	1.2	0.1	18号土坑	
	2	打製石斧	頁岩	10.9	5.6	165	19号土坑	
	3	打製石斧	頁岩	12.5	5.8	204	19号土坑	
	4	打製石斧	頁岩	10.7	6.6	181	22号土坑	
	5	剥片石器	頁岩	4.6	11	108	22号土坑	
107	1	打製石斧	黒色頁岩	12.3	6.7	300	2区F-07グリッド以下2F-7のように表わす。	
	2	打製石斧	黒色頁岩	13.1	5.7	80	3F-1	
	3	打製石斧	酸性流紋岩	12	5.5	140	2IJK-2	
	4	打製石斧	黒色頁岩	—	5.5	85	1IJK-8	基部欠損
	5	打製石斧	黒色頁岩	9	3.8	79	2F-8	
	6	打製石斧	安山岩	—	5.2	91	2IJK-4	基部欠損
	7	打製石斧	黒色頁岩	—	5.2	52	1IJK-4	基部欠損
	8	打製石斧	黒色頁岩	—	5.2	49	3F-1	基部欠損
	9	打製石斧	黒色頁岩	—	6.3	134	2IJK-5	基部欠損
	10	打製石斧	珪質頁岩	—	5.6	158	1M-789	刃部欠損
108	1	打製石斧	黒色頁岩	18.1	7.3	450	2E-9	
	2	打製石斧	黒色頁岩	16	6.5	394	3F-1	
	3	打製石斧	黒色頁岩	14.7	5	215	2T-3	
	4	打製石斧	黒色頁岩	11.6	5.2	172	1D-6	
	5	打製石斧	黒色頁岩	13	7	242	2IJK-6	

5 時期不明の遺構と遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
	6	打製石斧	黒色頁岩	—	6.5	230	2 L-567	刃部欠損
109	1	打製石斧	流紋岩	8	5	80	表採	
	2	打製石斧	頁岩	7.5	5.3	76	表採	
	3	打製石斧	黒色安山岩	7.5	5.3	88	表採	
	4	打製石斧	黒色安山岩	6.7	4	51	2 G-6	
	5	打製石斧	黒色安山岩	6.6	3.5	31	2 IJK-3	
	6	打製石斧	頁岩	7.2	4	40	表採	
	7	打製石斧	頁岩	9	5	100	2 L-7	
	8	打製石斧	頁岩	8.6	4.8	95	2 IJK-2	
	9	打製石斧	頁岩	8.8	4.5	70	2 K-5	
	10	打製石斧	頁岩	9	5	110	2 CDF-3	
	11	打製石斧	頁岩	10.7	5.5	135	3 CD-2	
	12	礫 器	頁岩	7.2	9.4	239	2 L-567	
	13	礫 器	頁岩	7	10	246	1 CDE-10	
110	1	磨製石斧	細粒石英閃緑岩	13.5	5.3	290	3 CD-2	
	2	磨製石斧	斑紋岩	—	6	243	2 A-9~3 A-1	刃部欠損
	3	打製石斧	頁岩	19.8	9.1	320	1 J-3	
	4	打製石斧	頁岩	12	7.2	—	2 F-7	一部欠損
111	1	石 鏃	流紋岩	3.7	2.4	6.74	2 G-1	
	2	石 鏃	流紋岩	3.5	2.3	3.34	2 CDE-6	
	3	石 鏃	ガラス質安山岩	3	2.2	4.85	2 L-5	

第VII章 前中原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
111	4	石 鏝	流紋岩	3.1	2.1	4.51	2 N-7	
	5	石 鏝	珪質頁岩	3.1	2	2.76	2 J-5	
	6	石 鏝	流紋岩	2.9	2.3	2.65	2 M-7	
	7	石 鏝	珪質頁岩	2.4	2.3	1.75	2 L-4	
	8	石 鏝	流紋岩	2	1.7	1.01	2 N-5	
	9	石 鏝	石英	2.1	1.4	1.26	2 L-3	
	10	石 鏝	黒色安山岩	1.8	1.6	0.93	2 F-4	
	11	石 鏝	黒色安山岩	2	1.5	0.88	2 L-5	
	12	石 鏝	黒曜石	1.4	1.4	0.43	2区表採	
	13	石 鏝	チャート	—	1.5	1.25	2 L-4	先端部欠損
	14	石 鏝	流紋岩	—	2	1.68	2 G-6	先端部欠損
	15	石 鏝	チャート	2.8	1.5	1.5	2区表採	
	16	石 鏝	チャート	2.8	1.5	1.72	2 J-5	
	17	石 鏝	流紋岩	—	1.3	0.81	2 IJK-4	先端部欠損
	18	石 鏝	頁岩	1.9	—	0.66	3 F-2	脚部欠損
	19	石 鏝	流紋岩	—	1.3	0.71	3 F-2	先端部欠損
	20	石 鏝	流紋岩	—	—	0.9	2 G-5	先端・脚部欠損
	21	石 鏝	黒曜石	1.8	1.2	0.67	3 F-	
	22	石 鏝	頁岩	2	—	0.56	3 F-2	脚部欠損
	23	石 鏝	黒曜石	2.2	—	0.76	表採	脚部欠損
	24	石 鏝	黒色ガラス質安山岩	2.2	—	0.75	2 L-5	脚部欠損

5 時期不明の遺構と遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
	25	石 鏃	黒色ガラス質安山岩	2.3	—	1.11	3 F-1	脚部欠損
	26	石 鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.63	2 M-567	
	27	石 鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.75	3 F-2	
	28	石 鏃	黒色緻密安山岩	1.8	1.3	0.72	3 F-2	
	29	石 鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.34	3 F-2	
112	1	石 匙	流紋岩	3.1	5.7	15	3 E-1	
	2	石 匙	頁岩	4.2	5.9	21	2 F-1	
	3	石 匙	流紋岩	4.3	5.1	15	3 E-1	
	4	石 匙	頁岩	—	6.5	22	2 G-567	摘み部欠損
113	1	石 匙	珪質頁岩	—	2	18	1 D-7	刃部先端欠損
	2	石 匙	細粒凝灰岩	6	3	20	2 M-7	
	3	石 匙	珪質頁岩	4.8	2.7	10	2 N-6	
	4	石 匙	珪質頁岩	—	4	15	2 E-1	摘み部欠損
	5	石 匙	頁岩	7.5	3.7	36	3 F-4	
	6	石 匙	頁岩	8.5	3.5	35	2 G-6	
	7	剥片石器	安山岩	7.8	4.3	30	2 K-6	
	8	剥片石器	頁岩	5.2	3.8	15	表採	
	9	ドリル	安山岩	—	1	3.2	3区表採	先端部欠損
	10	ドリル	黒曜石	—	1.6	2.5	2 K-5	先端部欠損
114	1	剥片石器	流紋岩(文象斑岩)	8.5	13.8	375	3 F-1	
	2	剥片石器	流紋岩(文象斑岩)	7	11.5	186	3 E-1	

第七章 前中原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
	3	剥片石器	頁岩	8	11	160	2 K-5	
	4	剥片石器	頁岩	5.9	8.5	135	2 B-7	
115	1	剥片石器	頁岩	4.4	10.6	65	2 K-8	
	2	剥片石器	頁岩	4.1	9.1	40	2 E-3	
	3	剥片石器	無斑品質ガラス質安山岩	4.1	8.2	53	2区表採	
	4	剥片石器	無斑品質ガラス質安山岩	4	8	40	2 F-7	
	5	剥片石器	頁岩	4.4	8.7	61	1 J-3	
	6	剥片石器	頁岩	2.9	8.1	30	2 G-567	
	7	剥片石器	黒色緻密安山岩	3.5	8.1	45	2 F-6	
	8	剥片石器	黒色緻密安山岩	3.1	6.9	25	3 F-1	
	9	剥片石器	頁岩	5.4	9.5	65	表採	
	10	剥片石器	頁岩	6.4	9.1	65	2 F-7	
	11	剥片石器	頁岩	5.4	9.6	70	2 I-5	
	12	剥片石器	無斑品質ガラス質安山岩	4.6	8.7	35	2 K-6	
	13	剥片石器	頁岩	5.5	7.7	50	3 F-2	
	14	剥片石器	頁岩	4.3	10.3	65	表採	
116	1	剥片石器	黒色頁岩	3.1	7.8	21	2 K-6	
	2	剥片石器	流紋岩	3.4	5.8	15	2 E-1	
	3	剥片石器	黒色安山岩	3.7	6.0	25	2 T-3	
	4	剥片石器	流紋岩	4.6	6	23	3区表採	
	5	剥片石器	頁岩	4.2	6.8	19	2 F-567	

5 時期不明の遺構と遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考	
116	6	剥片石器	頁岩	4	8.2	29	2 IJK-7		
	7	剥片石器	頁岩	3	2.8	20	2 IJ-8		
	8	剥片石器	安山岩	4	7	25	2 K-6		
	9	剥片石器	頁岩	4.5	5.2	29	2 F-9		
	10	剥片石器	頁岩	4	4.1	17	2 CDE-2		
	11	剥片石器	頁岩	5.4	3.9	21	2 F-567		
	12	剥片	流紋岩	4.9	10.7	100	2 C-9		
	13	剥片	頁岩	4.4	7.4	24	2 M-567		
	14	剥片	頁岩	4.6	8.9	32	2 G-6		
	15	剥片	頁岩	4.5	8.8	45	3 F-4		
	16	剥片	頁岩	4.3	8.3	43	2 K-6		
	17	剥片	頁岩	4.8	8.5	35	2 K-6		
	117	1	剥片石器	頁岩	8.5	6	95	2 F-567	
		2	剥片石器	頁岩	9.3	7.4	150	表採	
		3	剥片石器	石英安山岩質凝灰岩	8	5.7	103	表採	
		4	剥片石器	珪質頁岩	7.5	5.2	85	1 M-789	
		5	剥片石器	珪質頁岩	11.5	6.5	172	2 F-9	
6		剥片石器	頁岩	8.5	5.7	100	2 K-6		
	1	剥片石器	頁岩	7.6	3.7	48	2 F-5		
	2	剥片石器	頁岩	6.6	3.3	40	3 F-1		
	3	剥片石器	頁岩	5.6	3.7	27	2 E-1		

第VII章 前中原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考	
118	4	剥片石器	頁岩	7.5	5	86	2 F-7		
	5	剥片石器	頁岩	7.2	8	136	2 K-6		
	6	剥片石器	黒色ガラス質安山岩	10	7	110	表採		
	7	剥片石器	黒色ガラス質安山岩	8	6.7	95	2 G-6		
	8	剥片石器	頁岩	10.2	6.5	90	2 L-56		
	9	剥片石器	頁岩	9	5.8	91	2 M-567		
	10	剥片石器	頁岩	10	4	42	2 M-567		
	11	剥片石器	頁岩	9.7	4.2	54	1 IJK-8		
	12	剥片石器	頁岩	8.2	4.7	57	2 F-10		
	13	剥片石器	珪質頁岩	7.2	6	61	2 CDE-3		
	119	1	剥片石器	黒色ガラス質安山岩	9.5	4.5	55	1 D-10	
		2	剥片石器	頁岩	8.3	4.5	32	表採	
		3	剥片石器	頁岩	7.8	4.7	65	2 F-9	
4		剥片石器	頁岩	7.6	4.3	20	表採		
5		剥片石器	頁岩	6.7	3	34	2 K-6		
6		剥片石器	頁岩	6.9	4.1	41	2 B-5		
7		剥片石器	流紋岩	7	4	31	表採		
8		剥片石器	黒色安山岩	7.4	4.2	24	表採		
9		剥片石器	黒色安山岩	7.5	5	34	2 I-4		
10		剥片石器	黒色安山岩	5.6	4	15	2 G-8		
11		剥片石器	頁岩	6	2.6	15	2 F-7		

5 時期不明の遺構と遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
	12	剥片石器	頁岩	7.2	2.9	19	表採	
	13	剥片石器	頁岩	4.8	3.3	15	2 F-567	
	14	剥片石器	流紋岩	3.5	3	10	表採	
	15	剥片石器	流紋岩	3	2.3	5	表採	
	16	剥片	流紋岩	10	3.5	50	2 K-5	
	17	剥片	頁岩	8.2	4.2	55	2 B-5	
	18	剥片	頁岩	8.2	3.8	40	2 F-10	
	19	剥片	流紋岩	6.7	3.8	30	2 E-1	
	120	1	剥片石器	細粒凝灰岩	6.2	7	95	2 I-5
2		剥片石器	頁岩	8.5	6.7	11	2 CDE-1	
3		剥片石器	細粒凝灰岩	8.3	9	21.4	1 IJK-4	
4		剥片石器	頁岩	15	5.5	230.6	2 A-9~3 A-1	
5		剥片石器	頁岩	4.7	6.5	35	2 A-9	
6		剥片石器	頁岩	6.7	5	57	1 M-789	
7		剥片石器	頁岩	7.8	4.2	80	表採	
8		剥片石器	黒色ガラス質安山岩	—	4	19	2 G-5	一部欠損
9		剥片石器	珪質頁岩	5.9	5.2	36	2 A-9	
10		剥片石器	珪質頁岩	4.2	6	25	1 IJK-10	
11		剥片石器	珪質頁岩	4.9	7.5	40	2 G-8	
12		剥片石器	頁岩	3.5	6.1	19	3 E-1	
13		剥片石器	流紋岩	4	4.7	24	表採	

第七章 前中原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
	14	剥片石器	頁岩	2.7	6	14	3 F-3	
	15	剥片石器	頁岩	3.1	5.4	18	表採	
121	1	剥片石器	頁岩	6.9	1.8	10	2 G-567	
	2	剥片石器	頁岩	5.7	2.3	10	表採	
	3	剥片石器	頁岩	5.6	2.1	8	2 G-567	
	4	剥片石器	頁岩	4	2.2	9	2 L-5	
	5	剥片石器	珪質頁岩	3.1	4.5	11	2 F-10	
	6	剥片石器	流紋岩	5.7	4.3	36	3区表採	
	7	剥片石器	頁岩	4.9	4.2	15	2 IJK-5	
	8	剥片石器	黑色安山岩	5	2.7	11	2 G-567	
	9	剥片石器	珪質頁岩	4.5	2	5	2 J-4	
	10	剥片石器	珪質凝灰岩	3.5	3	10	2 IJ-8	
	11	剥片石器	珪質凝灰岩	4.7	3.2	10	3 E-1	
	12	剥片石器	珪質頁岩	3.7	3	15	2 E-9	
	13	剥片石器	安山岩	3.8	2.7	5	1 G-789	
122	1	石 核	珪質頁岩	6.8	7	410	2 G-567	
	2	石 核	流紋岩	4.2	5.5	125	表採	
	3	石 核	珪質頁岩	15	11.1	1,560	表採	
123	1	石 棒	黑色頁岩	10.7	2.7	125	3 CDE-4	
	2	块状耳飾	瑪瑙	—	—	4	2 I-3	破片
	1	凹 石	石英閃緑岩	10	8.6	545	2 F-6	

5 時期不明の遺構と遺物

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	出 土 地 点	備 考
124	2	凹 石	粗粒砂岩	10.5	8.2	565	2 L-5	
	3	凹 石	花崗閃緑岩	10.5	8.1	610	2 L-567	
	4	凹 石	粘板岩	10.8	6.5	300	2 CDE-2	
	5	凹 石	石英閃緑岩	11	9.3	760	2 D-5	
	6	凹 石	石英斑岩	9.7	9	630	2 I-3	
	7	凹 石	石英閃緑岩	11	8.8	700	3 F-1	
	8	敲 石	黒色頁岩	11.3	5.4	259	2 M-567	
135	1	剥片石器	頁岩	9.2	4.2	61	4号土坑	
	2	剥片石器	頁岩	3.8	6	46	4号土坑	
	3	剥 片	細粒凝灰岩	6	2.1	10	10号土坑	4と接合
	4	剥 片	細粒凝灰岩	7.5	6.5	87	10号土坑	3と接合
	5	剥 片	細粒凝灰岩	5.7	4.2	34	10号土坑	
136	1	砥 石	珪質凝灰岩	—	3.9	114	2 L-567	一部欠損
	2	砥 石	珪質凝灰岩	8.6	4.2	100	表採	
	3	砥 石	珪質凝灰岩	10.5	—	85	2 M-567	一部欠損
	4	砥 石	珪化安山岩	5.8	5.4	75	3区表採	
	5	砥 石	珪質凝灰岩	9	4	139	3 F-4	
	6	砥 石	珪質凝灰岩	—	3.2	52	2 CD-7	部分欠損
	7	砥 石	珪質凝灰岩	—	4.2	115	3 E-1	部分欠損
	8	砥 石	珪質凝灰岩	—	3.2	35	2 F-6	部分欠損
	9	砥 石	珪質凝灰岩	—	2.7	39	2 BCD-8	部分欠損

第七章 前中原遺跡

挿 図	番 号	種 類	石 質	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	出 土 地 点	備 考
	10	砥 石	珪質凝灰岩	—	2.5	13	2区表採	部分欠損

第VIII章 十二原・大原・前中原遺跡の遺構・ 遺物に関するまとめ

1 十二原・大原遺跡の遺構について

今回の調査で確認した両遺跡の遺構は数が少なく、時期的には単独のものもあり、両遺跡を合わせて時代別に各遺構の特徴をまとめることとし、今後、周辺地域の調査が進行して行く中での一資料としたい。

大原遺跡の5基の土壇は重複関係や覆土・出土遺物から縄文時代に属すると考えられるが、時期の限定はできなかった。

1・2号土壇は長楕円形を呈し、南端の原沢寄りに散在している。覆土は一挙に埋没した様相を示しており、墓壇としての性格が考えられる。4～6号土壇は円形でフラスコ状の断面形を呈し、台地中央部寄りに密集しており、貯蔵穴としての性格が考えられる。両者の土壇群は近くに集落址の存在を窺わせ、その分布位置や形態・覆土に差があり性格も異にしているものと思われる。

弥生時代の住居址は十二原一4号住居址が後期初頭に比定され、大原一1・3号住居址は後期中葉にそれぞれ比定される。

十二原一4号住居址は内部構造は不明であるが、平面形は長方形を呈しており、短辺と長辺の比は1:1.3となる。また、長軸方向が西へ大きく傾いている。

大原一1・3号住居址の内部構造は類似点が多いが、規模は大きく異なり1号住居址は約18m²で、3号住居址が41m²と2倍以上の差がある。また、2軒は近接しているが長軸方向の傾きに差がある。

2軒はともに長方形を基調としているが、短辺と長辺の比は1号住居址が1:1.1と差がほとんどなく正方形に近い。3号住居址は1:1.8で2倍近い差がある。

主柱穴はともに4本で、その位置は面する壁からほぼ等距離にあり、ともに南へ少し寄っている。短軸方向から見た主柱穴間の柱間と壁から柱穴までの間隔は、ほぼ等距離で短軸の長さを3等分した位置にある。長軸方向から見た壁から柱穴までの距離と、主柱穴間の柱間の比は1号住居址が1:1.6で、平面形は正方形に近い形状を呈しているが、主柱穴は長方形を意図している。3号住居址は1:1.9となり、短辺と長辺の比とほぼ同じで長辺の変化に合わせている。また、3号住居址は周壁にそって8本の支柱穴があり壁柱穴の意味と同時に、主柱穴の間隔が1号住居址の主柱穴間の2倍に近い長さにもかかわらず主柱穴間に支柱がなく、そのかわりに壁にそった支柱穴で上屋の支えを補ったものと思われる。また、3号住居址の南壁寄りの1対の柱穴は出入口

施設の補助柱穴と思われる。

炉は2軒とも北壁寄り支柱穴間の中間にあり、楕円形で丸底状を呈し、南壁立ち上がりに長楕円の河原石を1石据えており、すべてに共通点がある。また、貯蔵穴の位置は対象をなすが同様の形態を示している。

2軒の住居址は後期中葉の特徴である長方形を呈し、支柱穴の配置は一定のパターンが見られ、南へ寄る傾向は出入口の施設や炉の位置に関係があると考えられる。炉と出入口は対象する位置関係にあり、炉は最奥部に設定され、出入口は反対の短辺に位置し、貯蔵穴も出入口寄りの左右いずれかに設定されている。2軒は規模や長軸方向に差があるが、これは集落内における構成や位置に関係すると思われる。

古墳時代和泉期に比定される十二原一1号住居址は、歪みもなくほぼ正方形で内部構造も定形化し規則的である。前述の弥生後期の位置と類似した内部配置をしているが、支柱穴は面する壁からほぼ等距離にあり支柱穴間は正方形に近く、上屋構造は大きな差があるものと思われる。本住居址で注目されるのは周溝と壁体である。両者には丸太材を半載し円弧をなす外面を壁体に向けて平板な内面を内側にして連続して打ち込んだと思われる痕跡があり、周壁を支える材や構造を知る有力な手掛りとなるものである。

平安時代の住居址である十二原一2号住居址は9世紀後半に、大原一2号住居址は11世紀前半に比定され、平面形やカマド位置等に差が見られる。両者はともに長方形を呈しているが、大原一2号住居址は大きく歪んでおり、カマドも南東隅に斜めに設置され、竪穴住居址構築末期の様相を示しており、両者には時期差が表われている。

なお、十二原一2号住居址に30cmを1尺として割り付けてみると、規模は下端値で3.61m×3.02mでほぼ12尺×10尺となり、カマド位置も南壁から約60cm北にあり、焚き口幅が2尺、燃焼部側石幅が1尺で、ほとんどの部分の数値が尺度に合致し、住居址の構築に際して唐尺を使用した可能性が窺える。

十二原遺跡の柱穴群はまとまるものはないが建築物の存在は予想される。その後、当地域の上越新幹線関係の調査で近世に属する掘立柱建物が数多く確認されており、あるいはグリッド出土の近世遺物の時期に比定される可能性もある。

また、大原遺跡の1号溝は薬研堀り状をなし台地をほぼ東西に貫いており、水が流れた痕跡はなく灌漑用とは考えられず、何らかの区画を表わしているものと思われ、走向の合致する農道が南約6mに平行して走っている。時期も土層から見るとかなり新しいと思われる。(下城 正)

2 十二原遺跡の縄文遺物散布地について

5区南半と0地点の2ヶ所で確認された遺物包含層は、その位置が平坦な段丘上にあつて中後沢に沿った部分が幅約30m、距離約55mにわたって微高地状に一段高くなっており、この微高地の東縁部北面傾斜地から裾部と南東傾斜地に相当する部分にあたる。

この遺物包含層はあまり厚いものではないが多量の遺物が密集して出土している。遺物の出土状態は傾斜地の部分から出土した土器はほとんど磨滅しておらず、廃棄されたそのままの状態を示しているものと考えられるが、裾部に広がった土器は比較的小片が多く磨滅しているものが多い。傾斜地へ廃棄されたものが2次的に移動したものと考えられる。この移動は土層の変化から自然の作用と考えられ、多分に水の作用を大きく受けているものと思われる。

出土した土器はすべてが小さな破片であり、接合資料も極めて少ない。また、完形の土器や一括した土器の出土もなく、これらの点は大きな特徴であり、本遺跡での土器の廃棄のあり方を示している。

土器とともに多くの剥片や各種の石器が出土しているが、その出土状態は場所による片寄りや器種によるまとまりは見られず、土器の中へ散在している状態である。また、使用痕や加工痕の認められない大小の礫も出土している。

出土した打製石斧は完形で出土したものも多くあり、これらの完形品には使用度が少ないと思われるものもあるが、多くは刃部に摩耗痕や使用による割れが入っている。しかし、量的には各部で折れたものが圧倒的に多い。このような傾向は他の石器では器種により片寄りがあり、剥片石器は完形が多く、石匙・石皿・磨石はほとんど割れている。

これらの傾向はひとつには石器の機能による差が表われているものと考えられるが、他方、その廃棄のあり方は実用性を失なったものとその意味を失なったものがあるものと思われる。

また、出土遺物の中には呪術的な線刻のある板石もあるが、文様が途中で切れたものや、接合する資料もあり、これらの板石もその意味が失なわれた時、割られて他の遺物と同様に廃棄されたものと思われる。また、この線刻石器は5区南半だけから出土しており、偏位性が窺われる。

今回の調査は地点が2ヶ所であり範囲も狭く、包含層の全体的な傾向を示しているかは不明であるが、以上が2地点の散布地の特徴である。

また、今回の調査では同時期の遺構は確認できなかったが、調査地点西方の微高地中心部には集落址が予想され、この遺物散布地は微高地縁辺の傾斜地に比較的短時期に形成された「廃棄の場」と考えられ、地形から見ると集落を「U」字状に囲んでいるものと思われる。(下城 正)

3 十二原遺跡縄文遺物散布地出土の土器について

本遺跡での縄文土器の出土は、微高地が低地へ変換する縁辺部に石器などととも捨てられた状態で出土している。出土土器の総数は千点以上にのぼり、その大半が阿玉台式土器であったが、いずれも表面が腐植しており図版化できるものは極めて少なかった。しかし、本地域における阿玉台式土器の資料は乏しく、その点では良好な資料を得たものと考えられよう。

本遺跡における阿玉台式土器の多くはI b段階のものと考えられるが、若干先行するものも含まれている。また、伴出資料としての勝坂I式段階の資料もあり、阿玉台式土器編年上、注目されるものでもある。しかし、報告書作成段階において、資料整理、執筆者が異なり、図版の提示法

に問題が生じていることもあり、詳細にわたる分析については後稿を期したい。(能登 健)

4 十二原遺跡縄文遺物散布地出土の石器について

石器は阿玉台Ⅰ式を主体とする土器に伴出したものであり、限定された時期での石器の様相を示していると思われ、器種の量比に片寄りが見られる。また、廃棄の場からの出土であり、使用痕のあるものや折れたものがほとんどである。

石器の器種としては打製石斧が圧倒的に多く、なおかつ、ほとんどが短冊形である。他の器種としては、磨製石斧・剥片石器・礫器・石鏃・石皿・磨石があるが量的には少ない。廃棄の場からは多量の剥片が出土したが、中には使用痕と思われるような細かい剥離のあるもの(石器13)もあった。また、呪術用の石棒や線刻のある板石もある。

磨製石斧(石器17)はやや小形で定角をなす刃部の折れたものが1点出土しただけである。剥片石器(石器12)は不定形な縦形と横形があり、簡単な剥離を加えて刃部としている。また、サイド・エンド・ラウンドのスクレイパー状の石器も各1点ずつある。剥片石器には折れたものはなかった。礫器(石器14)には大形で荒い剥離を加えただけで自然面を多く残したものと、やや小形で平坦な基部を持つものがあり、両方とも折れ等はなかった。石鏃(石器16)には三角鏃が混入しているが、若干の形状差はあるもののすべてが無茎でハート形をしており、有茎の石鏃はなかった。これらの石鏃にも折れのあるものが目立つ。石皿・磨石(石器18)はすべてが割れており、廃棄の際、意識的に割られた可能性もある。

打製石斧はほとんどが短冊形であるが微妙な形態差がある。しかし、剥離や調整等その技法はほぼ同一であり、反りのあるものは極めて少ない。

短冊形打製石斧は形状や大小、基部と刃部の角度、基部から刃部へ向けての開きの状態により幾つかに分けられる。

石器1に代表されるタイプは典型的な短冊形を呈し、長方形で基部・刃部ともに直線的なタイプである。石器3に代表されるタイプは石器1と同様の形状をなしているが、基部と刃部に丸みのあるもので、石器2も同じタイプと思われる。石器5は基部・刃部に丸みのある小形のタイプである。石器4・6は基部から刃部に向かってやや開きがあり、石器4は基部に丸みがあり刃部が斜めに着き、厚みがありやや棒状をしたタイプである。石器6は基部がやや尖り刃部に丸みのあるタイプである。石器8～10は基部に比べ刃部が開く中形のタイプで、特に石器9は撥形と言えるタイプである。石器8は三角形を呈し、基部が極端に細く刃部が丸いタイプである。石器10は基部がやや尖り刃部がやや斜めに着くタイプである。

これらの打製石斧のうち、石器2・5の刃部には斜めの擦痕の見える摩耗痕があり、表面より裏面に広がる傾向がある。他の石斧の刃部には刃こぼれと考えられる細かい割れが入っている。また、これらの石斧には折れたものが多くあり、小形の石斧には折れたものは見られなかった。

(下城 正)

5 十二原遺跡出土の線刻石板について

本遺跡出土の線刻石板が確認されたのは、前述のように整理中であったため、現地において、放棄されたものもあると思われる。また、調査区は、微高地上から北に緩傾斜する地形の一部であり、本遺物の性格を把握することは困難と思われる。

石板はほとんどが泥岩で、一点だけ頁岩が含まれている。大きさ・形とも図示したとおり一定していない。これらの線刻の文様構成は大別して三つに分けることができる。

第34図に共通する文様構成は、格子目状、あるいは綾目状に線刻が刻まれている。同図1は強い弧状の線刻と綾目状の文様、同図9は中央で交差する太く深い線刻を中心として、平行する数条の線刻、同図2は縦に平行する線刻の中を空白にして、やや右下りの斜めの線刻が左右に斜行する。この三点は比較的文様構成が明確である。裏面に線刻はない。

第36図は方向性の一定しない線刻によって文様を構成している一群であるが、同図5・6は太く深い線刻が一条ないし二条によって構成されている。他の線刻は細く浅いものである。

第35図は第36図と同様の特徴をもつ。細く浅い線刻が無規則に走る。ただし、この類は裏面にも同様の文様があり、この点が前図との異なる点である。

これらの線刻石板の包含層は縄文式土器の破片や石器・石片などと伴出し、その縄文式土器の破片は阿玉台1式を主体とするところから、極めて限定された時期に把握できる。

また、土器はすべて破片のみで完形品はなく、石器類も磨耗や使用痕の激しいこと、あるいは欠損品の多いことから、この北面傾斜地に捨てられたものと考えられる。これらの点から、この線刻石板も、何らかの理由によって、製作され、その使用目的が達成された後、同様に廃棄されたものと考えられる。

では、その使用目的とは何か、この点を思考するには判断材料がなく、残念ながら断念せざるを得ない。時期は異なるが、愛媛県上黒岩遺跡において、偏平な河原石に線刻した、いわゆる「ビーナス像」が出土しているが、これは文様の構成がある程度明確である。本遺跡のそれは、廃棄される時、叩き壊されたものか、あるいは、これらの一点一点が一つの文様構成なのか不明である。ただ、あまりに一片一片が大小、形に規則性のないこと、文様構成も大別は可能であるがやはり規則性のないことを考え合わせると、ある大きな文様の一部として捉えることも無理ではない。この場合、前述のように目的終了後、壊されて廃棄されたと考えられる。(長谷部達雄)

6 十二原・大原遺跡の弥生時代以降の遺物について

弥生時代の遺物としては十二原一4号住居址、大原1・3号住居址のものとグリッド出土のものがあるが、十二原一4号住居址は土器の特徴から後期初頭に位置付けられ、土器の出土状態は特徴的であり、伴出した石器は山間部における弥生文化の一面を物語るものと言えよう。大原一1・3号住居址の出土土器は様相が近似しており、住居形態からも時期的にはほとんど差が無

いものと考えられる。

弥生時代の主な調査成果としては、中部高地千曲川流域で型式設定されている“吉田式土器”が発見されたことである。本型式土器が1軒の住居址内から一括して出土したことには興味もたれよう。

古墳時代の遺物としては、十二原一1号住居址およびグリッド出土の遺物がある。ともに前期後半期（和泉期）であるが、全体的に器肉が厚く、形も歪なもの、器面調整が十分に施されていないものが多い。

平安時代の遺物には、十二原一2号住居址出土土器と大原一2号住居址出土土器がある。十二原一2号住居址出土土器は9世紀後半と考えられる。また大原一2号住居址から出土した羽釜と土釜は、10世紀後半から11世紀前半と推定されるが、いずれも器肉が厚く、羽釜の胴部外面に通常は轆轤痕が見られるが、本住居址出土のものは縦篋削りとなっている。

古墳・平安時代の出土遺物は少ない。しかし、従来発掘調査がほとんどおこなわれていなかった本地域において、土器様相の一端を垣間見ることが出来たという点に、本調査の意義を認めることが出来よう。

十二原遺跡の包含層からは、鉢・灯明皿・寛永通寶が出土している。いずれも江戸時代と考えられる。（飯塚卓二）

7 前中原遺跡の縄文時代の遺構について

確認された4軒の住居址は伴出遺物から、2・3・4号住居址が前期初頭に位置付けられ、1号住居址は前期中葉に位置付けられる。4基の炉穴は伴出遺物および周辺の包含層からの出土遺物から早期末と考えられる。22基の土壇からは前期中葉から前期初頭の遺物が出土しているが、住居址に切られるものと切っているものとがあり、住居址と同時期かその前後の時期までと思われる。

住居址と土壇は尾根状の台地の頂部に分布しており、前期初頭の3軒は調査区東端に近接して分布し、1群を構成している。しかし、3・4号住居址は極めて近接しており、同時存在は無理と思われ、土器型式は同一であるが若干の時間差があると推定される。1号住居址は調査区西端にあり、時期も差があり分布位置を異にしている。土壇は住居址と重複関係にあるものや接しているものもあるが、住居址に近接して散在的な群をなす傾向がある。

尾根状台地の南傾斜面には遺構が存在しない部分があり、これを挟んで台地の南縁辺部に炉穴が集中的にあり（1基だけ傾斜面上端にある。）、住居址・土壇とは分布を異にしている。

住居址は時期差あるいは時間差の考えられるものもあり、形態に微妙な差があるが類似している点も多い。

前期初頭の住居址は隅丸で歪みを持った、方形を呈するもの（2号住居址）とやや長方形ぎみのもの（3・4号住居址）とがある。長軸方向はほぼ北に近いもの（2・4号住居址）と、西へ

やや傾むくもの（3号住居址）とがある。住居址の断面形は共通しており、中央部がやや低く固く締っており、周壁に沿った部分に向って緩やかな傾斜があり、やや軟弱な床面で、壁は斜めに立ち上がっている。周溝がなく柱穴もはっきりしない点も共通している。炉の位置は中央部よりやや西か北へ寄っている。炉の構造は特徴があり、円形で掘り込みが浅く、炉の縁石が炉と離れて立っている。これらの相異点・類似点は同時期ではあるが若干の時間差が考えられることと、集落内における位置の差が考えられる。

前期中葉の1号住居址は2～4号住居址と類似した形態をしているが、炉の構造は大きく異なっている。平面形は同じく円形であるが、掘り込みが深くしっかりとしており、縁石が炉内にあり壁に立てかけられている。

炉穴は長軸と短軸の平均が1.91m×1.36mの規模で長楕円形を基調とし、長軸方向は一定していない。焼けた面は中央部から北半部の底面および立ち上がり部分に片寄り、焼けていない部分の底面が固く締っている傾向がある。

22基の土坑は径約1.15m前後で規模にあまり差はなく、楕円形のものも多いがほぼ円形を基調としている。覆土は炉穴と同様の黒色土を主体とし、ロームブロックの混入したものが多く目立つ。底面はやや丸底状で壁はやや斜めに立ち上がる。また、半数近くの10基の土坑に偏平な河原石が上縁部および上部にのっており、大きな特徴となっている。この河原石には使用痕は認められず、何らかの目印に置かれたものと考えられる。土坑からの出土遺物としては打製石斧・石鏃・剥片石器等が出土しているが、中には土坑の縁に置かれたような状態で出土した打製石斧もある。これらの土坑の性格は断定はできないが墓坑的性格を有しているものと考えられ、偏平な河原石は墓標としての意味を持っているものと推定されるが、鎮魂の意味も考えられる。

前中原遺跡は早期中葉から前期後葉までの遺物が連綿と出土しており、地形的に縄文時代前半の居住地として適地であったと推定される。 (下城 正)

8 前中原遺跡グリッド出土の縄文土器について

本遺跡出土の縄文土器はいずれも小破片で、その実態を解明するにはやや資料が不足している。ここでは、与えられた資料の中で摘出し得るいくつかの問題点を列記することに留めておきたい。

第2類土器として分類した一群は貝殻腹縁の圧痕文を特徴とするものである。これらの土器は、田戸式土器に併行するものと考えられよう。群馬県における田戸下層式土器は赤褐色を呈する比較的厚手の器厚をもち、沈線を主体とするものが多く見受けられるが、本遺跡出土のものは器厚は薄く、沈線間を埋める貝殻文が印象的であり、より田戸上層式に近いものともいえよう。しかし、南関東に比べて東北的要素が濃厚である。福島県常世遺跡出土の一群との対比も必要であり、今後の類例の増加を待ちたい。

第3類から第7類土器として分類した一群は条痕文土器群である。このうちの第3類から第5類土器は茅山系土器である。第3類土器の沈線文や微隆起文などは野島式に、第4類土器の竹管

文のあり方は鶉が島台式土器の特徴を良く示している。これに対して、第6・7類土器は、器厚も薄く、胎土・文様のあり方は、むしろ東北南部の槻ノ木下層式土器としての特徴を示しているといえよう。底部には尖底と平底の二種類がある。群馬県下での槻ノ木下層式土器の出土例は、現在まで本遺跡のみであるが、槻ノ木上層式を出土する遺跡は小野上村八木沢清水遺跡があり、東北的影響が入り込んでいることを物語っている。なお、本遺跡では小判形や円形のの炉穴も検出されており、その型態差と土器型式の問題にも興味もたれよう。

第8・9類土器は、縄文を主体にした繊維土器である。第8類土器の口縁部文様には捺糸圧痕文がみられ、また幅の狭い帯状文など花積下層式土器の文様要素に通じている。一方、尖底部の3つの資料は関東的ではない。むしろ、東北あるいは北関東的といえよう。この尖底部の縄文施文と同様の施文法をもつ胴部破片はやや薄手になり、上下方向の不規則なものとなっている。これらの一群の帰属時期には若干問題も残るが、第8類土器として早期末葉から前期初頭ぐらいと想定し菱型の文様構成をとる黒浜式土器と区別しておきたい。

以上、本遺跡出土の縄文土器に対して、いわゆる東北的影響と思われる土器群についての若干の問題点を述べてみた。ここでは、東北地方の土器型式についての詳細な資料を持ちえていないために「東北系」としての呼称を使用した。群馬県におけるこのような土器のあり方については、東北地方南部のあり方との比較研究を経て、別稿を準備し、詳細な分析についてはそれに譲りたい。

(能登 健)

9 前中原遺跡の石器について

本遺跡は早期中葉から前期後葉までの長期間にわたる土器が出土しており、包含層より出土したグリッド出土の石器は各時期のものが混じり合っていると考えられる。また、住居址出土の石器も流れ込みのものが混在しており、ともに正確な組成を表わすものではないが、縄文時代前中期に位置付けられる本遺跡の傾向を追うこととする。

1号住居址出土の石器には多くの器種があり、打製石斧は出土しなかったが形態や大きさの異なる剥片石器が多く出土している。また、凹石は4号住居址と同様に側面の打撃痕が目立つ。2号住居址の石器では打製石斧に特徴があり、表面に自然面を残し抉り込みのあるやや撥形をしている。また、横剥ぎの剥片石器も多い。また、石鏃は1～4号住居址と同様に基部がやや丸みを帯びた三角鏃がある。3号住居址は小さな剥片はやや出土したが製品は少なく、2号住居址に類似した石斧と荒い剥離の礫器が特徴である。4号住居址からは多くの石器や剥片が出土したが、剥片石器が豊富で縦剥ぎのものが目立ち、大小の差もある。また、石核2点と接合する剥片がまとまって出土しており、住居址内での石器製作が推定される。また、小形打製石斧と鍬形鏃もある。

1号住居址と2～4号住居址は時期差があるが、技法や組成にほとんど変化はなく、ともに剥片石器が多用されている。

包含層からは土器片とともに多量の石器や剥片・石片が出土しており、器種も多様で豊富であ

るが、群としてのまとまりや器種によるまとまり等は見られなかった。器種としては打製石斧・磨製石斧・石鏃・石匙・ドリル・剥片石器・凹石・石棒・玦状耳飾等があり、石錘は見られなかった。

打製石斧は量的には短冊形が多く、次に小形の打製石斧である。他の形態としては撥形や分銅形をしたものや、基部が極端に尖るものや石槍状のもの、小形で台形状をしたクサビ状のものがあるが数は少ない。短冊形石斧は基部に比べ刃部がやや開くが、刃部はほとんど丸みを帯びている。小形の石斧はやや撥形を呈し微妙な形態差が見られる。これらの石斧の刃部には刃こぼれや摩耗痕が多く見られ、短冊形や撥形をしたものには折れたものが目立つ。

磨製石斧は2点が出土しただけでありともに乳棒状をしている。刃部には使用による刃こぼれが激しい。

石鏃には三角鏃と茎部の扶れ込みの浅い鋏形鏃とがあり、有茎の石鏃は出土しなかった。三角鏃のやや大形のもの丸みを帯びており、小形ものは直線的である。

石匙には横形と縦形がほぼ同様の比であり、すべてやや小形である。横形の刃部は先端部に平らに付けられているが、縦形の刃部は側面から先端部にかけてすべてに付けられている。

ドリルには柳葉状のものと摘み部を作り出したものがある。また、刃部を「コ」字状に作り出した削器状の剥片石器もある。

剥片石器には横剥ぎと縦剥ぎのものがあり、ともにやや大形でやや荒い剥離を加えたものと、素材の形状を生かした丁寧な作りのものと、素材に簡単な剥離を加えただけのものがある。横剥ぎのものは縦剥ぎのものに比べ、定形化し作りも丁寧なものが多い。また、刃部の付け方は石匙と同様に、横剥ぎのものは先端部を刃部とし、縦剥ぎのものは側面を刃部とするものが多く先端部も使用している。剥片石器の中には不定形で簡単な剥離を加えて使用したものや、極めて小さい石器もある。

石核は4号住居址出土のものを含め、形態や剥離の方向に規則性を持たないものが一般的であるが、一点だけ平坦な打撃面を作り剥片を取っているものがあつた。

凹石は表裏面ともに非常に良く磨れており、表裏面の凹みの他に側面に多くの打撃痕があるのが特徴である。

本遺跡出土の石器の中で量的には剥片石器が圧倒的に多く、次に打製石斧・石鏃の順となる。剥片石器は直接の生産用具ではないが、日常的に多用されていたものと考えられ、本遺跡の大きな特徴である。
(下城 正)

10 前中原遺跡の平安時代の遺物について

平安時代の土器類には須恵器と瓦があり、5号住居址、1号土壇、2区C-03グリッド内からそれらの出土を見ている。このうち2区C-03グリッドからはまとまった出土があり、その状況は、近接して同期の遺構は存在せず、遺構こそ判然としなかったものの、その一括性は高いと

推測され、5号住居址、1号土坑についても一括遺物として認定された。須恵器は前例の3遺構から出土している。それらの形態を坏類で通観すれば、口径に比べ底径の小さい点、器高の低いことなど、いずれにも共通し、相互の同時性は高いと見なされる。この同時性が高いと見なされることをふまえれば、これらの一群を同時元的に扱うことができるので、このことを前提にして以下、検討を加えたい。

須恵器の焼成は、5号住居址、1号土坑の例は酸化気味で、5号住居址出土の4点には燻がおよんでいる。2区C-03グリッド出土の坏・埴・耳皿(第128図6~8)は還元気味であるが、瓶・羽釜(1~5)類は酸化気味である。坏・埴類は器高の低い点に器形上の特徴があり、轆轤目の浅い点、右回転の糸切りを行なった点に技法上の特色がある。羽釜は、鏝部の貼付位置が高く、突帯は低い。これら須恵器群の形態上の特色は、県内の編年観、清里・陣場遺跡^{注1}にしたがえば、第3期類に相当するため、10世紀前半の年代があたえられる。

瓦類は、2区C-03グリッドから2点の出土があり、形態・外面の整形技法などは共通している。特に注意されるのは、10に紐作り痕の認められる点にある。紐作りの製作は、県内において、利根・吾妻地域に比較的多く存在し、地域における伝統的な技法であり、東・西毛地域の一部にも認められる。いずれにせよ造瓦技法の中では特異例である。また、須恵器からみた10世紀前半の年代は瓦類にも共通するのであれば、古代上野における、造瓦の中では、終末期に当たっている。

当遺跡は月夜野窯跡群の一角にあり、遺跡地より南西側約50mの同一台地、南裾部に水沼A支群があり、水田地帯をへだてた南方約80mの丘陵端部に真沢A支群が存在するほか、5の窯跡支群を加えて月夜野窯跡群が構成されている。水沼A支群は、かつて県道の拡幅工事に伴って窯体が切断された際に発見^{注2}されたが、遺物が採集されることなく、擁壁に覆われてしまい、操業の年代など実態については不明である。真沢A支群は、昭和10年に、林道の改良工事に伴い窯体が切断された際に発見され、昭和16年に山崎義男氏によって資料紹介^{注3}がなされた。出土遺物に坏・甕、特異な器種に脚付羽釜・脚付甕などがあり、その形態から10世紀前半の操業が考えられ、当遺跡の平安時代遺物群の相対年代に近接している。水沼A・真沢A支群と当遺跡は至近距離にあり、しかも周辺に集落址を予知しうる土器の散布はないため、当遺跡における平安時代遺構の性格を窯業生産に伴うと類推することも可能である。このことは、同じく上越新幹線で調査された藪田遺跡における、平安時代遺構群の性格づけと共通する側面がある。群馬県内にあっては、太田金山窯跡群と工人集落と想定された只上遺跡^{注4}、大道東遺跡^{注4}に続く事例として、今後、窯業生産の形態を検討するうえで重要な存在となろう。(大江正行)

注1 中沢悟「出土土器の分類と編年」『清里・陣場遺跡』((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)1981

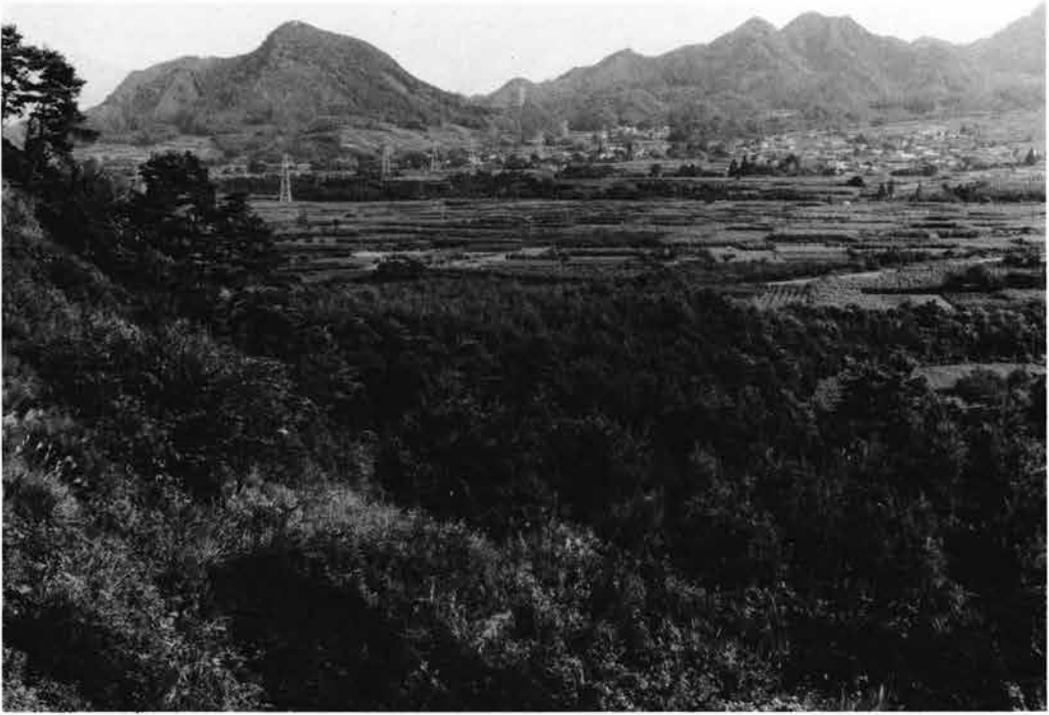
注2 筆者らは窯体を実見している。窯体の部位は判然としませんが、窯址としてしっかりした焼け具合で、天井部分まで残存し、このかぎりにおいては、地下式窯体であった。

注3 山崎義男「上野国利根郡月夜野二窯址について」『古代文化第12巻4号』1946

注4 倉田芳郎ほか「利根中流域左岸の古墳・歴史時代遺跡」『利根川』(九学会連合利根川流域調査委員会)1972

版 圖

十二原遺跡



1 遺跡遠景〔洞山より名胡桃平を見る〕（北より）



2 調査開始時の状況（北より）

図版 2



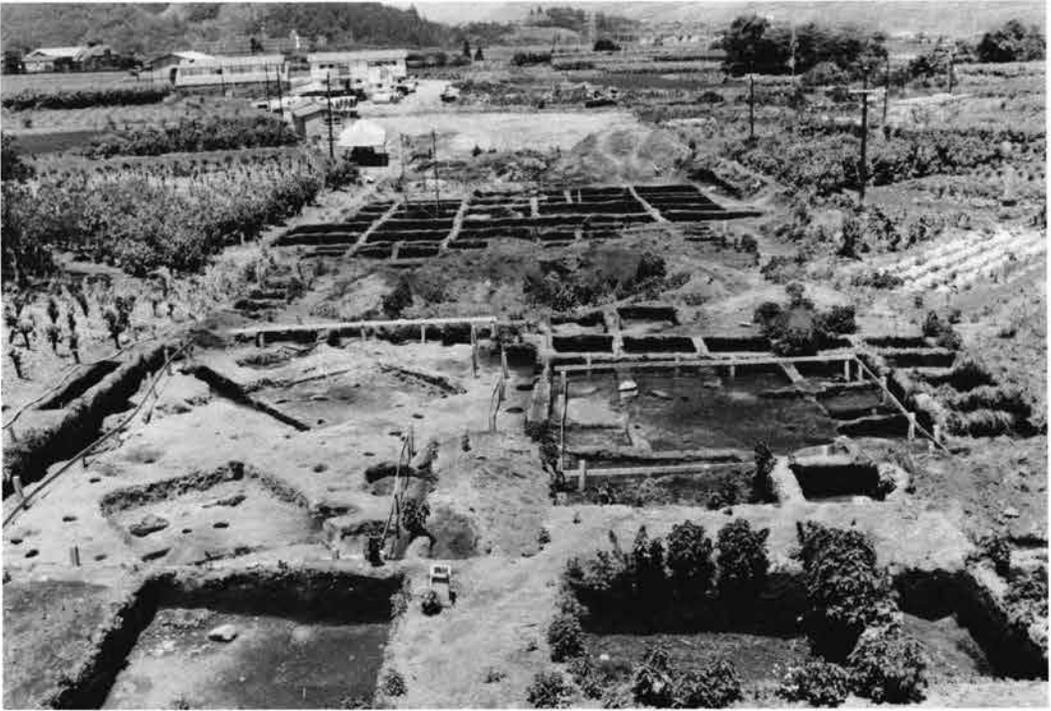
1 5区、グリッド
調査風景
(北西より)



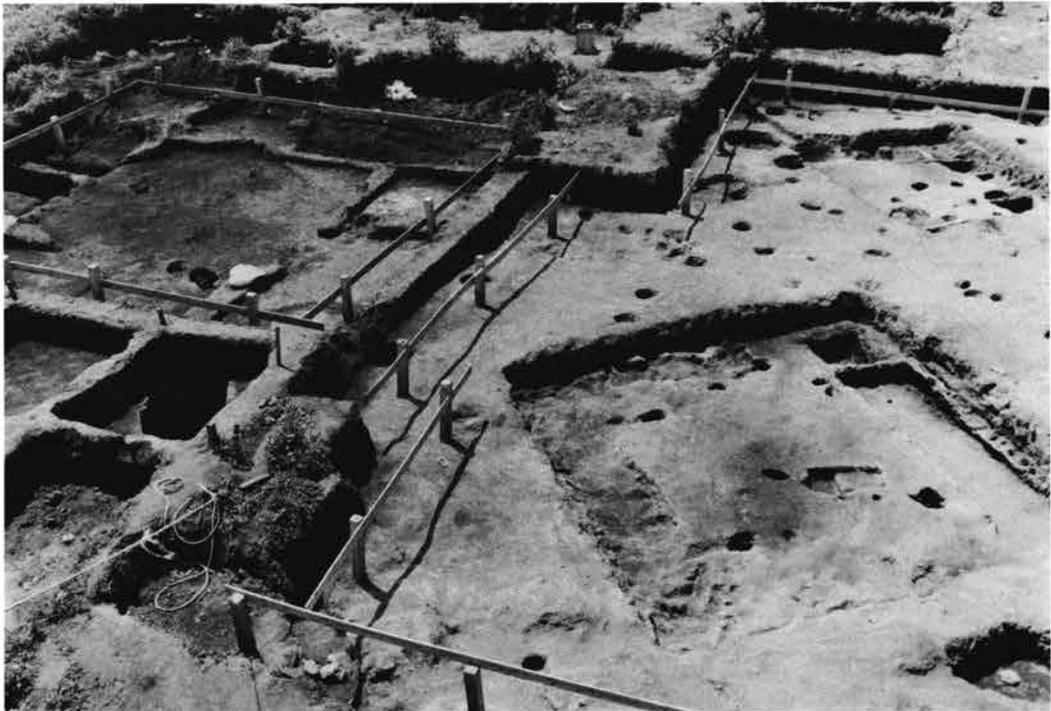
2 4区、グリッド
調査風景
(南東より)



3 5区、縄文
遺物散布地点調
査風景
(北より)



1 4区～5区、調査区全景（南より）



2 4区住居址群全景（北西より）

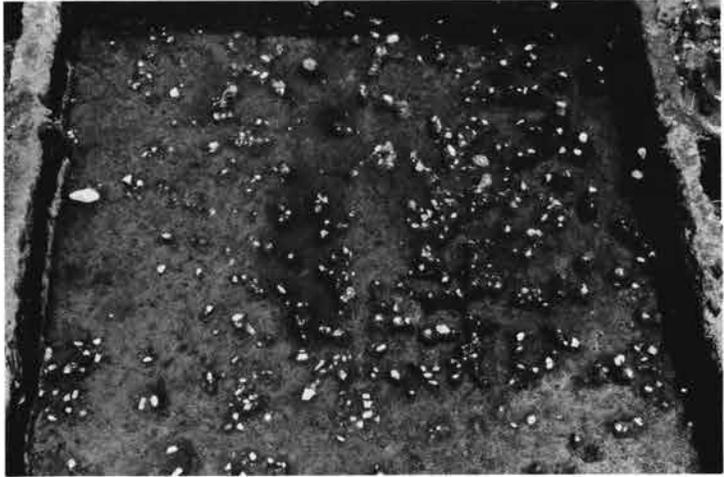


1 縄文遺物散布地点全景（北より）



2 同上、遺物出土状態（北より）

1 縄文遺物散布地
点遺物出土状態
(北より)



2 同上 (南より)



3 同上 (南より)





1 1号住居址遺物出土状態（南東より）



2 1号住居址（南東より）

- 1 1号住居址、炉
(東より)



- 2 同上、貯蔵穴
(北より)



- 3 同上、遺物出土
状態(北西より)





1 2・3号住居址
(南西より)



2 2号住居址、カマド
(南西より)



3 2号住居址、貯蔵穴
(南東より)



1 4号住居址（南西より）



2 同上、南半遺物出土状態（北より）



1 4号住居址 土器2・4出土状態 (東より)



2 同上、土器2出土状態 (南より)

- 1 4号住居址
土器1出土状態
(東より)

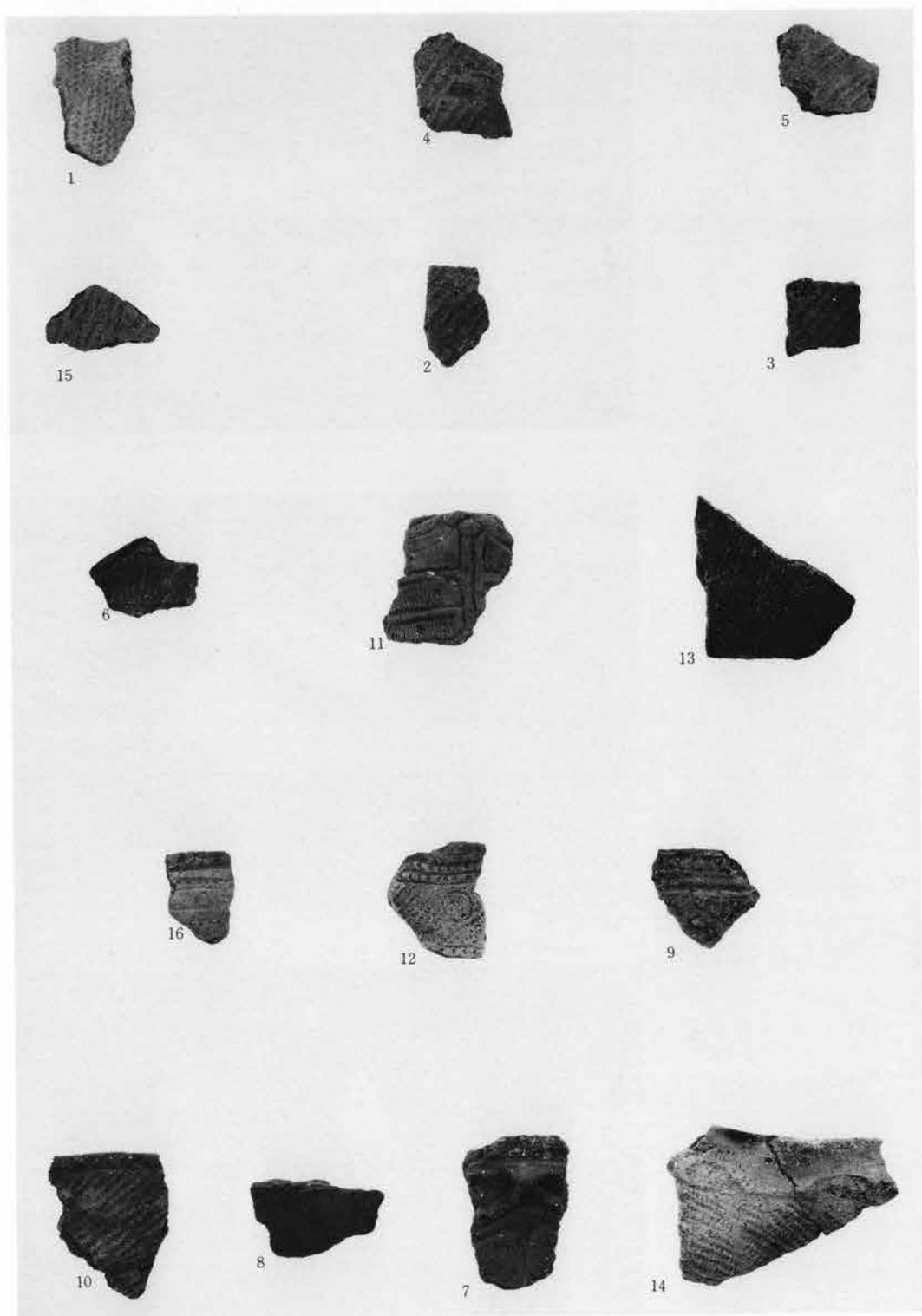


- 2 同上、土器3
(東より)

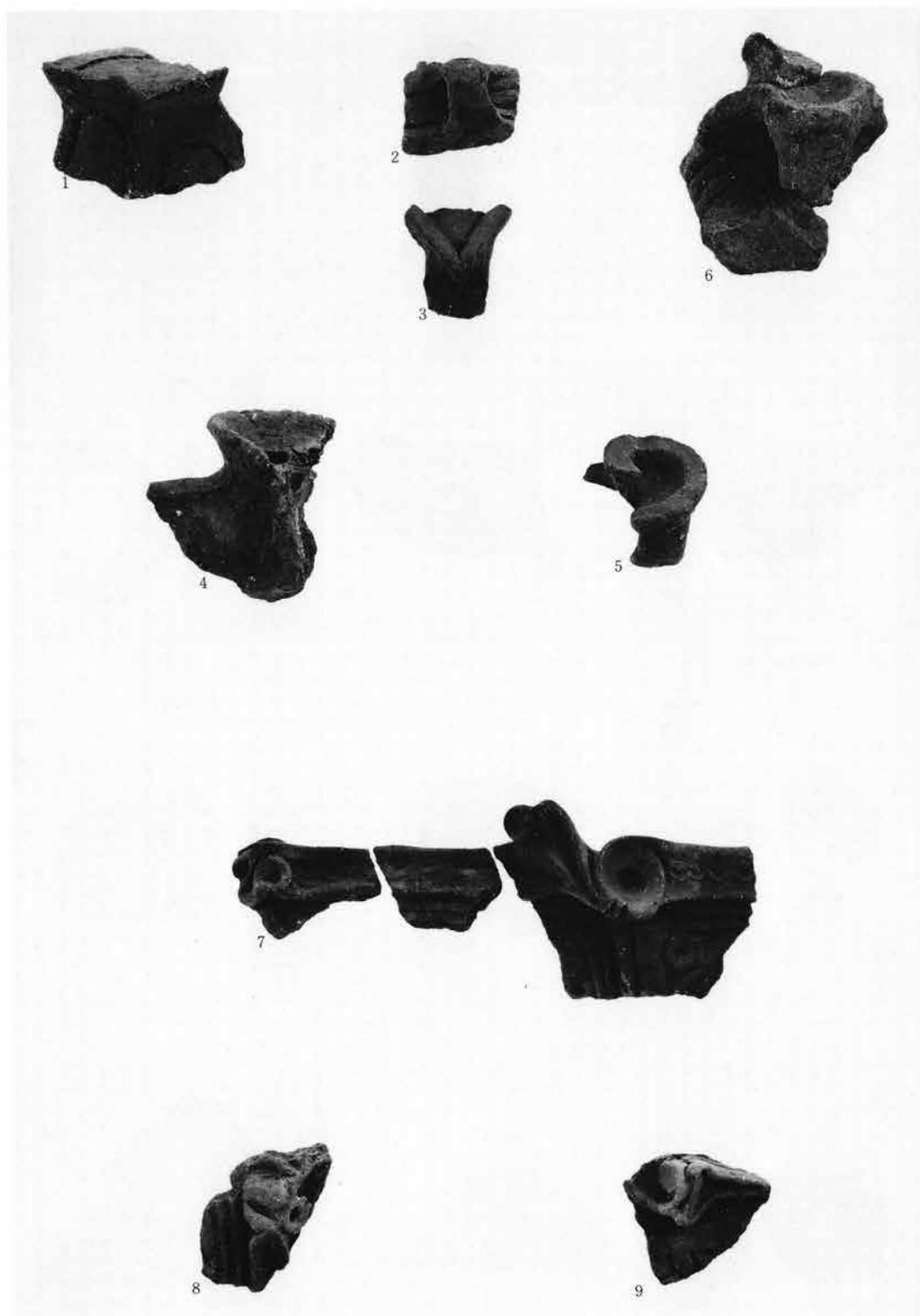


- 3 同上、石器出土
状態
(東より)





1 縄文時代 土器1 (約1/3)



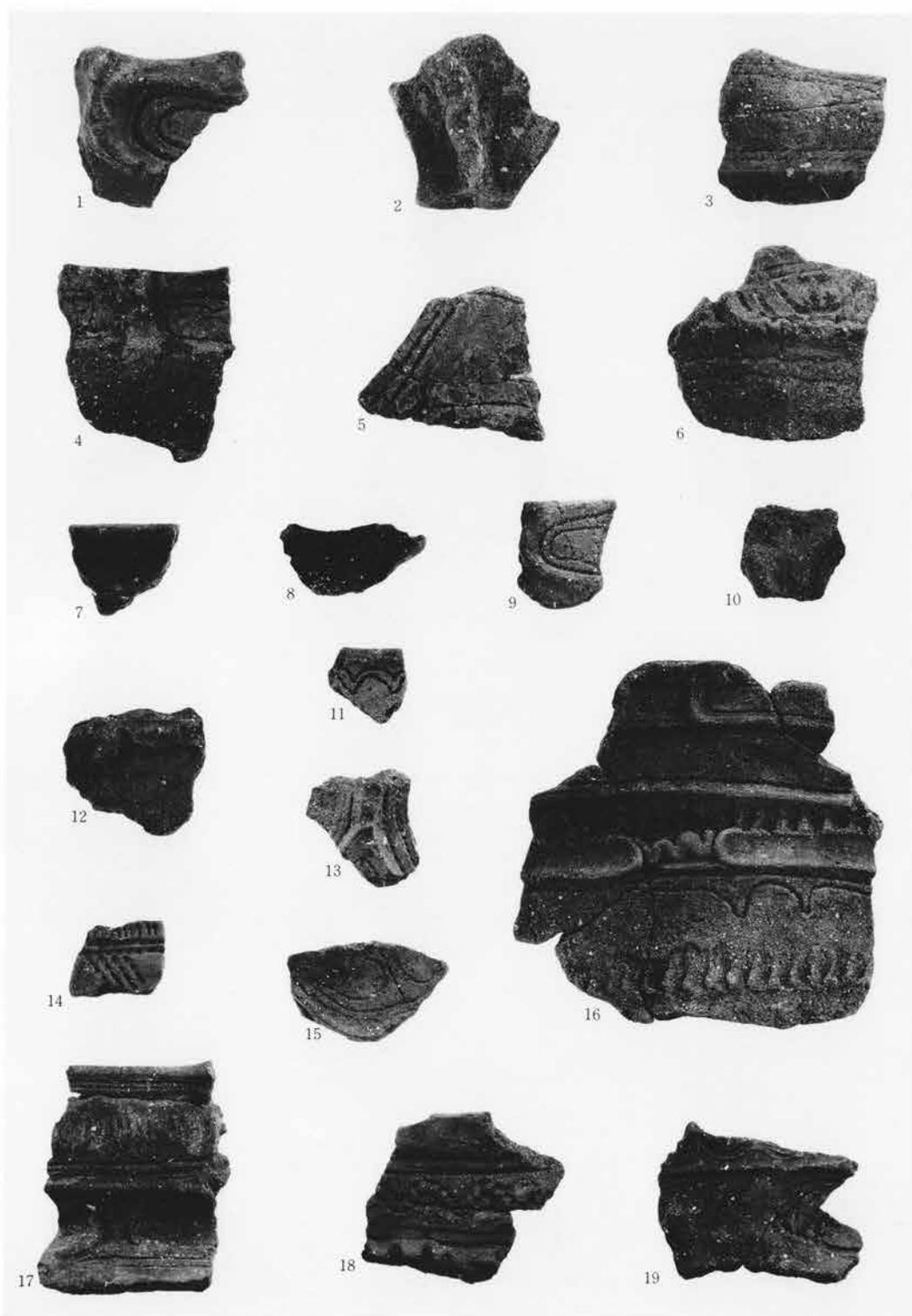
1 縄文時代 土器 2 (約 1/3)



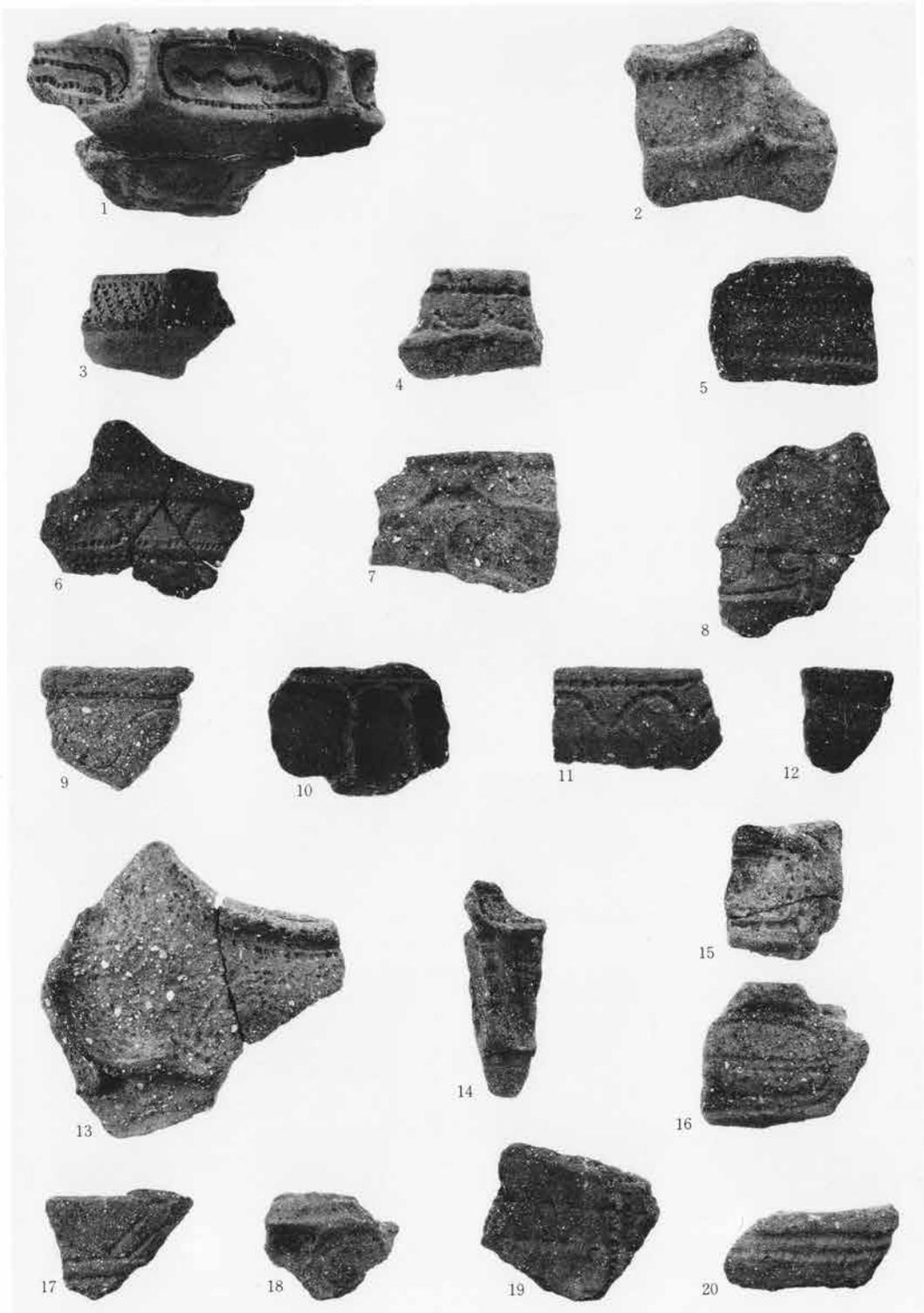
1 縄文時代 土器3〔表〕(約1/3)



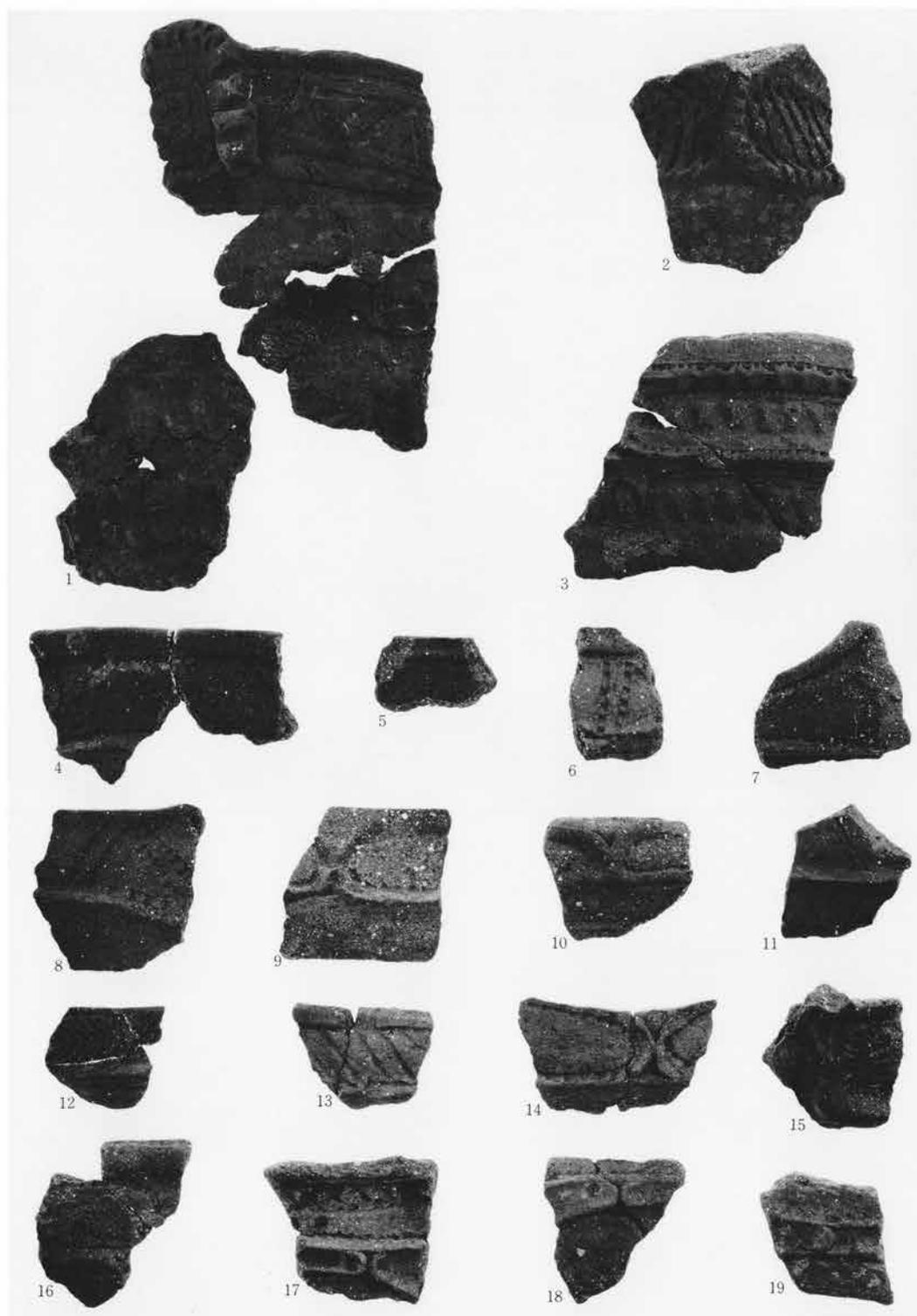
1 縄文時代 土器 3〔裏〕(約1/3)



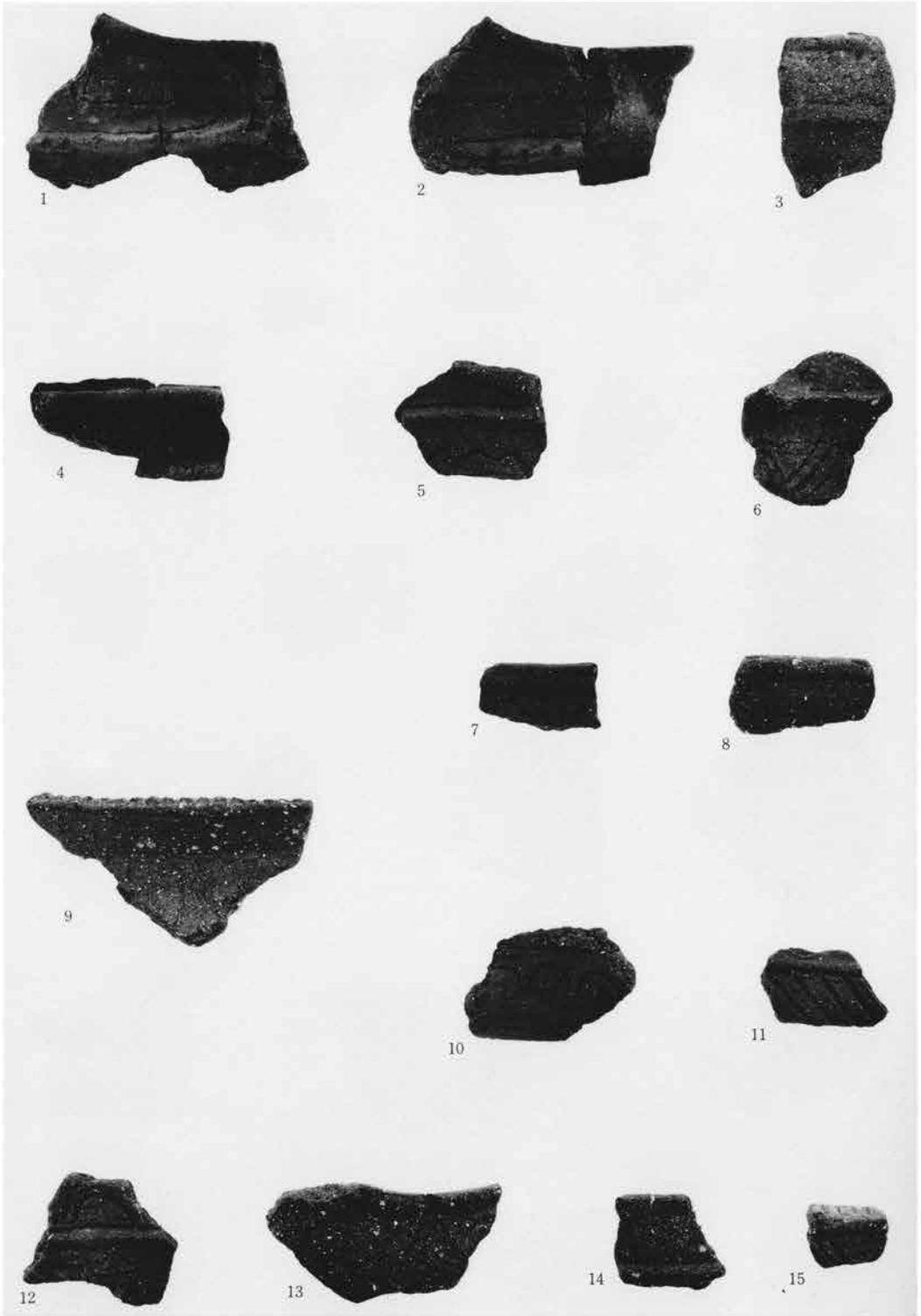
1 縄文時代 土器4 (約1/3)



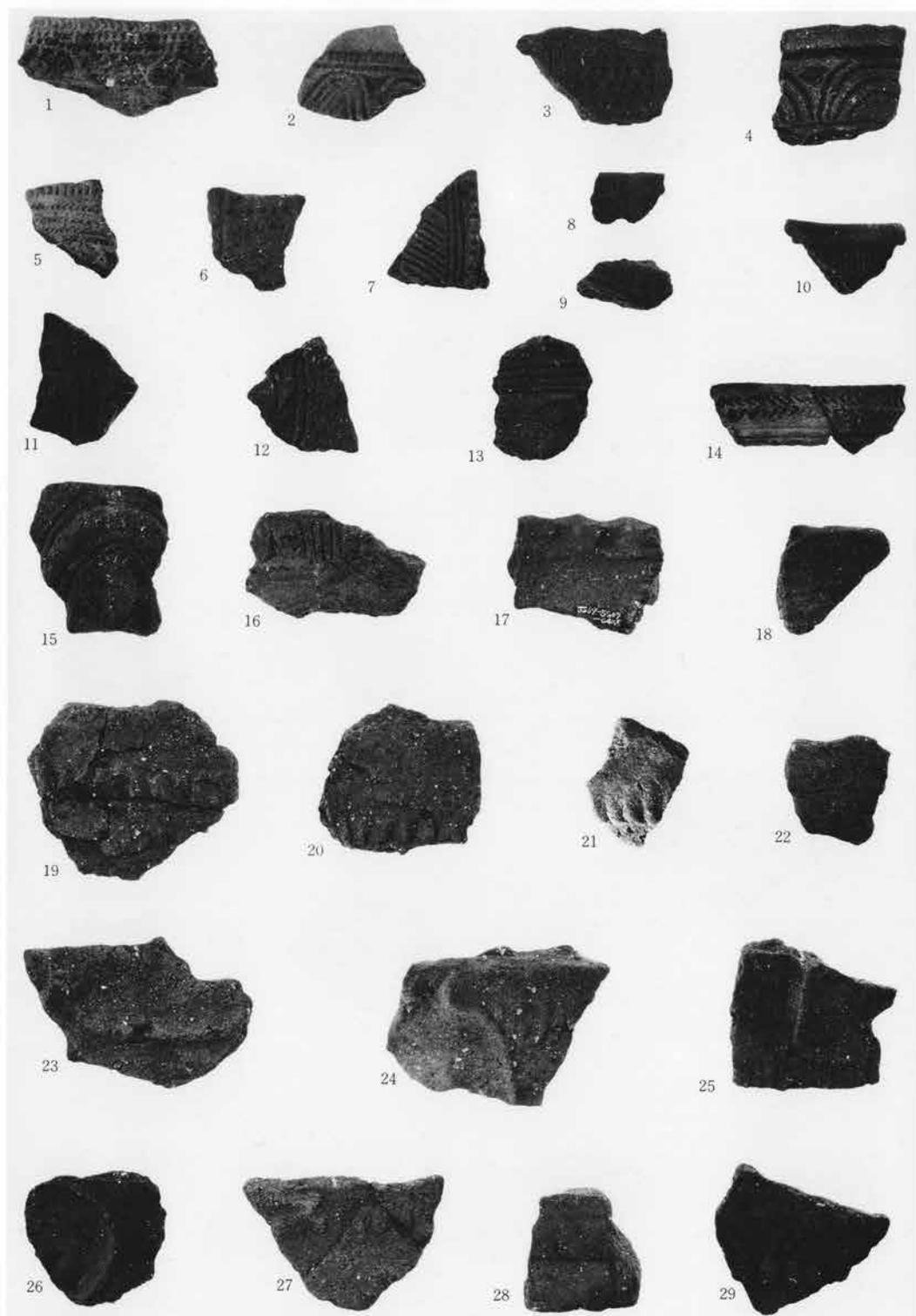
1 縄文時代 土器 5 (約 1/3)



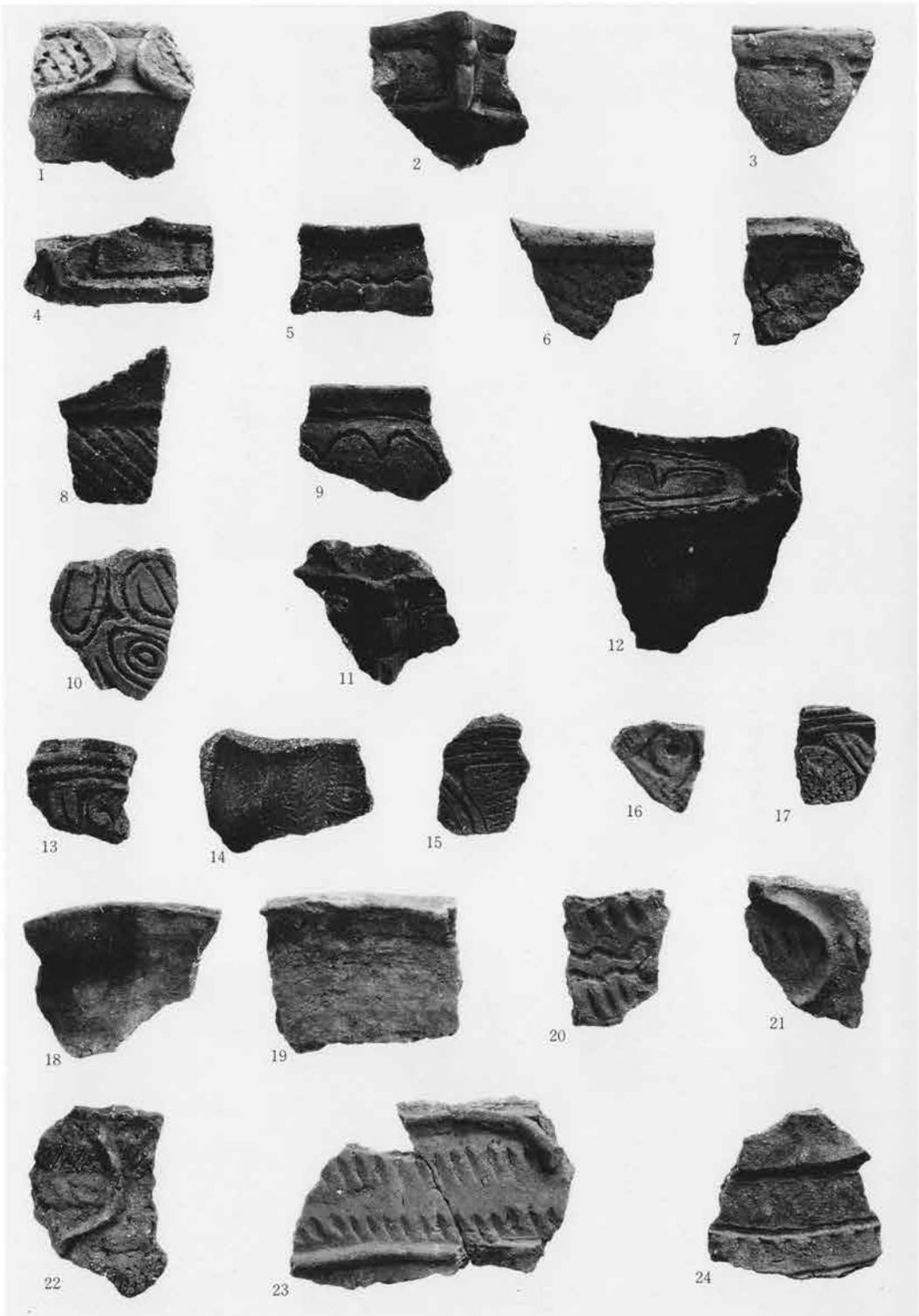
1 縄文時代 土器6 (約1/3)



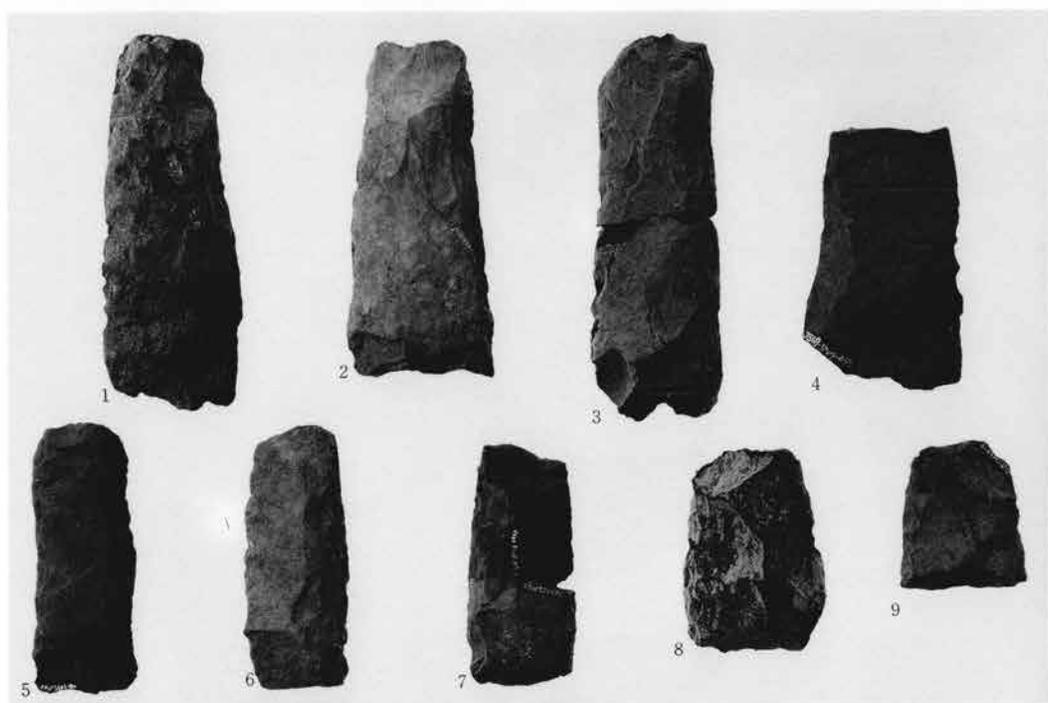
1 縄文時代 土器7 (約1/3)



1 縄文時代 土器 8 (約 1/3)



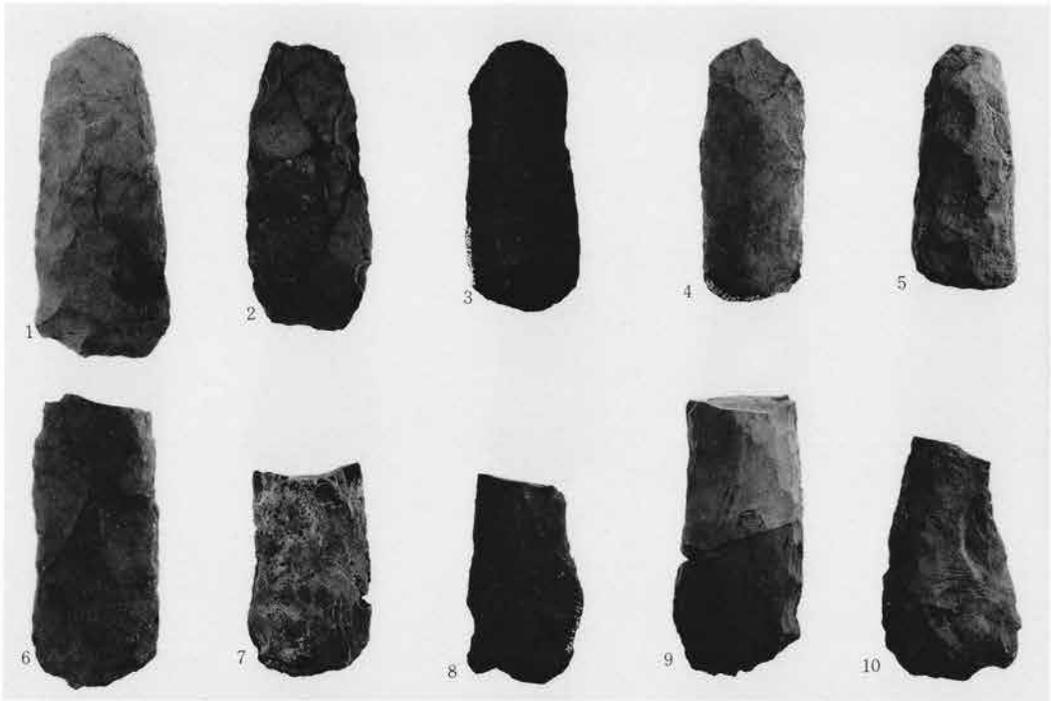
1 縄文時代 土器9 (約1/3)



1 縄文時代 石器1 (約1/3)



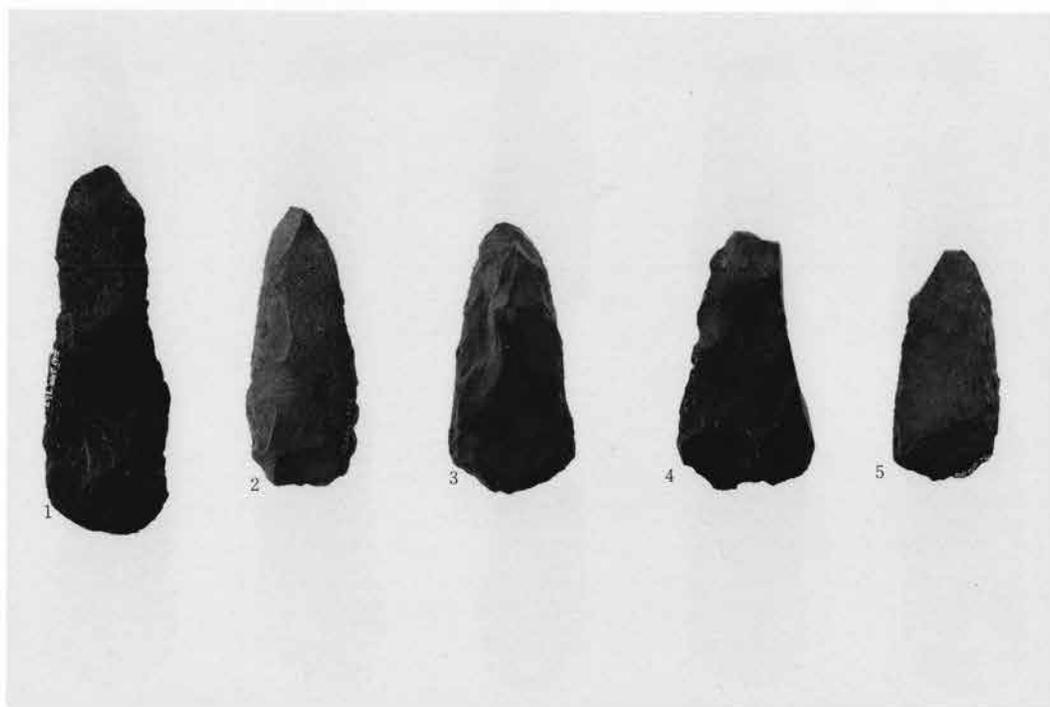
2 縄文時代 石器2 (約1/3)



1 縄文時代 石器3 (約1/3)



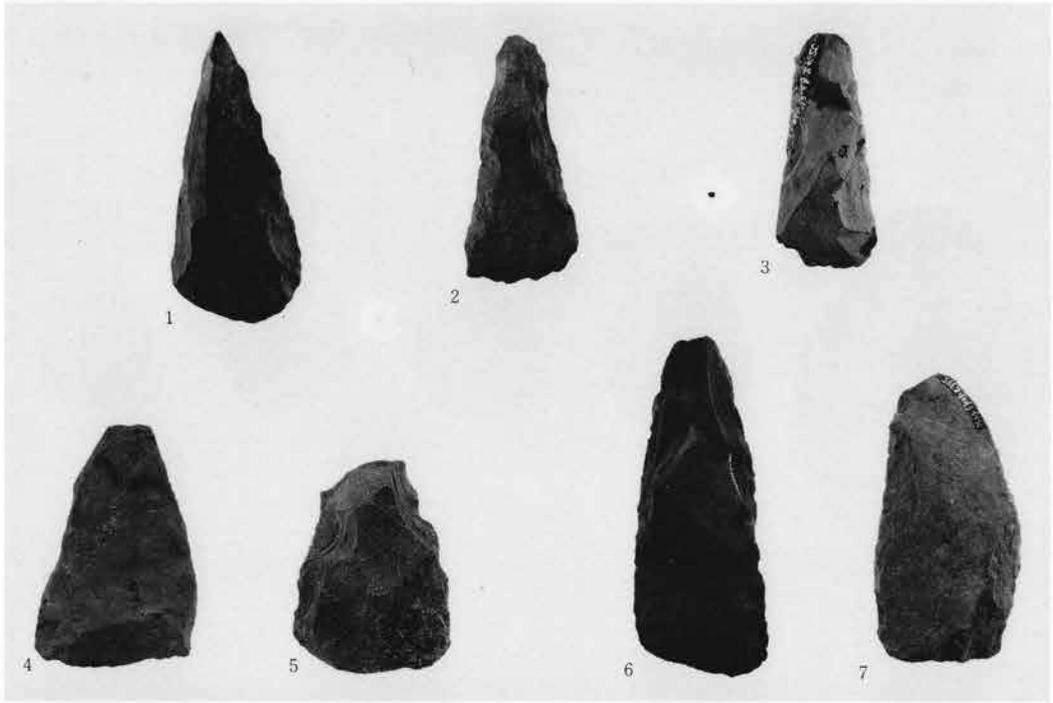
2 縄文時代 石器4〔1・2・4～7〕、石器5〔3・8～10〕 (約1/3)



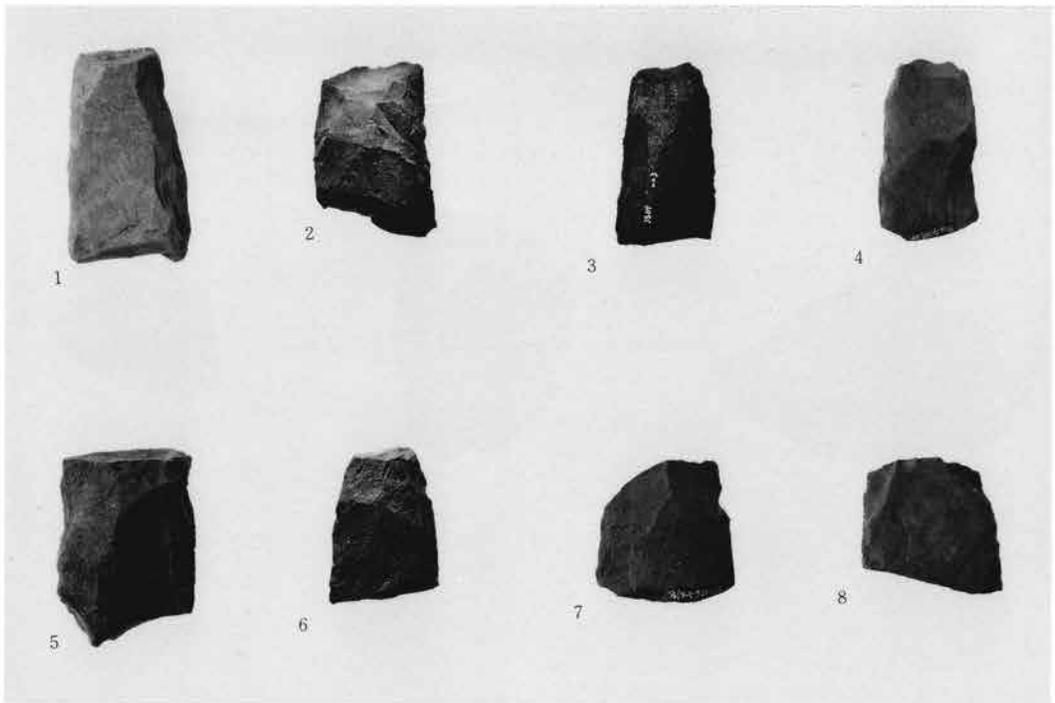
1 縄文時代 石器6 (約1/3)



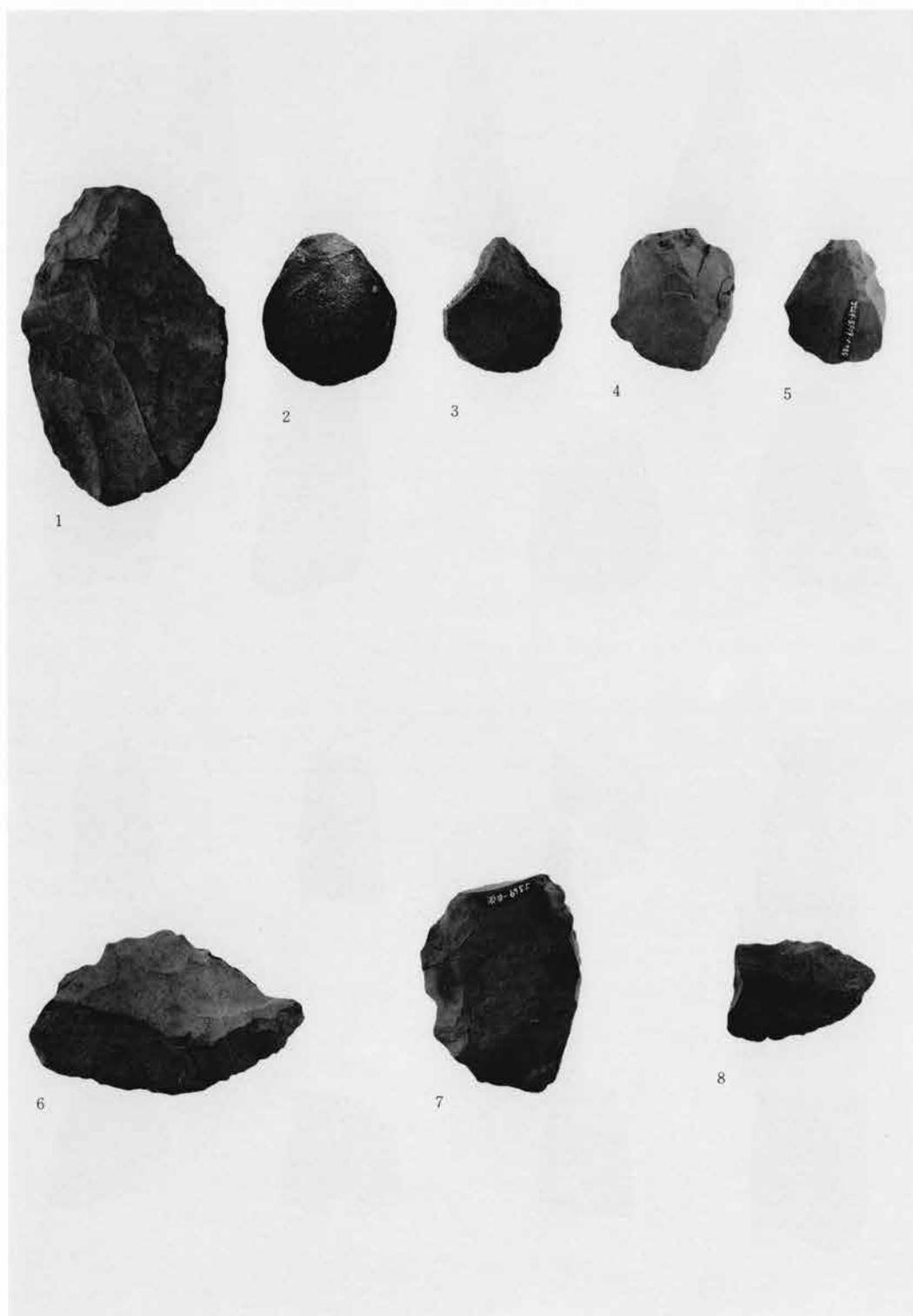
2 縄文時代 石器7 (約1/3)



1 縄文時代 石器8〔1～3〕、石器9〔4・5〕、石器10〔6・7〕（約1/3）



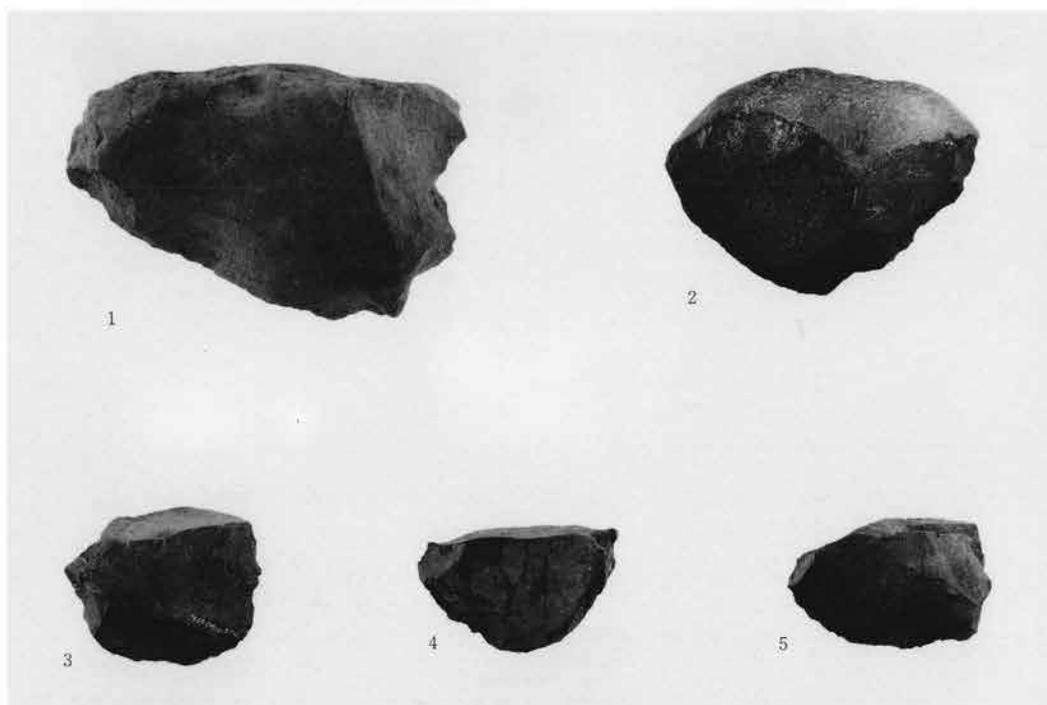
2 縄文時代 石器11（約1/3）



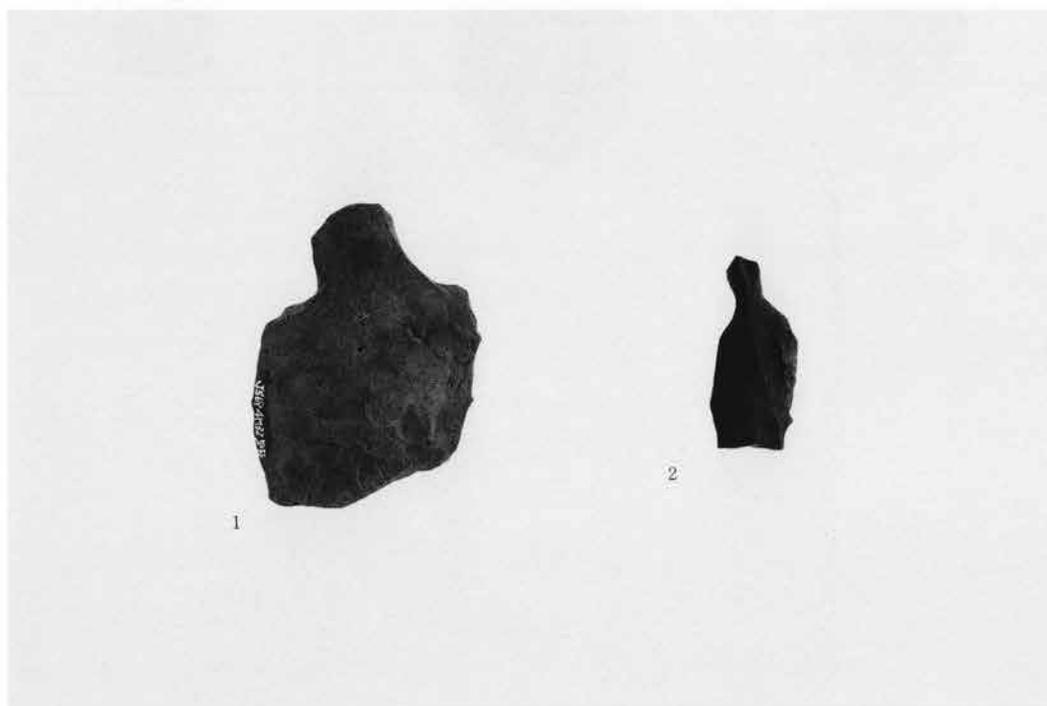
1 縄文時代 石器12 (約1/3)



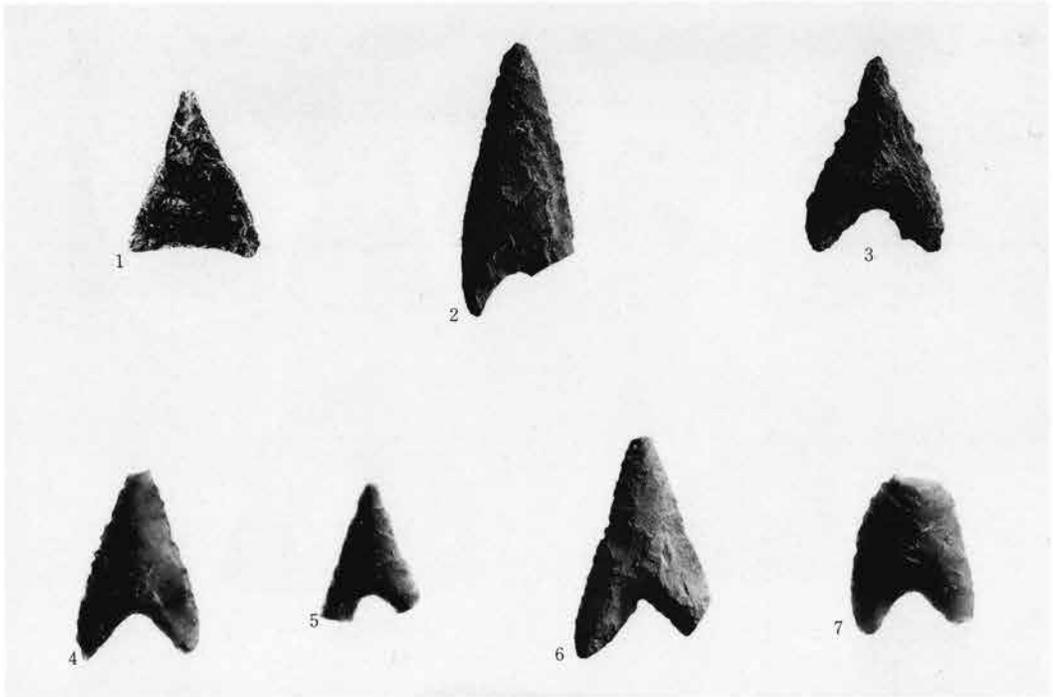
1 縄文時代 石器13 (約1/3)



1 縄文時代 石器14 (約 1/3)



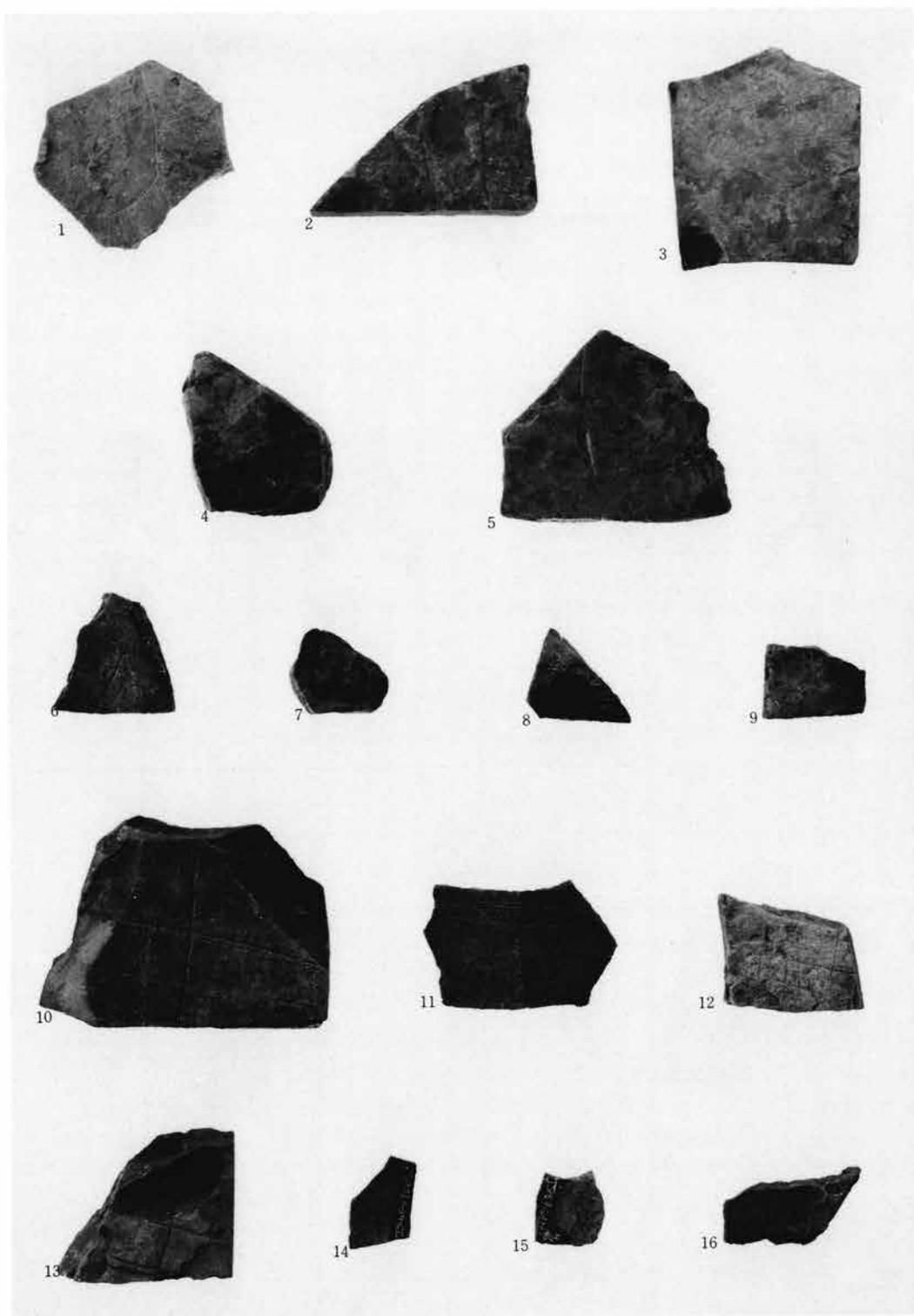
2 縄文時代 石器15 (約 1/2)



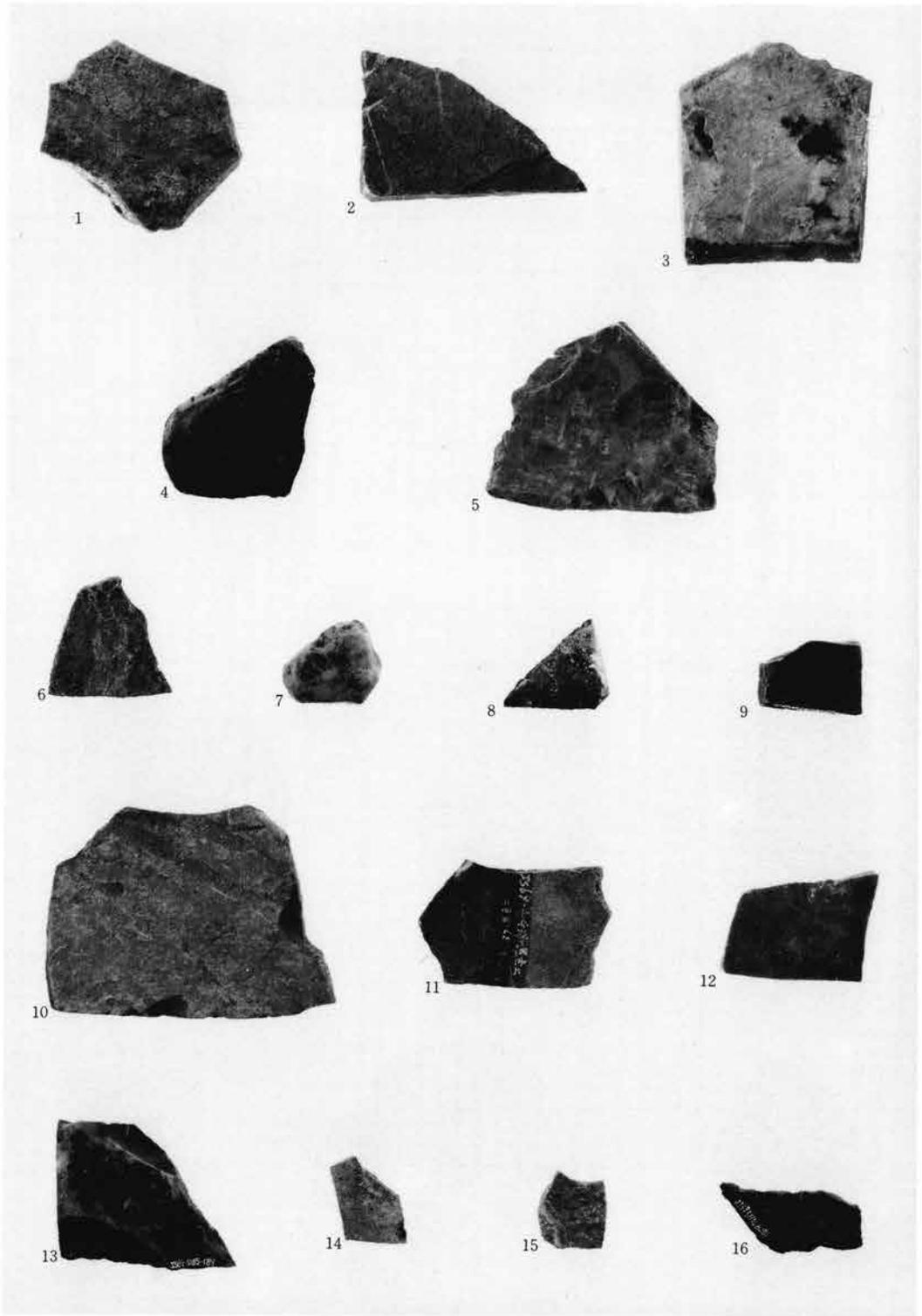
1 縄文時代 石器16 (約 1 / 1)



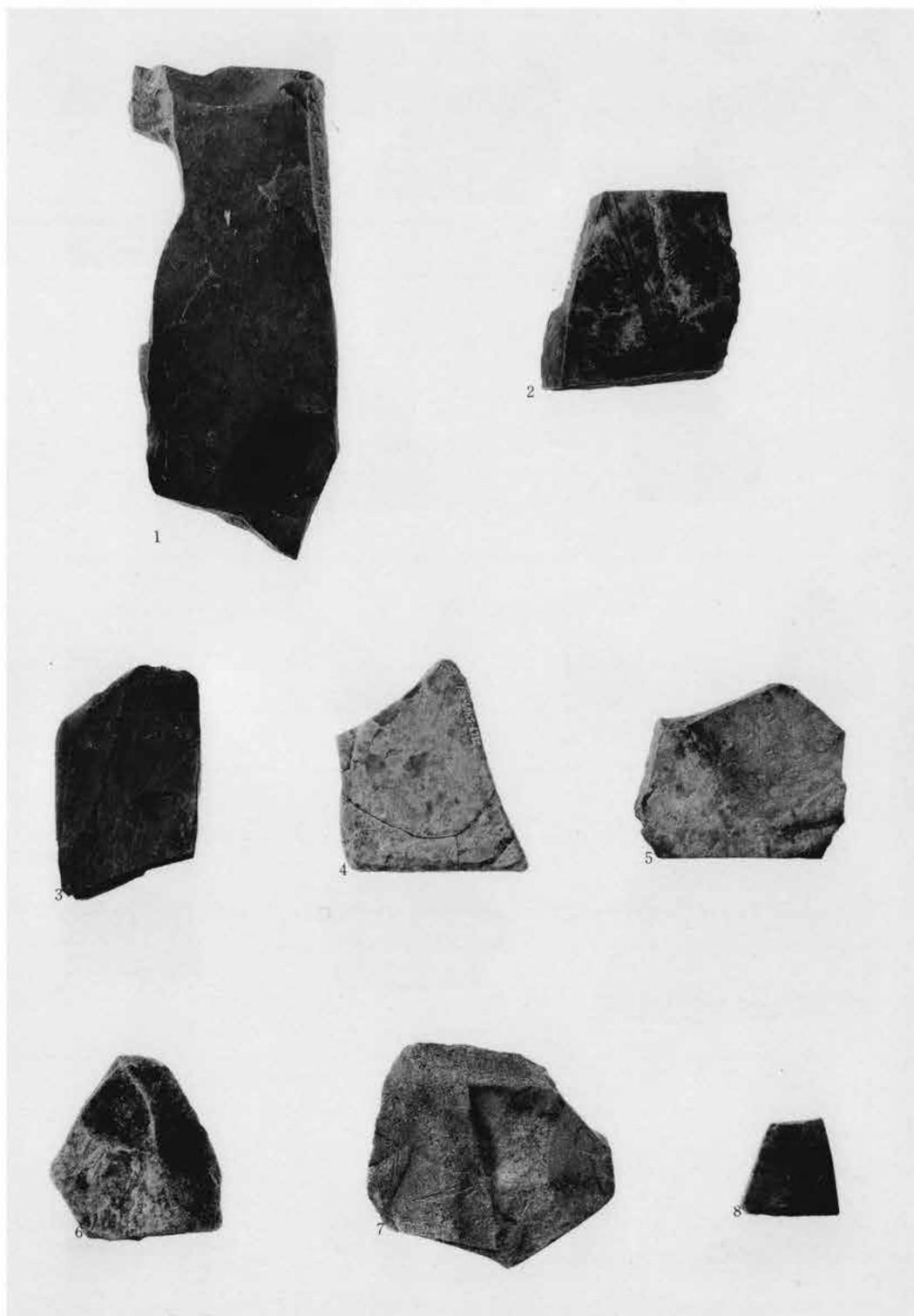
2 縄文時代 石器17 (約 1 / 3)



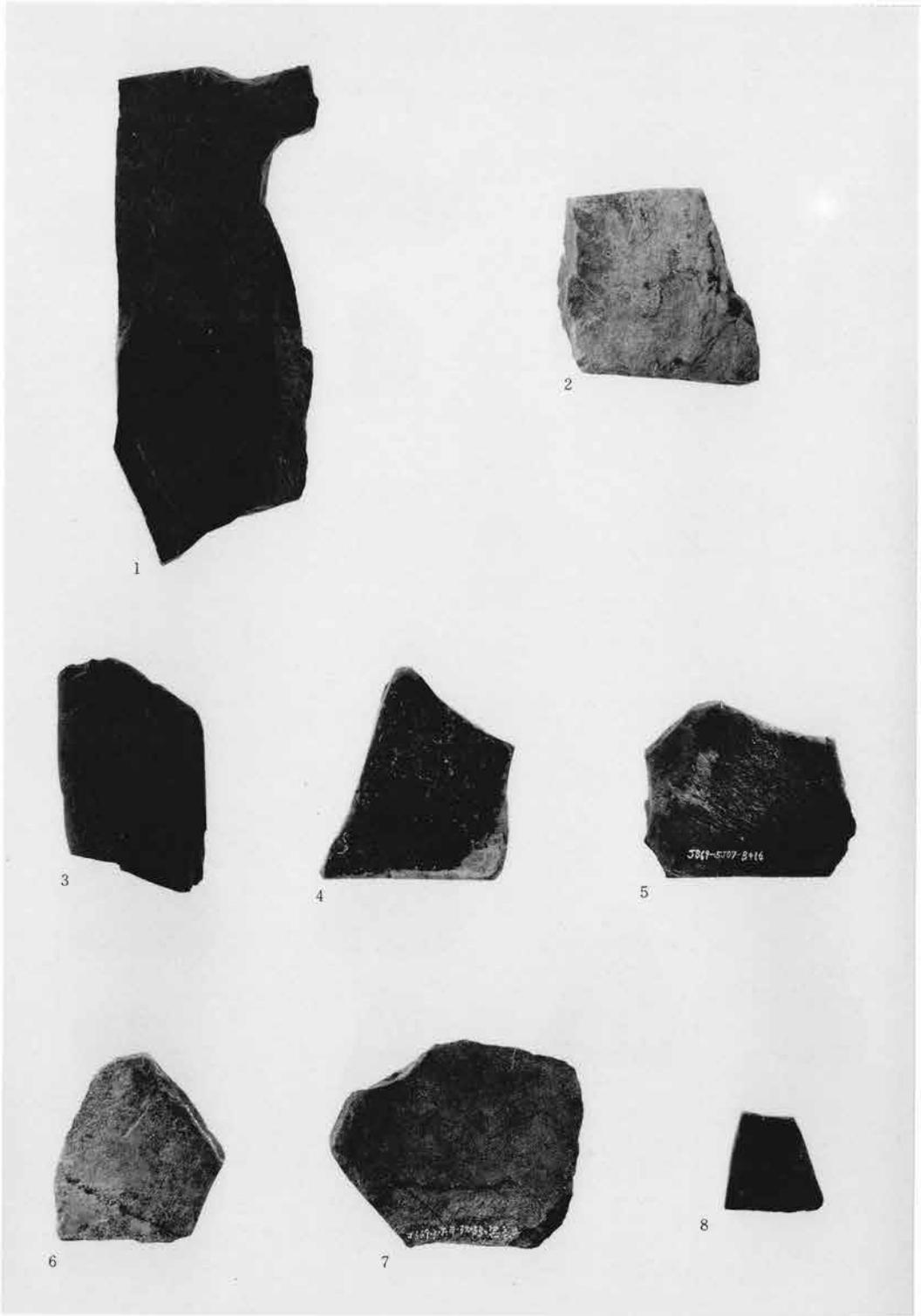
1 線刻石板1〔表〕(約1/2)



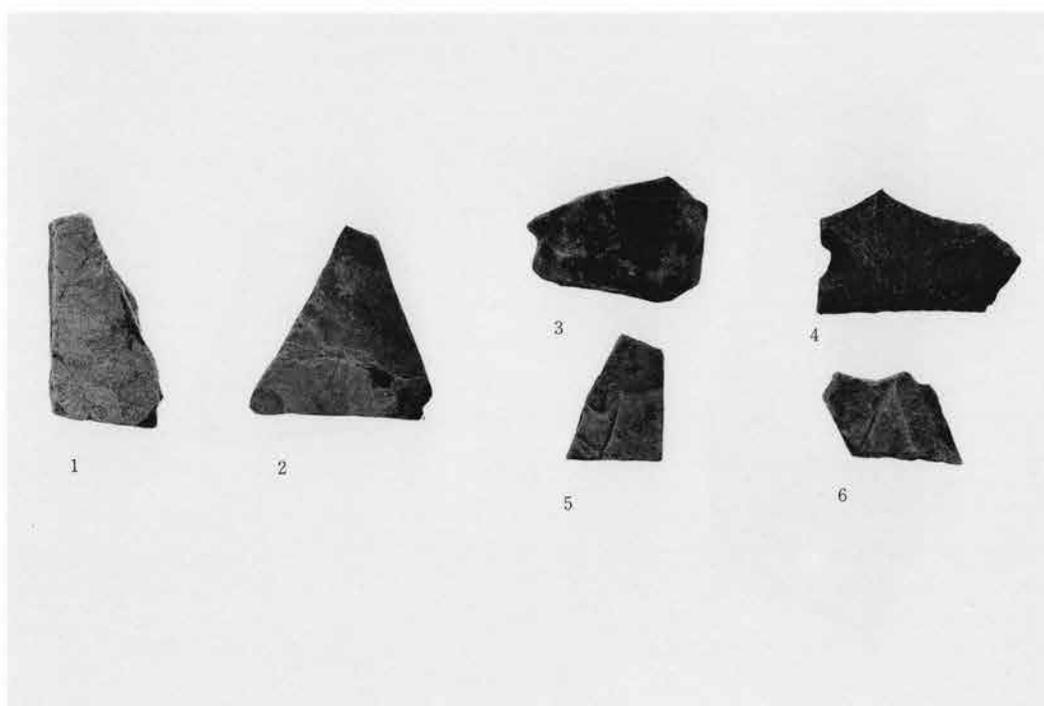
1 線刻石板1 [裏] (約1/2)



1 線刻石板2〔表〕(約1/2)



1 線刻石板2 [裏] (約1/2)



1 線刻石板3 〔表〕 (約1/2)



2 線刻石板3 〔裏〕 (約1/2)



1

1 4号住居址出土土器 (約1/4)



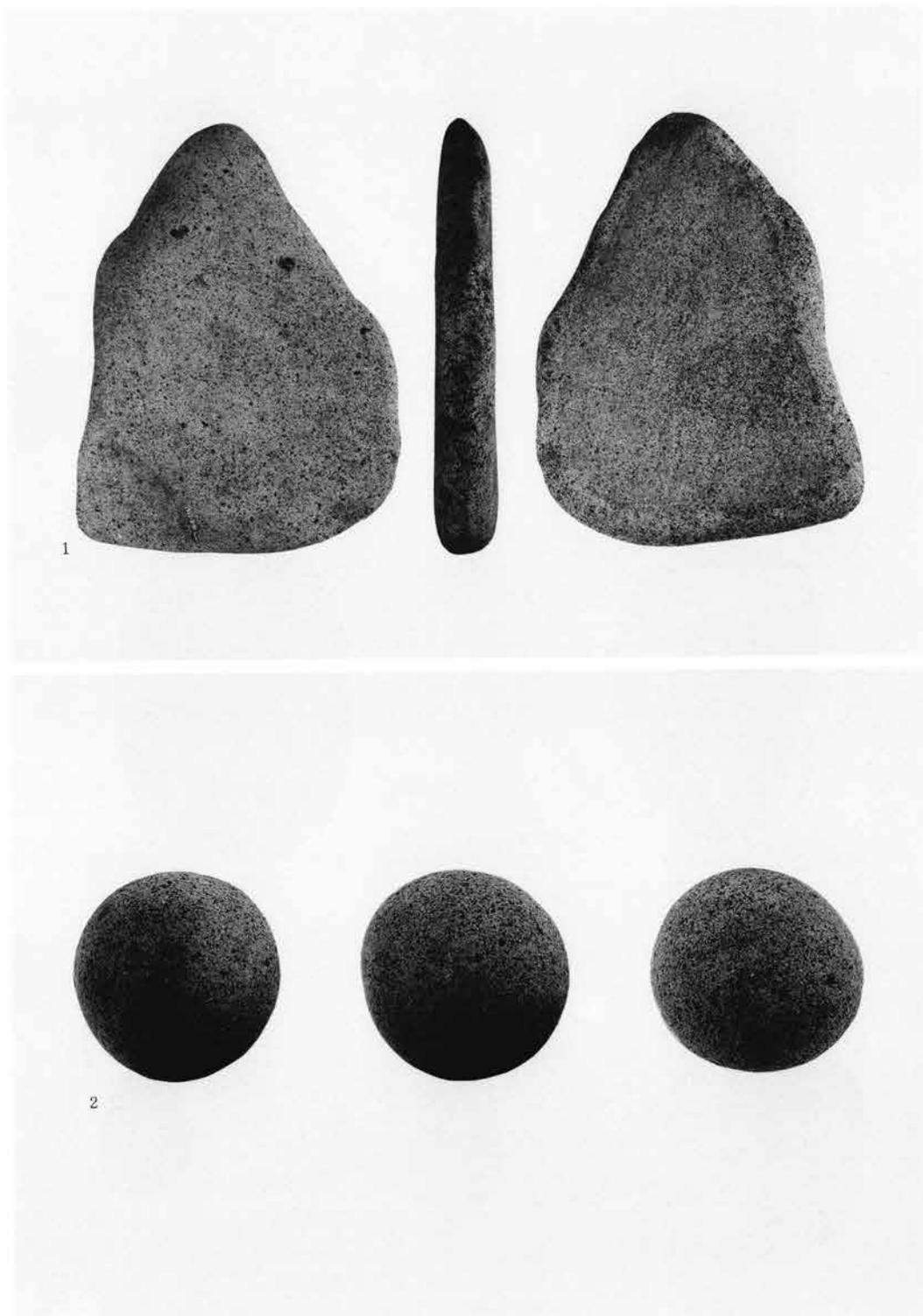
2



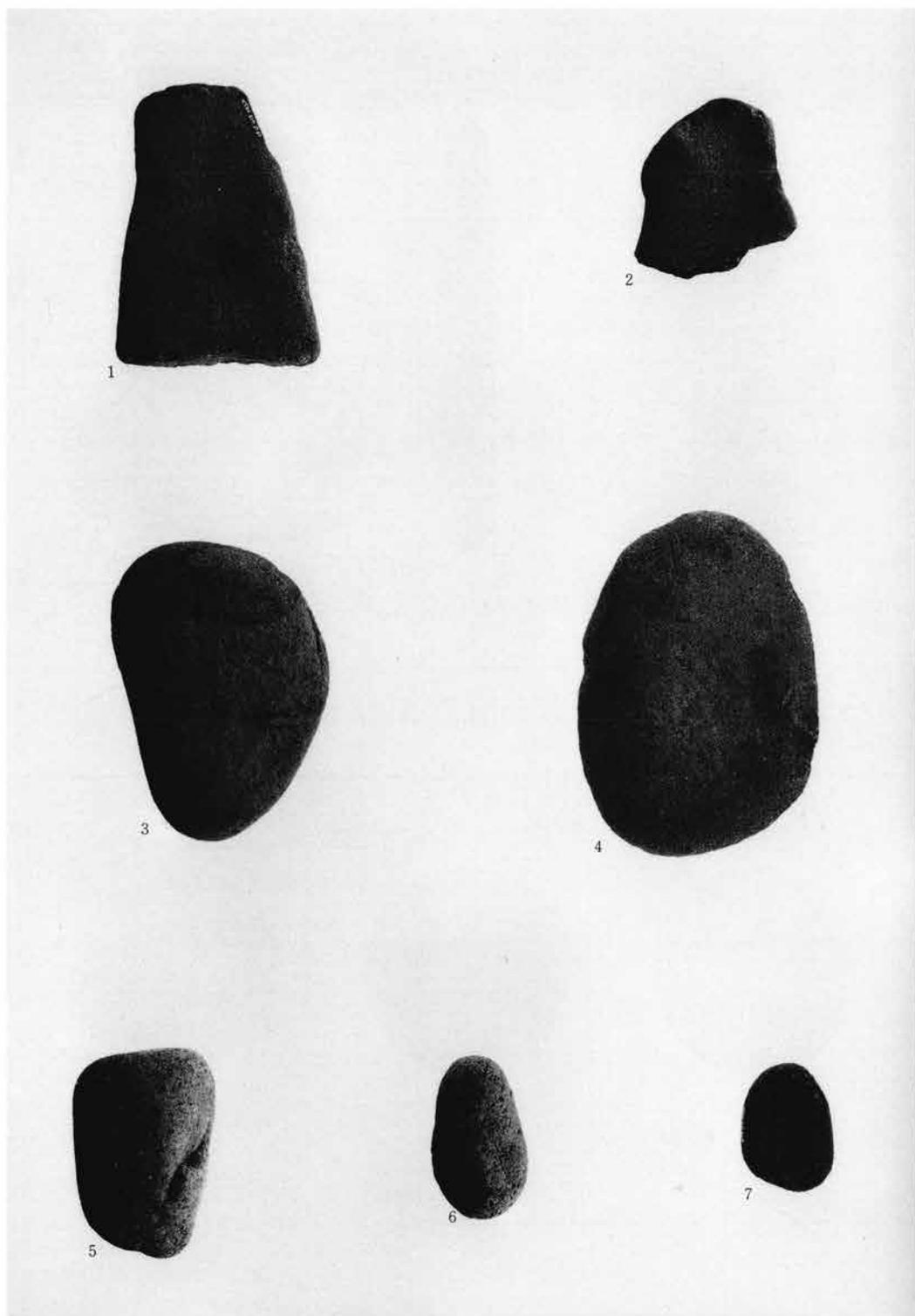
3



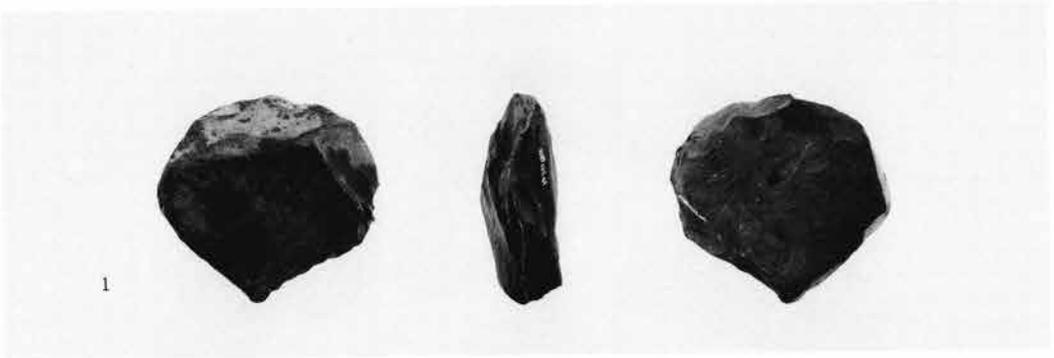
4



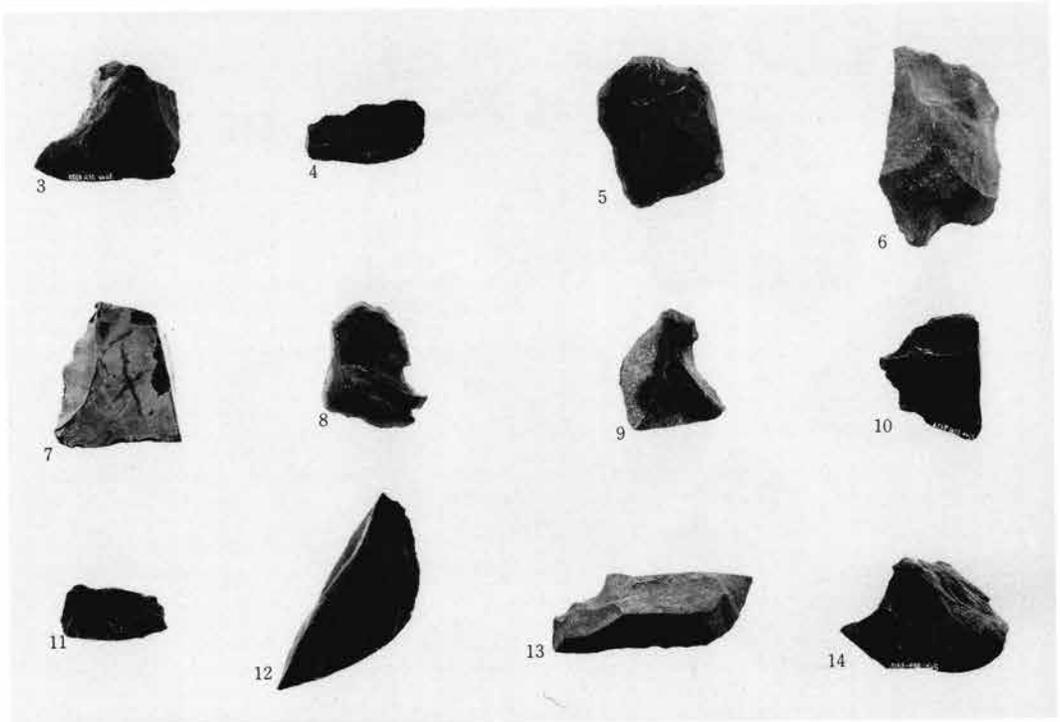
1 4号住居址出土石器1 (1=約1/8、2=約1/3)



1 4号住居址出土石器2 (約1/4)



1 4号住居址出土石器3 (約1/4)



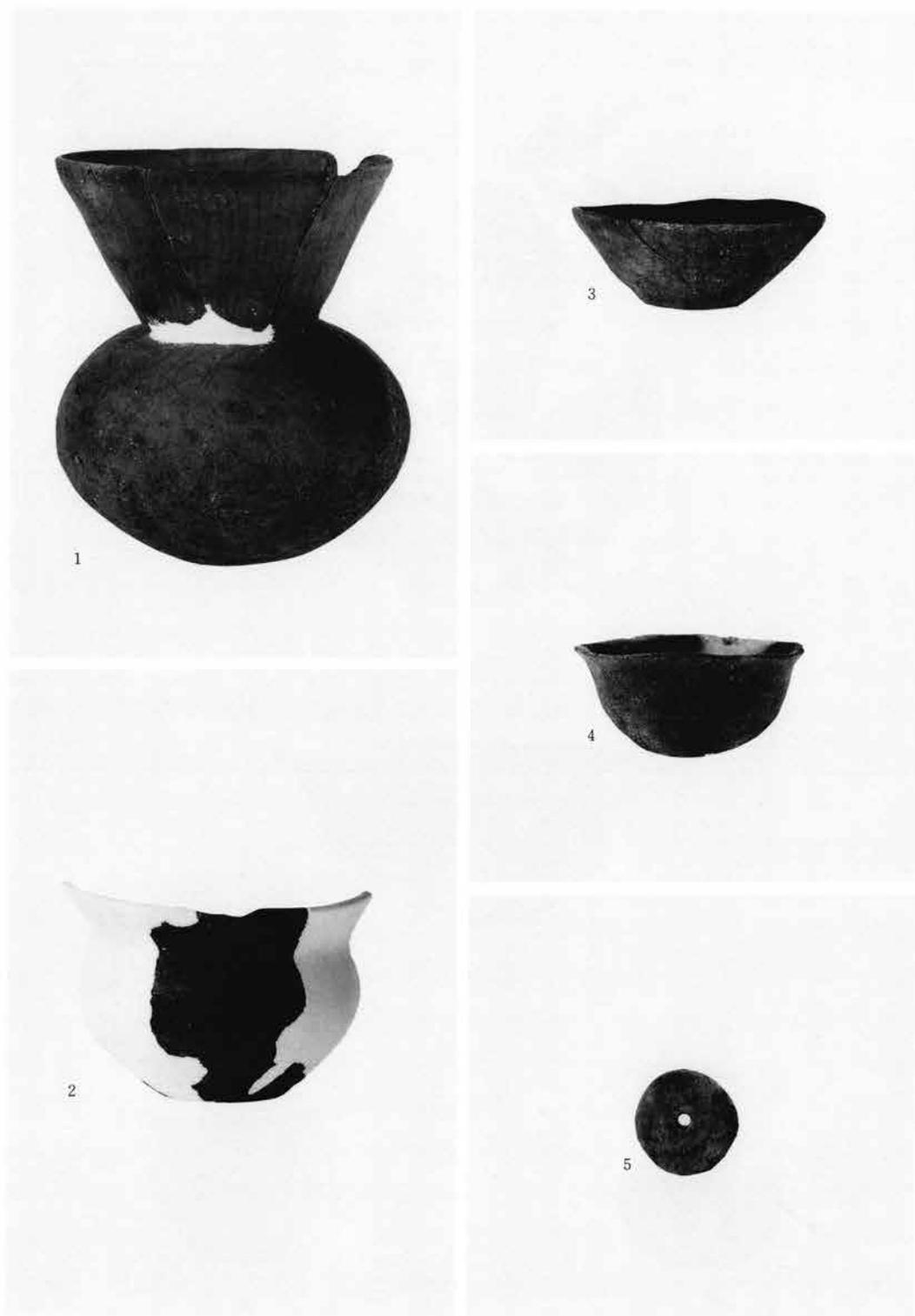
2 4号住居址出土石器3 (約1/3)



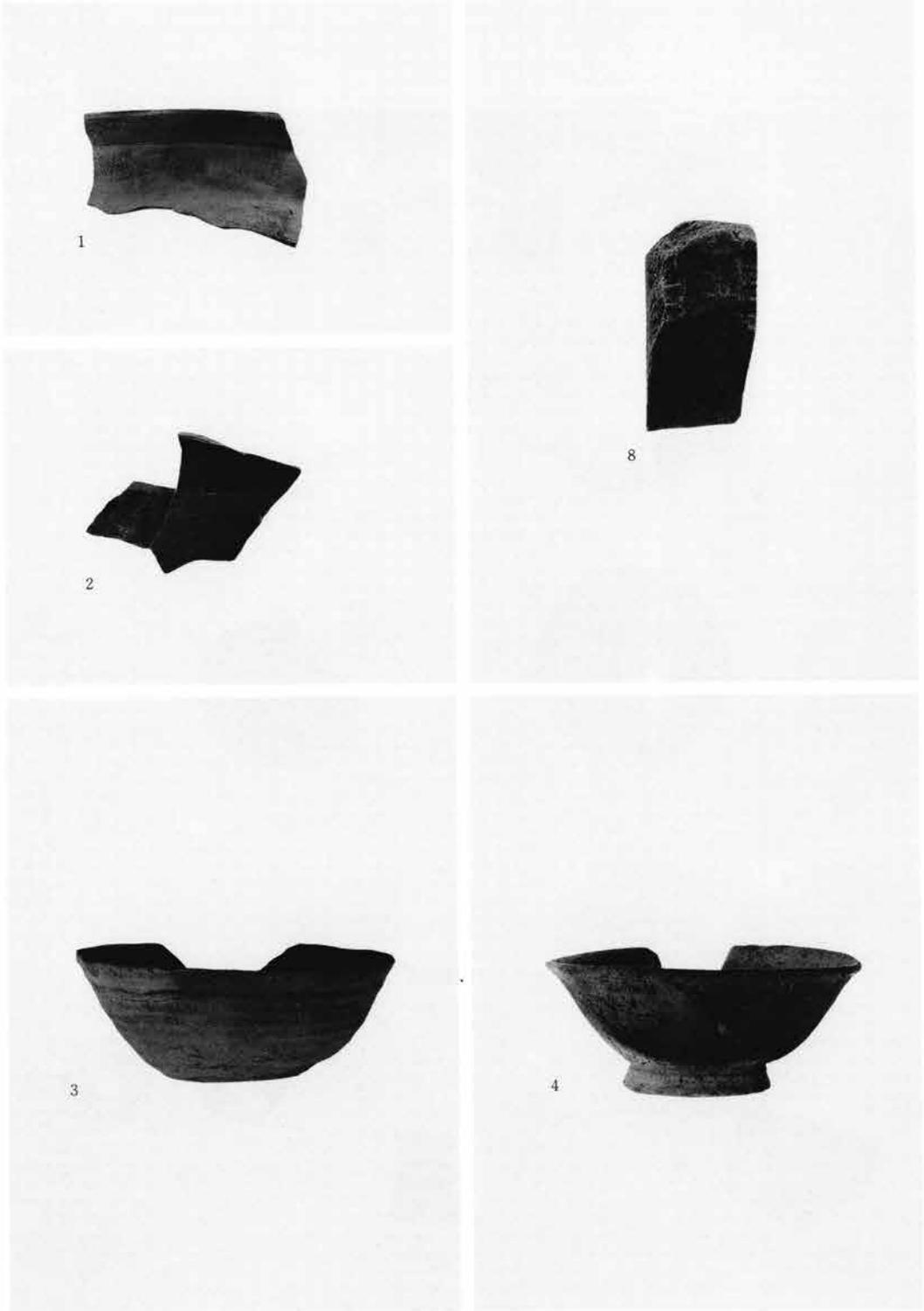
1 グリッド出土の弥生土器 (約1/4)



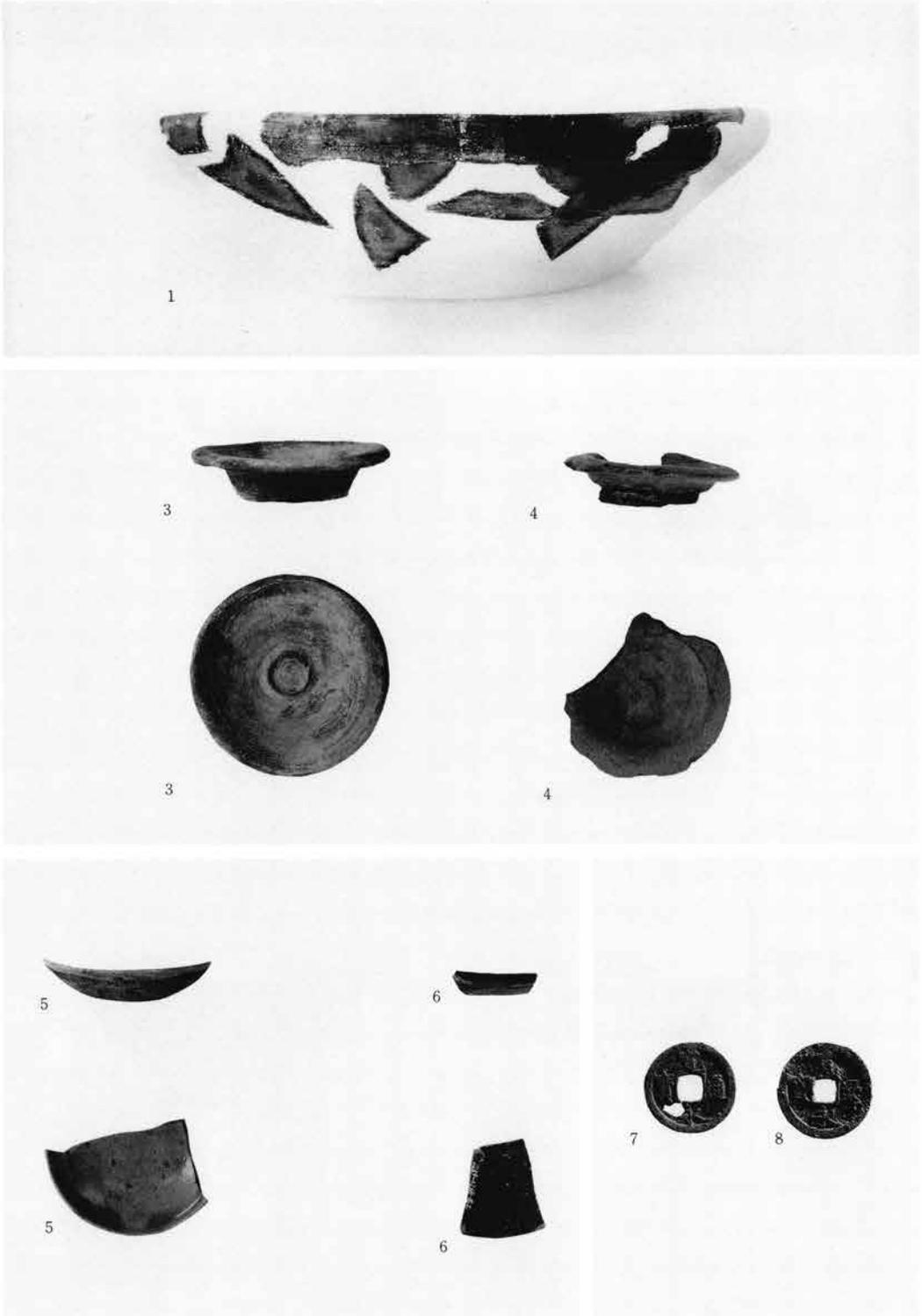
1 1号住居址出土土器 (1=約1/4、2~4=約1/3)



1 グリッド出土の古墳時代の遺物 (1=約1/4、2~5=約1/3)



1 2号住居址出土遺物 (約1/3)



1. グリッド出土の近世遺物 (1=約1/4、3~6=約1/3、7・8=約1/2)

大 原 遺 跡



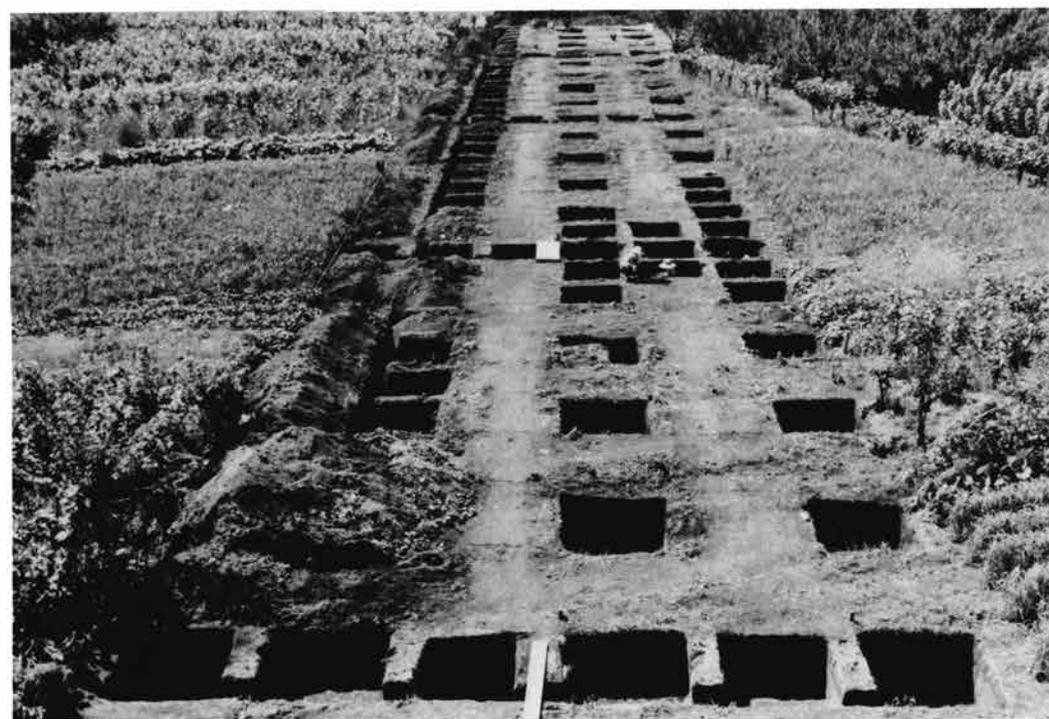
1 十二原遺跡より大原遺跡を見る (南より)



2 調査グリッド設定状態 (南より)



1 0区～1区調査状況（北より）



2 4区調査状況（北より）

1 0区～1区西側
道調査状況
(南より)



2 西側道調査風景
(南東より)



1 1号住居址炭化材出土状態 (南東より)

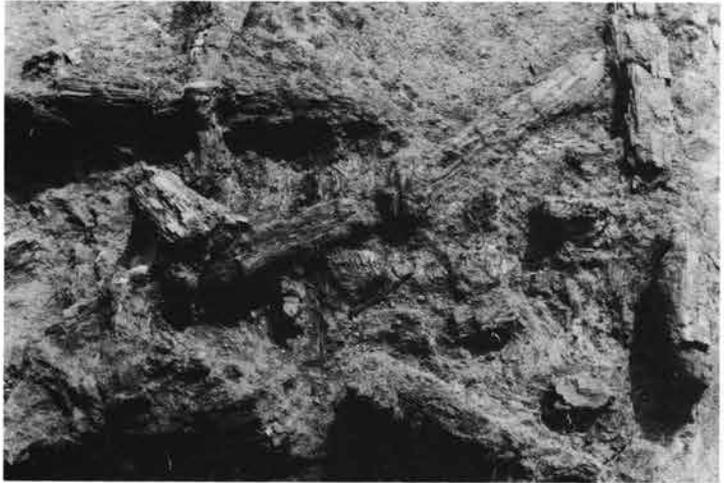


2 1号住居址 (南東より)

- 1 1号住居址北隅
遺物出土状態
(南より)



- 2 同上、炭化材出
土状態
〔中央東壁寄り〕
(南より)



- 3 同上、炭化材出
土状態
〔中央西寄り〕
(南西より)





1 2号住居址 (南西より)



2 同上、カマド (西より)



3 同上、貯蔵穴 (北より)

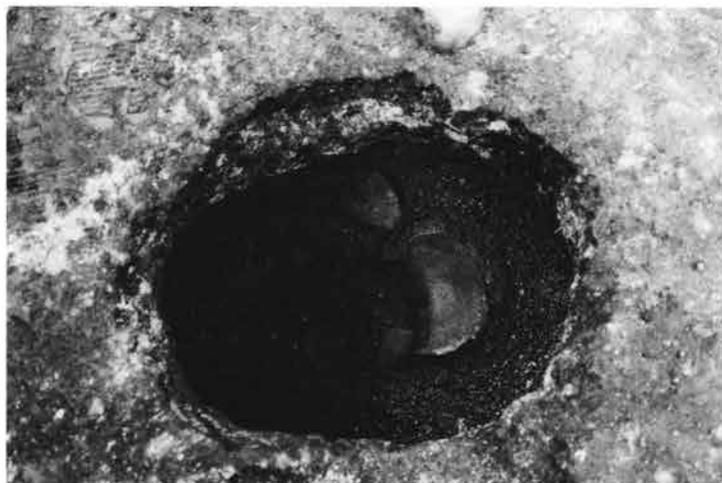
1 3号住居址
(南より)



2 同上、土層断面
(東より)



1 3号住居址、炉
(北より)



2 同上、貯蔵穴
(東より)



3 同上、片口土器
出土状態
(北東より)

1 縄文時代 1号土坑
(南より)

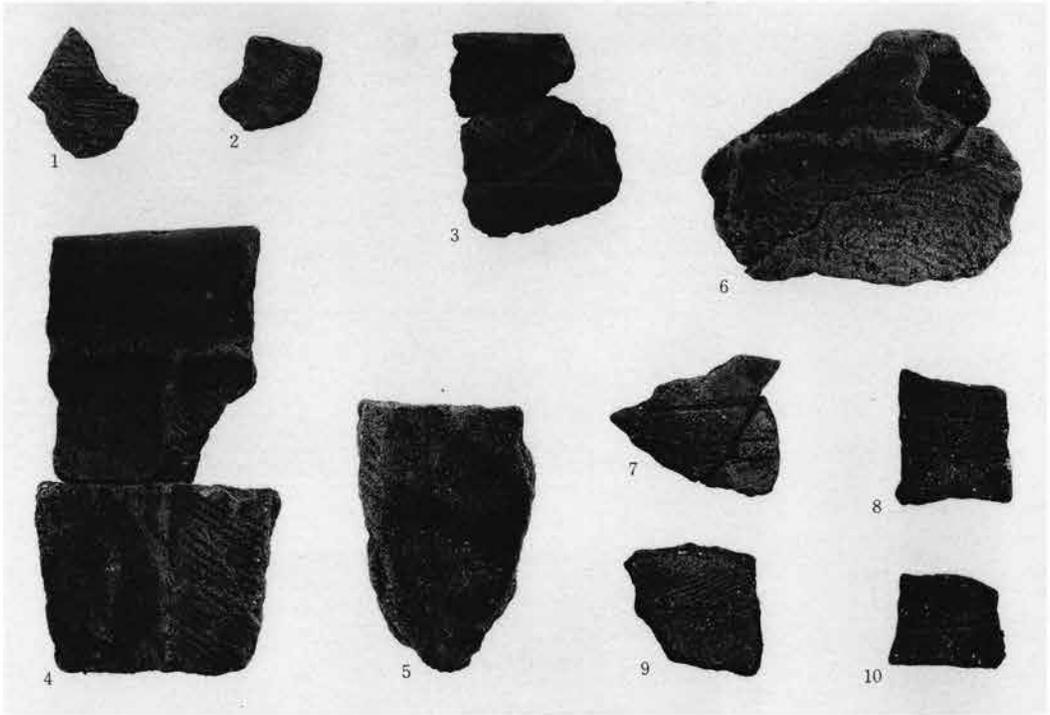


2 同上、4・5・6号土坑
(南東より)

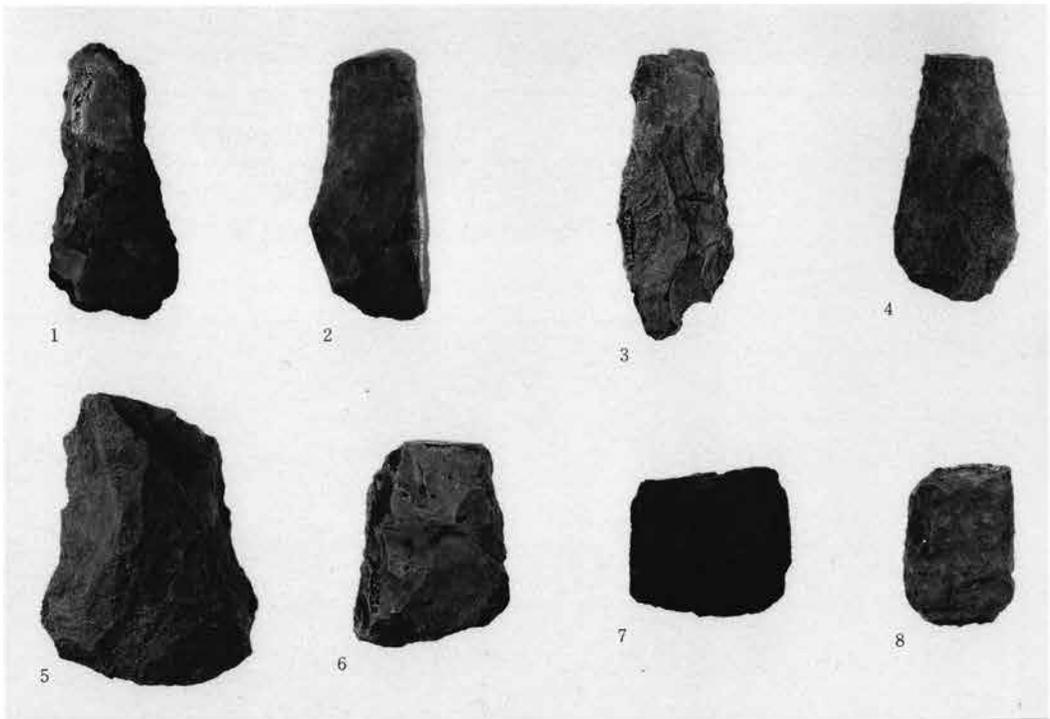


3 1号溝 (西より)

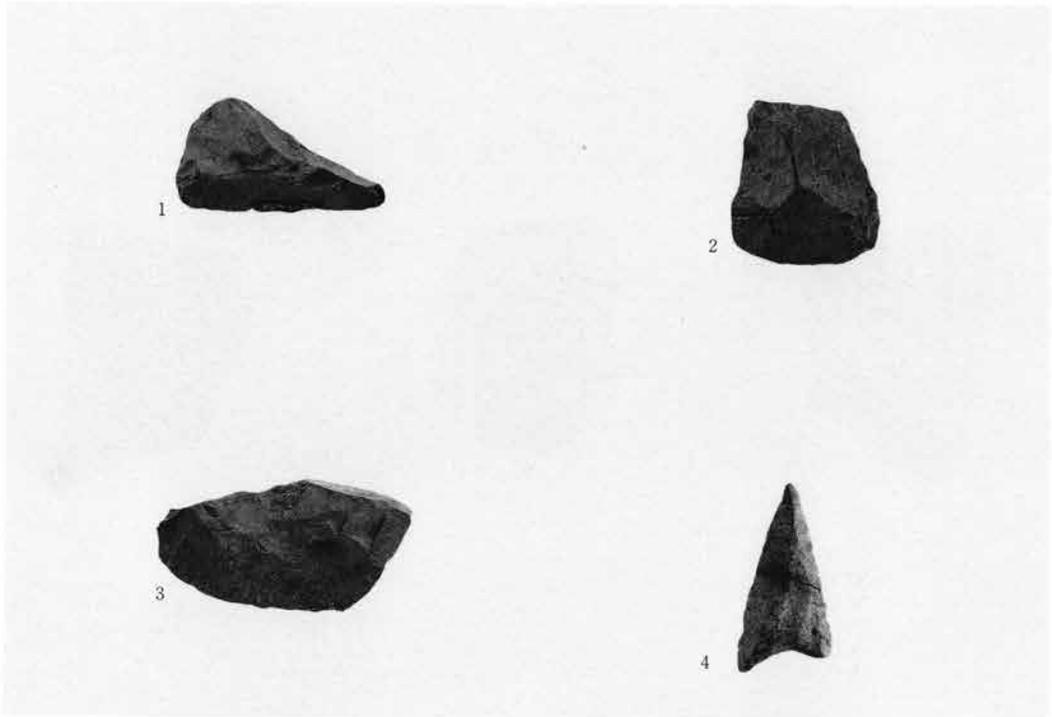




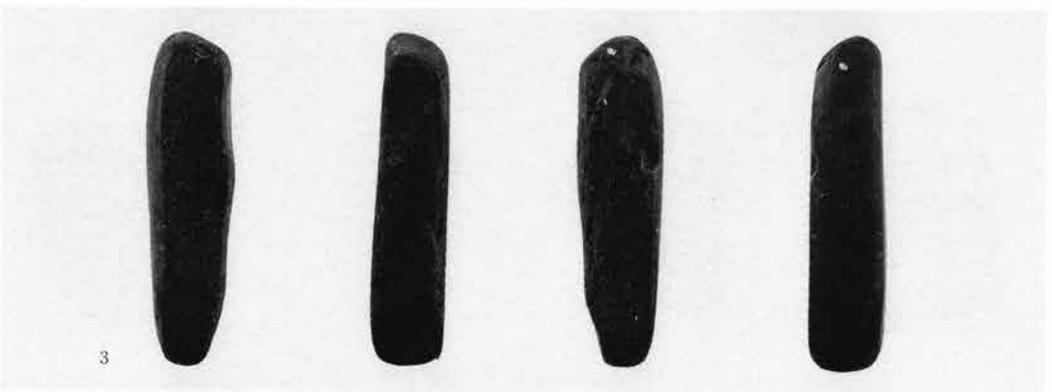
1 グリッド出土の縄文土器 (約1/3)



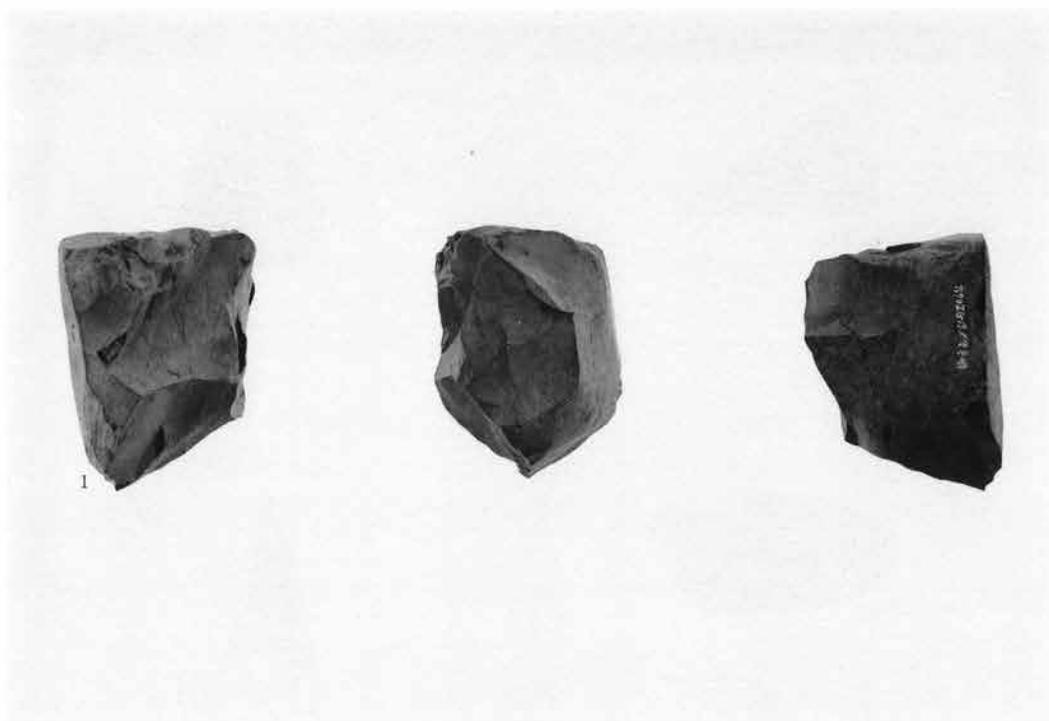
2 グリッド出土の縄文時代石器1 (約1/3)



1 グリッド出土の縄文時代石器 2 (1~3=約1/3、4=約1/1)



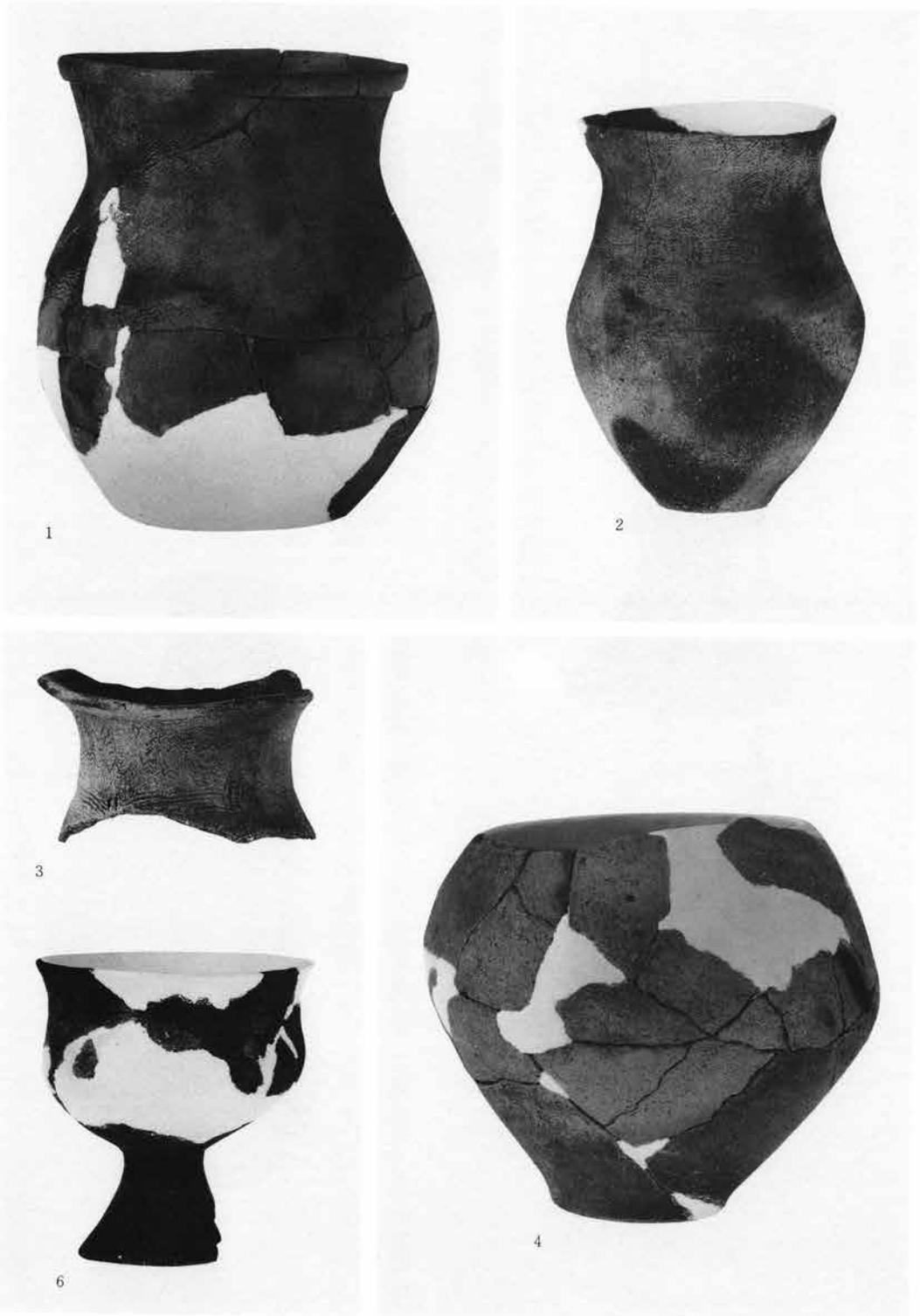
2 グリッド出土の縄文時代石器 3 (約1/3)



1 グリッド出土の縄文時代石器4 (約1/3)



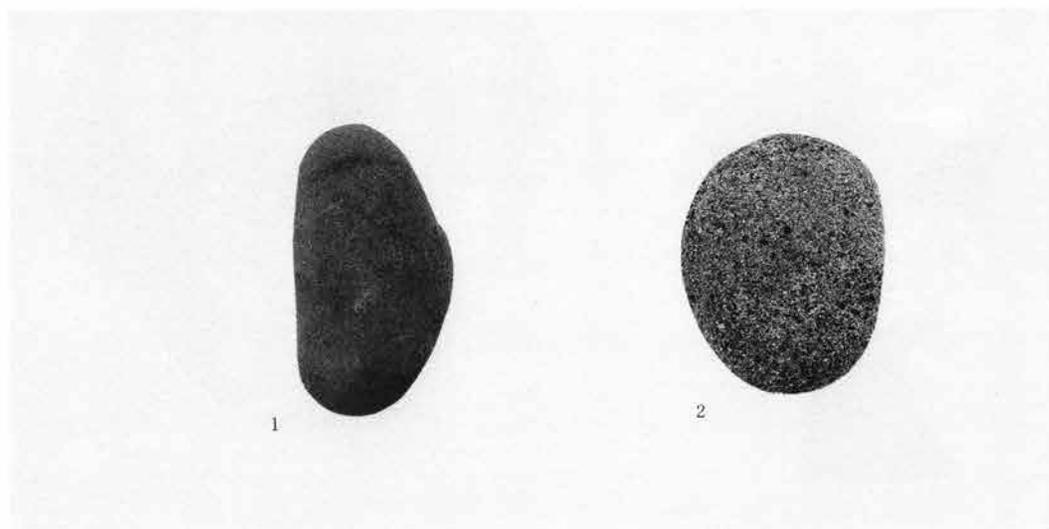
2 グリッド出土の縄文時代石器4 (約1/3)



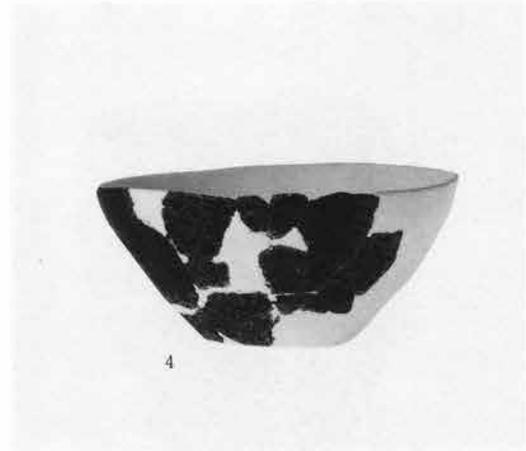
1 1号住居址出土土器1 (約1/3)



1 1号住居址出土土器2 (約1/3)



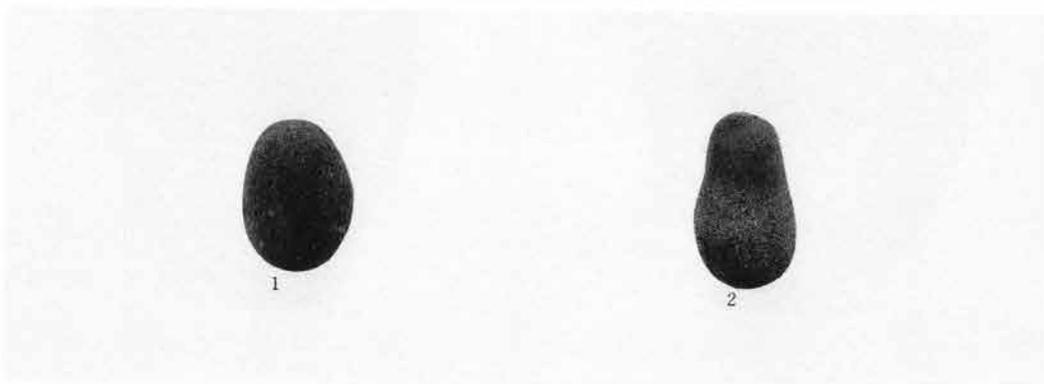
2 1号住居址出土石器 (約1/3)



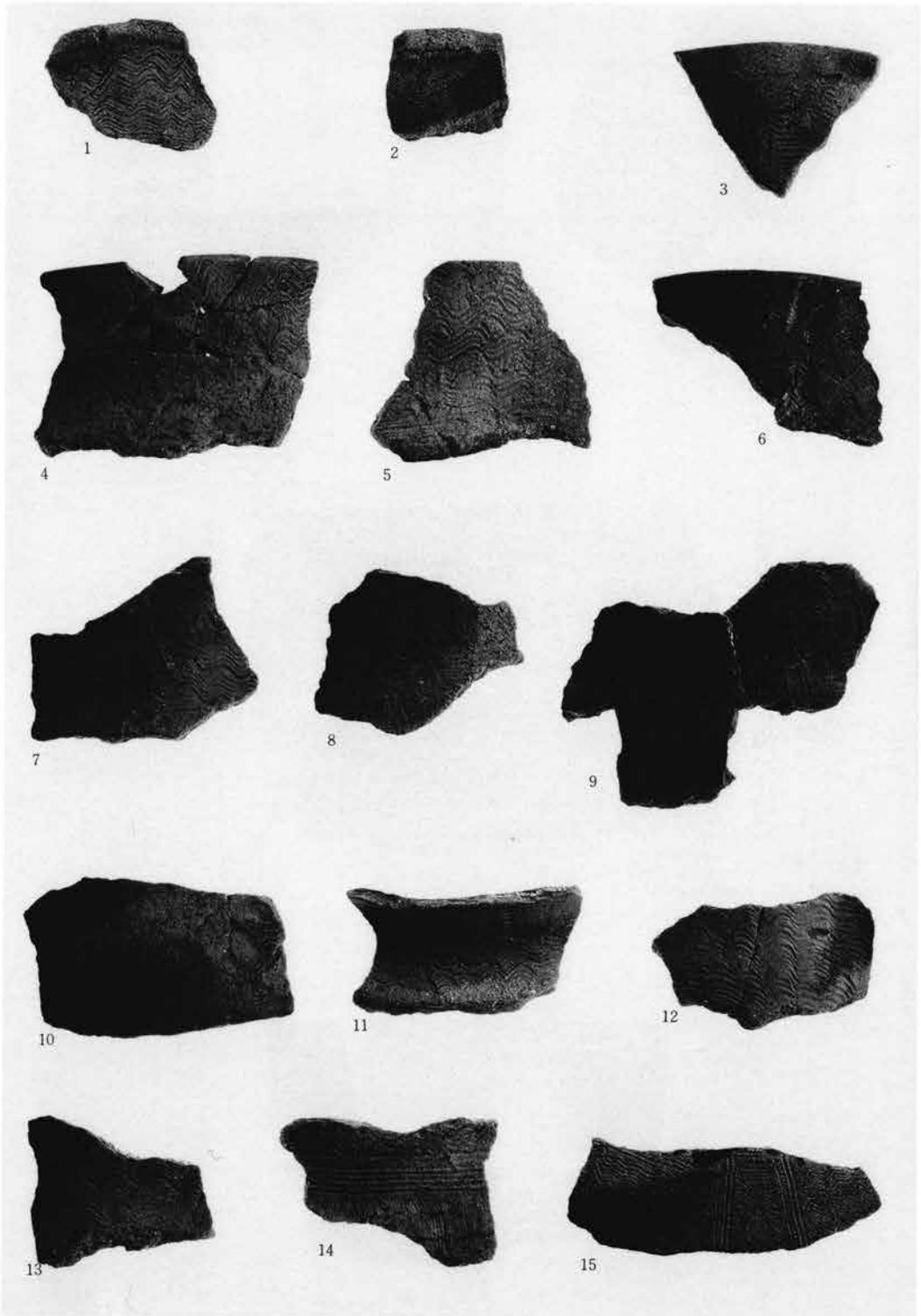
1 3号住居址出土土器 (約1/3)



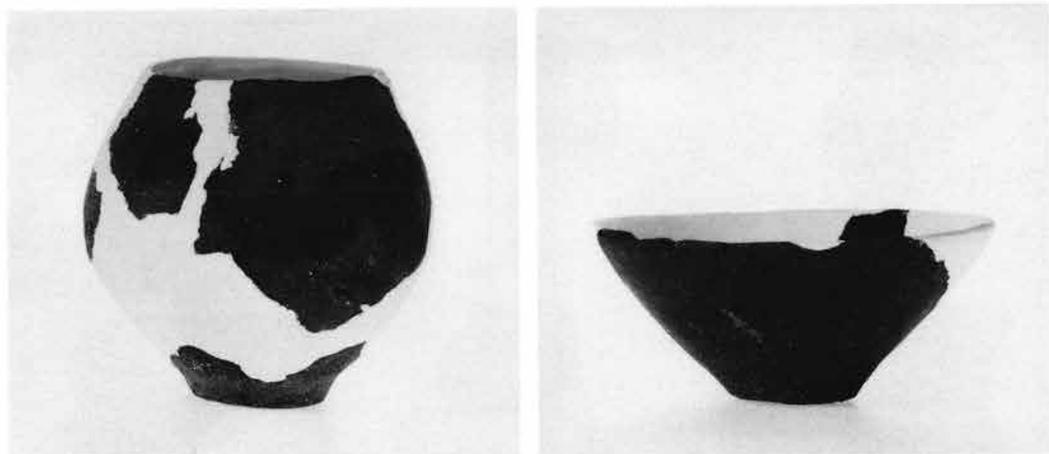
1 3号住居址出土土器 (約1/3)



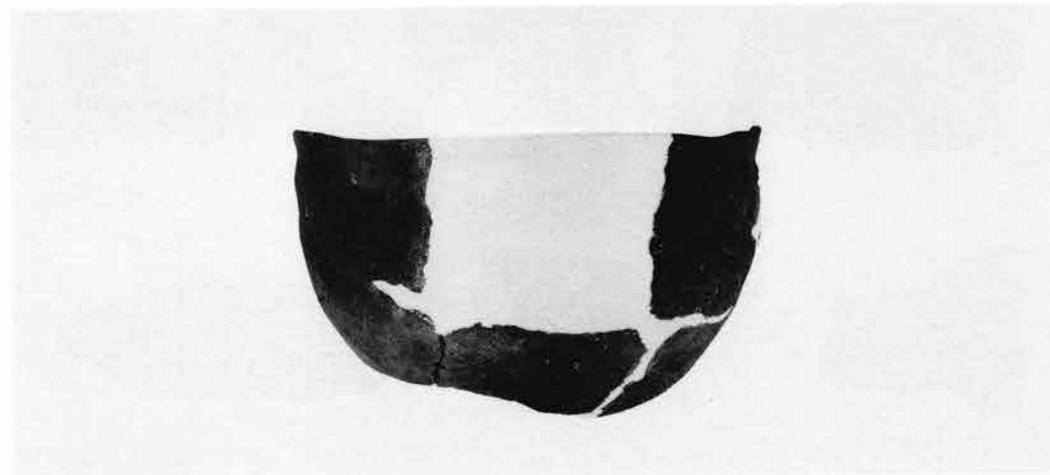
2 3号住居址出土石器 (約1/3)



1 グリッド出土の弥生土器2 (約1/2)

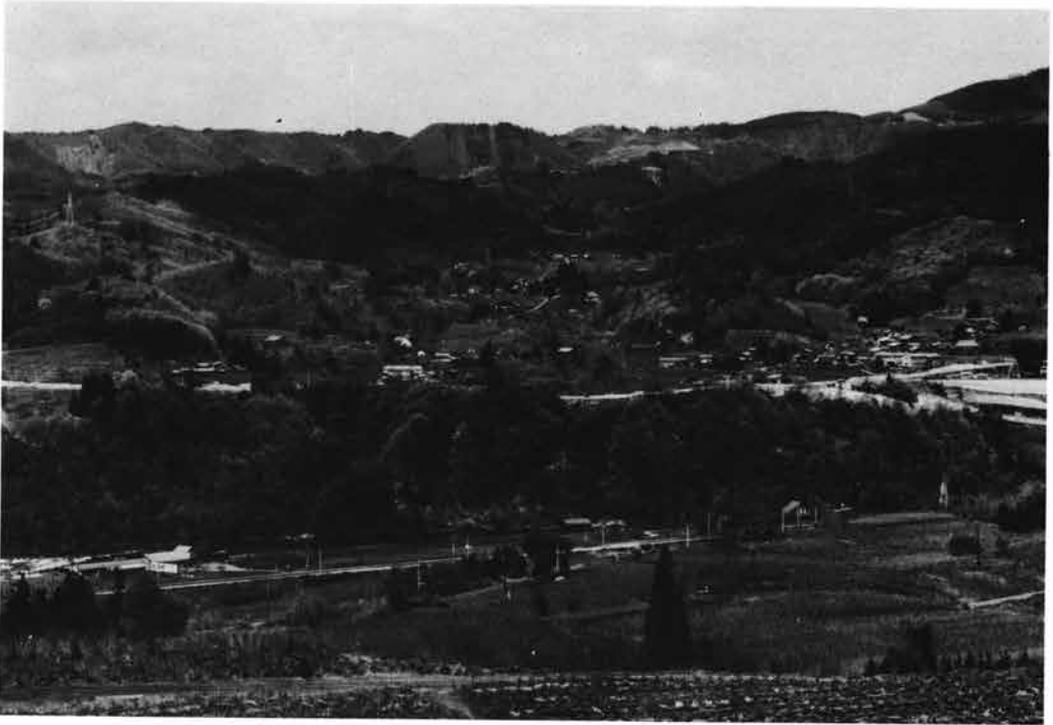


1 グリッド出土の弥生土器1 (約1/3)



2 2号住居址出土土器 (約1/3)

前 中 原 遺 跡



1 遺跡遠景〔中央、利根川東岸より〕(東より)



2 遺跡全景(西より)



1 1区トレンチ設定状況（南東より）



2 2区トレンチ設定状況（北西より）



1 縄文土器出土状態（東より）



2 2区C-03グリッド、平安時代遺物出土状態（南東より）



1 第1次調査風景（北西より）



2 1号住居址調査風景（南東より）



1 土坛調査風景（東より）



2 土坛調査風景（南西より）



1 1号住居址 (南東より)



2 1号住居址遺物出土状態 (南東より)



1 1号住居址遺物出土状態〔中央付近〕（南より）



2 1号住居址遺物出土状態〔炉周辺〕（東より）



1 2号住居址 (西より)



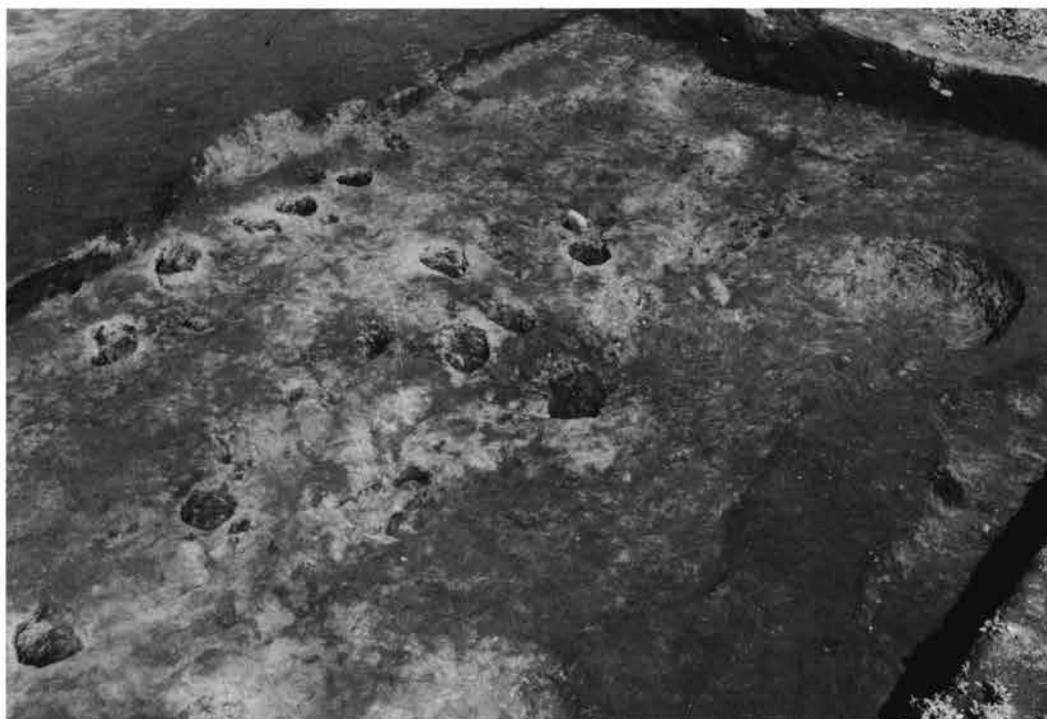
2 2号住居址遺物出土状態 (南より)



1 2号住居址遺物出土状態（北西より）



2 2号住居址遺物出土状態〔北西隅寄り〕（東より）



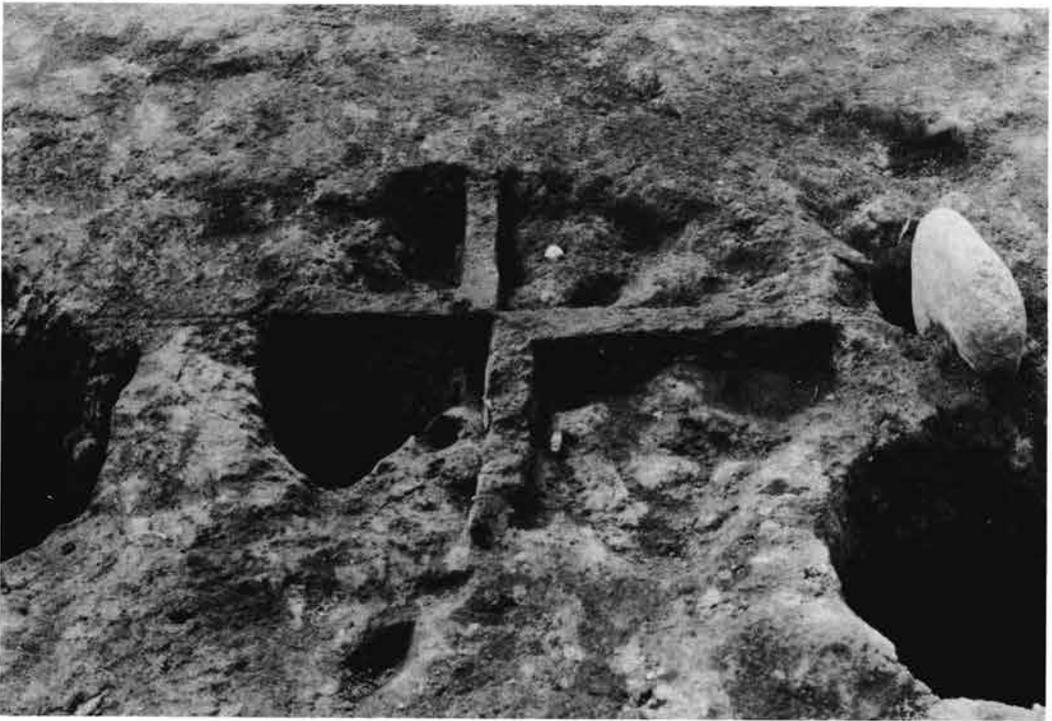
1 3号住居址 (南東より)



2 3号住居址遺物出土状態 (南東より)



1 3号住居址遺物出土状態および埋没状況（南より）



2 3号住居址、炉（東より）



1 4号住居址（南より）



2 4号住居址遺物出土状態（南より）



1 4号住居址遺物出土状態と16・17号土壇（西より）



2 5号住居址〔平安時代〕（北西より）



1 1号炉穴と1・2号墓壇 (南より)



2 1号炉穴 (南西より)

1 2号炉穴 (南東より)



2 3号炉穴 (南より)



3 4号炉穴 (南より)

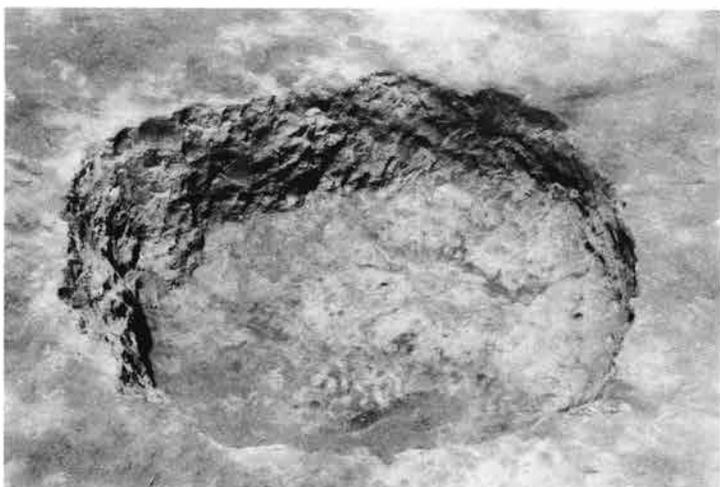




1 縄文時代1・3・4号
土壇と時期不明の1～
4号土壇（南東より）



2 同上、6号土壇
（東より）



3 同上、7号土壇
（東より）

1 縄文時代14号土坑
(南西より)

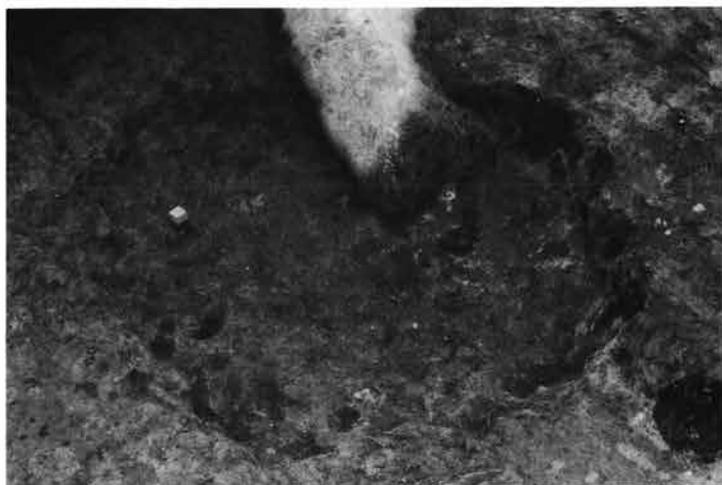


2 同上、15号土坑
(東より)



3 同上、16号土坑
(東より)





1 縄文時代8号土壇
(北より)



2 同上、10~12号土壇
(東より)



3 同上、13号土壇
(東より)

1 縄文時代18号土坑
(東より)

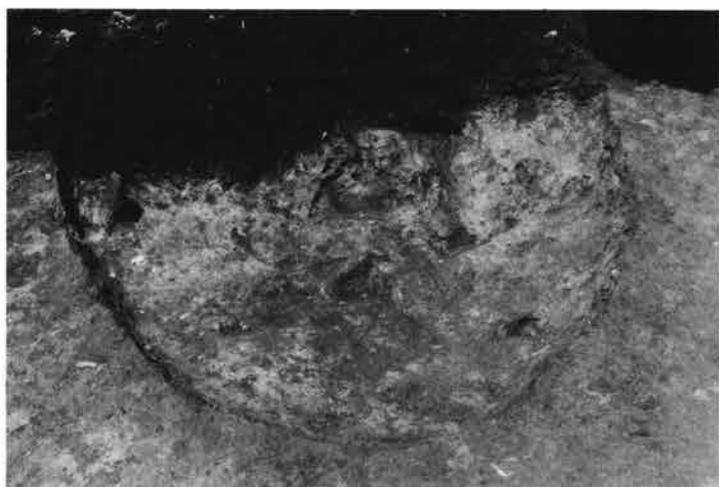


2 同上、19号土坑
(西より)



3 同上、20号土坑
(北より)

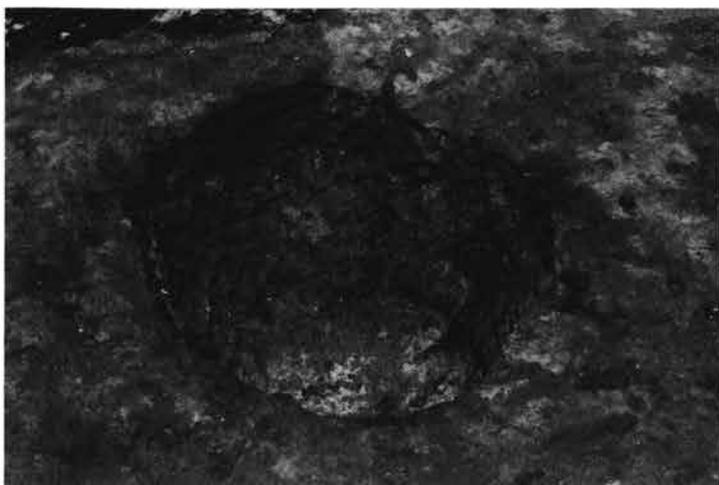




1 縄文時代21号土塚
(東より)



2 同上、22号土塚
(西より)



3 同上、23号土塚
(東より)

1 近世1・2号墓壇
(北より)



2 同上、3号墓壇〔下部〕
(北より)



3 同上、4号墓壇〔下部〕
(北より)





1 時期不明5号土坑
(南より)



2 同上、6・7号土坑
(南より)



3 同上、8・12号土坑
(西より)

1 時期不明9・10号土壇
(南より)

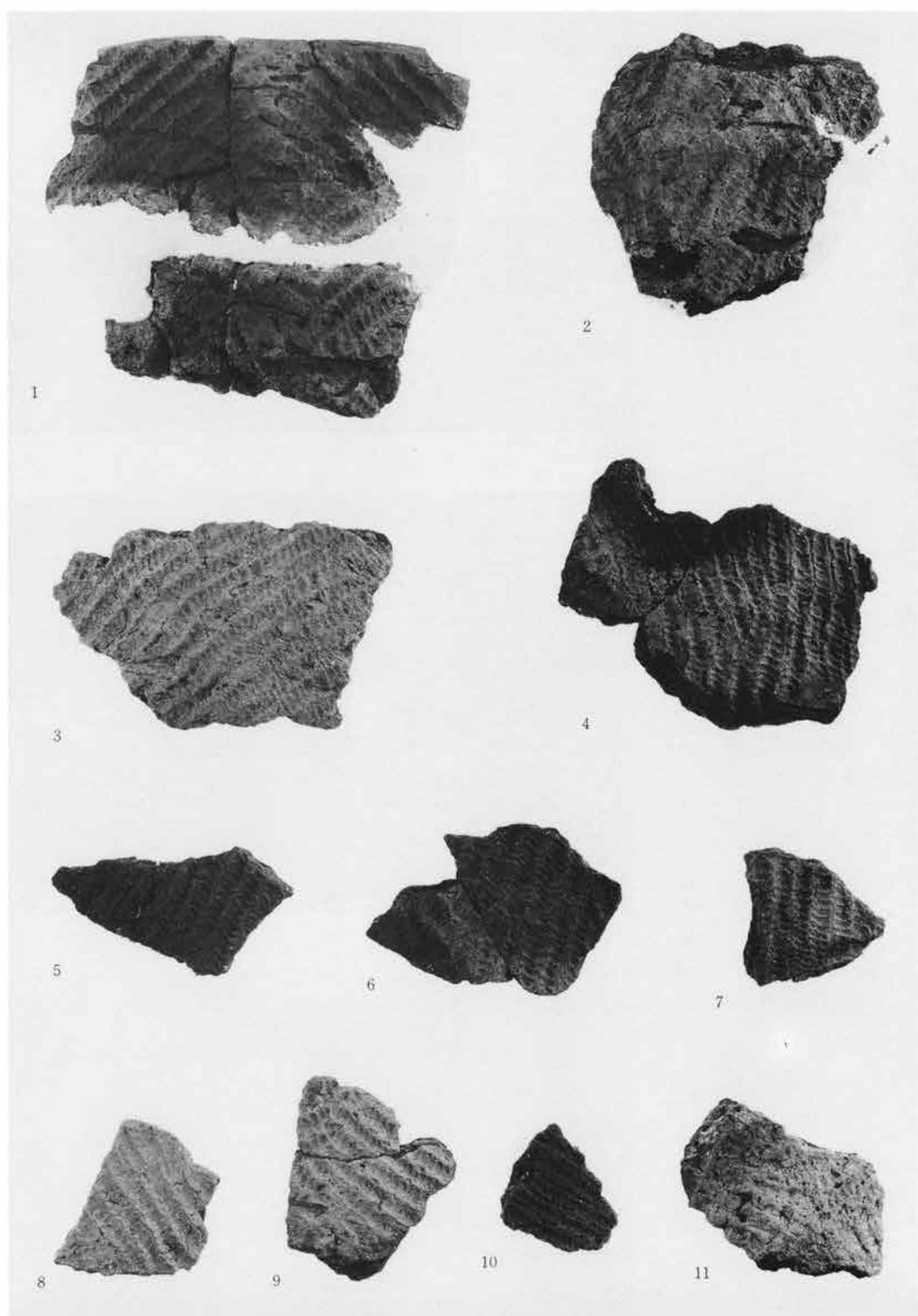


2 同上、11号土壇
(東より)



3 平安時代1号土壇
(北より)

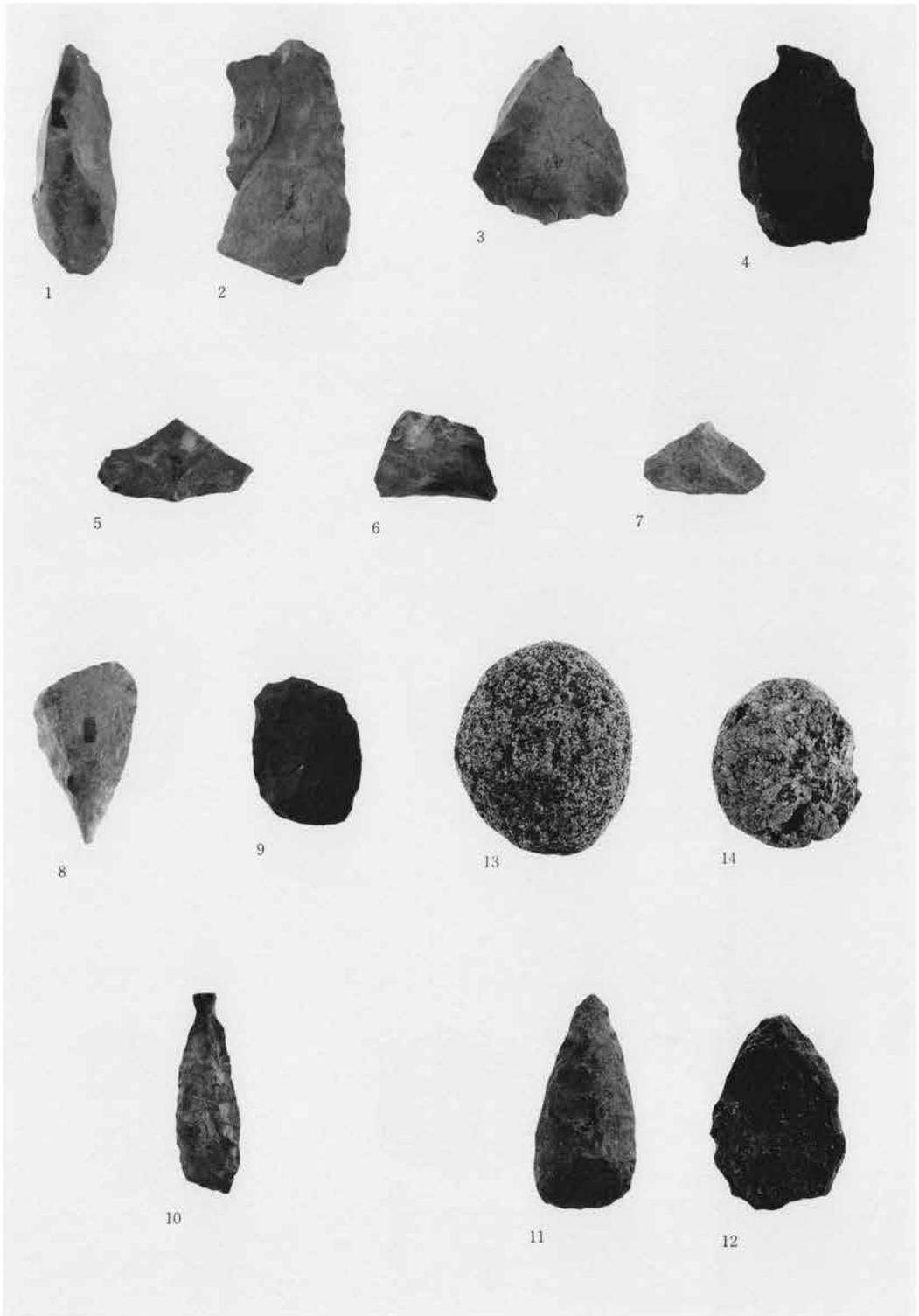




1 1号住居址出土土器1 (約1/2)



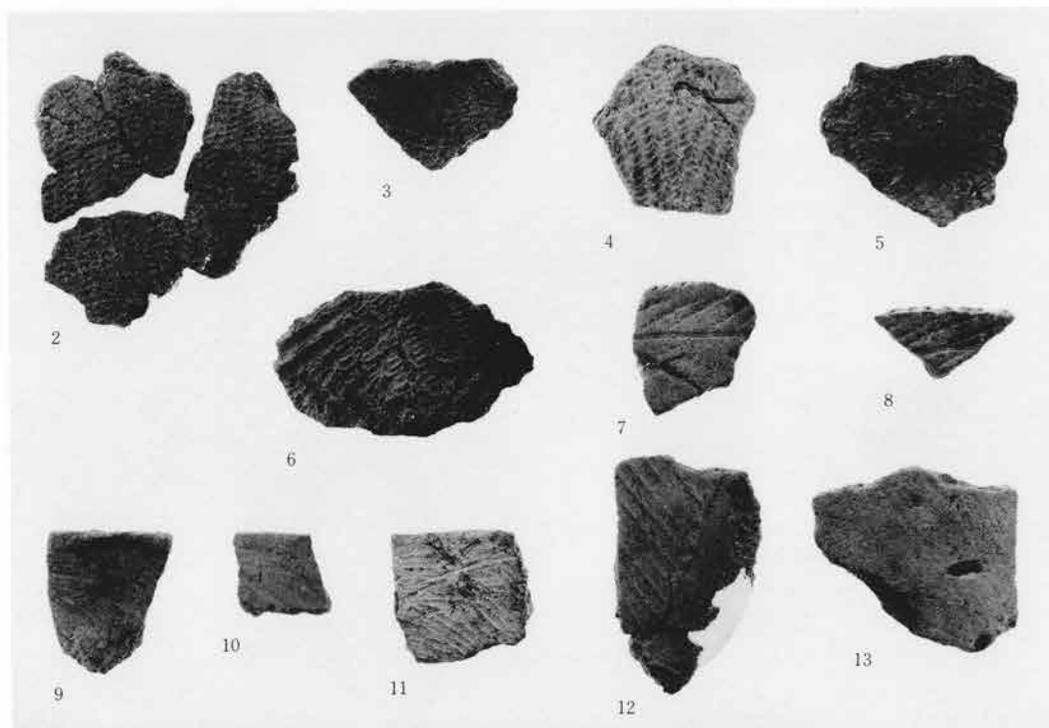
1 1号住居址出土土器2 (約1/2)



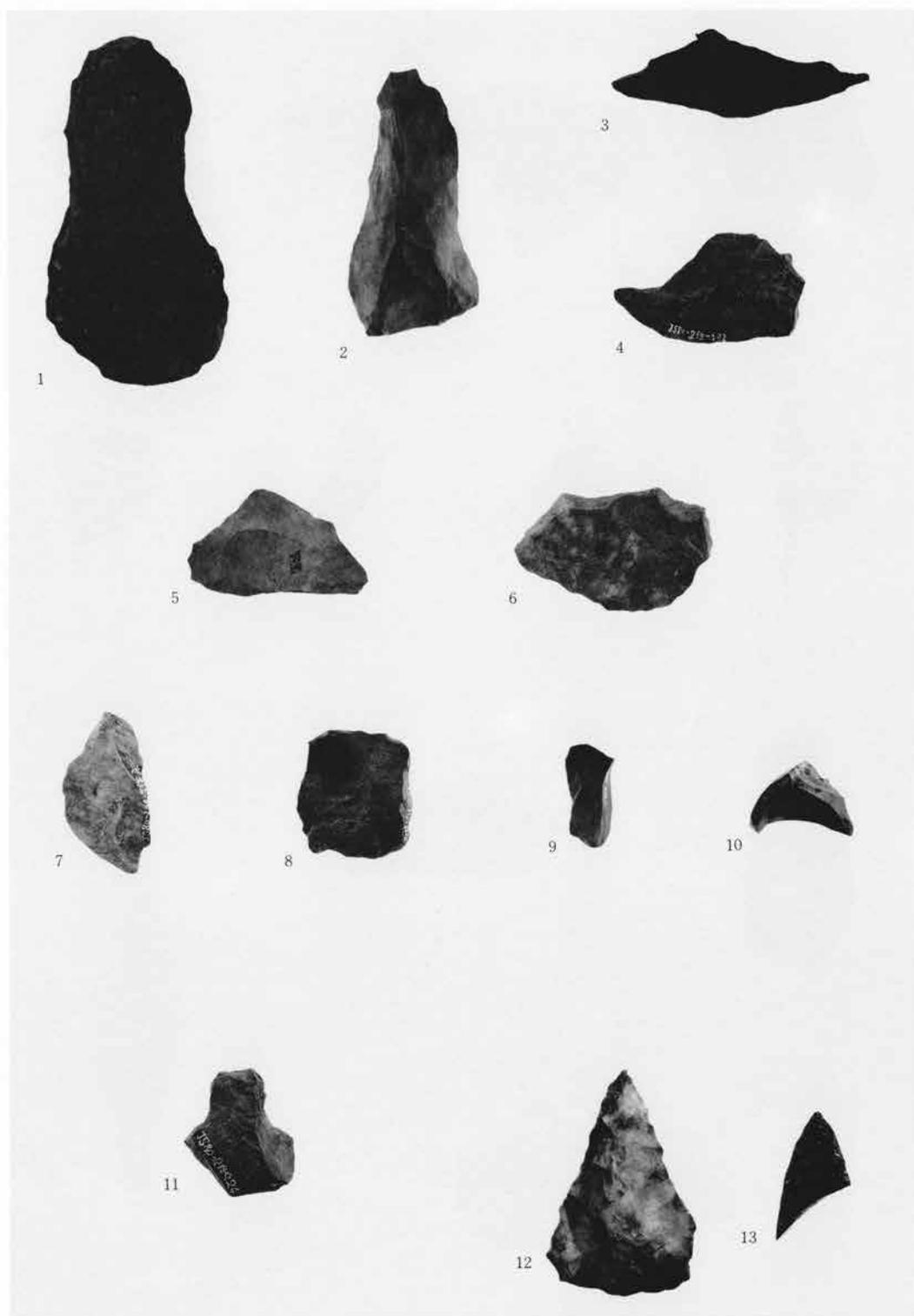
1 1号住居址出土石器 (1~9・13・14=約1/3、10=約1/2、11・12=約1/1)



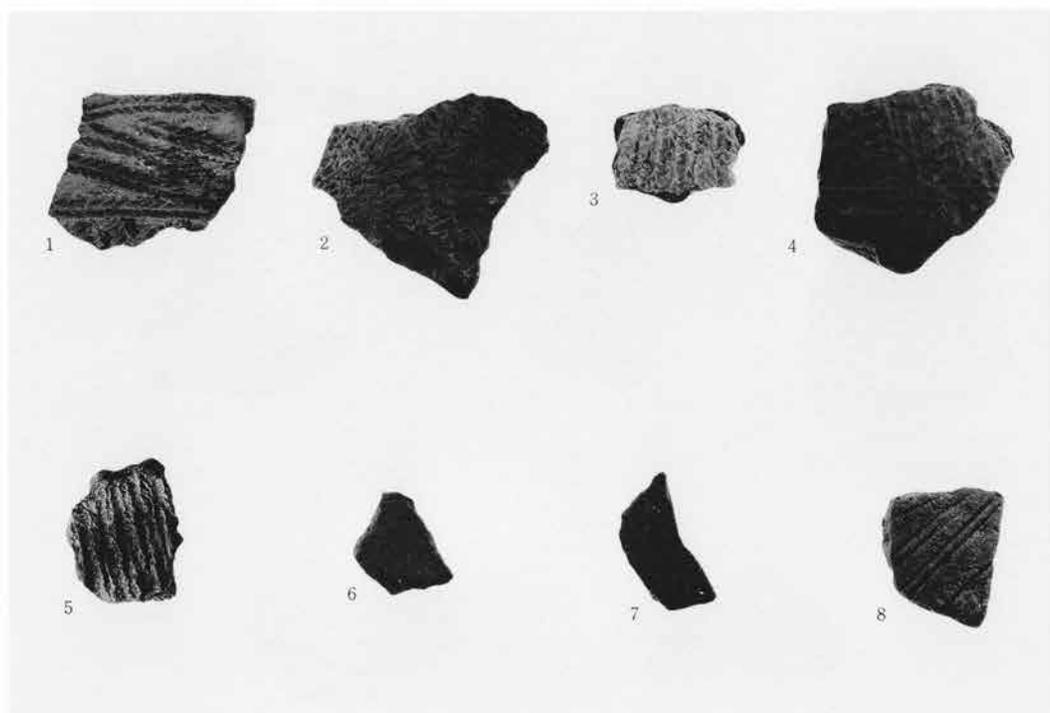
1 2号住居址出土土器1 (約1/2)



1 2号住居址出土土器2 (約1/2)



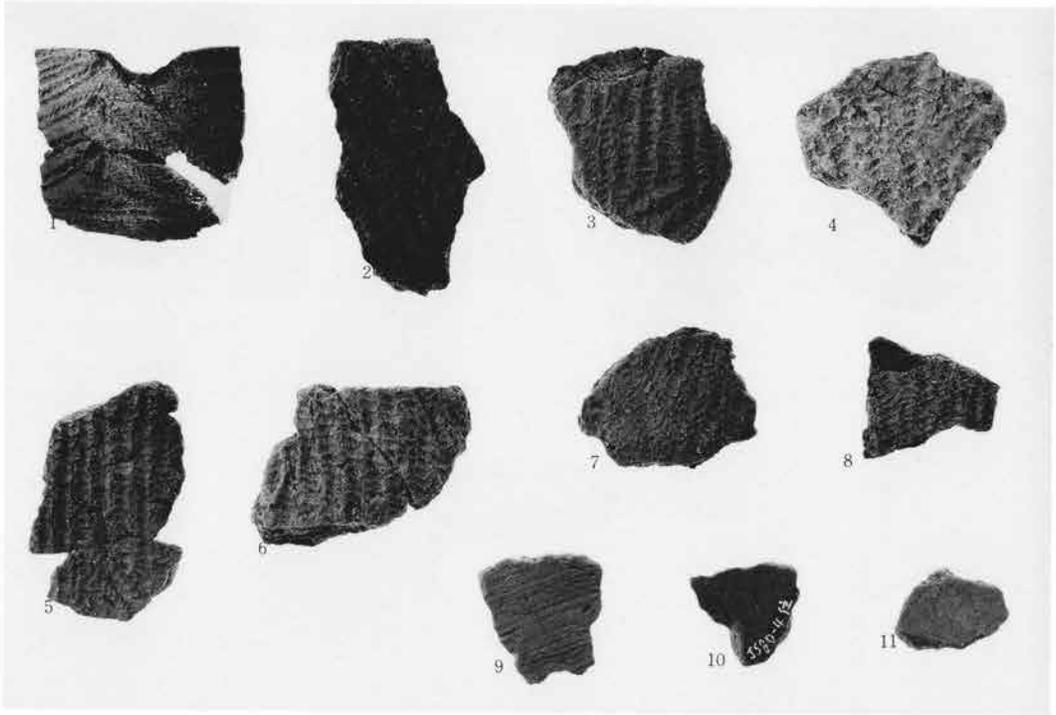
1. 2号住居址出土石器 (1~10=約1/3、11=約1/2、12・13=約1/1)



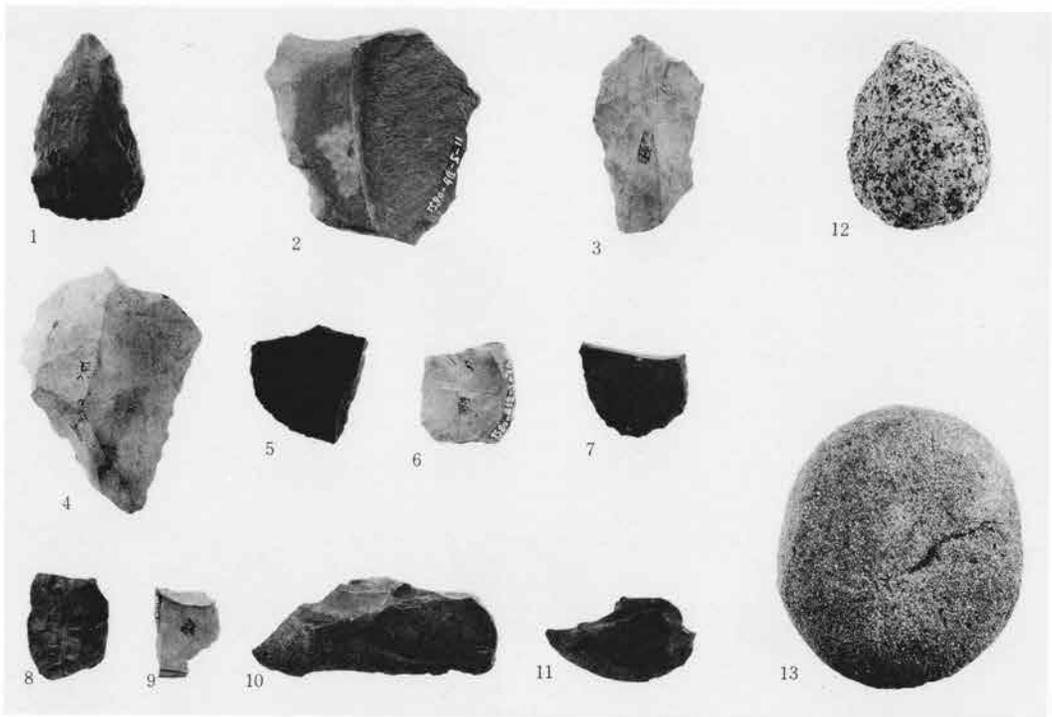
1 3号住居址出土土器 (約1/2)



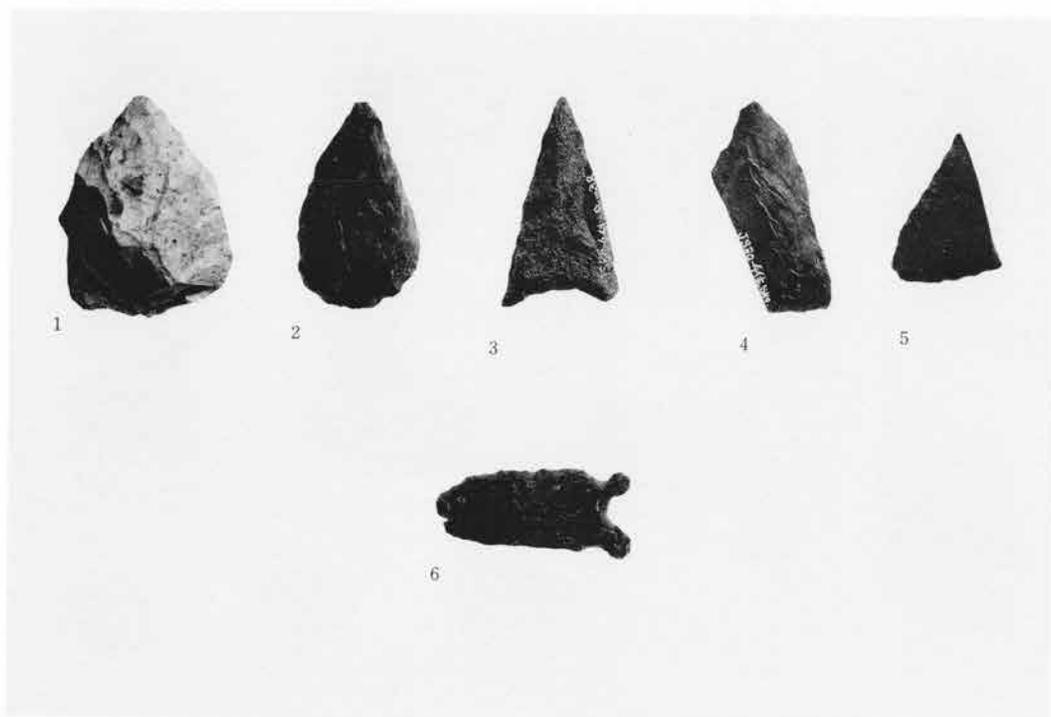
2 3号住居址出土石器 (1~3=約1/3、4=約2倍)



1 4号住居址出土土器 (約1/2)



2 4号住居址出土土器1 (約1/3)



1 4号住居址出土石器2 (約1/1)



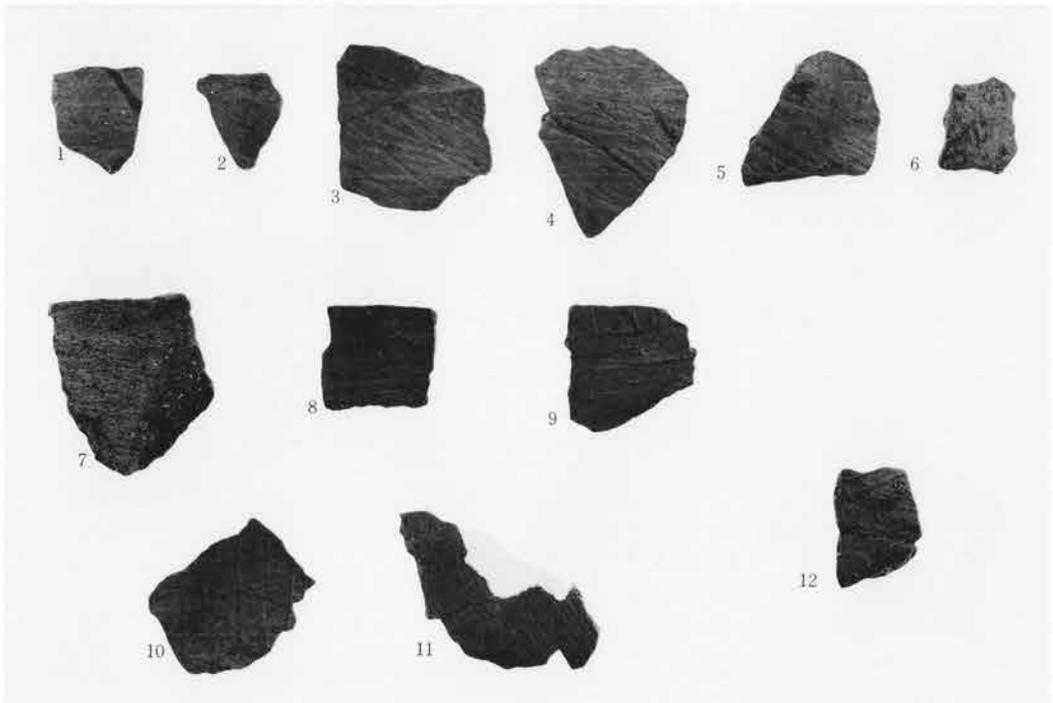
2 4号住居址出土石器3 (約1/3)



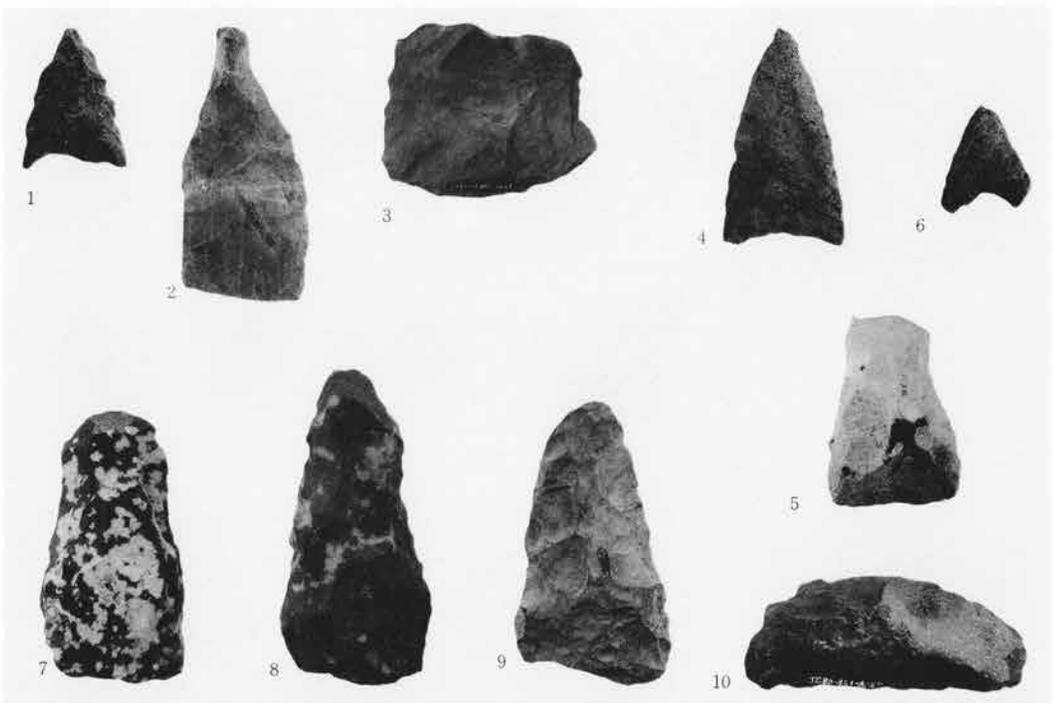
1 縄文時代の土壇出土土器 [1~5=1号、6=6号] (約1/2)



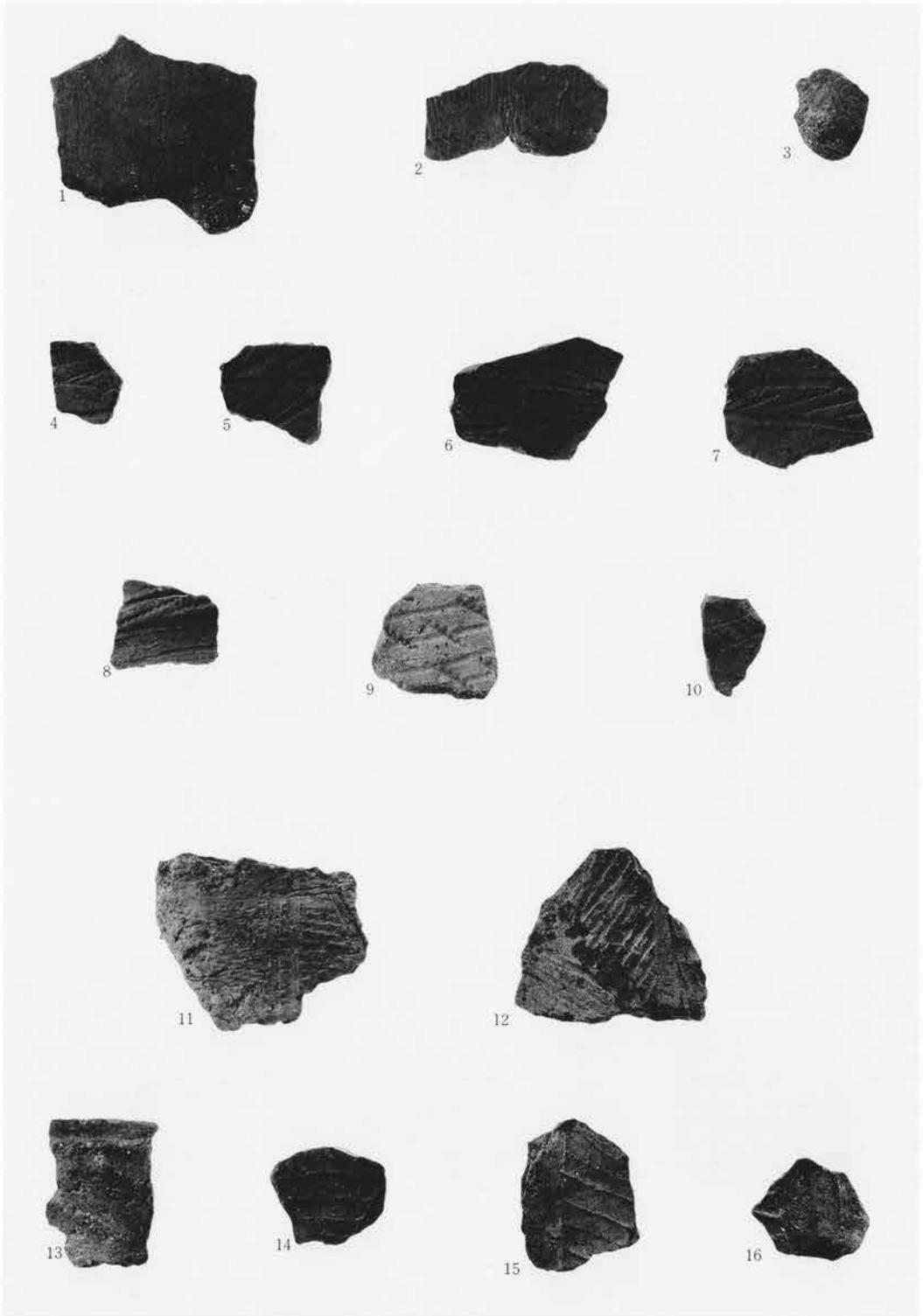
2 縄文時代の土壇出土土器 [1~4=10号、5=12号、6~9=16号、10~12=17号] (約1/2)



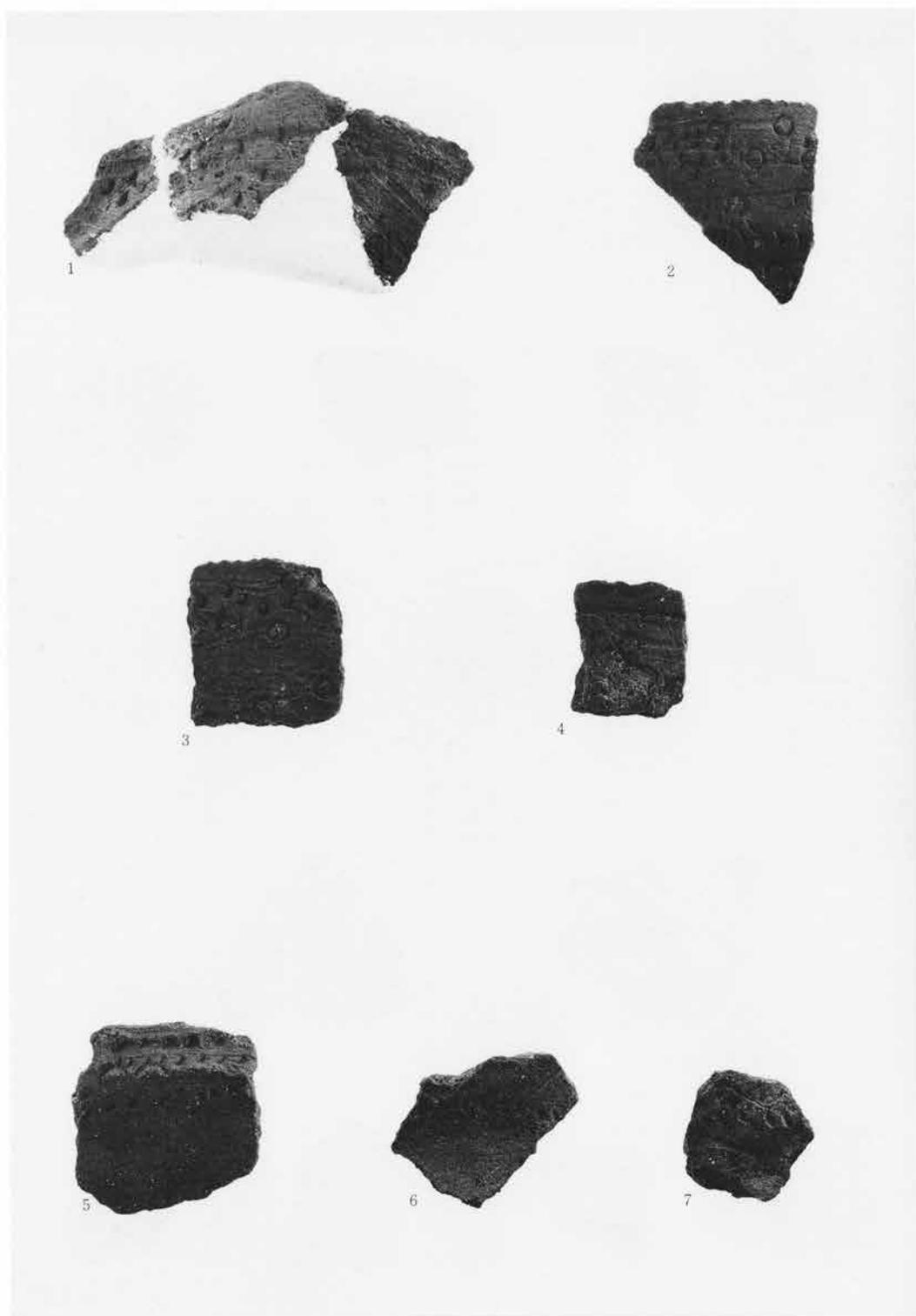
1 縄文時代の土壇出土石器 [1～6=18号、7～11=21号、12=23号] (約1/2)



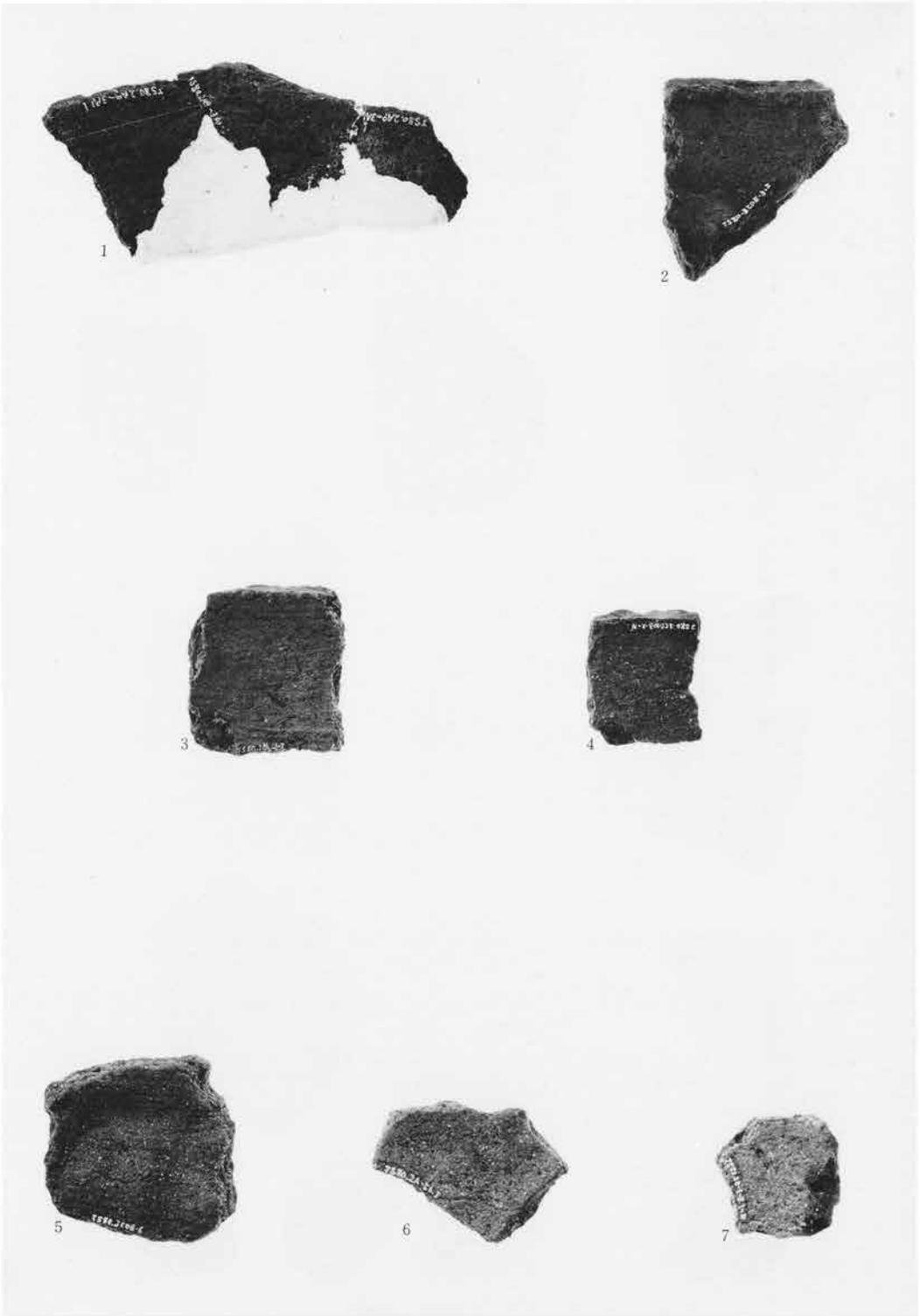
2 縄文時代の炉穴と土壇の出土石器 [1=1炉、2・3=4炉、4・5=7号、6=18号、
7・8=19号、9・10=22号]



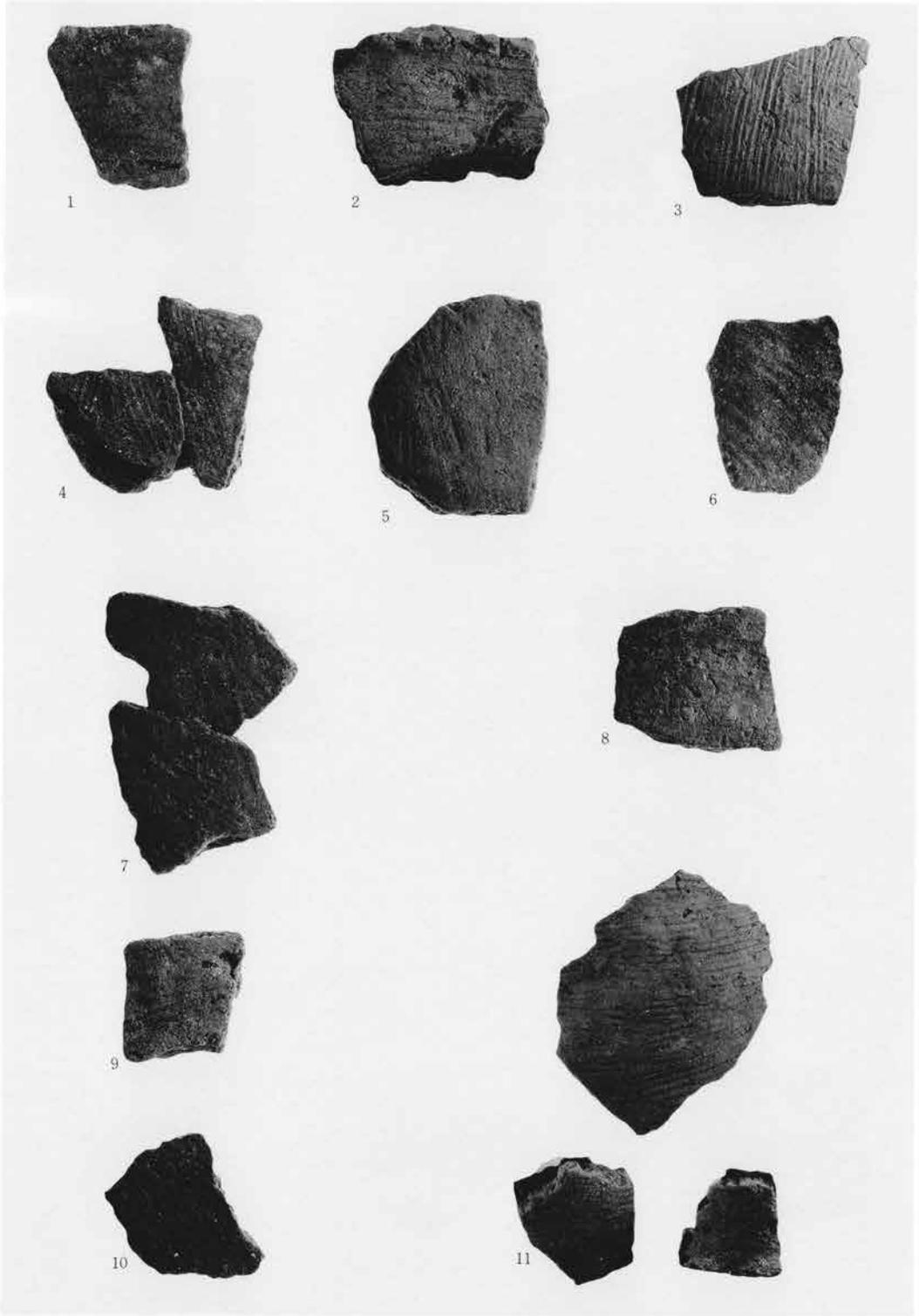
1 第1・2・3類土器 (約1/2)



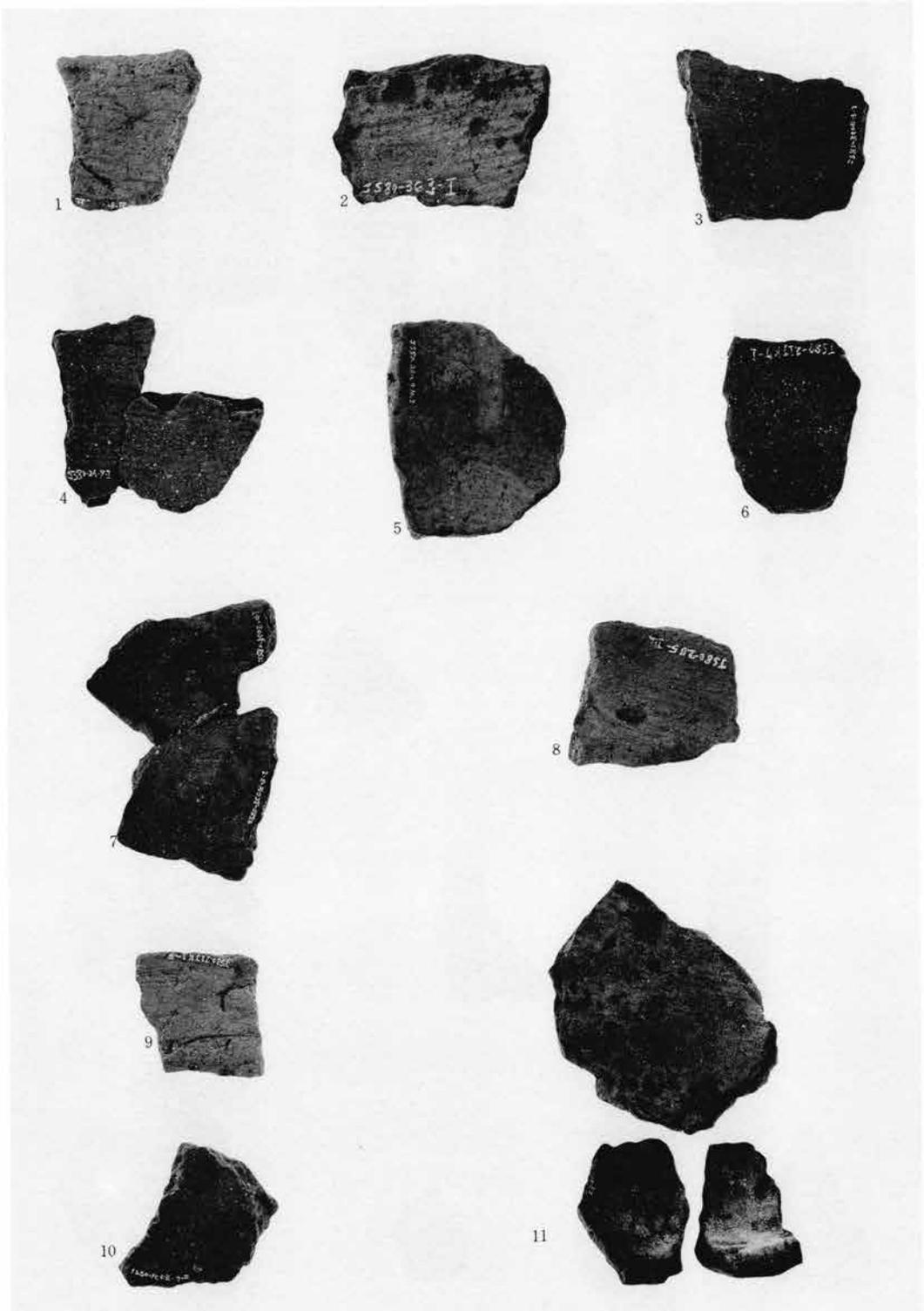
1 第4類土器〔表〕(約1/2)



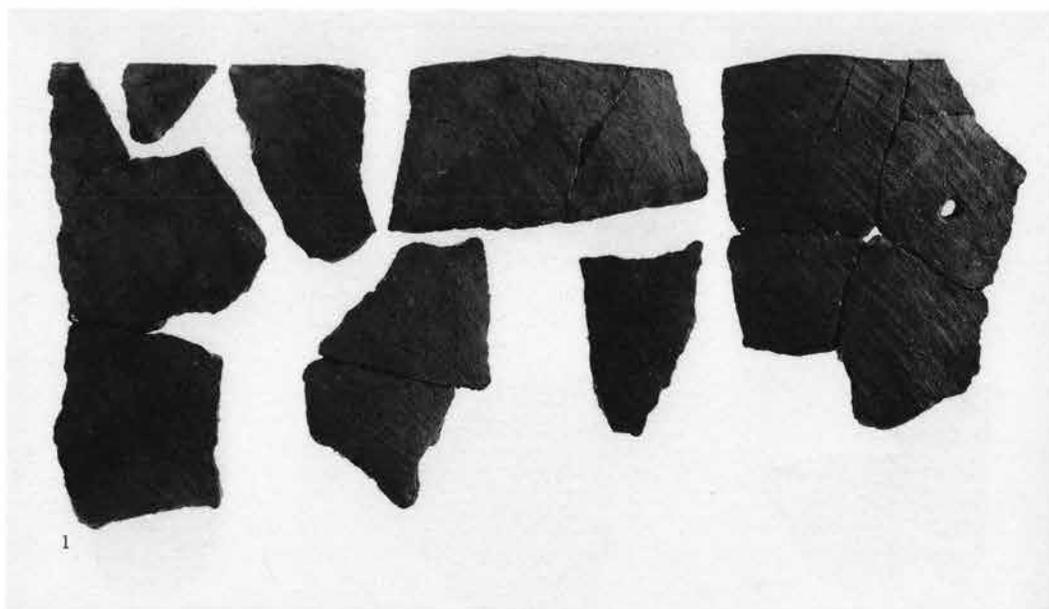
1 第4類土器〔裏〕(約1/2)



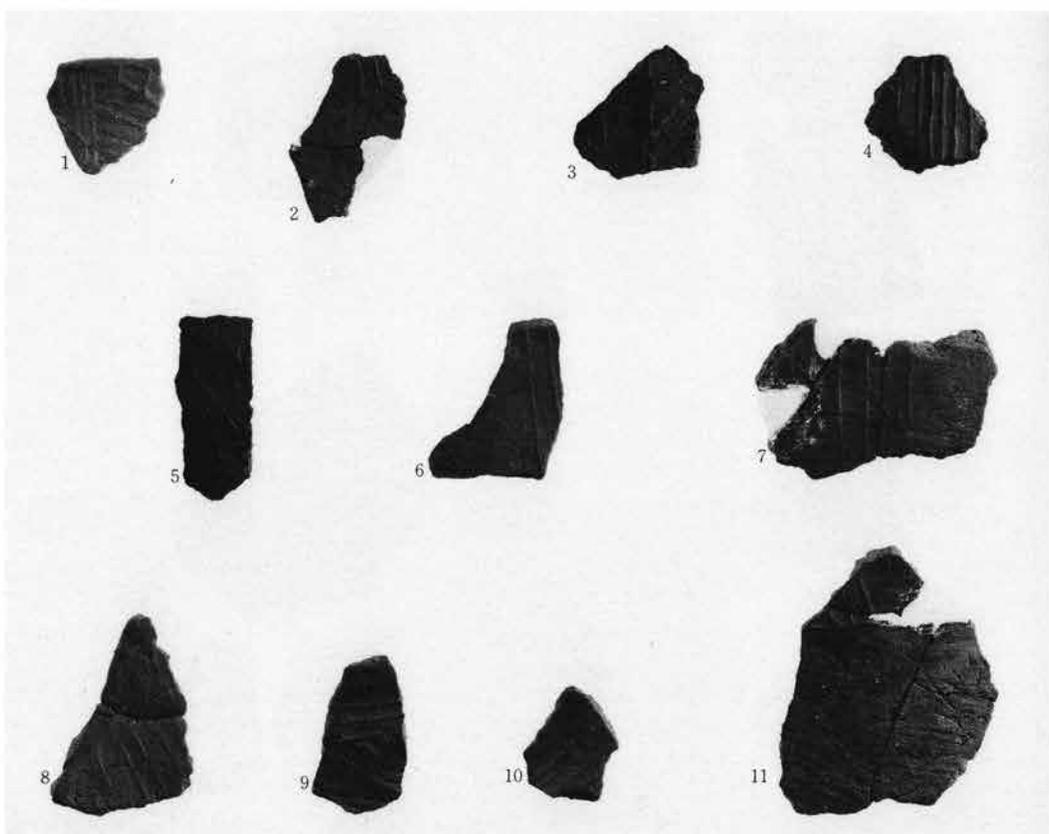
1 第5類土器〔表〕(約1/2、11=約1/3)



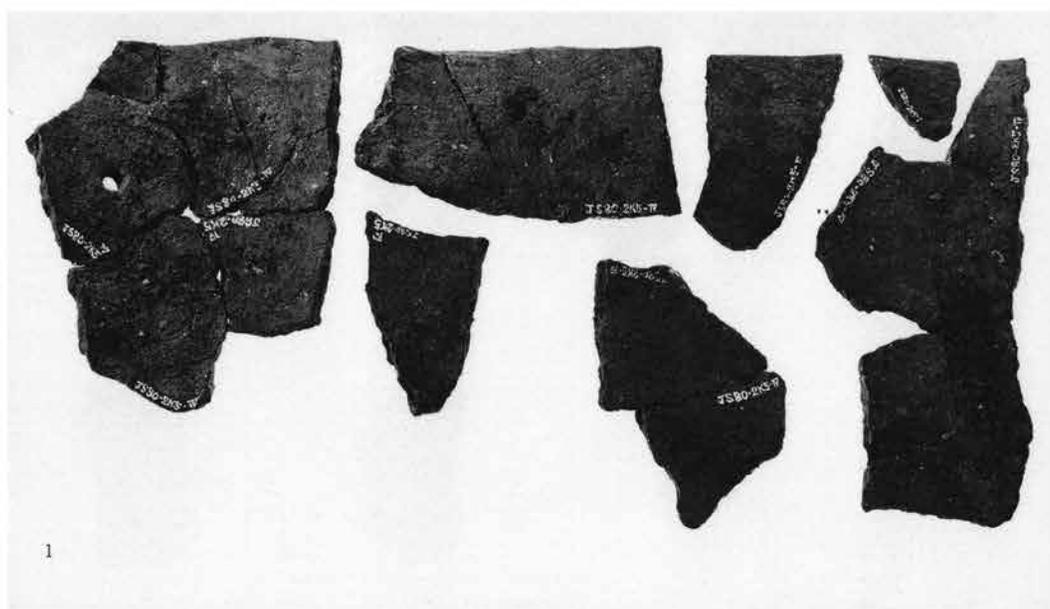
1 第5類土器〔裏〕(約1/2、11=約1/3)



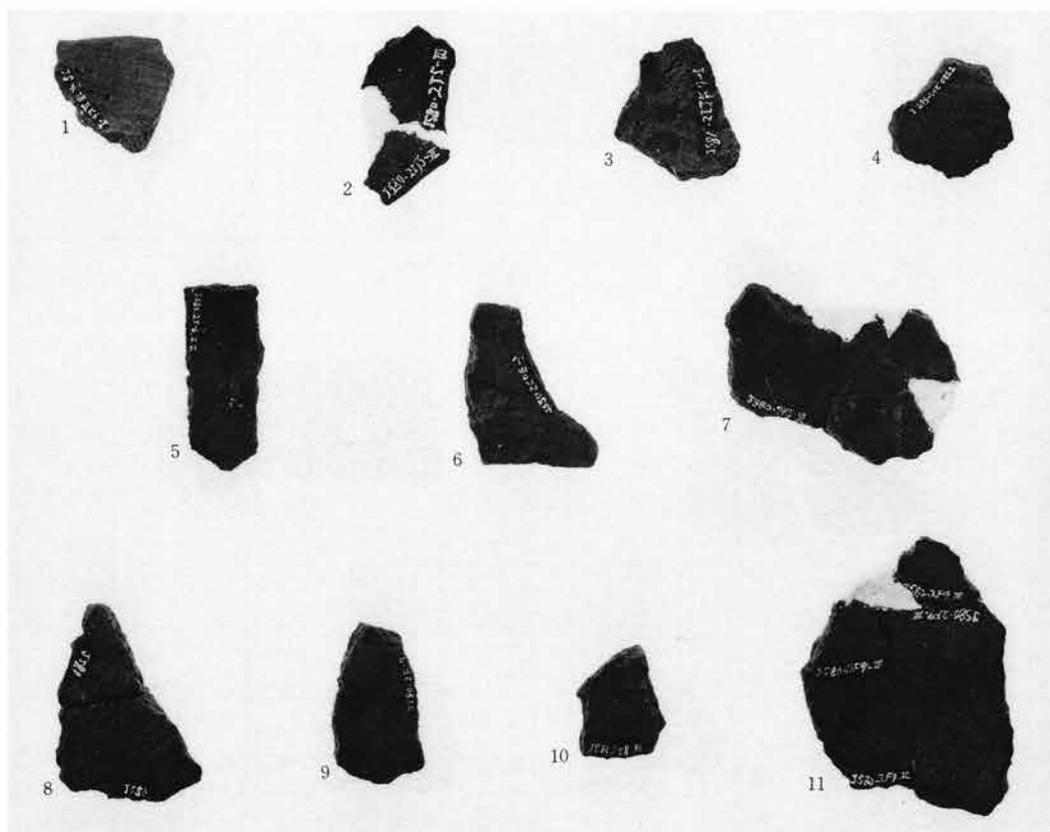
1 第7類土器1〔表〕(約1/2)



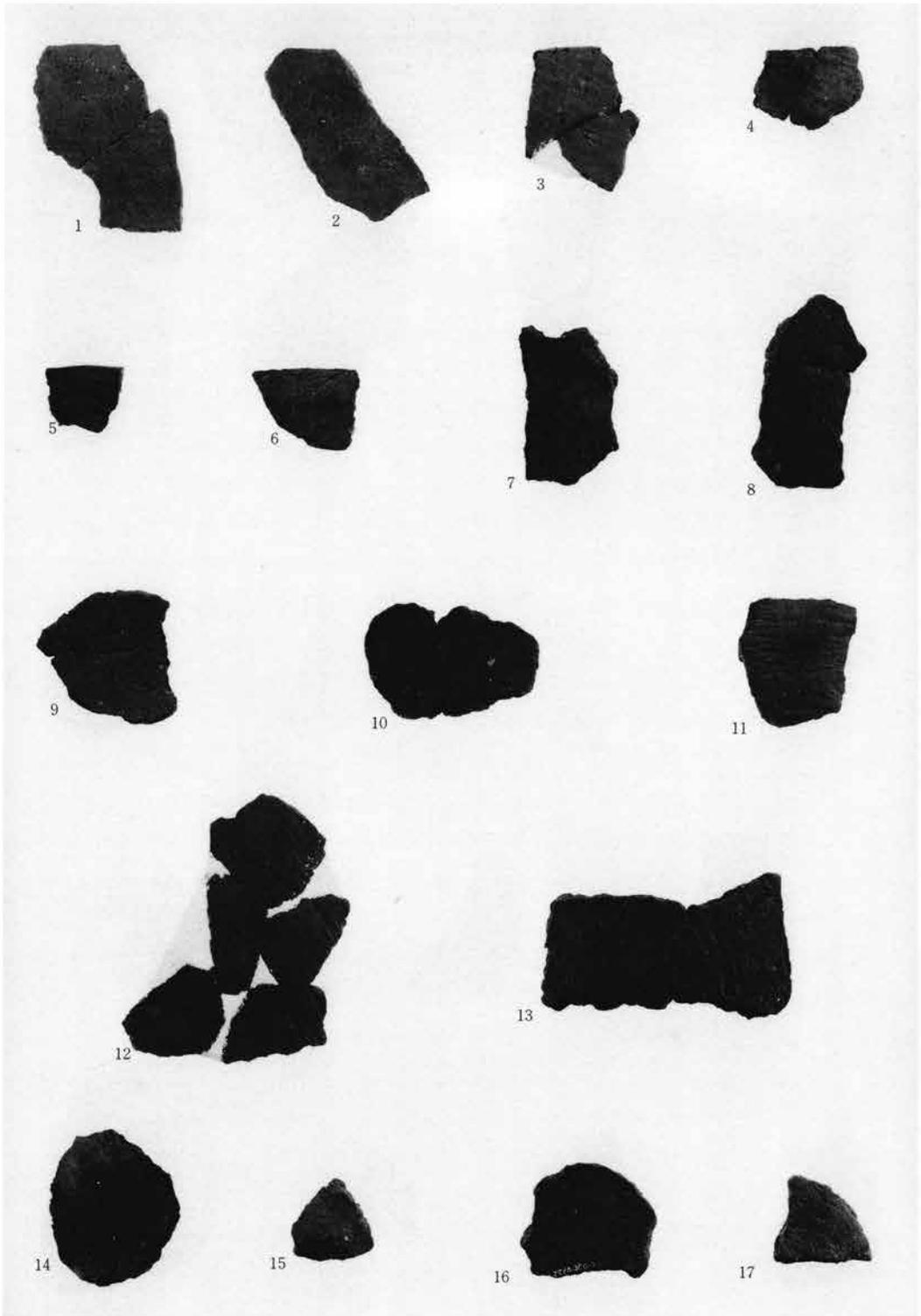
2 第6類土器〔表〕(約1/2)



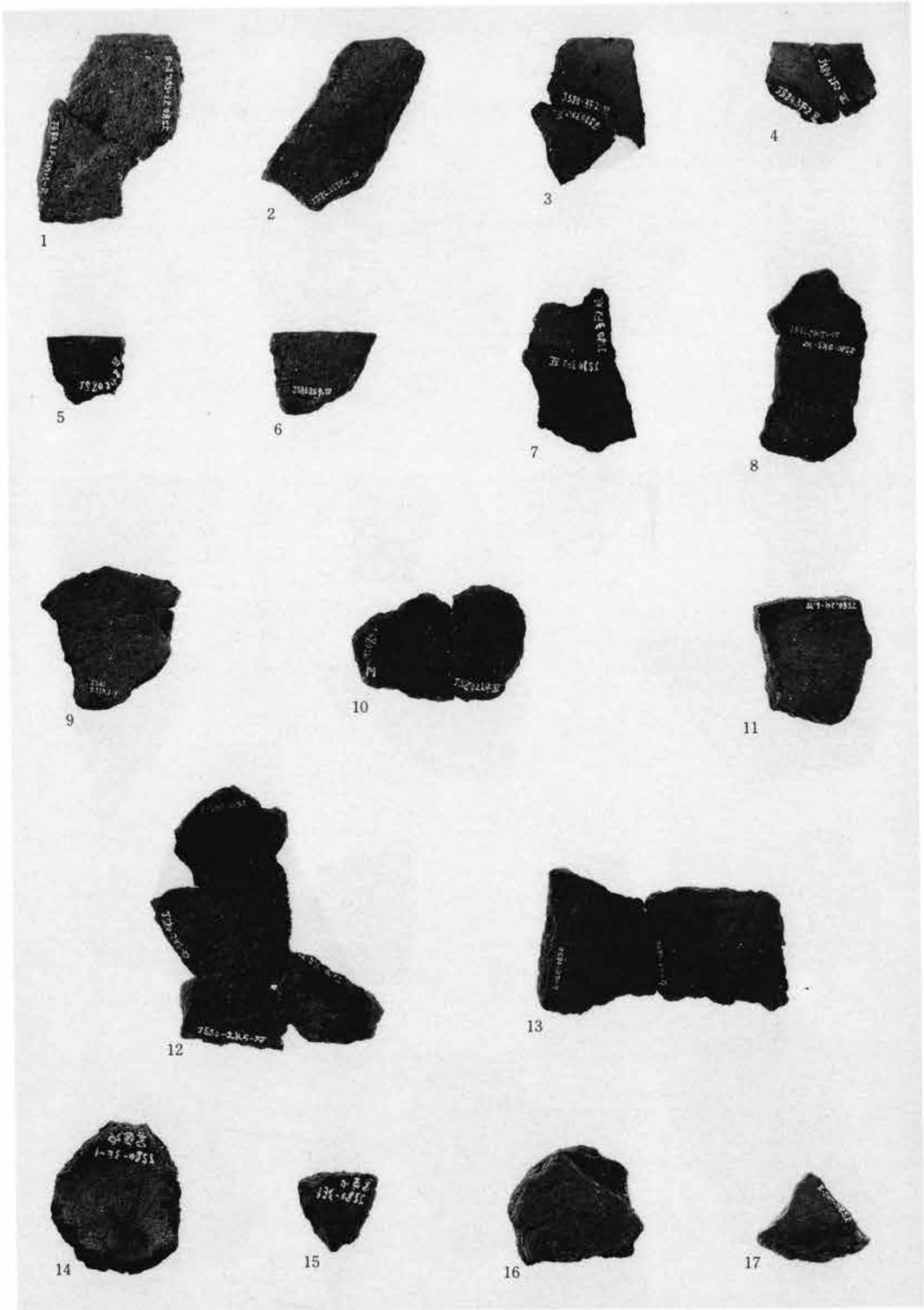
1 第7類土器〔裏〕(約1/2)



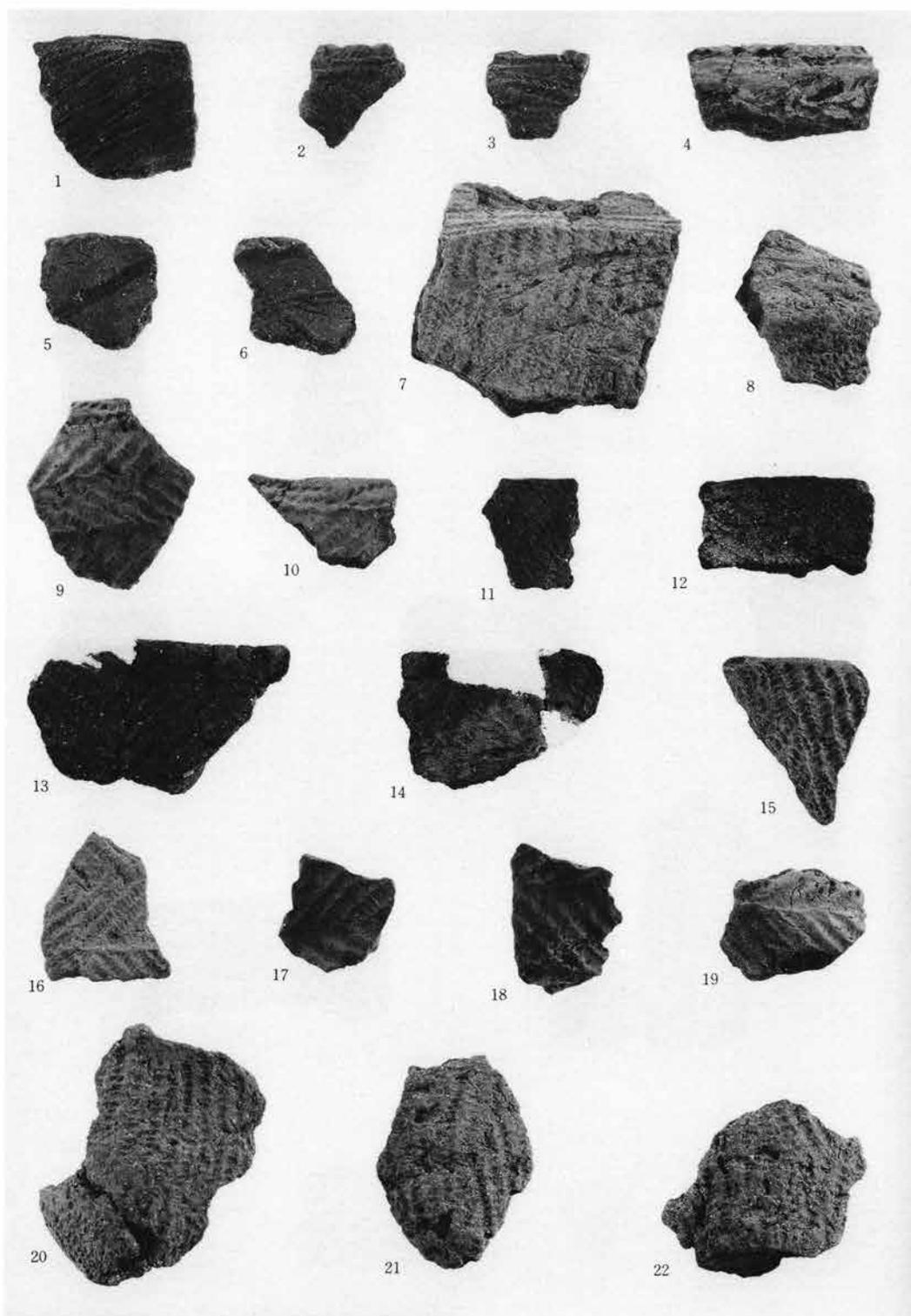
2 第6類土器〔裏〕(約1/2)



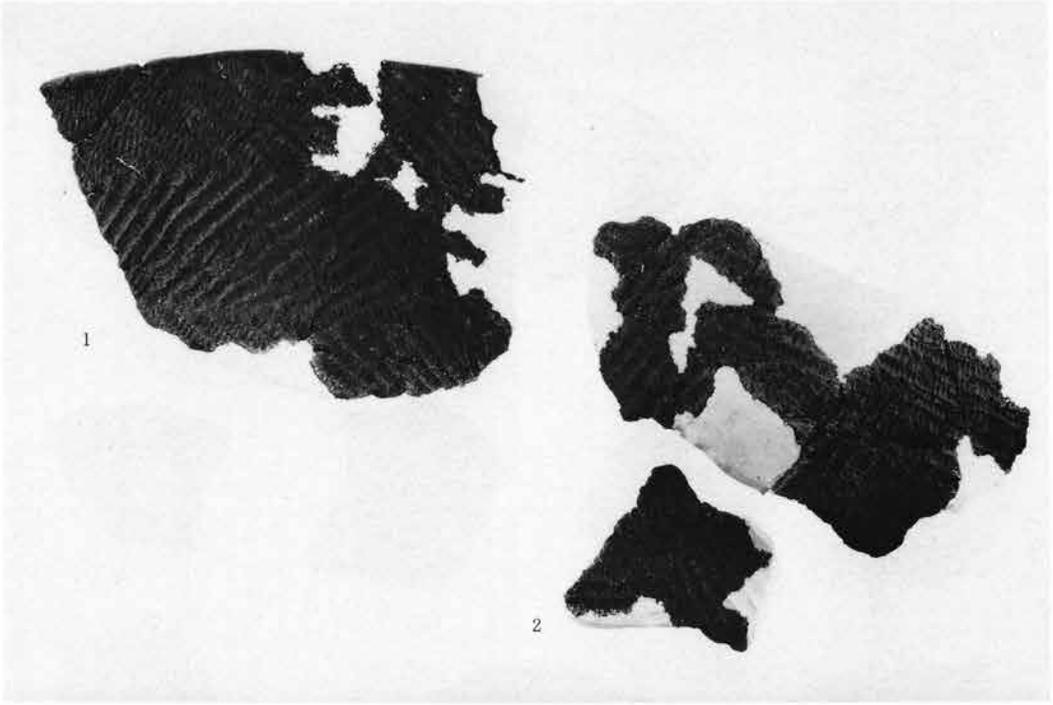
1 第7類土器2〔表〕(約1/2)



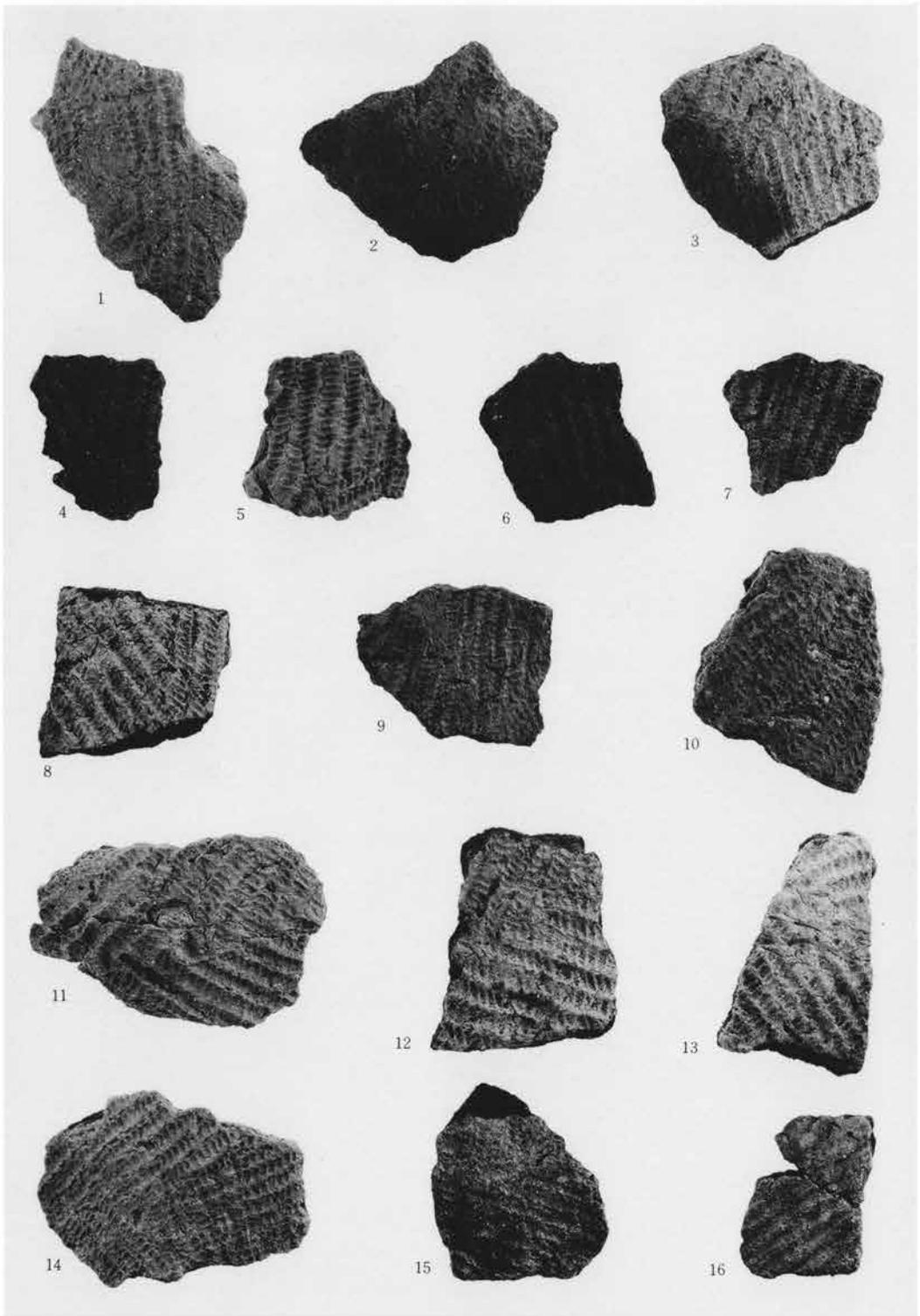
1 第7類土器2〔裏〕(約1/2)



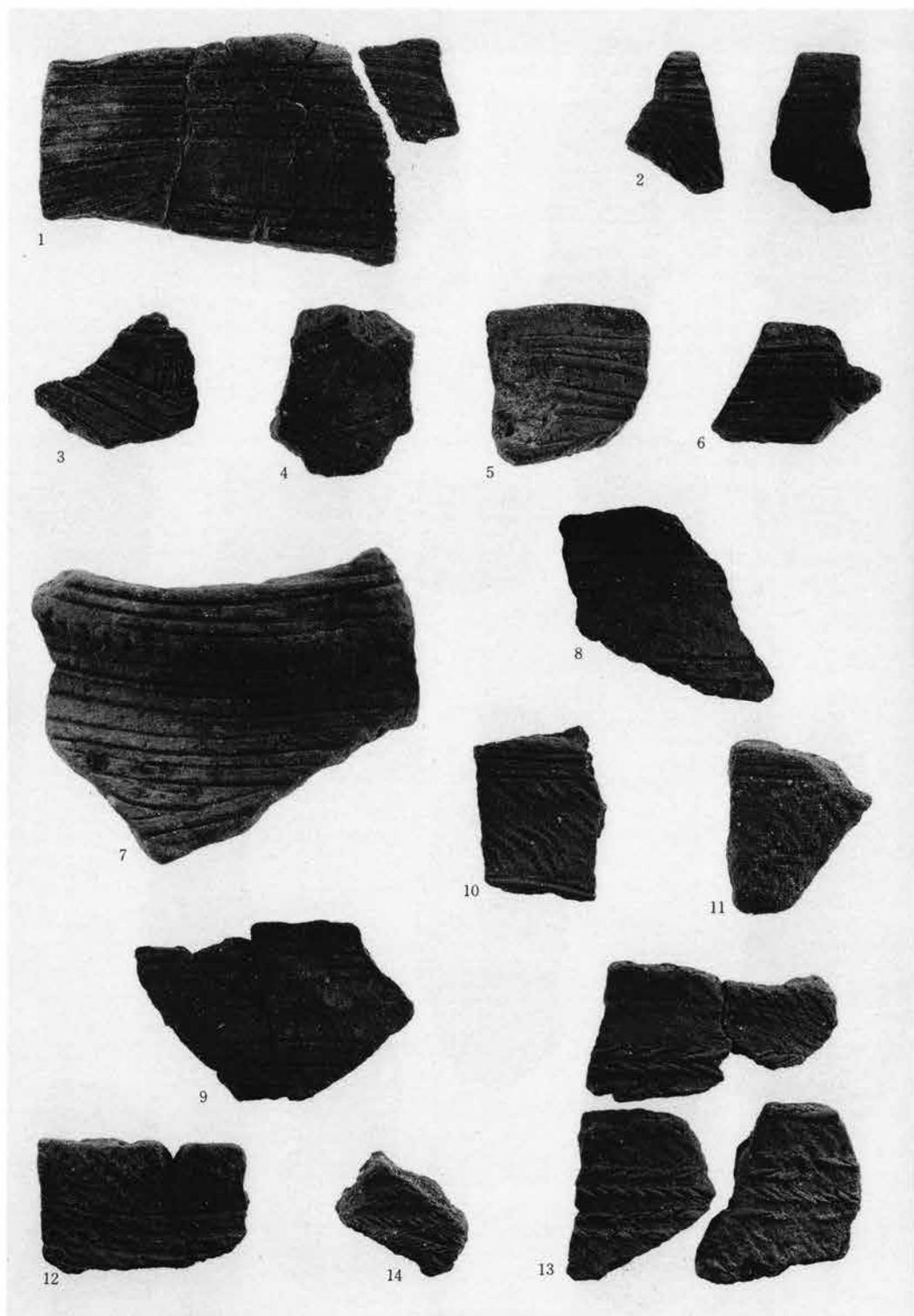
1 第8類土器 (約1/2)



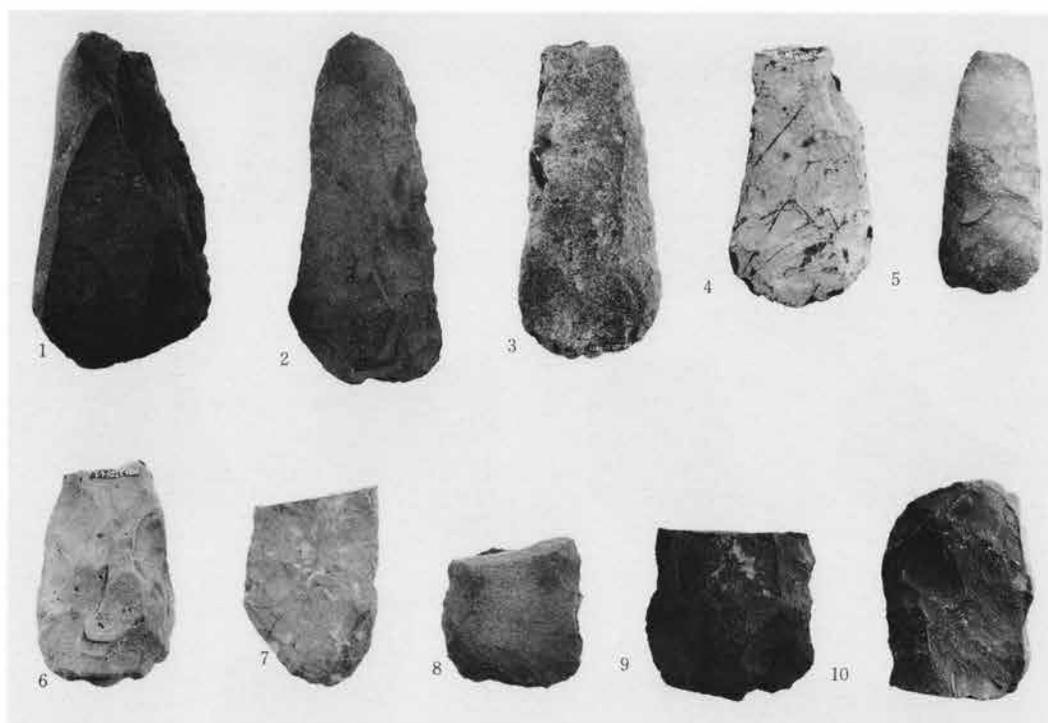
1 第9類土器1 (約1/3)



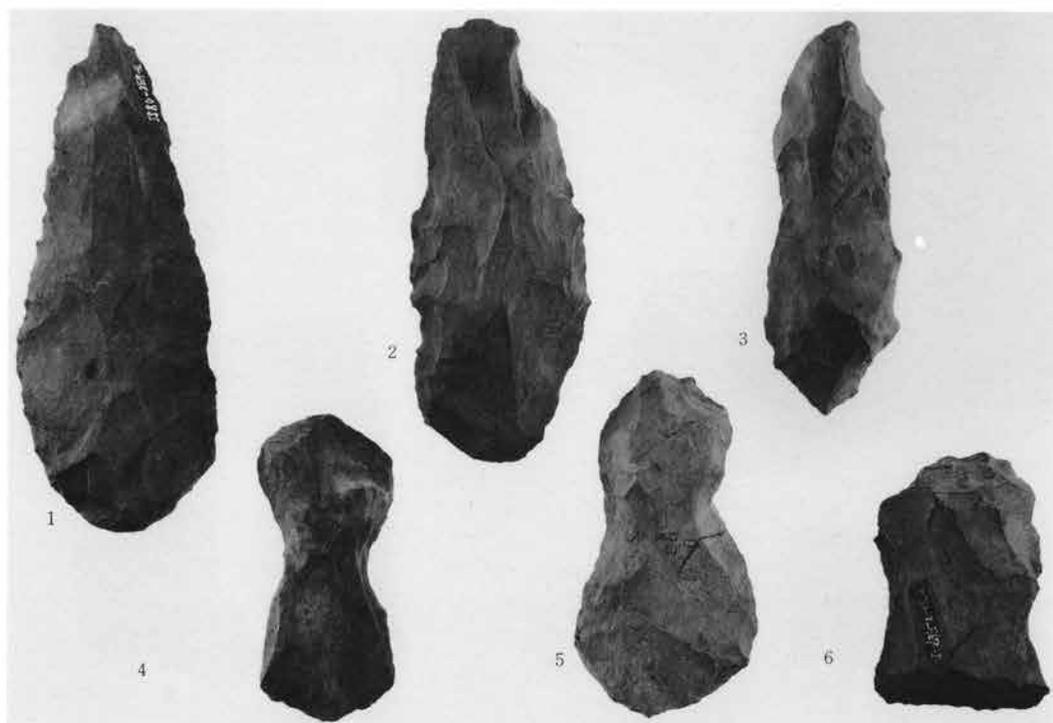
1 第9類土器2 (約1/2)



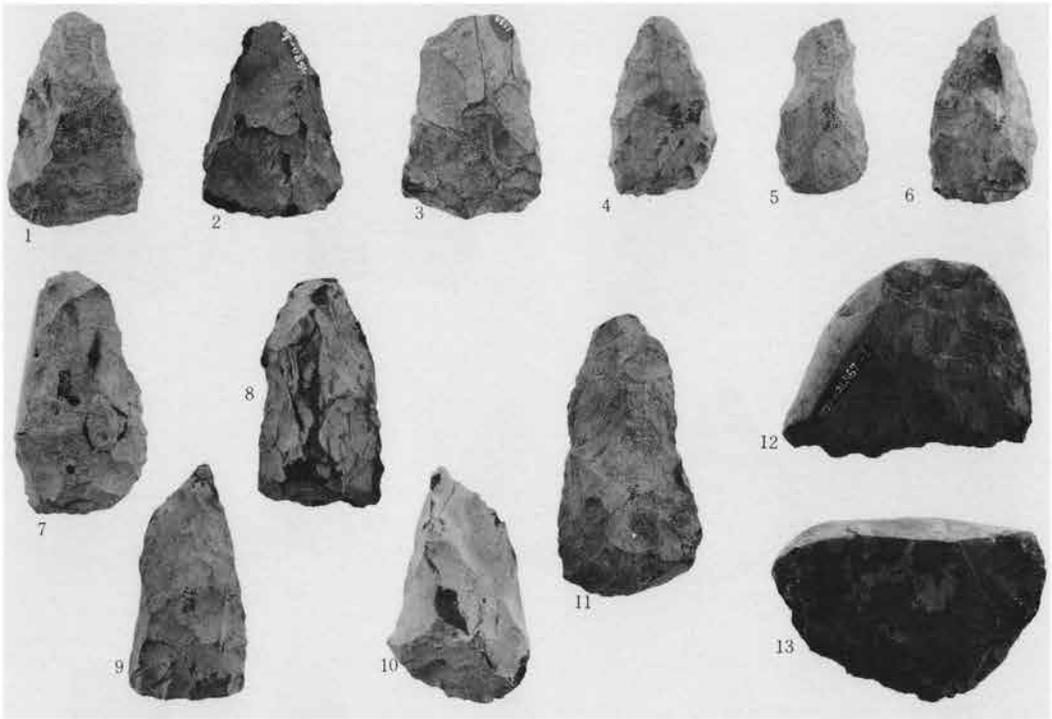
1 第10類土器 (約 1/2)



1 石器1 (約1/3)



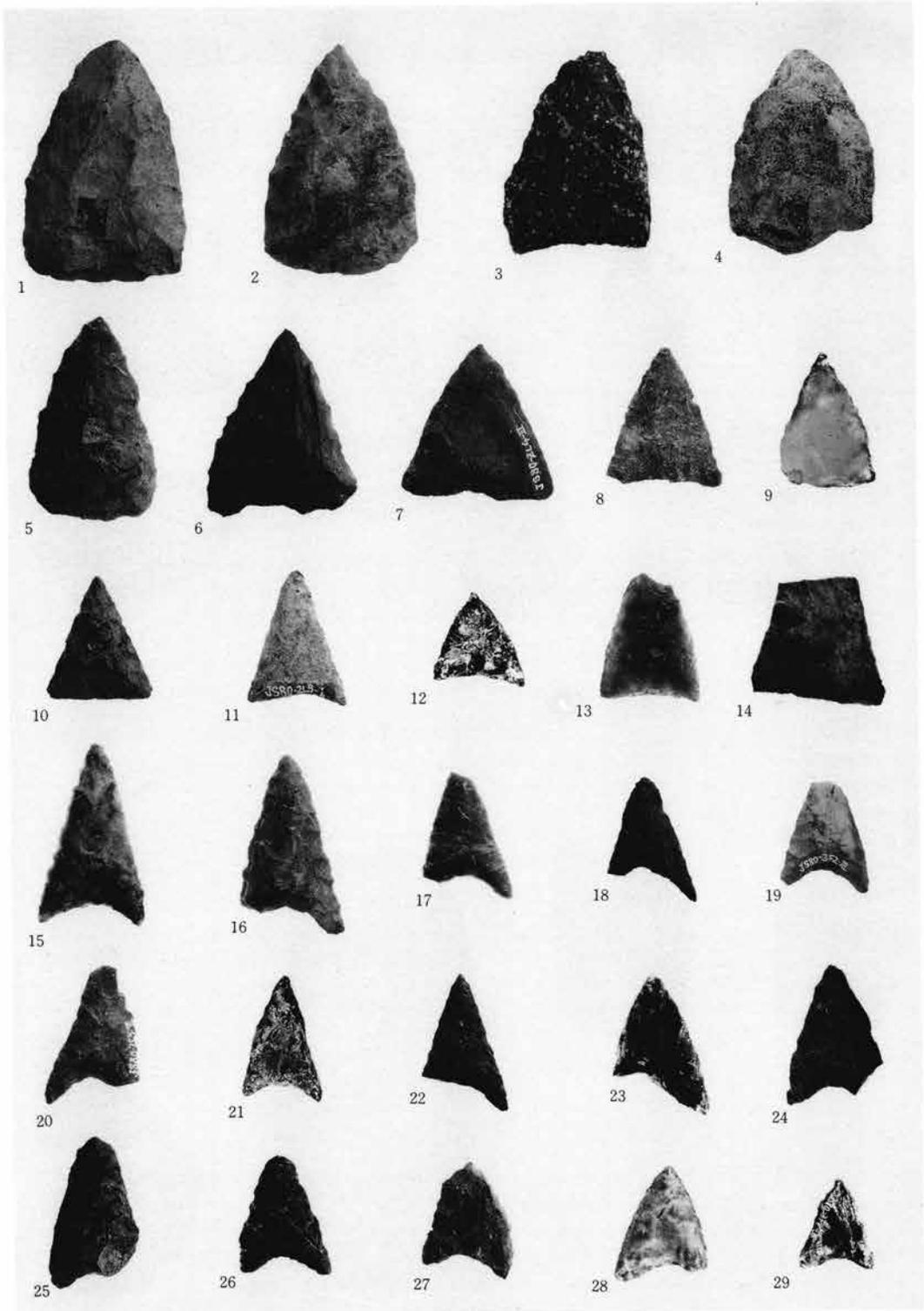
2 石器2 (約1/3)



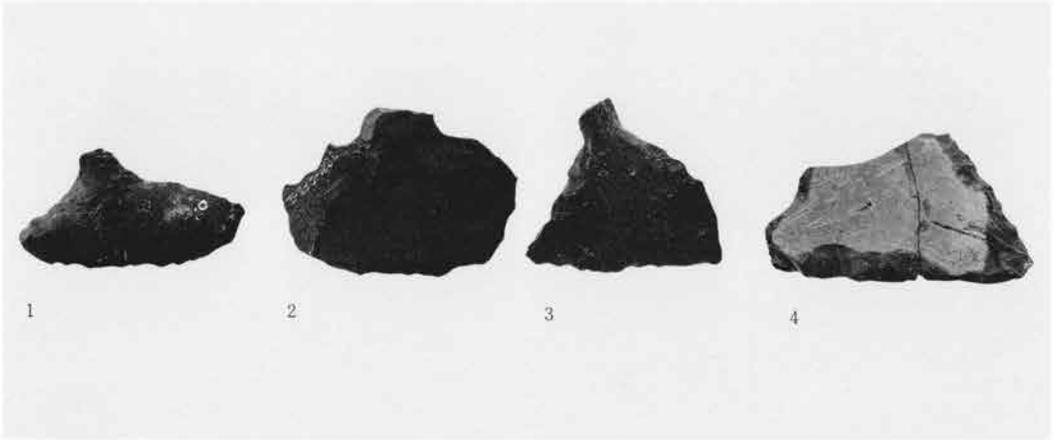
1 石器3 (約1/3)



2 石器4 (約1/3)



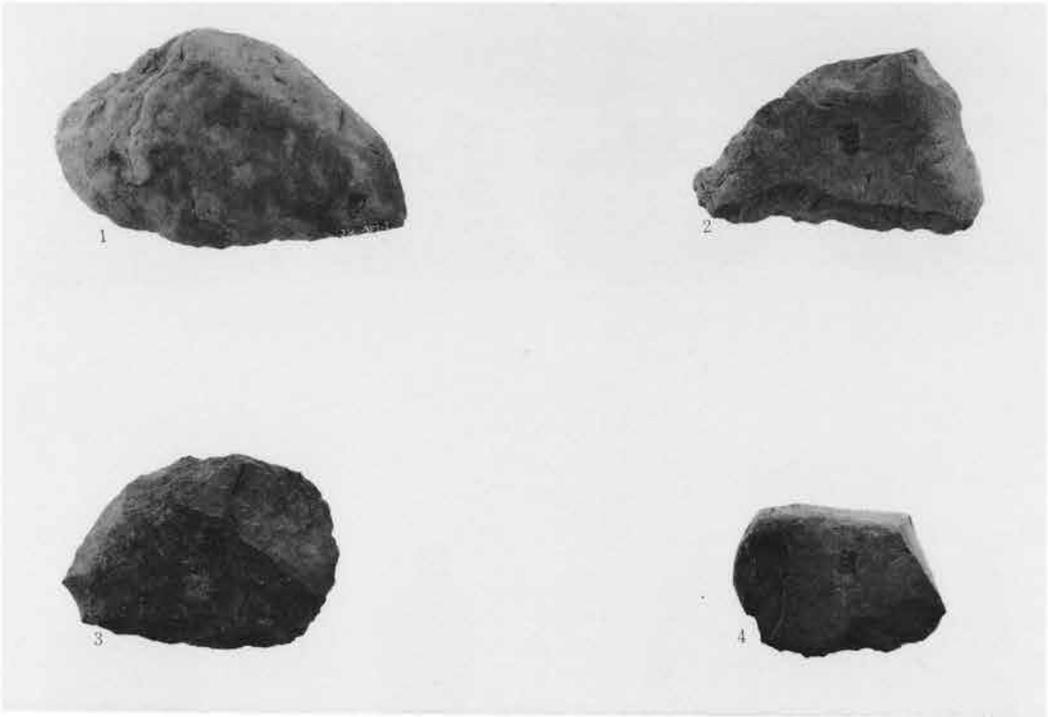
1 石器5 (約1/1)



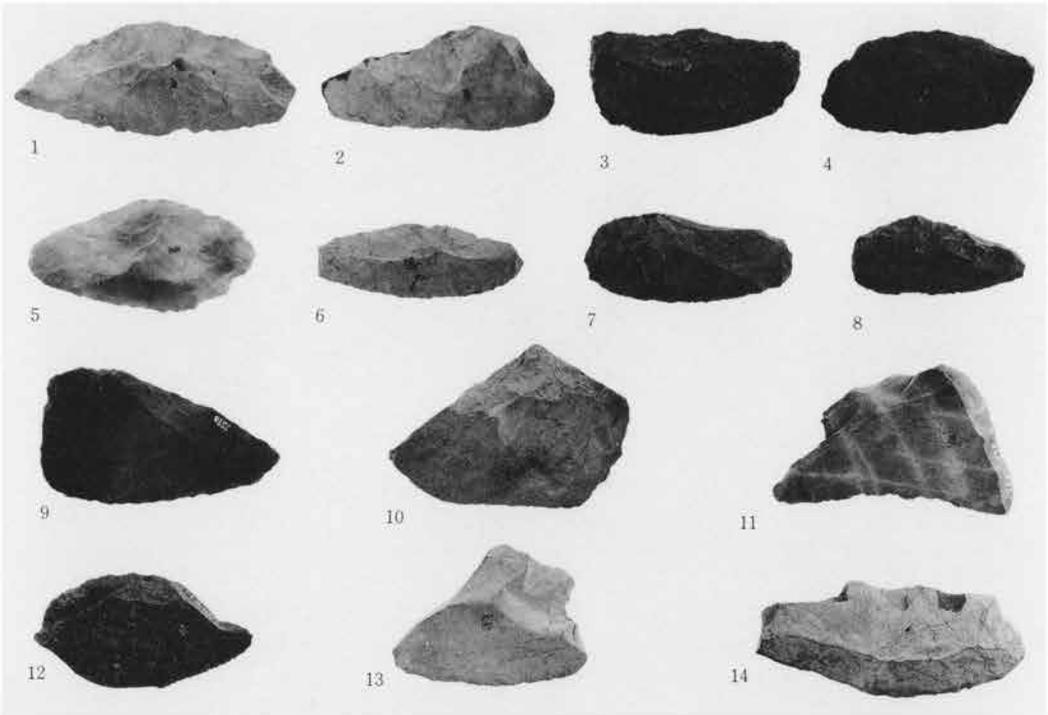
1 石器6 (約1/3)



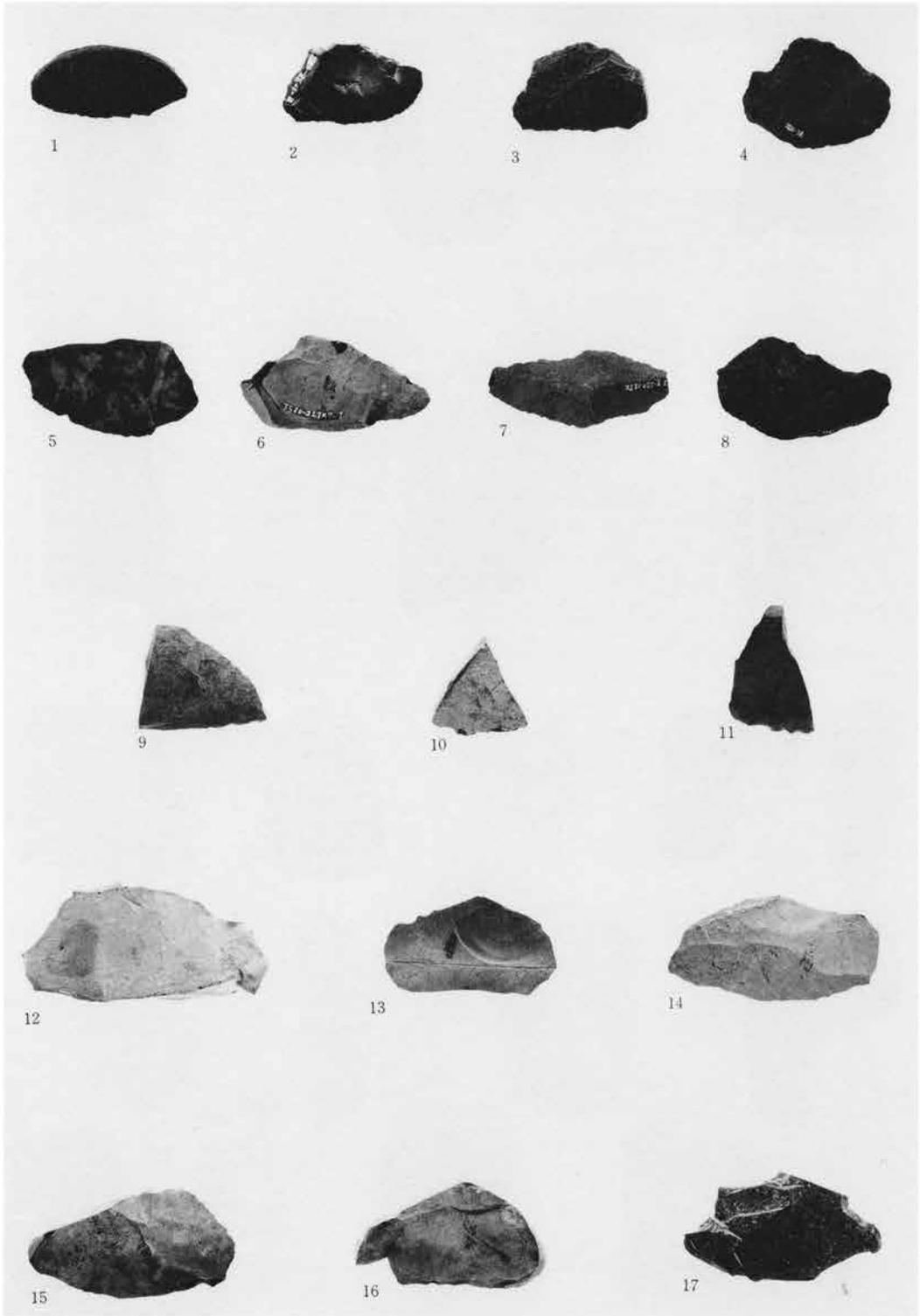
2 石器7 (1~8=約1/2、9・10=約1/1)



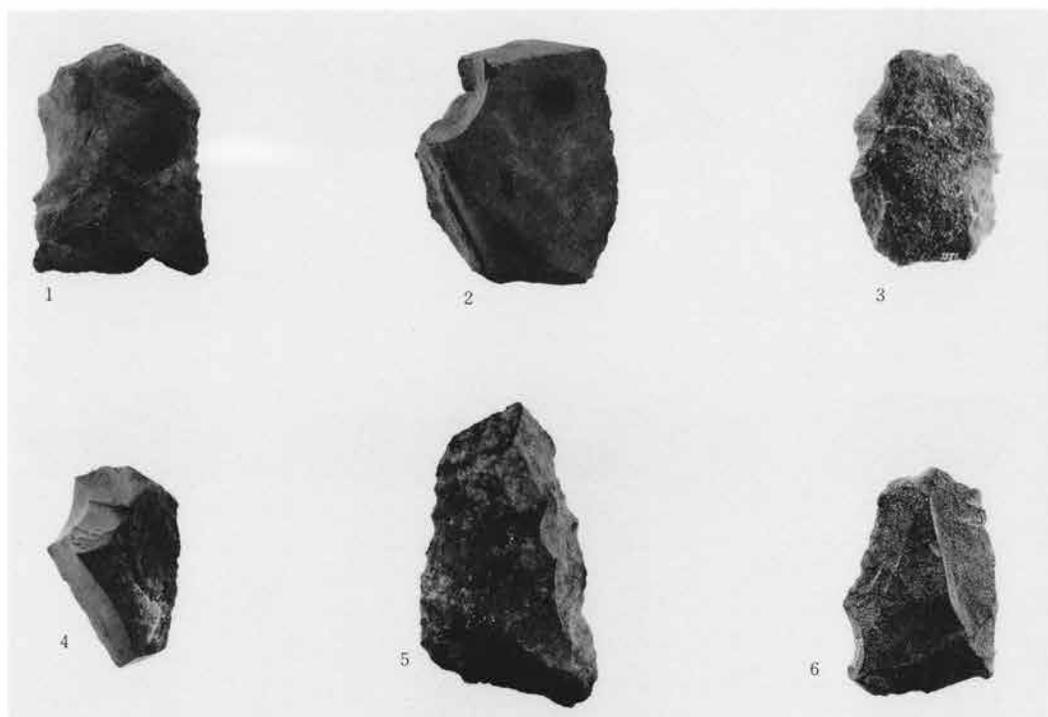
1 石器8 (約1/3)



2 石器9 (約1/3)



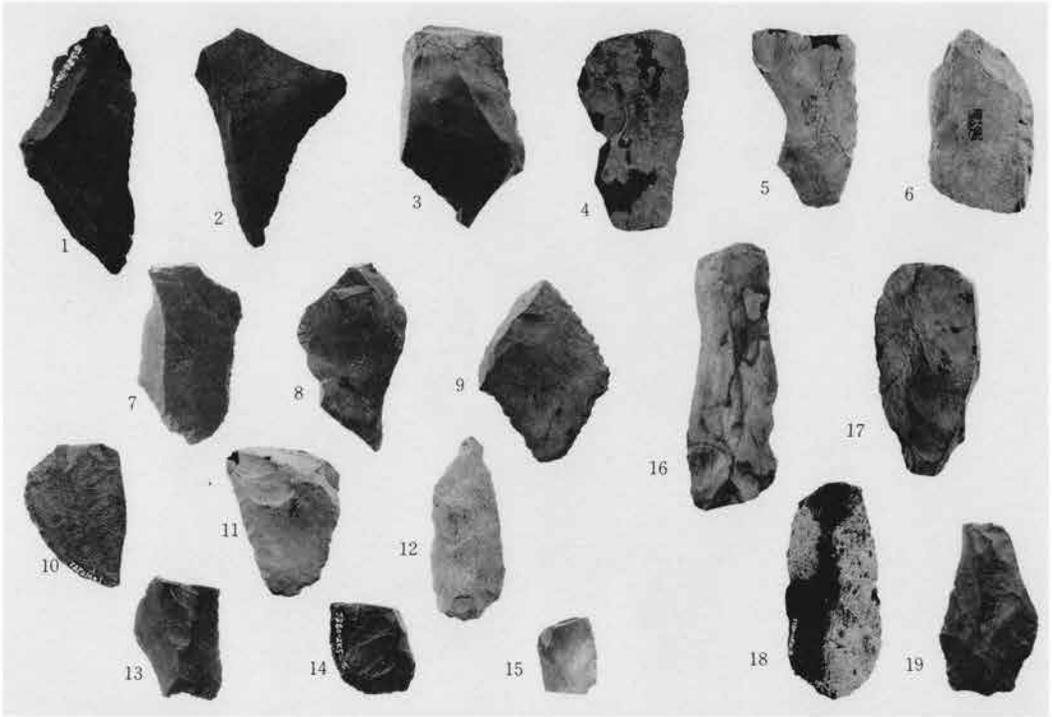
1 石器10 (約1/3)



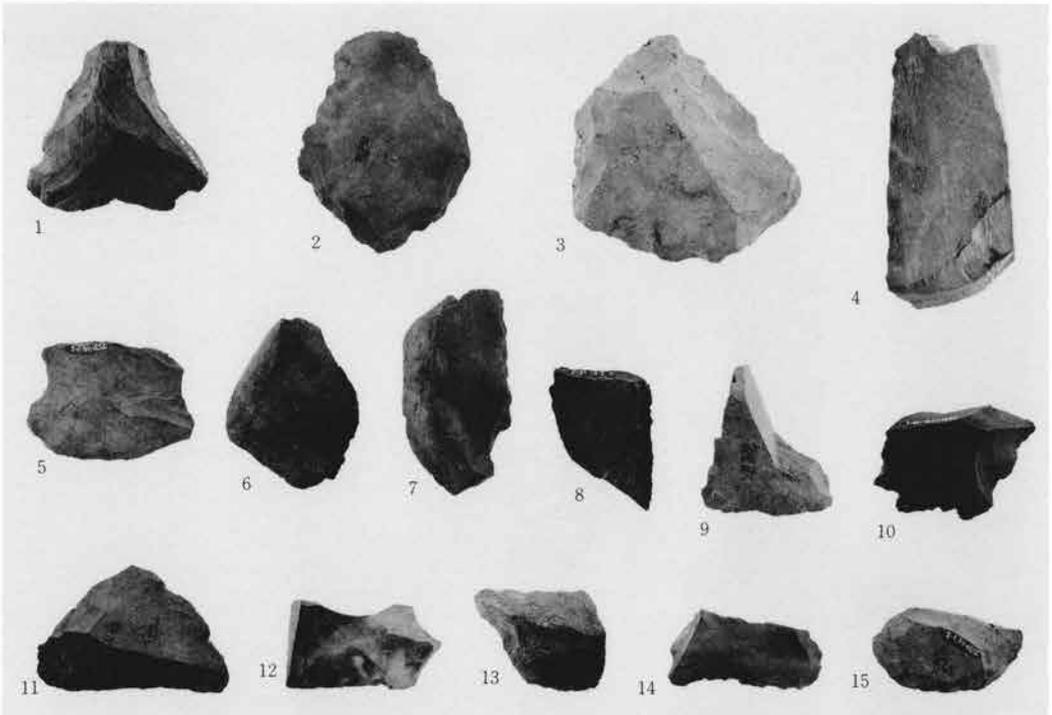
1 石器11 (約 1/3)



2 石器12 (約 1/3)



1 石器13 (約1/3)



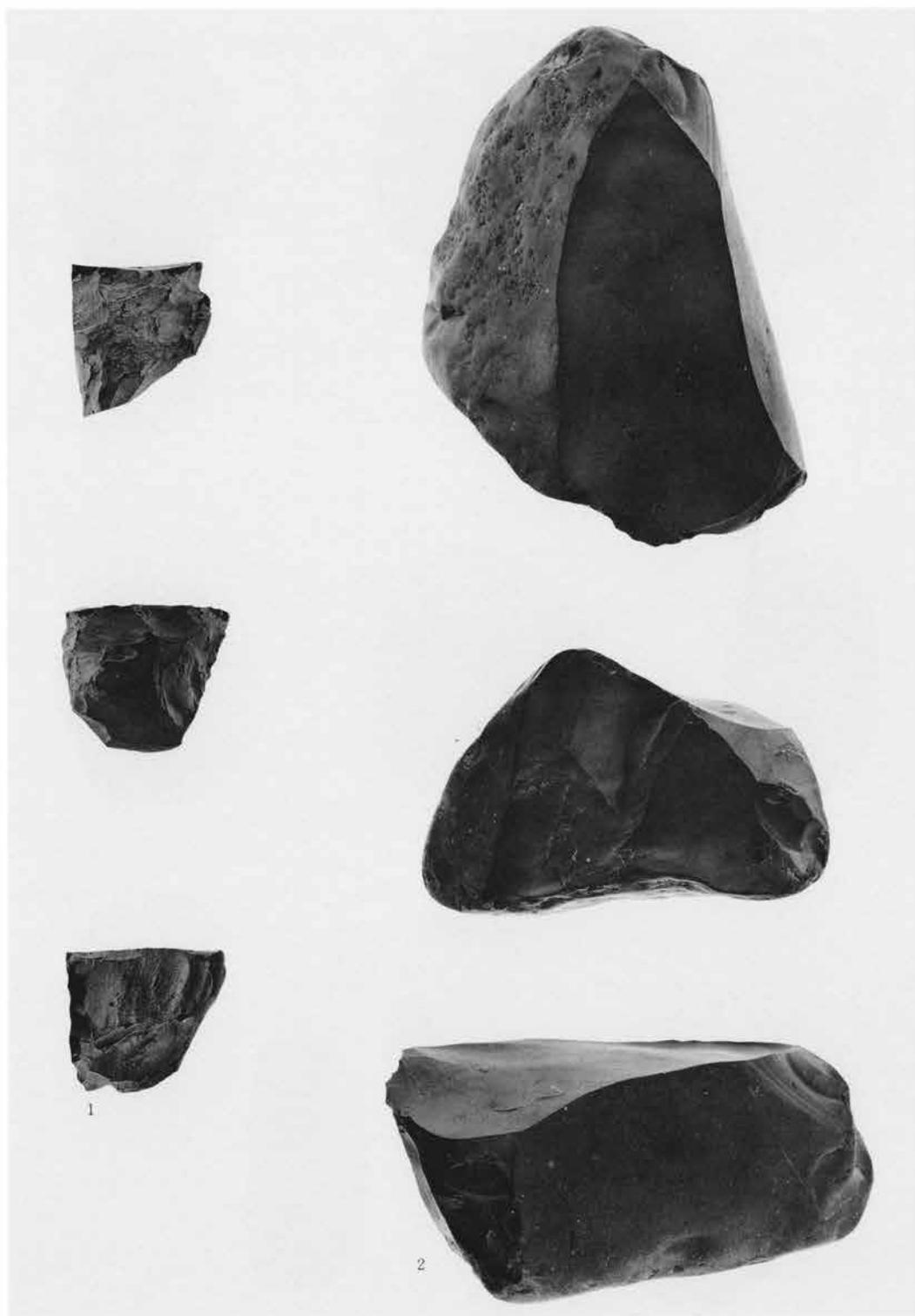
2 石器14 (約1/3)



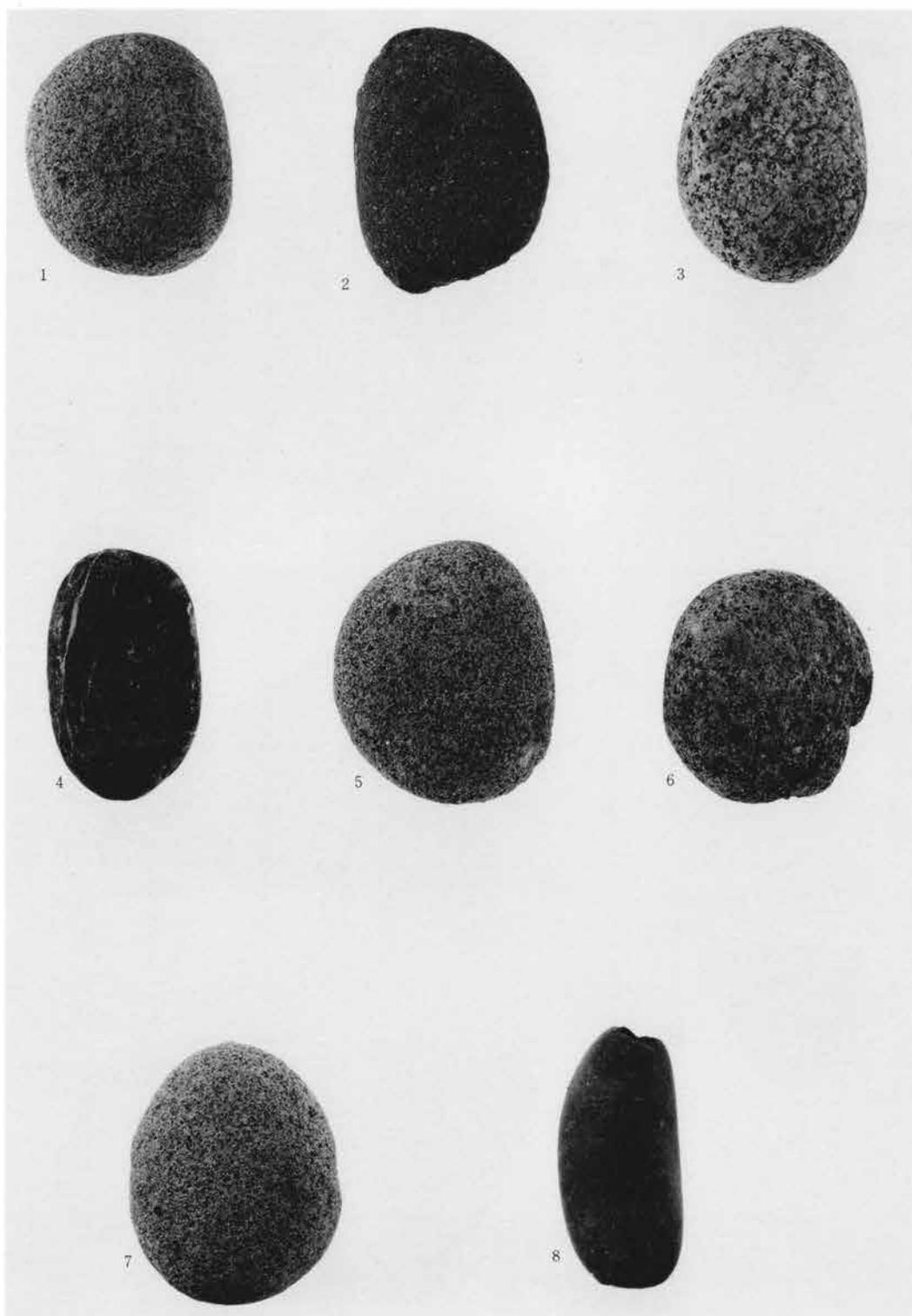
1 石器15 (約1/3)



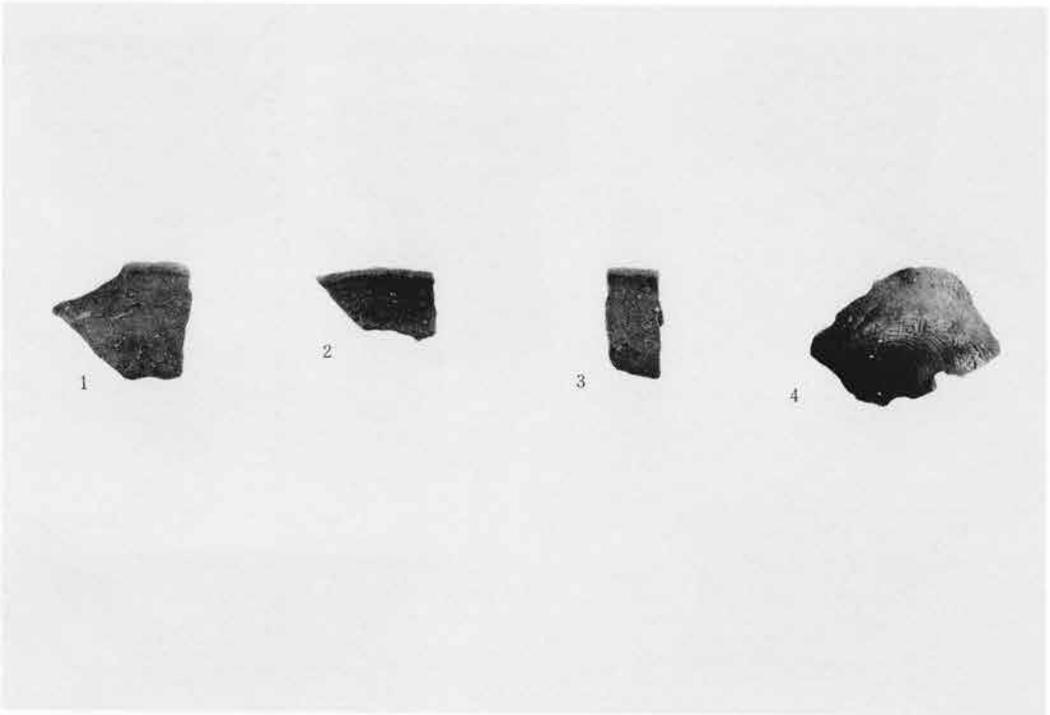
2 石器17 (約1/2)



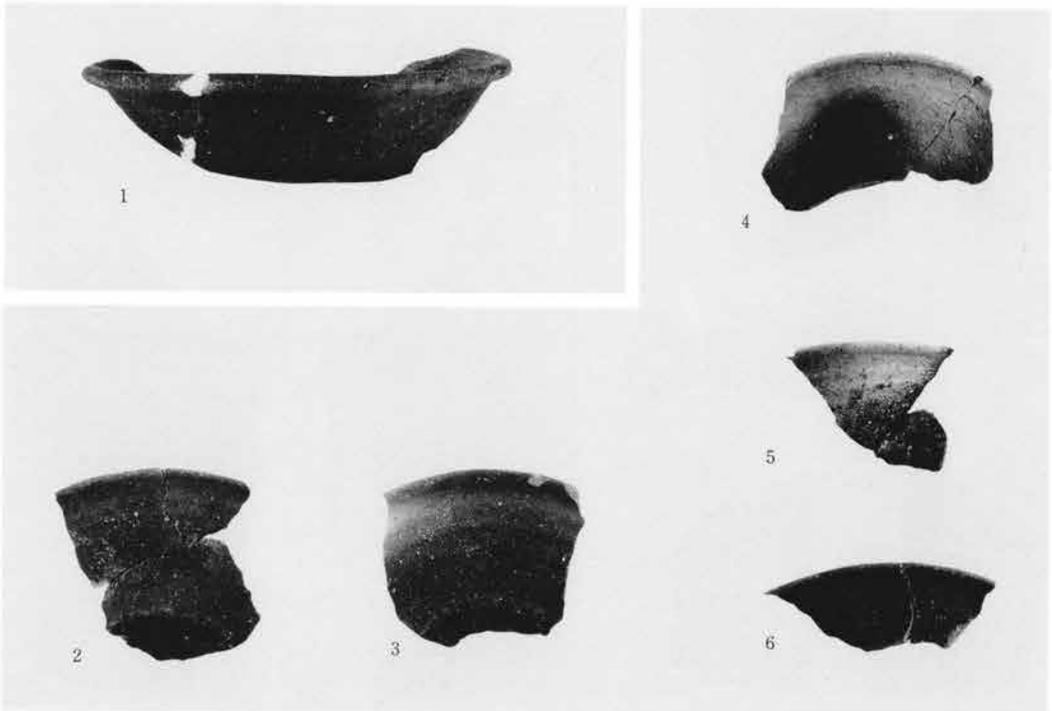
1 石器16 (約1/3)



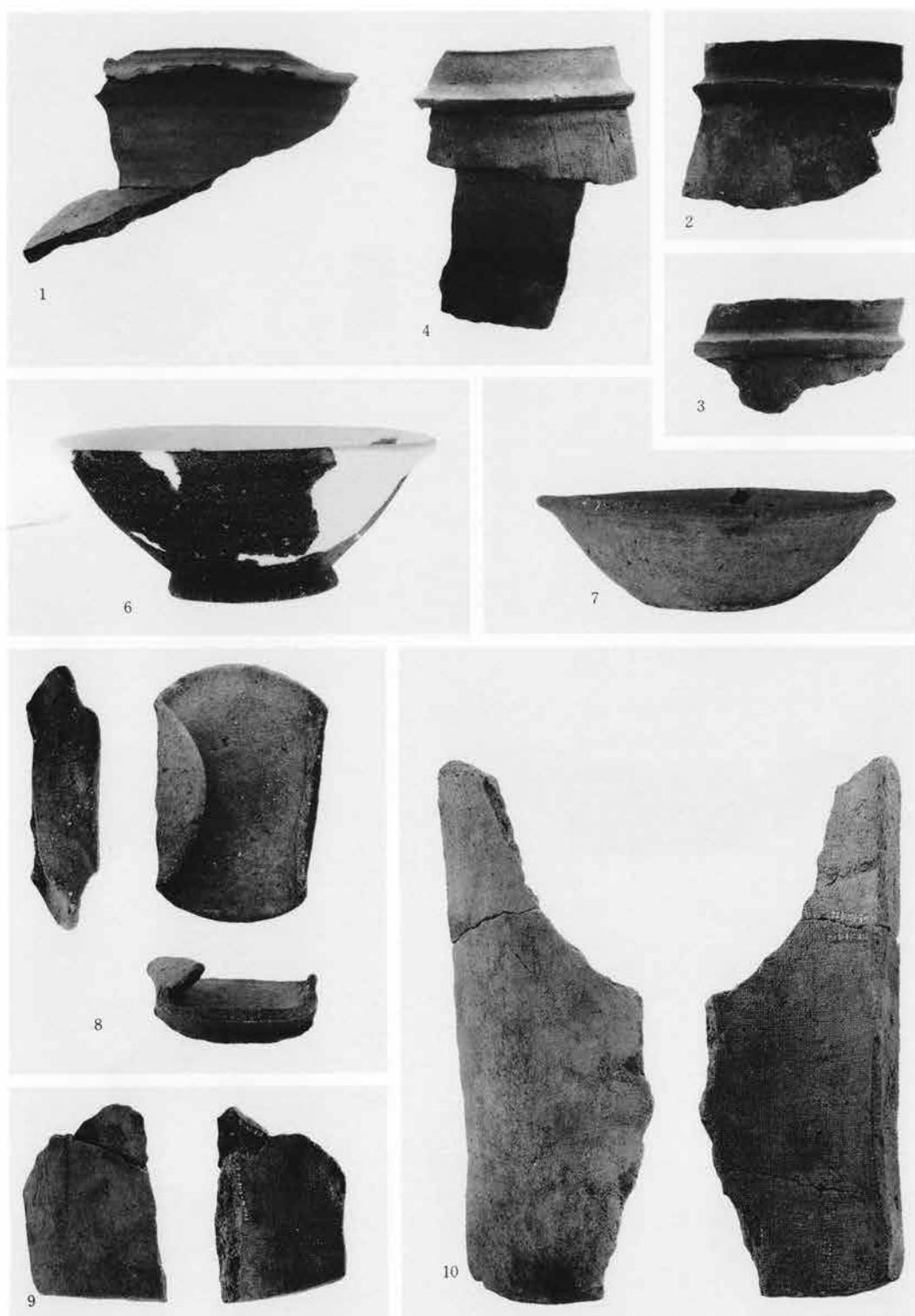
1 石器18 (約1/3)



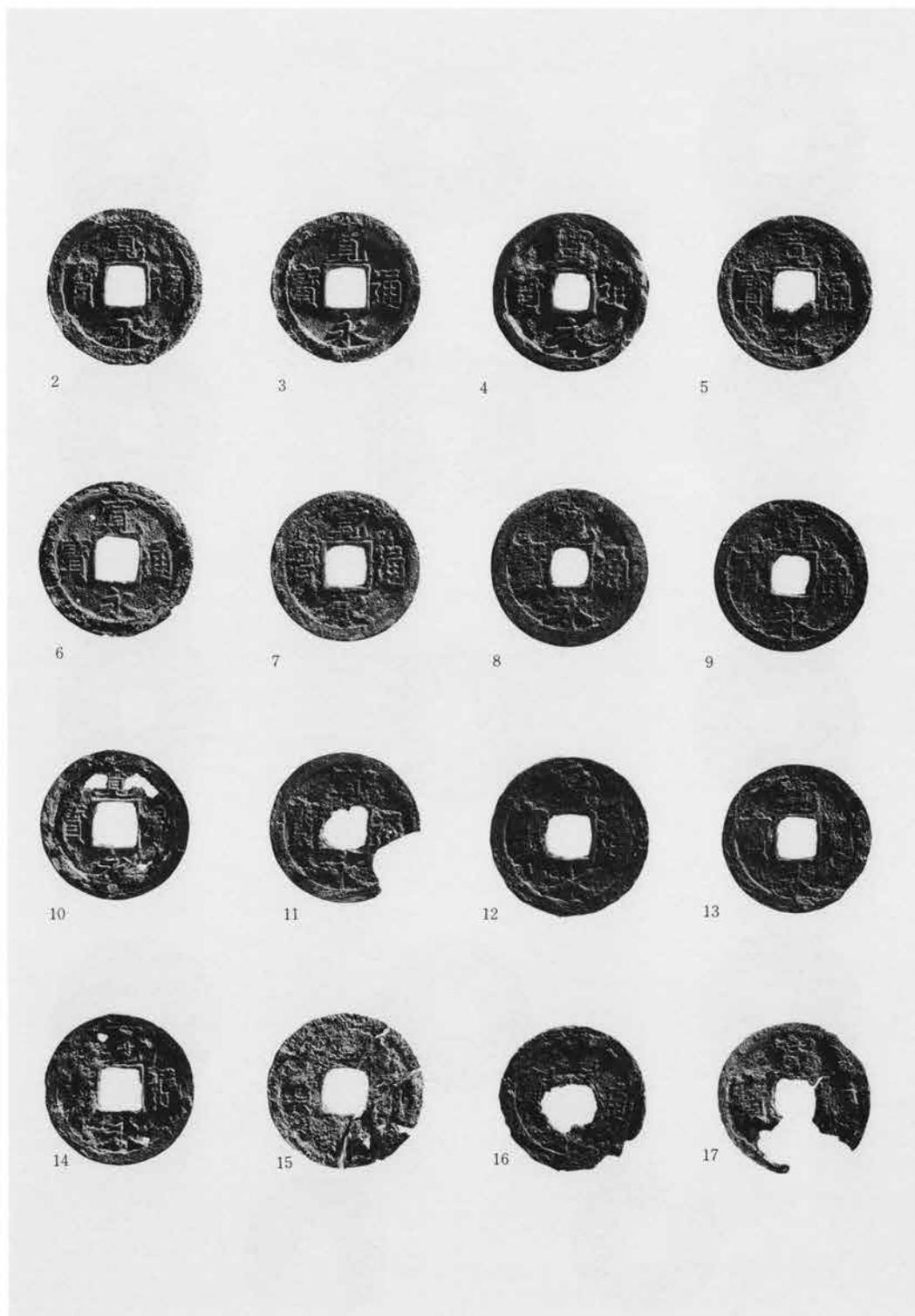
1 5号住居址出土土器 (約1/3)



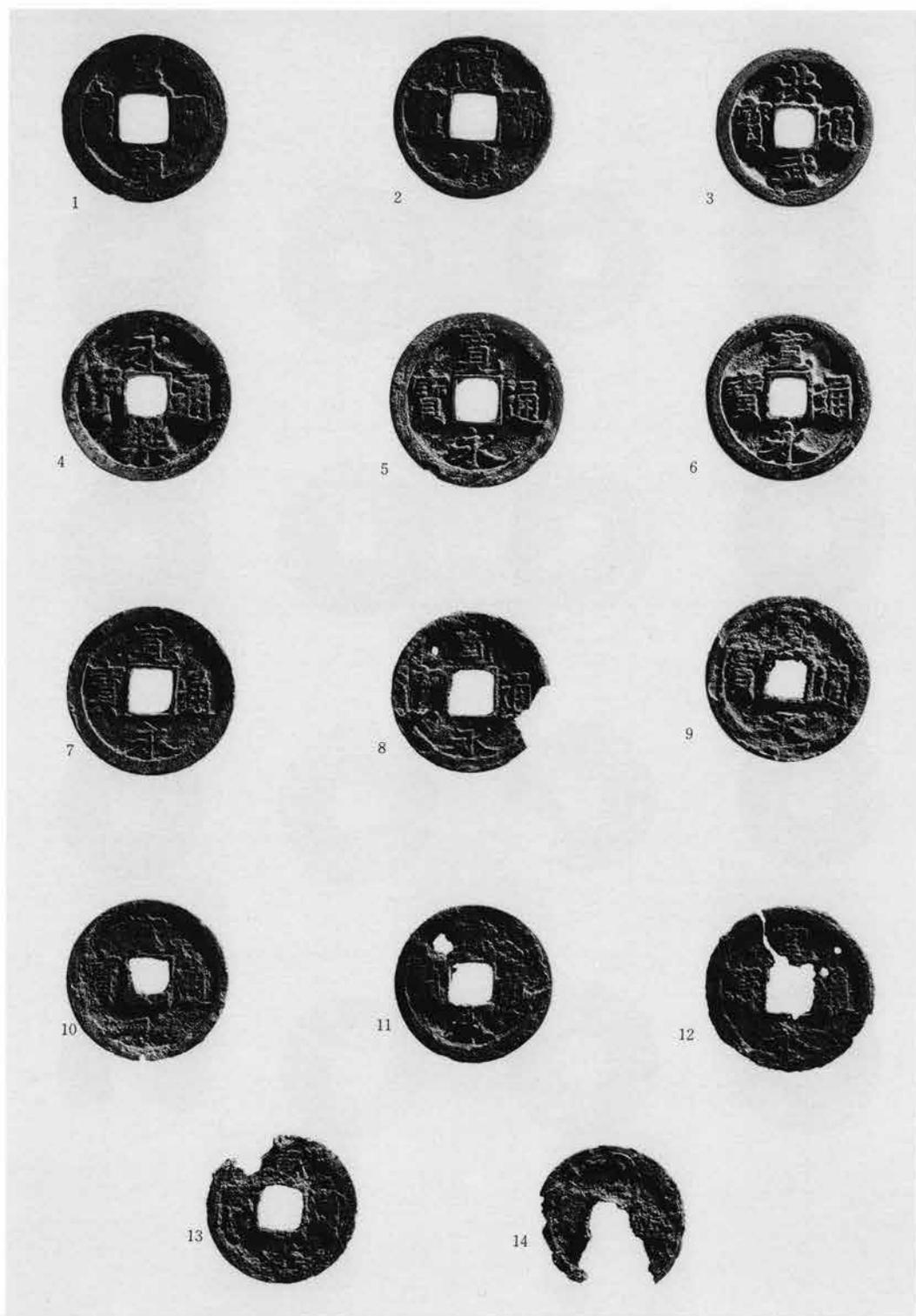
2 平安時代1号土壇出土土器 (約1/3)



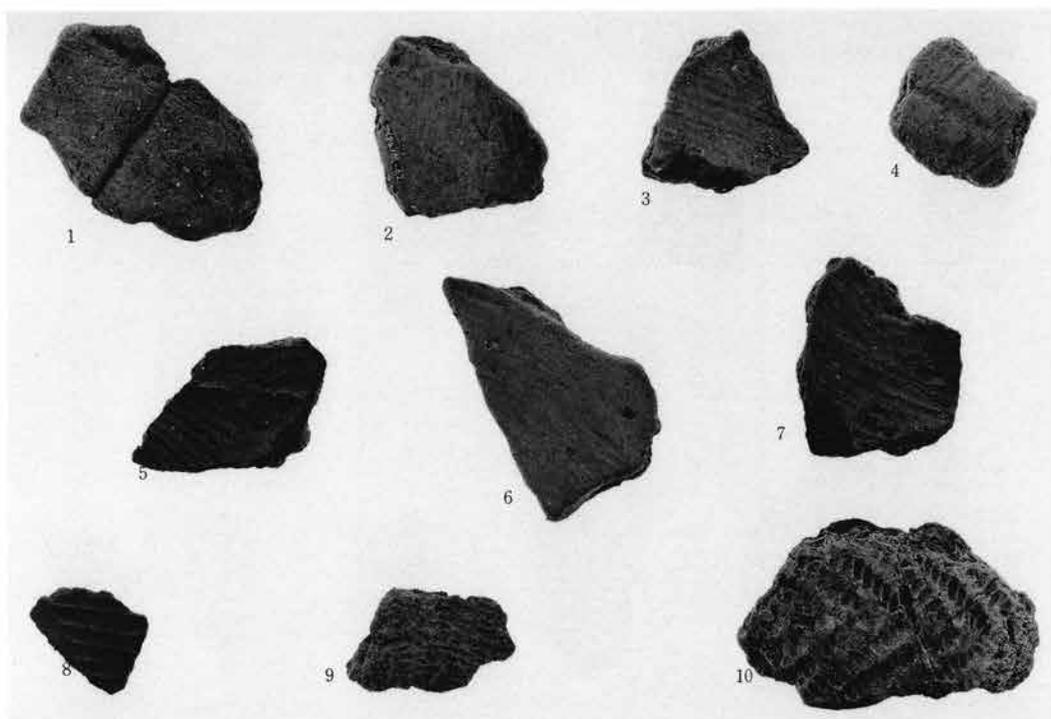
1 グリッド出土の平安時代の遺物 (1~8=約1/3、9・10=約1/6)



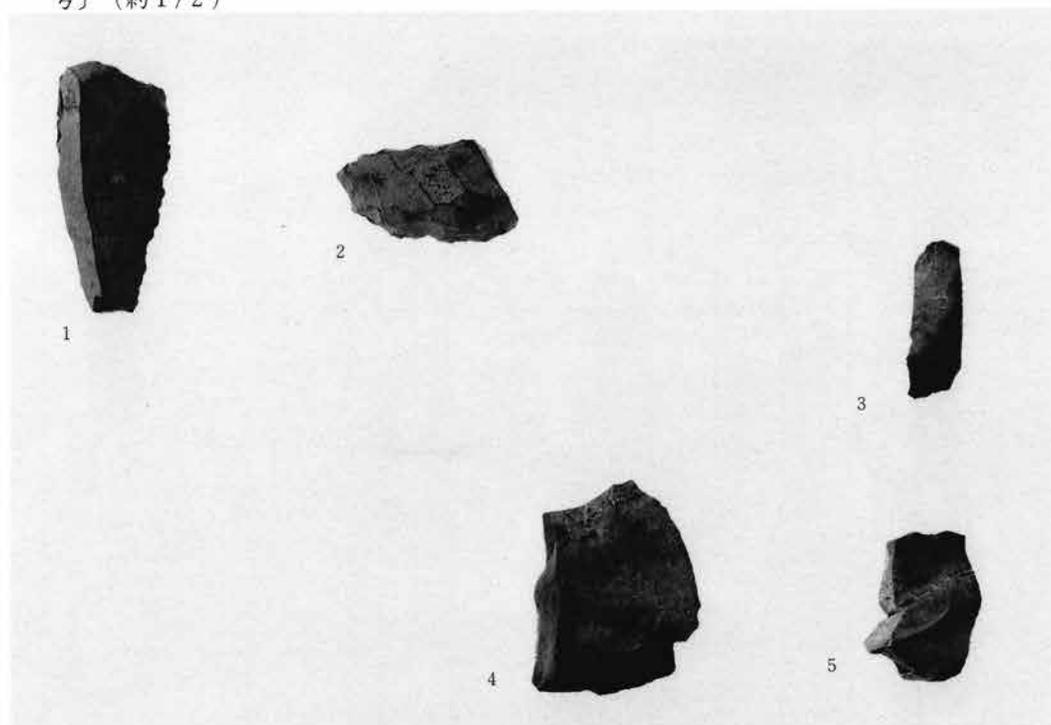
1 3号墓塚出土の古銭 (約1/1)



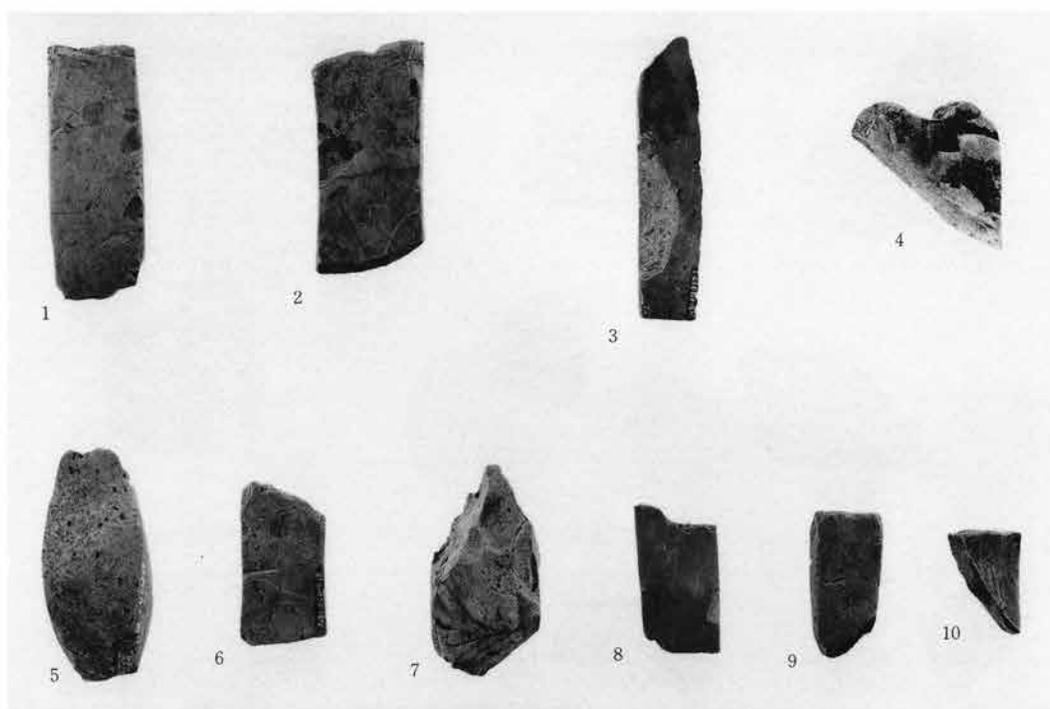
1 グリッド出土の古銭 (約1/1)



1 時期不明土坑出土石器〔1~4=1号、5・6=4号、7・8=5号、9=6号、10=12号〕(約1/2)



2 時期不明土坑出土石器〔1・2=4号、3~5=10号〕(約1/3)



1 グリッド出土の砥石 (約1/3)



2 第1次調査時調査スタッフ一同

十二原・大原・前中原遺跡

—上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第1集—

印刷 昭和57年3月26日

発行 昭和57年3月31日

編集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-2511(代)

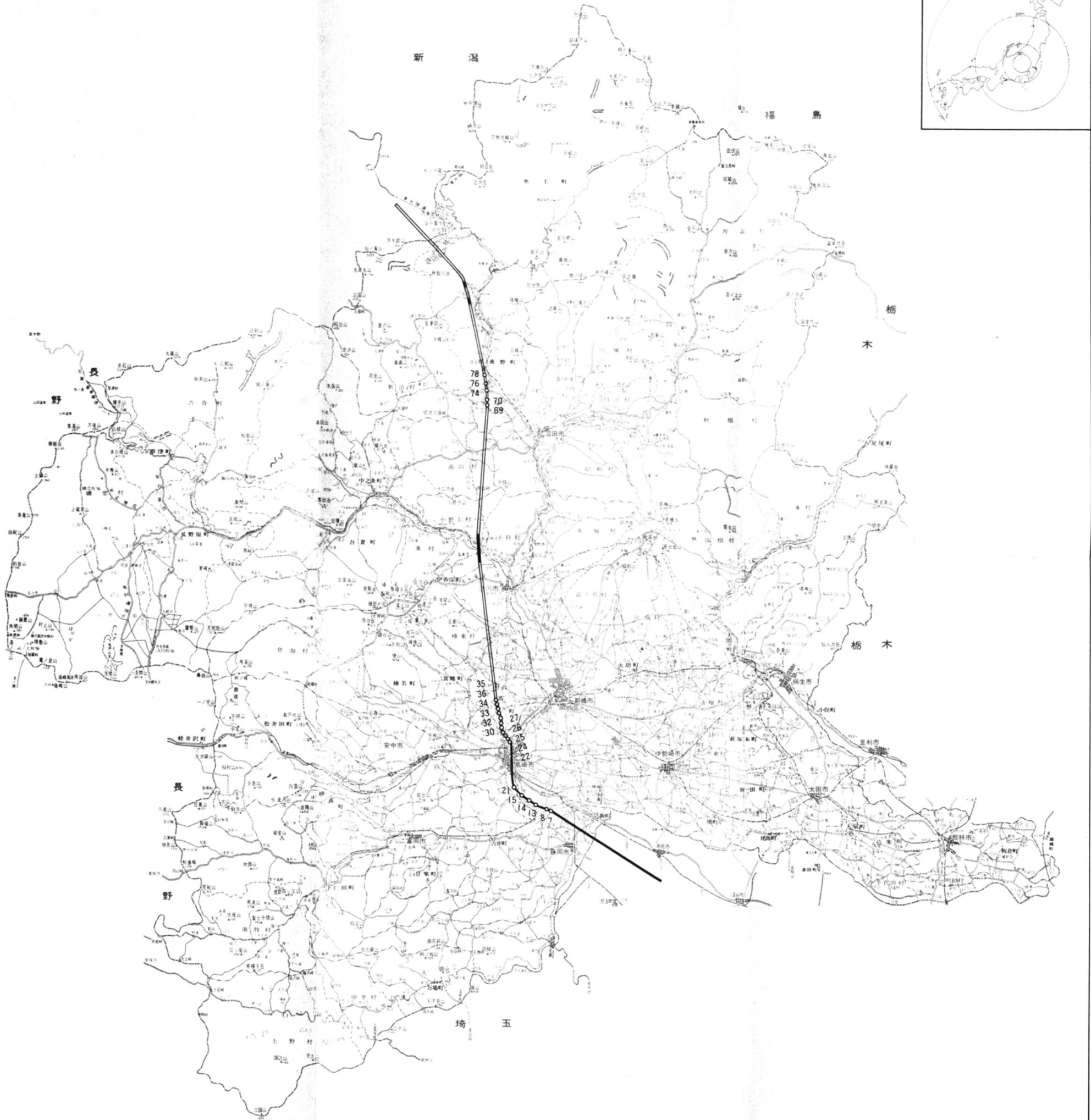
発行 群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-2511(代)

印刷 朝日印刷工業株式会社

十二原・大原・前中原遺跡正誤表

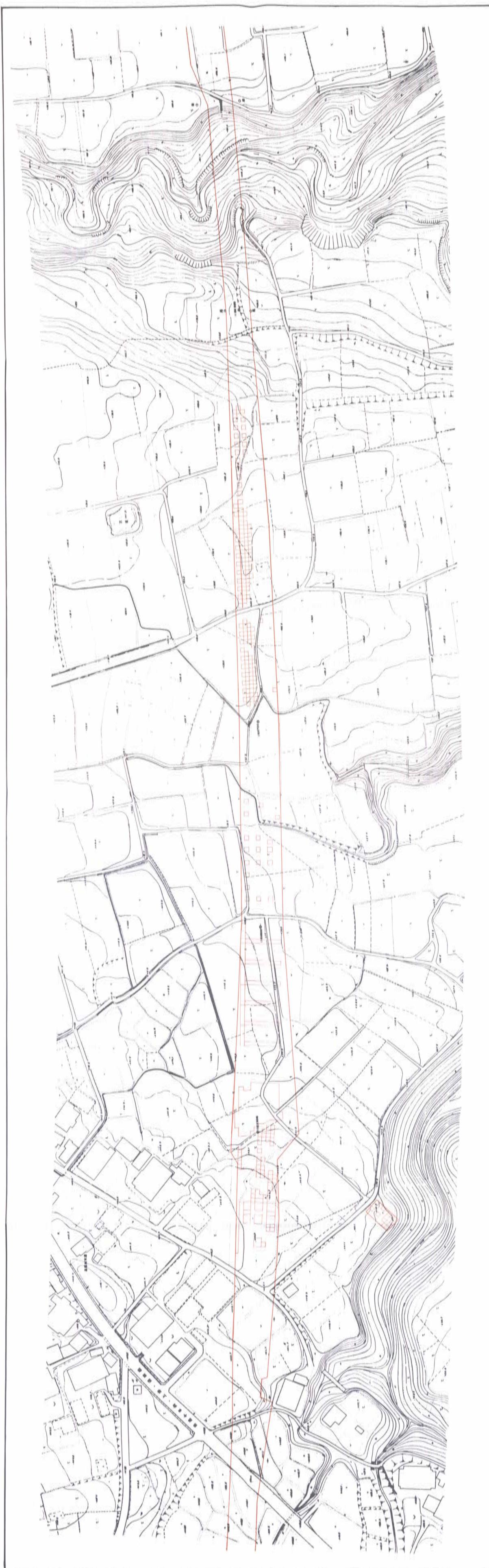
頁		誤	正
目次	第Ⅷ章10	……200	……199
挿図目次	付図 1	(1: 200,000)	(1: 400,000)
付図 1		(1: 200,000)	(1: 400,000)
挿図目次	第39図	(1=1: 8、2=1: 3)	(1=1: 8、2=1: 4)
挿図目次	第130図	3号墓塚出土の遺物	3・4号墓塚出土の遺物
図版目次	図版23-2	石器5 [3・8~10]	石器5 [3・8~10] 約 $\frac{1}{3}$
図版目次	図版37-1	(1=約 $\frac{1}{8}$ 、2=約 $\frac{1}{3}$)	(1=約 $\frac{1}{8}$ 、2=約 $\frac{1}{3}$)
図版目次	図版42-1	(1 約 $\frac{1}{4}$ 、2~5=約 $\frac{1}{3}$)	(約 $\frac{1}{3}$)
図版目次	図版92-2	(1~3=約 $\frac{1}{3}$ 、4=約 $\frac{1}{2}$)	(1~3=約 $\frac{1}{3}$ 、4=約2倍)
31頁	9・16行	行くに従がい	行くに従い
48頁	第23図	第23器	第23図
64頁	第39図	(1=1: 8、2=1: 3)	(1=1: 8、2=1: 4)
76頁	3行目	5,8	5.8
77~81頁	ハシラ	6 グリッド出土の近世遺物	トル
107頁	ハシラ	5 時期不明の遺構	トル
138頁	第97図	第97図 1 [1~3]	第97図 第1 [1~3]
142頁	14行目	第8類 (第103、図版106)	第8類 (第103図、図版106)
171頁	ハシラ	4 中・近延の遺構と遺物	4 中・近世の遺構と遺物
171頁	第130図	3号墓塚出土の遺物	3・4号墓塚出土の遺物
177~189頁	ハシラ	5 時期不明の遺構と遺物	トル
179頁	12~15行	1aに接合	1に接合
図版37	1	(1=約 $\frac{1}{8}$ 、2=約 $\frac{1}{3}$)	(1=約 $\frac{1}{8}$ 、2=約 $\frac{1}{3}$)
図版42	1	(1=約 $\frac{1}{4}$ 、2~5=約 $\frac{1}{3}$)	(約 $\frac{1}{3}$)
図版103	1	第7類土器 [裏]	第7類土器1 [裏]

付図1



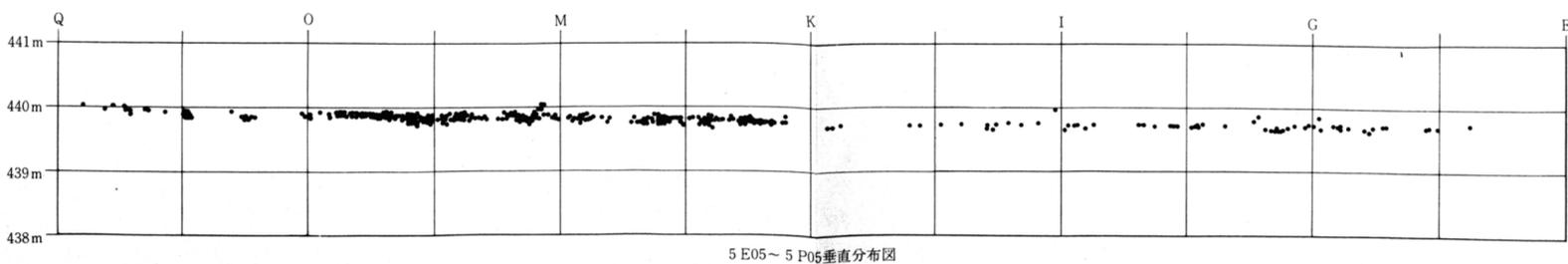
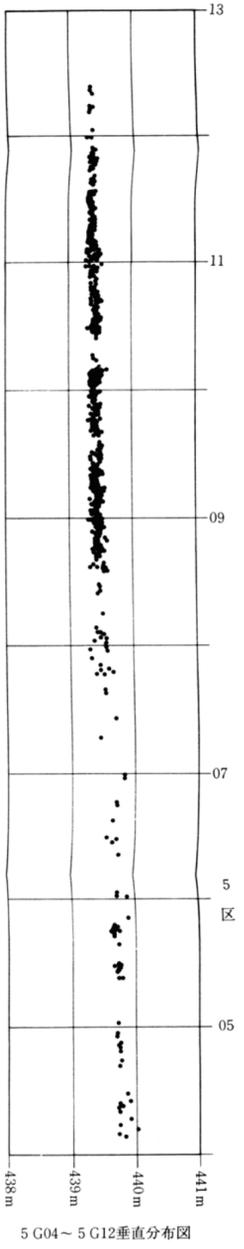
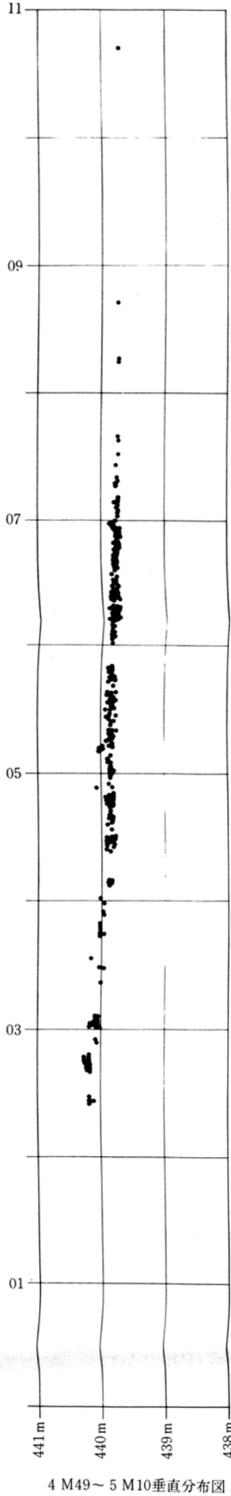
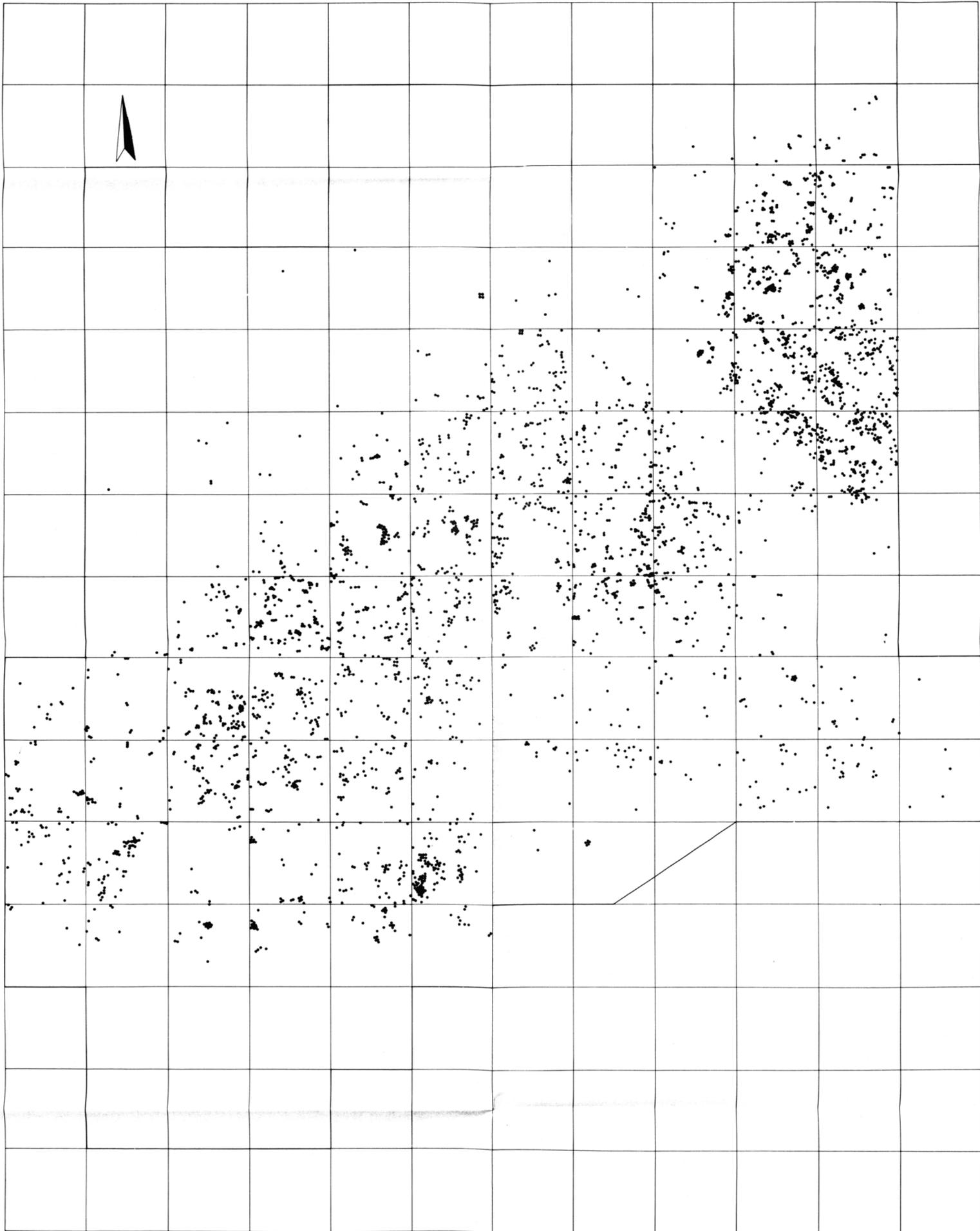
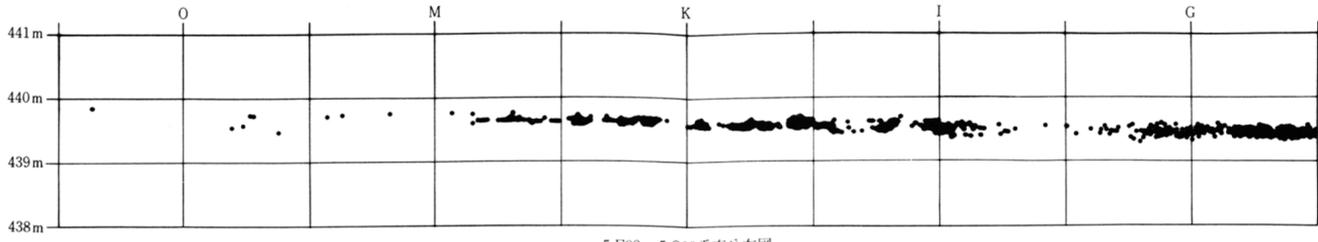
付図1 上越新幹線群馬県内通過路線および関係遺跡位置図 (1:200,000)





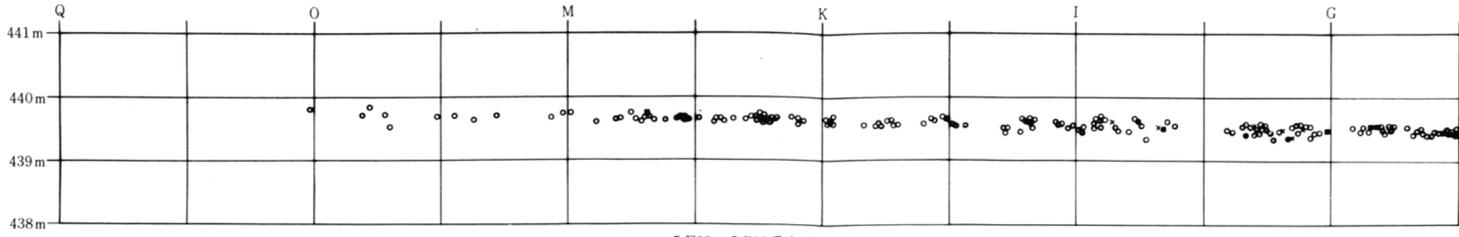
付図2 十二原遺跡周辺地形およびグリッド設定図(1:1,000)

付図3

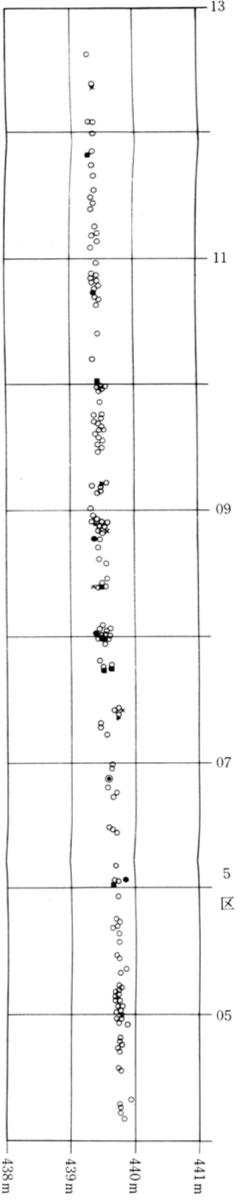
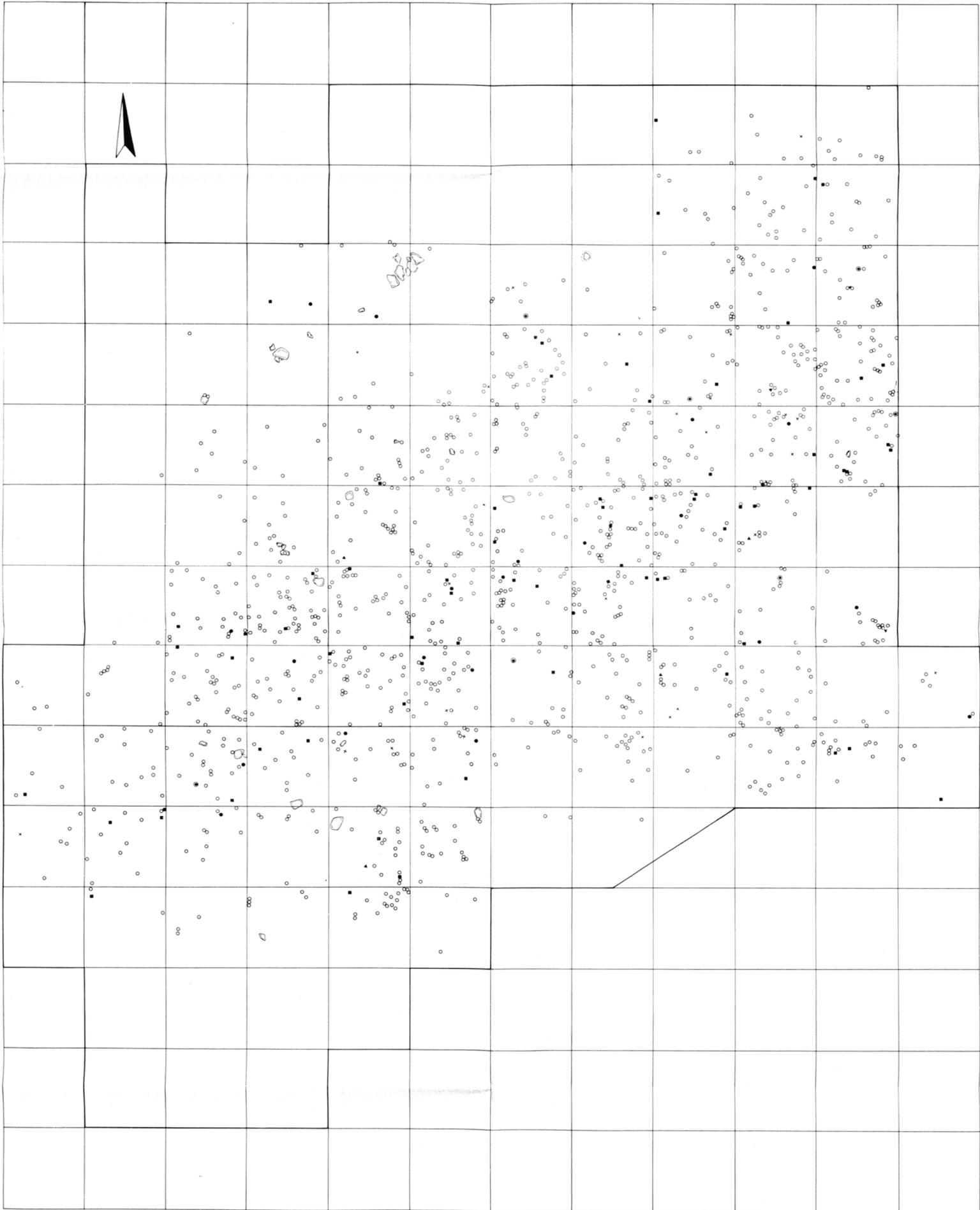


付図3 十二原遺跡縄文遺物散布地点土器出土分布図 (1:80)

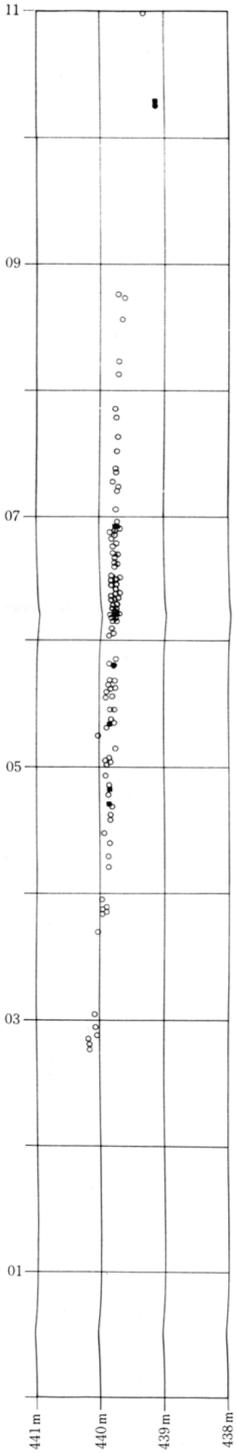
付図4



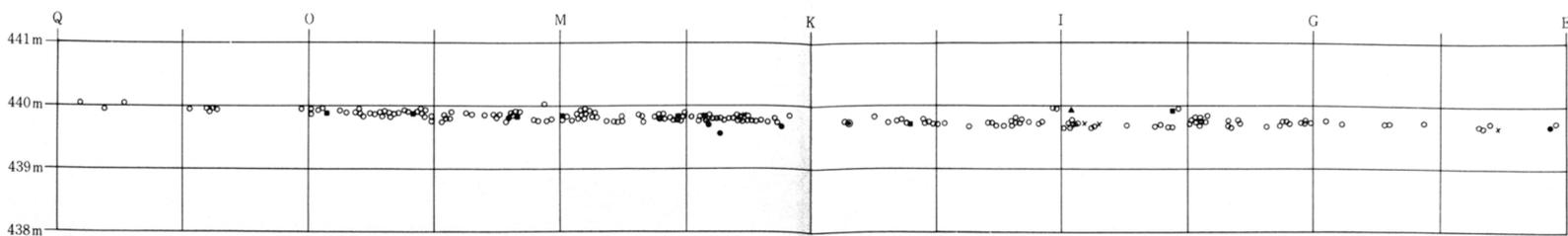
5 F08 ~ 5 P08垂直分布図



5 G04 ~ 5 G12垂直分布図



4 M49 ~ 5 M10垂直分布図



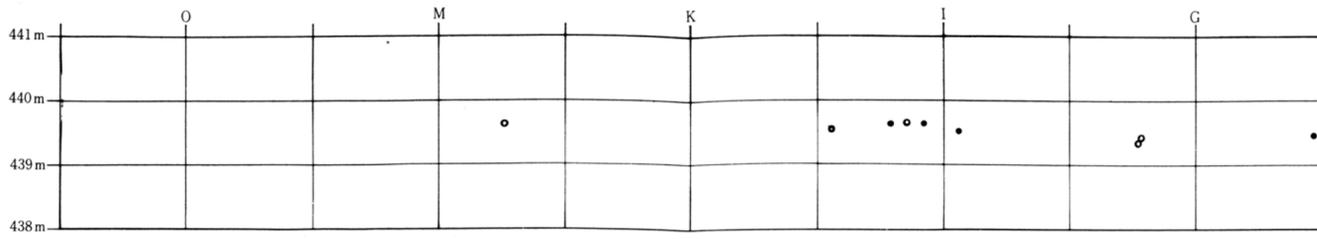
5 E05 ~ 5 P05垂直分布図



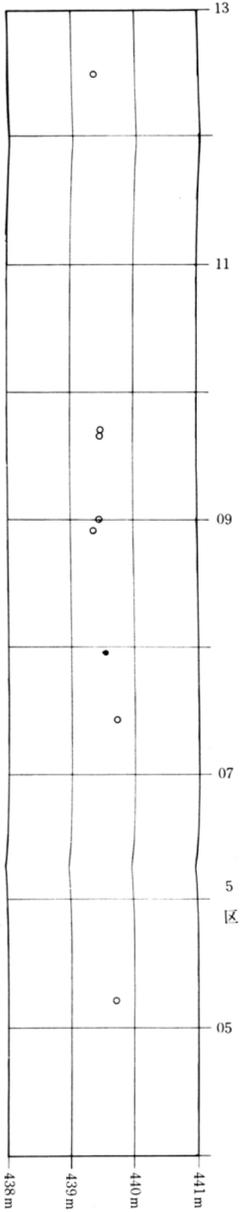
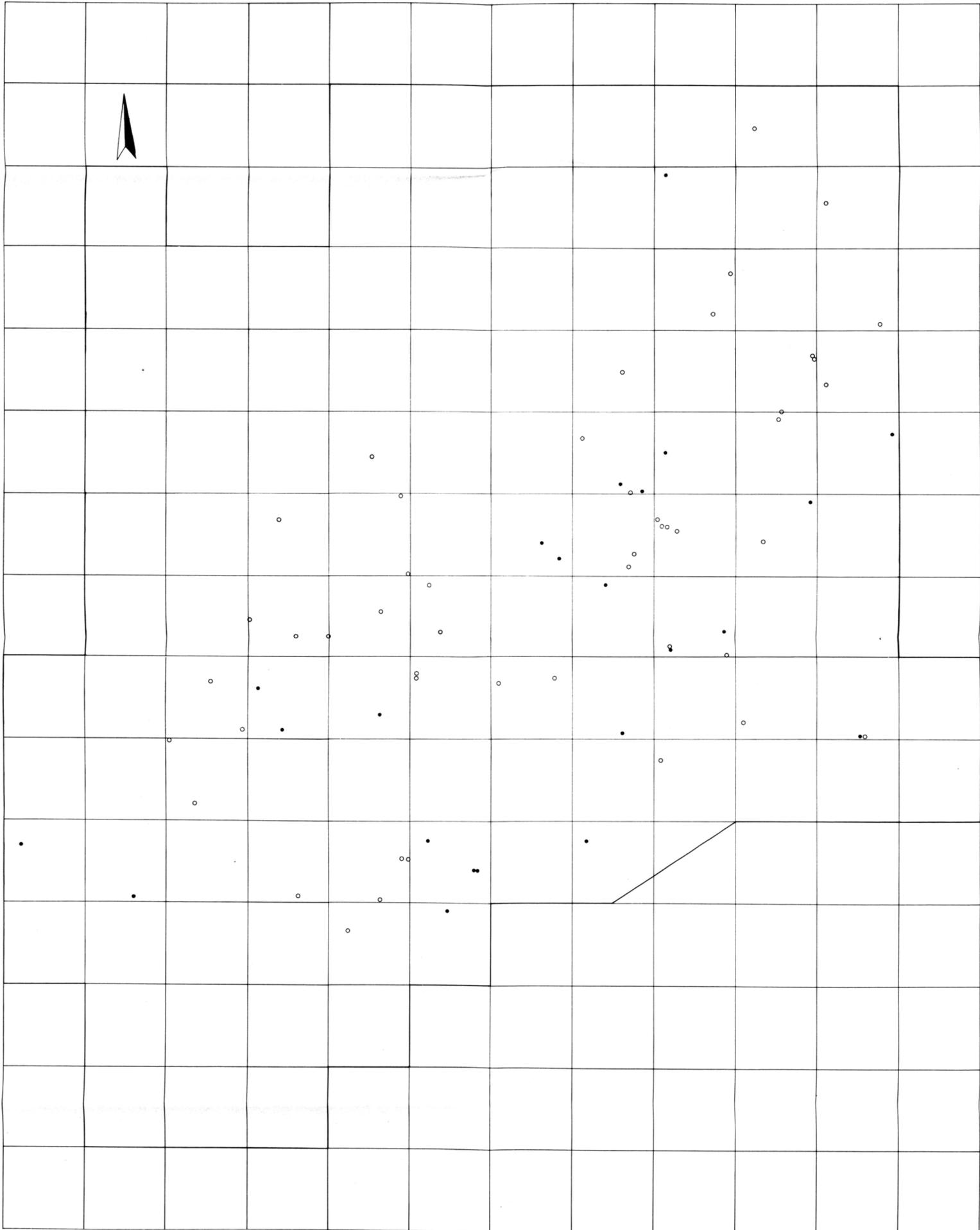
- 打製石斧
- 石 鏃
- 剥片石器・石匙
- 磨石・石皿
- 剥 片
- 石 核

付図4 十二原遺跡縄文遺物散布地点石器出土分布図 (1:80)

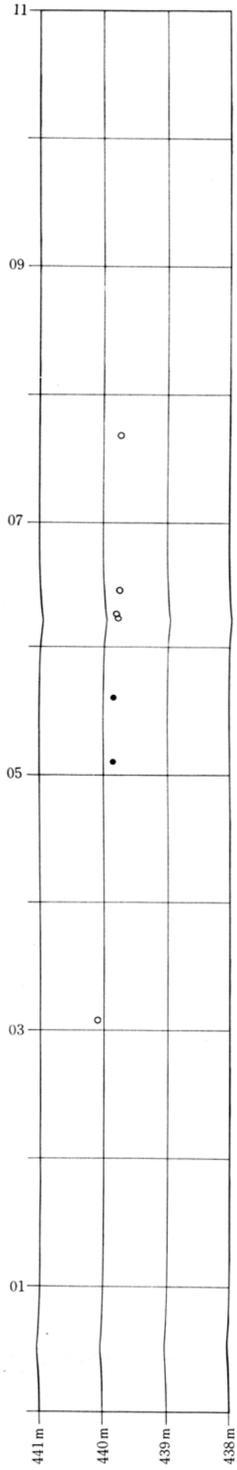
付図5



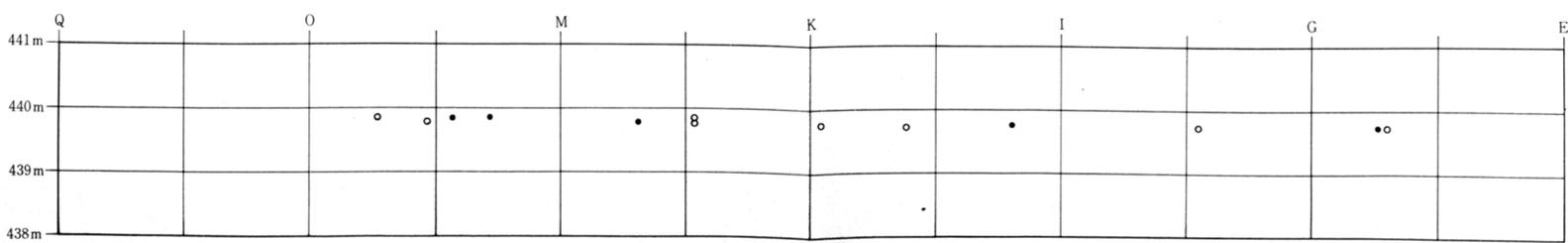
5 F08 ~ 5 O08 垂直分布図



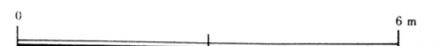
5 G04 ~ 5 G12 垂直分布図



4 M49 ~ 5 M10 垂直分布図



5 E05 ~ 5 P05 垂直分布図



付図5 十二原遺跡縄文遺物散布地点線刻石板出土分布図(1:80)

-  線刻石板
-  石板



付図6 大原遺跡周辺地形及びグリッド設定図(1:1,000)